

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

V

1985 年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1993.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 V

1993. 3

長原古墳群では現在、200基の古墳が確認されており、実数はその数倍と推測される。そのほとんどは一辺10m程度の小規模な方墳であるが、小墳であるにもかかわらず埴輪を備えたものが多い。今回報告する長原131号墳はその典型例といえるもので、焼け歪んだ埴輪の使用、近畿地方では類例の少ない、アーチ状の腹部をもった馬形埴輪の採用という点で注目される古墳である。

一方、古墳時代の集落についても、建物群の分布状況からいくつかの単位を抽出することができた。また、土馬・皮袋形瓶・子持勾玉といった非日常的な遺物から、この集落で行われていた祭祀の一端もうかがい知ることができた。

このように墓地と集落の状況を知ることのできる長原の事例は、この地に居住した集団、ひいては当時の社会構成を追究する上で重要な意味をもつであろう。

時代はさかのぼって、弥生時代中期初頭の水田についても報告した。この水田は現在のところ長原遺跡で最古といえるもので、それに関する正報告は今回が最初である。黎明期の水稻農耕を考える上で貴重な研究材料といえよう。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

V

1985年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1993.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告V 正誤表

頁	行	誤	正
vi (巻頭)	左段41	(南西から)	(西から)
vi (巻頭)	左段42	(西から)	(南西から)
vi (巻頭)	右段4	クサビ	クサビ本体・クサビ本体から剥落した剥片
63	22	桁行4間以上 (7.20m)	桁行4間 (7.20m)
122	7	径は2.0mmの	径2.0mmの
229	16	905・912・913は	905・913は
236	3~4	最大長3.91cm、最大幅2.85cm	最大長3.50cm、最大幅2.37cm
239	21	畦畔S (文字欠け) 14	畦畔SR14
239	22	サヌカイト (文字欠け) 基有茎式	サヌカイト製の凸基有茎式
245	23	長辺95cm、短辺60cm、深さ約80cm	長辺48cm、短辺30cm、深さ約40cm
254	15	口径12.0~16.5cm	口径12.0~14.0cm
255	15	5.2~5.5cm	4.2~5.5cm
275	表14 土器番号89	本書報告SD52	本書報告SD40
275	表14 土器番号91	本書報告SD52	本書報告Ⅷ区包含層
図版37	キャブション	クサビ	クサビ本体・クサビ本体から剥落した剥片



長原131号墳の出土遺物

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

V

1985年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1993.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪市平野区にある長原・瓜破遺跡一帯は、現在、農地から住宅地への大きな転換期をむかえている。土地区画整理事業に伴う発掘調査が開始された1981年からの10年あまりの間に、遺跡を取巻く環境は大きく変った。遺跡の変遷を過去から辿ってみても、これほどの転換期は数えるほどしかないであろう。

本書は、1985年度の同事業に係わる発掘調査報告で、シリーズ第5冊目に当る。おもな内容として、弥生時代中期初頭の水田、小規模ながら多数の埴輪を樹立した古墳、そして古墳時代の集落について報告した。水田址は市内で最古のもの、また、墓地と集落の関係をうかがうことのできる古墳時代の遺構も重要な研究材料である。

新しい住民が増えてくる中で、先人の残した遺跡が、京都や奈良といった限られた場所にあるだけでなく、ふだん生活しているこの地域にも眠っていることを顕彰するのも我々の努めである。そのためにも、たゆまぬ調査・研究を通して、その歴史的な意義を明らかにしていく必要を感じる。

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 佐治 敬三

例　　言

一、本書は大阪市都市整備局長吉瓜破区画整理事務所施行の大阪市平野区における1985年度土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査は財団法人大阪市文化財協会調査課課長永島暉臣慎の指揮のもとに、同課課長代理木原克司（現鳴門教育大学助教授）、同課調査員の田中清美・京嶋覚・伊藤純・高井健司、嘱託調査員の富山直人（現神戸市教育委員会）・田中秀和（現安濃町教育委員会）・鶴田眞佐子・山崎栄が行った。各調査の面積・期間などは、第Ⅰ章第2節の一覧表（表2）に記した。

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市都市整備局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、本書は当協会調査課課長永島の指揮のもと、同課主任田中、同課調査員京嶋・高井・櫻井久之・田島富慈美・久保和士が討議の上、分担して執筆した。執筆者名はそれぞれの担当個所の末尾に記して文責を明らかにした。また、長原遺跡出土の金属製容器の蛍光X線分析調査を宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に依頼し、その結果を本書にご寄稿いただいた。巻末の英文要旨の作成に当ってはオーストラリア・クイーンズランド大学学生Robert Condon氏に依頼し、同課調査員岡村勝行がこれに協力した。本書の編集は、各執筆者の協力を得て、櫻井が行った。なお、以下の方々や諸機関から有益なご教示・資料実見のご高配を賜った。記して感謝する次第である（機関名・個人名はそれぞれ50音順、個人名は敬称略）。

大阪市立自然史博物館・大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター・奈良国立文化財研究所・羽曳野市教育委員会

泉本知秀・工楽善通・樽野博幸・辻葩学・松沢亜生・山中一郎

一、遺物の写真撮影は徳永匂治氏に委託した。遺構は当協会調査員・嘱託調査員が撮影したものである。

一、遺構名の表記は、掘立柱建物（SB）・竪穴住居（SB）・溝（SD）・井戸（SE）・土壙（SK）・ピット（SP）・畦畔（SR）の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を順に付した。ただし、古墳に関しては、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱで決定し、その後改訂した番号を用いた。

一、地層名は、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲの第Ⅱ章に記した長原遺跡標準層序に対比したもので、長原1層・・・と表記する。また、遺構検出面の認定・呼称は『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲに従う。

一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標（第VI系）の値に換算した。水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）を用いた（本文中ではTP±と略称）。

一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は、当面、当協会が保管している。

一、本書の印刷に当り、本文・例言・目次等の版下作製は当協会で行い、その版下出力を有限会社正巧堂で行った。

一、発掘調査および資料整理・図表作成などには多くの補助員諸氏が参画した。深謝の意を表したい。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 長原・瓜破遺跡の調査	1
第1節 長原古墳群の調査	1
1) はじめに	1
2) 長原古墳群の発掘史	2
3) 古墳群調査の現状	6
第2節 調査の経過と概要	8
1) はじめに	8
2) 長原遺跡西地区 (NG85-9・16①・16②・59・80次調査)	9
i) NG85-9次調査	11
ii) NG85-16①・16②次調査	11
iii) NG85-59次調査	12
iv) NG85-80次調査	12
3) 長原遺跡中央地区 (NG85-9・59・77次調査)	13
i) NG85-9次調査	13
ii) NG85-59次調査	13
iii) NG85-77次調査	13
4) 長原遺跡南地区 (NG85-34①~⑤・59・67・70次調査)	14
i) NG85-34①次調査	14
ii) NG85-34②次調査	15
iii) NG85-34③次調査	15
iv) NG85-34④次調査	15
v) NG85-34⑤次調査	16
vi) NG85-59次調査	16
vii) NG85-67次調査	16
viii) NG85-70次調査	17
5) 長原遺跡東南地区 (NG85-13次調査)	18
第Ⅱ章 調査の結果	19
第1節 長原遺跡西地区の調査 (NG85-16①・16②次調査)	19
1) 調査区区分と層序	19
i) 調査区区分	19
ii) 層序	19
iii) 出土遺物	21
2) 弥生時代以前の遺物	24

i) 土器	24	ii) 石器遺物	25
3) 古墳時代の遺構	61		
i) 挖立柱建物	61	ii) 壺穴住居	67
iv) 土壙	71	v) 溝	73
iii) 井戸	70		
4) 古墳時代の遺物	77		
i) 柱穴・壺穴住居出土の土器	77	ii) SE01出土の土器	80
iii) 土壙出土の土器	83	iv) 溝出土の土器	87
v) 包含層出土の土器	111	vi) 製塩土器・竈形土器・土製品など	115
vii) 玉・石製品	119	viii) 木製品	123
ix) 動物遺体	124		
5) 飛鳥・奈良時代の遺構	128		
水田遺構	128		
6) 平安時代の遺構と遺物	128		
i) 挖立柱建物	128	ii) 溝	129
iv) 出土遺物	132	iii) 土器埋納遺構	132
7) 室町～江戸時代の遺構と遺物	137		
i) 井戸	137	ii) 溝	137
iv) 水田遺構	137	iii) 土壙	137
8) 小結	139		
i) 古墳時代土器の器種構成	139	ii) 須恵器蓋杯の法量と製作手法	141
iii) 古墳時代の建築遺構	142		
第2節 長原遺跡南地区の調査 (NG85-34①～⑤・70次調査)	146		
1) はじめに	146		
2) 層序と遺物	146		
i) 層序	146	ii) 各層の出土遺物	151
3) 古墳時代の遺構と遺物	156		
i) 59号墳	156	ii) 131号墳	158
iv) 133号墳	185	iii) 132号墳	179
vii) 136号墳	191	v) 134号墳	186
x) 141号墳	195	vi) 135号墳	190
ii) 142号墳	198	vii) 137号墳	192
ix) 140号墳	193	ix) 140号墳	193
4) 奈良時代の遺構と遺物	203		
i) 水田	203	ii) 溝	207
iii) 遺物	208		

5) 平安時代以降の遺構と遺物	209
i) 挖立柱建物	209
ii) 井戸・土壙	209
iii) 水田	210
iv) 遺物	210
6) 小結	215
i) 古墳群の構造	216
ii) 131号墳の遺物とその出土状況	218
iii) 奈良時代の水田について	223
第3節 長原遺跡東南地区の調査(NG85-13次調査)	225
1) はじめに	225
2) 層序と遺物	225
i) 層序	225
ii) 各層の出土遺物	229
3) 縄文時代以前の遺構と遺物	232
i) 旧石器時代の遺物	232
ii) 縄文時代の遺構・遺物	234
4) 弥生時代の遺構と遺物	237
i) 水田址	237
ii) 溝	240
iii) 方形周溝墓	243
5) 古墳~飛鳥時代の遺構と遺物	245
i) 106号墳	245
ii) 土壙	245
iii) 溝	246
6) 平安時代の遺構	252
7) 鎌倉時代以降の遺構と遺物	252
i) 溝	252
ii) 井戸	254
iii) 島畠遺構	255
8) 小結	256
第Ⅲ章 出土遺物の検討	261
第1節 層位発掘に基づく石鏃形態の変遷的研究	261
1) はじめに	261
2) 形態分類	261
3) 各層準の石鏃形態	266
4) 石鏃形態の変遷	267
第2節 古墳時代後半期の土器の変遷	269
1) はじめに	269
2) 土器群の変遷	269
3) まとめ	274

第3節 長原古墳群の馬形埴輪	277
1) はじめに	277
2) 製作方法の観察	277
3) 製作方法の特徴	282
4) まとめ	284
第4節 長原遺跡出土金属製容器の蛍光X線分析調査	287
別表	291
引用・参考文献	303
あとがき	
索引	
英文要旨	
報告書抄録	

原色図版

1 長原西地区 古墳時代の建物と溝

上：VI区 建物群（南から）
下：IX区 SD52（北から）

2 滑石製品・円筒埴輪

上：長原西地区 滑石製品
下：131号墳円筒埴輪

図版目次

1 長原西地区 IV区東部・V区全景

上：IV区東部（西から）
下：V区（東から）

2 長原西地区 IV区古墳時代の遺構

上：SB05・06（西から）
下：SB05（南から）

3 長原西地区 VI区全景

上：VI区（南から）
下：VI区（北から）

4 長原西地区 VI区古墳時代の遺構（一）

上：SB10～12（南から）
下：SB18・19（南から）

5 長原西地区 VI区古墳時代の遺構（二）

上：SB18（北から）
下：SB19（南から）

6 長原西地区 VII・VIII区全景

上：VII区（西から）
下：VIII区（東から）

7 長原西地区 VII・VIII区古墳時代の遺構

上：SB23（西から）
下：SB24（東から）

8 長原西地区 VII区古墳時代の遺構

上：SE01検出状況（西から）
下：SE01（北から）

9 長原西地区 IX区全景と古墳時代の土壙

上：IX区（南から）
下：SK18（東から）

10 長原西地区 IX区古墳時代の遺構

上：SD52（北から）
下：SD52遺物出土状況（南から）

11 長原西地区 III・VI・VIII区古墳時代の遺構

上：III区 SK01（北から）
左下：VI区 SD23（東から）
右下：VIII区 SD41（北から）

12 長原西地区 I～IV区全景と遺構

左上：I区 全景（北から）

右上：II区 SB02・SD02～04（北から）

左下：III区北部 全景（南から）
右下：IV区 SD56（南から）

13 長原西地区 IX区水田遺構

上：IX区 長原6A層上面（北から）
下：IX区 長原3B層上面（北から）

14 131号墳（一）

上：墳丘および周溝（南東から）
下：墳丘南西辺

15 131号墳（二）

上：墳丘南西辺遺物出土状況
下：墳丘南西辺中央部遺物出土状況

16 131号墳（三）

上：須恵器甕・土師器甕出土状況
下：須恵器甕出土状況

17 131号墳（四）

上：円筒埴輪樹立状況
下：墳丘断面（調査区北壁沿い）

18 132・134号墳

上：132号墳（西から）
下：134号墳（南から）

19 59・137号墳

左：59号墳（西から）
右：137号墳（東から）

20 133・140号墳

上：133号墳（東から）
下：140号墳（北から）

21 141・142号墳

左：142号墳（南から）
右：141・142号墳（北から）

22 長原南地区 古墳時代の遺構

上：III区 7B層ピット（1）
中：III区 7B層ピット（2）
下：142号墳墳丘断面（調査区西壁沿い）

23 長原南地区 I区奈良時代の水田遺構

上：I区中央部 水田址（東から）

- 下：I区 SR07断面
- 24 長原南地区 III・V区奈良時代の水田遺構
左：III区 SR23・24（東から）
右：V区 SR32～36（東から）
- 25 長原南地区 II・VI区奈良時代の水田遺構
上：II区 SR10・20～22（東から）
下：VI区 SR38～40・43（北から）
- 26 長原南地区 VI区奈良時代の水田遺構
上：VI区 SD06・07（南から）
下：VI区 142号墳南東隅に取付くSR45
- 27 長原南地区 VI区平安時代の遺構
上：VI区 SP04（西から）
中：VI区 SP03（西から）
下：VI区 SB01（北から）
- 28 長原東南地区 土層断面
上：III区東部 南壁断面（北西から）
下：III区中央部 南壁断面（北西から）
- 29 長原東南地区 石器出土状況
上：III区中央部 SD01周辺石器出土状況（西から）
下：III区中央部 SD01東方長原 12A～13A
層内石器出土状況（北東から）
- 30 長原東南地区 縄文晩期～弥生前期の流路
上：III区東部 SD06検出状況（南から）
下：III区東部 SD06全景（南から）
- 31 長原東南地区 弥生時代の水田・溝
上：III区 長原 9A' 層上面調査状況（東から）
下：III区東部 SD03（東から）
- 32 長原東南地区 弥生時代の水田
上：III区 長原 9A' 層上面水田址全景（東から）
下：III区 長原 9A' 層上面水田面細部（東から）
- 33 長原東南地区 方形周溝墓
上：III区東部 SX01・02（東から）
下：III区東部 SX02南周溝遺物出土状況（西から）
- 34 長原東南地区 弥生～飛鳥時代の遺構
上：III区東部 長原 7A・7B層層準遺構群（南西から）
下：III区東部 SK01～03（西から）
- 35 長原東南地区 中世・近世の遺構
上：I区 全景（東から）
下：I区東部 SD25・26（西から）
- 36 長原西地区 石器遺物（一）
- 上：石鎚
下：未製品
- 37 長原西地区 石器遺物（二）
クサビ
- 38 長原西地区 石器遺物（三）
上：ナイフ形石器
下：ナイフ形石器・翼状剥片・石核
- 39 長原西地区 石器遺物（四）
石核
- 40 長原西地区 石器遺物（五）
上：接合資料（実大）
下：翼状剥片・底面をもつ剥片
- 41 長原西地区 石器遺物（六）
上：横長剥片
下：横長剥片
- 42 長原西地区 石器遺物（七）
上：調整剥片
下：剥片・縦長剥片
- 43 長原西地区 石器遺物（八）
上：剥片
下：剥片
- 44 長原西地区 石器遺物（九）
上：剥片
下：剥片
- 45 長原西地区 石器遺物（十）
上：剥片
下：剥片
- 46 長原西地区 石器遺物（十一）
上：剥片
下：剥片
- 47 長原西地区 古墳時代建物・井戸・溝出土の土器
SB24、VII区SP02、VII区SP05、SE01、SD39
- 48 長原西地区 古墳時代井戸出土の須恵器（一）
SE01
- 49 長原西地区 古墳時代井戸出土の須恵器（二）
SE01
- 50 長原西地区 古墳時代土壙出土の須恵器
SK01・10・11・12・15・17
- 51 長原西地区 古墳時代溝出土の土師器（一）
SD04・22・39・40・41
- 52 長原西地区 古墳時代溝出土の土師器（二）
SD23・26・39・44・47
- 53 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（一）
SD04・22・23・26・27・28・29
- 54 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（二）

- SD33・34・36・37・38
- 55 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（三）
SD27・28・38・44・46・47・51
- 56 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（四）
SD04・23・29・37・39・41
- 57 長原西地区 古墳時代溝出土の土器
SD52 土師器・須恵器
- 58 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（五）
SD52
- 59 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（六）
SD52
- 60 長原西地区 古墳時代溝出土の須恵器（七）
SD52
- 61 長原西地区 古墳時代包含層出土の土器
V区 土師器、VII区 須恵器、VIII区 須恵器、IX区 土師器
- 62 長原西地区 古墳時代包含層出土の須恵器
VII区、IX区
- 63 長原西地区 古墳時代の土製品・埴輪・砥石など
SB18、SD29・34・52、SE01、SP05、VII区長原6～7層、VIII区長原7層、IX区長原7層
- 64 長原西地区 古墳時代の滑石製品
SD31・46・52、VI区包含層、VII区包含層、IX区包含層
- 65 長原西地区 古墳時代の木製品
SE01、SD48・49・52
- 66 長原西地区 動物遺体
SK18、SD49、SD52上層、SD52下層、IX区長原4B層、IX区中央部長原7層、IX区北部長原6層
- 67 長原西地区 平安時代の土器
SB02 土師器、土器埋納遺構 土師器、1983年度SB29 土師器、1983年度SB28 黒色土器、VIII区北部建物周辺 土師器、SB21 土師器、SD55 土師器、SD57 土師器
- 68 長原西地区 近世遺構出土の遺物
SE02 唐津・志野、SD60 唐津・瀬戸美濃・青花・備前・堺摺鉢・瓦器、SK19 伊万里、SK20 唐津・備前
- 69 長原南地区 各層出土の遺物
上：長原2層、長原3層、長原4A層、長原4B層
下：長原3層、長原6A層、長原6B層
- 70 131号墳出土の遺物（一）
須恵器
- 71 131号墳出土の遺物（二）
須恵器
- 72 131号墳出土の遺物（三）
土師器・円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 73 131号墳出土の遺物（四）
円筒埴輪
- 74 131号墳出土の遺物（五）
馬形埴輪・盾形埴輪・鞆形埴輪・人物埴輪
- 75 131号墳出土の遺物（六）
馬形埴輪
- 76 132号墳出土の遺物（一）
須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 77 132号墳出土の遺物（二）
須恵器・衣蓋形埴輪
- 78 134号墳出土の遺物
須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 79 59・136号墳出土の遺物
上：59号墳出土土師器・須恵器・円筒埴輪
下：136号墳出土円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 80 140・141号墳出土の遺物
140号墳出土須恵器
141号墳出土須恵器・円筒埴輪
- 81 135・137・141・142号墳出土の遺物
135号墳出土須恵器、141号墳出土土師器・朝顔形埴輪
137号墳出土須恵器、142号墳出土須恵器・円筒埴輪
- 82 142号墳出土の遺物
須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴輪・衣蓋形埴輪
- 83 長原南地区 平安時代ピット・包含層出土の遺物
上：SB01周辺包含層出土遺物
下：SP02・04・05・09
- 84 長原南地区 平安時代ピット・土壙・包含層出土の遺物
SP03・05、SK08
SB01周辺包含層出土遺物
- 85 長原東南地区 石器遺物（一）
SD01、長原8A層、長原12層石器ブロック
- 86 長原東南地区 石器遺物（二）
上：長原12層、長原13A層
下：長原12層石器ブロック、水田址、長原9C層、長原12層、SD11
- 87 長原東南地区 方形周溝墓・溝出土の遺物
SX01・02、SD26、長原8A層

挿 図 目 次

図 1 長原古墳群の変遷図	3	図36 その他の剥片 (9)	59
図 2 土地区画整理関係調査の年度別古墳発見数	4	図37 石棒実測図	60
図 3 土地区画整理事業施行範囲と地区区分	9	図38 SB03実測図	61
図 4 地区别出土遺物破片数	10	図39 SB05実測図	61
図 5 長原遺跡西地区調査位置図	11	図40 SB06実測図	62
図 6 長原遺跡中央地区調査位置図	13	図41 SB07実測図	62
図 7 長原遺跡南地区調査位置図	14	図42 SB08実測図	62
図 8 NG85-67次調査地	16	図43 SB09実測図	63
図 9 NG85-67次調査出土遺物	17	図44 SB13実測図	63
図10 長原遺跡東南地区調査位置図	18	図45 SB14実測図	64
図11 長原遺跡西地区の調査区区分	20	図46 SB15実測図	65
図12 V~IX区のパネルダイアグラム	折込	図47 SB16実測図	65
図13 各層出土遺物実測図	23	図48 SB17実測図	65
図14 繩文土器・弥生土器実測図	24	図49 SB18実測図	66
図15 石鏸	26	図50 SB19実測図	66
図16 未製品	29	図51 IX区柱列実測図	67
図17 クサビ本体・クサビ本体から剥落した剥片 (1)	31	図52 SB04実測図	67
		図53 SB10実測図	68
図18 クサビ本体から剥落した剥片 (2)	32	図54 SB11実測図	68
図19 ナイフ形石器	34	図55 SB12実測図	69
図20 石核 (1)	35	図56 SB23実測図	69
図21 石核 (2)	37	図57 SB24実測図	70
図22 接合資料・翼状剥片 (1)	39	図58 瓢部の土器出土状況	70
図23 翼状剥片 (2)・横長剥片 (1)	41	図59 SE01実測図	71
図24 横長剥片 (2)	43	図60 SK01実測図	71
図25 横長剥片 (3)	44	図61 III区土壙群実測図	72
図26 調整剥片	45	図62 SD52実測図	76
図27 縦長剥片	46	図63 SD52遺物出土状況	77
図28 その他の剥片 (1)	48	図64 建物・柱穴出土土器実測図	78
図29 その他の剥片 (2)	50	図65 VII区SE01出土土器実測図 (1)	81
図30 その他の剥片 (3)	51	図66 VII区SE01出土土器実測図 (2)	82
図31 その他の剥片 (4)	52	図67 III・IV区土壙出土土器実測図	84
図32 その他の剥片 (5)	53	図68 VI~IX区土壙出土土器実測図	85
図33 その他の剥片 (6)	55	図69 I~V区溝出土土器実測図	88
図34 その他の剥片 (7)	57	図70 VI区SD22・23出土土器実測図	90
図35 その他の剥片 (8)	58	図71 VI区溝出土土器実測図	91

図72	VII区溝出土土器実測図	94	図109	V・VI区古墳～奈良時代遺構実測図	155
図73	VII区溝出土須恵器実測図	95	図110	59号墳実測図	157
図74	VII区SD39出土土器実測図	98	図111	59号墳出土遺物	158
図75	VII区溝出土土器実測図	99	図112	131号墳実測図	159
図76	IX区溝出土土器実測図	101	図113	131号墳墳丘断面図	160
図77	IX区溝出土須恵器実測図	102	図114	131号墳遺物出土状況	161
図78	IX区SD52出土土師器実測図	104	図115	131号墳須恵器甕出土状況	162
図79	IX区SD52出土須恵器実測図（1）	108	図116	131号墳出土土師器	163
図80	IX区SD52出土須恵器実測図（2）	109	図117	131号墳出土須恵器（1）	164
図81	IX区SD52出土須恵器実測図（3）	110	図118	131号墳出土須恵器（2）	166
図82	長原6・7層出土土師器実測図	112	図119	131号墳出土円筒埴輪（1）	168
図83	長原6・7層出土須恵器実測図（1）	113	図120	131号墳出土円筒埴輪（2）	169
図84	長原6・7層出土須恵器実測図（2）	114	図121	131号墳出土円筒埴輪（3）	170
図85	製塙土器実測図	116	図122	131号墳円筒埴輪の法量分布	171
図86	埴輪・竈形土器・土製品・砥石実測図	118	図123	131号墳出土朝顔形埴輪	171
図87	子持勾玉実測図	120	図124	131号墳出土形象埴輪	175
図88	滑石製品・土製丸玉実測図	121	図125	131号墳出土馬形埴輪（1）	176
図89	木製品実測図	124	図126	131号墳出土馬形埴輪（2）	177
図90	SB01実測図	128	図127	132号墳実測図	178
図91	SB02実測図	129	図128	132号墳衣蓋形埴輪出土状況	179
図92	I～III区付近の平安時代遺構配置図	130	図129	132号墳墳丘断面図	179
図93	SB20～22実測図	131	図130	132号墳出土須恵器（1）	180
図94	SD56断面実測図	132	図131	132号墳出土須恵器（2）	181
図95	SD57断面実測図	132	図132	132号墳出土円筒埴輪	183
図96	I～III区出土土器実測図	133	図133	132号墳出土朝顔形・衣蓋形埴輪	184
図97	IV・VI・IX区出土土器実測図	135	図134	133号墳実測図	185
図98	VI・IX区の水田遺構	136	図135	134号墳実測図	186
図99	室町～江戸時代の遺物実測図	138	図136	134号墳出土遺物（1）	187
図100	I～III区周辺遺構全体図	折込	図137	134号墳出土遺物（2）	188
図101	IV～IX区周辺遺構全体図	折込	図138	135号墳実測図	190
図102	長原南地区の調査区区分	146	図139	135号墳出土須恵器	190
図103	南地区北東部の沖積層バネルダイアグラム	148	図140	136号墳実測図	191
図104	I～IV区の層序	149	図141	136号墳出土埴輪	192
図105	III・V・VI区の層序	150	図142	137号墳およびSD04実測図	193
図106	各層出土遺物実測図	152	図143	137号墳出土須恵器	193
図107	I・II区古墳～奈良時代遺構実測図	153	図144	140号墳実測図	194
図108	III・IV区古墳～奈良時代遺構実測図	154	図145	140号墳墳丘断面図	194
			図146	140号墳出土須恵器	195

図147 141号墳実測図	196	図179 水田址出土石器実測図	239
図148 141号墳墳丘断面図	196	図180 SD06実測図	240
図149 141号墳出土遺物	197	図181 SD06断面実測図	241
図150 142号墳実測図	199	図182 SD07断面実測図	241
図151 142号墳墳丘断面図	200	図183 Ⅲ区弥生～江戸時代遺構配置図	242
図152 142号墳出土遺物	201	図184 SX01北周溝内遺物出土状況実測図	243
図153 142号墳出土衣蓋形埴輪	202	図185 SX02南周溝内遺物出土状況実測図	244
図154 I・II区6A層上面遺構	204	図186 Ⅲ区SX01・02周溝出土遺物実測図	245
図155 Ⅲ・IV区6A層上面遺構	205	図187 SK01～03実測図	246
図156 V・VI区6A層上面遺構、VI区4B層内遺構	206	図188 Ⅲ区SK01出土土師器実測図	246
		図189 I・II区古墳～江戸時代遺構配置図	247
図157 SD03断面図	207	図190 I区SD08出土遺物実測図	248
図158 V区出土鋤先	208	図191 II区SD11出土遺物実測図	249
図159 VI区SD06出土木杭	208	図192 II区SD11出土盾形埴輪実測図	250
図160 SB01実測図	209	図193 I区SD25出土遺物実測図	253
図161 SE01断面図	210	図194 I区SD26出土遺物実測図	254
図162 II・IV区4B層上面遺構	211	図195 Ⅲ区SD27出土遺物実測図	255
図163 VI区ピット・土壙出土遺物	212	図196 調査地周辺弥生～江戸時代主要遺構配置図	
図164 VI区SB01周辺出土遺物（1）	214		257
図165 VI区SB01周辺出土遺物（2）	215	図197 長原遺跡東南部長原9A層上面古地理図	259
図166 古墳分布状況模式図	217	図198 長原遺跡各層出土の石鎌	262
図167 131号墳の埴輪配置	221	図199 石鎌の形態分類	263
図168 南地区北東部奈良～平安時代初頭の水田址	222	図200 石鎌の長さと幅の相関関係	265
		図201 石鎌形態の変遷	267
図169 長原遺跡東南地区の調査区区分	225	図202 古墳時代後半期の土器編年	折込
図170 I～Ⅲ区断面図	226	図203 57号墳の馬形埴輪頭部	277
図171 各層出土遺物実測図（1）	230	図204 長原古墳群の馬形埴輪	279
図172 各層出土遺物実測図（2）	231	図205 111号墳の馬形埴輪腹部	280
図173 長原9C・12層出土石鎌実測図	232	図206 頭部の製作状況模式図	282
図174 SD01・長原8A層出土旧石器実測図	233	図207 背部製作方法の諸例	283
図175 長原13A層出土旧石器実測図	233	図208 脚部（蹄）製作方法の諸例	283
図176 Ⅲ区長原12層出土石器分布図	235	図209 金属製容器実測図	287
図177 石器ブロック出土遺物	236	図210 金属製容器の蛍光X線スペクトル図	289
図178 Ⅲ区長原9A'層水田址実測図	238		

表 目 次

表 1 長原古墳群主体部検出古墳	7	表 9 西地区建物遺構一覧表	144
表 2 1985年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧表	8	表10 131号墳出土円筒埴輪観察表	172
表 3 平安時代土器の編年	24	表11 歪んだ円筒埴輪出土古墳	219
表 4 瓦器椀の編年	24	表12 石鎚属性表	264
表 5 白玉計測表	122	表13 土器編年の位置付け	272
表 6 西地区出土動物遺体一覧表	126	表14 引用資料一覧表	275
表 7 主要遺構の土器器種構成表	140	表15 長原古墳群馬形埴輪一覧表	281
表 8 蓋杯におけるケズリ方向と内面当て具痕の関係		表16 長原遺跡出土金属製容器表面における元素含有量	288
	142		

写 真 目 次

写真1 131号墳の調査風景	1	写真12 SD52土器出土状況	77
写真2 NG85-9次調査作業状況	11	写真13 杯蓋内面の当て具痕	93
写真3 NG85-16①次調査	12	写真14 焼きむらのある須恵器	106
写真4 NG85-59次調査作業状況	13	写真15 高杯内底面の当て具痕	107
写真5 NG85-34③次調査地	15	写真16 須恵器有蓋高杯と蓋	107
写真6 NG85-59次調査作業状況	15	写真17 製塙土器	116
写真7 NG85-67次調査SK01検出状況	17	写真18 土器埋納遺構と埋納土器	134
写真8 NG85-13次調査地周辺の状況	18	写真19 滋賀里IV式土器	234
写真9 調査区の航空写真	19	写真20 SK01出土土師器	246
写真10 各層出土遺物	22	写真21 SD11出土盾形埴輪	251
写真11 縄文土器・弥生土器	24	写真22 長原遺跡出土の金属製容器	287

別 表

別表1 長原古墳群一覧表	292	別表3 石器計測表	301
別表2 長原遺跡の標準層序1992	300		

付 図

付図 長原古墳群全体図

第Ⅰ章 長原・瓜破遺跡の調査

第1節 長原古墳群の調査

1)はじめに

長原古墳群は大阪市平野区の南東部にあり、古墳時代中～後期に属する数百基の古墳から構成されている。そして、そのうちの9割以上が一辺10m前後の方墳によって占められるという特色をもつ。今では、この古墳群の名称も広く知られるところとなったが、20年ほど前までは、こうした古墳群が存在することじたい知られていなかった。それは、通常、地上にみることのできる古墳の墳丘が、ここでは地下に埋没していたからである(写真1)。数百基もの古墳が地下に埋もれることになったのには、もちろんいくつかの原因があった。一つには、古墳の造営が終焉したのちに長原遺跡一帯に行われた、大規模な水田開発に伴



写真1 131号墳の調査風景

う破壊が挙げられる。また、中世には広範囲に屋敷地が営まれ、近世には木綿栽培のための島畠が造られ、そのたびに墳丘は削平を受けていった。しかし、もっとも大きな影響を与えたのは、古墳時代後期後半に開削されたと推定される旧東除川であった。この川は、水田への灌漑を目的とした人工の河川で、古墳群の中央を南北に縦走していた。だが、洪水のたびに多量の砂礫を古墳群内に運び込み、その砂礫が周溝を埋め、墳丘を覆っていった。こうして長原古墳群は地下に埋没することとなったのである。

2)長原古墳群の発掘史

埋没以後、長原古墳群に再び光が当てられたのは、1974～75年に行われた地下鉄谷町線延長工事に伴う発掘調査(NG1次調査)においてであった。この調査は長原遺跡調査会によって行われ、塚ノ本古墳(長原1号墳)をはじめとする5基の古墳(長原28～32号墳)と、塚ノ本古墳の外堤上に埴輪棺群を発見した[長原遺跡調査会1978]。その後、(財)大阪文化財センターによって近畿自動車道建設に伴う調査が1976～78年に実施され、塚ノ本古墳の残る一部と長原2～27号墳が発掘された[大阪文化財センター1978]。塚ノ本古墳は墳丘長約55mの円墳で、長原古墳群中で最大の規模をもつ。また、造営時期を勘案すれば、古墳群形成の契機となった盟主墳と考えられる。偶然にも、最初の調査において盟主墳と思われる古墳に遭遇し、これが一大古墳群の存在が明らかになる端緒となったのである(図1)。

1975年、長原遺跡北東部(城山地域)で行った下水道管理設工事に伴う調査(NG2次調査)では、盾形埴輪を棺として用いた長原40号墳が見つかった。この古墳は塚ノ本古墳の北650mにあり、古墳の分布が広範囲に及ぶことをうかがわせた。その後、城山地域(城山遺跡)内では、1983～85年に行った(財)大阪文化財センターの調査により、さらに8基の古墳(長原100～105号墳、長原167・168号墳)が発掘されている[大阪文化財センター1980・1986b]。

1979年のこと、長原遺跡北西部、すなわち城山地域の西に当る出戸地域において大阪水泳学校建設に伴う調査(DD1次調査)が行われた。ここでも5基の古墳(長原94～98号墳)が見つかり、そのうちの1基(長原94号墳)に木棺直葬の主体部が確認された[大阪市文化財協会1979b]。また同年、長原遺跡南西部の川辺地域においても、川辺小学校建設に伴いNG18次調査が行われ、9基の古墳(長原71～79号墳)の存在が明らかになった[大阪市文化財協会1979a]。さらに、長原遺跡の南東に接する八尾市八尾南遺跡でも古墳の検出が報じられた。この古墳(SX01)は一辺12.5mの方墳であるが、出土した埴輪から塚ノ本古墳と

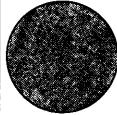
	40m 以上	15m 以上	7m 以上	7m 未満	規模不明
須恵器出現前	 85(一ヶ塚)	 170 (高廻り 2)  169 (高廻り 1)			40 176 196
TK 73 ・ TK 208 型 式		 57	8 9 10 11 15 26 31 44 45 47 50 51 53 61 62 79 102 103 105 109 110 129 132 134 139 147 150 161 173 179 180 183 199	18 28 30 49 83 114 137 141 167 172	29 59 65 67 71 73 74 77 80 81 100 108 112 115 149 152 166
TK 23 ・ TK 47 型 式		 116  190	3 5 7 13 27 32 34 52 54 58 63 64 86 87 89 94 106 111 113 131 142 143 182 187 188	6 33 35 36 60 135 146 200	2 4 37 38 82 84 107 140 193
MT 15 ・ TK 10 型 式		 130 (七ノ坪)  181 (南口)	153		

図1 長原古墳群の変遷図 (数字は古墳番号)

併行する時期が考えられ、長原遺跡南東部にも古墳が分布することを予測させた[八尾南遺跡調査会1981]。1982年度になって、この地域で市営住宅建設に伴う調査(NG82-41次調査)が行われ、長原 106・107 号墳が確認された。

このようにして、長原遺跡のほぼ全域にわたって古墳が分布し、隣接する遺跡にまで古

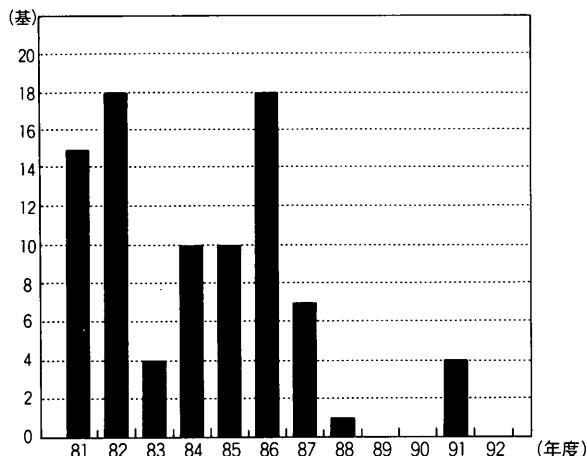


図2 土地区画整理関係調査の年度別古墳発見数

墳が分布することが次第に明らかになってきた。また、古墳の分布に粗密があり、いくつかの支群を形成していることもわかつてきた。

そうした中、1981年度から土地区画整理事業に伴う調査が開始された。同事業は長原遺跡(北・東地区および集落域を除く)と瓜破遺跡の一部を含んだ範囲を対象に行われる。それに伴う調査は道路新設部分を掘ることから遺跡全体にトレーンチ網を被

せることになる。そして得られた数々の成果は、古墳群の構造を考える上で重要なデータを提供することになった。

81年度の区画整理関係の調査(NG81-2次調査)は長原遺跡南地区を中心としたもので、15基の古墳(長原44～58号墳)を新たに確認した。中でも長原45号墳の武人埴輪・初期須恵器・韓式系土器[大阪市文化財協会1989]の出土は注目を集めた。82年度にも南地区的調査が行われ、18基の古墳(長原60～70号墳、長原80～86号墳)の発見があった。NG82-27次調査で見つかった一ヶ塚古墳(長原85号墳)は墳丘直径が47mの円墳で、造出しを含めた墳丘長が53mに達する。これは塚ノ本古墳に匹敵する規模であり、古墳群中に占める立地面でも塚ノ本古墳と東西に対峙する位置関係にある。しかし、造営時期に関しては一ヶ塚古墳のほうがやや新しいと考えられている[大阪市文化財協会1990]。83年度には調査の中心が西地区に移ったため、古墳の発見は南地区の4基(長原90～93号墳)に留まった。その代り、西地区に古墳時代の集落が確認されるという成果があった[大阪市文化財協会1992a]。84年度には西地区と南地区で10基の古墳(長原110～112号墳、長原121～126号墳、長原197号墳)の調査を行った[大阪市文化財協会1992b]。85・86年度も西地区で古墳時代集落に係わる調査が行われ、子持勾玉や土馬といった祭祀関係の遺物や須恵器生産に係わる木製当て具・叩き板の出土があった[京嶋覚1986、藤田幸夫1986]。また、南地区や東南地区では古墳が相次いで発見された。中でもNG85-34②次調査で発掘された長原131号墳は、一辺約10mの方墳であったが、埴輪列や土器供献の状況を比較的よく残していた。85年度には10基の古墳(長原131～137号墳、長原140～142号墳)、86年度

には18基の古墳(長原143～154号墳、長原160～165号墳)を確認した。この両年度が、土地区画整理事業に関係した古墳の調査の一つのピークであったといえる(図2)。87年度には前年度から引き続き行われた東南地区の調査で、7基の古墳(長原171～177号墳)が検出された。88年度には南口古墳(長原181号墳)が見つかった。この古墳は墳丘長25mの帆立貝形の前方後円墳で、古墳群中でもっとも新しいグループに属する[木原克司1989]。89年度以降は古墳の集中する地域での同事業関連の調査が減ったため、古墳の発見数は91年度に南地区で見つかった4基(長原193～196号墳)に留まる。

土地区画整理事業の施行に伴って、それまで農地であった場所にマンションや大型店舗などの民間の建設工事が頻繁に行われるようになった。その一例として、84年度に行った出戸地域でのNG84-25次調査がある。この調査では長原113～119号墳と周囲に溝を巡らせた集落跡が確認された。また、85年にはマンション建設に伴ったNG85-23次調査で、七ノ坪古墳(長原130号墳)が発見されている。七ノ坪古墳は墳丘長24mの帆立貝形の前方後円墳である。横穴式石室を有し、武器・武具・馬具などの副葬品が出土した。長原古墳群において、横穴式石室の発見ははじめてのことであり、多数の副葬品の出土もきわめてまれなことであった[高井健司1985]。古墳の時期は前述の南口古墳と同じか、若干先行し、規模も南口古墳とほぼ同じである。また、この2基の古墳が立地面でも東西に相対する位置にあることは注目される。86年度、出戸駅前でのマンション建設工事に先立つ調査(NG86-91次調査)で見つかった長原166号墳でも埋葬施設が確認された。木棺直葬の2つの主体部があり、武器や鉄製ミニチュア農工具などが出土した[高井健司1987]。92年度の末に、それまで確認された古墳の数がついに200基に達した。この調査(NG92-92次調査)も区画整理後の民間の開発行為に伴うものであった。

民間の建設工事とともに調査の主たる原因となったものに市営住宅の建替えがあった。87年度に行った市営長吉住宅に係わる調査(NG87-35次調査)では、高廻り1・2号墳(長原169・170号墳)が発掘された[大阪市文化財協会1991]。これらからは船形埴輪をはじめとする多種類の形象埴輪などが出土し、それらは1992年に国の重要文化財指定を受けた。91年度には、市営長吉西住宅建設に先立つNG91-18・53次調査で長原187～192号墳が発掘され、そのうちの長原190号墳は造出し部も含めた墳丘長が17.5mの方墳で、墳丘上に埴輪列が残り、さらに外堤上にも埴輪を樹立していた[久保和士1992]。墳丘上の南辺に土器棺が見つかったが、中心主体については明らかでない。長原古墳群に数百基ある小方墳の中では注目される1基である。

3) 古墳群調査の現状

1992年度までの調査により、200基の古墳が確認された。以下、その内容を整理しておく(別表1)。

「長原古墳群」は長原遺跡(城山遺跡を含む)内に所在する古墳に対する総称である。長原遺跡と接する亀井・喜連東・瓜破・八尾南の各遺跡にも古墳が分布しており、各遺跡との境界付近にある古墳のばあい、隣接する他遺跡側に中心をもつ造墓集団との係わりの深いものもあると思われる。

古墳は長原遺跡のほぼ全域にみられるが、その中にもいくつかの集中域がある(付図)。特に地下鉄長原駅から川辺小学校までを結んだ直径0.8kmの範囲にはもっとも規模の大きな集中域が存在する。その他に、地下鉄出戸駅周辺、長吉出戸7丁目付近、長吉川辺3丁目付近などにも比較的まとまった分布がみられる。

時期については古墳時代中～後期に属するものといえる。出土遺物からいうと、川西宏幸氏の円筒埴輪編年[川西宏幸1988]のⅡ期からⅤ期、田辺昭三氏の須恵器編年[田辺昭三1981]によれば、須恵器の出現前から、TK73型式を経てTK10型式までの間である。

変遷を略述すると、まず須恵器出現前には、塚ノ本・一ヶ塚・高廻り2号といったやや規模の大きな円墳の存在が注意を引く。また、方墳には高廻り1号や長原196号などがある。続いて、TK73型式～TK47型式の須恵器の時期には、小方墳が集中的に造られる。一辺の長さが10m前後の古墳が多く、15mを越えるものはわずかとなる。MT15型式の時期には帆立貝形の前方後円墳が登場する。しかし、それまで主体を占めていた小方墳は激減し、やがて終焉をむかえることになる。

墳丘外部施設の特徴として、塚ノ本や一ヶ塚という中規模古墳でさえ葺石をもたないことがある。しかし、埴輪の所有率は非常に高く、特に川西編年Ⅱ・Ⅲ期の埴輪には精巧な大型品が認められる。また、小方墳であっても造出しを備えたり、外堤を巡らすものもある。

後世の削平などのため、埋葬施設の確認できた例は少ない(表1)。その多くは木棺直葬であったと思われるが、須恵器や土師器の甕を中心埋葬に用いているものもある。七ノ坪古墳では、この古墳群で唯一、横穴式石室が確認されている。

副葬品の内容はあまり豊かではなく、古墳の中心埋葬となっていても、これといった副葬品のないものもある。

以下に、1993年3月現在までに明らかになった基礎的なデータを示す。

・墳形別古墳数、()内の数字は不確定分を含む。

表1 長原古墳群主体部検出古墳

古墳名	埋葬施設	位置	出土遺物	備考
40号墳	埴輪棺	墳丘裾	(なし)	
83号墳	木棺直葬	墳丘上	鉄劍・不明鉄製品	
87号墳	土器棺	墳丘上	(なし)	
94号墳	木棺直葬	墳丘上	(なし)	
	木棺直葬	墳丘上	(なし)	
105号墳	木棺直葬	墳丘上	管玉・ガラス小玉・豎櫛	
130号墳 (七ノ坪)	横穴式石室	後円部	勾玉・管玉・臼玉・ガラス玉・太刀・短剣・鉄錐・ 鉄鎌・f字形鏡板付巻・剣菱形杏葉・木芯鉄板張り 輪鎧・磯金具・鞍金具・環状雲珠・方形辻金具・ 鉸具	
	土器棺	墳丘裾	(なし)	
166号墳	木棺直葬	墳丘上	鉄劍・U字形鋤先・鉄製ミニチュア農工具	
	木棺直葬	墳丘上	金環・鉄鎌	
167号墳	土器棺	墳丘上	(なし)	中心主体
168号墳	木棺直葬	墳丘上	圭頭太刀・環頭小刀・小型鉄製品・豎櫛	
179号墳	木棺直葬	墳丘上	直刀	
180号墳	土器棺	墳丘上	(なし)	中心主体
187号墳	木棺直葬	墳丘上	刀子・ガラス小玉	
	木棺直葬	墳丘上	ガラス小玉	
190号墳	土器棺	墳丘上	(なし)	
200号墳	木棺直葬	墳丘上	太刀	

前方後円墳：2基 円墳：3(4)基 方墳：173(184)基 墳形不明：11基

・墳丘長別古墳数

50m以上：2基 30m以上50m未満：0基 15m以上30m未満：7基

7m以上15m未満：80基 7m未満：40基

・時期別古墳数

須恵器出現以前：7基 TK73型式～TK208型式の須恵器をもつ：61基

TK23型式・TK47型式の須恵器をもつ：44基 MT15型式・TK10型式の須恵器
をもつ：3基

・埴輪出土古墳数

埴輪出土：130基 形象埴輪出土：47基

(櫻井)

第2節 調査の経過と概要

1)はじめに

1985年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査は、表2に示すように14次に分れており、1985年5月8日～1986年3月31日に実施された。NG85-13次調査では弥生時代中期初頭の水田址、NG85-34②次調査では多数の埴輪を出土した131号墳が見つかり、NG85-16②次調査では古墳時代後期の溝から大量の土器とともに土馬や子持勾玉が出土するという成果があった。

本節では全調査の経過とその概要を述べ、次章において各調査成果を記述するが、NG85-9・59・67・77・80次の各調査に関しては、本節の記述のみに留めた。NG85-9・59次調査は試掘調査であり、NG85-67次調査は工事と併行して行われた小規模調査であった。また、NG85-77・80次調査については、編集上の都合から次年度の報告書で詳述することとした。

図3に同事業関連調査の範囲を示した。それからわかるように、本年度には瓜破遺跡内の調査は行われなかった。また、長原遺跡西南地区における調査もなく、中央地区においても大規模な調査は行われていない。一方、西地区および南地区では前年度に引き続いで広範囲にわたる調査が行われた。東南地区では、これまで小規模調査に留まっていたが、

表2 1985年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧表

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
NG85-9次	25m ²	平野区長吉長原1丁目、2丁目 同 長吉長原西2丁目	木原克司・富山直人	1985年5月8日～1985年5月13日
NG85-13次	約1,400m ²	同 長吉川辺3丁目	田中清美・田中秀和	I期 1985年5月27日～1985年9月3日 II期 1985年11月28日～1986年3月17日
NG85-16①次	1,770m ²	同 長吉長原西2丁目	京嶋覚・山崎栄	1985年6月10日～1986年3月12日
NG85-16②次	780m ²	同 長吉長原西2丁目	京嶋覚・山崎栄	1985年6月10日～1986年3月12日
NG85-34①次	約140m ²	同 長吉長原4丁目	木原克司・鶴田真佐子	1985年9月7日～1985年11月30日
NG85-34②次	約370m ²	同 長吉長原4丁目15	田中秀和	1985年9月17日～1986年1月25日
NG85-34③次	145m ²	同 長吉川辺2丁目	伊藤純	1985年10月2日～1986年2月3日
NG85-34④次	62m ²	同 長吉川辺3丁目	伊藤純	1985年10月16日～1985年11月8日
NG85-34⑤次	186m ²	同 長吉長原4丁目18	木原克司	1985年11月8日～1985年12月12日
NG85-59次	35m ²	同 長吉長原3丁目 同 長吉長原西2丁目、3丁目 同 長吉川辺1丁目、2丁目	木原克司	1985年12月13日～1985年12月26日
NG85-67次	約200m ²	同 長吉川辺2丁目	木原克司	1986年1月17日～1986年3月17日
NG85-70次	242m ²	同 長吉長原4丁目	鶴田真佐子	1986年2月3日～1986年3月8日
NG85-77次	10m ²	同 長吉長原3丁目	高井健司	1986年3月6日
NG85-80次	134m ²	同 長吉長原西2丁目	木原克司	1986年3月19日～1986年3月31日

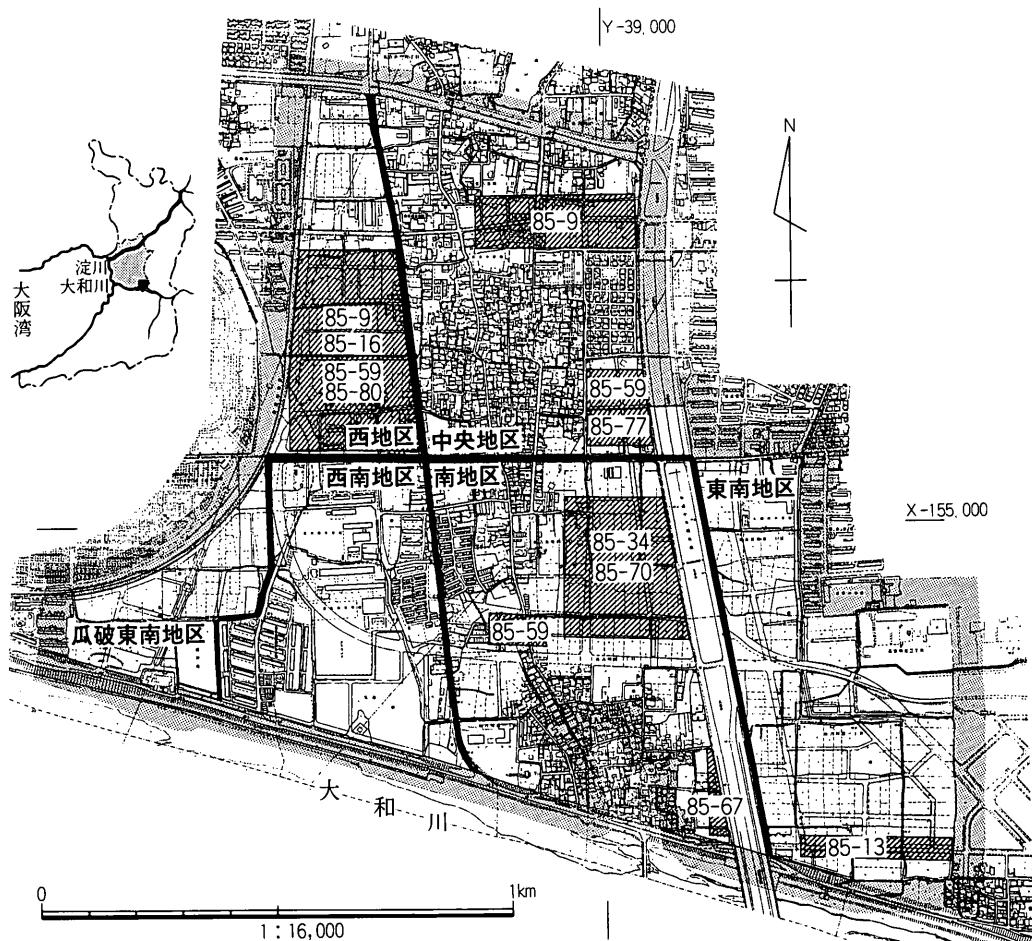


図3 土地区画整理事業施行範囲と地区区分

本年度から本格的に調査が行われることとなった。本年度の調査総面積は約5,500m²、前年度の1.4倍である。そのうち長原遺跡西地区が約2,700m²、中央地区が約40m²、南地区が約1,360m²、東南地区が約1,400m²となっている。

(櫻井)

2)長原遺跡西地区(NG85-9・16①・16②・59・80次調査)

この地区における本年度の調査は5次に分れ、同地区の南半部に集まっている(図5)。区域の西端に、南北に走る阪和貨物線があり、それから西が瓜破遺跡とされている。両遺跡の間には南北方向をとる埋没谷である「馬池谷」(註1)があり、調査地はこの谷の東側肩部

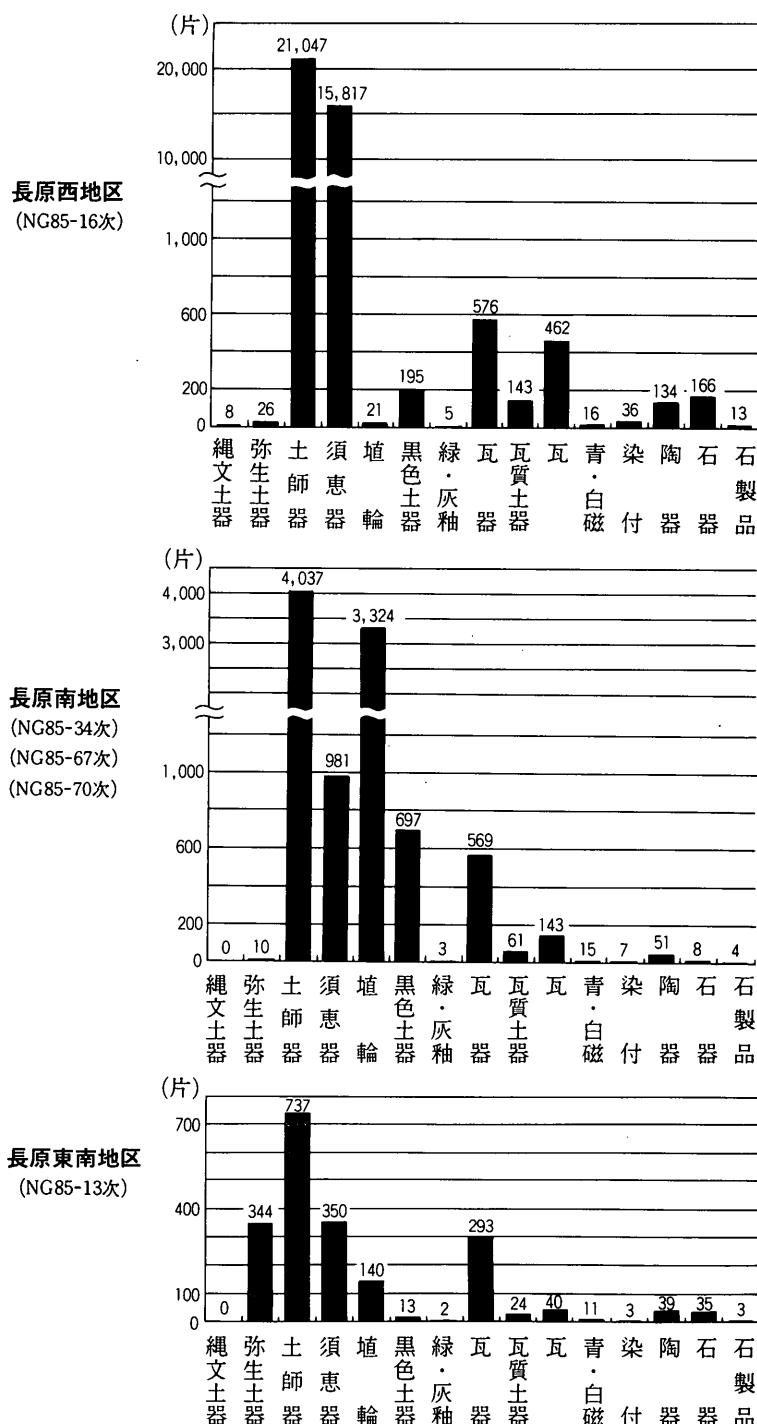


図4 地区別出土遺物破片数

周辺に位置している。ここではこれまでの調査により、古墳～平安時代の集落遺構の存在が明らかにされている。また、遊離資料ではあるが多数の旧石器が採集されている。

図4に西地区の調査を代表してNG85-16①・16②次調査で出土した遺物の破片数を種類ごとに示した。それから土師器・須恵器が他を圧して出土していることがわかる。そのほとんどは古墳時代のものであるが、その一方で、埴輪の出土数はきわめて少ない。これは、この地域が広く居住地として利用されていたことを示すものであろう。

i) NG85-9次調査

この調査は道路下への埋設管敷設に先立ち試掘を行ったものである(写真2)。同じ調査次数で、中央地区においても試掘を行っている。試掘調査は、現況の道路での本調査の実施が困難と思われる場所や、これまでの周辺調査から遺構面が深く存在することがほぼ予測できる地区で行った。この結果をみて、遺構面と埋設管の設計深度を検討し、本調査が必要か否かを判断した。

西地区においては合計9個所に、1m四方の試掘擴を設定し、1.5～2.2mの深さまで掘削した。府道大阪羽曳野線の西側では古墳時代の遺物包含層を確認し、一方、阪和貨物線の東側に沿った地点では開析谷の東斜面に当ることをつきとめた。

ii) NG85-16①・16②次調査

調査地は1983・1984年度に発掘調査[大阪

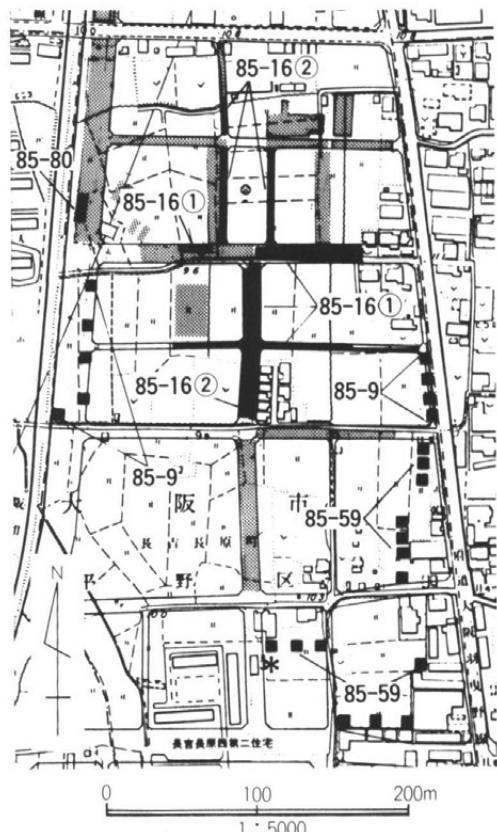


図5 長原遺跡西地区 調査位置図

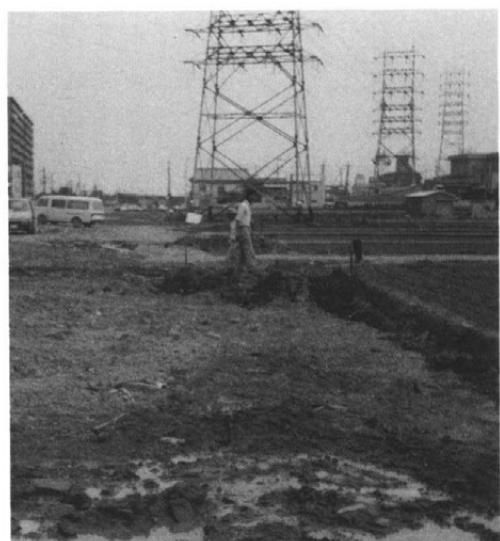


写真2 NG85-9次調査作業状況



写真3 NG85-16①次調査

市文化財協会1992a・1992b]が行われた区域内にあり、特に1983年度の調査地とは、連続あるいは平行する部分もある。調査では、周辺の農地への出入りや廃土の仮置き場などを考慮して順次トレーニチを掘削していった(写真3)。

これまでの発掘調査により、古墳時代中期の建物群が5個所、平安時代の建物群が4個所検出されている。今回の調査では、古墳時代中・後期の建物および堅穴住居が19棟、平安時代の建物が5棟検出され、古墳時代において4個所、平安時代において1個所のまとまりが新たに確認された。また、調査区の南部では、「馬池谷」につながる小埋没谷が検

出され、その最下部付近の溝状遺構から古墳時代中・後期の大量の土器や子持勾玉などが出土した。

さらに、この小埋没谷内には奈良時代および室町時代の水田遺構も遺存していた。

iii)NG85-59次調査

この調査は土地区画整理事業の擁壁工事に伴う試掘調査である。調査個所は同地区だけではなく、中央地区や南地区にも及んでいる。工事予定個所に沿って1m四方の試掘場を設け、同地区内では合計14個所の試掘を行った。1日に5、6個所の割合で、それぞれ長原13層まで掘下げ、地層の観察を行った。同地区のほとんどにおいては現代作土層下0.4~0.8mで長原13層を検出したが、もっとも西寄りの試掘場(図5中の*印地点)では現代作土層下1.4mまでに13層はみられず、谷部にかかっていることをうかがわせた。

iv)NG85-80次調査

この調査は、土地区画整理事業に関連した関西電力鉄塔建替え工事に伴うものである。調査個所は本鉄塔と仮設鉄塔1・2の3個所に分れる。そのうちの仮設鉄塔1を本年度の調査とし、残りを次年度に行うことになった。そのため調査の詳細は次年度に譲るが、鎌倉時代の水田址を検出するなどの成果があった。

(京嶋・櫻井)

3)長原遺跡中央地区(NG85-9・59・77)

次調査)

調査次数としては3次に分れているが、77次調査以外は、前項でもふれた試掘調査である(図6)。

i)NG85-9次調査

同地区の北部で合計16個所の試掘を行った。地表下1.5~2.0mまで掘削し、長原1~4B層の地層を確認した。西側の6個所では最近まで存在した池の埋土もみられた。

ii)NG85-59次調査

同地区の南部で合計14個所試掘した(写真4)。この範囲では現代作土層下から0.6~0.8mの深さに長原6A層、0.8~1.3mに長原13層がある。

iii)NG85-77次調査

調査地は地下鉄長原駅の西50mに位置する。これは、土地区画整理事業に関連して井戸側の撤去作業が行われることになり、当初、立会調査の予定であったが、掘削が周辺に及ぶことから、事前に調査を行ったものである。表土からすべて人力による掘削を行い、古墳時代の遺構・遺物などを検出した。86年度に隣接地において同事業関連の調査(NG86-36次)が行われており、調査成果はそれとともに次年度の報告書に記載する。

(櫻井)



写真4 NG85-59次調査作業状況

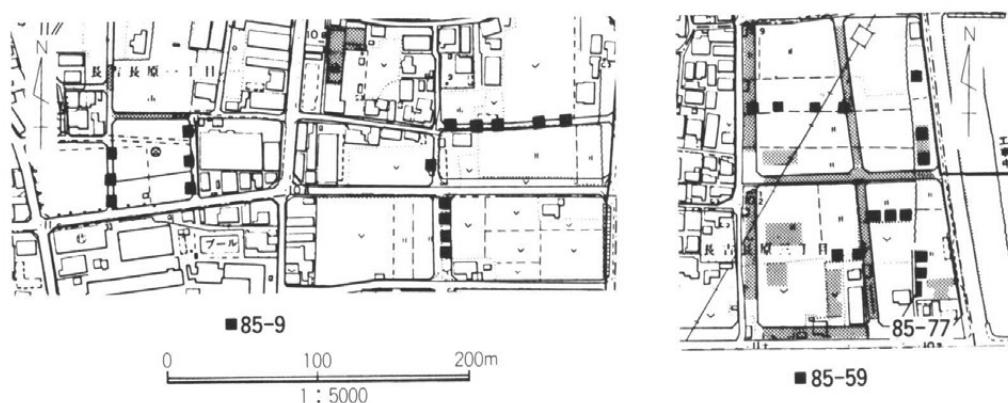


図6 長原遺跡中央地区調査位置図

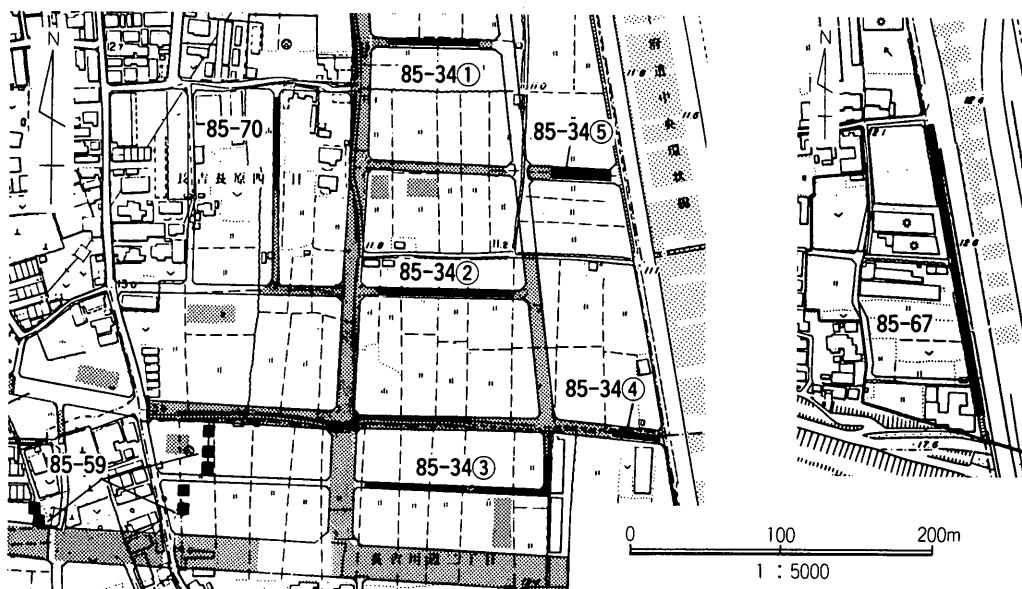


図7 長原遺跡南地区調査位置図

4)長原遺跡南地区(NG85-34①~⑤・59・67・70次調査)

67次調査地は同地区南東部に位置するが、そのほかは、同地区北半部で行った調査である(図7)。この地区内では、81年度の土地区画整理関連調査の開始当初から発掘が進められている。また、同地区の東辺には地下鉄谷町線建設に伴う32工区調査地、近畿自動車道建設に伴う調査地が南北に連なっており、それらの調査で明らかになった古墳群、奈良時代の水田址や平安・鎌倉時代の屋敷地などと関係する遺構・遺物が見つかっている。その状況は、図4に示した同地区本年度の出土遺物破片数からもうかがうことができる。土師器の出土数がもっとも多かったが、須恵器の出土数を大きく凌いで埴輪が多く出土している点が注目される。また、他の地区と比べると、黒色土器の出土数量の多いことも特徴の一つである。

i)NG85-34①次調査

この調査は長さ約85mの東西道路予定地で行ったもので、前年度のNG84-48次調査すでに東西両端部分の調査が行われている。また、周辺農地との関係から全体を3区分して調査を実施した。

おもな調査成果としては、奈良時代の水田址があり、西から東へ向って雛段式に低くなる水田面の状況をうかがうことができた。また、調査地東端部には谷状の地形があり、開析谷の一部と思われる。

ii) NG85-34②次調査

この調査もNG85-34①次調査と同じく、NG84-48次調査によってすでに東西端部分を調査された残りの中央部の調査である。調査予定範囲は85m×2.5mであったが、周辺農地との関係から全体を4分割して実施した。また、古墳が見つかった場所では、その規模などを把握するために道路幅いっぱいまでの拡張を行った。

検出された古墳は131・132号墳の2基

であるが、小方墳ながら、ともに円筒埴輪・形象埴輪を伴っていた。特に131号墳では墳丘上に埴輪列が遺存し、須恵器の供献状況をうかがうことができた。また、奈良・鎌倉時代の水田址もみられた。

iii) NG85-34③次調査

幅約1m、長さ27mの南北トレンチと、同じ幅で長さ105mの東西トレンチからなるL字形の調査地である。まず、南北トレンチから着手し、東西トレンチは2分割して調査を行った(写真5)。

東西トレンチ側で、NG81-12次調査においてすでに見つかっていた59号墳の北コーナー付近を検出したほか、3基の古墳(135～137号墳)を新たに発見し、長原6A層上面に南北方向の水田畦畔も見つかった。

iv) NG85-34④次調査

前年度のNG84-48次調査で、すでに西半分の調査が行われている東西道路予定地での調査である。長原3層までを機械掘削し、それ以下を人力で掘削していった。調査地中央部に134号墳が検出され、その部分については調査地を北側に拡張して発掘を行った。



写真5 NG85-34③次調査地



写真6 NG85-59次調査作業状況

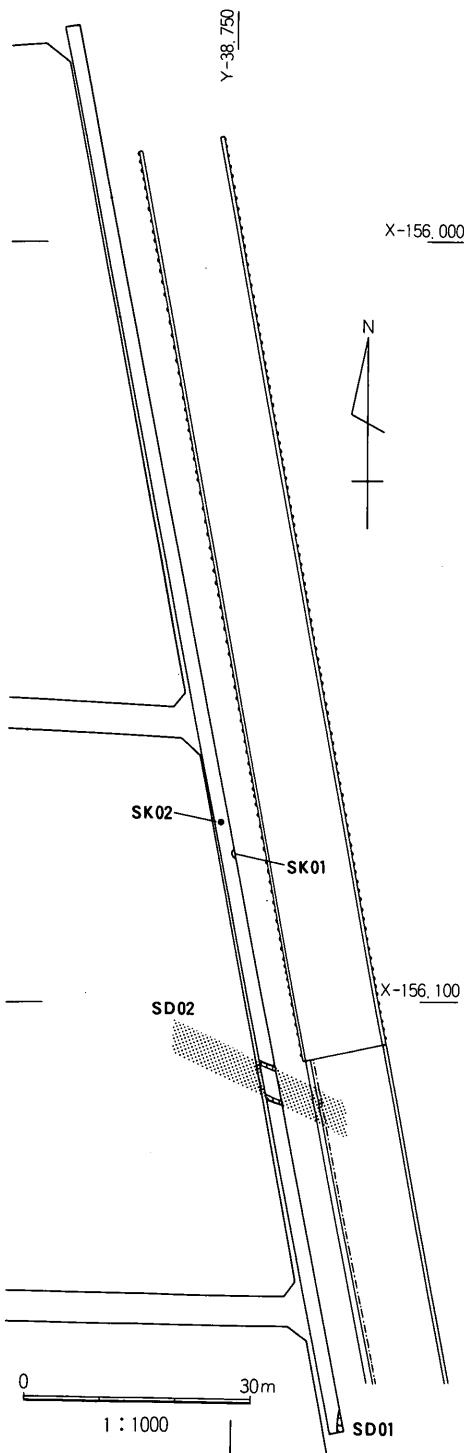


図8 NG85-67次調査地

v) NG85-34⑤次調査

9m幅の道路予定地であるが、その中央部に上幅4.5m、長さ41.3mのトレンチを入れた。その東端部で古墳を1基確認し(133号墳)、奈良時代の水田址も検出した。

vi) NG85-59次調査

前項でも述べた一連の試掘調査である(写真6)。旧東除川に沿った地点であるため、地層に砂礫を多く含んで崩れやすく、また湧水が激しく長原13層までの地層を確認できない地点が多かった。旧東除川左岸の2地点においては現代作土層下1m前後に長原13層を確認することができた。

vii) NG85-67次調査

調査地は幅1m強、長さ190mの南北方向のトレンチである(図8)。その場所が工場・店舗の立ち並ぶ中央環状線西側の歩道上であるため、まず試掘調査を行い、その結果に基づいて調査方法を検討することになった。試掘では、長原7A層と推定される黒色粘土層上面まで歩道の擁壁工事によって攪乱されていることがわかった。そのため、7A層の直上までを機械掘削し、それ以下を人力で掘削する方法をとった。しかし、下水管埋設工事そのものが、工場・店舗との関係で、発掘調査も含め、その日のうちに配管・埋戻しまでを終えねばならず、調査の工程も、1日約8mという小刻みなものになった(写真7)。

7A層は擁壁工事や農業用水路によって、いたるところで侵食されていたが、長原13層に

は及んでおらず、その直上のレベルには調査区間の北端 (TP+10.4m) と南端 (TP+11.2m) で約0.8mの比高があった。

長原 7A層基底面に土壙 (SK01・02)・溝 (SD01・02) があった。SD02を除くいずれの埋土も、7A層に似た黒色粘土である。SK01は90cm×45cm以上、深さ12cm、SK02は直径50cm、深さ12cmである。また、SD01は幅65cm以上、深さ18cmである。

出土遺物は少なく、SK01から弥生土器あるいは土師器と考えられる壺底部の破片 (図9-1) が出土しているほか、7A層内から円筒埴輪片 (図9-2) が出土しているのみである。埴輪は無黒斑で、外面に一次調整のタテハケを残すものである。

SD02は幅約4m、深さ50cm以上という規模の大きな溝である。7A層の下に見つかった遺構で、埋土は灰黄色粗砂であった。遺物がなく、何層の水成層かがわからないままであったが、のちに行つた周辺の調査 (NG89-26次調査) で一連の溝と思われるものが見つかり、それからみて、埋土は長原 8C層あるいは長原 8A層と考えられる。弥生時代中期の灌漑用水路である可能性が高い。

viii) NG85-70次調査

幅4m、長さ60mの南北方向のトレンチである。調査期間の関係から長原 3層までを機械掘削し、以下の掘削を人力で進めた。調査の過程で古墳の存在が確かめられ、その規模をおさえるため、隣接地所有者の許可を受け、3m×2mの拡張を行つた。

古墳 3基 (長原 140 ~ 142 号墳)、奈良時代の水田、平安時代後半の掘立柱建物・井戸・土壙を検出するという成果があった。長原 4B層からは多量の黒色土器・土師器とともに金属製容器の破片が出土した。

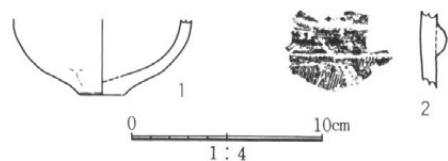


図9 NG85-67次調査出土遺物



写真7 NG85-67次調査 SK01検出状況 (南から)



写真8 NG85-13次調査地周辺の状況 (Ⅲ区西端から東方をのぞむ)

5)長原遺跡東南地区(NG85-13次調査)

調査個所は長原遺跡の東南部、長吉川辺3丁目に位置し、東端部は八尾南遺跡と接している(写真8・図10)。当地域では1983年に市営住宅の建設に伴う調査(NG82-41次調査)が実施されており、後期旧石器時代の石器ブロックや縄文時代晚期終末から弥生時代前期にかけての流路、弥生時代中期初頭ごろの土石流で埋没した水田址、弥生時代後期末の方形周溝墓、古墳時代中期の井戸や掘立柱建物および方墳などをはじめ、飛鳥時代から江戸時代にいたる間の水田址や給排水路など多岐にわたる遺構が検出されている。

今回の調査は全長300mの道路敷内を

3分割(I～Ⅲ区)して実施したが、NG82-41次調査区に北接する部分については、道路予定地内のほぼ全域を調査の対象とした。また、調査個所が農地や農道に接しているため、農繁期に当る9～11月は調査を中止したほか、常に農作業に支障のないよう努めた。

(田中)

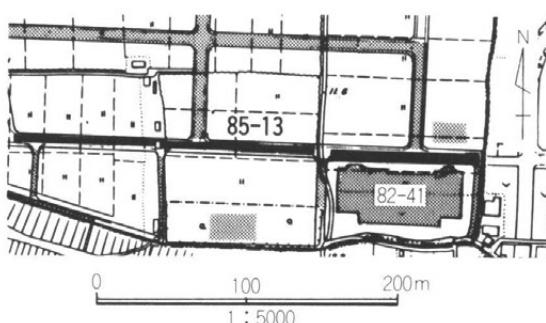


図10 長原遺跡東南地区 調査位置図

註)

(1)この谷は[京嶋覚1992a]で命名された開析谷の一つである。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 長原遺跡西地区の調査(NG85-16①・16②次調査)

1) 調査区区分と層序

i) 調査区区分(図11)

西地区における調査は、図11に示したように各トレンチをⅠ～Ⅸ区と呼称する。このうちⅣ・Ⅵ・Ⅸ区は幅約9～10m、他は幅1～3mのトレンチ調査であった。これまで、NG83-53・70次調査[大阪市文化財協会1992a]・NG84-47次調査[大阪市文化財協会1992b]などが実施されており、これら既報告資料と一連の遺構群が検出されている。

ii) 層序(図12)

当地区は長原6層以上の地層が希薄な地区であり、今回の調査地のうち、Ⅱ・Ⅲ区とⅤ区



写真9 調査区の航空写真(Ⅲ・Ⅳ区を南西から見る)

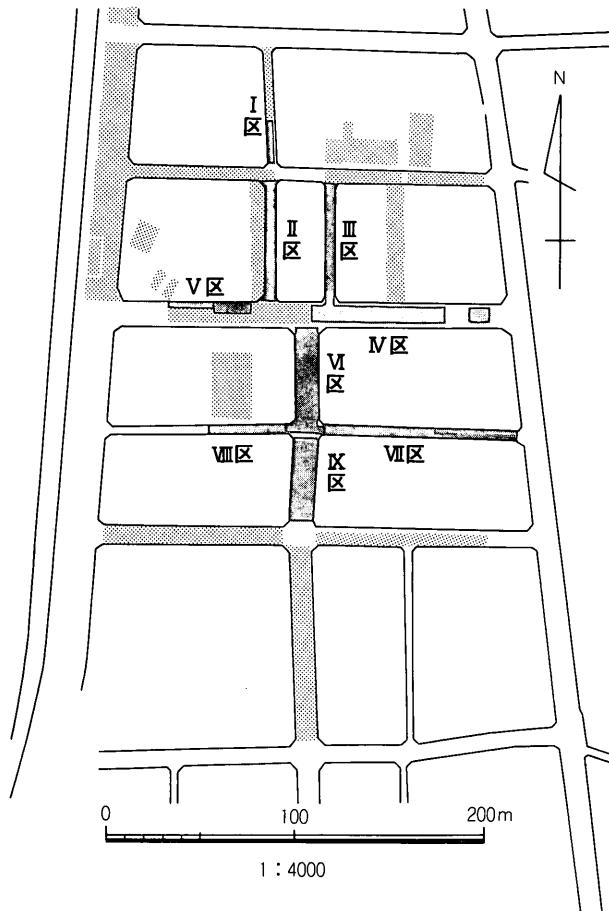


図11 長原遺跡西地区の調査区区分

の東端部では現代作土を除去すると地山層が検出された。IV～IX区の西部には「馬池谷」と呼称している埋没谷[大阪市文化財協会1992a p.2]が存在し、V・VIII区の西端部は谷の中心部に向って、沖積層上部層Ⅰの地層が発達していく。また、IX区南部は「馬池谷」に向って開析された小規模の埋没谷が存在し、厚い沖積層上部層が存在する。こうした「馬池谷」に向う小埋没谷は、北約100mに位置するNG83-53次調査地でも確認されている[大阪市文化財協会1992a]。

以下に、IV～IX区の層序について長原遺跡標準層序(別表2)に対比させて記述する。

沖積層上部層Ⅰ

長原0～1層：現代の客土層ま

たは作土層である(註1)。調査地はすでに道路敷内にいくらかの盛土を行い、それに先立つて作土層を除去している部分もあり、長原1層が存在しない地点もあった。

長原2層：長原0ないし1層の基底面で検出される灰色または褐灰色の砂質シルトで、層厚は約10cmである。IV区の東西坪境溝であるSD60の埋土やそれと切合うSE02などの野井戸の埋土も本層に相当するものと思われる。

長原3層：VI区南部、VII区、VIII区西部、IX区に遺存する。上部は水成の灰色砂礫で、最大層厚30cm、下部は含砂灰色粘土質シルトの作土層で、最大層厚20cmである。水成層が存在する地点では、水田の畦畔や段状の遺構が検出される。IX区の水成層からは14世紀後半から15世紀にかけての遺物が少量ながら出土している。これと同じ層準と思われる水成層は1984年度南地区の調査でも確認されており[大阪市文化財協会1992b]、本層上部の水成層を3Ai層、それが作土化した地層を3Ai層、4A層を母材とする本層下部の作土層を3B

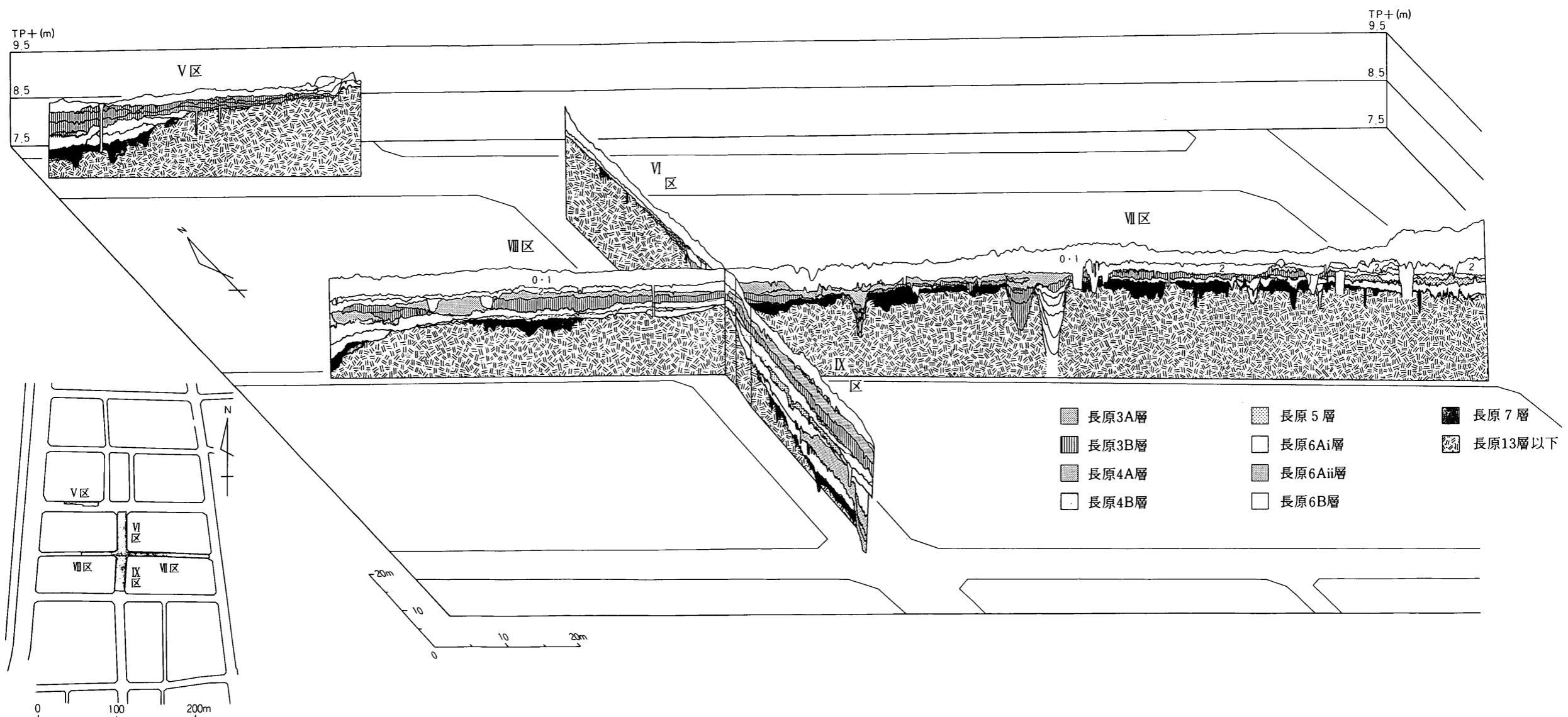


図12 V~IX区のパネルダイアグラム

層とすることを提唱する。

長原 4A層：Ⅶ～Ⅸ区の一部で確認できる水成層で、黄色中～粗粒砂である。層厚は最大で10cmである。Ⅸ区で土師器小皿などが出土している。

長原 4B層：灰黄色または緑灰色のシルトで、Ⅴ・Ⅶ～Ⅸ区に遺存する作土層である。最大層厚は30cmである。長原 4A層の遺存する範囲が狭いため、上面で明確な水田畦畔は認められなかった。本層中からは11世紀から14世紀前半の遺物が出土する。Ⅸ区の一部では本層が上下に2分され、下層から12世紀代の遺物が出土している。また、本層基底面で検出されたSD59を埋める水成層は長原 4Bii 層に相当する可能性がある。

長原 5層：Ⅶ区東端とⅨ区に遺存する水成層である。最大層厚20cmの黄橙色細～粗粒砂である。出土遺物はごく少量であるが、本層の上部からミニチュアの土師器鍋が出土した。

長原 6A層：Ⅰ・Ⅴ・Ⅶ～Ⅸ区に遺存する作土層の黄灰色粘土質シルトである。層厚は最大で40cmである。このうちⅨ区では6A層上面で水田畦畔が検出できた。また、Ⅸ区の南半部で、上部の粘土質シルトの下に6Aii 層に対比できる水成の緑灰色細粒砂ないし灰色砂礫があり、南端部に東西方向の流路が存在する。この南端部での層厚は70cmほどである。

長原 6B層：Ⅸ区南半部のみで確認できた。含砂黄灰色粘土質シルトの作土層である。層厚は最大で50cmである。Ⅸ区北半部では6A層との分離が困難になる。上面で耕作に関連する段状遺構を検出した。

沖積層上部層Ⅱ

長原 7層：Ⅴ・Ⅶ～Ⅸ区に分布する暗灰色粘土または砂礫を多く含む暗黄灰色粘土である。これ以外の地区では古墳時代の遺構内に遺存するのみである。本層最上部は作土化して長原 7A層とすべき部分があるかもしれないが、畦畔などの遺構は検出されず、7層として一括する。本層内で建物や溝などの遺構が検出される。

沖積層下部層

長原 13層：黄橙色シルトで、地山層である。

iii)出土遺物(図13、写真10)

ここでは長原 7層以上の層準から出土した遺物について記述するが、長原 6～7層中の遺物のうち、古墳時代以前のものについては後述する。

3～9は長原 6層ないし7層から出土した。3・4は須恵器杯B蓋である。つまみは欠損する。5～7は須恵器杯Bである。5の外底部はヘラケズリののちナデ調整し、爪形の圧痕がある。6は大きな高台が付き、外底面はヘラケズリである。7は底部外周に低い高台が付く。

8は須恵器杯Aである。9は土師器高杯の脚部である。杯部内底面に螺旋暗文が施される。脚部外面はヘラケズリにより11面に面取りされる。10は長原4層基底面で出土した土師器甕の上半部である。口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。体部外面はハケ調整で、口縁内面にもハケメがみられるが、体部内面は調整不明である。

長原5層からミニチュアの土師器鍋11が出土した。これは竈のミニチュアとともに長原5層からしばしば出土するもので(註2)、奈良時代末から平安時代初頭のものと思われる。

14・17・20・21・23・26~28は長原4B層、12・13・22は長原4A層、18・19・24・25・29・30は長原3層から出土した。

12~14は土師器小皿で、いずれも口縁部の内外面をヨコナデ調整し、内底面をナデ仕上げする。15・16はいわゆる「て」の字口縁の小皿である。砂粒の少ない精良な胎土を特徴とする。17は体部外面を2段にナデ調整する小皿である。

青磁碗には外面に鎬蓮弁の文様をもつ18・19と、外面にクシ状工具で施文され、内面にクシ状工具で花文が描かれる20がある。前者は竈泉窯系で横田・森田分類[横田健次郎・森田勉1978]のI~5類、後者は同安窯系でI~1類と思われる。21・22は白磁碗で、21は横田・森田分類のV類、22は同じくIV類であろう。23~27は瓦器である。23は小皿、25は

ミニチュアの羽釜で、短い鍔をもつ。堺環濠都市遺跡に類例があり[土山健史1989]、三足の付く形態と推定される。24・26・27は椀である。24は口径10.7cmの椀で、内外面にヘラミガキはみられない。26は内面に螺旋ミガキがみられ、外底面に低い高台を貼付ける。27は内外面にヘラミガキが施され、特に内面は密である。29は瓦器茶釜の肩部の破片と思われ、直立する短い口縁部が付くと推定される。肩部外面には櫛状工具で直線文を巡らしたのち、その間に花文を押捺する。30は瓦器火鉢である。内湾する口縁部片で、上端部に面を作る。体部上位の外面に菊花文を押捺する。28は東播系の須恵器鉢で口縁端部をあまり上方に拡張しない形態で、森田編年の神出Ⅱ期の第2段階[森田稔1986]に相当するものと思われる。

以上を総合すると、古墳時代のものを除く長原6~

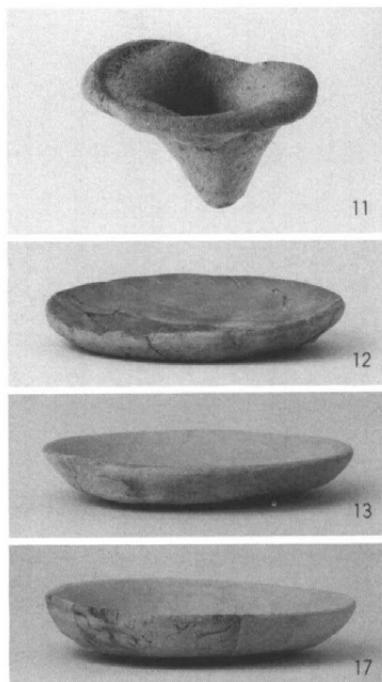


写真10 各層出土遺物

7層の出土遺物は、おおむね奈良時代に属するもので、7などは奈良時代末のものと思われる。長原5層からの出土遺物は少ないが、従来の資料からみて、奈良時代末から平安時代初頭の資料であろう。長原4B層の出土遺物は平安Ⅲ期古段階(表3)から瓦器椀のⅣ-1期

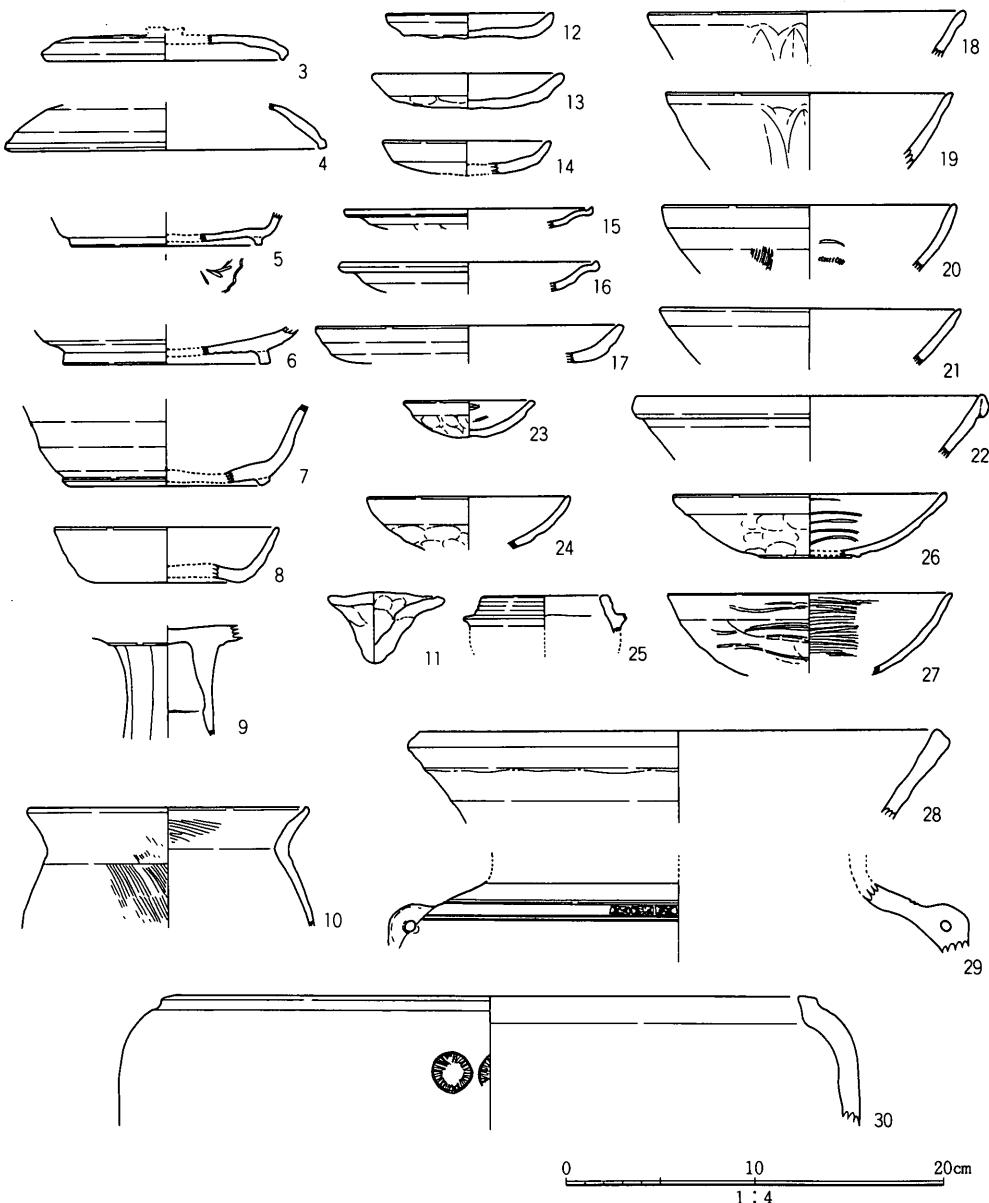


図13 各層出土遺物実測図

長原6～7層(3～9)、長原5層(11)、長原4層基底面(10)、長原4A層(12・13・22)、長原4B層(14～17・20・21・23・26～28)、長原3層(18・19・24・25・29・30)

表3 平安時代土器の編年

A.D.	平安時代 I 期
800	古
900	平安時代 II 期 中
1000	新
1100	古
	平安時代 III 期
	新
	古
	平安時代 IV 期 中
	新

表4 瓦器椀の編年

A.D.	I
1100	1
	II
	2
	3
1200	1
	II
	2
	3
1300	1
	II
	2
	3
	V

(表4) ころまであり、その上面を被覆する水成層の長原4A層の出土遺物も瓦器椀のIV-1期の時期と思われる。長原3層からの出土遺物は、瓦器椀のV期を上限として15世紀から16世紀前半までの瓦質土器が出土しており、おもに15世紀を中心とする時期であると考えられる。

2) 弥生時代以前の遺物

i) 土器(図14、写真11)

31～34は縄文土器である。31・32は上端部の外面にキザミを入れた突帯が巡る口縁部をもち、縄文時代晩期に属する深鉢であろう。33は同じく体部片で、キザミのある突帯が付く。SD22から出土した。34は平底の底部で、胎土からみて縄文土器の底部と思われる。いずれの胎土も生駒西麓産であり、砂粒を多く含んで黄褐色または茶褐色を呈する。

35・36は弥生土器である。35は第IV
様式(註3)の甕で、口径37.5cmと大型で
ある。口縁部は外方に屈曲させたのち、
下方に延ばして幅約2cmの面を作る。胎

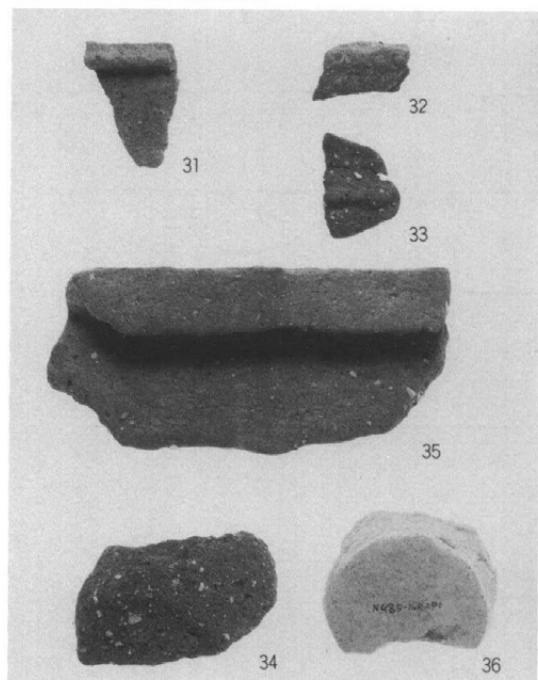


写真11 繩文土器・弥生土器

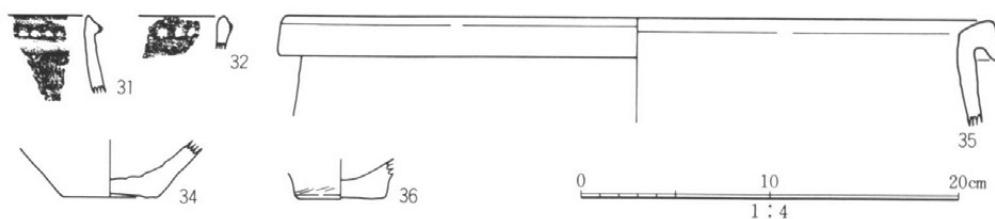


図14 繩文土器・弥生土器実測図
SD24 (32)、SD29 (35)、SD46 (31)、SD50 (34)、SD52 (36)

土は砂粒の少ない生駒西麓産である。36は第V様式または第VI様式の甕または壺の底部である。外面下端にわずかにタタキメが残る。

以上の土器はVI・IX区の古墳時代の溝に混入していたものである。

(京嶋)

ii) 石器遺物

本調査地から出土した主要な石器遺物としては石鏸 15 点、ナイフ形石器 8 点、ナイフ形石器・翼状剥片の接合資料 1 点があげられる。このほかクサビの使用に関する資料や、両面加工石器の未製品、石核、原礫、剥片多数、結晶片岩製石棒および石棒の可能性のある安山岩の石片などが出土した。出土総数は 164 点にのぼり、これらのうち 151 点を図示し、別表3にその計測表を示した。なお、石棒を除くすべてがサヌカイト製である。

以下に報告する資料はそのほとんどが古墳時代以降の遺構や遺物包含層中から出土した遊離資料であり、原位置を留めるものはない。また、これらが属する時代も旧石器～弥生時代にわたっていると思われるが、形態や製作技術によって年代を推測したものについては文中に記した(註4)。

石鏸(図15、図版36)

37は小型の凹基無茎式石鏸で、鏸身の中央には明瞭な稜線がみられる。先端は丸く、脚の末端は鋭いが、一方は古い折れで失う。基辺はかなり細かな調整で整形する。側面観は直線的である。縄文時代前半と考えられる。38は凹基無茎式石鏸で、細長い三角形を呈する。脚を古い折れで失う。側辺は直線的であるが、先端は折れ曲っている。左図先端には、末端がステップとなる上方からの折れ面がある。その後この面を切って、右図上端に細かな剥離を施した結果、先端が折れ曲ったと考えられる。以上のことから右図上端の剥離は、先端の折れを修正するためのものといえよう。基辺の抉りは左図中央の大きな剥離面によって作っている。主として左側辺に細部調整を行い、側面観は細かなジグザグを呈する。縄文時代晩期と考えられる。39は薄身の凹基無茎式石鏸で、側辺は緩やかに外反する。先端と脚の末端を欠損する。基辺にはていねいな押圧剥離を行い、細部調整によって、細かく屈曲する側辺を作っている。縄文時代後半と考えられる。40は凹基無茎式石鏸である。側辺は上半でくびれ、下半では直線的である。先端を失うが、平面形は細長い三角形または五角形を呈すると思われる。左図では連続した規則的な押圧剥離を施す。右図も基本的には左図と同様であるが、下半では末端がステップとなる剥離が多く、中央の段となった部分を取り除くことができずに終っている。細部調整は雑で、側面観は大きく屈曲している。

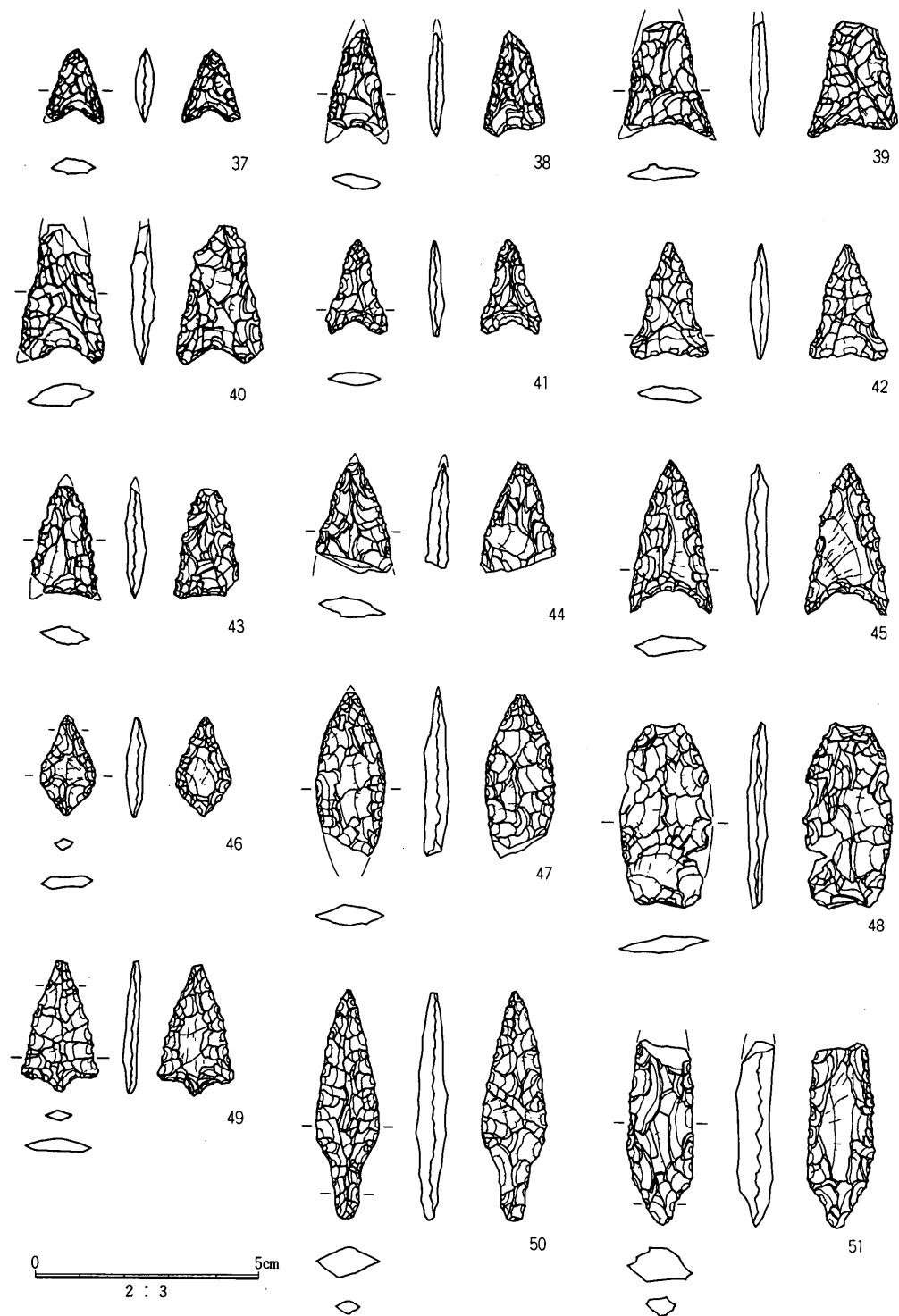


図15 石鏃

縄文時代後半と考えられる。41は薄身の凹基無茎式石鏃で五角形を呈する。側辺の突出部分から先端までが短く、基辺の抉りは深い。一方の脚の末端を失い、残った脚の末端は鋭く尖る。幅広の押圧剥離によって整形し、側辺の細部調整はほとんど行わない。このため側方からみると側辺は鋸歯状を呈するが、意図的なものとはいえない。縄文時代晩期と考えられる。42は薄身の凹基無茎式石鏃で五角形を呈する。41よりもやや大ぶりであるが、剥離の方法は類似している。脚の一方は丸く、もう一方の末端は鋭い。先端の一部を失う。縄文時代晩期であろう。43は凹基無茎式石鏃で、側辺は顕著な鋸歯状を呈する。基辺の抉りは浅い。先端を古い折れで失う。左図左側には素材の面と思われる剥離面を残す。全体の押圧剥離のうち、一部に細かな剥離を加えている。側面観は細かなジグザグを呈する。縄文時代晩期と考えられる。44は先端と基端とを古い折れで失う。鏃身はやや厚く、側辺は緩やかに湾曲する。全体の押圧剥離のうち、細部調整によって直線的な側面観を作っている。弥生時代と考えられる。45は凹基無茎式石鏃で、細長い三角形を呈し、先端と脚の末端は鋭く尖る。基辺は緩やかなカーブを描き、抉りが深い。全体の形は両面とも中央に素材の面を残すような浅い押圧剥離で作る。残った面から、素材としては薄い横長の剥片を用いていることがわかる。基辺には特に細かな調整を行う。側面観は先端付近で粗く屈曲するが、下半では直線的である。縄文時代晩期から弥生時代と思われる。46は小型の円基無茎式石鏃である。全体は杏仁形に作られ、体部下半に最大幅がある。先端は細く尖り、基辺には小突起を有する。両面とも中央に残る素材の面に向って浅い剥離を連続的に施す。基端と先端は特にていねいな細部調整を行い、細く尖らせている。側面観は先端付近で大きく屈曲するほかは直線的である。弥生時代と考えられる。47は凸基無茎式石鏃で、先端と基端とを新しく失う。側辺には細かな調整を施し、側面観は細かなジグザグを呈する。素材の面は残っていない。弥生時代と考えられる。48は大型の凸基無茎式石鏃で、本来木の葉形を呈すると思われる。大きさに比べ薄身である。側辺の剥離後、左図下側に末端でステップとなる下方向からの剥離を数回施すことから、図の上部を先端と推定した。なお、右図では同様の剥離はみられない。先端は垂直に近い縦方向の力が加わって折れ、この折れは両面に及んでいる。全体は粗く幅広な押圧剥離で作る。細部調整は基辺を除き顕著ではない。弥生時代中期であろう。49は薄身の平基有茎式石鏃で、鏃身は二等辺三角形を呈する。基辺は直線的で短い茎を有するが、茎の末端を失う。逆刺の先端は丸い。右図には素材の面を残す。両面ともに規則的な押圧剥離を行い、側面観は直線的である。細部調整は基辺にみられる。弥生時代のものであろう。50は凸基有茎式石鏃である。細長の鏃身と

茎の境はなだらかで、明瞭な逆刺をもたない。茎は長く突出し末端は丸い。先端は折れ曲っている。全体に規則的な押圧剥離を施し、中央には明瞭な鎬がある。細部調整は顕著ではなく、側面観は粗く屈曲している。弥生時代中期のものである。51は細長い大型の凸基有茎式石鎌で、鎌身は厚い。茎は短く逆刺は明瞭でない。先端と茎の一部を新しく失う。押圧剥離によって全体を作っているが、両面ともに素材の面を中央に残す。右図では、素材の面は左方向からの大きな剥離面であるが、左図では磨滅が著しく、打点位置は明らかでない。左図の押圧剥離は末端がステップで終るものが多い。細部調整は片側にのみ行う。細部調整を行う方の側面観が直線的であるのに対して、粗い押圧剥離のみの側は規則的に屈曲している。弥生時代中期と考えられる。

未製品(図16、図版36)

52は両面加工石器の未製品と思われる。左図下端には自然面を残し、中央には広い剥離面とこれに向って左方から剥離した横長の剥離面がある。右図の多くを占める横長の剥離面は、これら左図の剥離を切っており、この素材の主剥離面と考えられる。なお、主剥離面は左図の横長の剥離面と同方向の剥離を行っていることから、左図中央の剥離面を底面として、横長の剥片を連続的に剥離した可能性がある。こうしてできた剥片を素材として両面に押圧剥離を加えている。しかし、素材内部にあった傷が原因で左図右上の剥離が素材を大きく欠いている。この結果、加工を中止したと考えられる。53の素材は背面側の一部に自然面を残す板状の剥片で、右図が背面に当ると推定できる。この剥片の一方の側辺を両面から交互に加工して槍形の石器を作り出そうとしている。ただし断面図に顕著に現われているように、左図右側の上方を剥離する際の剥離がのびて左側までが剥落している。このため放棄したと考えられる。上部は新しく失う。54は端部が折れた薄い板状の剥片を素材としている。右図では裏面の剥離を行い易くするために何度も剥離を行い、これらを打面として左図の幅広の押圧剥離を行う。その後、側辺には細かい調整を加えるが、加工はそれで止り、もう一方の側辺には押圧剥離は行わない。なんらかの未製品またはスクリイパーとして使用したものであろう。55の左図は素材の背面側で、自然面を大きく残している。主剥離面は右図左側辺の先端にある左下方からの剥離面である。これらの面で構成される素材に対し、右図左側を両面から加工している。ただし、右側ではこれら左側からの加工を切る大きな剥離が1枚みられるのみで、裏側の加工は認められない。このことから、55は右図右側の大きな剥離によって素材のバランスを欠いたため放棄された両面加工石器の未製品の可能性がある。なお、この素材自身は中に入っていた傷のために下半部を

欠損している。56は一部に自然面を残す剥片を、両面から加工することによって、断面形がレンズ状を呈する両面加工石器を作り出そうとしたと思われる。左図下端の面は、図の中央から始まる折れ面で、これを切る剥離面は認められない。このことから、両面加工石器を加工する過程で折れた先端部に当ると思われる。

クサビ本体(図17、図版37)

57はその横断面形から厚さ約1.5cmの剥片を素材とし、使用の結果、一部を欠いたことが推測できる。主として図の上下方向に使用したと思われ、特に上部は加撃によって潰れている。58の素材は3方に自然面をもつ板状の剥片である。素材の主剥離面は使用のために失われている。主として図上方の自然面側を打縁、下方を刃縁として使用している。図の

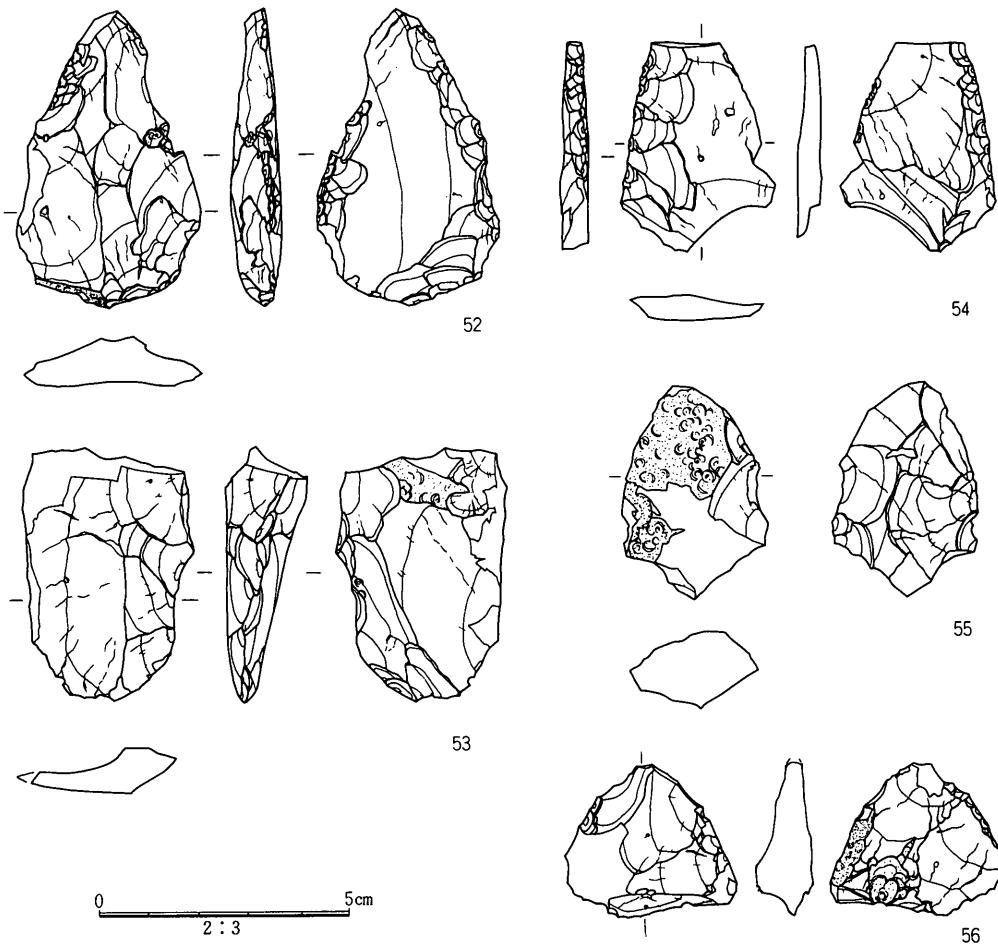


図16 未製品

横方向にも剥離がみられることから、この方向に使用した可能性もある。59の周囲には細かな剥離があり、図の縦横方向に使用したことがわかる。なお、右図上半にみられる剥離は垂直割れによるもので、右横の面はこれと同時に生じた裁断面である。周囲の細かな剥離はこの後に生じている。このことから一度クサビとして使用して変形した素材を、再びクサビとして利用している可能性が指摘できよう。60は背面に自然面をもつ断面三角形の縦長剥片を素材としている。図の上下方向に加撃を行っており、図の上方を打縁、下方すなわち剥離面の末端が薄くなる部分を刃縁として使用している。

クサビ本体から剥落した剥片(図17・18、図版37)

61の右図にある広く平らな面は素材の主剥離面で、左図右側の縦長の剥離面は裁断面である。61は上下方向の使用によって素材からはじけ飛んだ末端部に当ると考えられる。素材のもとの形状は板状の剥片であろう。62の背面側で最大の剥離面は打点付近で段を作ったのち剥離が進んでいることから垂直割れによると考えられる。一方、これと対向する位置に主剥離面の打点位置があり、これもまた垂直割れによって形成される。このことから62はクサビとして使用した際、背面と主剥離面が同時に剥落した剥片の一つと考えられる。なお右図右上方の小さな剥離面はヒンジフラクチャーの末端部で、この剥片に残った素材の面である。63の素材は薄い板状の剥片で、右図下半の広い面は素材の主剥離面と考えられる。この素材は図の上下方向に使用したと思われ、図の上半部分には垂直割れによる剥離面がみられる。この使用の結果、左図の大きな剥離によって素材からはじけ、剥落したと考えられる。この後、下方にある自然面を打面として左図下端の剥離を行っており、クサビ本体から剥落した剥片をなんらかの道具として再利用した可能性がある。ただし、この剥離は自然面の厚みを減じておらず、新たにクサビの刃縁を作り出すためのものとは考えがたい。64の素材の面は、右図左側・左図右側にある自然面と縦長の剥離面である。図の下方は加撃によって潰れており、両面ともに垂直割れによる剥離面で構成されることから、この剥片は図の上下方向にクサビとして使用した結果、本体から剥落したと考えられる。65の左図上半には右方向から剥離した素材の面が残る。この面から推定すると、本来は現状よりも分厚く幅広な剥片が素材であったと思われる。この素材を図の上下方向にクサビとして使用した結果、左図では下方向から、右図では上方向からの力が主として加わっている。最終的に右図の大きな剥離によってこの剥片が剥落している。66の素材の形状は不明だが、この剥片自体は垂直割れで生じたもので、左図左上と右図右上を打点とする剥離は同時に起ったものである。このことから66はクサビからはじけた剥片と考えられる。



図17 クサビ本体・クサビ本体から剥落した剥片 (1)

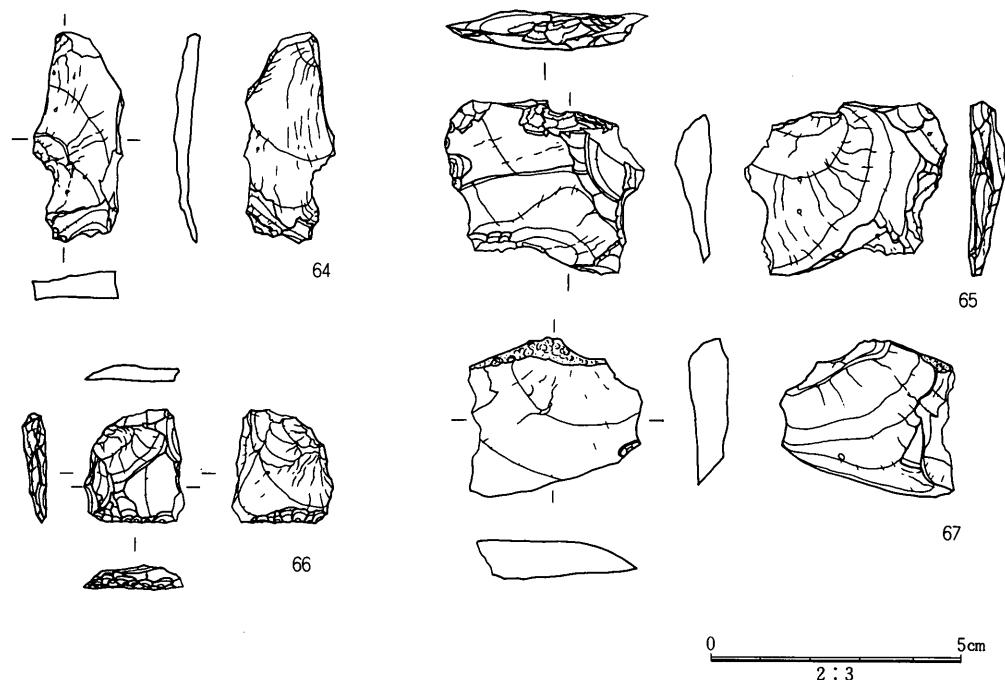


図18 クサビ本体から剥落した剥片 (2)

なお、図の下方には両面から細かな剥離を施している。剥片の鋭い縁を利用して、なんらかの道具として用いた可能性がある。67の背面は、自然面を打面として剥離した、広いポジティブタイプな面の打点付近に当ると思われる。主剥離面は大きく段をなして割れが進んでいる。これらは垂直割れによるもので、一つの剥離面と考えられる。この剥片は板状の剥片の一部が垂直割れによってはじけ飛んだもの、すなわちクサビから剥落した剥片と考えられる。

ナイフ形石器(図19、図版38)

68は2側縁に二次加工を施す。底面は2面からなる。背面下部中央に細長く残った面は、68の素材となる剥片を剥離する直前の剥離面の可能性がある。なお主剥離面側は風化が著しく、1面からなるかどうかは不明である。69は2側縁に二次加工を行う。底面の左下にある剥離面は石核の段階で剥離されたもので、できあがった剥片の末端を規定している。70はいわゆる国府型ナイフ形石器である。先端は折れのため潰れている。主剥離面の打点付近には主剥離面側から二次加工を施し、末端では背面側から基部の調整を行う。左図中央には盤状石核段階の打面と打痕が残っており、70がファーストフレイクを使用していることを示す。71は背部に二次加工を施す。断面は三角形を呈し、背面には底面以外の面は残っていない。基部の末端は折れ面である。72は小型のナイフ形石器で、2側縁に二次加

工を施す。背部の二次加工は背面側から行うのが特徴であるが、刃部の二次加工は主剥離面側から行う。右図下端の折れ面は二次加工によって切られており、主剥離面の形成に伴う折れ面の可能性がある。73は台形を呈し、一部に自然面を残す。背面には左側の広く平らな面を底面として、主剥離面と同方向から剥離した横長の剥離面がみられる。72と同じく背面側から背部の二次加工を行う。74は大型で、背部と基部に二次加工を行う。背面右側方からの幅広の剥離面は、この剥片を剥離する直前に横長の剥片を剥離したことを示している。しかし、この打撃方向は74を剥離した方向とはまったく逆である。75は1側縁に二次加工を施す。背面側では、横長の剥片を2枚以上剥離している。

石核(図20・21、図版38・39)

76の背面は自然面と数枚の剥離面からなるが、風化が著しく剥離の方向などは不明である。下図下半の大きな面は素材となる剥片の主剥離面で、上図の右は自然面、左は折れ面である。下図上半の幅広の剥離面は下半の面を底面として剥離したもので、背面にある複数の打痕はこれと同様な剥片の剥離を意図したことを示すと考えることもできる。しかし打面の状態が明らかではない上に、素材の大きさからみても、多くの剥片を剥離したとはいえない。このため石核としても典型的な瀬戸内技法のものとは考えがたい。77は翼状剥片石核である。素材となった剥片の背面側では、異なる方向からの2枚の剥離面が中央で稜線を作っている。また主剥離面はうねりをもち、末端で段をなしている。背面側には何回もの打面調整がみられ、最終的に稜線付近を打点として、剥片を剥離している。しかし、できあがった剥片は大きな歪みをもつもので、使用は不可能と思われる。78は左図左側の平らな剥離面を底面、右図の打痕が残る面を打面として剥離された翼状剥片を素材としている。そうすると左図右側は前段階に剥片を剥離した面で、右図左端の面は剥片段階の打面の一つと考えられる。こうしてできた剥片を使って、まず図の横方向から剥片の剥離を試みている。すなわち中央図の中央の面は、左図左側の平らな面を底面として剥片を剥離するための打面準備の剥離と考えられる。しかし、目的とする剥片は剥離していない。その後、右図上端に数回剥離を加え、この剥離でできた稜線部を打点として、左図上端で横長の剥片を剥離している。それ以上は剥片の剥離を試みることはない。79は翼状剥片石核である。左図でもっとも古い面は左端の広い剥離面で、その右横に並ぶ右上方・下方からの剥離面は、上・下の順にこの広い剥離面を底面として剥離したものと考えられる。また、左図上方の折れ面と、右図右側のポジティブな剥離面は同時に生じた可能性が高く、前に述べた3枚の剥離面を切っている。このことから、79は現状よりもかなり大きな石核

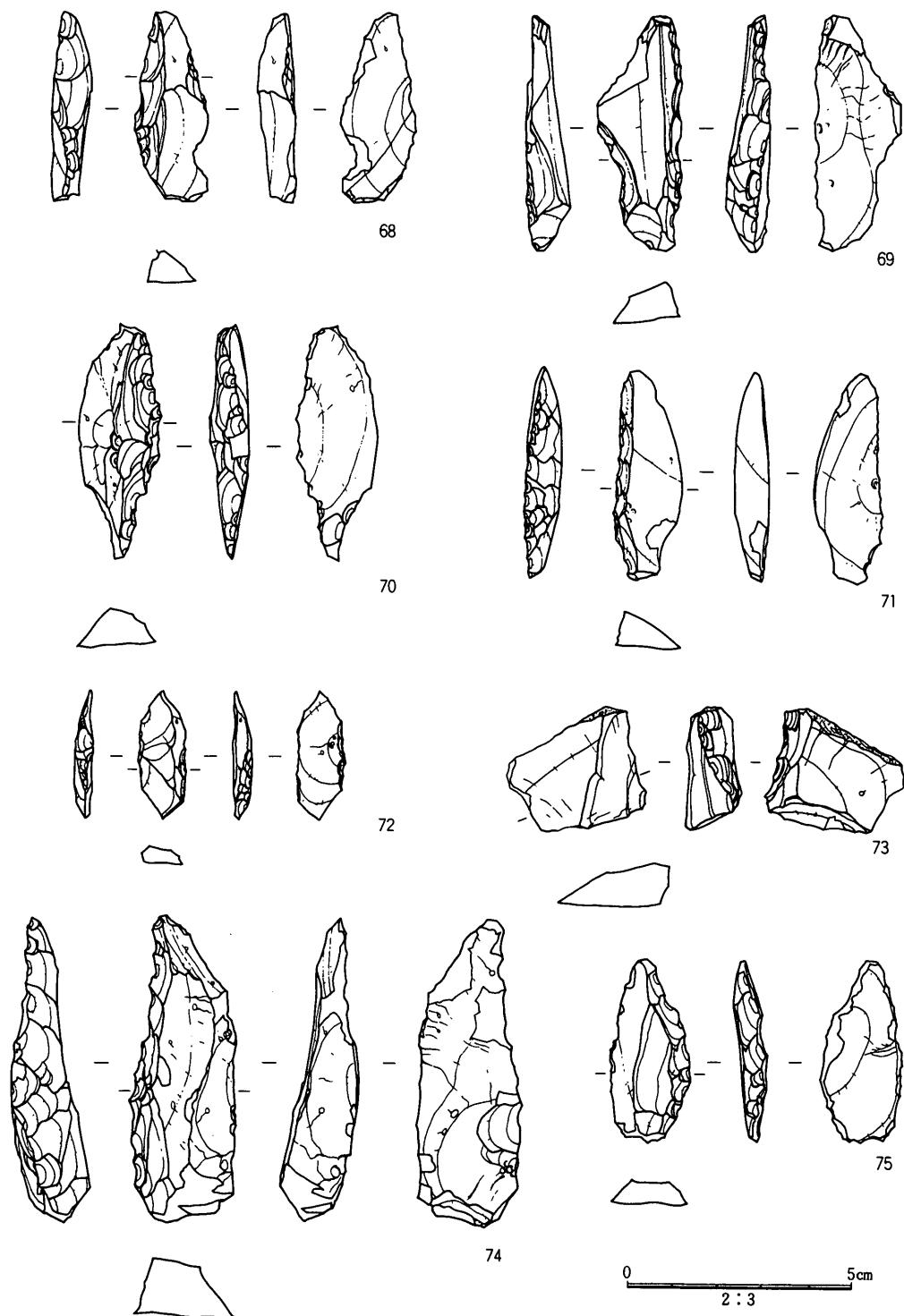


図19 ナイフ形石器

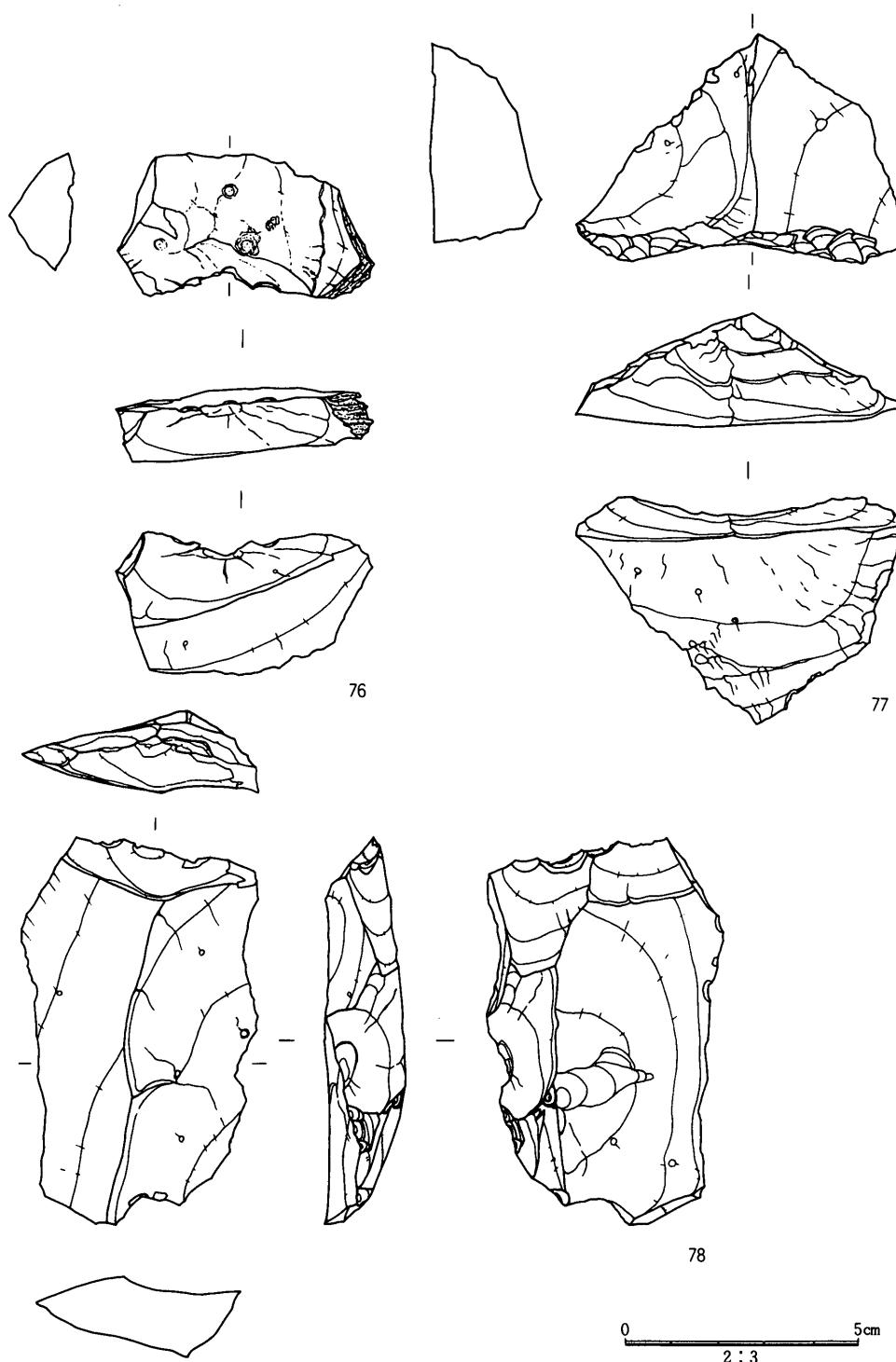


図20 石核 (1)

から、左図左側の面を底面として剥離された剥片であったが、右図右側の主剥離面の形成と同時にほぼ半分に折れたと考えられる。ところで、右図左側の横長の剥離面は右側の面を切っている。この面は左図右側の一連の剥離面を打面、右図右側の面を底面として剥離されたと考えられる。以上をまとめると、79は剥片・石核の二つの段階に分けて考えることができる。まず、大きな石核から盤状剥片を剥離する際、できあがった剥片が中央で二つに折れている。その後、折れた一方の剥片に打面調整を行い、主剥離面側を底面として1枚の剥片を剥離したと考えられる。なお、この工程は瀬戸内技法の中で理解できるものである。80は翼状剥片石核である。素材の背面は数枚の剥離面からなる。素材の主剥離面を底面として打面調整を行い、稜線付近を打点として翼状剥片を2枚以上剥離している。ただし、最終段階の剥離面は打点付近で大きく段をなしている。ここでこの素材は石核としての機能を終了している。こののちに左図左上、右図左上に二次的に加工を施している。このことから翼状剥片石核の素材の背面と主剥離面で作られる鋭い縁辺を二次的に利用した可能性が考えられる。81は典型的な瀬戸内技法に伴う翼状剥片石核で、1枚以上の翼状剥片を剥離している。左図下方にみられる右方向からの剥離は打面調整のためのもので、右図左側の剥離面を切っている。この段階で加工は終了している。なお、左図下端の面は折れ面である。82の上図には自然面と合計3枚の剥離面がみえる。下図下半の面はこの素材の主剥離面である。下図上半には、これを切って左右から剥離した2枚の面が認められる。上図下半に残る面を打面、下図下半の面を底面として、左右から2枚の剥片を剥離したと考えると、82は横長剥片を剥離した石核といえよう。ただし、切合い関係が新しい欠けのため明らかにできず、断定はできない。83の右図右側はポジティブな面である。これを底面と考えると、右図左側にある横長の面は剥片を剥離したもの、左図右側に並ぶ剥離面は打面調整といえ、83を石核と考えることができる。ただし風化が著しく剥離面の観察が困難であるため断定はできない。84は厚さ約2cmの剥片の主剥離面を底面、背面の剥離面が作った稜線部を打点として剥片の剥離を試みている。ただし、左図右側辺に何度も打撃を加えた結果、剥離後にこの部分から折れが起っている。また、右図右側辺にある細かな剥離は、素材自体のもつ鋭い側辺を利用して道具として用いるために行ったものである可能性が高い。

接合資料(図22、図版38・40)

85はナイフ形石器、86は翼状剥片である。85は86の底面となる面、さらに85を剥離する1枚前に翼状剥片を剥ぎ取った剥離面を底面として剥離されている。剥片の剥離後、主剥

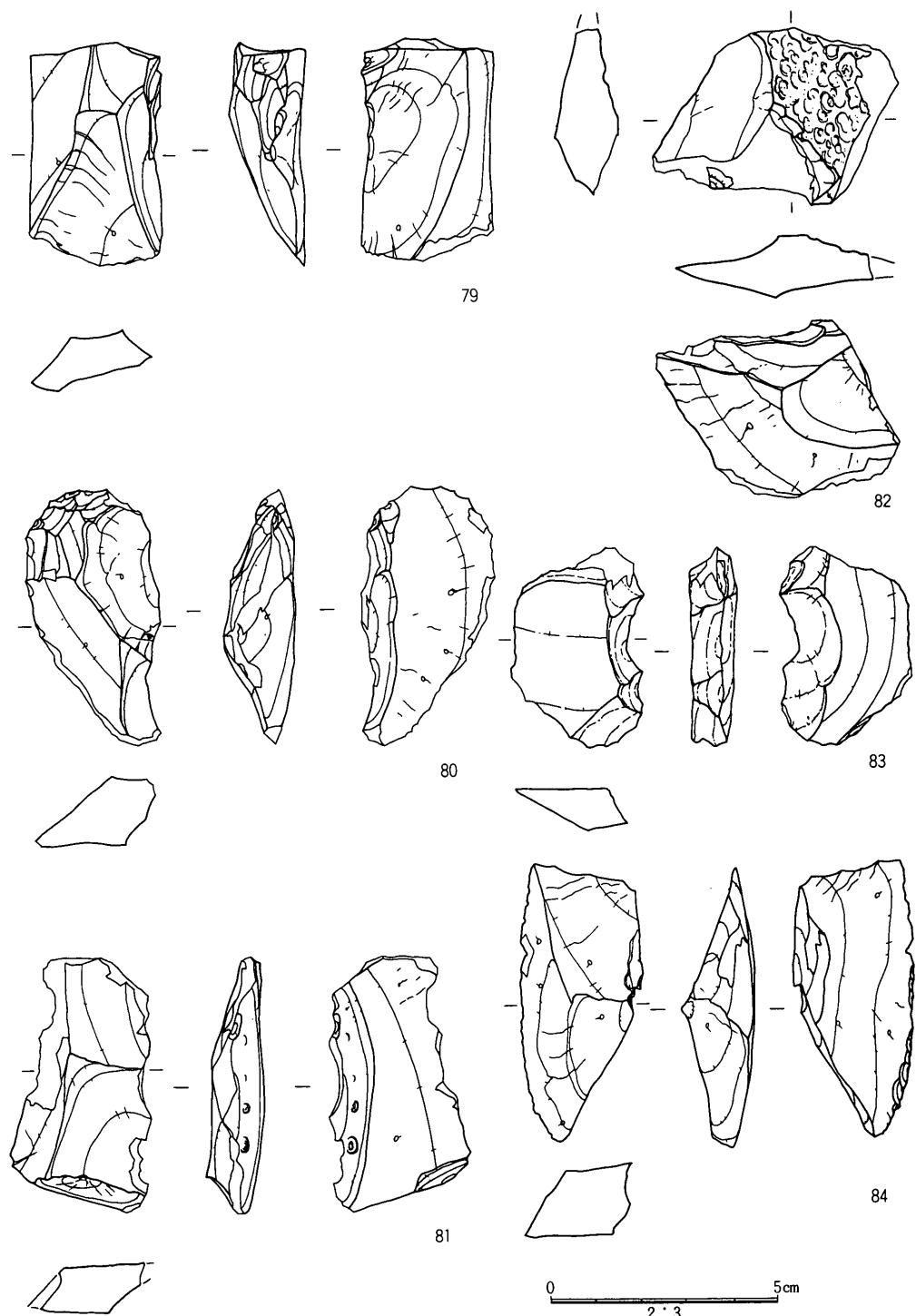


図21 石核 (2)

離面側から大ぶりな背部の二次加工を行っているが、その際にもっとも基部に近い側の剥離が素材を大きく欠いている。86は左図左端の細長い面を底面として剥離されている。ただし、この面は大きな剥離面の末端部分で、主剥離面と底面の作る縁辺は鋭さを欠く。このためにナイフ形石器には加工しなかったと思われる。なお、上端は自然面である。下端は85・86ともに折れているが、折れ面どうしは接合せず、それぞれを剥離する際、別々に折れたと思われる。

翼状剥片(図22・23、図版38・40)

87の背面にみられる剥離面は、剥離が2方向に分れて進んでいる。この剥離後、背面側から打面調整を行い、図の上下からの剥離でできた稜線部分を打撃してこの剥片を剥離している。88の背面では少なくとも1枚剥片を剥離している。89の背面では大きな剥片を1枚以上剥離している。打面調整はていねいに行う。ただし、主剥離面形成の際、剥離が一方で進んで、斜め方向に割れてしまっている。90の背面では1枚以上の剥片を剥離している。背面下部に残る細長い面は底面に切られており、素材の面である。91の背面では下方の広いポジティブな面を底面として、横長の剥片を剥離している。背面に主剥離面と同方向の剥離面があることから、この剥片は打点部を欠いているが、翼状剥片の剥離を意図するものといえるだろう。左図左端は自然面で、これが剥片の限界であると判断できる。なお、右図左側の剥離面は、主剥離面の形成と同時に起った折れ面の可能性がある。92の背面では素材となる石核の主剥離面側を底面とし、92の剥離以前に少なくとも3枚の剥片を連続して剥離している。なお、これらの剥片の打面は同一ではない。このことから92は翼状剥片といえる。主剥離面の形成と同時に折れが起り、本来の剥片の一部を失っている。

横長剥片(図23～25、図版40・41)

93～103は、底面の可能性のあるポジティブな面を背面側にもつ剥片である。93の背面は左図左側の平らで大きな面と、複数の小さな剥離面からなる。右図左上にある横長の剥離面は主剥離面形成以前のもので、左図の細かな剥離面を切っている。左図左側の剥離面は底面と考えられるが、左図の剥離が右図の剥離を容易にするための打面調整で、右図右上の剥離が翼状剥片の剥離に伴うとすれば、93は打面調整剥片となろう。94の主剥離面は剥離が背面側にまでとどき、末端部分で折れが起っている。背面では左側の大きく平らな剥離面を底面として横長の剥片を剥離した後で、この剥離によって生じた鋭い縁を右上方にみえる数回の剥離で除去している。主剥離面以前の剥離面と主剥離面とは打点位置が大きく異なるため、典型的な翼状剥片とはいえない。95は、左図左側の広く平らな面を底面

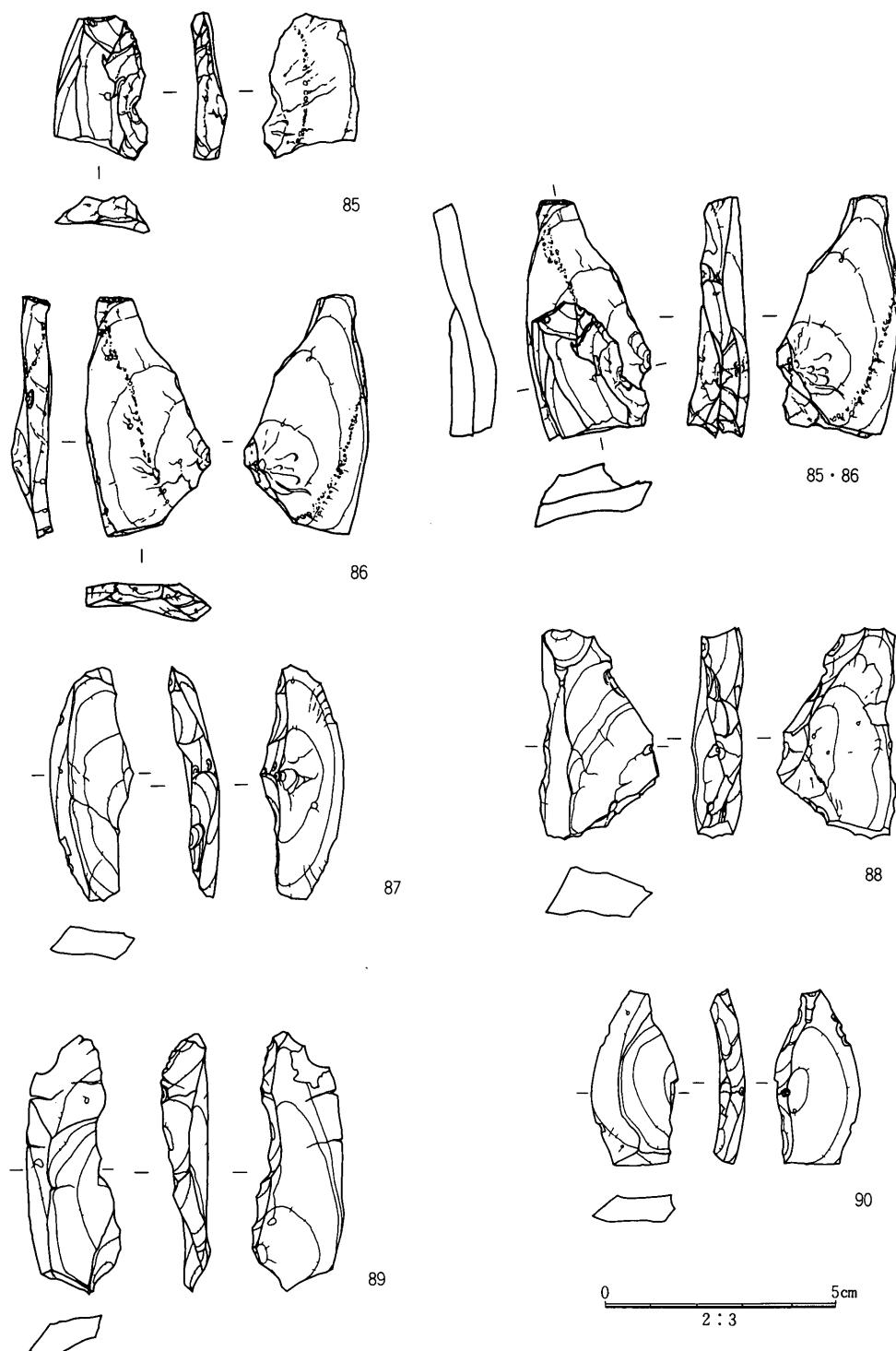


図22 接合資料・翼状剥片（1）

として剥離した分厚い横長の剥片で、翼状剥片の可能性をもつ。これ以前に同様の横長剥片を剥離したのが右側の2枚の剥離面である。また、上方の折れは右図の主剥離面の形成と同時に生じた可能性が高い。この剥片の剥離後に左図右側の細かな剥離、さらに右図左側で段をなす剥離を行っている。なお、右図左側で段を作る部分は素材の中に入っていた傷が原因で素材からはずれたものと思われる。以上、95は主剥離面の形成と同時に上方が折れた剥片に、背面側から二次的な加工を施す際、傷の部分から素材自身が大きく欠けて放棄されたと考えられる。その一方で、素材となる横長剥片の主剥離面、すなわち右図の側を底面として左図右側に打面調整を行い、剥片の剥離を試みた可能性もあり、両者いずれとも断定はできない。96は左図左側にある細長い面を底面として剥離した横長の剥片である。この剥片を剥離する以前の面は左図左下の2枚の剥離面である。96の剥離後、右図左上に背面側からこの剥片の打面を除去するような剥離を加え、もとの打面と新たな剥離面の稜線部を打点として、1枚の剥片を剥離している。また、主剥離面の端部、すなわち、右図右側にみられる剥離も主剥離面形成後のものである。剥片の剥離時に生じた鋭い縁辺を利用することを重視すれば、主剥離面末端の剥離は、基部を調整したものと考えられる。また左図右側の剥離を重視すれば、横長剥片の打面部を再度調整し、石核として用いた可能性があるといえよう。97の背面は底面と考えられる横長で幅広の面と、底面側から生じた2枚の折れ面からなる。これに対して中央図の下方向から打面を作り、この面とこれ以前の打面との作る稜線付近を打点として、二度剥離を試みた結果、横長の剥片を剥離している。このことから、97は主剥離面を剥離する以前の剥離面は残っていないが、打点が一直線上にあることから変則的な翼状剥片の可能性もある。98の背面左側の面は素材の主剥離面に当り、これを底面として剥離した、背面にある2枚の剥片の剥離方向は、98の主剥離面と同じである。99の背面左上にある平らな面はポジティブな面で、底面と考えることが可能である。主剥離面の剥離以前に1枚以上の剥片を剥離している。打面調整はていねいに行う。100は素材の主剥離面を底面とし、背面では図の上下方向から2枚の剥片を剥離している。主剥離面はこれらの剥離の中間を打点とするような形で形成される。101の背面は自然面と2枚の剥離面からなる。左側のポジティブな面と考えられる面を底面とすると、右下方から1枚の剥片を剥離したといえる。主剥離面の打面は折れのため失う。102は素材の主剥離面を底面とする。背面では図の右上、右下方向から2枚の剥片を剥離している。左図上部の剥離面は素材の端を規定する面で、この素材自体が横に長いものではなかったことを示している。103の背面左側の面はポジティブな面で、この面を底面と考えることが

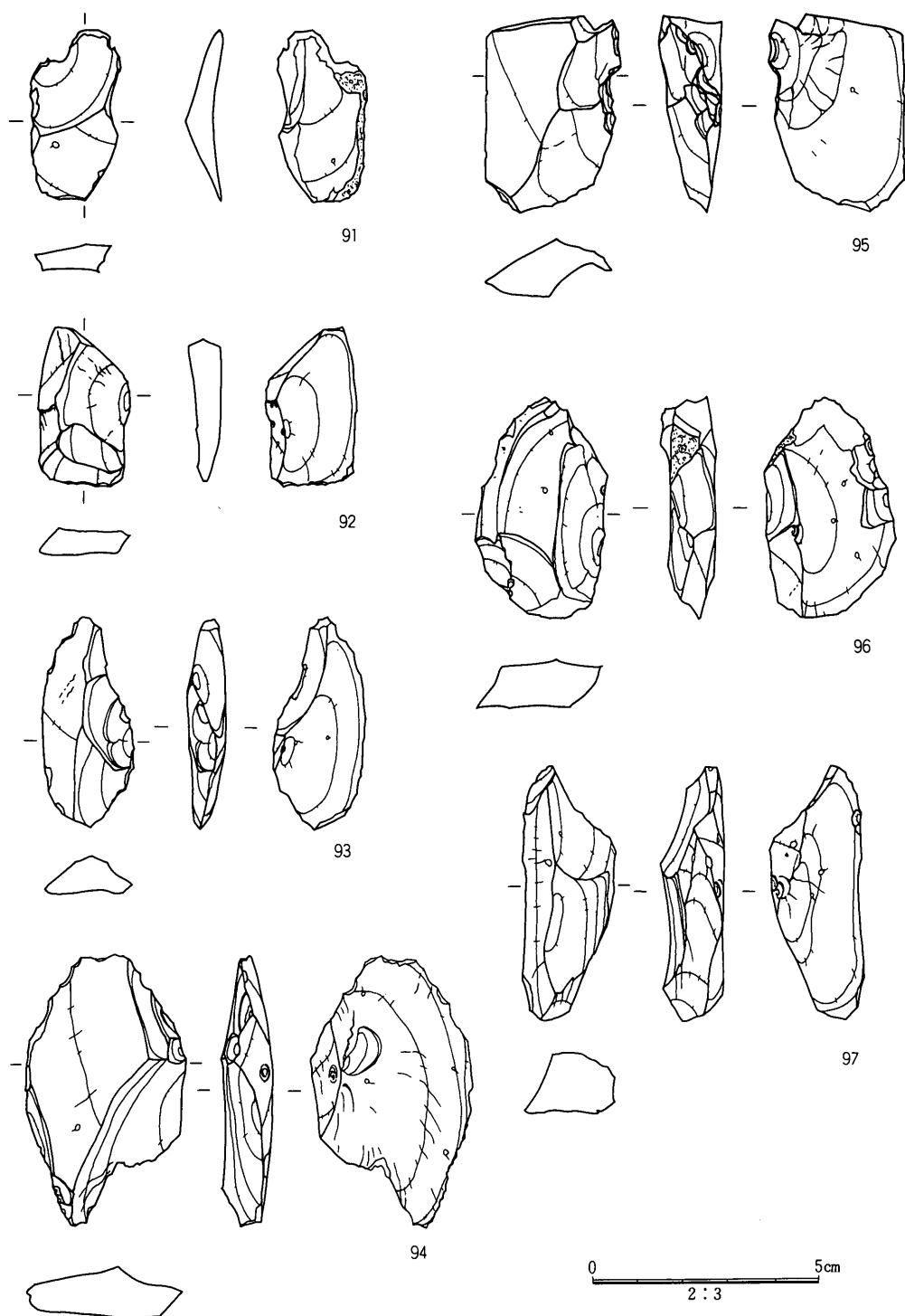


図23 翼状剥片 (2)・横長剥片 (1)

可能である。風化が進んでおり、他の剥離面の観察は困難である。

104～115は底面と考えうる面を背面側にもたない横長剥片である。104の背面では調整的に数枚の剥片を剥離しているが、打点は直線的に後退してはおらず、剥離した1枚1枚が必ずしも整った剥片とはいえない。105の背面では2枚の剥片を剥離している。106の背面左側の面は素材の主剥離面に当り、底面ともなりうる。ただし背面でみられる剥離面がいずれも小さく、末端で段を作っていることから、106はこの段を調整するために剥離された剥片である可能性が高い。107の背面には自然面を有する。左下の剥離面はネガティブな面であることから、これを底面とはしがたい。仮にこれを底面としても、打面を直線的に後退してはいないため、典型的な瀬戸内技法による剥片ではないと考えられる。108の背面では少なくとも2枚の剥片を剥離している。上端は折れているが、本来の素材は現状よりも長いものだったと思われる。109の背面は大きく分けて2面の剥離面と自然面からなる。これに対して何回かの剥離で打面を作ったのちに横長の剥片を剥離している。110の背面は自然面と左側の縦長の剥離面、図の上方から剥離した幅広い剥離面からなる。主剥離面は石材中の自然面が影響して歪んではいるが、本来、横長の剥片を剥離することが目的だったと思われる。なお、背面の左にある縦長の剥離面は底面と考えることも可能である。111の主剥離面は剥離の途中で大きく段をなす。112は細かな打面調整を行っており、背面では2枚の剥片を剥離している。ただし、背面左側の面はネガティブな面で、底面とはいえない。113は打面部分を調整している。主剥離面は何回かの打撃によって形成され、剥離の末端が背面側にまで回り込んでいる。114は主剥離面の末端部分に背面側から二次的に加工を施している。打面は細かく調整している。115の打面は複数の面からなる。背面左側の面はネガティブな面である。

調整剥片(図26、図版42)

116～126は調整剥片である。116の打面は自然面である。117の背面は自然面と数枚の剥離面からなり、背面側の剥離後、図中央の打面調整と思われる細かな剥離を施す。主剥離面は複数の打撃によって形成されたと思われ、断面図をみると一旦剥離が止り、さらに奥に向って割れが進んだことがわかる。また、主剥離面の打点付近と打面は、打面調整による傷が原因で主剥離面の形成と同時に折れたと思われる。118の主剥離面と背面右側にある横方向の剥離面は、同じ面を打面としている。この打面には他にも打痕が残ることから、118は連続して小さな剥片を剥離する作業の中で生じたものと思われる。なおこれを瀬戸内技法の作業の中で捉えることもできる。すなわち118を打面調整剥片と考えると、この剥片

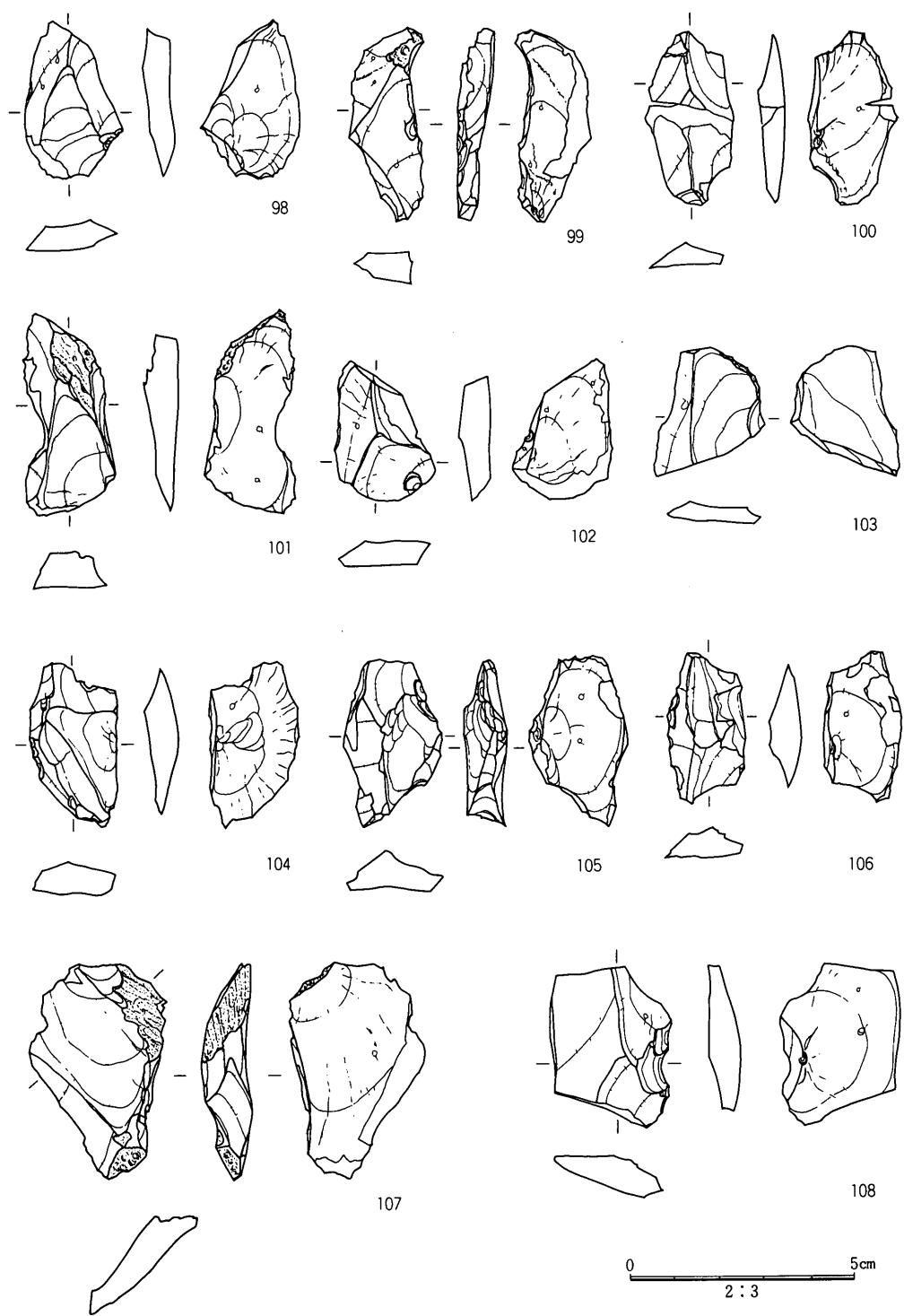


図24 横長剥片（2）

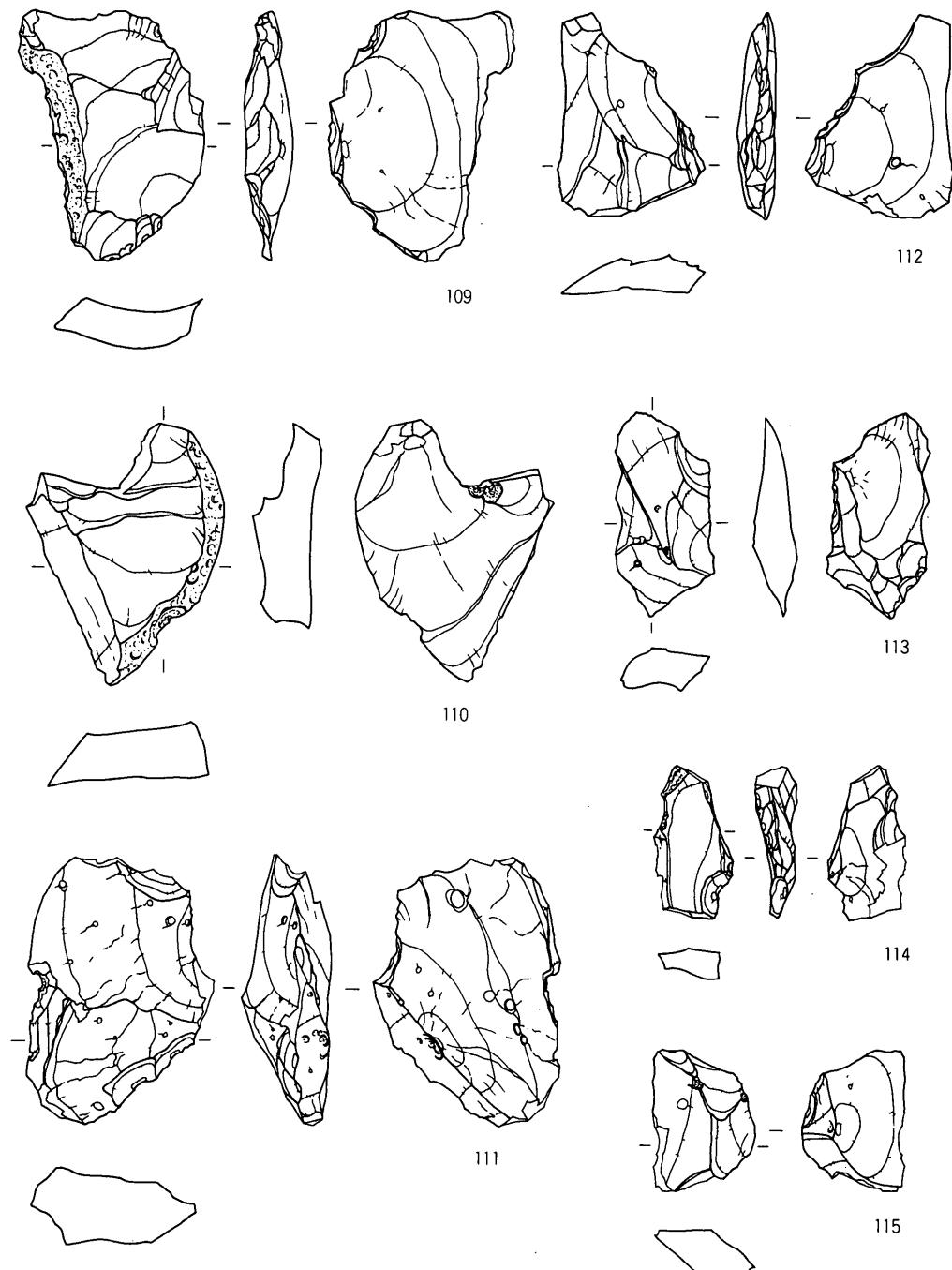


図25 横長剥片 (3)

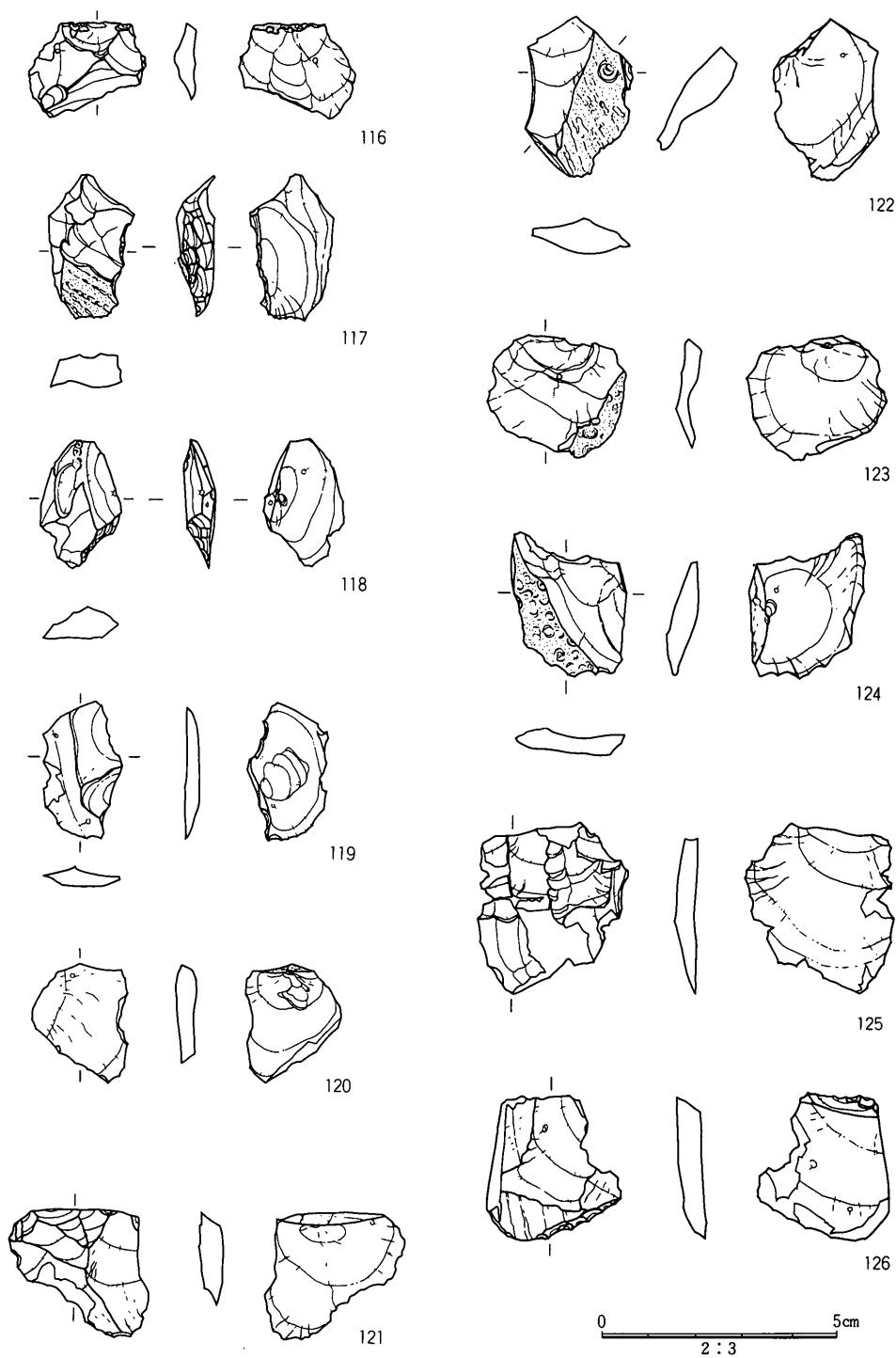


図26 調整剥片

の打面は翼状剥片を剥離したネガティブな面に当り、ナイフ形石器の背部を二次加工する際に生じた剥片と考えるばあいは翼状剥片の主剥離面側に当ると考えられる。なお後者としたばあい、素材となる翼状剥片はかなり大きなものを想定せねばならない。119は薄い横長の剥片で、背面には主剥離面と同方向の2枚の剥離面がある。120は同じく薄い剥片で、背面側はポジティブな面の末端部分に当ると思われる。121は打面調整剥片で、背面には主剥離面と同方向の剥離面が数枚認められる。122の主剥離面は、割れの途中で大きく歪んで、末端は背面側にまで及んでいる。123は薄い剥片で、背面は自然面と剥離面からなる。124の背面は、自然面と1枚の剥離面からなる。主剥離面の末端は背面側にまで回り込んでいる。また、主剥離面の打面となっている面は背面の剥離面を切っている。この面を横長あるいは翼状剥片を剥離した面とみれば、124は打面調整剥片の可能性もある。125の背面にはいずれも薄く剥いた剥離面がみられる。主剥離面の打点部分は折れで失うが、この剥片自体も薄く剥ぎ取ったものである。このことから125は槍形の石器を加工する際の調整剥

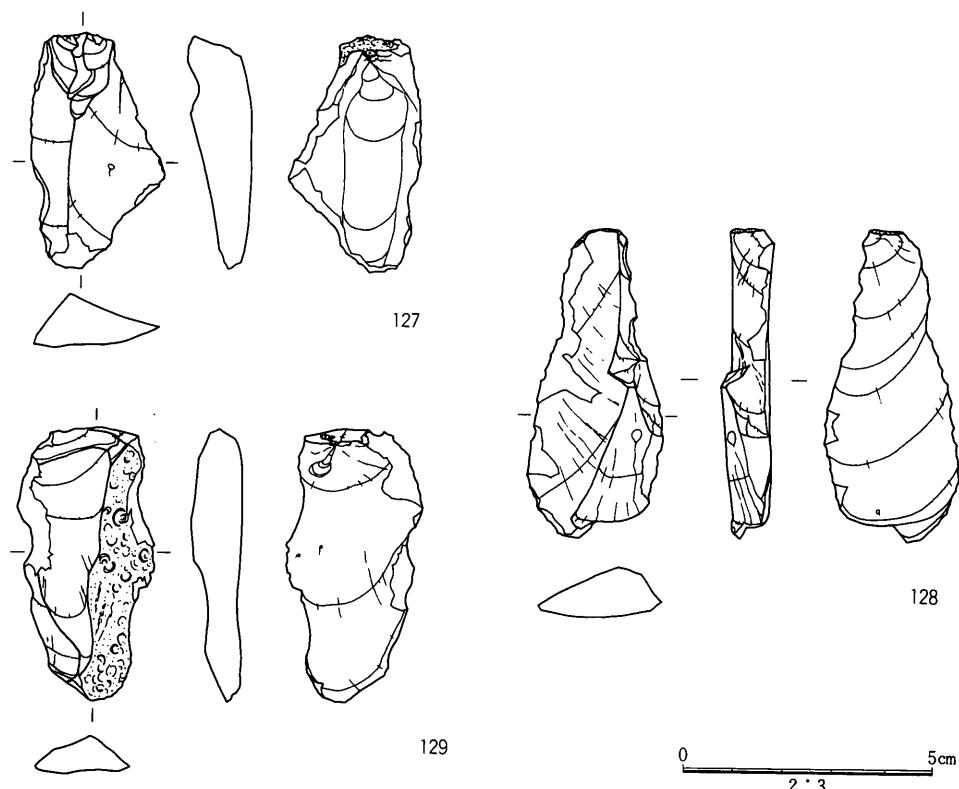


図27 縦長剥片

片の可能性がある。126は打面調整剥片と思われる。主剥離面の打面となる部分と背面とを二次的に加工しているが、その意図は不明である。

縦長剥片(図27、図版42)

127～129は縦長剥片である。127の背面には大きな2枚の縦長の剥離面と、これらの稜線部に向って打撃した細かな剥離面がある。主剥離面の打面は自然面である。本来は背面の2枚の剥離面の作る稜線を意識して薄く長い剥片を取ることを目的としていたと思われる。128の背面は横方向から割取られた大きな剥離面と、2枚の縦方向の剥離面からなる。主剥離面の打点部分からは、背面側に向って折れが進んでいる。背面の稜線部分を意識して剥離してはいるが、典型的な石刀ではない。129の背面は自然面と縦方向の2枚の剥離面からなり、これらの作る稜線部を意識してこの剥片を剥離している。

その他の剥片(図28～36、図版42～46)

130～152は、背面側の剥離面などでできた稜線部ないしは自然面を、打撃によって除去した剥片である。130は分厚く不定形な剥片で、背面には自然面を残す。131の背面は自然面と数枚の剥離面からなり、主剥離面の打点部分は折れている。磨滅が著しく剥離面の観察は困難だが、背面側の剥離面で構成する稜線部分を意識して剥離したと思われる。132の背面は数枚の剥離面からなる。主剥離面は自然面を打面としている。133の背面では自然面に向って数枚の剥片を剥離し、これらの剥離面と自然面の作る稜線部分を意識してこの剥片を剥離している。ただし、この素材の節理の方向と主剥離面の剥離の方向が若干ずれており、主剥離面の末端がヒンジフラクチャーとなっている。本来は板状の剥片を取ろうとしていた可能性がある。134の背面には、フィッシャーが顕著な面と、数枚の剥離面がみられる。主剥離面はこれらの打撃と同方向で剥離される。135～137は背面の自然面と剥離面が作る稜線部を除去する目的で剥離したものと思われる。なお、136の右図左上、137の左図右側と右図左側には細かい剥離面がみられるが、意図的な加工ではないと思われる。138の背面は自然面で、下図左の剥離面が主剥離面と思われる。この面は素材の中にある傷の部分から剥離が進んでいることから、折れ面と考えられる。また、主剥離面の右横の剥離面はネガティブな面で、大きな剥離面の末端に当ると思われる。このことから、138は石核の一部を打撃した際に折れた末端部分に当る可能性がある。139は背面がおもに自然面からなる分厚い剥片である。自然面を除去するための剥片といえるだろう。140の背面には2枚の剥離面がある。主剥離面は自然面を打面としているため、打点は不明瞭である。141は背面の自然面と剥離面のなす稜線部分を除去するためのものと思われる断面三角形の剥片で

ある。142は板状の剥片を作る作業で生じた剥片と考えられる。背面は主として広い剥離面の末端部分と横長の剥離面からなる。主剥離面の打点位置は背面の大きな剥離面とは逆で、自然面を打面としている。143の背面は板状の剥片の末端部に当る。主剥離面は自然面を打面とし、この素材の末端を取っているが、打面が不安定なためフィッシャーが大きく乱れている。144は横長の分厚い剥片で、打点付近には多くの打痕がある。背面は数枚の剥離面からなるが、これらはこの剥片の剥離以前に、薄い剥片を剥離したことや、打面を作ったことによる。板状の剥片を剥離することが本来の目的と思われるが、主剥離面の末端は大きく歪んで終っている。145の背面は自然面と剥離面からなる。主剥離面は自然面を打面としている。146は自然面の除去を目的とする剥片と思われる。背面は自然面で、主剥離面の打面は剥離面である。147の背面は自然面と激しいフィッシャーのみられる大きな面、横長

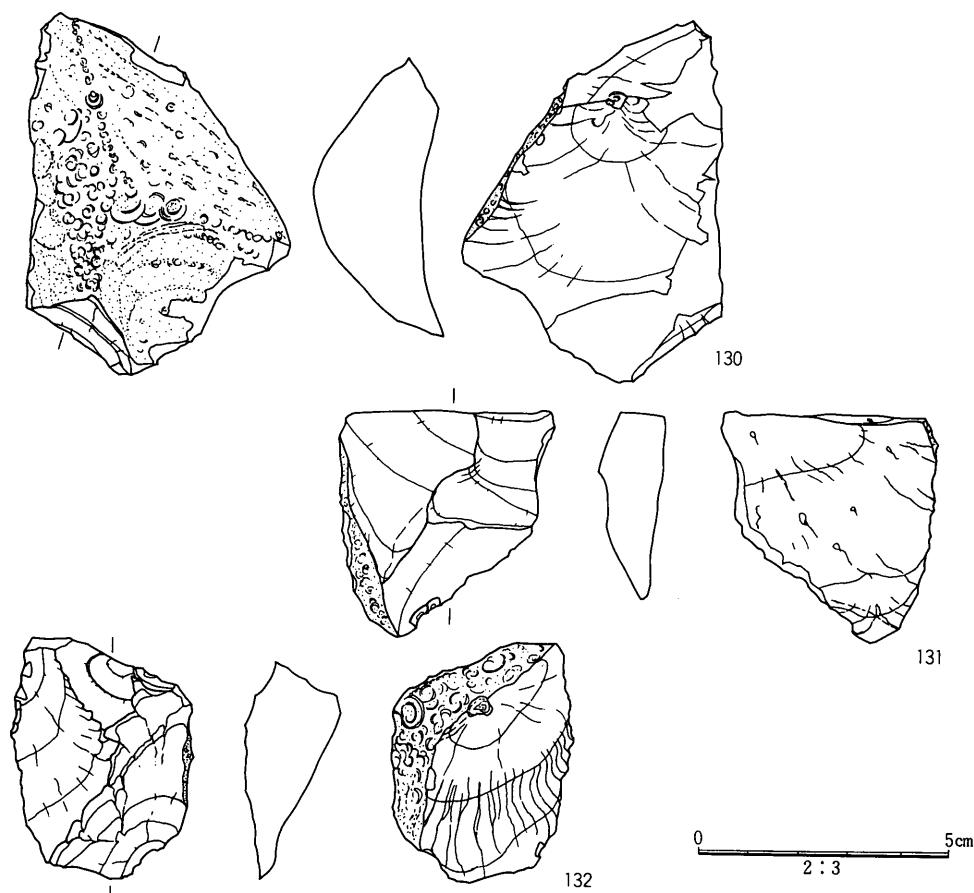


図28 その他の剥片 (1)

の剥離面からなる。これに対して、打面を作つて横長の分厚い剥片を剥離している。打面部分に二次的な加工がみられるが、意図は不明である。148は何回もの打撃によって素材に入込んだ傷から割れた面を打面として剥離した剥片である。149の背面は自然面と剥離面からなる。主剥離面の打点部分を折れで失う。150の主剥離面は自然面を打面としている。自然面の除去が目的であろう。151は背面の2枚の面で作られる稜線部分を除去するための剥片であろう。152の背面は自然面と剥離面からなる。主剥離面の打面は剥離面である。

153～171は無理な力が加わった結果生じた剥片である。153の背面はバルバースカーの発達したポジティブな剥離面と、その後に剥離した横長の剥離面および自然面からなる。主剥離面は打点部分から二つに分れ、末端はヒンジフラクチャーとなり大きく歪んでいる。不定形な剥片で剥離の意図は不明である。154は同じく不定形な剥片で、主剥離面のバルバースカーが大きく発達している。背面右側の横長の剥離面は主剥離面の形成と同時に生じた折れ面である。本来、主剥離面の打点位置および打面は右図の左上付近にあったが、打面が不安定なため、背面の一部と打点部分が同時に折れたと考えられる。なお、主剥離面左上の細かい剥離は、主剥離面剥離の際に折れた部分との摩擦によって生じた可能性がある。155の背面は複数の剥離面からなる。主剥離面は打点付近で折れている。背面でもっとも新しい面は中央の大きな剥離面で、右図右端の縦長の面を打面としている。左図右側の細長い面または左図下端の面を底面として背面側中央の面と主剥離面をそれぞれ剥離したと考えることもできるが、そのばあい、主剥離面と背面の剥離面との打点位置が90°異なるため、典型的な瀬戸内技法による剥片とはいがたい。156は主剥離面の打点部分が折れた剥片である。背面にはこの剥片の剥離後施したと考えられる剥離面があるが、意図したものとは考えがたい。157の主剥離面の打点部分は折れによって失う。この折れは同時に背面側にも及んでおり、垂直方向の力によって生じたものである。また、左図下端の剥離は主剥離面の形成後のもので、これも同じく垂直割れによると考えられる。これらのことから、左図下端を打縁とし、クサビとして使用した可能性もあるが断定できない。158は表面の風化が著しく、性格は不明である。背面でもっとも広い面は自然面の可能性がある。159の背面は自然面と剥離面からなる。主剥離面の末端はヒンジフラクチャーとなり、背面側にまで及んでいる。大きな剥片を剥離する際、主剥離面の形成と同時にじけ飛んだバルバースカーの部分に当る可能性がある。160～163は剥離の際に打点部分で二つに折れた剥片である。160は厚さ1cm前後の板状の剥片を剥離しようとしたと思われる。161は横長の剥片である。右図先端付近の右・左上方の剥離面は主剥離面形成後に加えたものである

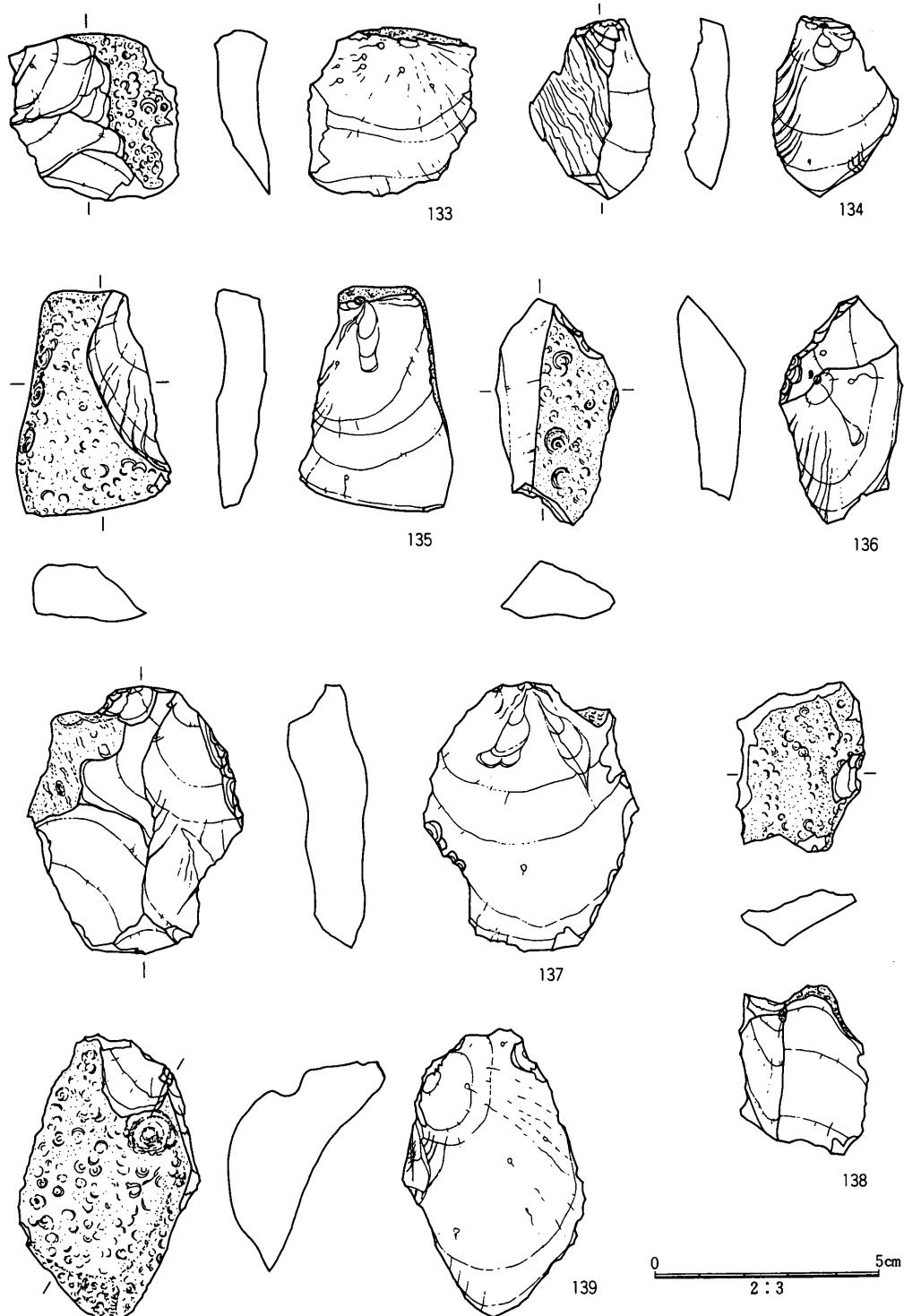


図29 その他の剥片 (2)

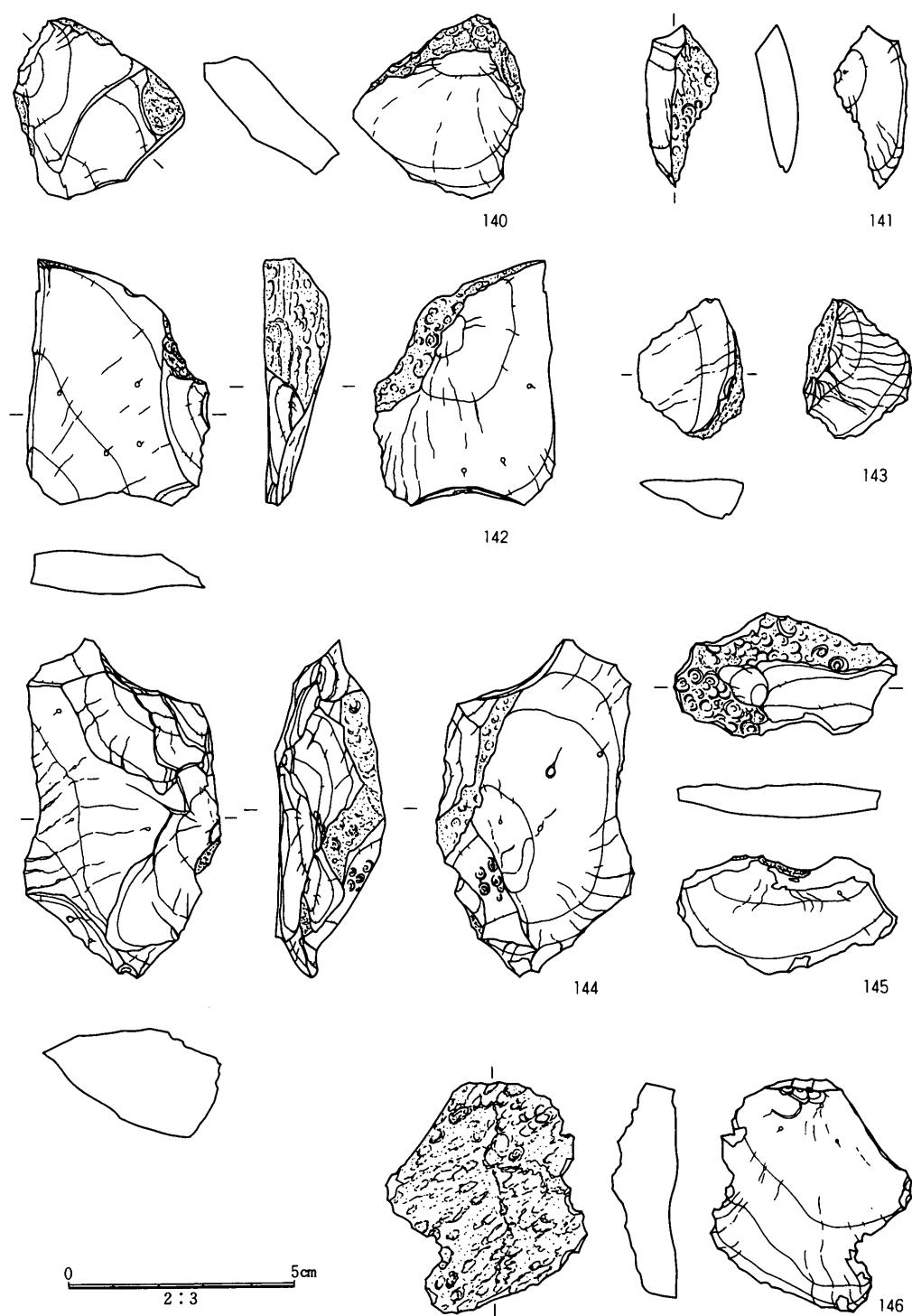


図30 その他の剥片 (3)

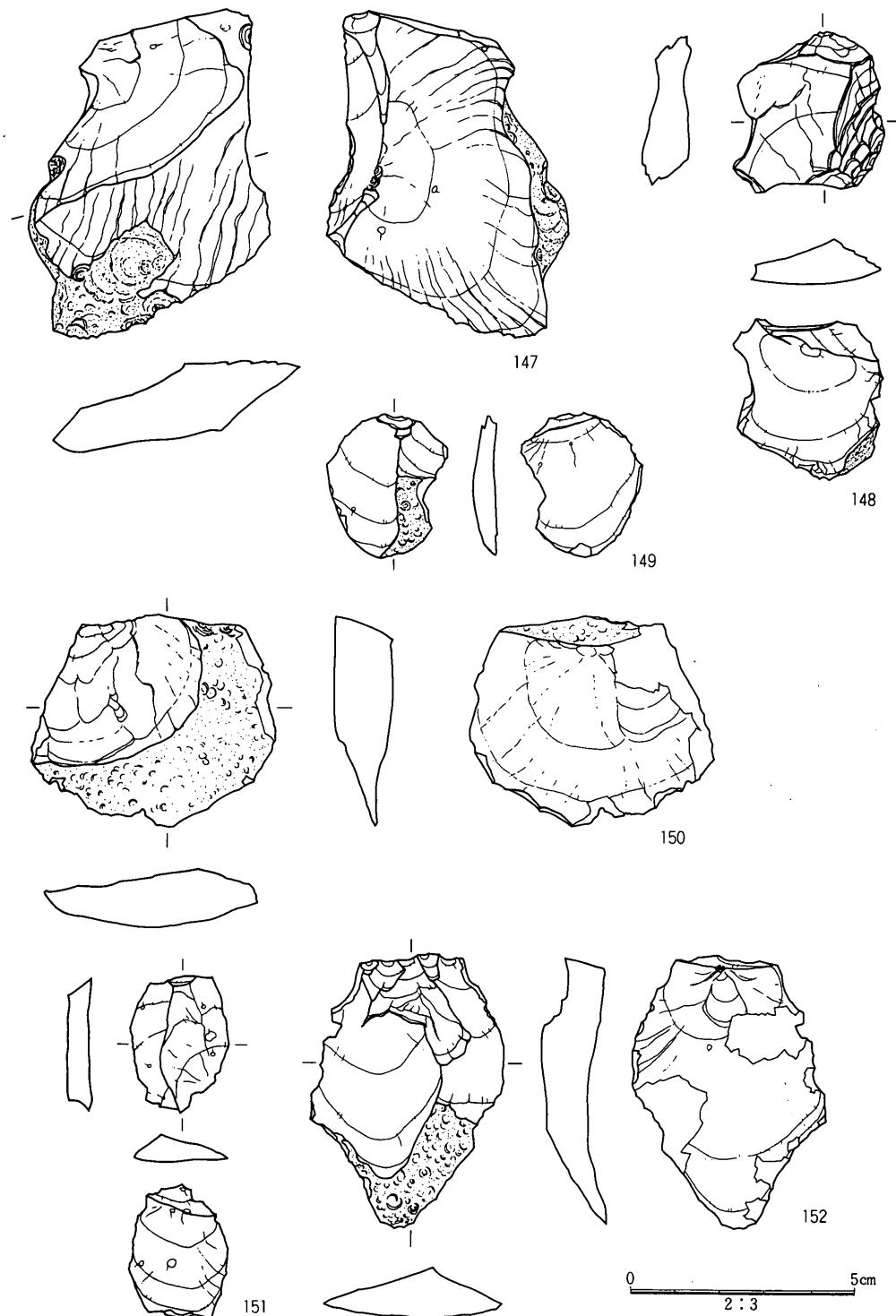


図31 その他の剥片 (4)

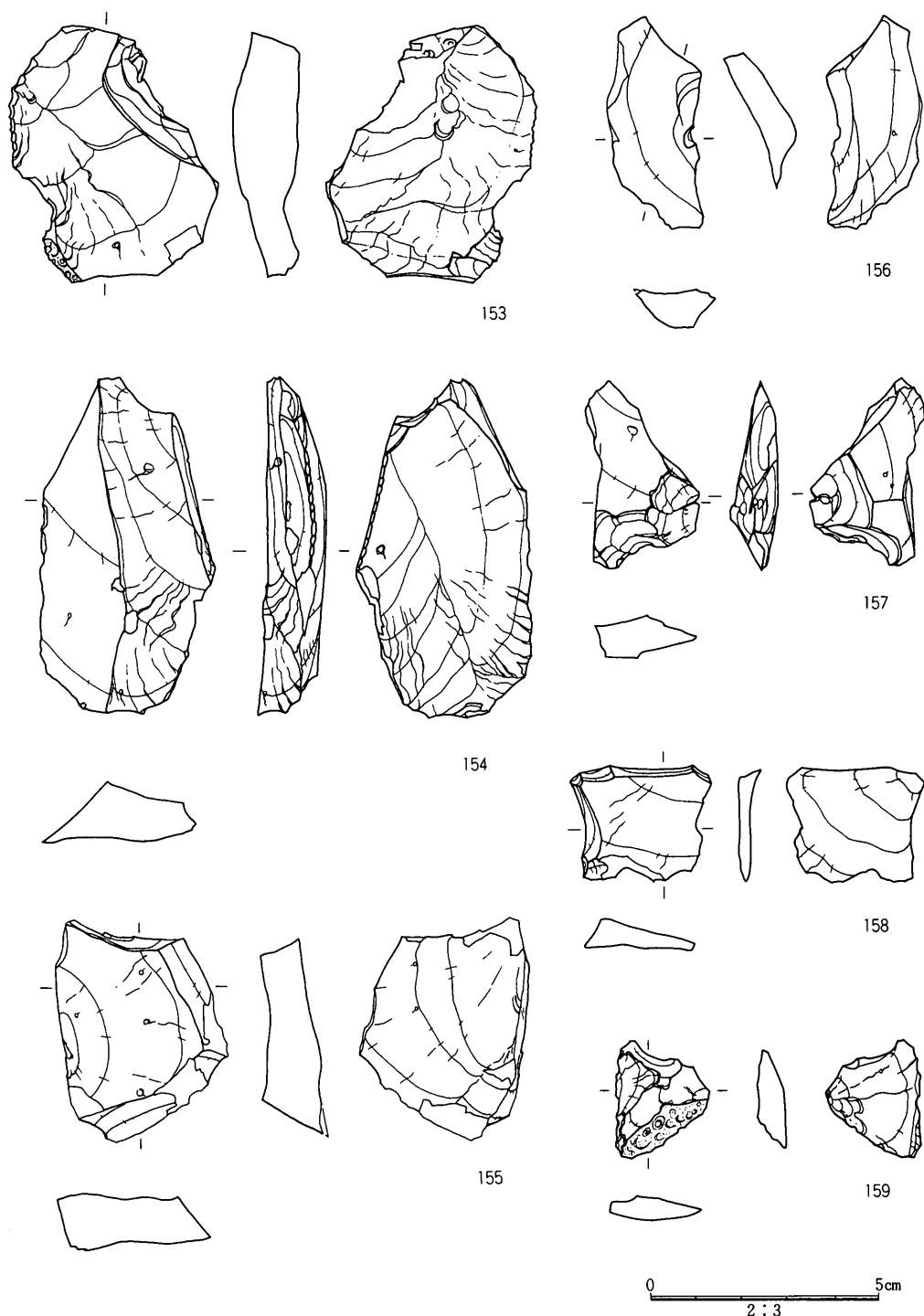


図32 その他の剥片 (5)

が、加工意図は不明である。162は主剥離面の形成と同時に背面側から折れが進んでいる。163は自然面を打面とする薄い板状の剥片である。背面は大きな剥離面の末端である。164の背面は自然面で、折れは主剥離面形成後の可能性がある。165は背面にある素材の中の傷が原因で折れたものと思われる。166の背面は平らな面で主剥離面の形成と同時に背面側にも剥離が進んでいる。打点に対する打面が不安定であるため、垂直に近い割れが起った結果、生じた剥片である。167は自然面を背面にもつ素材に対して打面を作ったのちに剥離した分厚い剥片である。この剥片の主剥離面側から一度打撃して生じたのが、右図にみられる末端で大きな段をなす面である。この面の形成と同時に右図右上にみられる剥離とは逆方向からの割れが進んでおり、右図の剥離にはかなり大きな力が加わっていると考えられる。ただし、この剥離は意図的なものではない可能性が高く、167を石核と考えることはできない。168の背面は自然面と複数の剥離面からなる。左図左上にある図の上方からの剥離面は、背面のすべての剥離面を切っており、主剥離面の形成と同時に生じたと考えられる。また、主剥離面側である右図上方には、主剥離面形成前に平行的に剥離された面が2枚残る。これらのうち左側の横長の剥離面は、剥離の際、完全に割れずに素材の中に傷となって入込んでいたと考えられる。このため、主剥離面を剥離した際、打点と打面がこの傷の部分で同時に剥落してしまったのであろう。本来は背面の自然面を稜線とした板状の剥片を剥離することが目的であった可能性がある。169の背面中央の右方からの剥離面は、垂直割れによって生じた面である。169はこれを打面として剥離されており、主剥離面も打面に対して垂直方向に割れが始まっている可能性が高い。170の背面は自然面と複数の剥離面からなる。なお、右端の面は主剥離面の形成と同時に起った折れ面である。これより内側の面も主剥離面・折れ面と打点位置が似ており、右端の面と同時に生じた可能性がある。171は垂直割れに近い状況によって生じた剥片で、主剥離面の形成と同時に起った背面側にまで及ぶ折れのため、打点部分を失う。背面は広く平らな面である。

172～181は、主剥離面の剥離後、一部に加工を施した剥片である。172の背面は大きく分けて上図中央の大きな剥離面と右上の剥離面の2面からなり、中央の剥離面が右上の剥離面を切っている。主剥離面右側の剥離面は、素材を構成していたと思われる平らな剥離面である。この面と背面の2面、さらに打面との角度をみると、もとの素材は172とほとんど変わらない厚みのものと考えられる。このことから、意図したものであるかは不明だが、薄く特殊な石核からこの剥片を剥離したことを指摘しうる。なお、上図下方には主剥離面側から二次的な加工を加えているが、その意図は不明である。173の背面には大きく平らな

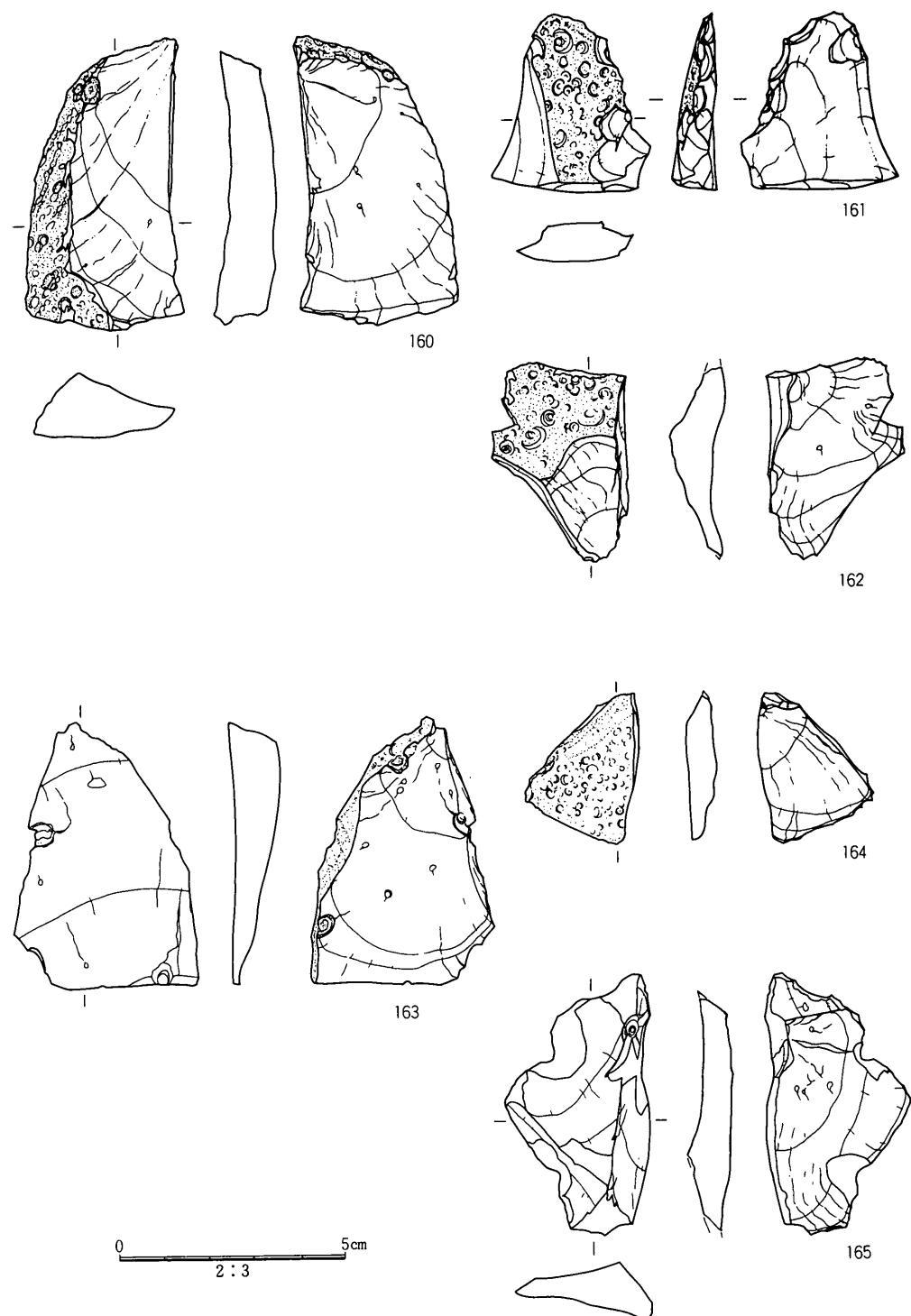


図33 その他の剥片 (6)

面と、これに向って左右から剥離した2枚の剥離面がみられる。主剥離面の打点位置はこれらの剥離で作られた稜線上にある。両端は折れているため、主剥離面の広がりは明らかではないが、本来は横長であろう。打点付近には背面側からの二次的な加工がみられ、主剥離面と背面のなす縁辺にも両面からの加工がみられることから、なんらかの道具として用いた可能性がある。174・175は、背面側に二次的に加工した可能性のある面をもつが周囲が新しく欠けているため剥離面の切合の検討ができない。176の右図はこの剥片の主剥離面に当る、安定した大きな面である。左図右側および左下の剥離面はこの主剥離面を切っている。ただし、その加工意図は不明である。また左側の剥離面と主剥離面の関係は折れのために判断できない。このため176を石核とすることはできない。177の左図はおもに2面、右図は3面からなる。右図の下半を占める剥離面をポジティブな面とすると、この面が剥片の主剥離面で、右図左上に細長く残る面は主剥離面の形成に伴う折れ面と考えられる。これをネガティブな面と考えることも可能だが、そうしたばあい、新しい欠けがあるため剥離の過程を判断できる要素がない。178～181は主として主剥離面側に二次的な加工がみられる。178は調整剥片の主剥離面の末端を細かく加工している。179は背面の一部と主剥離面の縁辺に加工を施している。180は自然面を薄く剥いだ剥片である。打面が不安定なため主剥離面の末端は大きくうねり、この部分に連続した加工が認められる。181の背面は広く平らな面が多くを占め、主剥離面の打点部分は折れている。主剥離面の左側辺には細かい加工がみられる。182の右図は側辺と基辺に加えた浅い幅広の剥離だけで整形し、中央に素材の面を残す。左図は3回の大きな剥離と粗い細部調整で形作っている。剥片の周囲には二次的な加工を施すが、全体に磨滅が著しく、整形の意図は不明である。下半を古い折れで失う。側面観は大きく屈曲している。183は左展開図にある折れ面が最新の面で、剥片の縁辺を加工する際に生じたものと思われる。素材の形状や加工意図は不明である。184の背面は自然面とさまざまな方向からの剥離面からなる。左図左の自然面を切る剥離面は、右上展開図の右下の細長い剥離面を打面としており、背面の中ではもっとも新しい面である。ただし、この剥離が主剥離面の形成後のものであるかは判断できない。主剥離面の打点は後で加えた剥離によって取られているが、これら一連の剥離の意図は不明である。

185・186は性格不明の剥片である。186の主剥離面は打面が不安定なためねじれている。

このほかに図示しなかったものとしては、剥片9点、サヌカイト原礫1点、熱を受けた痕跡のあるサヌカイト片2点がある。

本調査地の出土資料で特筆すべきことは翼状剥片とナイフ形石器の接合資料の存在である

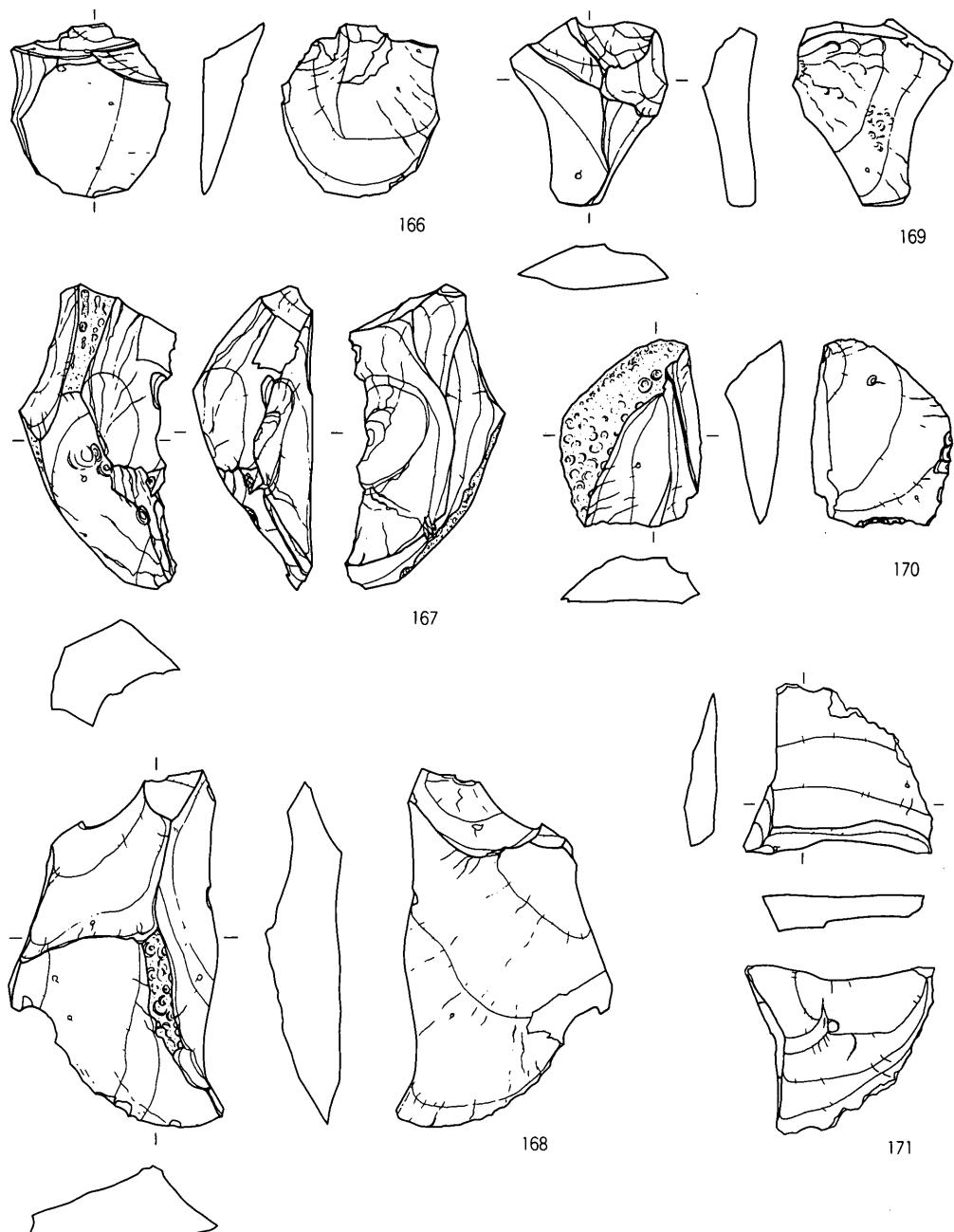


図34 その他の剥片 (7)

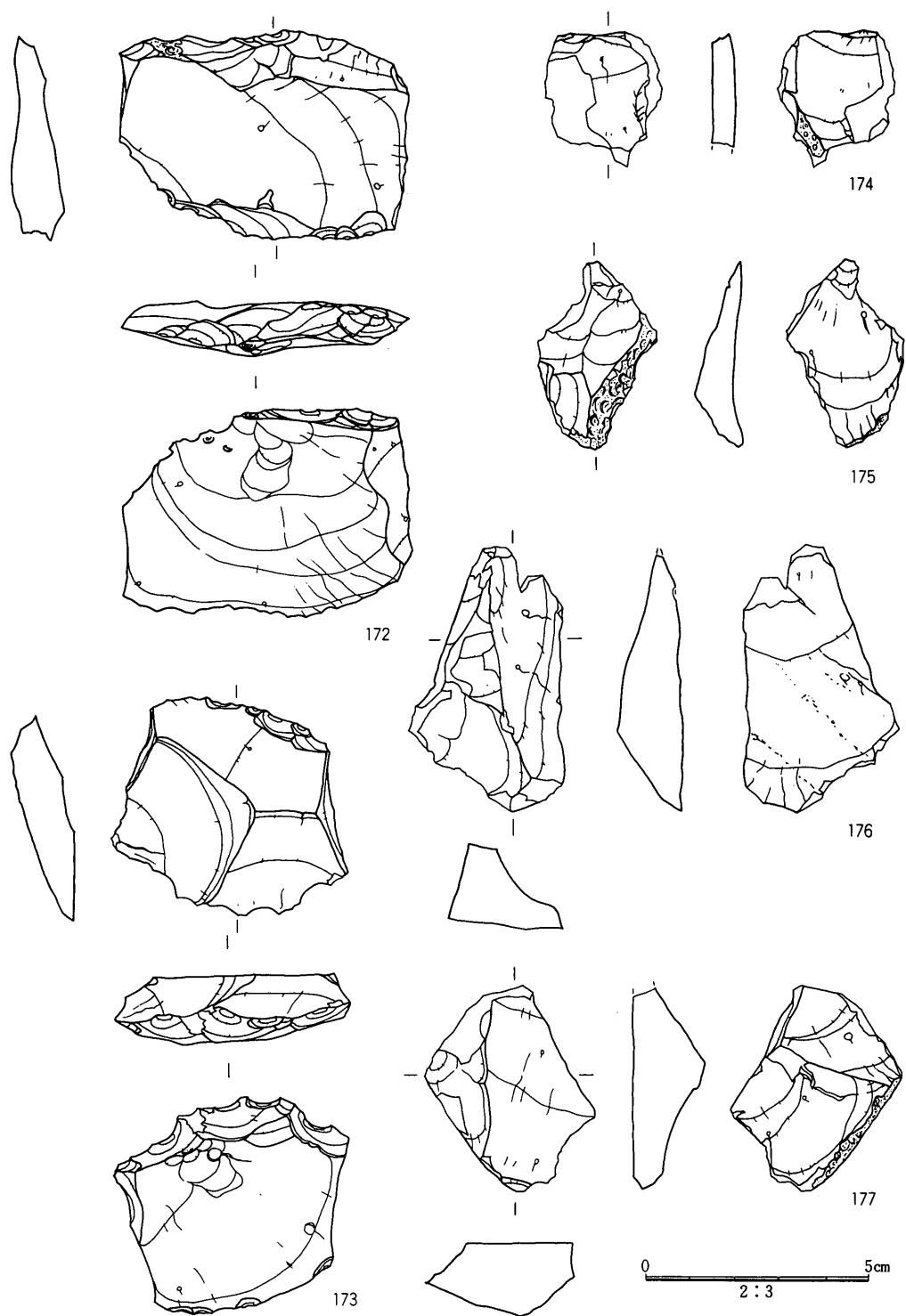


図35 その他の剥片 (8)

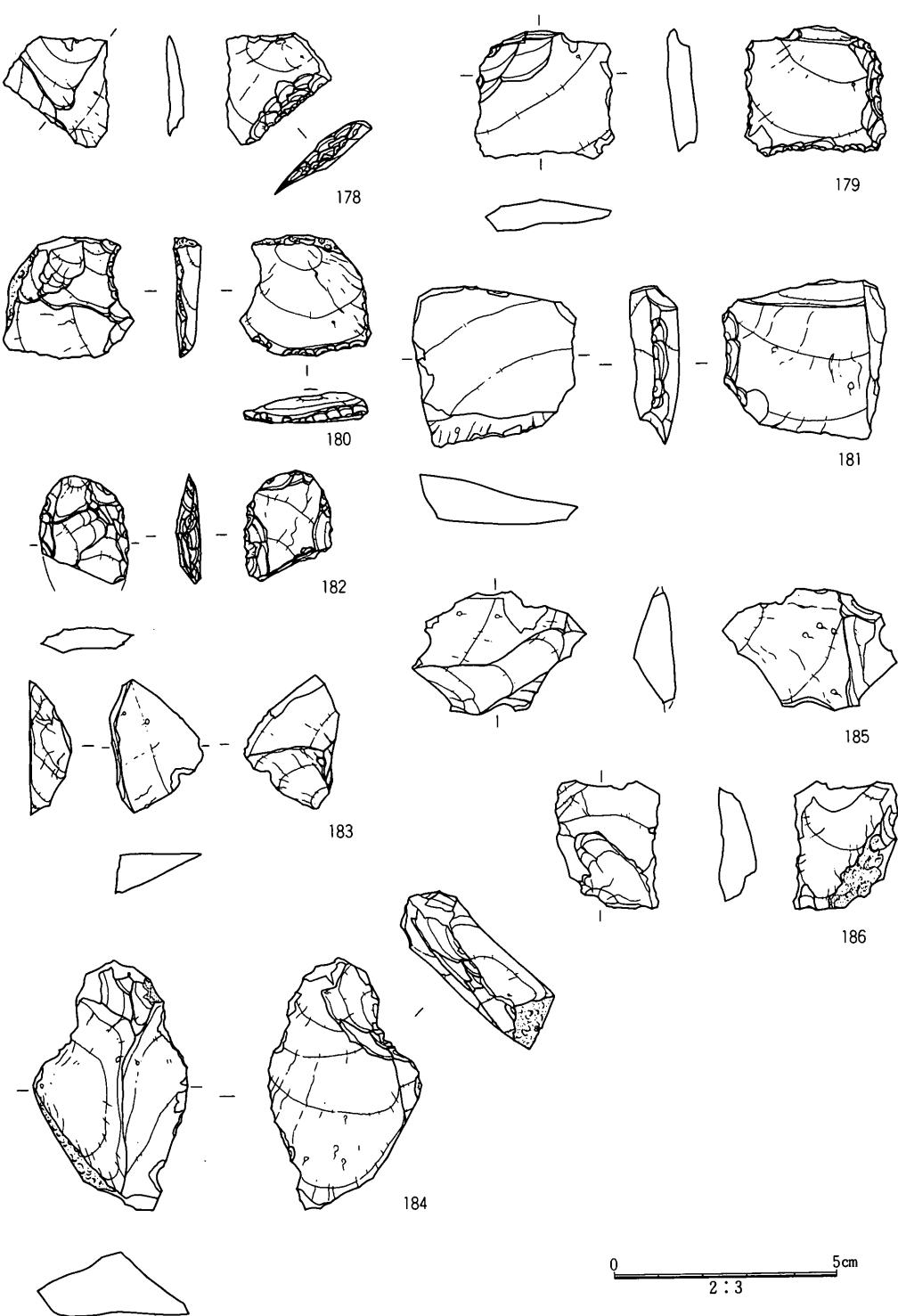


図36 その他の剥片 (9)

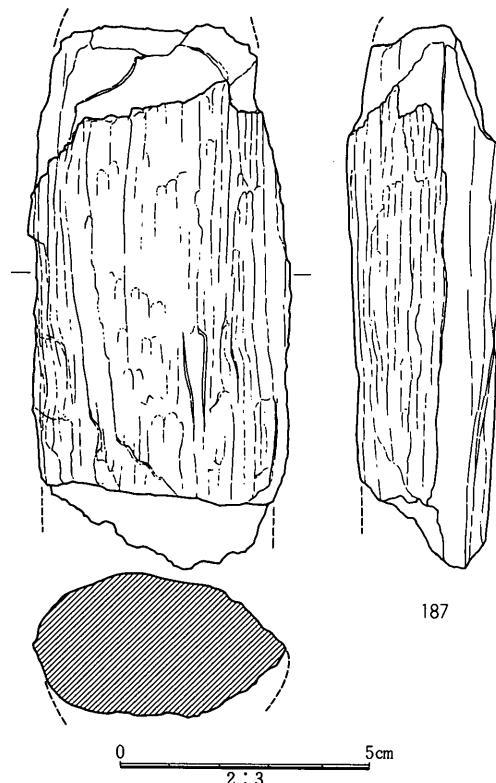


図37 石棒実測図

ろう。両者は約20~50m離れた、古墳時代の遺構と包含層からそれぞれ出土しており、原位置からはかなり動かされたと考えられる。しかし、このほかにも同一母岩と考えられる剥片や、典型的な瀬戸内技法による石核・翼状剥片が存在することから、この時期に調査地付近で石器製作を行っていた可能性はきわめて高い。そこで遺物の分布についてみると、旧石器~弥生時代の遺物のほとんどが調査地南西部の「馬池谷」に向う斜面に集中しており、北部や東部には分布しないことから、本来東側の平坦面にあったものが動かされた可能性も考えられよう。

従来、長原遺跡東南地区(長吉川辺3丁目一帯)には典型的な瀬戸内技法は存在しないとされていたが、遺跡の北西部では[大阪市文化財協会1992a、p.59]で指摘された瀬戸内技法の存在が裏付けられた。長原遺跡の石器製作集団と瀬戸内技法との係わりは、今後の調査資料の増加を待って検討すべき課題である。

(田島)

石棒(図37)

187はIX区南端部のSD52から出土した。上端および下端を欠き、背面が節理構造に沿って割れている。敲打によって整形したと思われるが、単位は不明瞭である。平面図の向って左下に、研磨によって浅く凹んだ部分がある。残存長が10.7cm、同幅が5.1cmである。石材は結晶片岩である。

これ以外に安山岩製の石棒の可能性のある破片がSD51から出土した。円柱状に加工したと思われる曲面をもつが、細片であるため、それと断定することはできなかった。

(櫻井)

3) 古墳時代の遺構

i) 掘立柱建物

SB03(図38、図版1)

IV区の東端に位置する2間以上(2.6m以上)、1間以上(1.65m以上)の建物である。南東側の柱間は短く1.2~1.3mである。柱穴は長辺が0.5mの長方形を呈するもので、直径12cmほどの柱痕跡が認められた。南東側柱から1.35~1.20m離れて二つの柱穴があり、これらも建物に関連するものかもしれない。また、建物の北東側に建物と平行して溝状遺構SD09があり、これも関連する可能性がある。建物の方位はN42°Wである。

SB05(図39、図版2)

IV区西端に位置する桁行2間(4.10m)、梁行2間(3.65m)の建物で、内部の棟通りに2個の柱穴が並ぶ。柱間は桁行が2.05m、梁行が1.8~1.9m、棟通りが1.35m、1.20mである。側柱の柱穴は深さが0.55mであるのに対して、内部の柱穴は0.2m

と浅く、長い通し柱を支持するものではないと思われる。したがって、内部の2柱穴は床束のものであろう。側柱の柱痕跡は直径約15cmである。建物方位はN29°Eである。

この建物の西側には1.2m離れてNG83-53次調査のSB31[大阪市文化財協会1992a、pp.64-65]があり、北妻の柱筋を揃えて

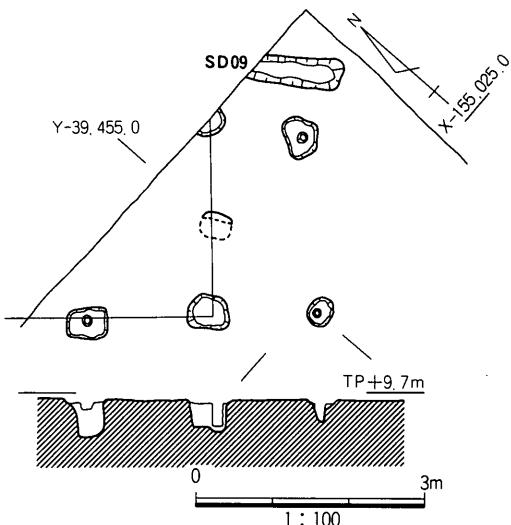


図38 SB03実測図(IV区)

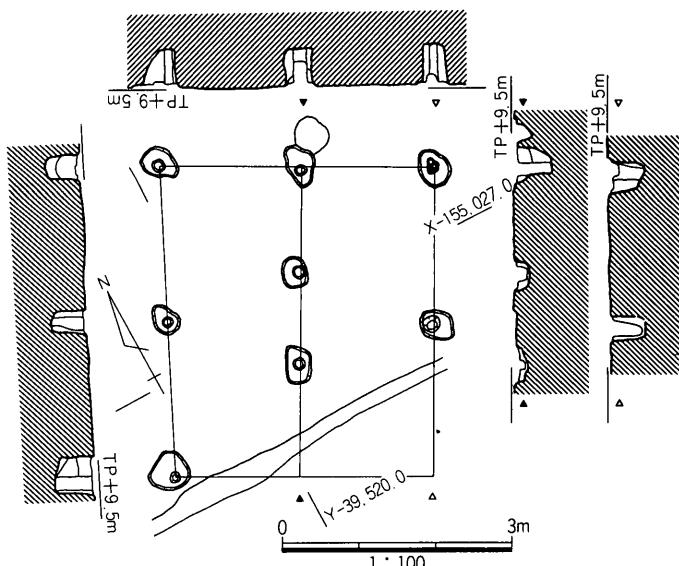


図39 SB05実測図(IV区)

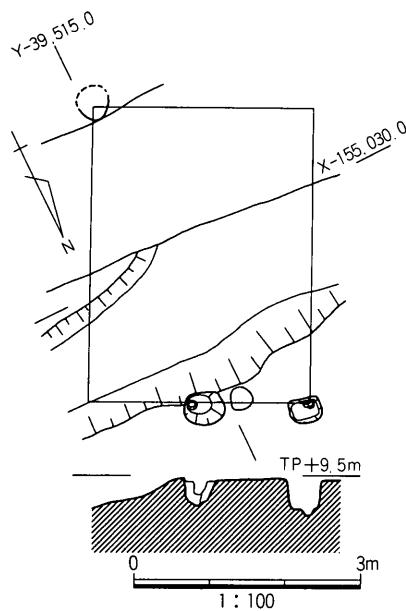


図40 SB06実測図 (IV区)

いる。SB31の棟方位はN30°10' Eで、SB05とほぼ等しい。

SB06(図40、図版2)

SB05の東に1.1m離れて平行して位置する建物である。北妻になると思われる2個の柱穴を検出したが、これはSB05の北妻から0.9m南に位置している。柱間は1.55mである。柱穴は長辺が0.4~0.5mの長方形に近い平面形で、深さは0.35~0.45mである。調査範囲外である南側の用水路の壁面で、この建物を構成すると思われる柱穴が確認できたため、3間×2間の建物であると推定できる。建物の方位はN27° Eである。

SB07(図41、図版1)

V区に位置する4個の柱穴から構成される建物である。北西および南東辺の柱間は1.90~1.95mで、他の二辺は2.2mである。長辺0.4mの長方形を呈する柱穴1個のほかは、直径0.3m以下の小さな円形の柱穴であった。建物の方位はN35°30' Wである。

この建物は次に記述するSB08とともに、4個の主柱からなる方形の竪穴住居の床面が削

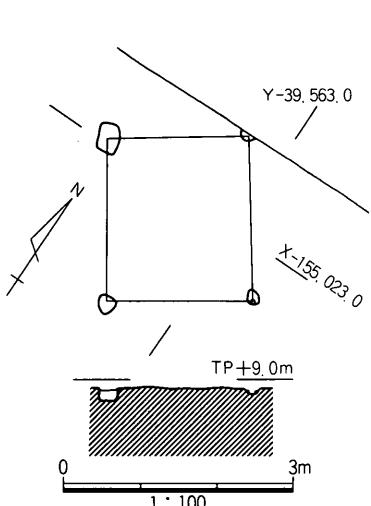


図41 SB07実測図 (V区)

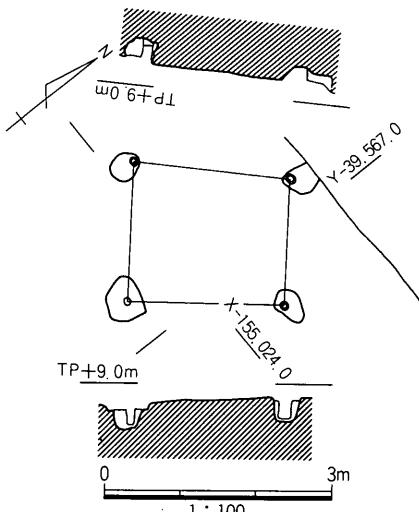


図42 SB08実測図 (V区)

平された遺構の可能性がある。

SB08(図42、図版1)

V区のSB07の西に位置する4個の柱穴で構成される建物である。南西および北東辺の柱間は1.7~1.9m、その他の辺は2.1mである。柱穴は直径0.4m前後の不整形の掘形で、直径10cm前後の柱痕跡が確認できた。

建物方位はN 40° 30' Eである。

SB09(図43、図版1)

V区に位置し、建物の南側柱列の2間分(3.10m)を検出した。柱間寸法は1.4~1.7m、柱穴は直径0.3~0.4mの円形または楕円形を呈し、深さは0.35~0.50mである。柱列の方位はE 20° Nである。

SB13(図44)

VI区北部に位置する東西1間以上(1.80m)、南北2間(3.20m)の建物である。東側柱列と北側柱列の一部が発掘された。柱穴は長辺0.5m、短辺0.4mの長方形で、深さは0.1mほどしかなく、かなり削平されていると思われる。直径が12~15cmの柱痕跡が認められた。東側柱列の示す方位はN 17° Eである。

SB14(図45、図版3)

VI区北部のSD22の南側に位置する。桁行4間以上(7.20m)、梁行3間(5.25m)で、棟通りの東妻から1間目と3間に柱穴が検出された。柱間は桁行・梁行ともに1.8mの等間である。棟通りにある2個の柱穴の柱間は3.5mである。

側柱の柱穴は一辺の長さが0.3~0.5mの方形を呈するものが多く、直径0.3~0.4mの円形を呈するものもある。深さは0.25mのやや浅いものもあるが、0.40~0.45mのものが多い。一方、棟通りにある2個の柱穴は一辺が0.55mの方形で、深さも0.55mあり、側柱に比べて規模が大きい点に特徴がある。したがって、棟通りの2本の柱は、柱穴の規模からみて床束ではなく、棟持柱であると考えられる。確認できた側柱の柱痕跡はいずれも直径9~12cmである。建物の方位はE 11° 30' Sを示す。

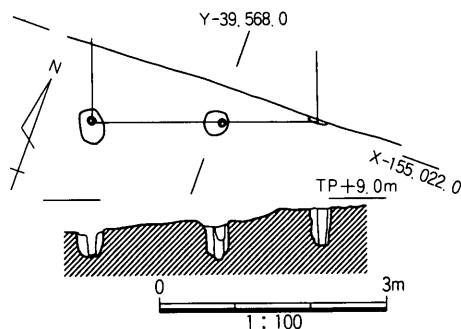


図43 SB09実測図 (V区)

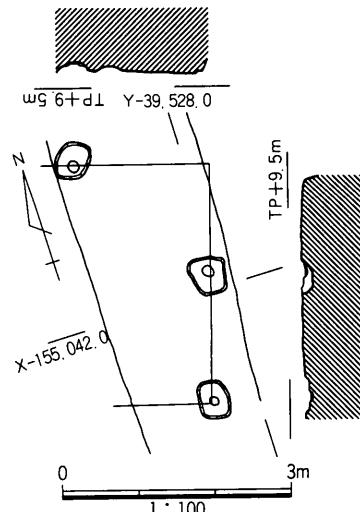


図44 SB13実測図 (VI区)

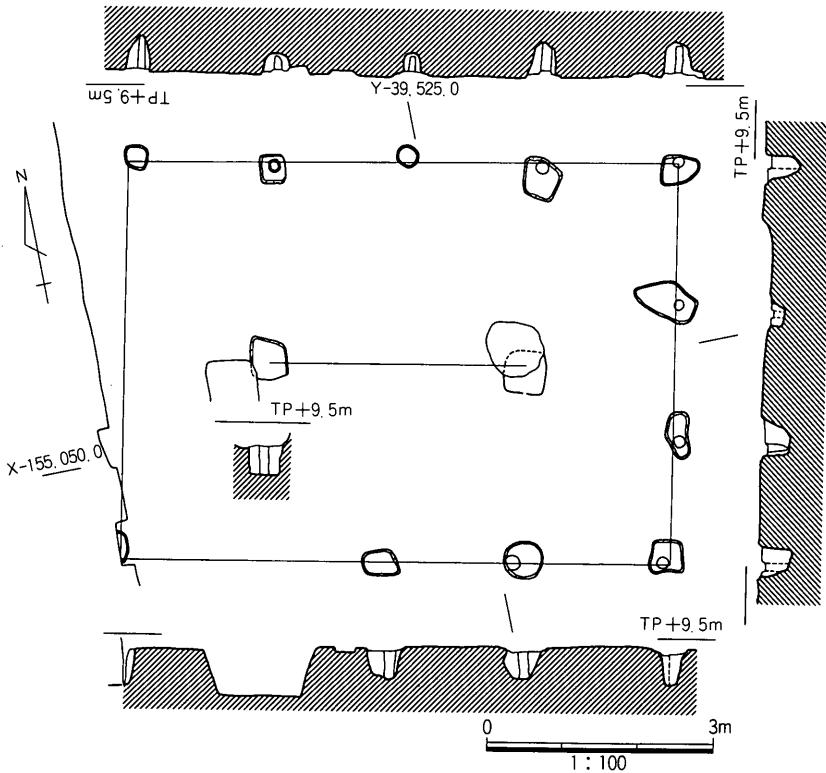


図45 SB14実測図 (VI区)

SB15(図46、図版3)

VI区のSB14と重複する東西2間(3.65m)、南北2間(3.35m)の建物で、内部にも柱穴がある。柱間は東西が約1.8m、南北が1.7mである。側柱の柱穴は一辺の長さが0.65~0.75mの方形が多く、やや丸みをもったものもある。深さは0.4~0.7mである。建物内部の柱穴は直径約0.4mの不整橿円形をなし、深さは0.25mと浅いもので、床束の痕跡であろう。柱痕跡は直径15cmである。建物の方位はN4° Eを示す。

SB16(図47、図版3)

VI区のSB15の2m南に位置し、SB15と同じく南北2間(3.20m)で、東西も2間(1.85m以上)と推定される建物である。側柱の柱穴はSB15よりやや小さく、一辺長が0.5mで深さは0.4~0.6mである。建物内部の柱穴は床束のものと思われ、やや小ぶりで、深さは0.35mである。直径15cmの柱痕跡が認められた。建物の方位はSB15とほぼ等しいN5° Eである。

SB17(図48、図版3)

VI区中央部のSB16の南1.9mに位置する南北3間(5.20m)、東西3間(4.70m)の建物で柱間

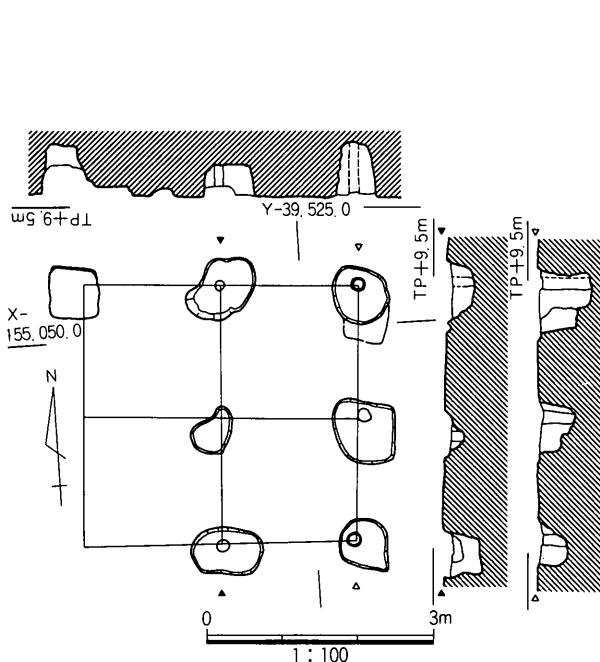


図46 SB15実測図（VI区）

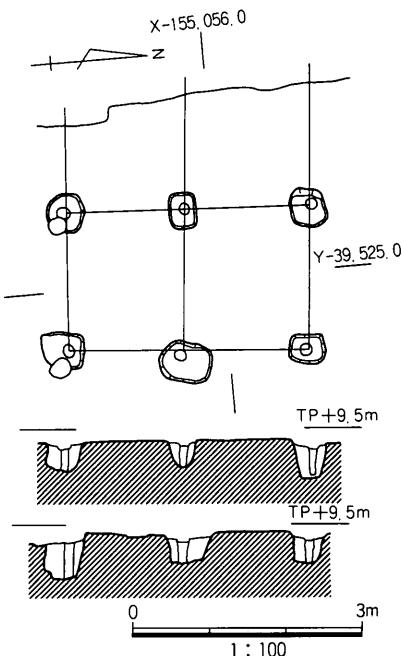


図47 SB16実測図（VI区）

は南北が1.75m、東西が1.55mである。建物内部の北側柱列から1間南で西側柱列から1間東の位置に、床束のものと思われる柱穴があり、他にも削平された床束の痕跡があった可能性がある。柱穴は一辺が0.4~0.5mの方形に近いものが多く、また、柱穴が重なっているものがあり、柱穴を掘直した可能性がある。深さは0.2~0.5mで、ばらつきがある。直径12cmほどの柱痕跡が確認できた。建物の方位はN7°Eである。

SB18(図49、図版4・5)

VI区南部で、SB17とはSD26を

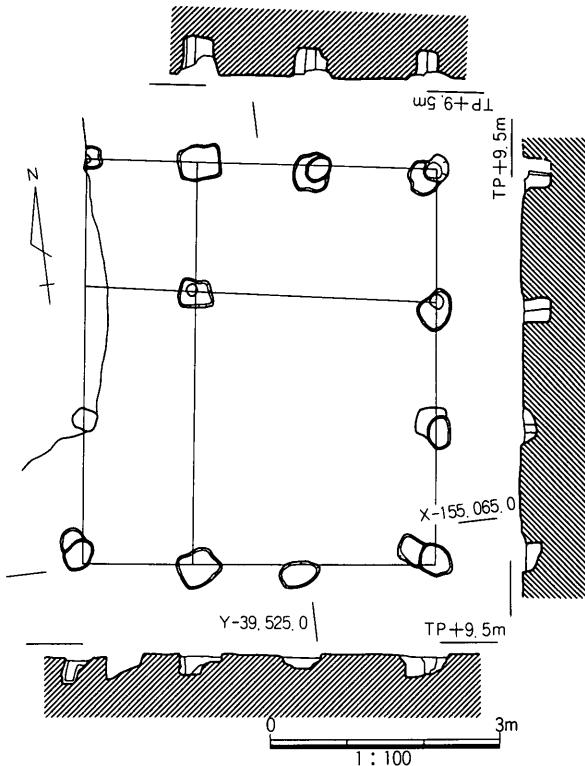


図48 SB17実測図（VI区）

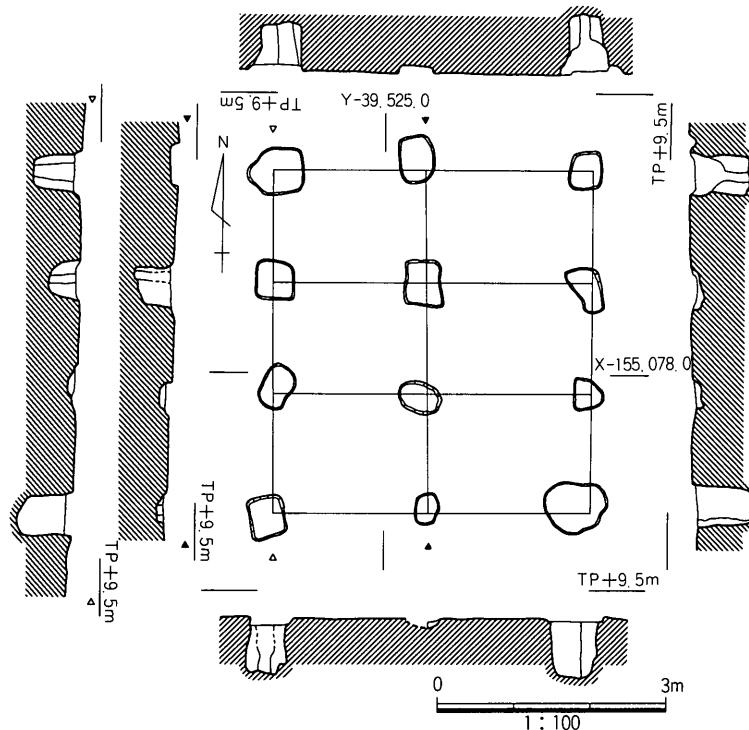


図49 SB18実測図（VI区）

挟んで南側に位置する。桁行3間（4.5m）、梁行2間（4.2m）の建物である。建物内部の棟通りに2個の柱穴がある。桁行の柱間は1.4~1.6m、梁行は2.1mである。柱穴は一辺が0.4~0.7mの方形を呈するものが多く、深さは四隅の柱穴が0.65~0.8mと深く、他の側柱と建物内部の柱穴は

0.2m前後で浅いが、建物内部の北側柱穴と西側柱の北から二つ目の柱穴は0.45mとやや深い。柱痕跡はいずれも不明瞭で、断面で下半部が確認できたものがある。その直径は12~15cmである。建物方位はほぼ正方位である。

SB19(図50、図版4・5)

VI区南端で検出された桁行3間（4.90m）、梁行2間（3.10m）の建物である。SB18の南側に位置する。柱間は桁行・梁行とも約1.6mである。柱穴は一辺が0.5mの方形を基調とするもので、深さは0.3~0.4mである。柱痕跡は直径15cmほどである。建物の方

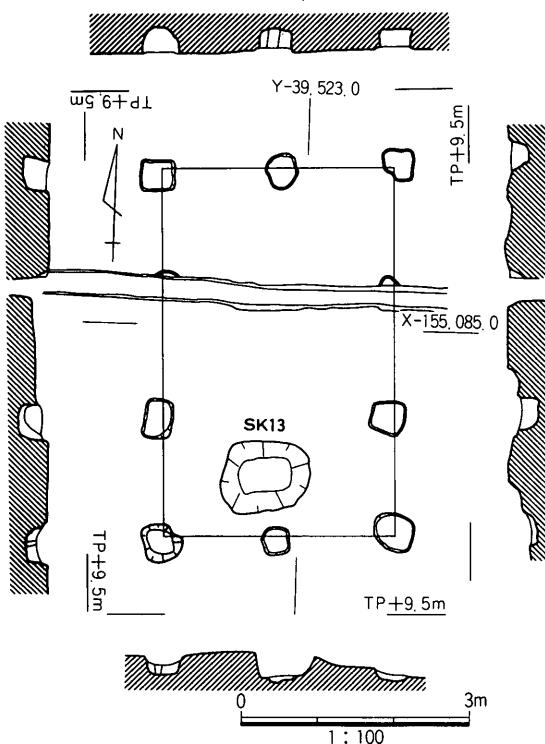


図50 SB19実測図（VI区）

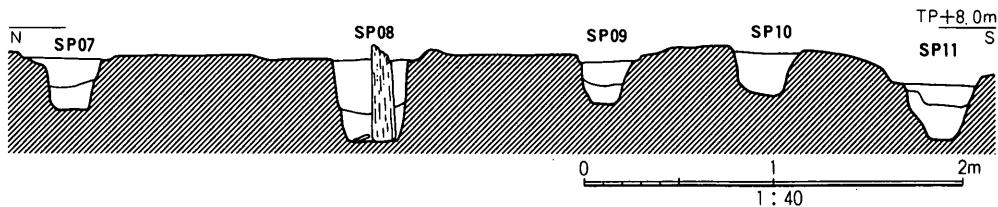


図51 IX区柱列実測図

位はN1°Wである。

IX区南端柱列(図51、図版9)

IX区の南端で、SD51の西側に沿って南北に4間分(4.6m)並ぶSP07~11の柱穴である。これらは直径0.5m、深さ0.30~0.45mで、0.8~1.5mの間隔で並ぶ。このうちの北から2個目の柱穴SP08には直径約12cmの柱根が残っていた。また、その南のSP09からは滑石製の臼玉が2個出土した。この柱列の西側には柱穴はなく、東側にこれと一連の柱穴が存在し、建物となる可能性があるが、SD51と関連するものとすれば、柵と考えるべきかもしれない。方位はN10°Eである。

ii) 壴穴住居

SB04(図52)

IV区東端で住居の北部を検出した。幅0.15~0.50mの浅い周壁溝が検出され、一辺が4.8mの方形を呈することがわかる。主柱穴は推定される4個のうち北側の2個が検出され、その柱間は2.35mである。柱穴は一辺0.5mの方形または長方形を呈するもので、直径15cmの柱痕跡が認められた。住居の方位はE5°Nである。

SB10(図53、図版4)

VI区北部に位置する3棟が重なっている方形の竪穴住居のうち、もっとも古い時期のものである。幅0.3mの周壁溝と2個の主柱穴が検出された。調査範囲内では、床面のコーナー部分は1個所しか検出できず、平面規模は不明であるが、主柱穴の柱間が2.1mであることから、一辺は約4.5mと推定される。主柱穴は長軸が0.4mの橢円形を呈するもので、深さは

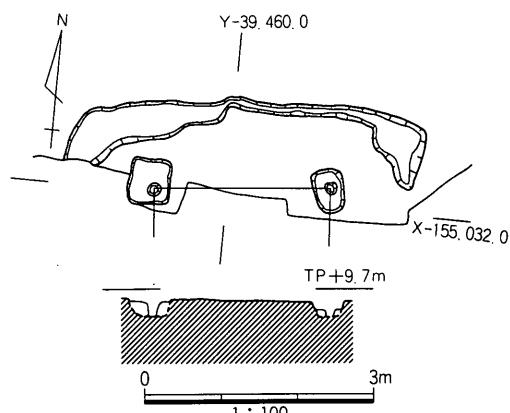


図52 SB04実測図 (IV区)

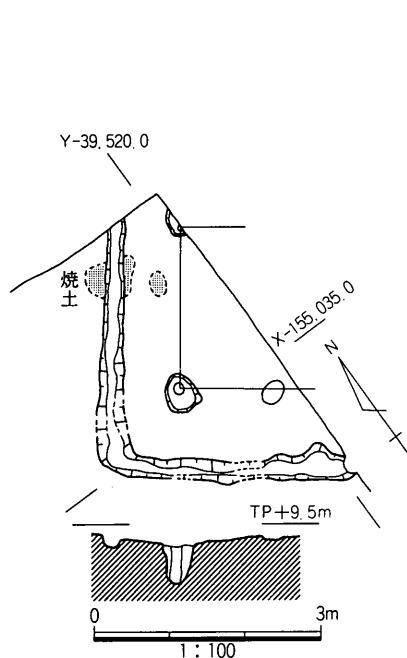


図53 SB10実測図（VI区）

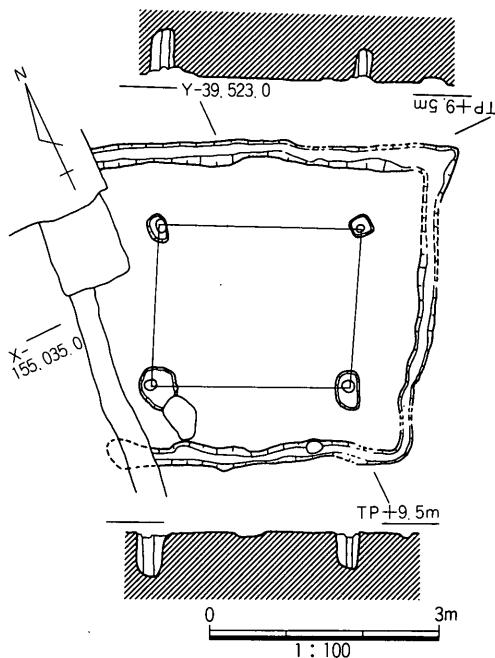


図54 SB11実測図（VI区）

0.5mである。直径15cmの柱痕跡が認められた。住居の方位はN36°30' Eであり、北西辺中央部の周壁溝付近の床面から住居外にかけて、焼けて赤く変色した部分が確認された。これは、この位置に竈があったことを示唆するものと考えられるが、粘土で造り付けられていた痕跡は認められなかった。

SB11(図54、図版4)

VI区北部でSB10を切って造られた方形の竪穴住居である。北西辺の周壁溝を除いてほぼ全体が検出された。周壁溝は幅0.25mで、平面規模は4.7m×4.2mである。4個の主柱穴が検出され、長軸方向の柱間は2.65m、もう一方の柱間は2.1mである。主柱穴は0.3~0.4mの方形または長方形を呈するもので、深さは0.4~0.5mである。直径約15cmの柱痕跡がそれぞれ認められた。住居の方位はSB10に近く、N27° Eである。

SB12(図55、図版4)

VI区北部でSB11を切って検出された方形の竪穴住居である。北および西の周壁溝は検出できなかった。しかし、4個の主柱穴が検出でき、東西の柱間が2.85m、南北の柱間が2.70mであることから、床面の一辺の長さがほぼ5.3mの規模であると推定される。周壁溝の幅は0.2~0.3mである。主柱穴は直径約0.4mの円形または不整円形を呈し、深さは約0.4mで

ある。直径12~15cmの柱痕跡が認められた。床面の北辺中央部に赤く焼けた部分があり、竈があったと推定されるが、粘土による構築物の痕跡はなかった。住居の方方位はN4°Eである。

SB23(図56、図版7)

VII区中央に位置する方形の竪穴住居である。住居北部の周壁溝と2個の主柱穴を検出した。周壁溝は幅0.3mで、主柱穴は直径0.7mの円形または楕円形であり、深さは0.5mである。直径10cmの柱痕跡が認められ、その下端部には炭化した柱の一部が遺存していた。柱間は約2.8mである。床面の規模はほぼ一辺の長さが6.3mと推定される。住居の方方位はE10°Nである。

SB24(図57・58、図版7)

VII区に位置する一辺の長さが6.1mの方形の竪穴住居で、北半部が検出された。主柱穴は推定される4個のうち北側の2個が検出され、柱間は3.2mである。柱穴は直径0.45mの円形を基調とするもので、深さは0.6mである。周壁溝は幅0.25~0.4mで、深さは0.15mである。住居の方方位はE5°Nである。

北壁際の中央に焼土の堆積が遺存しており、それを除去すると、床面に完形に復元できる土師器の高杯190が逆位に置かれていた。脚裾部は二次的に火を受けて桃色に変色していた。また、付近からは土師器鍋の破片が出土した。この焼土の堆積付近には粘土による構

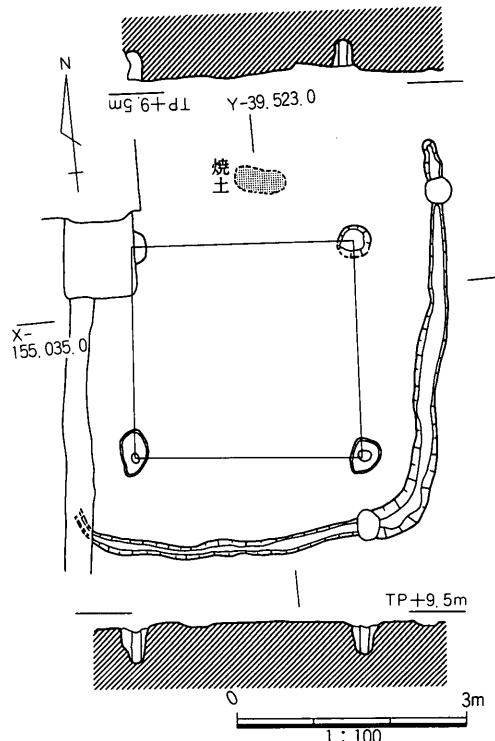


図55 SB12実測図（VI区）

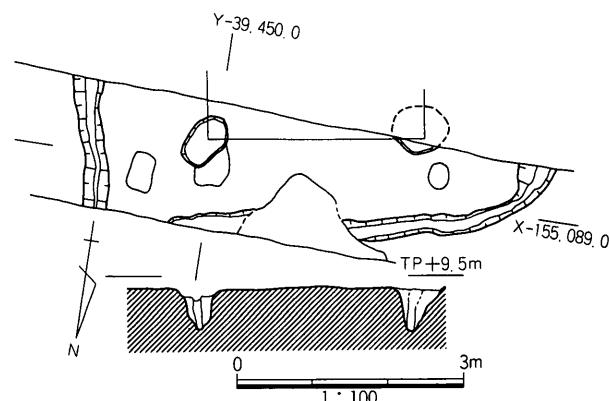


図56 SB23実測図（VII区）

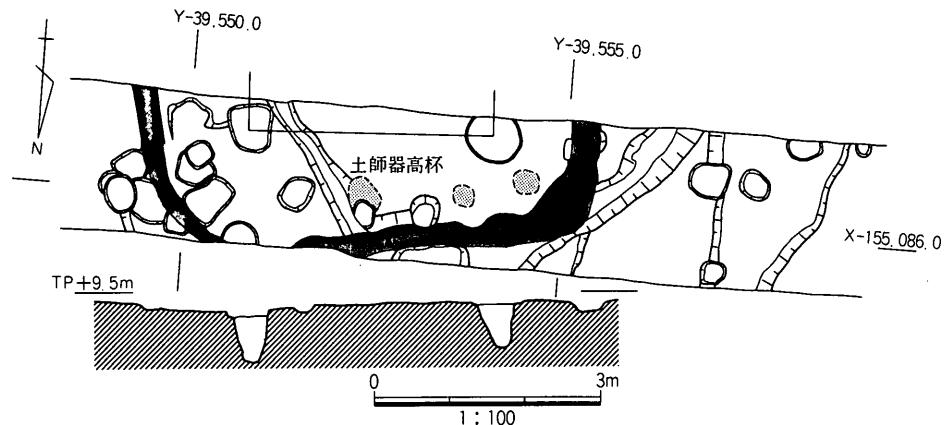


図57 SB24実測図（VII区）（濃いアミが周壁溝、薄いアミは焼土面）

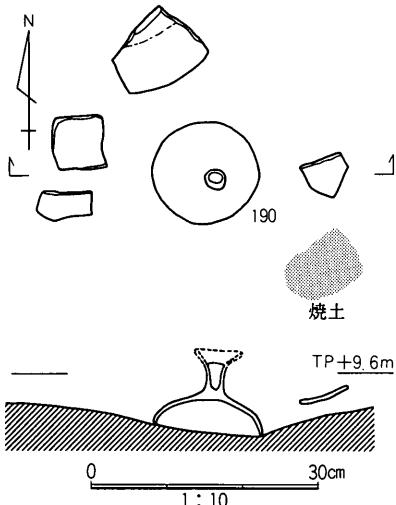


図58 瓢部の土器出土状況

築物の痕跡はまったくなかったことから、ここに竈形土器が置かれ、土師器高杯が支脚として置かれていたものと思われる。しかし、住居内から竈形土器が出土していないことからみて、住居の廃絶時に持ち去られたものと思われる。

この住居付近には他に2箇所焼けた面があることや、この東側にも周壁溝と思われる溝や柱穴があることから、重複して数棟の住居が建替えられていたようであるが、遺構の切合い関係や竈部分の遺存状況からみて、この住居がもっとも新しい時期のものと思われる。

iii) 井戸

SE01(図59、図版8)

VII区に位置する平面形が楕円形を呈すると推定される素掘りの井戸である。井戸の北半部を調査した。上幅は4.0~4.7mで、上端から1.5mまでは緩やかな斜面をなすが、それ以下は東斜面が垂直に近い面をなす。検出面から3.0mの深さまで掘削したが底は検出できなかった。この位置での直径は0.7mほどになっていた。なお、トレンチ南壁が崩壊する危険があり、そのばあい隣接する民有地に影響を与えることが予想されたため、これ以上の掘削は断念した。

埋土の上半は水成の粘土で、下半は粘土と砂礫が互層になっていた。

西肩に近い埋土最上部から須恵器の皮袋形瓶が、これと同一層準になる埋土から大型の提瓶が出土した。また、それ以下の層準からは須恵器有蓋高杯や壺が出土した。

iv) 土壙

SK01~09(図60・61、図版11・12)

Ⅲ区北部に位置する。埋土はいずれも大きく上下2層に分れ、下層には地山粘土のブロックが多く含まれる。遺物は下層に多く含まれる。平面の形状は円形または不整橢円形が多く、直径は0.5~2.0m、深さは0.3~0.4mである。土壙の底面は長原14ないし15層に相当する可能性のある砂質シルトである。SK01の上層と下層の間には薄い灰色シルト層が挟在しており、下層堆積後、上層の堆積までに時間があったことを示す。

以上のことから、これらの土壙は地山層である長原13層のシルト質粘土の採取を目的として掘削されたものと考えられる。東隣する敷地内で行われたNG91-70次調査地でも広い範囲で粘土が掘削された跡が検出されており、また、NG83-53次調査でも同じ性格のものと思われる平安時代末の土壙群や古墳時代の土壙が検出されている。

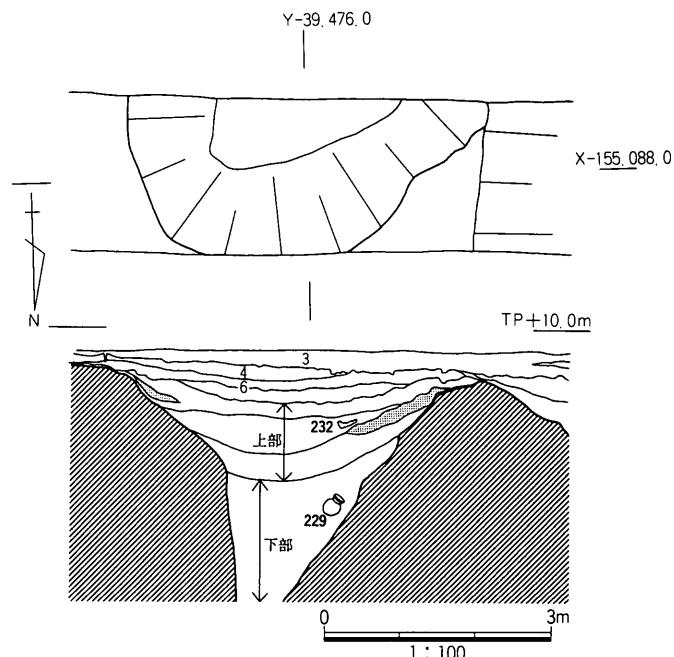
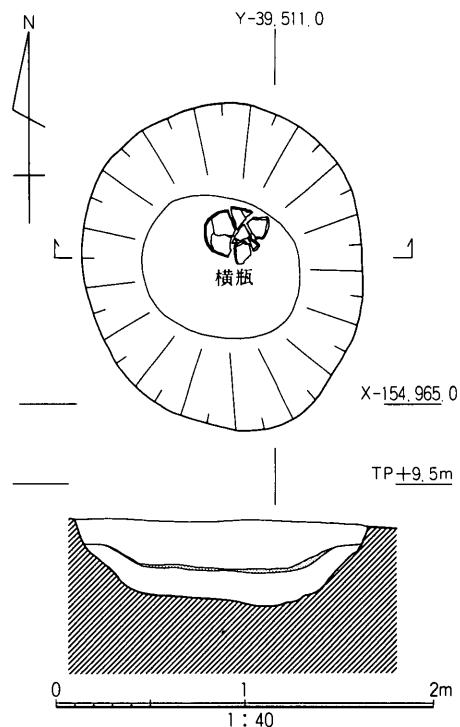


図59 SE01実測図 (VII区) (断面のアミは砂礫)

図60 SK01実測図 (III区)
(断面のアミは灰色シルト)

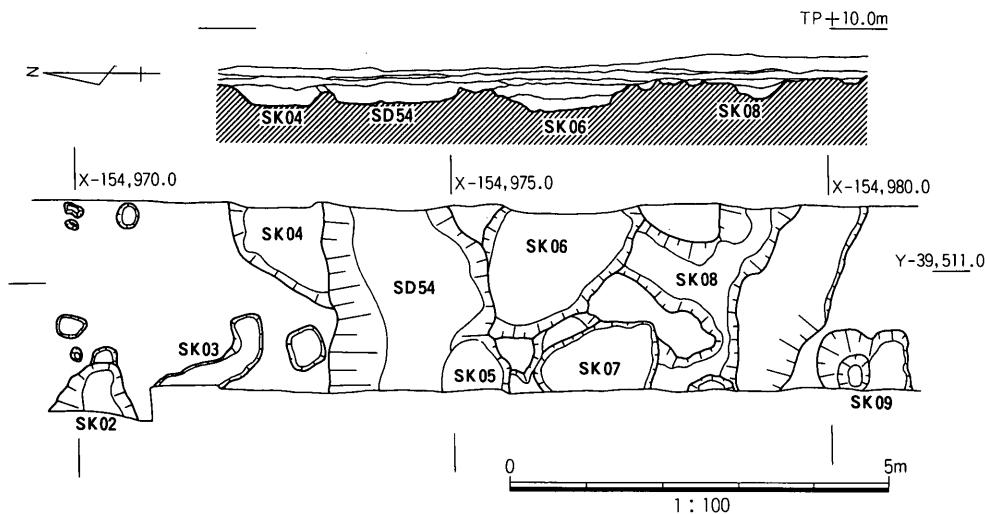


図61 III区土壤群実測図

出土遺物は須恵器の蓋杯・高杯蓋・壺などがあり、TK23型式のものとTK43型式のものがある。また、SK01底面からは須恵器横瓶の体部1/3個体分が出土した。

SK10(図101、図版1)

IV区東端で検出された直径約2mの円形と推定される土壙である。深さは0.1mで、埋土は灰褐色シルトであった。須恵器の蓋杯のほか短頸壺や台付壺の脚台部、高杯脚部が出土した。古い型式のものも含まれるが、蓋杯の特徴からTK47型式を下限とする。

SK11(図101)

IV区中央部に位置し、平行するSD12~14の間の部分が低くなっている、そこに含砂灰色シルトの包含層が堆積していた。須恵器杯身・高杯脚部などが出土しており、これらの溝と関連するものと推測される。

SK12(図101)

VI区北部に位置する。南部は近世の土壙で壊されていたが、直径約1mの円形を呈する土壙と推定される。深さは0.1mである。SB14・15の柱穴を切っている。須恵器の椀などが出土した。

SK13(図50・101、図版4・5)

VI区南端のSB19の南妻柱の北に位置する。1.2m×1.0mの方形の平面形で、深さは0.6mである。埋土は褐灰色粘土質シルトで、地山層のブロックを少量含む均質な土である。土師器高杯や須恵器甌が出土した。位置からみてSB19に伴う土壙と考えられる。

SK14(図101)

Ⅶ区東部に位置する直径0.8m、深さ0.3mの円形の土壙である。埋土は灰色または暗灰色シルト質粘土で地山層のブロックを含む。出土遺物に須恵器の高杯脚部がある。

SK15(図101)

Ⅶ区に位置する堅穴住居SB23廃絶後に生じた住居中央部の凹みをSK15とする。ここに堆積した含砂灰色粘土質シルトは住居の覆土上層に相当するものであるが、地山層のブロックを多く含む住居廃絶時の堆積とは異なり、廃絶後に残った凹みが廃棄坑として利用されたものと考えられる。遺物は土師器・須恵器が多く出土したが、須恵器はおおむねMT15型式またはTK10型式である。

SK16(図101)

Ⅶ区のSB23の西で検出された東西約1mで、深さは0.1mの土壙である。MT15型式の須恵器杯蓋などが出土した。

SK17(図101)

Ⅶ区中央部に位置する浅い土壙である。TK10型式と思われる須恵器などが出土した。

SK18(図101、図版9)

Ⅸ区南西部に位置する浅い土壙ないしは土器溜りである。底面には幅0.3mで、長さ1.5m以上にわたる東西の浅い溝状の凹みが南北に約0.5mの間隔で4条確認され、北と南に各1条ずつ同様の痕跡がある。凹み内には須恵器・土師器の細片がつまっていた。これらの東端は揃っており、等間隔で並んでいることなど規則性が看取されるが、性格は不明である。出土遺物は細片であるが、須恵器高杯形器台・杯・甌、土師器甕、モモ果核などがある。

v)溝

多数の溝状遺構が検出されたが、このうちおもな遺構についてのみ以下に報告する。

SD01(図100、図版12)

I区で検出された幅0.4~0.5m、深さ0.1mの浅い溝である。南北方向を示し、緩やかな弧を描く。土師器高杯が完形に近い状態で出土した。

SD02・03(図100、図版12)

II区で検出された2条の平行する溝で、幅0.4~0.5m、深さはSD02が0.2m、SD03が0.5mである。1983年度調査のSD19・20[大阪市文化財協会1992a、pp.74-75]に続く溝である。

SD04(図100、図版12)

II区で検出された東西方向の溝である。幅1.3m、深さ0.45mで、埋土は上層が含砂灰色シ

ルトで炭化物を含む。下層は灰色シルトである。完形に復元できる須恵器の甕が出土した。

SD05・06(図100)

Ⅱ区中央部に位置する平行する幅0.5~0.7m、深さ0.10~0.15mの2条の溝である。埋土はSD05が灰色シルト、SD06が含砂黄灰色シルトである。どちらかがⅢ区のSD08と同じ溝と思われる。

SD07(図100)

Ⅲ区で検出された溝で、幅0.4~0.6m、深さ0.05~0.10mである。埋土は灰色シルトである。1983年度調査のSD33またはSD35[大阪市文化財協会1992a、p.75]と同じ溝と思われる。

SD08(図100)

Ⅲ区で検出された溝で、幅0.45m、深さ0.08mである。埋土は灰色粘土である。Ⅳ区SD15と同じ溝と思われる。

SD09(図38、図版1)

Ⅳ区東端で検出された溝で、幅0.4m、深さ0.15mである。SB03と同じ方向を示す。

SD10~15(図101、図版1)

Ⅳ区東部から中央部に位置する平行する溝群である。幅は0.5~1.2m、深さ0.05~0.25mである。埋土は灰色ないし含砂暗褐色シルトである。南東から北西方向に延びるもので、SD12からSD14の間は既述のように浅い落込みSK11になっている。

SD16~20(図101)

Ⅴ区で検出された溝群で、「馬池谷」の斜面に平行または直交するものである。幅0.5~1.3m、深さ0.05~0.20mで、含砂暗褐色粘土を埋土とする。

SD21(図101、図版4)

Ⅵ区北部で検出された幅0.15~0.25m、深さ0.05mの東西方向の小溝である。SB10~12の南を区画する位置にある。

SD22・23(図101、図版3・11)

Ⅵ区北部で検出された平行する2条の東西溝で、ともに幅1.0~1.6m、深さ0.25~0.30mの規模である。埋土の状況から、両者とも掘直された痕跡がある。建物の柱穴と切合うことはないが、SB14と重複する。この溝はⅤ区の溝のいずれかと同じ溝と推測される。検出されたSD23の東端付近から、脚部を欠く須恵器筒形器台が出土した。

SD24(図101、図版3)

Ⅵ区北部のSD23から南に派生する溝で、幅0.3~0.6m、深さが0.03~0.15mである。埋土

は暗青灰色シルトである。南端で西に直角に屈曲する。この溝はSB15・16の柱穴に切られている。

SD25(図101、図版3)

VI区北部のSD22・23の南側に平行して掘られた東西溝である。幅0.6~1.0m、深さ0.10~0.15mである。この地区の中央部で途切れており、SB14の南側を画す雨落ち溝と思われる。

SD26~28(図101、図版4・5)

SD26・27はVI区南部に位置し、幅0.4m、深さ0.15~0.20mで、SD26の方が深く、またSD27に切られており、掘直されたものと思われる。埋土はSD26が暗褐灰色または青灰色粘土質シルトで、SD27が褐灰色粘土質シルトである。SB18の南と東を画するように掘られ、SB17との間を北西に向う。SB18の北部で弧を描くようになっている。SB18の北側とこの溝との間の遺構面は凹凸が顕著で、一部攪乱されており、樹木の根の痕跡と推定されることから、この樹木を避けて溝が掘られたものと考えられる。SD28は幅0.3mほどの小溝で、SD26から西に長さ1.5mほど延び、SB18の柱穴に切られる。

SD29・30(図101、図版4)

VI区南端の2条の溝で、SD29は南端で幅2.2m以上、深さ0.2mの溝状遺構である。SD26・27に切られる。SD30はSD29から西に延びる溝状遺構で、西端で5.0m×1.8m、深さ0.35mの土壙状をなす。

SD31~40(図101、図版6)

VII区では10数条の溝が検出されたが、そのうち遺物が多く出土したSD37・38は後述する。溝は幅0.2~1.2m、深さ0.1~0.3mの規模である。東半部の溝は南東から北西に向う溝がほとんどで、そのうちいくつかが、IV区のSD10~15に続くものと思われる。これに対して、西半部の溝の多くは東西方向あるいは西南から東でやや北に振る方向のものである。なお、SD35上位の長原7層からは子持勾玉が出土した。

SD37・38(図101、図版6)

1.5mの間隔で平行する2条の溝で、幅0.6~1.0m、深さ0.1~0.3mである。SD38のほうが深い。埋土はSD37が灰色粘土質シルト、SD38が灰色シルトである。SD38からは北に派生する溝がある。また、両溝の間に焼土が厚さ0.2mほど堆積する部分があり、その一部はSD38内に落込んでいた。

SD41(図101、図版6・11)

VII区で検出された幅0.16m、深さ0.2mの細く深い溝である。埋土は含砂灰色シルトで、地

山層のブロックを多く含んでいた。この溝は壁がほぼ垂直に掘られ、その底部には須恵器筒形器台の筒部が横に置かれており、導水管として意図的に埋置されたものと推測される。このことから、この溝は一部が暗渠であったと思われ、竪穴住居に敷設された排水溝の可能性が高い。

SD42(図101、図版6)

Ⅷ区で検出された竪穴住居の周壁溝の可能性のある溝である。幅0.3m、深さ0.10~0.15mの規模である。

SD43~45(図101)

Ⅷ区西端の谷斜面に位置し、斜面に平行あるいは直交する溝群で、幅0.4~0.8m、深さ0.05~0.20mである。

SD46~52(図62・63・101、写真12、図版9・10)

Ⅸ区の谷斜面に位置する溝群である。これらは幅や深さが一定でなく、埋土が水成の砂層のものがあるなど、自然の侵食により形成されたものもあると思われる。

SD46・47は平行する溝で、SD47の南側は西に曲っており、その屈曲部から東にSD48が延びている。SD48の両側には疎に木杭が遺存していた。また、この溝からは土器のほか、刀形と思われる木製品、モモ果核が出土した。

SD49・50は西でつながっていると思われる、浅く不整形な溝状遺構である。SD49から土器のほか木製の容器、モモ果核が出土した。

SD51は幅0.8~1.2m、深さ0.2~0.3mの南北溝で、南端は東に屈曲している。西肩部に沿って柱穴が0.8~1.5m間隔で並び、既述のように、そのうち1個の柱穴に柱根が遺存していた。

SD52は幅1.6~2.5m、深さ0.3~0.4mの溝で、南肩の一部は後世の自然流路で壊されてい

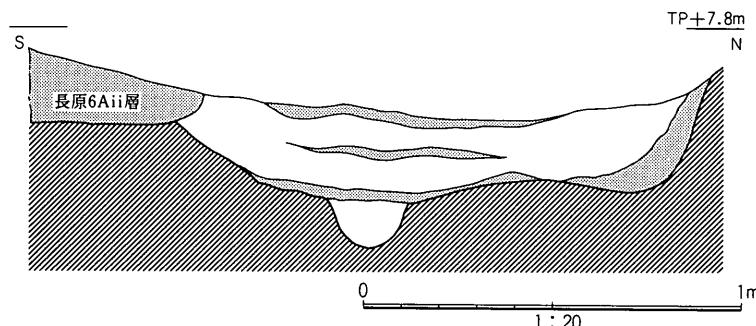


図62 SD52実測図 (IX区) (薄いアミは水成砂層)

る。埋土は含砂礫黒色粘土である。溝の西側では、多量の須恵器や土馬などが出土し、東側では完形品を含む須恵器と子持勾玉、ウマの骨・歯が出土した。また、自然木・加工木や削り屑、先端の焼けた棒や板の断片、モモ果核やヒヨウタンの種子・果皮なども出土した。



写真12 SD52土器出土状況

4) 古墳時代の遺物

i) 柱穴・竪穴住居出土の土器(図64、図版47・63)

掘立柱建物の柱穴や竪穴住居から出土した遺物には、建物遺構の時期を推察しうる資料

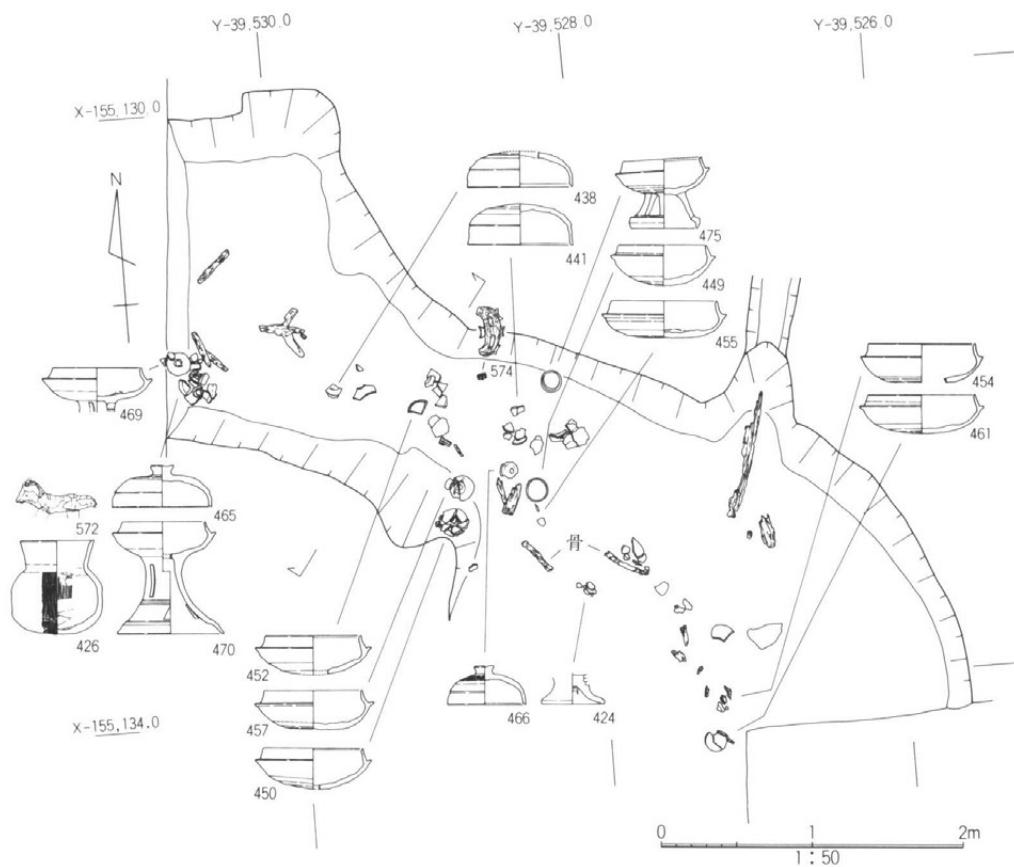


図63 SD52遺物出土状況 (IX区)

は少ない。

188はⅠ区のSP01から出土した小型の土師器甕である。球形に近いと思われる体部に短い口縁部が付くもので、体部外面はハケ調整、内面はナデ調整である。189は土師器の杯である。Ⅶ区のSB24東側に密集して検出された柱穴の一つSP02から出土した。底部は丸底で、口縁端部をわずかに外反させる。口縁部の内外面はヨコナデ調整で、それ以下の内面は横方向の細かいハケ調整である。外面は底部がヘラケズリで、口縁部との間はユビオサエである。胎土は灰褐色を呈するやや粗い胎土で、他の土師器と異質である。192は土師器甕の上半部で、Ⅶ区のSP03から出土した。やや内湾ぎみの口縁部で、端部は肥厚する。頸部は強くヨコナデする。口縁部の内外面はヨコナデ調整で、体部は内外面とも細かいハケ

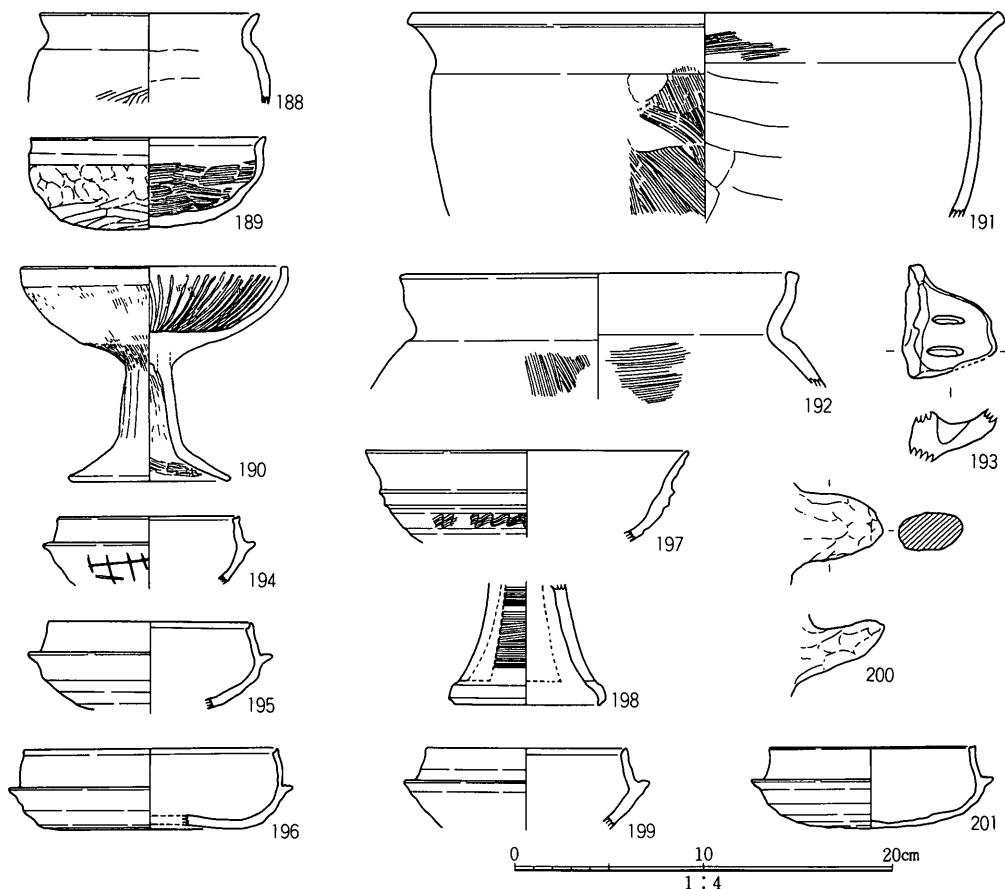


図64 建物・柱穴出土土器実測図

SB18(193・198)、SB24(190・191・195)、SB24に切られる周壁溝(201)、SP01(188)、SP02(189)、SP03(192)、SP04(194)、SP05(196・200)、SP06(197)、83-56次調査SB31(199)

調整である。土師器高杯190はSB24の北辺中央部の周壁溝付近で検出された竈痕跡から出土した。倒立して置かれ、脚端部は一部欠損していた。内湾ぎみの杯部で、外面はハケ調整後にナデ調整してハケメを消している。口縁端部の内外面はヨコナデ調整している。内面は放射状の暗文を施す。柱状部から裾部は屈曲して開くが、裾部は短い。脚部と杯部の接合部の外面はハケ調整しており、柱状部の外面は縦方向にナデしている。裾部外面はナデ調整し、内面はハケで整えている。191はSB24の竈付近から出土した土師器鍋の破片である。あまり張らない体部から「く」字状に外反する口縁部で、端部は面を作る。口縁内面は横方向にハケ調整し、体部外面は斜め方向の細かいハケ調整で、内面はヘラケズリする。

194はⅧ区東部のSP04から出土した須恵器杯身で、体部外面に格子状のヘラ記号がある。これと同様のヘラ記号は図69の267にもみられる。口径は小さく、TK47型式であろう。196・200はⅧ区SP05から出土した。196は須恵器杯身で、口径が大きく、MT15型式である。200は須恵器の把手であるが、土師器のそれと同形態である。197はSB24の竈部分の焼土を除去して検出されたSP06から出土した須恵器無蓋高杯の杯部である。体部から口縁部にかけて大きく開く形状で、外面に平行する2本の稜線を作り、その下位に波状文を施す。TK23型式であろう。195はSB24の主柱穴と考えた2個の柱穴のうち、西側の柱穴から出土した須恵器杯身である。立上がりが短く、口径がやや小さいことからTK23型式とみられる。201はSB24東周壁溝に切られ、これに先行する時期の竪穴住居の周壁溝と考えられる溝付近で出土した須恵器杯身である。体部外面のヘラケズリ痕が上方まで残され、立上がりが長く、上端部に面を作るなど古い様相を示し、TK208型式と考える。

以上のⅧ区の出土遺物からみて、この付近の竪穴住居がTK208型式の時期にはすでに造られており、そのうちもっと新しいと考えられたSB24は竈下の柱穴から出土した土器や主柱穴からの出土土器からみて、TK23型式の段階に造られたものと考えられる。また、掘立柱建物の可能性があるSP04の土器はTK47型式のものであった。

199は1983年度調査でSB31とした建物の柱穴の一つから出土した須恵器杯身である。TK23型式であろう。

193・198はVI区SB18の柱穴から出土した土器である。193は土師器甌または鍋の把手で、上面にヘラによる切込みが2条ある扁平なものである。198は須恵器高杯の脚部で、長方形のスカシ孔が3方に開けられている。脚端部はヨコナデにより面を作り、下端部をやや内側につまみ出す。外面にはカキメを施す。TK47型式と思われるが、MT15型式まで下る可能性もある。

次に、VI区の各建物の時期について、図示していない遺物も含めた出土遺物をもとに、検討する。

SB11の周壁溝から大きく内傾する面をもつ須恵器杯蓋の細片が出土しており、TK23型式に属するのではないかと考えられる。

SB13・14の柱穴からはON46段階またはTK208型式の須恵器杯身や甕の細片が、SB15～17からはTK208型式ないしはTK23型式の須恵器杯蓋や甕の細片が出土した。また、SB16からは生駒西麓産の胎土の羽釜体部片が出土している。SB18・19はさらに新しくTK47型式の杯蓋や甕が細片で出土している。

ii) SE01 出土の土器(図65・66、図版47～49)

土師器

杯・把手付鉢・甕・甌・ミニチュア土器などがある。

202はミニチュア土器で、体部はナデにより粗雑に仕上げる。

203は高杯の杯部と同形態の杯である。口縁はやや内湾ぎみで、全体的に薄く作る。

204・205は把手付鉢で、204は口縁部と底部を欠き、205は把手のみである。把手は断面が楕円形をなす長いもので、上方に向って緩やかに曲げている。体部は外面をハケ調整したのちナデ調整している。内面は下から上にヘラケズリする。胎土はいずれも精良なもので、砂粒をほとんど含まない。

206～210は甕の口縁部または上半部である。体部外面はいずれもハケ調整であるが、内面をヘラケズリする206・208・209とハケ調整の210がある。

211は甌の上半部で、口縁部をわずかに外反させる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ調整で、内面はナデ調整で仕上げる。

須恵器

蓋杯のほか有蓋高杯・無蓋高杯・器台・皮袋形瓶・提瓶・壺・甕がある。

口径が身で10～11cm、蓋で12cm前後の蓋杯(212～214・218・219)と身で12cm、蓋で15cmを越える大型の蓋杯(215～217・220)がある。前者の蓋杯の蓋は天井部が高く、身は立上がりが短い。TK23型式ないしはTK47型式であろう。後者の蓋杯は蓋・身ともに口縁端部に内傾する面をもち、MT15型式に属する。なお、216の天井部内面には同心円文の当て具痕が残る。

有蓋高杯221～223のうち221は脚部を欠く、口径9.3cmの杯部である。222は直線的に開き、4方に円孔を穿った脚部をもち、223は長方形のスカシ孔を3方に開け、端部はヨコナ

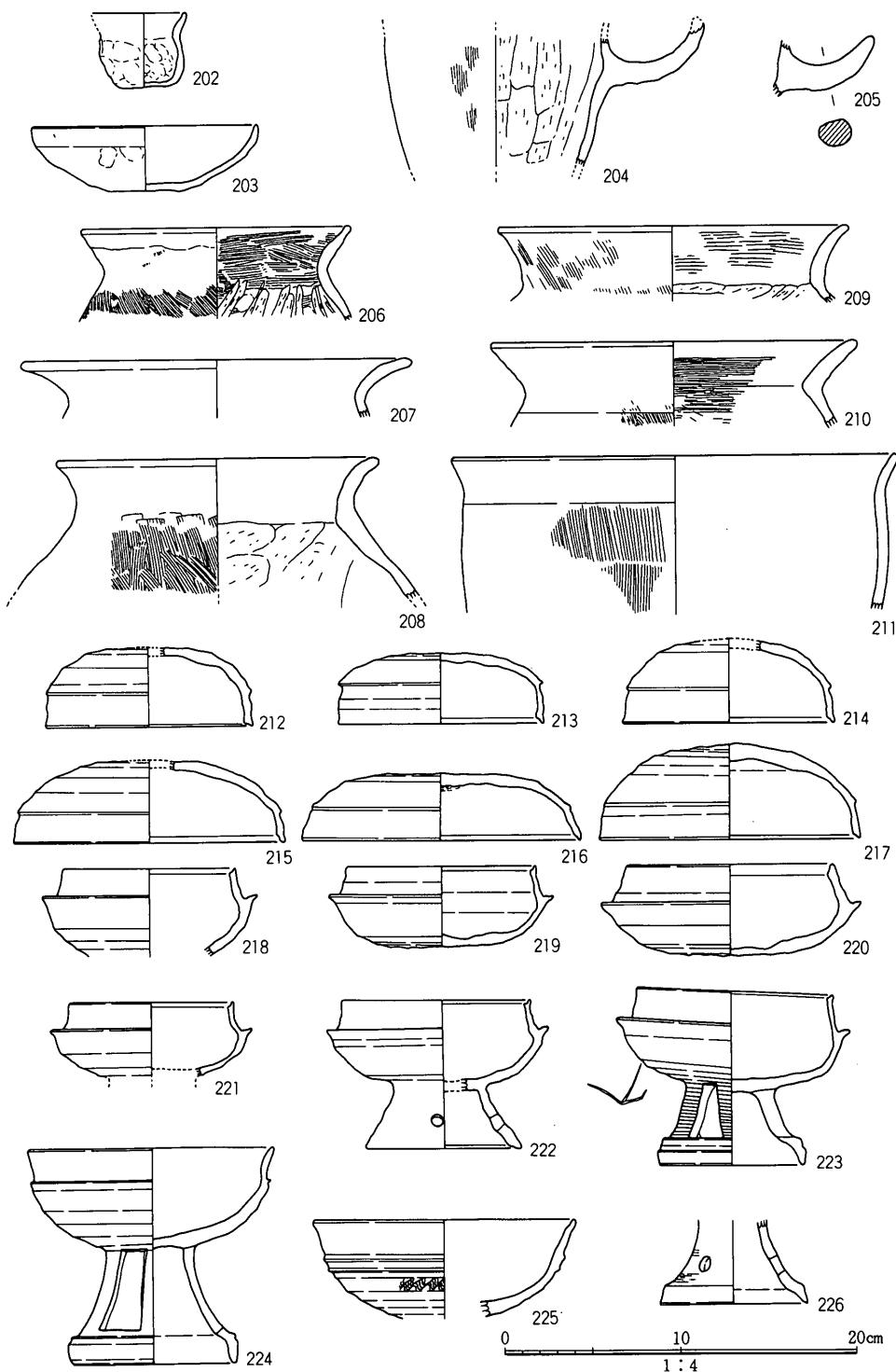


図65 VII区SE01出土土器実測図 (1)

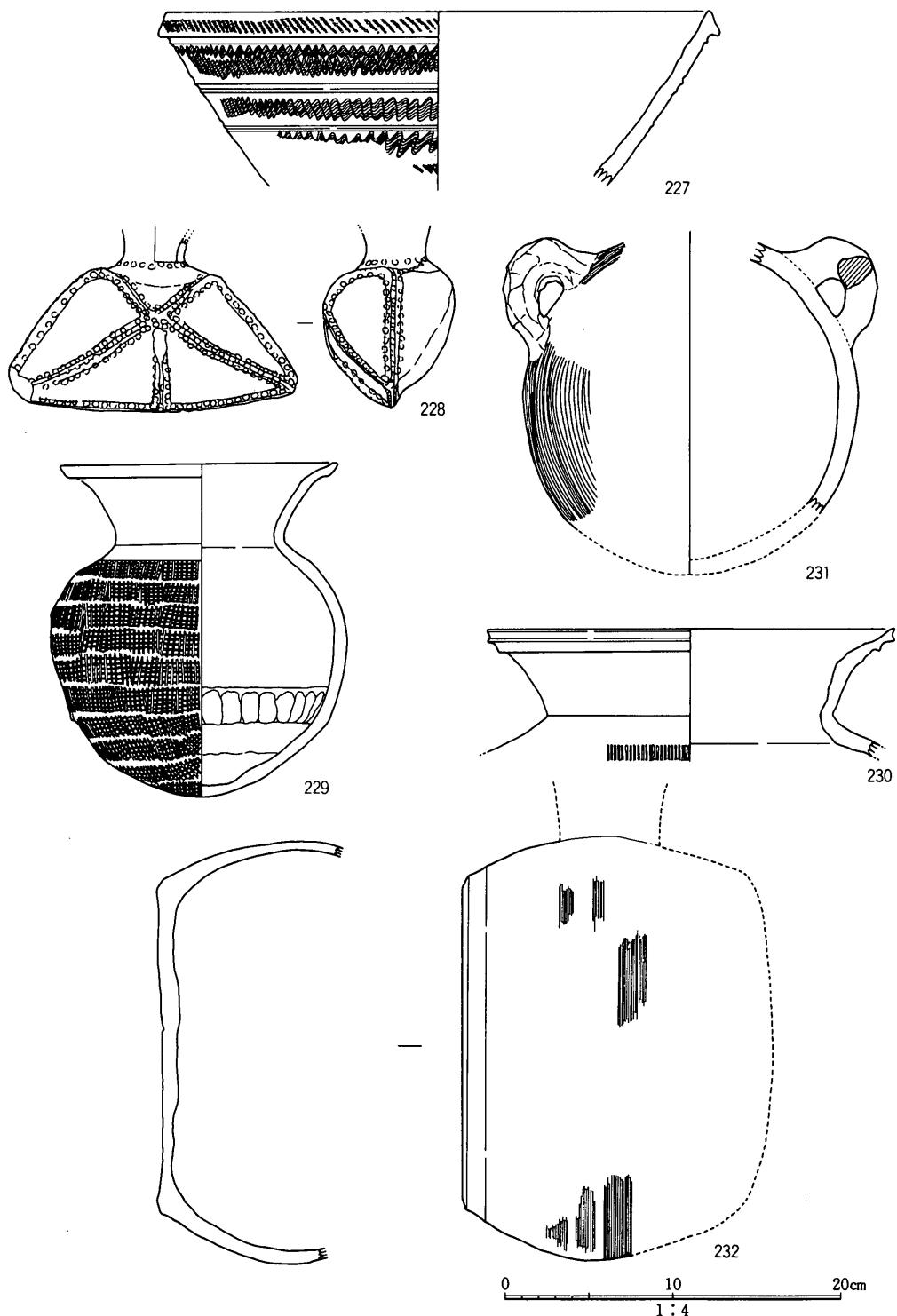


図66 VII区SE01出土土器実測図 (2)

デによって面を作る脚部である。杯部の外面にヘラ記号がある。口径はいずれも約11cmで、TK23型式とみてよいだろう。

また、無蓋高杯のうち224の杯部は杯蓋を逆位にした形状で、脚部は長く、長方形スカシ孔を3方に開ける。脚端部は下方に屈曲させて面を作る。MT15型式であろう。225は体部中位の外面に2本の稜線を作り、その下位に波状文を施す杯部である。TK23型式である。226は高杯脚部で、円形のスカシ孔を3方に穿ち、端部はヨコナデにより面を作る。

227の高杯形器台は杯部の破片で、直線的な形態である。口縁端部は広い面を作り、そこに斜行する列点文を施す。これの直下に1本の、その下には2本一組の、さらに下に1本の稜線を作り、その間に波状文を施す。底部付近にはカキメが施され、列点文が付けられている。

228はSE01埋土の最上層から出土した皮袋形瓶である。口縁端部を欠損するが、体部は完形である。体部は筒形の粘土の一方を直線的に接合して成形されたものと思われ、周縁をつまんで突出させる。体部の前面には「×」形に粘土紐が貼られ、その交点から下方にも粘土紐が貼られている。体部周縁の突出部は前後から竹管文が付けられ、前面に貼付けられた粘土紐の両側にも竹管文が並ぶ。また、頸部にも竹管文が巡る。体部は全体的にナデ調整でていねいに仕上げられている。

231・232は提瓶である。231は口縁部を欠く体部片で、大きな環状の耳が付く。体部にはカキメがみられる。232は口縁部を欠く大型の提瓶で、外面にカキメが施され、図66における体部左側は平坦な面をなす。この面はナデが一部認められるが、ていねいな調整は認められない。

229は球形の体部に、外反する長い口縁部が付く壺で、口縁端部は外面に面を作る。体部外面は格子タタキが施され、内面はヨコナデ、ナデにより平滑に仕上げられている。外面には濃緑色の厚い自然釉がかかる。230は甕の口縁部で、上端部を強くヨコナデして、やや凹む面を作る。その直下に1本の稜線がある。体部は外面に平行タタキが施されている。

以上のSE01から出土した須恵器はTK23型式からMT15型式のものが混在し、埋土上位に新しい土器が多い傾向はあるが、埋土下位からもMT15型式の土器が出土しており、この井戸の下限を示している。

iii) 土壙出土の土器

III区土壙群(SK01~09)(図67、図版50)

須恵器杯蓋234は天井部と口縁部の間の稜線が不明瞭になっているが、口縁端部には内傾

する面を作る。236・237は短い立上がりをもち、口縁端部を丸くおさめる杯身である。これらはTK43型式と考える。239は高杯蓋でTK23型式と思われる。243は壺の体部で口縁部を欠損する。外面は平行タタキのちカキメ調整する。このほか、SK01の底面で須恵器横瓶の体部が出土している。これらの土器からみて、Ⅲ区に群在する土壙群の時期はTK23型式からTK43型式の時期幅の中で考えておきたい。

IV区SK10(図67、図版50)

233・235・241・242・244が出土した。須恵器蓋杯233・235はTK47型式、須恵器高杯241は長方形で4方にスカシ孔が開けられ、脚端部は丸くおさめる。ON46段階であろう。242は須恵器短頸壺で口縁部上端に面を作る。244は器台の脚部に比べて小さく、須恵器台付壺の脚部と推定する。外面は2本一組の稜線帯により4分割され、最下段を除いて波状文が施される。最上段には長方形のスカシ孔が、その下には三角形のスカシ孔が開けられ

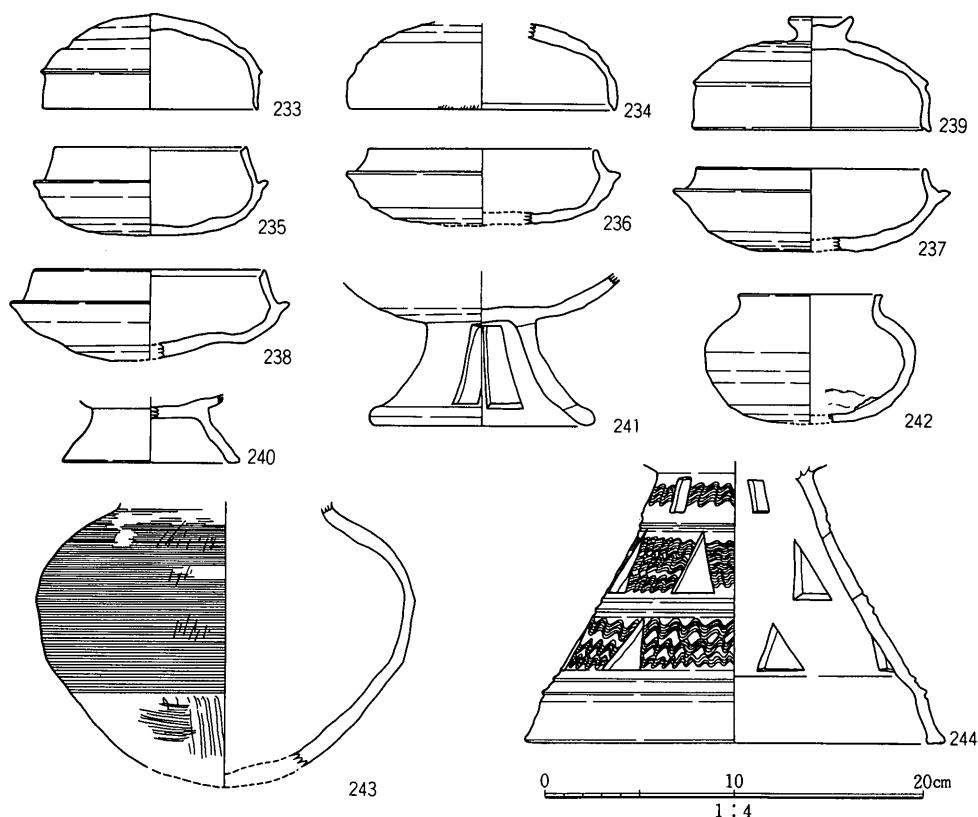


図67 Ⅲ・Ⅳ区土壙出土土器実測図

Ⅲ区土壙群(234・236・237・239・243)、SK10(233・235・241・242・244)、SK11(238・240)

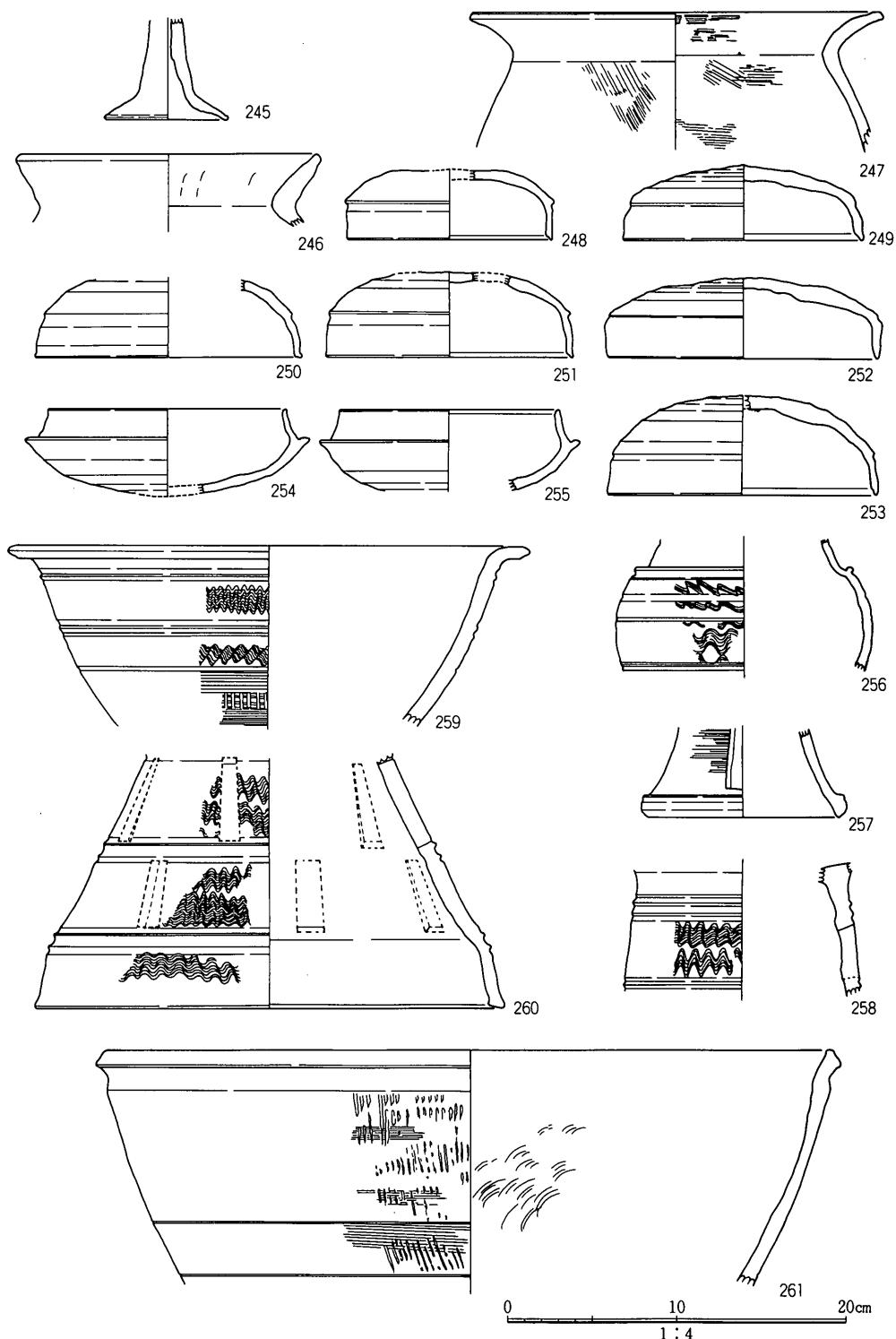


図68 VI～IX区土壤出土土器実測図

SK12(256)、SK13(245・261)、SK14(257)、SK15(247・248・251・254・255)、SK16(250)、SK17(249・252)、SK18(246・253・258・259)、Ⅷ区西端落込み(260)

ている。

IV区SK11(図67、図版50)

238は須恵器杯身である。口縁端部は内傾し、浅い凹線となる。240は須恵器の有蓋高杯の脚部と思われる。直線的に拡がる低い脚部で、下端部は面をなす。

VI区SK12・13(図68、図版50)

256はSK12出土の須恵器椀である。口縁端部と下半部は欠損している。体部は樽形で、上部に稜線を作つて口縁部が立上がる。体部中位には2ないし3条の凹線があり、波状文が施されている。あまり類例のない器形である。245はSK13から出土した土師器高杯の脚部である。261はSK13から出土した須恵器甌の体部片である。口縁端部は面を作り、その下位を強くヨコナデする。外面は平行タタキを施しており、一部カキメ調整されている。内面には同心円文の当て具痕がみられる。体部中位に相当する外面には2条の凹線が施される。

VII区SK14～17(図68、図版50)

247は土師器長胴甌の上半部である。「く」字形に外反する口縁部をもつ。口縁部はヨコナデ調整するが、内面にハケメが残る。体部内外面はハケ調整を施し、内面は一部ナデ調整されている。

248～252は須恵器杯蓋である。248はやや低い天井部で、短く垂下する口縁部が付く。口縁端部は内傾する。天井部外面のヘラケズリの範囲は狭い。250・251は口径が大きく、やや新しい傾向を示す。249・252はいずれも外面の稜線が不明瞭になっている。254・255は須恵器杯身である。ともに口径が大きく255はかすかに口縁端部が内傾する。これらの蓋杯は248がTK47型式であるほかはMT15型式からTK10型式に属するものであろう。257は須恵器高杯の脚部である。長方形のスカシ孔を4方に穿つ。脚端部はヨコナデ調整により丸みをもたせて終る。外面にはカキメ調整が施される。

IX区SK18・VIII区西端落込み(図68)

246は土師器の中型甌の口縁部である。器壁が厚く、内面はハケ調整後にヨコナデ調整しており、ハケメがかすかに残る。

253は須恵器杯蓋である。丸く高い天井部で、短い口縁部をもつ。口縁端部は内傾し、やや凹む。258は筒形器台の脚部の受部との接合部付近で、外面に2本一組の稜線が作り出され、その間に2帯の波状文が施される。259・260は須恵器の高杯形器台である。259は受部で、口縁部は短く屈曲させ、端部は丸くする。外面には2条一組の凹線を2帯施し、そ

の間を波状文で飾る。下段の波状文の下には1条の凹線があり、それ以下は格子タタキを施したのちカキメ調整する。260は脚部で外面を2本一組の稜線で区分し、その間を波状文で飾る。スカシ孔は長方形で、最下段を除く上2段に穿っている。脚下端部は面を作る。

iv) 溝出土の土器

I 区SD01(図69)

262は土師器高杯である。内湾する杯部に円形のスカシ孔をもつ脚部が付くが、裾部は欠失している。杯部内面と口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整で、脚柱状部の外面は縦方向のナデで、杯部との接合部にハケメが残る。焼成はよく、黄白色を呈する。271は器壁が薄く、端部を丸くおさめる長い立上がりをもつ須恵器有蓋高杯である。体部外面はヨコナデ調整で仕上げている。TK216型式であろう。

II 区SD03・05(図69)

270・265は須恵器蓋杯である。270は端部が内傾する面を作る短い立上がりをもつ杯身で、265は天井部外面をヘラケズリしたのちにヨコナデ調整しており、高杯蓋の可能性がある。274は須恵器の高杯脚部で長方形のスカシ孔が3方に開けられている。TK208型式と思われる。

II 区SD04(図69、図版51・53・56)

263は土師器の大型高杯の杯部である。平底となる底部から明瞭な稜線を作り、直線的に伸びる体部で、端部を若干外反させる。264は土師器甕の上半部である。264は長い口縁部をもつもので、端部は薄くして終る。頸部の外面は強くヨコナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面にはハケメが残るが、磨滅して不鮮明である。268・269は須恵器蓋杯である。268は天井部と口縁部の境界の稜線がヨコナデによりつまみ出されている。269は内傾する面を作る口縁端部で、底部外面のヘラケズリ痕は上部まで及んでいない。273は須恵器無蓋高杯の杯部である。外面に平行する2本の稜線を作り、その下に波状文、さらに下に綾杉状に列点文を施す。体部中位に耳が付くが、図のように一对になるかは不明である。276は口縁部を欠く須恵器壺である。ほぼ球形の体部で、底部がやや平坦になっている。外面は格子タタキで、内面は上1/3がヨコナデ調整、それ以下はナデ調整である。278は須恵器甕である。ほぼ完形に復元できるものである。やや肩の張る球形に近い体部で、端部をヨコナデにより上下につまみ出した短く外反する口縁部をもつ。口縁部外面はカキメ調整で、内面はヨコナデ調整である。体部は外面が平行タタキで、のちカキメ調整で仕上げている。内面は同心円文の当て具痕が明瞭に残る。

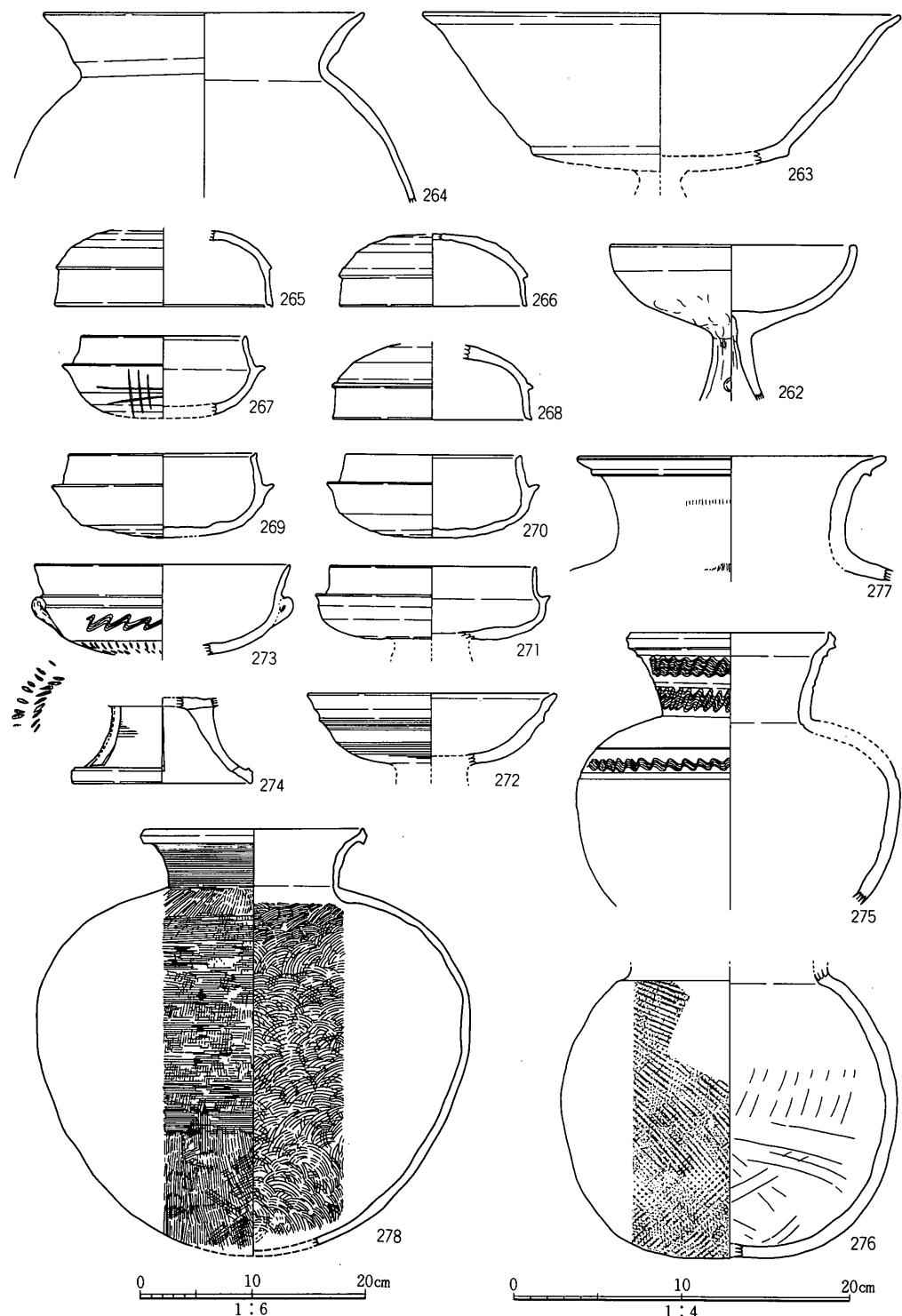


図69 I ~ V区溝出土土器実測図

SD01(262・271)、SD03(270)、SD04(263・264・268・269・273・276・278)、SD05(265・274)、SD13(275)、SD14(266・267)、SD18(272・277)

268・276は古い様相をもつが、それ以外の須恵器はTK23型式に属する。

IV区SD13・14(図69)

266・267は須恵器蓋杯である。266は天井部の器壁が厚い杯蓋で、267は端部が内傾する面を作る口縁部をもつ杯身である。後者の体部外面には平行する3本の線刻とこれに直交する2本の線刻が施されている。275は須恵器壺である。底部は欠損する。やや肩の張る球形の体部に、端部をヨコナデにより上方につまみ出した口縁部が付く。口縁部直下の外面には2本の稜線が作られ、それ以下は1本の稜線により2分割され、それぞれに波状文が施されている。体部中位のやや上方には2条の凹線があり、その間に波状文が施されている。これらはおおむねTK23型式に属するものである。

V区SD18(図69)

272は須恵器の無蓋高杯である。外方に大きく開く浅い杯部で、外面はカキメ調整する。277は須恵器壺の口縁部である。上方で大きく開く長い口縁部で、端部は丸く終る。端部直下の外面に1本の稜線を作る。外面はヨコナデ調整であり、体部付近には平行タタキメがみられる。TK73型式に属する初期須恵器である。このほか、縄蓆文のタタキを施した須恵器壺の体部片が出土している。

VI区SD22・23(図70、図版51~53・56)

279・280は土師器高杯である。279は杯部の破片で、ヨコナデにより口縁端部が短く直立する形態である。端部は丸くおさめる。280は口縁端部を外方に屈曲させる杯部である。いずれも口縁部の内外面はヨコナデ調整、それ以外の外面はナデ調整である。281~283・285は土師器壺である。285の口縁端部は上方にややつまみ上げる。口縁部の内外面はいずれもヨコナデ調整と思われるが、体部の内外面は調整痕が明瞭でない。282の内面はヘラケズリと思われる。また、283は砂粒の少ない精良な胎土で、他の資料と異なる。284は土師器鍋の上部と思われる。口縁端部を短く屈曲させる。体部内外面はハケ調整している。

288~293は須恵器杯蓋である。口径は12~13cmで、口縁端部は内傾してやや凹む面を作る。294~297は須恵器杯身で、口径は12cm未満である。端部は内傾してやや凹む面を作るが、294の端部は内傾しない。286・287は須恵器無蓋高杯の杯部である。体部外面の中位に、286は2本の、287は1本の稜線を作り、その下方に波状文を施す。286は底部外面の脚部の接合痕からみて、長方形のスカシ孔を3方に開けていたものと思われる。300は須恵器壺である。口縁部を欠損するが体部は完形である。体部中位のやや上方に浅い凹線を施し、その位置に1個の円孔を穿つ。底部外面は静止ヘラケズリで丸く整形する。301は口縁

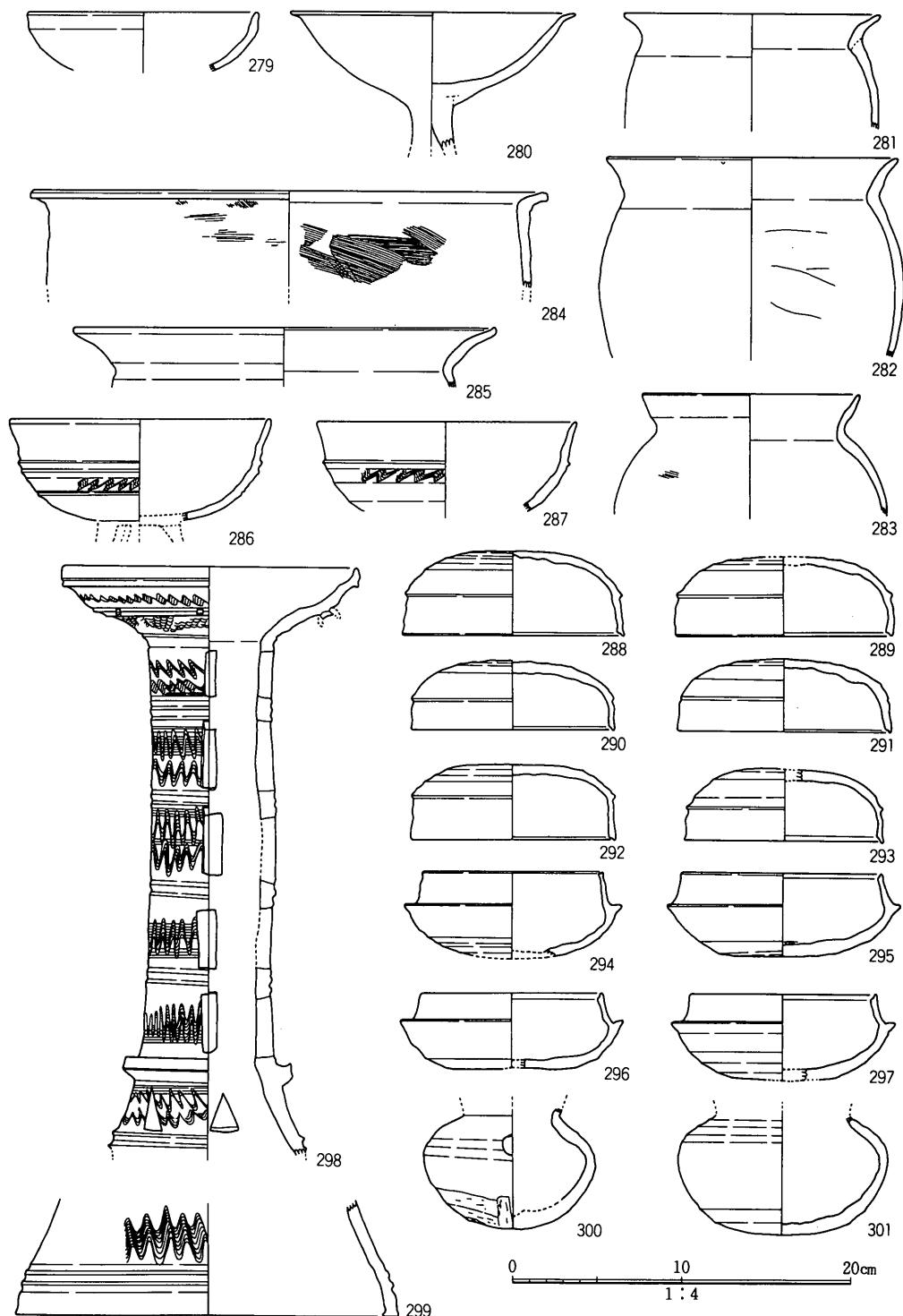


図70 VI区SD22・23出土土器実測図

SD22(280・284・285・287・290~293・295~297・300・301)、SD23(279・281~283・286・288・289・294・298・299)

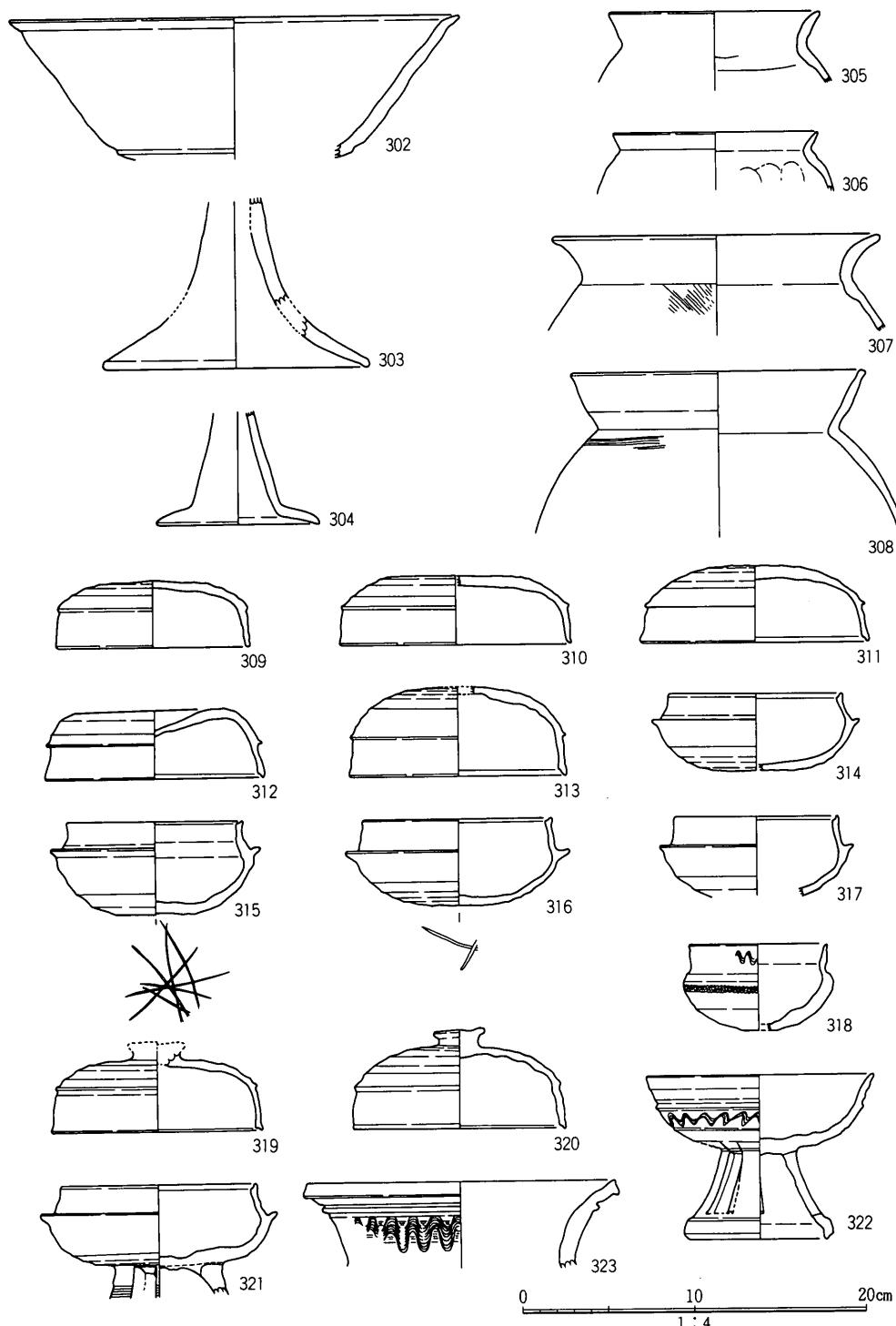


図71 VI区溝出土土器実測図

SD24(302)、SD26(303・305~308・311~313・315・317・321)、SD27(314・322)、SD28(310・320)、SD29(304・316・318・319・323)、SD30(309)

部を欠損する壺の体部である。底部外面はヘラケズリで、それより上はヨコナデ調整である。298は筒形器台で、脚台部を欠く。受部の外面には2条の凹線があり、その上下に波状文が施される。凹線の位置には5個の土製勾玉が貼付けられているが、いずれも欠損している。筒部外面は2条一組の浅い凹線によって5段に分割され、各段に長方形のスカシ孔を4方に穿つ。また、カキメ調整がなされたのち、上三段にはそれぞれ2帯の波状文が、それ以下には1帯の波状文が施されている。脚台部と筒部の境界には断面形が台形を呈する突帯が巡らされている。脚台部も凹線あるいは稜線で外面が区切られているようで、その間には三角形のスカシ孔が4方に穿たれ、カキメののちに波状文が施される。299は器台の脚部である。下端部に面を作り、その外面上方にある2本の稜線の上方に波状文を施す。298と同一個体の可能性がある。

VI区SD24・26~30(図71、図版52・53・55・56)

302~304は土師器高杯である。302は口径26.2cmの大型の高杯の杯部で、平底の底部から稜線を作って角度を変え直線的に延びる体部である。口縁端部は外方に屈曲させる。303は大型高杯の脚部である。柱状部から緩やかに拡がって裾部となる。脚端部は丸くおさめる。304は柱状部から鋭く屈曲する裾部となり、端部を薄く仕上げる脚部である。303・304とも裾部の外面はヨコナデ調整でていねいに仕上げる。305~308は土師器壺の上半部である。305・306は口径12cm前後で、307・308は口径17~19cmである。前者の外面調整は不明、内面はナデまたはユビオサエである。306の口縁部は短く、特徴的である。後者は体部外面はハケ調整で、内面は307がナデ調整、308は不明である。308はほぼ球形の体部と推定され、鋭く屈曲して延びる口縁部をもつ。布留式の系譜を引く形態である。

309・310は天井部が平坦になる須恵器杯蓋で、口縁端部は309が丸くおさめ、310はわずかに外方につまみ出す。天井部外面のヘラケズリが稜線付近まで及んでおり、ON46段階またはTK208型式と思われる。同じく杯蓋の311~313は歪みの顕著な312以外は丸い天井部で、口縁端部は内傾するやや凹んだ面を作る。TK23型式である。314~317は須恵器杯身である。口径11cmの316を除いていずれも口径10cm前後の小型で、立上がりは短く、口縁端部はやや凹んだ内傾する面を作る。315は体部が深く、外底面にヘラ記号がある。316の外底面にも「×」と思われるヘラ記号がある。316はTK208型式、314・315・317はTK23型式ないしはTK47型式である。319・320は高杯蓋で319のつまみは欠損する。いずれもTK208型式である。321は有蓋高杯の杯部で、長方形のスカシ孔が3方に開けられ、外面にカキメ調整が施された脚部が付く。322は須恵器無蓋高杯である。体部中位に2本の稜線

を作り、その間に波状文を施す杯部で、脚部は長方形のスカシ孔を3方に開け、脚端部をヨコナデにより下方につまみ出す形態である。須恵器高杯はTK23型式ないしはTK47型式である。318は小型の椀で、肩の張る体部から直立する立上がりをもつ。立上がりの外面には波状文を、肩部には単位の短い波状文を施す。323は甕口縁部である。口縁端部は面を作り、その直下に1本の稜線を作る。稜線の直下に波状文を施す。

以上の須恵器から、SD26・27はTK23型式からTK47型式の時期に、SD28~30はON46段階からTK208型式の時期に比定される。

VII区SD32~38・40(図72・73、図版51・54~56)

324~327・329~333は土師器甕である。324は肩のあまり張らない体部に長い口縁部が付くもので、口縁端部の上端を強くヨコナデする。体部内外面はハケ調整する。325・326はいずれも体部内面はハケ調整するが、外面は326がハケ調整と推定されるだけである。327は小型で底部を欠損する。口縁部は短く、あまり外傾しない。体部内面に接合痕を明瞭に残す。329~332は口縁端部を丸くおさめ、333は口縁端部の外端をつまみ出す。体部外面はおおむねハケ調整である。内面は329・332・333がヘラケズリで、他は不明である。331・333の口縁部内面は横方向のハケ調整である。328は土師器の大型高杯の脚部である。内外面の調整は不明である。

339~353は須恵器杯蓋である。341・345・348が口径12.5cm以下であるほかは14cm以上の大型である。口縁端部はすべて内傾する面を作り、稜線は不明瞭なものが多い。344・

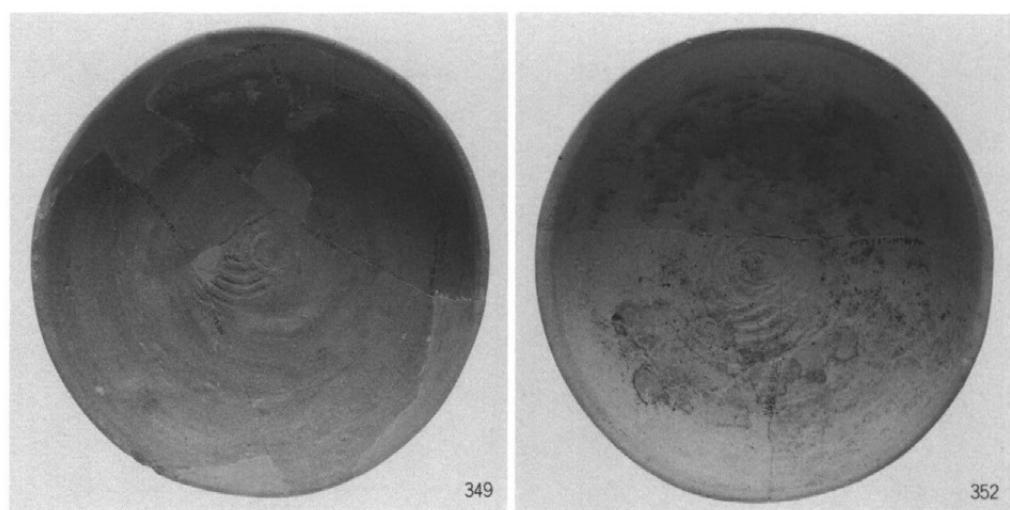


写真13　杯蓋内面の當て具痕

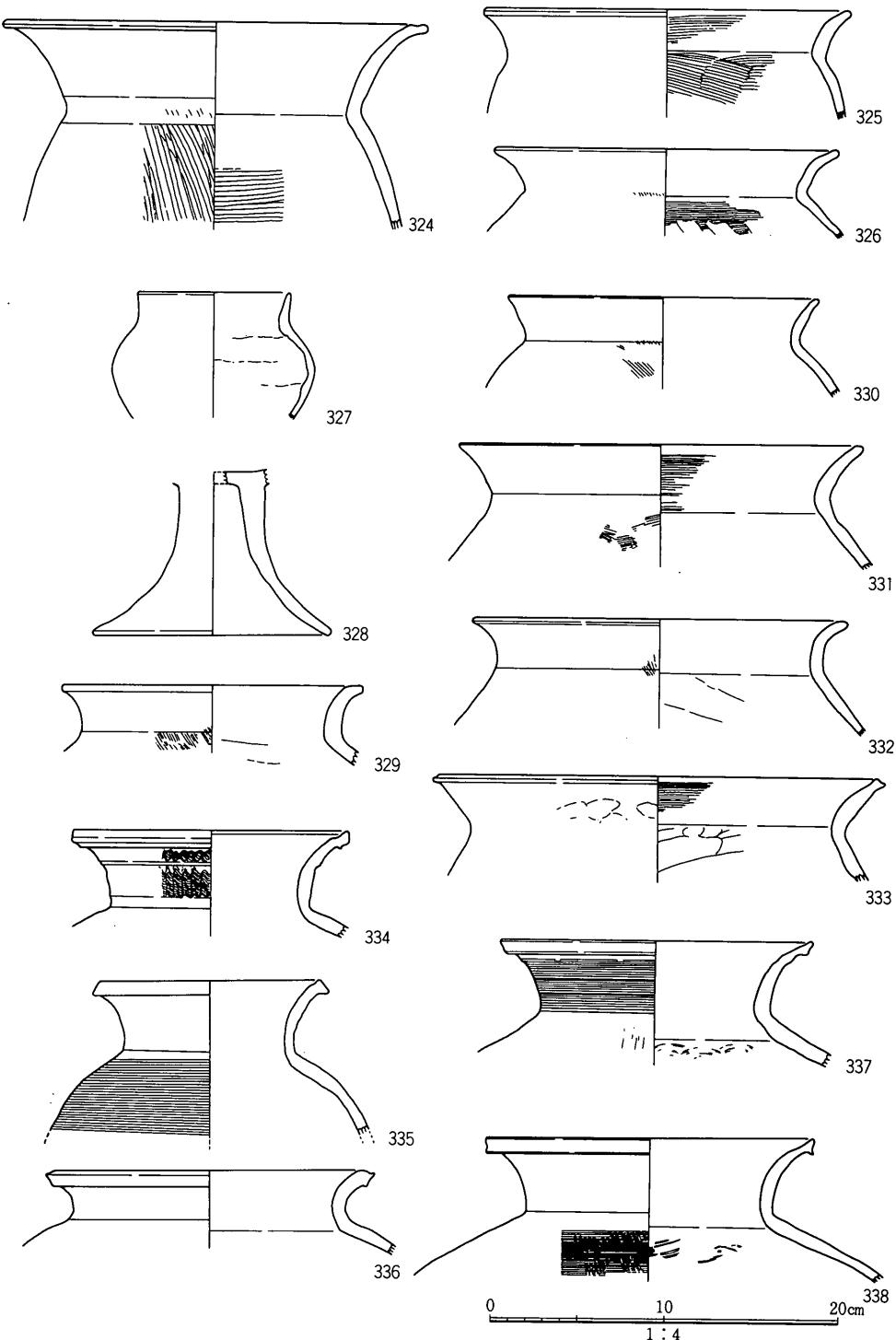


図72 VII区溝出土土器実測図

SD32(330・331・338)、SD33(332・333)、SD34(324・325・329・334)、SD36(337)、SD37(335)、SD38(326・336)、SD40(327・328)

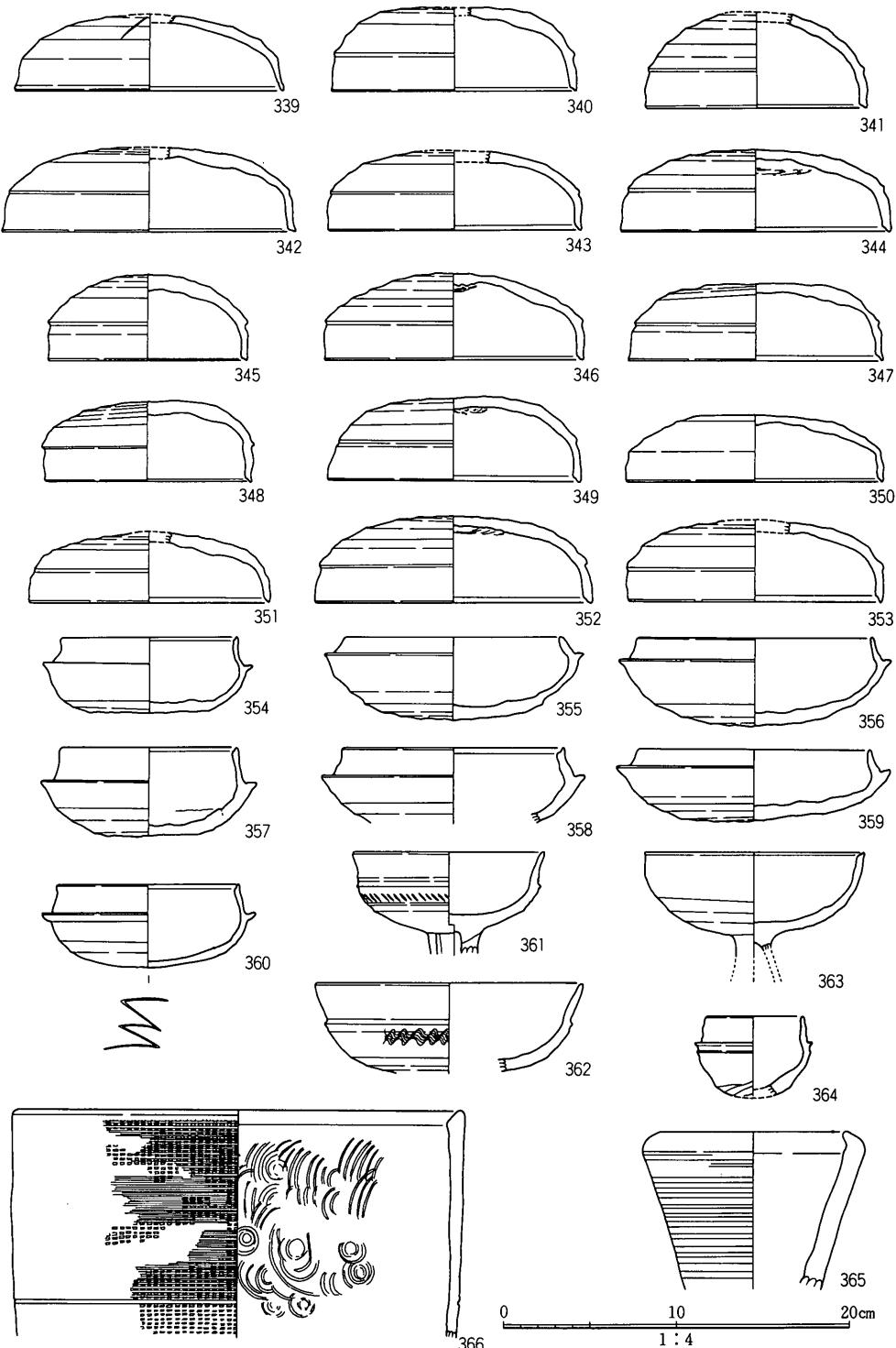


図73 VII区溝出土須恵器実測図

SD33(339)、SD34(341~344)、SD35(340)、SD36(360)、SD37(348・349・351~353・357~359・361・362・365・366)、SD38(345~347・350・354~356・363)、SD40(364)

346・349・352の天井部内面に同心円文の当て具痕が残る(写真13)。他のものは一定方向のナデ調整をしている。339の天井部外面には「×」と推定されるヘラ記号がある。

354～360は須恵器杯身である。354・357・360が口径10cmであるほかは12～14cmである。355・356・359の口縁端部は丸く終る。ただし、356は上端部から直下の内面に1条の凹線が施されている。他のものの口縁端部は内傾する面を作る。360の底部外面にはジグザグのヘラ記号がある。361～363は須恵器の無蓋高杯の杯部である。361は2条の凹線の間に列点文を施すもので、長脚の脚部が付くと思われる。362は外面に波状文を施す。363は内湾ぎみの杯部で、口縁端部はわずかに外方につまみ出す。脚部の杯部との接合部は細く絞られている。杯部の内外面はヨコナデ調整で、文様はない。これは全体を回転を用いたヨコナデ調整する以外は、土師器の高杯の形状を強く意識したものであり、土師器を模倣して作られたと考えられる。364は須恵器の小型碗である。把手の有無は不明である。底部外面を静止ヘラケズリするほかはヨコナデ調整で仕上げる。体部中位に2本の稜線を作る以外に加飾されていない。365は須恵器鉢で、厚い粘土円板の底部が付くと推測される。口縁端部は内上方につまみ出す。外面はカキメ調整で、内面はヨコナデで仕上げる。366は須恵器甌の上半部である。口縁端部は内傾する面を作る。外面は格子タタキで中位と推定される位置に1条の凹線が施される。内面は同心円文の当て具痕が明瞭に残る。334～338は須恵器甌の口縁部である。いずれも口縁端部は面を作る。334の口縁端部の外面直下には1本の稜線がみられ、その下で口縁部中位のやや上方にも1本の稜線が作られている。これらの稜線の間と頸部との間には波状文が施されている。337の口縁部外面はカキメ調整で、体部外面は平行タタキである。338は体部外面は平行タタキののちカキメ調整する。335の体部外面はカキメ調整で仕上げる。内面はナデで仕上げ、当て具痕はみられない。336は短い口縁部で、体部も含めて内外面ヨコナデ調整である。

以上の須恵器はTK47型式からTK10型式のものが中心であるが、339・350のように稜線が不明瞭な蓋や立上がりの短い355・359のような杯身があるなど、TK43型式に近いものも含まれる。

VII区SD39(図74、図版47・51・52・56)

367～372は土師器高杯である。杯部の形態が内湾ぎみで、端部を丸くおさめるもの(367・368・370)と口縁端部を外方に屈曲させるもの(369・372)がある。前者のうち368の杯部内面には放射状の暗文がみられ、脚部との接合部外面にはハケメが残る。後者は杯部外面にハケメが一部残り、内面にもそれが認められる。368・370・371の脚部と杯部の

接合は、棒を軸にして製作された脚部に杯部を作り付けたものと思われる。一方、372の脚部内面の上端には棒の痕跡が認められず、異なった製作工程がとられたものと推測できる。374～377は土師器甕である。374は口径11.1cmの小型で口縁端部内面を若干肥厚させる。体部の外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。375は小型で長胴形の体部である。口縁部は短い。焼成が悪いため器面が脆く、内外面の調整は不明である。376は口径18.5cmで、口縁部の形態は374と同じである。頸部外面を強くヨコナデする。外面調整は不明だが、内面はユビオサエである。377は分厚い口縁部をもつ甕である。373は土師器のミニチュア甕である。口縁部はヨコナデ調整するが、体部は内外面ともナデで粗雑に仕上げる。これと類似したミニチュア土器にⅧ区SE01出土の202がある。

378は須恵器杯蓋である。端部に内傾する面を作る口縁部である。379は須恵器甕で、球形に近い体部に外傾する口縁部が付く。口縁端部は上方にわずかにつまみ出し、その直下に1本の稜線を作る。体部外面の調整は平行タタキで部分的に横方向のナデが認められる。内面は同心円文の当て具痕が明瞭に残されている。須恵器についてはTK23型式である。

VIII区SD41・43～45(図75、図版51・52・55・56)

380は土師器甕で、口径15.2cm、器高16.0cmである。わずかに長胴ぎみの体部で、底部は直径5cmほどの範囲が平坦になっている。口縁部は端部を外方につまみ出すようにしている。調整は口縁部内外面がヨコナデ調整、体部外面が縦方向のハケ調整、内面は横方向に近いヘラケズリである。381は土師器甕である。上方に向って開く形態の体部で、口縁端部はヨコナデにより内傾する面を作る。平底の底部には中心に円形、その周囲に3個の楕円形の蒸気孔を穿っている。把手は体部のやや上位にあり、扁平に作られている。口縁部の内外面はヨコナデ調整で、その他の外面は縦方向のハケ調整であるが、下半部は器面が剥離しているためハケメが不鮮明である。内面は上半部がナデ調整、下半部は下から上へのヘラケズリである。

382・383・386は須恵器蓋杯である。382の蓋は天井部がヘラケズリにより平坦になっており、長い口縁部をもつ。383の蓋は丸い天井部で、端部が内傾する面をなす口縁部である。386はやや内傾ぎみの立上がりで、端部は面を作る。体部外面のヘラケズリは上方まで及ぶ。いずれもTK216型式に属すると考えられる。384は須恵器有蓋高杯の杯部である。脚部は欠損するが、底部に残る痕跡から、長方形のスカシ孔が3方に開けられていたことがわかる。立上がりは短く、端部に内傾する面を作る。TK47型式である。385は筒形器台の上部で、口縁部を欠く。受部の下半部と思われる外傾する部分の外面は、1条の凹線と

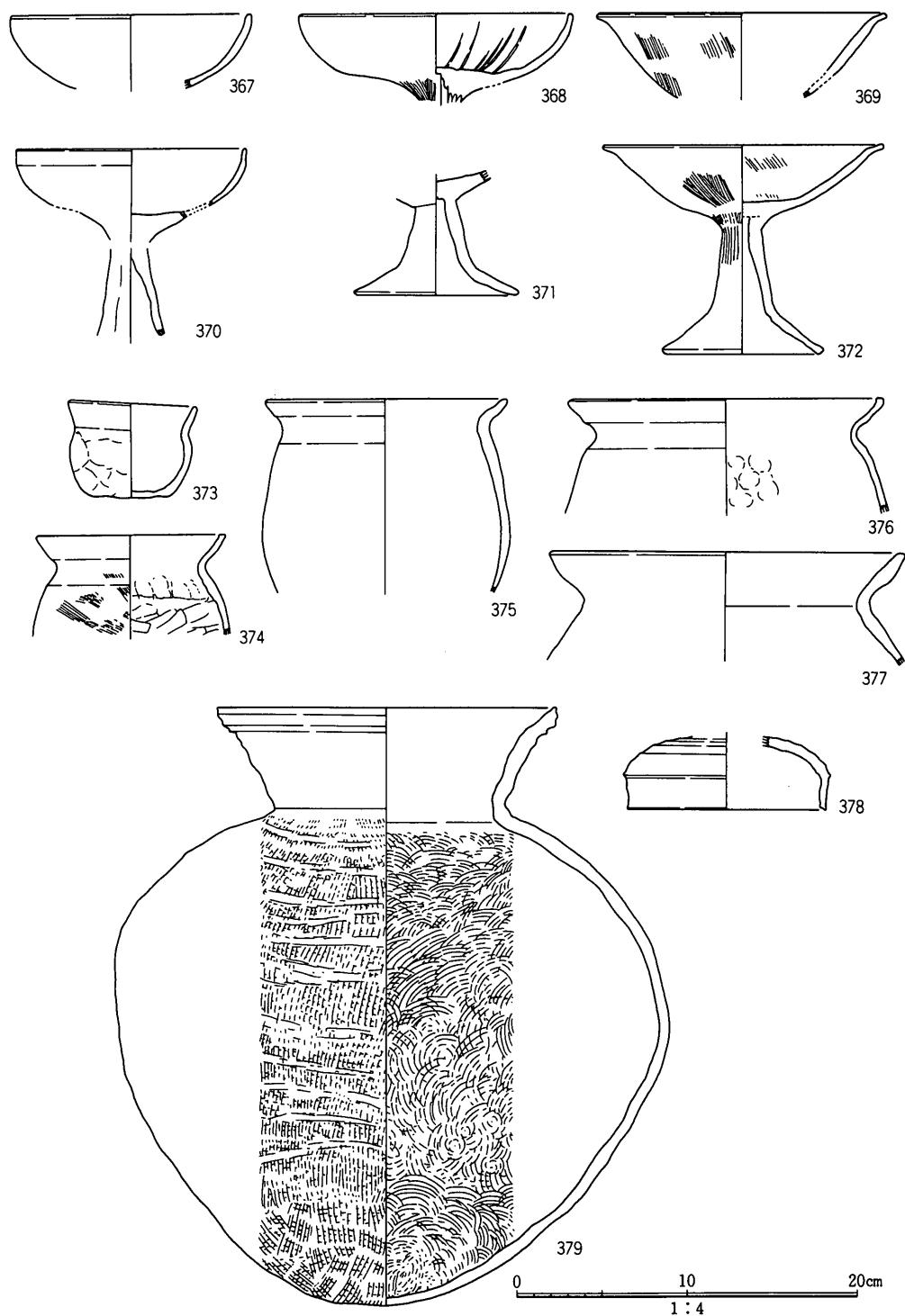


図74 VII区SD39出土土器実測図

波状文が密に施され、三角形のスカシ孔が4方に開けられている。頸部から肩部の外面はヨコナデ調整で、施文はなされていない。これ以下の筒形部の外面は2条一組の凹線帯が、約4cm間隔であり、その間は2帯の波状文が施される。また、三角形のスカシ孔が6方に開けられている。内面はおおむねヨコナデ調整である。

IX区SD46~51(図76・77、図版52・55)

土師器 杯・鉢・甕がある。

388は口縁部が短く、「く」字形に屈曲する杯である。口径12.5cmで、体部下半は欠損する。内外面の調整はヨコナデおよびナデである。

395は口径19.8cmの鉢で、内外面の調整はヨコナデおよびナデである。砂粒の少ない精良な胎土である。

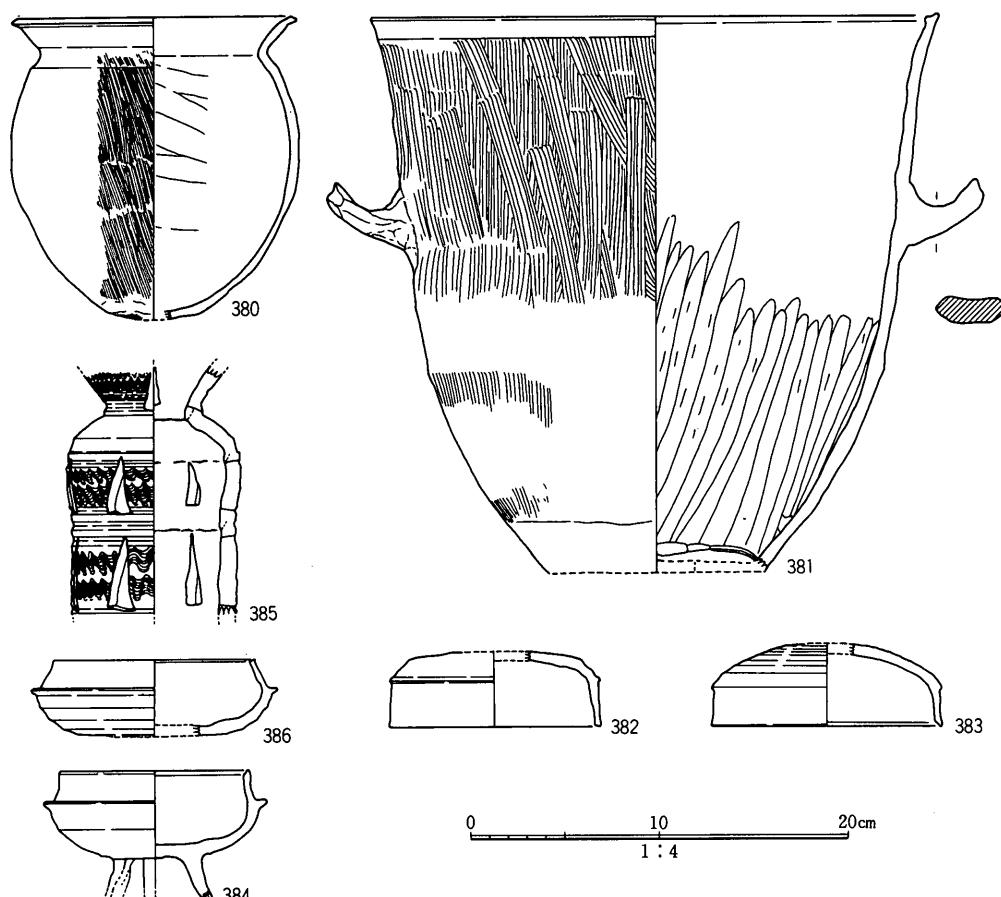


図75 Ⅷ区溝出土土器実測図

SD41(380・385・386)、SD43(382)、SD44(381・383)、SD45(384)

甕は393が完形であるが、他は口縁部付近の破片である。390は二重口縁で、端部は内面を肥厚させる。口縁内面の下間にハケメが施されている。389はあまり外反しない口縁部で、頸部外面を強くヨコナデ調整して、口縁部外面に稜を作り、口縁端部は内傾する面を作る。391～393は「く」字形に屈曲する口縁部をもつ甕で、391の口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。体部外面はいずれもハケ調整、内面は391・392がナデ調整、393はハケ調整である。394はやや内湾ぎみの短い口縁部をもつ甕である。口縁端部はやや肥厚する。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整で、口縁部にはかすかにハケ調整が残る。これらの甕の口縁部は389・390・394などに中部瀬戸内地域での出土資料との類似性があり、胎土も他の土器とやや異なっている。

須恵器 蓋杯・高杯・器台・脚付椀・椀・甕がある。

蓋杯396～398は口径12～14cmのもので、397は口縁部がやや外反ぎみである。杯身は399～401が口縁端部に面を作り、TK23型式ないしはTK47型式と思われるが、402は立上がりが短く端部は丸く終り、TK10型式またはTK43型式であろう。

高杯蓋403・404は大きなつまみをもち、天井が高い。405は高杯脚部である。外面をカキメ調整したのち、三角形のスカシ孔を3方に開ける。

411は器台の脚部である。2本一組の稜線帯で外面を区切る。その間にはカキメ調整のうちに波状文を施す。スカシ孔は三角形で、数は不明である。裾部外面にも波状文が施される。いずれもTK23型式またはTK47型式と思われる。

410は口径11cm、器高11cmの直線的に延びる体部の椀に高杯の脚部と同じ形態の脚が付く器形である。椀と脚部は接合できないが、胎土や椀底部に残る脚部断面からみると同一個体である。椀の体部中位の外面に2条の凹線を施す。底部はヘラケズリである。口縁端部は丸く終る。脚部は裾部が欠損しているが、長方形のスカシ孔が3方に開いていたと推定できる。台付椀の粗型であろうか。

408・409は椀である。408は把手付で底部は欠損する。体部中位の外面に波状文を施す。把手は断面円形の小さなもので、上部に球形の粘土塊を付けている。409は把手を付けない小型の椀である。外面に文様はない。

406・407は甕であるが、いずれも口縁部を欠き、体部中位に円孔を穿つ。406の体部最大径は12cm、407は20.6cmである。406は2本の稜線の上下に列点文を、407は2条の凹線間に波状文を施す。

417・418は甕の口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。419の甕は体部外面を平行タタ

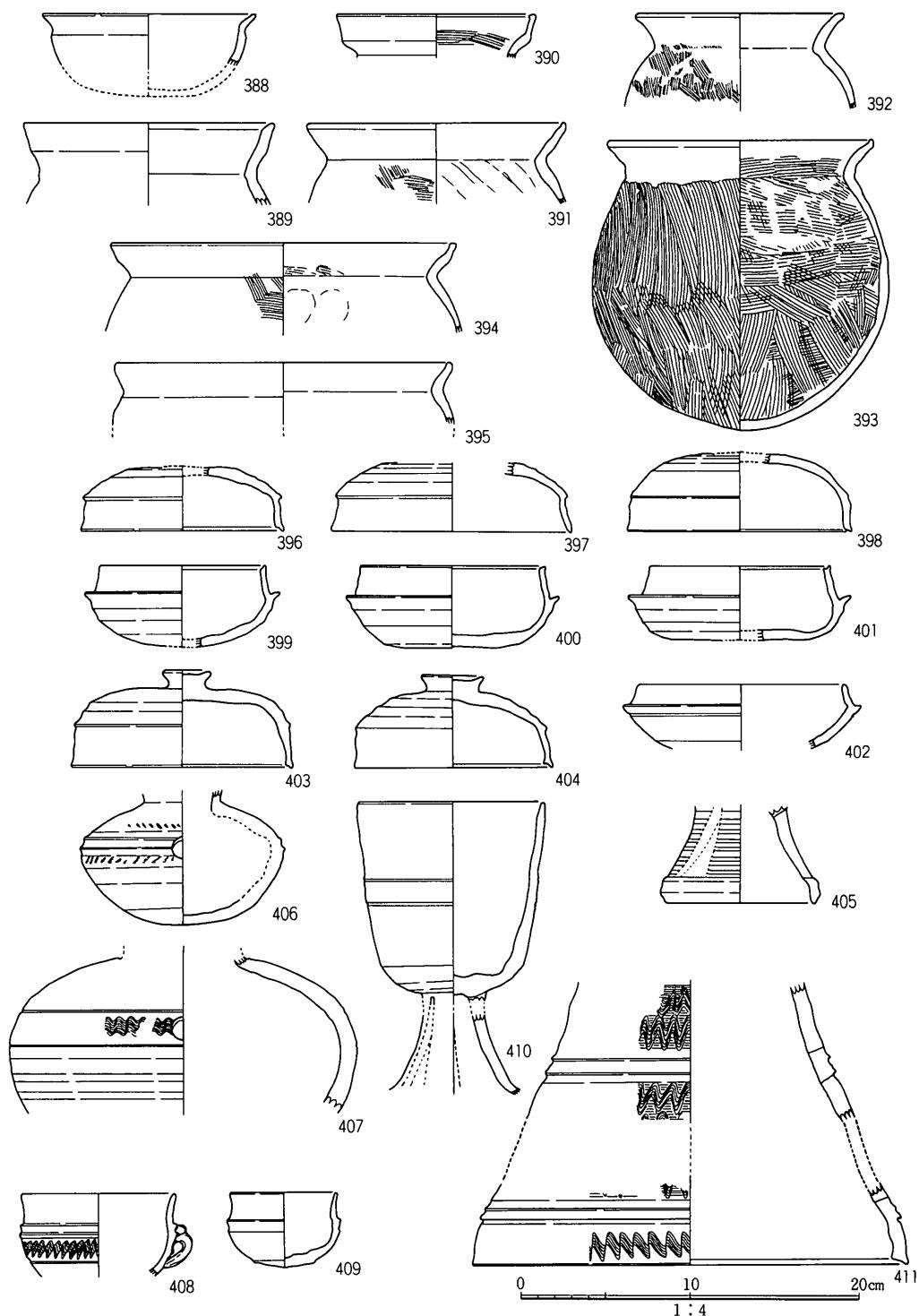


図76 IX区溝出土土器実測図

SD46(400・401・404)、SD47(391~394・398・406・407・409)、SD49(402)、SD50(388・389・395・411)、SD51(390・396・397・399・403・405・408・410)

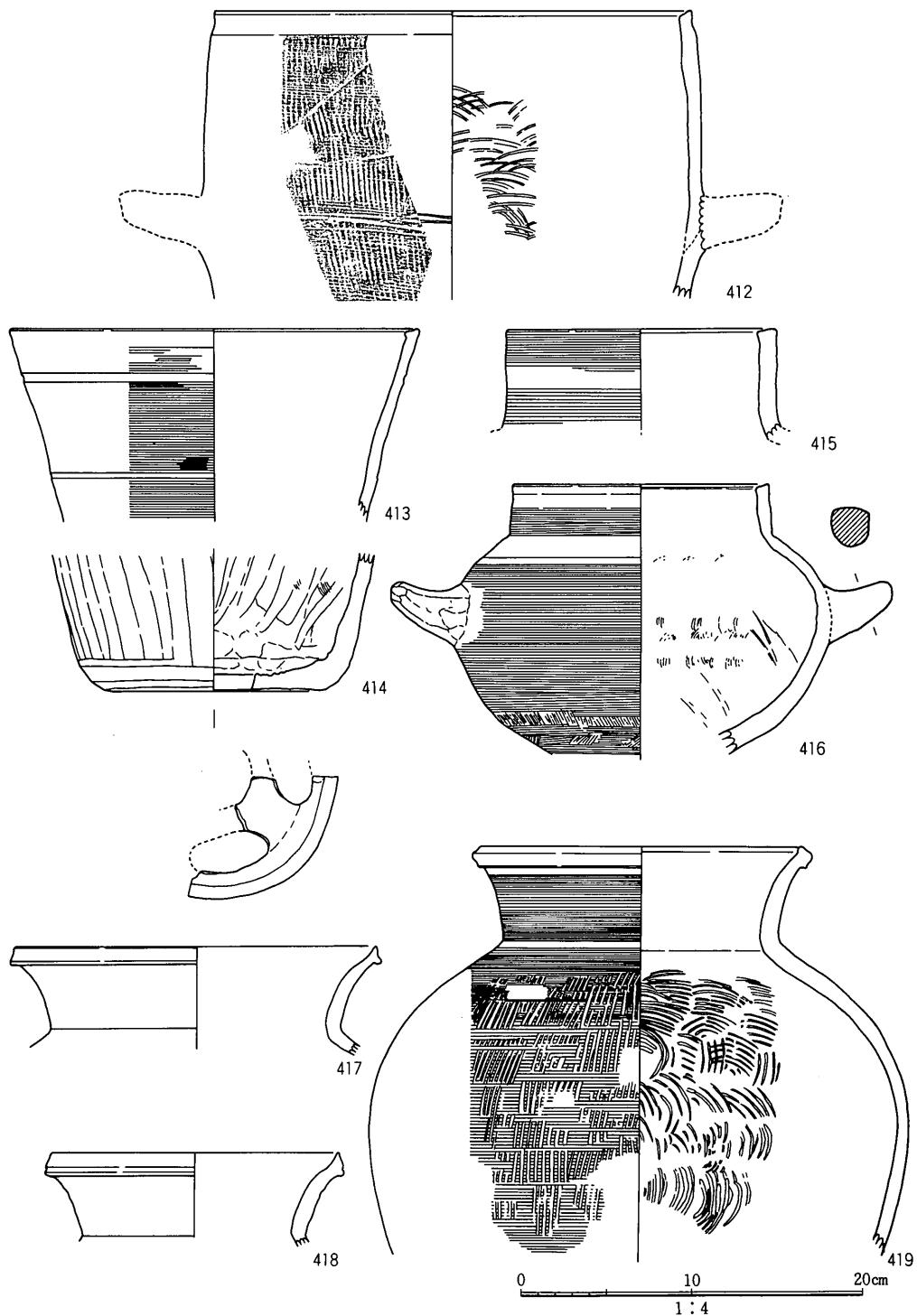


図77 IX区溝出土須恵器実測図
SD48(417)、SD51(418・419)、SD52(412～416)

キしたのち、全体にカキメ調整で仕上げている。体部内面には同心円文の当て具痕が残る。

以上の須恵器からみて、これらの構造遺構は、SD49がTK10型式に下るほかは、おおむねTK23型式ないしはTK47型式の時期に比定されよう。

IX区SD52(図77~81、図版57~60)

土師器 高杯・壺・甕・甌・羽釜・脚部片がある。

高杯420の杯部は口縁部が内湾ぎみとなる形態で、内面に放射状の暗文がある。外面は口縁部はヨコナデするが、他はハケメをよく残す。421は杯部と脚部の接合部で、脚柱状部を軸にして杯部が成形されたものと思われる。

小型の直口壺425は球形の体部に斜め外方に直線的に延びる口縁部をもち、口縁端部は薄く仕上げる。体部上半から口縁端部までの外面はヨコナデ調整で平滑に仕上げ、体部下半部は板状の工具でヘラケズリのように軽く調整する。内面は口縁部はヨコナデであるが、体部は板状の工具でナデ調整する。胎土は砂粒が少ない精良な胎土である。426はやや扁平な球形に近い体部で、直線的な口縁部が付く。端部は内傾する面を作る。口縁部の内外面はヨコナデ調整するが、体部の内外面はハケ調整で、内面の下半部はヘラケズリが加えられている。砂粒を多く含む胎土である。

422・423は口径10cm前後の小型の甕である。422は肩の張らない体部で、内外面ハケ調整する。427~432も甕である。427は布留式の系譜を引く甕の口縁部で、口縁端部をわずかに肥厚させる。428~430はいずれも口縁端部をわずかにつまみ上げたり、丸く肥厚させる。431は長胴の体部で、外面はハケ調整、内面はハケ調整ののち、ナデ上げる。432は二重口縁の甕で、体部は球形を呈すると推定される。口縁部外面の稜線は鈍く、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は横方向のナデ調整で、内面はヘラケズリを施す(註5)。

433~435は甌である。口縁端部は433が内上方につまみ上げ、434は内側につまみ出し、上端に面を作る。435は薄く終る。433・435の体部外面はハケ調整、内面もハケ調整である。434の外面はナデである。433の底部は平底で、蒸気孔は中央に円形、その周囲に3個の橢円形孔が開けられていたと推定される。把手は欠損していた。

436は羽釜の鍔部である。鍔の下面には煤が付着している。生駒西麓産の胎土である。424は底径8.1cmの低い脚部である。赤色粒や雲母の極細粒を多く含む精良な胎土を用いており、橙色を呈するが硬質に焼きあがっている。

須恵器 蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・高杯脚部・波状文を施す蓋杯・器台・壺・椀・鉢・甌・甕がある。

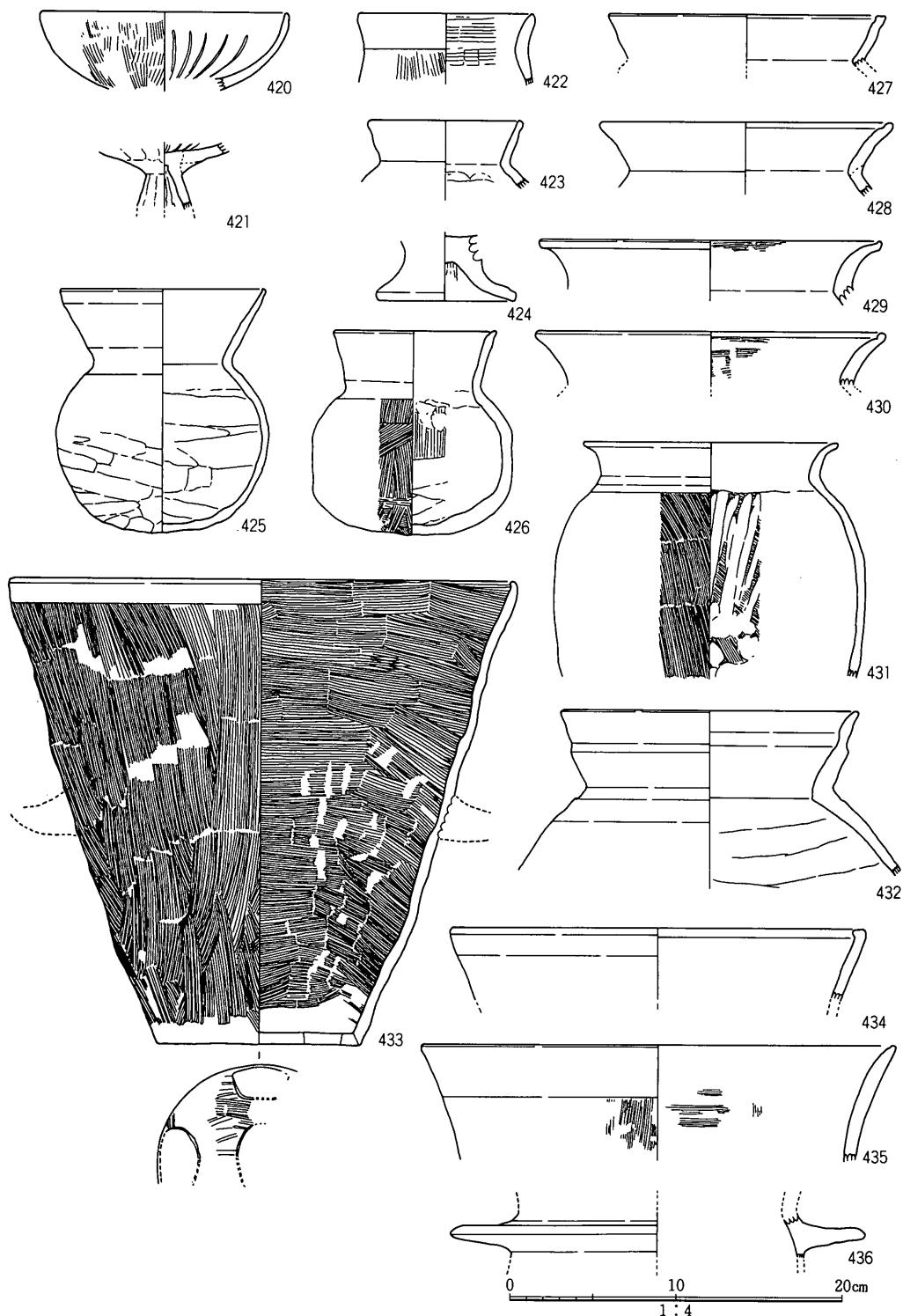


図78 IX区SD52出土土師器実測図

437～448は杯蓋である。口径が13cmを切る437・439を除いて14cm以上の大型で、16cmに及ぶものがある。天井部は丸くなるものが多いが、448は焼け歪んで凹む。稜線から口縁部が拡がるようになる傾向があり、口縁端部は内傾する面を作るものがほとんどで、下端部に面を作る444・447もある。天井部外面のヘラケズリは中心部の狭い範囲のみにみられる。442・444は天井部内面の中央部には同心円文の当て具痕があるもので、他はナデで仕上げている。449～462は杯身である。449が口径12cmを下回り、やや小ぶりであるが、他は口径13cm以上あり、462が最大で口径15cmを越える。立上がりは概して短く、口縁端部は内傾する面が明瞭な450・452・453・460・462のほか、これが不明瞭であったり、丸くおさめるものも多い。外底面のヘラケズリの残る範囲も狭く、455の内底面中央には同心円文の当て具痕がみられる。また、458の外底面には「×」のヘラ記号がある。457・458のように外底面に黒斑のあるものや焼きむらの顕著なものが含まれる(写真14)。

以上の蓋杯の特徴はMT15型式やTK10型式のものである。

463～465・467・468は高杯蓋で、464・468はつまみを欠損する。口径が13～14cmの464・465・467と口径17cmの468に分類できる。いずれも天井部は丸く、稜線を作つてやや開きぎみの口縁部が付く。口縁端部はすべて内傾する面を作る。468の天井部外面にはつまみを中心にして列点文が巡る。464・465・467は調整・胎土・焼成などがよく似ており、しかも465・467のつまみ上面には「一」の同じヘラ記号がある。これらの蓋を用いる有蓋高杯には短脚の475、長脚一段スカシの473・474、長脚二段スカシの470・471の3種がある。胎土の特徴などから、464・465・467の蓋と470・471が組み合う(写真16)。475は口縁端部に内傾する面を作り、脚端部をヨコナデ調整で下方に延ばすもので、長方形のスカシ孔を3方に開ける。口径は10.2cmと小さく、TK47型式であろう。

473・474は長脚一段スカシの有蓋高杯で、口径が12.5～15.0cmと大きく、口縁端部は474がわずかに内傾する面を残すが473は丸くおさめる。杯部内面の中央部に同心円文の当て具痕が蓋杯に比べて広い範囲に残る(写真15)。脚部は長く、長方形のスカシ孔が3方に開けられている。473の脚部外面の上部にはカキメ調整がなされている。472は脚部を欠くが、473の杯部と類似しており、同じタイプのものと思われる。472～474の大型の杯部の高杯の蓋は468がふさわしい。

470・471は口径が11～12cmの長脚二段スカシの有蓋高杯である。口縁端部は丸くおさめる杯部で、長い脚部が付く。脚部の上段には長方形のスカシ孔が3方に、下段には三角形のスカシ孔が3方に開けられている。470の脚部には上段と下段を区切る平行する2条の凹

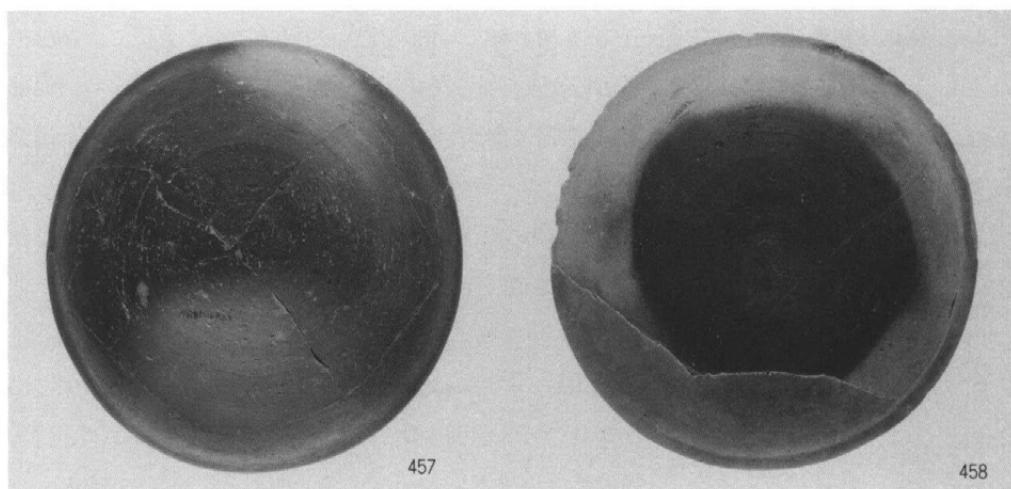


写真14 焼きむらのある須恵器

線がある。脚裾部にも凹線があり、やや屈曲させ、端部は丸く終る。また、469も調整・胎土・焼成において470・471と共に通した特徴をもっており、同じタイプと思われる。469～471の杯部内底面にはいずれも同心円文の當て具痕がかすかに残っている。469～471の高杯の調整・胎土・焼成は蓋の464・465・467と類似しており、口径からみても両者が組み合うものと考えられる。

476～478は外面に波状文を施す無蓋高杯の杯部で、476は口径11cmと小型である。479は杯蓋を逆位にした形態の杯部の無蓋高杯である。脚部は長く、長方形のスカシ孔を3方に開け、裾部に凹線を施す。脚柱状部の外面はカキメ調整する。480・481は長脚一段スカシの脚部で、いずれも裾部を欠く。481は長方形のスカシ孔を3方に開け、外面をカキメで仕上げる。480のスカシ孔の数は不明である。

482・483は波状文を施す蓋杯である。482は外面の稜線の上位に、483は受部の下位に波状文を施す。前者は天井中央部を欠き、後者は底部を欠くため、有蓋高杯とその蓋と考えることもできる。

484は高杯形器台の杯部である。やや浅い形態で、外面のやや上位に1本の稜線を作る。この稜線と口縁部との間に波状文を施す。調整は平行タタキを施したのちにカキメ調整している。内底面には同心円文の當て具痕が残る。485・486は器台の脚部である。いずれも2条一組の凹線帯で外面を区切り、その間に波状文を施す。486は裾部にも波状文を施す。両者とも数は不明だが三角形のスカシ孔を開けている。外面の最終調整はともにカキメである。

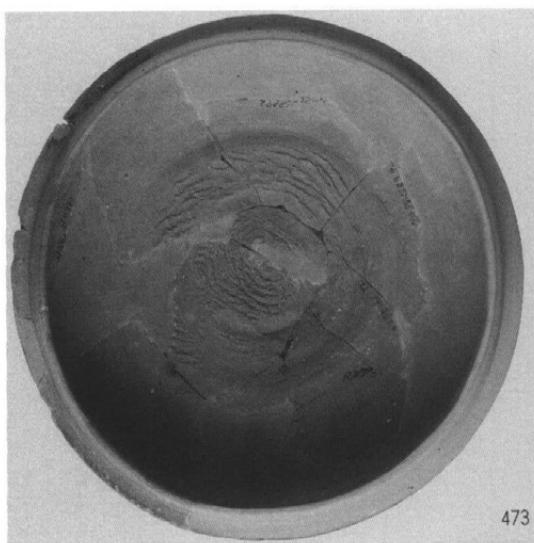


写真15 高杯内底面の当て具痕



写真16 須恵器有蓋高杯と蓋

488はやや内湾ぎみの口縁部となる丸底の椀である。外面の体部中位に3条の浅い凹線を施す。

489は厚い円板状の底部をもつと推定される鉢の口縁部である。外面はカキメ調整する。

466は壺の蓋である。丸く高い天井部の中央につまみが付く。つまみの周りには列点文が巡る。487は肩の張る体部の小型壺である。口縁部は欠損する。外面の文様はない。490は長頸壺の口縁部である。上方に大きく拡がり、1本の稜線を作つてその上下に波長の短い波状文を施す。491は外面に波状文を施す壺の口縁部である。

416はやや扁球形の体部に、直立して上端に面を作る口縁部をもつ壺で、体部中位に甌の把手に類似した把手を付ける。体部外面は平行タタキを施したのち全体をカキメ調整で仕上げる。内面は同心円文の当て具痕が一部に残るが、おおむねヨコナデ調整で整えている。415も同様な形態の壺の口縁部と思われるが、416より大型である。

412は直立する体部で、口縁端部に面を作る甌である。把手と底部は欠損する。把手の付く位置の外面に2条の凹線が巡る。外面は格子タタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。413も甌で、把手を欠く上半部である。把手の位置に1条の凹線が巡る。口縁端部は内傾する面を作る。外面はカキメ調整、内面はヨコナデ調整である。414は甌の底部である。底面に円孔を中心に4個の楕円形孔が開けられていたと復元できる。外面の底部付近はヘラケズリ調整、それ以上は縦方向のナデである。内面はヘラケズリしているが、内底面に同心円文の当て具痕が残る。黄橙色を呈するため土師器に類似するが、調整痕や胎土の特

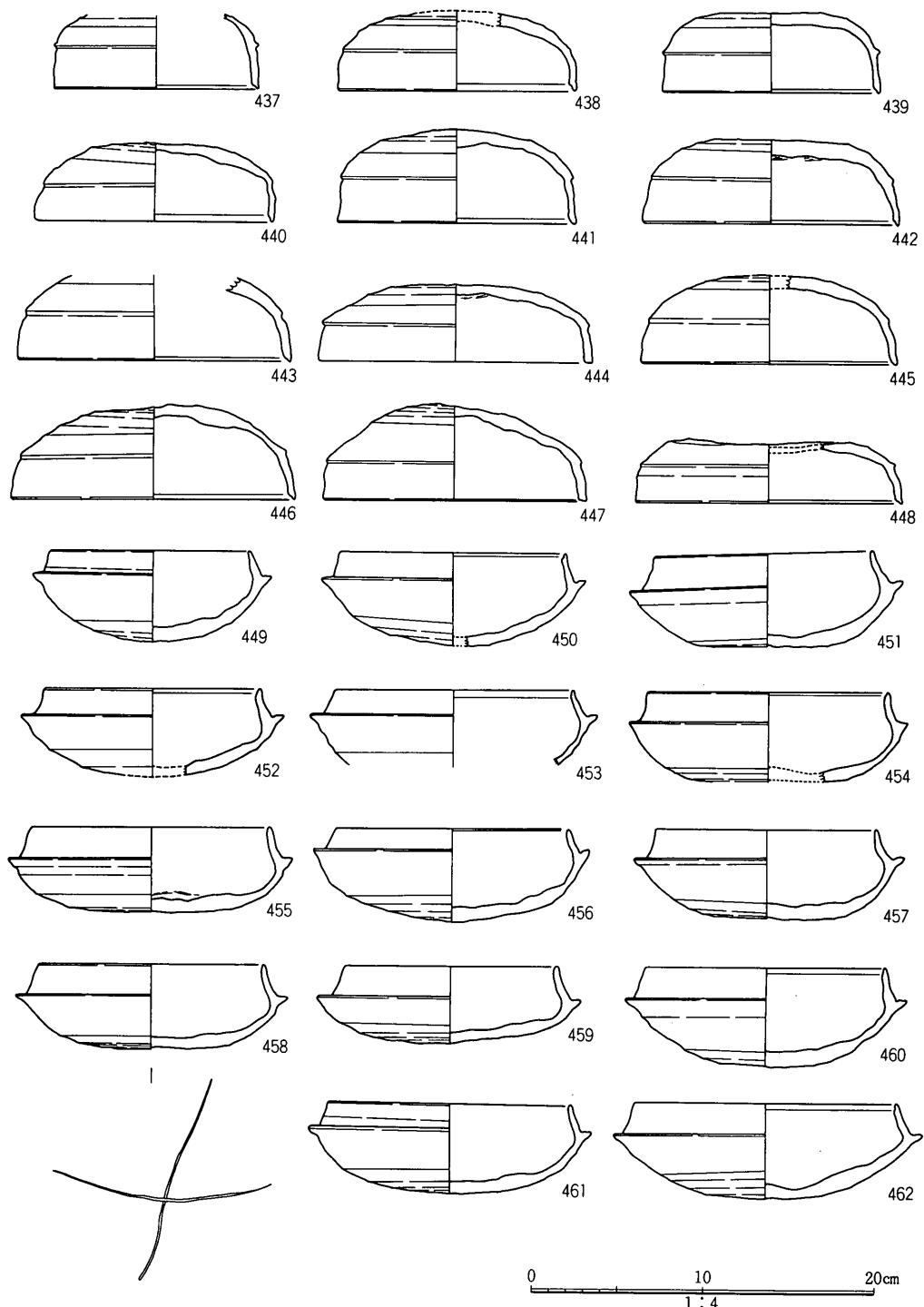


図79 IX区SD52出土須恵器実測図 (1)

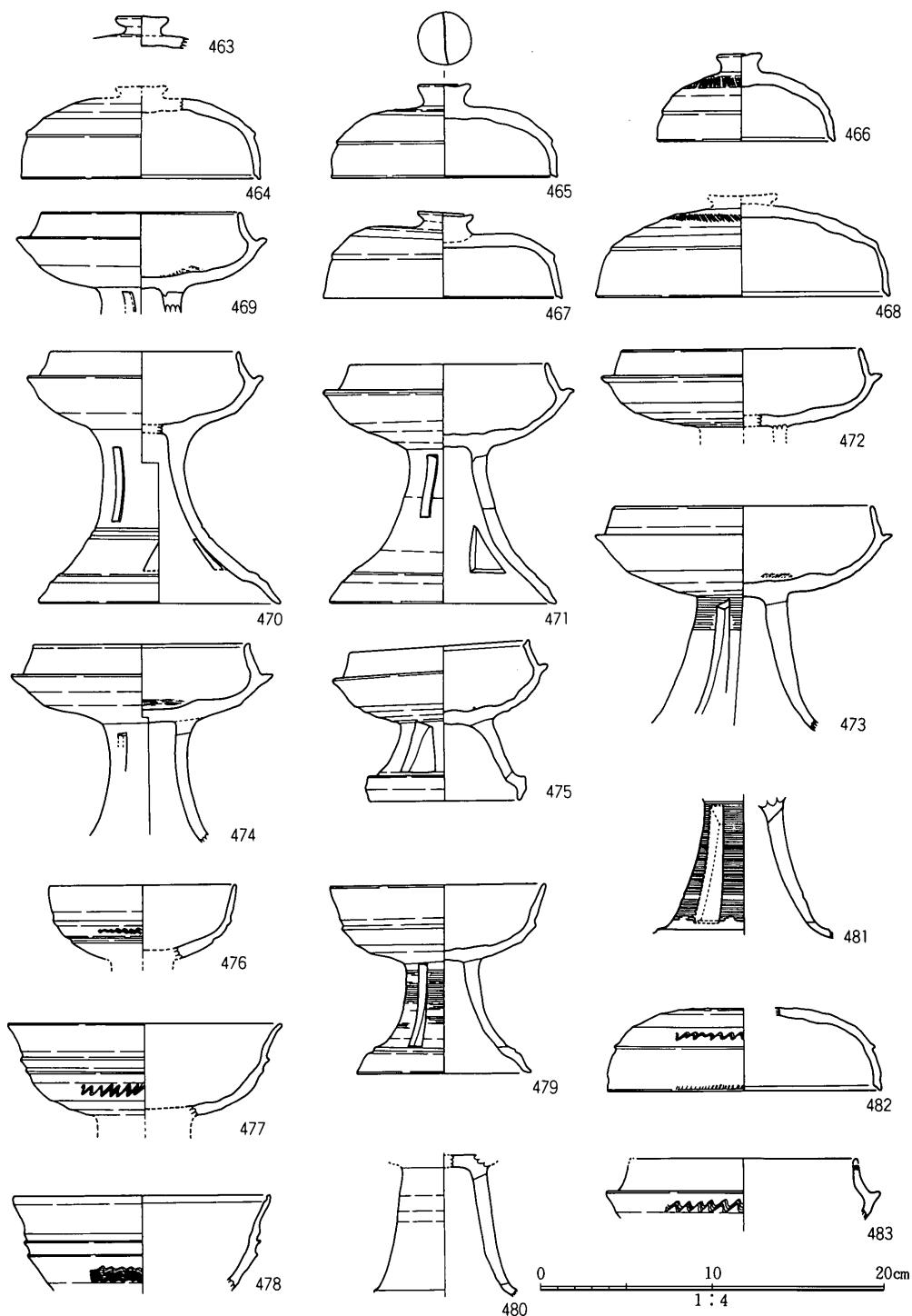


図80 IX区SD52出土須恵器実測図（2）

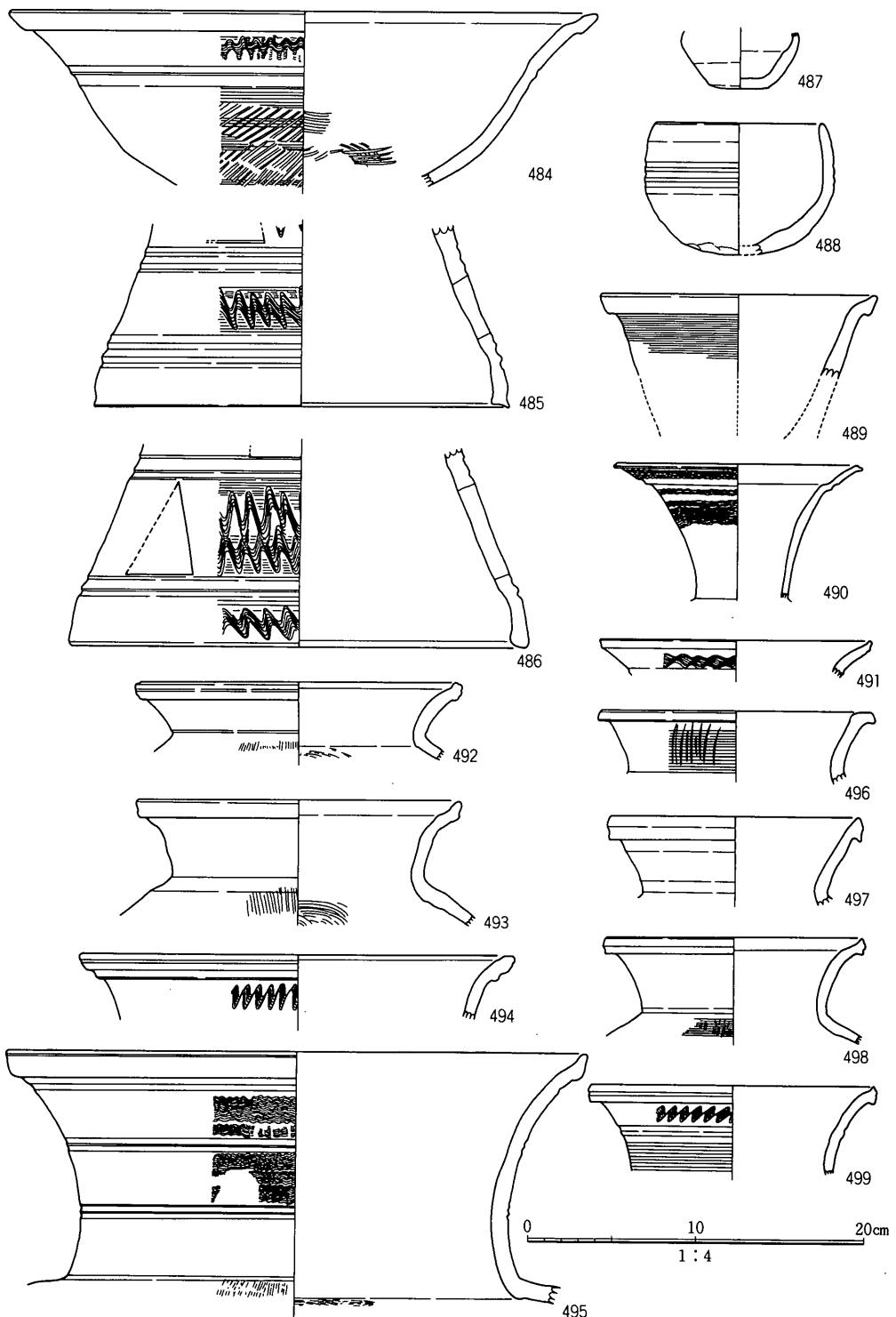


図81 IX区SD52出土須恵器実測図（3）

徴からみて須恵器と考えられる。

492～499は甕の口縁部である。このうち495は大型甕の口縁部で、外面に3本の稜線を作り、その間に波状文を密に施す。496は口縁端部を外方に拡張する特異な形態を示し、外面はカキメ調整をしている。

v) 包含層出土の土器(図82～84、図版61～63)

ここでは長原6層ないし7層から出土した古墳時代の土器について記述する。

土師器

高杯・鉢・壺・甕・把手がある。

高杯杯部は口縁部が内湾ぎみになる500と端部を外反させる502がある。501は脚部の柱状部外面を縦方向にナデ調整している。500のような杯部が付くものと思われる。503の脚部は裾部が短く、粗雑に作られており、小型高杯のものであろう。

505の鉢は器壁を薄く作り、精良な胎土である。

504は小型の壺で、外底面はヘラケズリである。その他の内外面はナデ調整で、精良な胎土を用いる。

506は小型の甕で、内外面ハケ調整する。507の甕は二重口縁のもので、体部外面はハケ調整したのちナデ仕上げを行い、ほとんどハケメは残っていない。内面はナデ調整で、底部はユビオサエである。黄白色を呈する色調で、他の甕と胎土が異なる。中部瀬戸内地方や山陰地方にもみられる形態である。508～511は長胴甕と思われる。508は底部を欠くが、体部外面は上半を細かい縦方向のハケ調整し、下半部は原体の異なるやや粗いハケ調整をする。内面も上半は細かいハケ調整を横方向に施し、下半部は粗いハケ調整を横方向に施す。509・510もほぼ同様の調整と思われるが、511の体部内面はヘラケズリである。

512の把手は扁平で、上面に1cmの間隔をあけて2個の小孔がある。

須恵器

蓋杯・高杯・壺・甕・鉢・把手付椀・甕・器台がある。

杯蓋は口径が12cm台の小型513～515と、口径14cm以上の大型516～523がある。いずれも口縁端部は内傾する面を作る。517・520・523の天井部内面には同心円文の当て具痕が残る。杯身は口径10cm前後の524～526と12cm以上の527～532がある。口縁端部は丸く終る527・529・530のほかは内傾する面を作る。

有蓋高杯535は長方形のスカシ孔を3方に開けた脚部をもつ。536は脚端部を丸く作り、4方にスカシ孔を開ける。537も4方にスカシ孔を開ける。538は長脚二段スカシの脚部

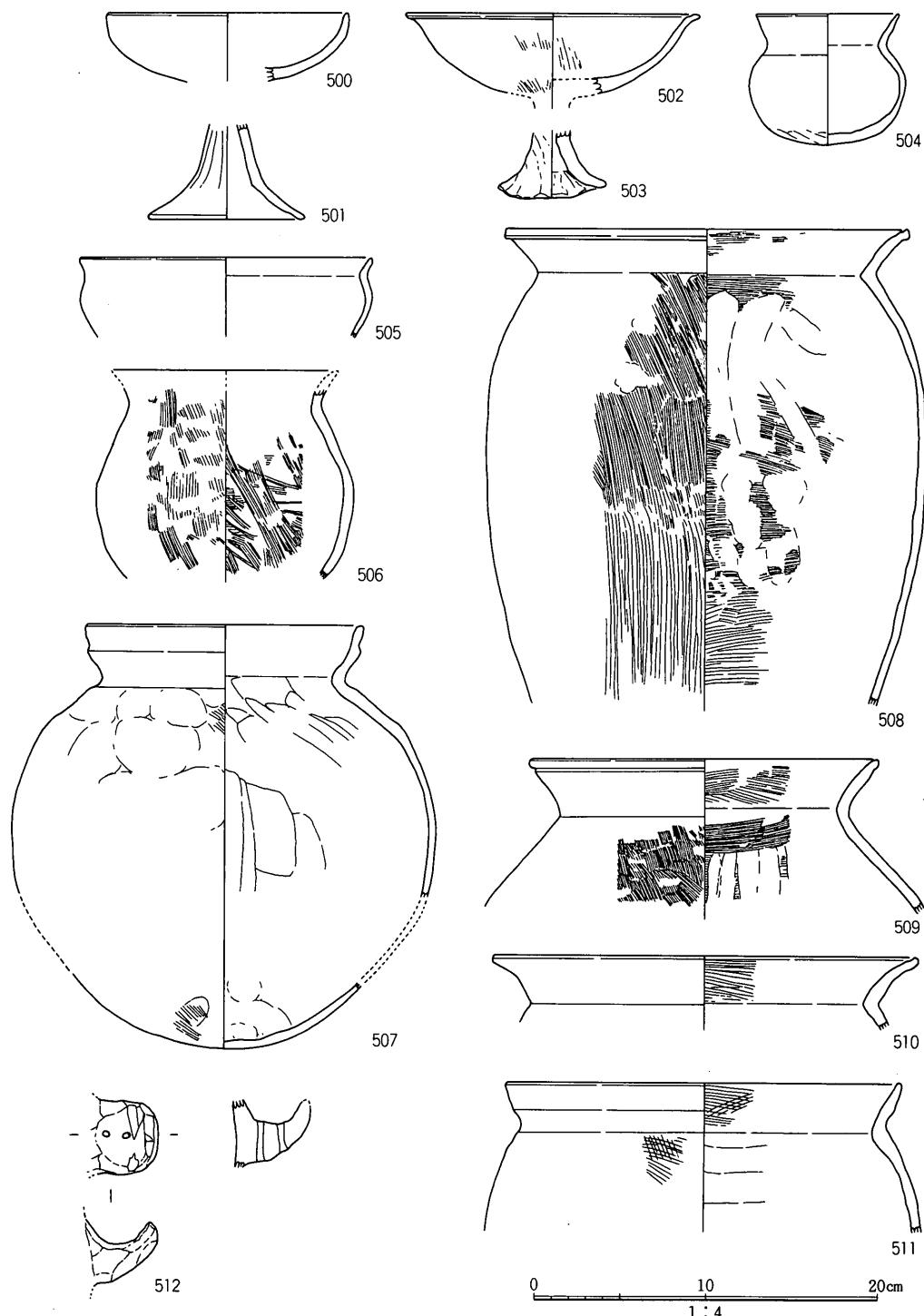


図82 長原6・7層出土土師器実測図
V区(504)、VII区(505・510~512)、VIII区(502)、IX区(500・501・503・506~509)

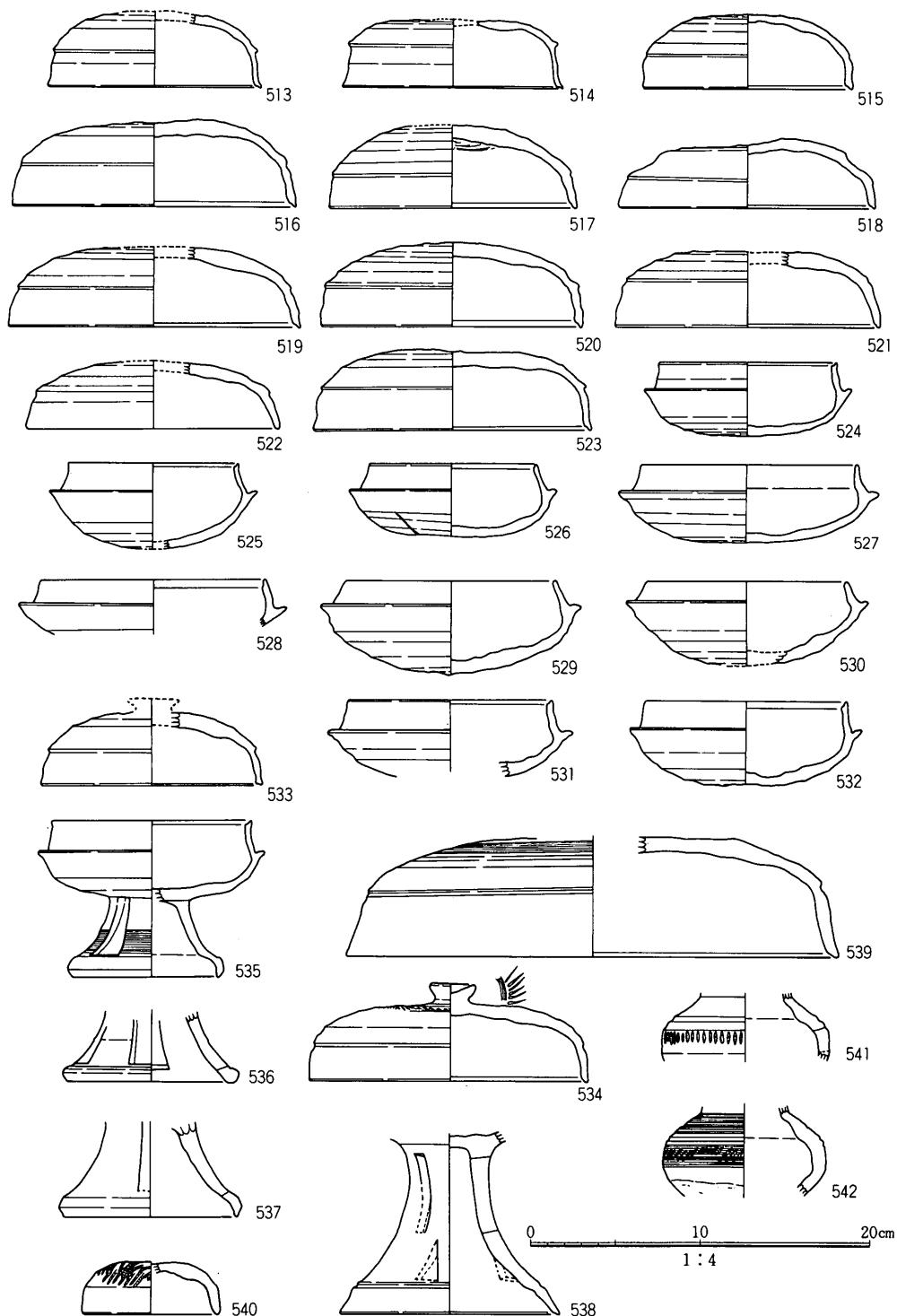


図83 長原6・7層出土須恵器実測図(1)

VII区(513~521・525~530・534・539)、VIII区(524・536・537)、IX区(522・523・531~533・535・538・540~542)

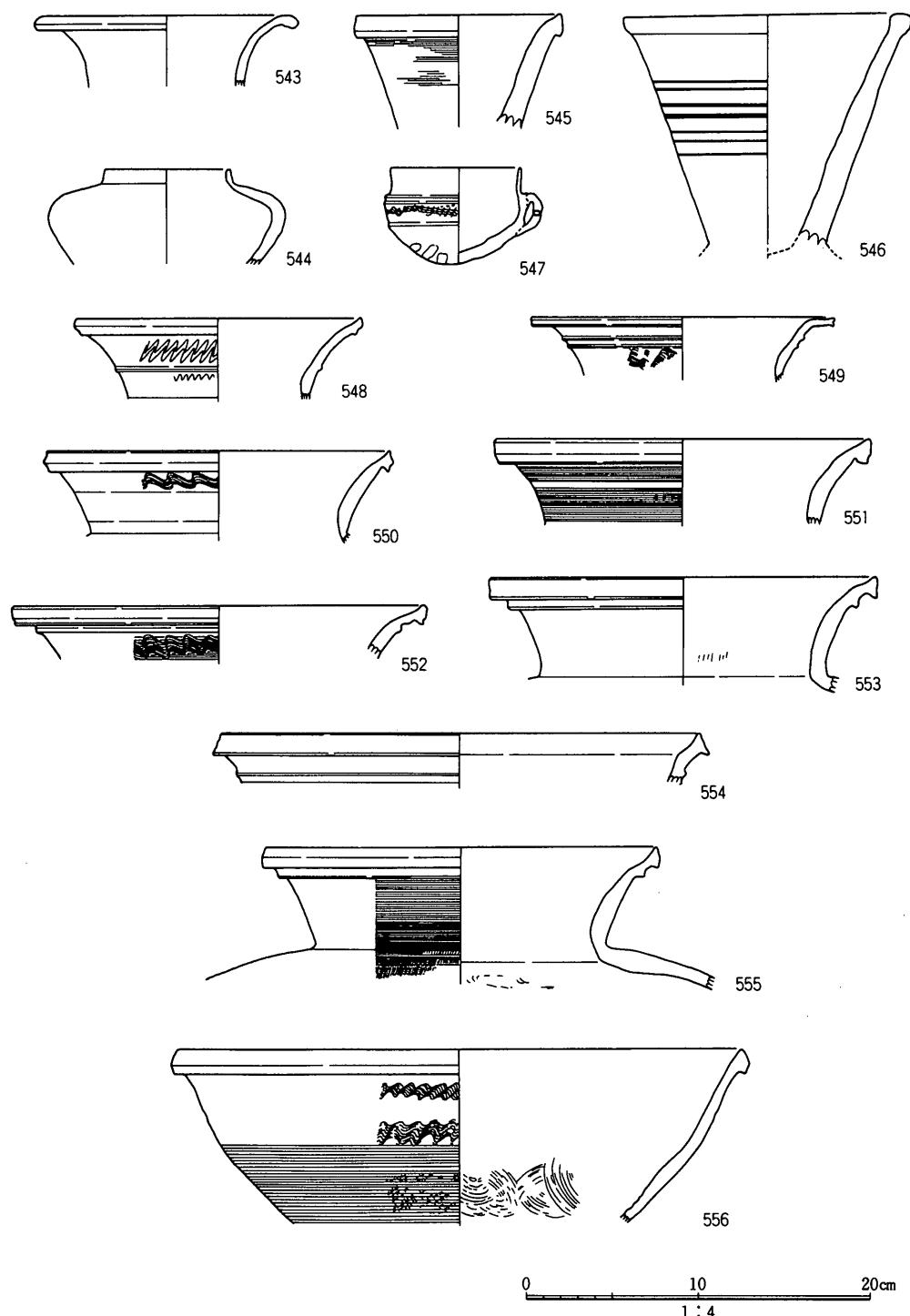


図84 長原6・7層出土須恵器実測図(2)
IV区(548・549)、VII区(543~547・551・552・556)、IX区(550・553~555)

で、図80の471と同じ形態である。533の高杯蓋はつまみを欠くが、胎土や調整など図80の465・467と同工である。534はつまみの周囲にヘラによる線刻を巡らしている。

539は高杯蓋と同様の形態であるが、口径29cmに復元できる大型である。天井部中央につまみが付いていた痕跡があり、外面はカキメ調整する。胎土は灰白色を呈し、軟質である。大型の壺の蓋と考える。540は口径が8cmの小型の壺蓋で、天井部に列点文が施されている。541・542は壺の体部片で、口縁部と底部を欠く。541は列点文、542はカキメを施す。

543の口縁部は広口壺または横瓶のものと思われ、544は短頸壺である。545・546は底部に厚い粘土円板を貼付けた鉢と思われる。547の把手付椀は小型で、小さな把手が付く。体部は波状文を施し、底部は静止ヘラケズリである。

548～555は壺の口縁部である。548～550・552は外面に波状文を施し、551・552・555はカキメ調整を施している。556は高杯形器台の受部で、体部上半に波状文を施し、下半は格子タタキを施したのち、カキメ調整する。内底面には同心円文の当て具痕が残る。

このほか図示していないが、外面に縄蓆文タタキを施し、螺旋状と推測される沈線が巡る体部片がある。焼け歪みがあるが、焼成はややあまく、灰白色を呈する。また、外面に斜格子タタキを施す、軟質の甌または壺と思われる細片がある。口縁部付近の破片で、直立ぎみの体部から短く直角に屈曲させた口縁部で、端部はヨコナデによりやや凹んだ面を作る。いわゆる軟質の韓式系土器[植野浩三1987]である。

vi) 製塩土器・竈形土器・土製品など

製塩土器(図85、写真17)

VI区SD23から557～559に示したような製塩土器の細片が出土した。全体を復元できるものではなく、口縁部がややすぼまる形態で、口径は4cmほどである。底部は丸くなると思われる。外面はユビナデで、内面もナデ調整である。

560・561はIX区のSD52から出土した。全体を復元することはできないが、丸底と思われる。外面に横方向の平行タタキが施される。胎土は灰色から灰褐色を呈し、生駒西麓産の胎土に類似する。

562はIX区の長原7層相当層から出土した。口径8cmとやや大きく、器壁も厚い。外面は横方向に平行タタキが施されている。胎土は560・561とは異なり、557～559に近い。

563はVII区の長原7層から出土したもので、口径8cm、器高4cmの椀形を呈する。全体的にナデで仕上げられているが、外面に粘土紐の接合痕が残る。

564はSD22から出土したもので、口縁部をナデで薄くしている。内外面ナデ調整で、内

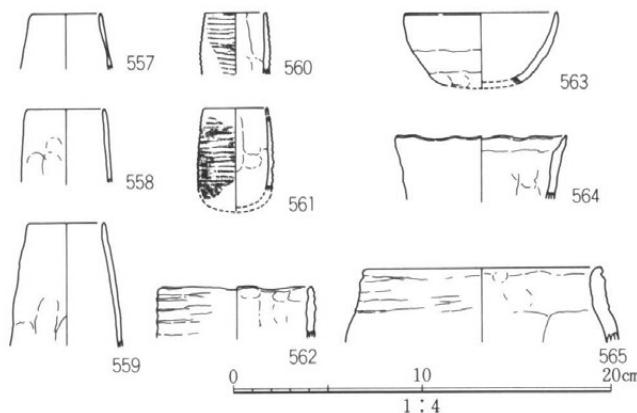


図85 製塩土器実測図

SD22(564)、SD23(557~559)、SD52(560・561・565)、VII区長原7層(563)、IX区長原7層(562)

面は縦方向にナデ調整する。胎土は砂粒を多く含み、粗製である。

565はIX区SD52から出土した。口縁部はややすぼりぎみで、口径12.5cmである。口縁部外面は幅の広い平行タタキまたは、板状のもので押さえ付けたような痕跡がある。口縁部内面はナデ調整であるが、体部内面は板状の工具で平滑に調整されている。

以上の製塩土器の出土傾向を検討すると、VI区SD23からは細片が多数出土したが、すべて図示したタイプのもので、内外面ナデ調整のa手法で、丸底・卵形のA類[京嶋覚1992d、p.155]に限定されている。しかし、この溝と平行するSD22からは外面にタタキのみられるb手法の薄手の細片やB類が含まれており、A・B類、a・b手法が混在している。また、SD26からもb手法の薄手の破片が出土している。これらVI区の溝状遺構はTK23型式からTK47型式の時期が考えられるため、薄手でa・b手法のものが混在するのが当該期の傾向と考えることもできよう。また、A類のa手法で、やや厚手で胎土が粗いⅢ群のものも含まれている。さらに、MT15型式からTK10型式の土器を多く出土したIX区で

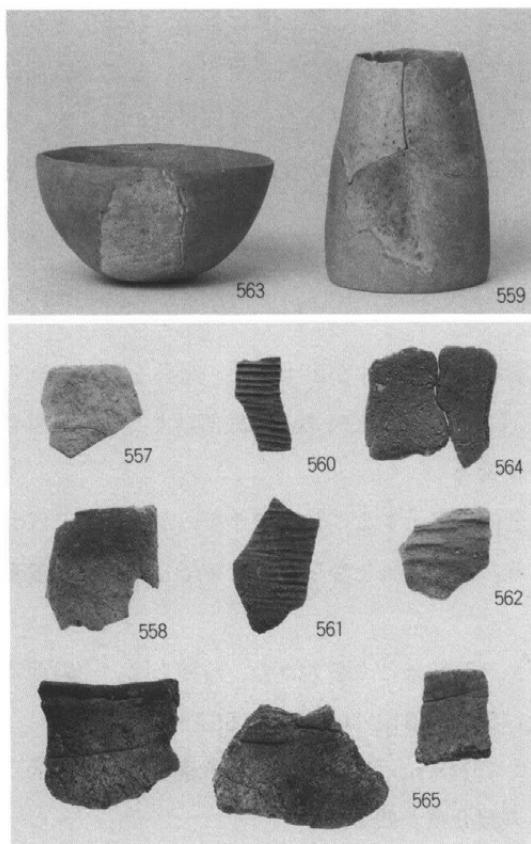


写真17 製塩土器

は、タタキを施す**b**手法の薄手の細片や、この時期に初めてみられる厚手で大型の製塙土器が出土している。

竈形土器(図86、図版63)

10点ほどの破片があるが、すべて付け庇系竈[稻田孝司1978]と思われるもので、そのうち567～569の3点を示す。567はSE01から出土した付け庇系竈の底部である。ハケ調整で仕上げる。568はⅧ区から出土した付け庇系竈の焚き口下端部の破片である。下端から2cmの間をあけて水平にタガを貼付けている。569はSD34から出土した。これは付け庇系竈の背面に付けられた煙道と思われる。類例は少ないが、堺市伏尾遺跡の出土品[大阪府埋蔵文化財協会1990]に類例がある。

土馬(図86、図版63)

572は四肢・耳・尾の一部を欠損する。頭部前面に目と鼻孔を表現するものと思われる直径2mmの小孔を4個開け、耳は貼付けている。首の背部をわずかにつまみ出して鬣を表わしている。尾は太く、先端を細くして下方に曲げている。馬具の表現はまったくなく、いわゆる「裸馬」である。焼成はよく、堅緻であるが、黒斑がみられる。現存長10.6cmである。TK10型式の須恵器を下限とする時期のⅨ区SD52から出土しており、土馬としては初期のものといえる(註6)。

円板状土製品(図86)

571は不整円形を呈していたと推定される板状の破片である。図の断面図下面は平坦面に置かれていたようで、調整痕もなく平坦である。上面はユビオサエの痕跡がある。やや砂粒が多く、土師質に焼成されている。Ⅷ区の長原7層から出土した。

陽物形把手(図86、図版63)

570は焼成がややあまく軟質であるが、須恵器の把手である。直径2.2cmの粘土棒を体部に挿入し、丸く仕上げた先端から約2cmの位置に幅1cmの粘土帯を巻付けている。先端部には縦方向に切れ目が入れられ、上部には通常の把手にみられるものと同じヘラによる切込みがある。体部内面には同心円文の当て具痕があることから、須恵器の甌などの把手であると考えられる。八尾市久宝寺南遺跡でも先端に切込みを入れた類例が出土している[大阪文化財センター1986a、p.179]。SD29から出土した。

円筒埴輪(図86、図版63)

566は口径49cmに復元できる大型の円筒埴輪である。口縁部には幅7cmの粘土帯を貼付けて厚みを増している。タガは断面形が下辺2cm、高さ1cmの台形を呈する。円形のスカシ孔

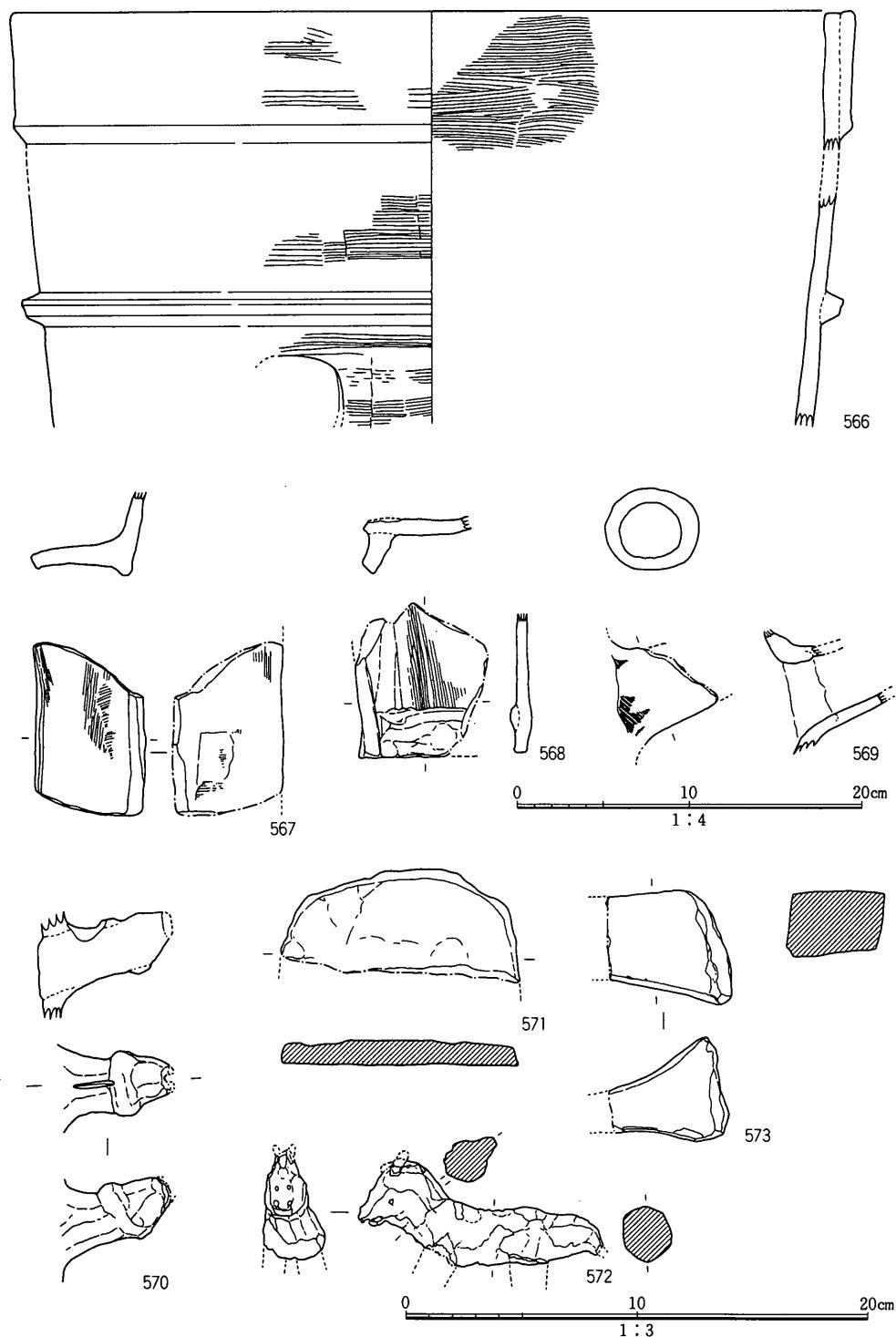


図86 塗輪・竈形土器・土製品・砥石実測図

SE01(567)、SD29(570)、SD34(569)、SD52(572)、Ⅶ区長原7層(568)、Ⅷ区長原7層(571・573)、Ⅸ区長原7層(566)

がある。外面調整はいわゆるB種ヨコハケ[川西宏幸1978]の二次調整を施す。内面は口縁部がヨコハケを施すほかはナデ調整である。焼成は窯窯焼成で堅緻である。IX区の長原7層から出土した。

長原古墳群では、長原40号墳出土の盾形埴輪の円筒部口縁部に類例があるが、円筒埴輪ではなく、出土地点の周辺では古墳も分布していない。

(京嶋)

vii) 玉・石製品

滑石製子持勾玉(図87、図版64)

574はIX区SD52から出土した。勾玉本体は丸みのある背部と直線的な腹部をもち、頭部・尾部の先端に平坦面をもつ。腹部に1、背部に3、両側面にそれぞれ二つ、合計八つの子がある。腹部の子は、頭部と尾部の先端が鋭く張出し、腹部の断面形が丸く整えられている。背部の子は腹部のものに比べて突出度が低く、整形もやや粗い。背部の子のうち、上部と下部にあるものはその腹部に平坦面を残しているが、中央の子はその部分が丸く仕上げられている。これは、背部中央の子が腹部の子と対称的な位置に配置されていることから、念入りな仕上げがなされたものと考えられる。両側面の子は本体の描く曲線に沿って配置されているが、B面では上下の子の向きがわずかに食い違ったものになっている。また、上下の子を比較すると、上を小さく、下を大きく作っているのがわかる。その腹部にはみな平坦面がある。長さ7.66cm、子も含めた腹部中央での幅は3.50cmである。また本体の厚さは、中央部で1.31cmである。B面から穿孔されたとみられ、その直径は6.2mmである。暗緑灰色を呈する。

575はVII区の長原7層に相当する地層から出土した。勾玉本体は頭部と尾部の先端が尖り、緩やかな曲線を描く背部と直線的な腹部をもつ。腹部に1、背部に3、両側面にそれぞれ2の合計八つの子を付けている。腹部の子は本体腹部から垂直に張出し、その腹部断面形を丸く整えている。背部の子は腹部のものに比べ突出度の点でかなり劣る。574と同様に、背部中央の子は腹部の子と対称的な位置にあり、そのためか上下にあるものと比べてやや突出度が高い。背部の子はいずれも平坦な腹部となっている。両側面の子は本体のカーブに沿って配置されるが、B面では上下の子の向きが多少食い違っており、大きさも異なる。みな平坦な腹部となっている。長さ8.93cm、子を含めた腹部中央での幅は4.57cmである。また、本体の厚さは2.24cmである。B面側から穿孔され、その直径は5.5mmを測る。その部分に断面がV字形をなす斜め方向の古い傷痕がある。明緑灰色を呈する。

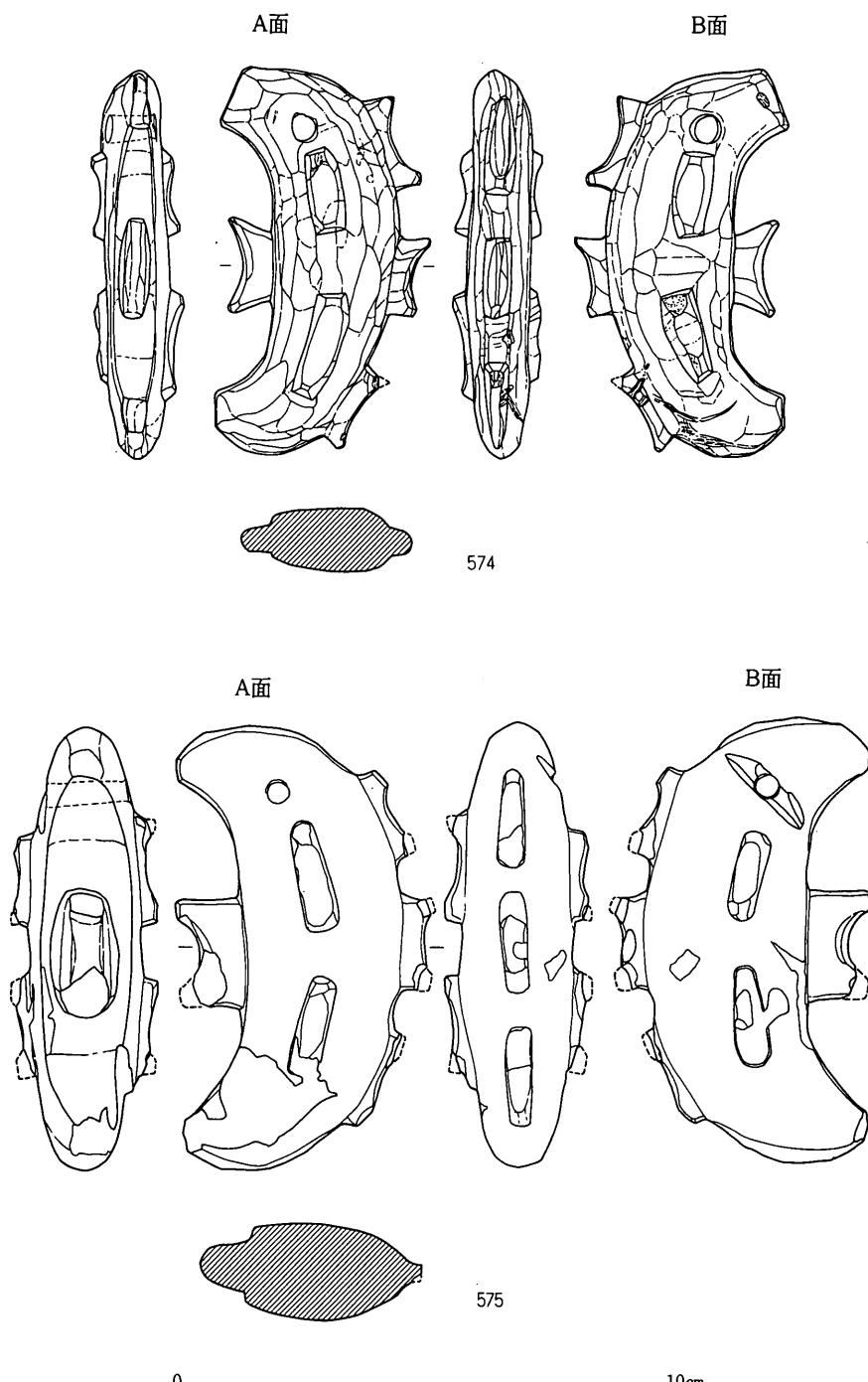


図87 子持勾玉実測図

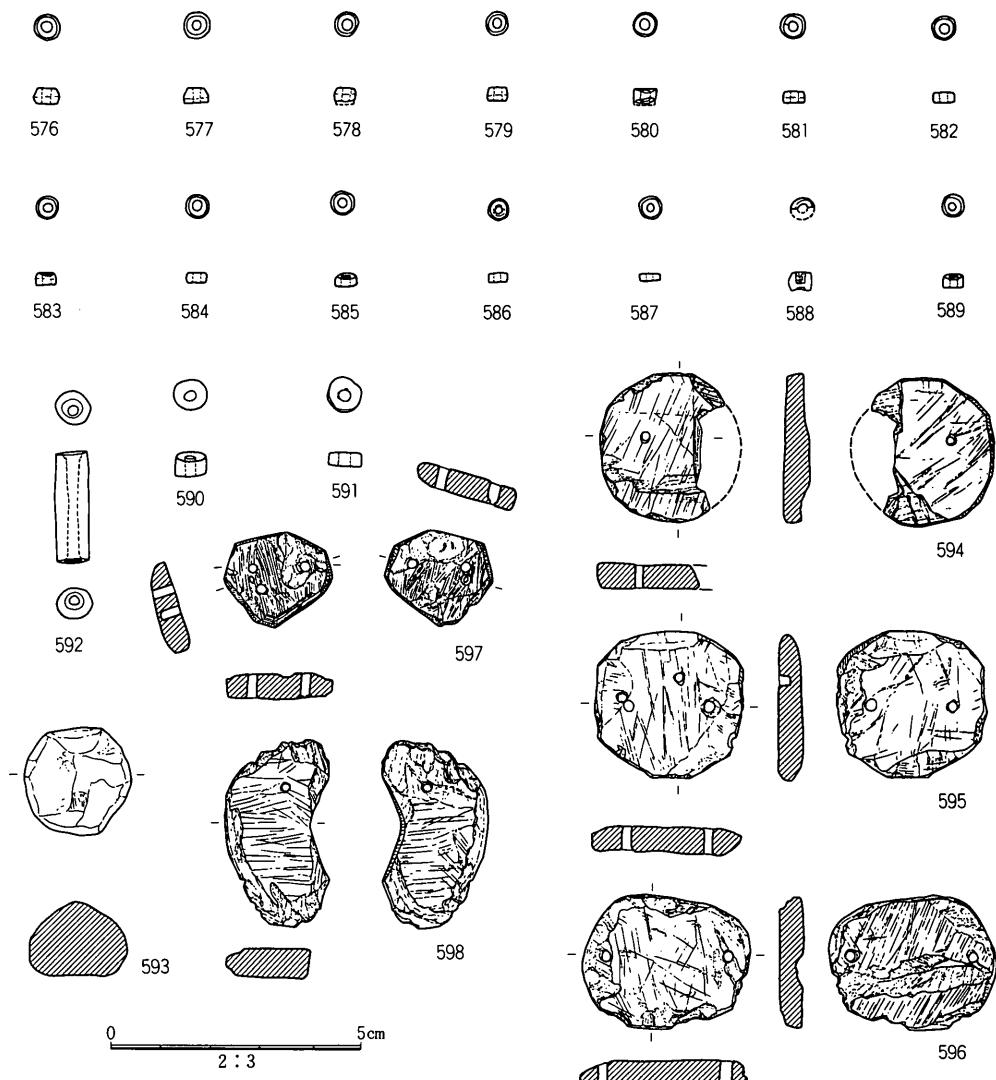


図88 滑石製品・土製丸玉実測図

滑石製臼玉(図88、表5)

576～587はⅧ区のSB24付近の長原7層、588・589はSP09、590・591はSD22から出土した。SD22出土の2点は、その他のものに比べ一回り大きく、やや異なった色調の石材を用いている。また、輪郭も楕円形に近く、591の穿孔位置は中心からわずかに外れている。Ⅷ区SB24付近からは12点の臼玉が出土しているが、直径4.4～5.5mm、高さ2.0～3.6mmという法量の幅がある。高さのあるものには、その側面に横方向の稜がみられる。もっとも低

表5 白玉計測表

番号	直径(mm)	高さ(mm)	穿孔径(mm)	色調	出土場所	備考
576	5.1	3.6	2.0	暗緑灰	SB24付近長原7層	側面に稜あり
577	5.5	3.1	1.8	暗緑灰	SB24付近長原7層	側面に稜あり
578	5.0	(3.3)	2.0	暗緑灰	SB24付近長原7層	側面に稜あり
579	4.8	3.1	2.0	暗緑灰	SB24付近長原7層	側面に稜あり
580	5.2	(3.3)	1.8	暗緑灰	SB24付近長原7層	
581	5.1	2.7	2.1	暗緑灰	SB24付近長原7層	側面に稜あり
582	4.8	2.4	1.7	暗緑灰	SB24付近長原7層	
583	4.6	2.8	1.6	暗緑灰	SB24付近長原7層	側面に稜あり
584	5.0	2.3	2.0	暗緑灰	SB24付近長原7層	
585	5.0	2.4	1.9	暗緑灰	SB24付近長原7層	
586	4.4	2.2	1.4	暗緑灰	SB24付近長原7層	
587	4.7	2.0	1.4	緑灰	SB24付近長原7層	
588	4.9	3.9	1.7	暗緑灰	SP09	縦方向に1/2欠損
589	4.6	2.6	1.7	緑灰	SP09	
590	6.2~6.7	4.6	2.1	黄褐~灰褐	SD22	
591	6.2~6.7	2.6	2.0	黄褐~灰褐	SD22	

() 内の数値は残存高

い587は、その他のものとはやや色調を異にしている。SP09出土品のうち588は縦方向に欠損しており、穿孔部の状況がうかがえるが、それを見る限り孔は貫通していない。

滑石製勾玉(図88、図版64)

598は板状の滑石を用いた模造品で、VI区南部で出土したものである。背部は丸く張出しているが、腹部は中央が浅いV字状に抉れたものになっている。頭部・尾部とも丸くおさめられている。長さ3.59cm、腹部中央部での幅1.77cm、厚さ5.8mmである。また、頭部に直径は2.0mmの穿孔がある。緑灰色をしている。

滑石製管玉(図88)

592はVI区SD26から出土したものである。直径6.7mm、長さ2.18cmで、緑黒色をしている。両側から穿孔されているが、穿孔部分が漏斗状に開いている。全体にていねいな研磨がなされる。

土製丸玉(図88)

593はSD52から出土した。平面形は円形に近いが、側面からみると上部が山形に尖り、下部が浅く凹んだ形態をしている。直径2.10~2.14cm、高さ1.47cmである。灰褐色の素焼き製品で、1mm以下の石英・長石・チャート・シャモットを微量に含んでいる。手捏ねで成形され、穿孔はみられない。丸玉の模造品かと思われる。

滑石製有孔円板(図88、図版64)

594はⅦ区SD31から出土した。明緑灰色を呈する正円形の双孔円板であるが、一部欠損しており、孔の一方は残っていない。直径2.90cm、厚さ4.9mm、穿孔径1.8mmである。595はⅨ区南端部のSD52から出土した。これは594と似た色調の双孔円板であるが、594ほど整った円形ではない。短径2.82cm、長径2.95cm、厚さ5.0mm、穿孔径は各2.0mm、2.2mmである。片面に未貫通の孔が2個所みられる。596はⅨ区南部の長原7層から出土した。暗緑灰～緑灰色を呈し、輪郭は楕円形で、長軸上の両端に穿孔している。短径2.67cm、長径3.30cm、厚さ4.4mmで、各々の穿孔径は1.5mm、1.6mmである。597はⅨ区SD46から出土し、貫通孔が3個、未貫通孔が1個ある。上述の3点に比べ小さく、短径1.88cm、長径2.10cm、厚さ5.4mmである。三つの貫通孔のうち一つは、片面の開口が不十分である。完全に貫通している2孔を左右に置いて図示したが、その下部がやや尖ったものとなっている。

(櫻井)

砥石(図86、図版63)

573はⅦ区の長原7層から出土した。上下面をよく使用し、断面は凹レンズ形を呈する。灰白色石英粗面岩製である。

このほかに図示しなかったが、Ⅵ区SD23から砂岩の河原石を用いた叩き石が出土した。

viii)木製品(図89、図版65)

建築部材

599はⅦ区SE01から出土した建築部材と思われる板材である。現存する長さ58.8cm、幅13.2cm、厚さ4.2cmである。長辺の一方は欠損しているように思われるが、約4cm四方の方形のほぞ穴が30cmの間隔で2個開けられている。もう一方の長辺は丸くなっている。短辺の一方の端には直径3.6cm、長さ2.0cmの軸が作り出されている。もう一方の短辺は斜めに切断されているようである。

舟形容器

600はⅨ区のSD49から出土した。長さ38.5cm、幅16cm、高さ6cmに復元できる。長軸の両端は直線的で、両側面はやや膨らみ、中央部に最大幅がある。また、一方の端の幅が狭くなるものと推定される。

刀形

601はⅨ区SD48から出土した。長さ32cm、幅は刃部で3cm、柄部で2cmである。先端は欠けている。それほど明瞭な加工痕はみられない(註7)。

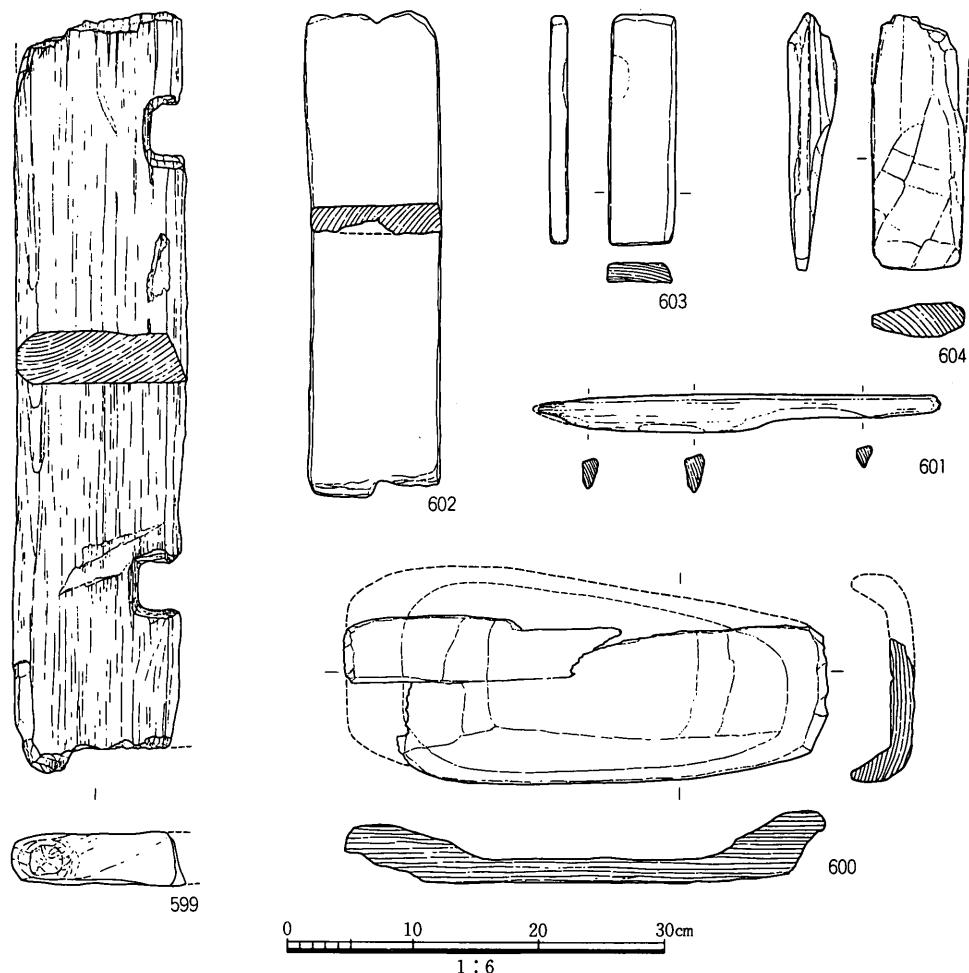


図89 木製品実測図
SE01(599)、SD48(601)、SD49(600)、SD52(602～604)

加工材

602～604はIX区SD52から出土した。604は長さ20cm以上、幅7cmの長方形を呈する板材で、厚さは1～4cmである。遺存する一短辺は薄く加工されている。602は長さ38cm、幅10.5cm、厚さ2cmの長方形の板材である。長軸の両端は刃部が直線的な工具で切断された痕跡がある。603は長さ18cm、幅5.3cm、厚さ1.4cmの板材である。

(京嶋)

ix) 動物遺体(図版66)

ここで報告する動物遺体は、古墳時代から奈良時代の年代が考えられている遺構および

地層から出土した11件である(表6)。細片となっているために哺乳類としか同定できなかつたものが若干あるが、種の判明したものはすべてウマ(*Equus caballus* Linnaeus)であった(註8)。以下、各資料ごとに記載する。

資料1

5世紀末の建物群を区画するVI区SD22から出土した。右上顎の遊離歯であるが、細片となつていて詳細は不明である。第3前臼歯P³から第2後臼歯M²のいずれかに相当する。歯根は発達していない。

資料2

IX区「馬池谷」の支谷に平行する方向の溝SD52の埋土上層から土器などとともに出土した。資料は3点あり、左上顎の遊離歯と右第3中手骨が同定され、他の1点は細片である。上顎歯は第4前臼歯P⁴と推定されるもので、歯根は発達していない。第3中手骨は近位端から骨幹にかけての破片で、遠位端を欠損している。

資料3

IX区SD52の埋土下層から、多数の完形品を含む土器・製塩土器・子持勾玉・土馬・加工木片などとともに出土した。周辺では、滑石製の有孔円板・臼玉、舟形容器・刀形木製品なども出土している。動物遺体の分布は、溝東部にややまとまとある状況であったが、骨格中での自然な位置関係を保っているようなものはなかった。

資料は6点からなり、うち3点は左上顎の遊離歯、右橈骨、右第3中手骨であることがわかった。上顎歯は破片であるため細かな部位は決めがたいが、第3前臼歯P³から第2後臼歯M²のいずれかである。橈骨は骨幹の破片で、やや近位寄りに尺骨との癒合部分が残存している。第3中手骨は遠位端であるが、資料2の近位端とは別個体である。遺存状態が比較的良好であったので、骨端の大きさを計測することができた。幅50mm、前後径34mmを測る(註9)。これから西中川氏らの方法[西中川駿・松元光春1991]によって、骨長を推定すると223.1mmとなる(註10)。さらに、骨長から体高を林田氏らの方法[林田重幸・山内忠平1957]で推定すると、約136cmとなり、これはいわゆる中型馬の大きさに相当する(註11)。他の3点は取上げた後細片になったため、詳しい同定ができなかつたが、大きさから判断してウマである可能性が強い。

資料4

IX区の「馬池谷」の支谷に平行する方向の溝SD49から、土器などとともに出土した。右橈骨の近位寄りの骨幹の破片である。尺骨との癒合部分が残存する。

表6 西地区出土動物遺体一覧表

資料番号	地区名	遺構・層位	時期	図版66一番号
1	VI	SD22	5世紀末	
2	IX	SD52上層	6世紀前～中葉	1・7
3	IX	SD52下層	6世紀前～中葉	8・10
4	IX	SD49	6世紀前～中葉	9
5	IX	SD48	6世紀前～中葉	
6	IX	SK18	6世紀前～中葉	2・3
7	IX	長原7層	6世紀前～中葉	
8	IX	長原7層	6世紀前～中葉	4
9	IX	長原6層	古墳～奈良時代	6
10	IX	長原6層	古墳～奈良時代	
11	VII	長原7層	6世紀中葉	

資料5

IX区SD48から出土した。右脛骨の骨幹の破片である。

資料6

IX区のSK18は浅い土壌で、底に細長い落込みが並列しており、そこから動物遺体が3点出土した。うち2点はウマの上顎の遊離歯で、他の1点は細片である。上顎歯は左右1点ずつあり、いずれも第3前臼歯P³あるいは第4前臼歯P⁴と考えられ

る。両者とも歯根は形成されているが、それほど発達していない。

資料7

IX区中央北寄りの6世紀前葉から中葉の年代が考えられる長原7層から出土した。左下顎の臼歯の破片である。

資料8

IX区中央の長原7層から出土した。右上顎の遊離歯は第2前臼歯P²で、歯根は形成初期のものである。他に中手骨あるいは中足骨と考えられる骨幹が出土している。

資料9

IX区北部の長原6層から出土した。古墳時代から奈良時代の年代が考えられる。右下顎の遊離歯は第4前臼歯P⁴に相当し、歯根は形成初期の段階のものである。

資料10

IX区試掘トレーニングの長原6層から出土した。右下顎の遊離歯が3点あり、それぞれ第2前臼歯P²、第1後臼歯M₁あるいは第2後臼歯M₂、第3後臼歯M₃に相当する。いずれも歯根はそれほど発達していない。他に、右脛骨と思われる骨幹の破片が出土している。

資料11

VII区の長原7層から出土した。6世紀中葉の年代が考えられる。ウマの中手骨あるいは中足骨の骨幹であろう。遺存状態はよくない。

以上のように今回種の判明したものはすべてウマであった。また、その時期も5世紀末から6世紀前半ごろのものが多かった。この傾向は今までの調査と同様で、古墳時代の長

原遺跡西地区で出土する動物遺体の中でウマが圧倒的に多いことを再確認した。

ウマの形質については、今回も良好な資料に恵まれなかつたが、SD52の6世紀前葉から中葉の例では、中型馬と推定できた。既報告でも中型馬と推定されているので[樽野博幸1978、大阪市文化財協会1992a・b]、5・6世紀の長原遺跡周辺では中型馬が主流であったと考えられる。

出土したウマの年齢も馬の利用を考える上で重要な要素となるが、年齢推定に有効な切歯の出土がきわめて少ない状況である。その他の方法として臼歯の咬耗の進行と歯根の発達の程度からもおよその推定が可能である[Goody,P.C.1983]。それによると、今回の資料はいずれも5才前後の個体のものと推定される。

ウマを出土した遺構は、いずれも当時の集落の内部あるいは近接する場所である。さらに、前述したようにウマ以外の種類はわずかである。したがって、当時の人と動物の係わりの上で、ウマは人間に密接な存在であり、特別な利用や扱いがなされていたことが推定できる。遺構の性格や伴出遺物などもそれを裏付けるものであるが、今回の遺構では、資料1の建物を区画するような溝SD22や、資料2・3の祭祀と関係する遺物群が捨てられたような溝SD52が注目される。特に後者は、馬と祭祀がなんらかのかたちで関連することを示唆するもので重要であり、長原遺跡においては新たな知見である。馬と祭祀の関連としては、四條畷市の奈良井遺跡の例が著名である[野島稔1984]。奈良井遺跡の祭祀遺構は、最大肩幅約5m、深さ約1.0～1.5mの溝で囲まれた一辺約40mの隅丸方形の範囲と推定されており、溝内から須恵器・土師器・手捏土器・人形・土馬・滑石製臼玉とともに、6頭以上の馬が埋葬されたような状態で出土している。それらの時期は5世紀後半から6世紀中ごろとされている。このほかにも近接する中野遺跡や南野米崎遺跡などからも5世紀後半から6世紀初頭の同様の祭祀と関連するような遺物群と馬の歯や骨が共伴して出土している[四條畷市教育委員会1986]。これらの祭祀の性格として、瀬川氏は馬飼集団の祭祀との関連性を指摘されている[瀬川芳則1991]。今回報告したSD52の出土遺物もその構成においては近似しているが、ウマの歯や骨は雑然と廃棄されたような状態である。現段階では、祭祀にどのように馬が関与していたのか、また祭祀の性格について推測できる材料が少ない。したがって、古墳時代の長原遺跡においても馬が祭祀に関係していた可能性を指摘するに留めたい。

(久保)

5) 飛鳥・奈良時代の遺構

水田遺構(図98、図版13)

IX区の長原6A層上面で水田畦畔を検出した。トレーナー中央をほぼ南北に延びる畦畔および段状遺構と北端部に東西方向の段状遺構、そこから8m南に東西方向の畦畔を検出した。南部は長原5層の分布が希薄であるため、長原6A層上面の畦畔は不明瞭であったが、下位に6Aii層と思われる水成層が存在し、6Bi層上面の水田面を検出した。しかし、畦畔は確認できず、段状の遺構を検出したに留まる。水田面は北東から南西に向って順次低くなっている。

6) 平安時代の遺構と遺物

i) 据立柱建物

SB01(図90・92、図版12)

I区北端に位置する南北2間以上(3.4m以上)、東西1間以上(1.0m以上)の建物である。『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲで報告した溝で区画された建物群(図92)の北西隅に位置する。南北の柱間は北から1.8m、1.6mである。建物方位はN2°Wである。

SB02(図91・92、図版12)

II区北部に位置する桁行4間以上(7.8m以上)、梁行1間以上(1.65m以上)の建物である。桁行方向に4間分の柱列が2列検出されたが、西側の列の柱穴はやや規模が小さい。桁行の柱間はほぼ6.5尺等間、梁行は5.5尺の等間である。建物方位はN1°Wである。

この建物は1983年度の調査資料で復元された方形の屋敷地内の南西に位置する(図92)。これと対称的な位置にあるNG83-53次および今年度発掘資料と合わせて復元されたSB28・29[大阪市文化財協会1992a、pp.108-109]は、桁行の柱間が同じく6.5尺で4間×2間の総柱であったことから、現段階では、SB02もまた総柱の建物で、東側柱列と棟通りの柱列が検出されたものと解したい。

この屋敷地の中央には既報告の桁行6間で庇をもつ東西棟建物SB26・27[大阪市文化財協会1992a、pp.107-108]があり、この両側に南北棟

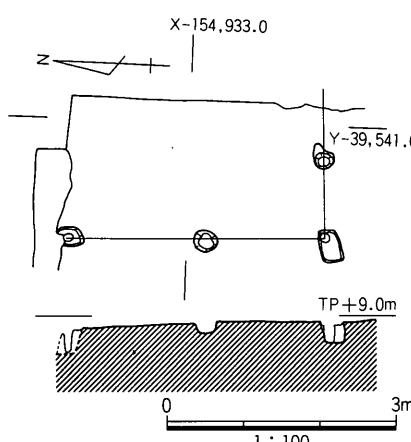


図90 SB01実測図(I区)

を配置する整然とした建物配置が想定される。

柱穴からは土師器小皿などが出土したが、いずれも細片である。

SB20(図93、図版3)

VI区に位置する南北2間(3.15m)の建物である。おそらく南北が梁行方向となり、東西棟建物と思われる。建物方位はE4°Sである。

SB21(図93・97、図版3)

VI区に位置する桁行4間(7.3m)、梁行2間(3.7m)の建物である。SB20とは南に1.65mの間隔をあけて平行する。建物方位はE5°Sである。

北側柱列の東から1間目の柱穴から642の土師器羽釜が、南側柱列の東から2間目の柱穴から641・643の土師器羽釜が出土した。柱穴から土師器の甕や羽釜の大きな破片が出土する例は、1983年度調査のSB01・02[大阪市文化財協会1992a、pp.99-100]などにもみられる。

SB22(図93、図版3)

VI区に位置する南北2間(4.2m)、東西1間以上(2.5m以上)の建物である。おそらく東西棟建物と思われる。SB21と5.5mの間隔がある。建物方位はE5°Sである。

以上のVI区の建物群はいずれも東で南に4~5°振る東西棟建物であり、一連の屋敷地を形成するものと思われる。遺物はSB21で平安Ⅲ期新段階の土師器が出土しており、この建物群の時期を示唆している。

ii)溝

SD54(図92・100、図版12)

II区およびIII区に位置する東西溝である。幅1.6m、深さ0.15~0.25mである。埋土は灰色粘土質シルトで、土師器椀・小皿・甕、黒色土器B類椀などが出土した。

この溝は1983年度調査のSD17・24[大阪市文化財協会1992a、p.114]と一連の溝と思われ、53m四方の屋敷地を区画する溝となる。

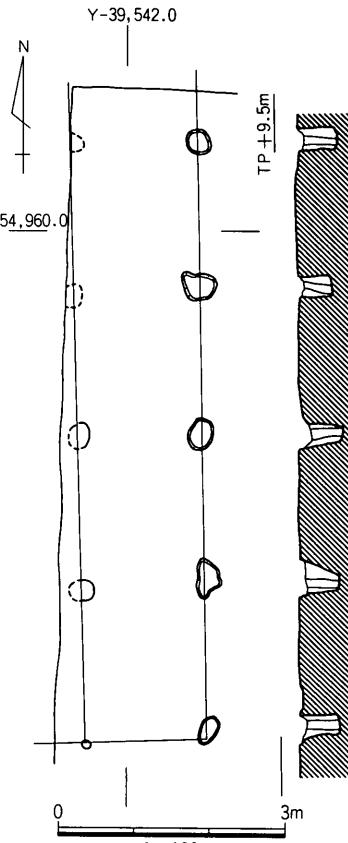


図91 SB02実測図(II区)

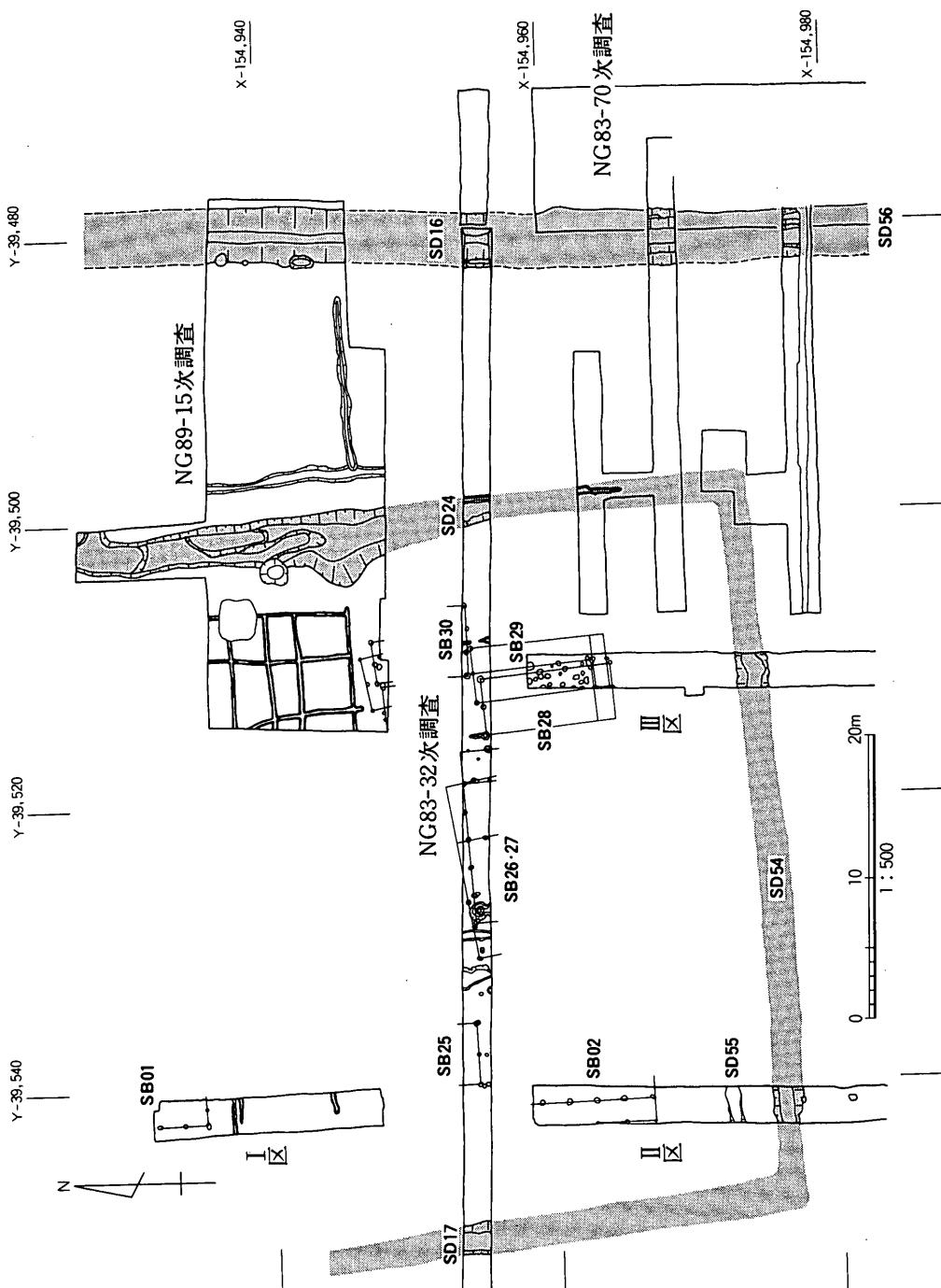


図92 I～III区付近の平安時代遺構配置図

SD55(図92・100)

II区のSD54の北側2mの位置に平行する溝状の遺構である。幅1m、深さ0.5mの溝である。埋土は上部が黒褐色または黒色含砂シルト、下部は灰色および黒色粘土で、地山層のブロックが含まれている。下部の上面には炭が薄く堆積していた。溝の壁は抉るように掘られており、粘土採取を目的とした土壤かもしれない。土師器皿、黒色土器B類碗が出土している。

SD56(図94・97・101、図版12)

IV・VII区にまたがる南北溝である。1983年度の発掘調査でも検出されている濠状の溝で、埋土は上部が地山粘土を主体とするもので、下部は砂礫を多く含む灰色粘土質シルトの水成層である。638・644・646の遺物が出土した。646は小さな高台が付く瓦器碗で、これまでのこの溝からの出土遺物と比べて、新しい様相を示す。

SD57(図95・97・101、図版1)

IV区のSD56の東8mに位置する南北溝で、北で東に直角に曲る。東西溝の調査地東端部では段状に浅くなっている。SD56に比べて全体的に浅く、SD56が条里地割の基準の溝であるのに対して、SD57は東側に存在すると予想される建物群を囲む溝と考えられる。埋土

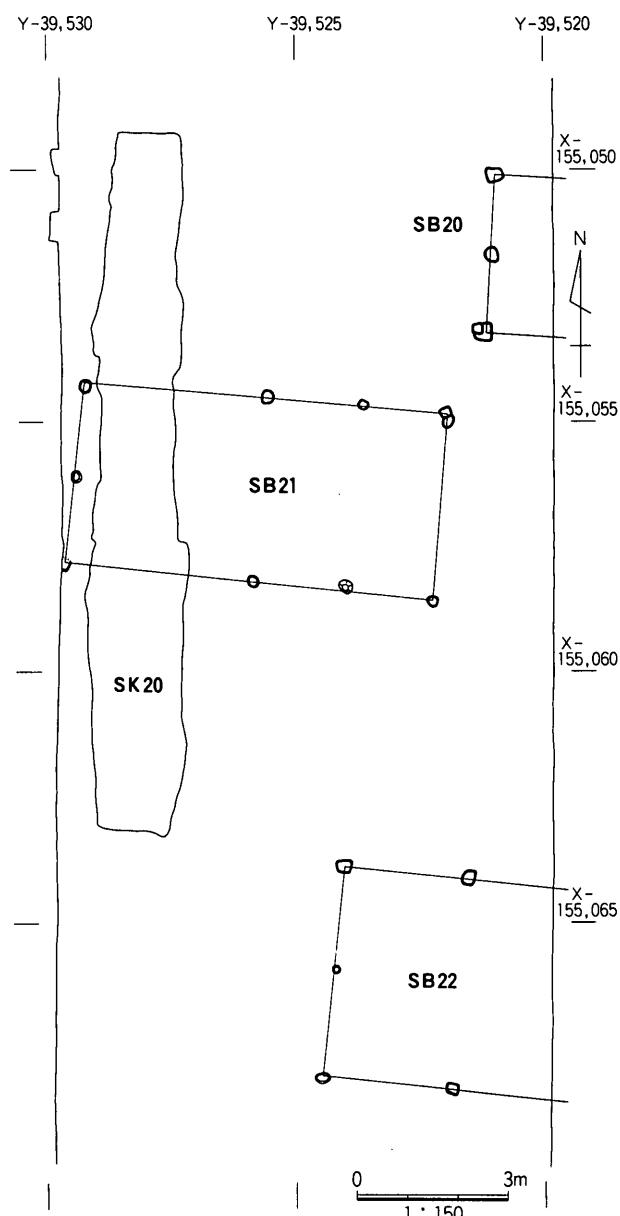


図93 SB20～22実測図 (VI区)

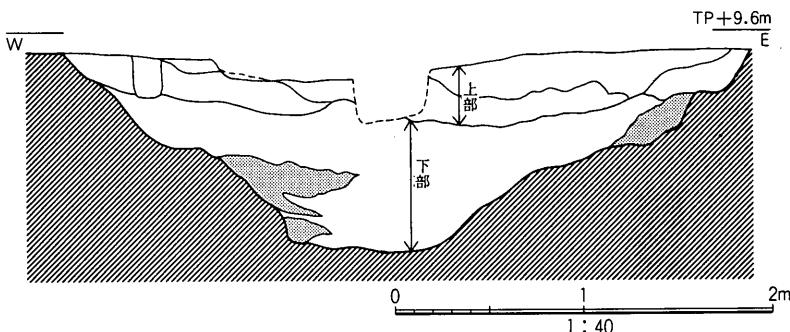


図94 SD56断面実測図（IV区）

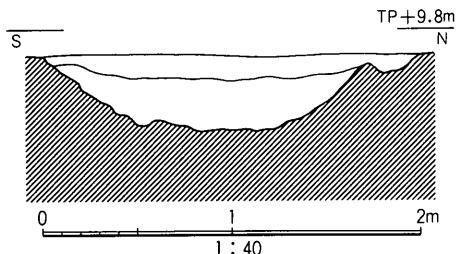


図95 SD57断面実測図（IV区）

は上部が砂礫を多く含む灰色シルト、下部は地山粘土ブロックを含む灰色粘土質シルトである。639・640・645の遺物が出土した。

SD58・59(図98)

IX区の長原4B層基底面で東西溝SD58・59を検出した。SD59は幅1.5m、深さ0.4mで、長原4Bii層に相当する可能性のある水成の砂礫層を介在する含砂礫灰色粘土質シルトで埋没していた。647~649の瓦器碗が出土した。

iii) 土器埋納遺構(図96・100、写真18)

II区のSD05の南肩を切って検出された0.5m×0.4mの長方形の遺構である。この中には土師器甕636が正位置で置かれ、土師器皿615を逆位に置いて蓋にしていた。甕内部からはなにも出土しなかった。

iv) 出土遺物

I ~ III区遺構出土土器(図96、図版67)

この地区から出土した平安時代の土器のほとんどは、1983年度に発掘調査した周囲に溝を巡らした平安時代の屋敷地[大阪市文化財協会1992a]内からのものである。

土師器小皿605~619のうち、いわゆる「て」字状口縁の605・606・612~615は、615を除いて口径が11cm以下の小型で、口縁端部は上方にわずかにつまみ上げる形態である。615は口径が13.2cmで、器壁が薄く、胎土も精良である。611は平底で、口縁部を短く内側に屈曲させた形態である。610は高台をもつ小皿である。

620・621は内外面にヘラミガキを施す土師器碗である。620は底部を欠くが、621同様に高台が付くものと思われる。内外面に密にヘラミガキを施す。器形や調整は黒色土器B類

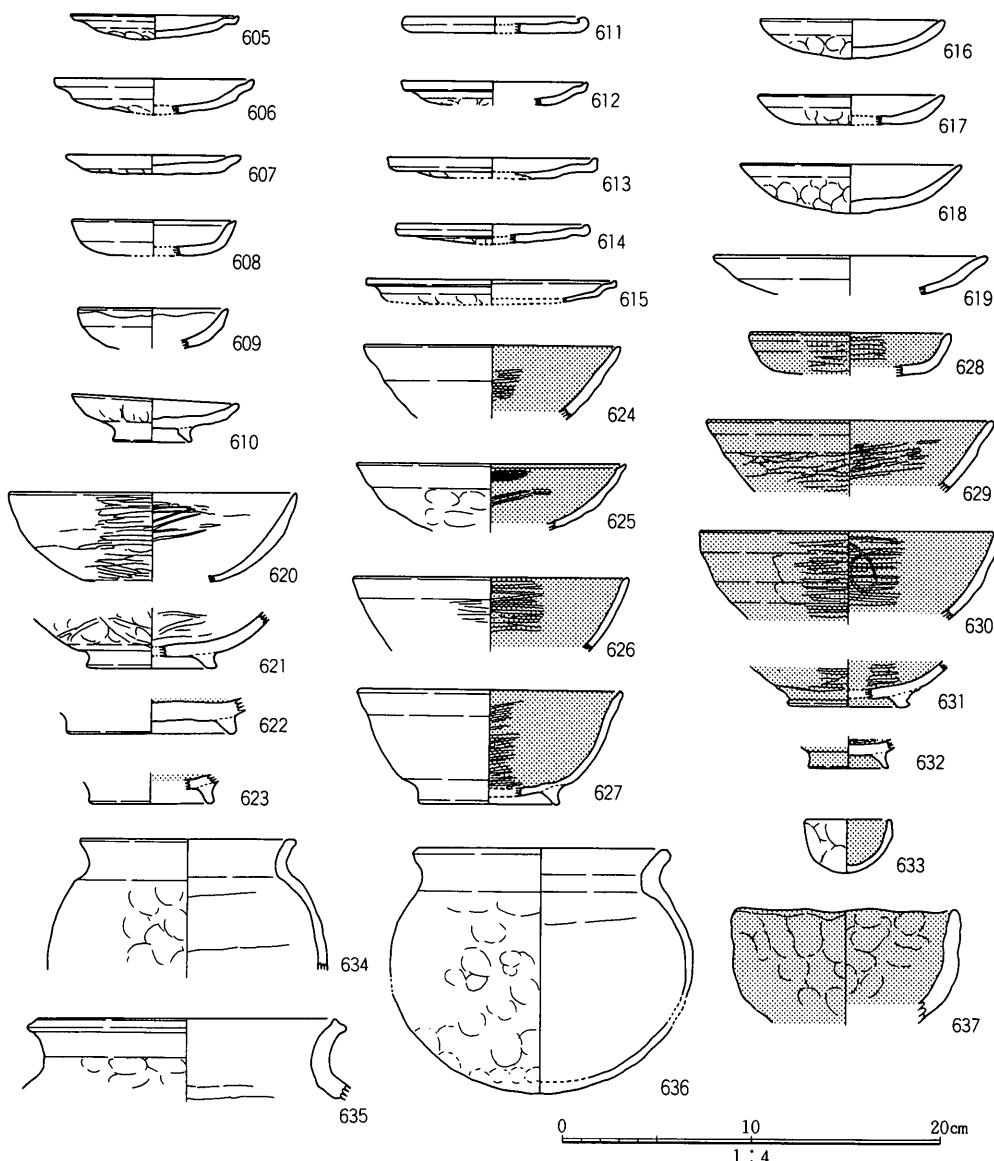


図96 I～III区出土土器実測図

SB01(625)、SB02(611)、土器埋納遺構(615・636)、83-56次SB28(609・627)、83-56次SB29(606～608・620・623)、III区柱穴(622・626・631・634)、SD54(613・614・617・618・621・629・633・635・637)、SD55(612・616・619・632)、III区北部長原4層(605・610・624・628・630)

椀と同じであるが、器面は黒色に処理されていない。

622～627は黒色土器A類椀である。底部の高台は断面形が三角形を呈する高く分厚いもので、口縁端部内面は内傾する面を作ったり、浅い凹線をなす。体部外面はユビオサエしており、626は一部にヘラミガキがなされている。内面は密にヘラミガキされている。

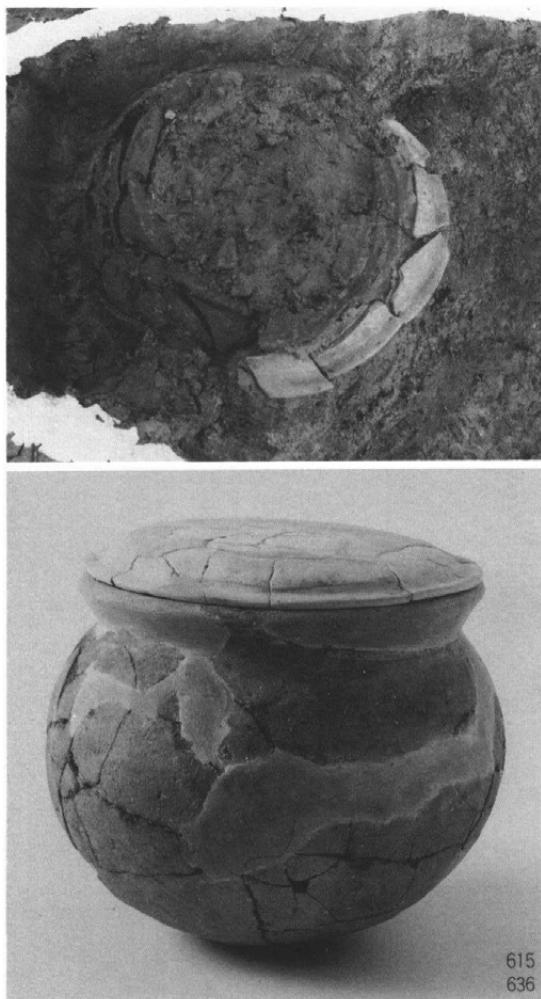


写真18 土器埋納遺構と埋納土器

以上、当地区の屋敷地内から出土した遺物は、Ⅱ区の土器埋納遺構の土器が平安Ⅲ期古段階(表3)であるほかは、おおむね平安Ⅲ期新段階から平安Ⅳ期古段階にかけてのもので、瓦器は含まれなかった。このことは、1983年度の発掘成果と一致する。

IV・VI・IX区遺構出土土器(図97、図版67)

SD56からは638・644・646が出土したが、646の瓦器椀はⅢ期(表4)まで下るものであり、これまで考えられていたこの溝の時期(I～II-2期)より新しい様相をもつ。

SD57からは639・640・645が出土し、そのうち645は内外面をヘラミガキする瓦器椀で、Ⅱ期に属するものと思われる。

VI区のSB21の柱穴から641～643が出土した。いずれも土師器の羽釜である。641は鍔以

628は黒色土器B類の小皿と思われる。内外面をヘラミガキする。629～632は黒色土器B類椀である。底部には、断面形が三角形または台形の高台が付く。口縁端部は丸く終るものと内傾する面を作るものがある。体部の内外面は密にヘラミガキが施されている。

633は口径4.2cm、器高2.8cmの土師器の小型椀である。内面が暗灰色を呈しており、黒色土器A類とすべきかもしれない。637は内外面を粗雑なユビオサエで仕上げた椀である。内外面とも黒色を呈し、黒色土器B類と考えられる。胎土もB類椀と類似している。

634～636は土師器甕である。球形の体部に短い口縁部が付く。口縁端部はヨコナデにより面を作る。体部外面はユビオサエ、内面は板状工具により平滑に仕上げる。636はⅡ区の土器埋納遺構から出土した土器で、615の土師器皿で蓋をしていた(写真18)。

下はないが、平安Ⅲ期新段階にみられる形態と思われる。口縁の上端部は面を作る。体部外面はユビオサエで、内面は板状の工具でナデ調整する。642・643は口縁部を外反させる羽釜である。口縁上端部に面を作る。両者とも生駒西麓産の胎土である。

IX区のSD59から出土した瓦器椀647～649は内外面を密にヘラミガキしており、649の内底面に格子暗文が施されている。瓦器椀のⅡ-1期である。

(京嶋)

動物遺体(図版66-5)

IX区の長原4B層から、ウマ(*Equus caballus* Linnaeus)の歯が出土した(註12)。すべて左下顎の遊離歯で、第3前臼歯P₃から第3後臼歯M₃までの5点が同定された。それらの遺存状態、咬耗や歯根の発達の程度から判断して、おそらく同一個体に由来するものと考えられる。現状では下顎骨は失われているが、本来は歯が下顎骨に植立した状態で埋没したものと推定される。年齢は、切歯がないので詳しい推定はできないが、臼歯の咬耗や歯根の発達の程度による年齢推定法[P.C.Goody 1983]によれば、5才前後と推定できる。

(久保)

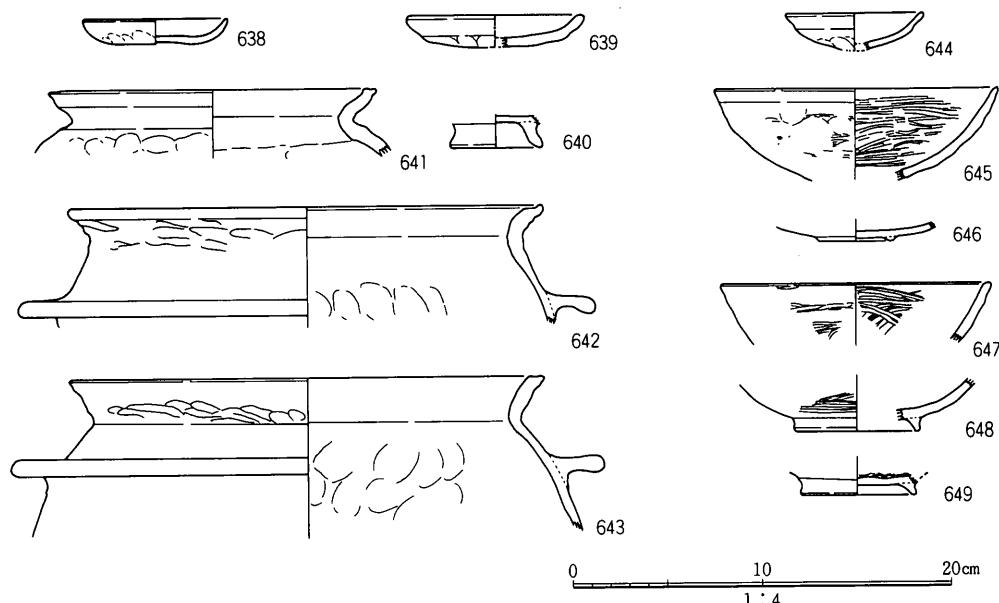


図97 IV・VI・IX区出土土器実測図
SB21(641～643)、SD56(638・644・646)、SD57(639・640・645)、SD59(647～649)

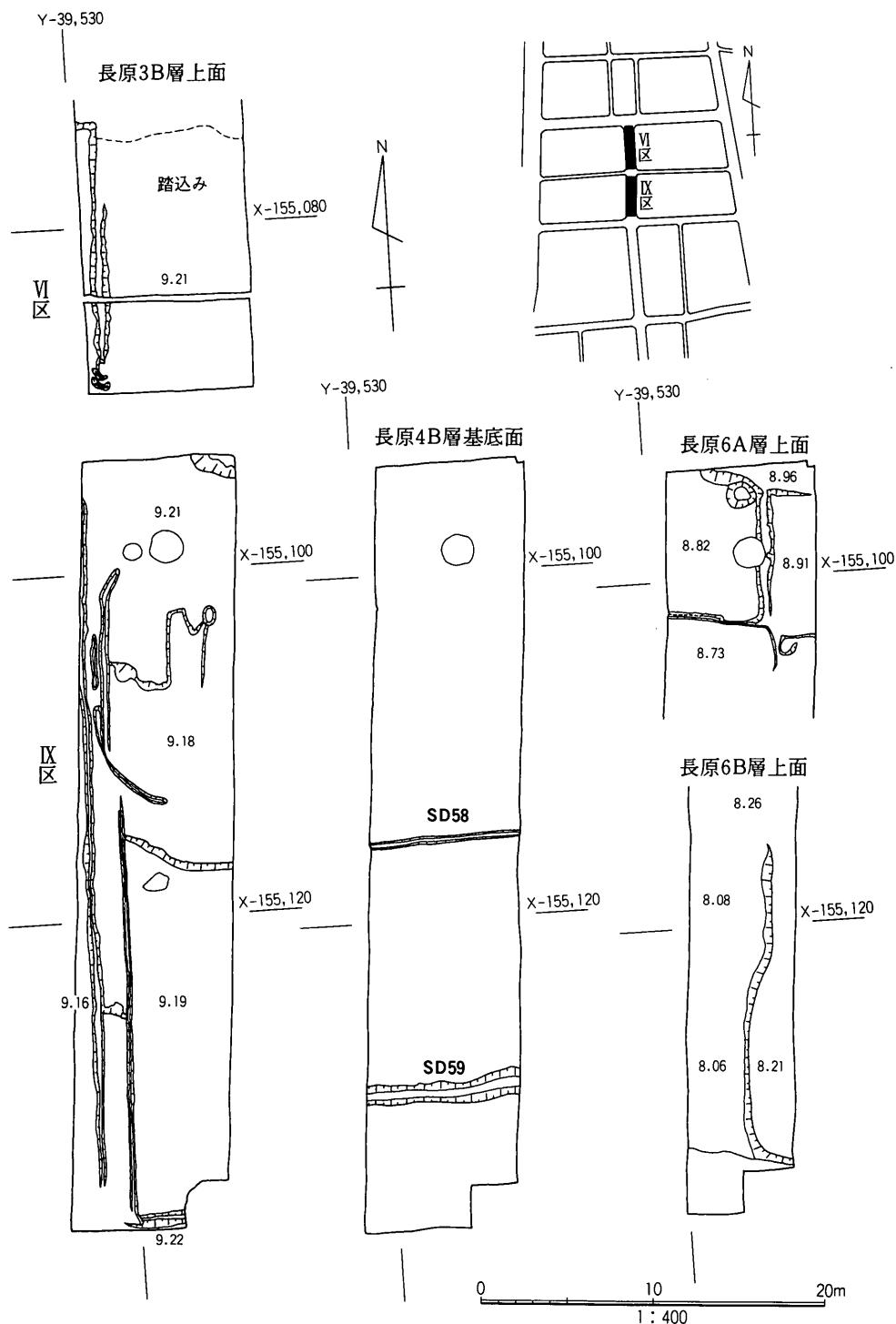


図98 VI・IX区の水田遺構（図中の数値は上面の標高m）

7) 室町～江戸時代の遺構と遺物

i) 井戸(図99・101、図版68)

IV区南部を東西に延びる坪境溝を切って、灌漑用の野井戸が並んで検出された。そのうち、遺物を出土したSE02について記述する。この井戸は長軸5.0m、短軸3.5mの楕円形を呈する井戸である。埋土中から651の唐津焼向付、658の志野菊皿などが出土した。651の高台内には屋号と思われる墨書がある。また、内面には胎土目がある。

ii) 溝(図99・101、図版68)

SD60

IV区南部の東西方向の坪境溝である。砂礫からなる水成層を含む地層で、大きく2回にわたって埋り、その後、現存する坪境の用水路が掘削されたものと思われる。

埋土中からは唐津焼向付650・653、唐津焼碗652・654、唐津焼鉢659、青花661、瀬戸美濃焼皿662・663、瀬戸美濃焼大皿667、備前焼擂鉢664、堺摺鉢666、瓦質擂鉢668・669、瓦質甕670・671、瓦質火鉢672が出土した。650の内面には鉄絵の一部がみられる。652・653の高台内に墨書がみられる。650・653は胎土目がある。

iii) 土壙(図99・101、図版3・68)

SK19・20

VI区北部に位置する長方形を呈する土壙で、南北に2基が並んで検出された。幅1.3～1.8mで、深さは0.30～0.75m、南側の土壙は南北長が14mである。ほぼ直に掘られており、底面は砂質シルトまたは砂礫層が露出していた。底面の凹凸からみて、北側の土壙は5基以上、南側の土壙は7基の長方形土壙が連なったものと思われる。長原13層の粘土を対象とする土取り穴と思われる。

この土壙はシルトや粘土のブロックが含まれる砂礫で埋戻されている。この層中から小量ながら遺物が出土した。660は伊万里焼の碗で、底部を欠く。655～657は唐津焼の碗または皿である。655の内底面に砂目がある。665は備前焼擂鉢である。

iv) 水田遺構(図98、図版13)

VI区南端部とIX区で長原3B層上面の水田遺構が検出された。各地区の西端を南北方向に直線的に延びる畦畔で、東西方向の畦畔は、IX区南端で東に延びる畦畔を確認したのみである。この水田から出土した遺物については、本節第1項で記述した。

(京嶋)

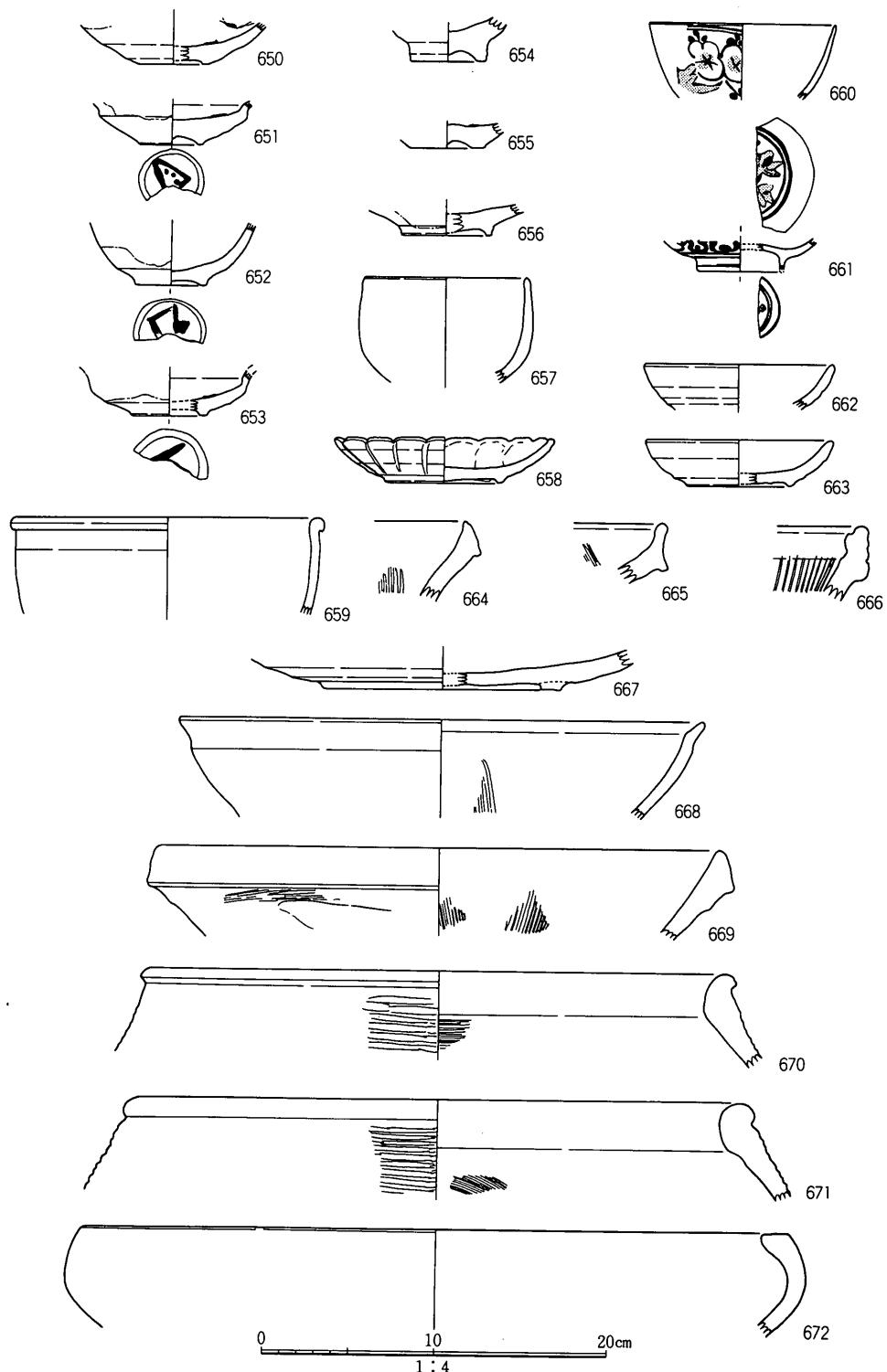


図99 室町～江戸時代の遺物実測図

SE02(651・658)、SK19(660)、SK20(655～657・665)、SD60(650・652～654・659・661～664・666～672)

8) 小結

i) 古墳時代土器の器種構成

西地区における今年度の調査で出土した土器は、各遺構とも須恵器の占める割合が大きい傾向がある。器種構成の検討はIX区南端で検出されたSD52、VII区中央部のSE01、VII区の同時期の可能性が高いSD32・37・38を対象に行い、周辺の既報告資料の中からNG83-70次SK39~41の資料もあらためて検討の対象とした(表7)。

器種としては蓋杯が多く、特にSD52出土資料は8割近くを須恵器が占め、身と蓋を合わせた蓋杯は100点に及ぶ。これらの点から、SD52の蓋杯の量は日常の塵芥廃棄坑としては特異なほど多量であるといえるであろう。SD52をはじめとするIX区から出土する須恵器には焼成のあまいものや、焼け歪みの顕著な資料も含まれている。さらに、IX区南側のNG86-41次調査地で同時期の木製の当て具や叩き板が出土していることなどからみて、SD52の特異な器種構成は、付近に須恵器窯が存在し、その操業に際しての廃棄物が含まれていることにより生じたものと推測される。また、この遺構出土の資料は、当地域では出土数の少ない須恵器の甌が6点含まれていることや土師器羽釜がある点が注意される。

SE01では須恵器と土師器の割合はほぼ等しく、杯や高杯などの食器に対する提瓶などの貯蔵用器種の占める割合が高い。

SD32・37・38は総資料数の少ないSD38の資料がやや逆の傾向を示すが、他は須恵器と土師器の割合はほぼ等しいもしくは須恵器の優位を示している。また、NG83-70次調査のSK39~41[大阪市文化財協会1992a, pp.73-74]の出土土器の器種構成も須恵器と土師器の割合はほぼ同じである。食器だけに限定すると、SD52を除いて7~8割を須恵器が占める。難波地域の6世紀初頭から7世紀初頭の資料(註13)をみると、須恵器は全体の約6割を占め、食器に限定すれば約8割を占め、ほぼ同じ傾向を示す。しかし、高石市大園遺跡の6世紀後半の資料においては、供膳形態のすべてが須恵器で占められるとされ[広瀬和雄1981]、岸和田市三田遺跡の5世紀末~7世紀初頭の資料でも97%以上を占めており[渡辺昌宏1987]、当地域や難波地域と異なった様相を呈している。

長原・瓜破地域における飛鳥時代の須恵器と土師器の割合は、飛鳥Ⅰの段階では土師器食器類の增加がみられるものの、須恵器食器の占める割合が大きい。飛鳥Ⅱ・Ⅲの段階で両者の割合はほぼ等しくなる[京嶋覚1992c]。

次に、須恵器食器の中で高杯と蓋杯の割合をみると、時期的にやや古いNG83-70次調査のSK39~41の資料では両者の数量は等しいが、今回調査した他の遺構では蓋杯が9割近く

表7 主要遺構の土器器種構成表

① SD52

須恵器		土師器	
杯身	44	蓋杯	杯
杯蓋	53	53	椀
有蓋高杯	7	7	高杯
高杯蓋	6	高杯	鉢
無蓋高杯	3	3	壺
高杯脚部	10		脚台
高杯形器台	1		
筒形器台	0		食器 6 8.1%
器台脚部	4	4	小型甕 4
匙	0		布留式甕 1
椀	0		中型甕 5 壺
鉢	1	1	大型甕 7 17
食器	68	91.9%	甑 3 3
小型壺	2	壺	羽釜 1 1
大型甕	0	2	鍋 0
甕	10	甕	調理 21
大型	1	11	大型壺 1
平瓶	0		貯蔵 1
提瓶	0		籠 0
横瓶	0		把手 1
壺蓋	2	2	製塙土器 5 5
把手付壺	1	1	その他 5
貯蔵	16		
甑	6	6	
調理	6		
合計	151	90 76.3%	合計 35 28 23.7%

② SE01

須恵器		土師器	
杯身	14	蓋杯	杯 1 1
杯蓋	19	19	椀 0
有蓋高杯	2	2	高杯 1 1
高杯蓋	0	高杯	鉢 2 2
無蓋高杯	1	1	壺 0 0
高杯脚部	7		脚台 0
高杯形器台	2		
筒形器台	0		食器 4 13.8%
器台脚部	1	2	小型甕 6
匙	0		布留式甕 0
椀	1	1	中型甕 9 壺
鉢	0	0	大型甕 10 25
食器	25	86.2%	甑 5 5
小型壺	3	壺	羽釜 0
大型甕	0	3	鍋 0
甕	4	甕	調理 30
大型	3	7	大型壺 0
平瓶	0		貯蔵 0
提瓶(皮袋合)	3	3	籠 2
横瓶	1	1	把手 3
壺蓋	0	0	製塙土器 1 6
把手付壺	0	0	その他 6
貯蔵	14		
甑	0	0	
調理	0		
合計	61	39 53.4%	合計 40 34 46.6%

③ SD32・37・38

須恵器		土師器	
杯身	18	蓋杯	杯 1 1
杯蓋	29	29	椀 0
有蓋高杯	0	0	高杯 10 10
高杯蓋	0	高杯	鉢 0
無蓋高杯	5	5	壺 3 3
高杯脚部	4		脚台 0
高杯形器台	2		食器 14 28.0%
筒形器台	0		小型甕 15
器台脚部	1	1	布留式甕 1
匙	0		中型甕 14 壺
椀	0		大型甕 10 40
鉢	1	1	甑 2 2
食器	36	72.0%	羽釜 0
小型壺	3	壺	鍋 0
大型甕	1	4	調理 42
甕	1	甕	大型壺 0
大型	3	4	貯蔵 0
平瓶	0		籠 1
提瓶	0		把手 0
横瓶	1	1	製塙土器 1 2
壺蓋	1	0	その他 2
把手付壺	0	0	
貯蔵	9		
甑	1	1	
調理	1		
合計	71	46 45.1%	合計 58 56 54.9%

④ 83-70次 SK39~41 [大阪市文化財協会1992 pp.80-88]

須恵器		土師器	
杯身	7	蓋杯	杯 1 1
杯蓋	11	11	椀 0
有蓋高杯	8	8	高杯 7 7
高杯蓋	8		鉢 2 2
無蓋高杯	3	3	壺 0 0
高杯脚部	0		脚台 0
高杯形器台	0		食器 10 28.6%
筒形器台	2	2	小型甕 11
器台脚部	0	0	布留式甕 1
匙	0		中型甕 0 壺
椀	1	1	大型甕 4 16
鉢	0	0	甑 6 6
食器	25	71.1%	羽釜 0
小型壺	3	壺	鍋 1 1
大型甕	0	3	調理 23
甕	1	甕	大型壺 0
大型	2	3	貯蔵 0
平瓶	0		籠 0
提瓶	0		把手 4
横瓶	0		製塙土器 0 0
壺蓋	0	0	韓式土器 1
把手付壺	0	0	
貯蔵	6		
甑	0	0	
調理	0		
合計	46	31 48.4%	合計 38 33 51.6%

を占める。これは高石市大園遺跡[広瀬和雄1981]などと同じ傾向といえる。

須恵器甌は陶邑古窯址群においてはTK73型式に存在し、初期須恵器を構成する器種であるが、長原遺跡の初期須恵器の中に甌は認められない。当地域におけるこの時期の甌は例外なく軟質のもので、韓式系土器と呼ばれるものである。須恵器の甌はTK23型式の土器と共に瓜破遺跡のものがもっとも古いと思われるが、この時期の甌の大半は土師器である。甌は飛鳥Ⅱの段階まで確認できるが、いずれも土師器であることからみて、須恵器の甌はこの地域ではほとんど普及しなかったものと思われる。SD52で出土した甌はTK47型式以後の資料であり、6世紀初頭前後に、須恵器甌が一時的に生産・使用されたものと考えられる。

古墳時代の土師器羽釜はSD52のほか包含層から少量ながら出土した。また、瓜破遺跡のTK23型式の土器と共に完形に復元できる資料もある。これらはいずれも生駒西麓産の胎土である。こうした羽釜は胎土を同じくする曲げ庇系[稻田孝司1978]の竈形土器と組み合うものと考えられるが、長原・瓜破遺跡の古墳時代の資料に曲げ庇系竈はない。今回報告した竈形土器を含め、すべて付け庇系の竈形土器であり、胎土も生駒西麓産ではない。

その後、飛鳥時代においては、飛鳥Ⅰの資料で生駒西麓産の曲げ庇系の竈形土器と羽釜が共伴しており(註14)、飛鳥Ⅲの資料では付け庇系竈も共存している[大阪市文化財協会1992b]。

このように、古墳時代において羽釜の出土量が少なく、曲げ庇系竈の認められない現状では、羽釜は主要な調理具ではなかったということができよう。

ii)須恵器蓋杯の法量と製作手法

土器の出土量が多いVI・VII・IX区の中で法量がわかる蓋杯101点を対象に、口径と底部ないし天井部外面のヘラケズリの回転方向の関係を検討した(表8)。

VI区では逆時計回りが4割程度で、蓋・身ともに回転方向による口径の違いは少なく、蓋で平均口径12.3~12.4cm、身で10.6~10.8cmである。これに対して、VII・IX区では逆時計回りが全体の7~9割を占めて主流となる。平均口径は、時計回りのものはVI区の資料と同じであるが、逆時計回りのはあいは蓋で14.6~15.5cm、身で12.1~13.2cmと2cm以上大きい。

ヘラケズリの回転方向は陶邑古窯址群においてはTK208型式では9割が時計回り、TK47型式で両者の割合がほぼ等しくなり、MT15型式からTK10型式で7~8割が逆時計回りになる[田辺昭三1966]。また、蓋杯の口径はMT15型式以後に大きくなることから、VII・IX区の蓋杯の口径とヘラケズリの方向が示す傾向は陶邑古窯址群におけるMT15型式以後

表8 蓋杯におけるケズリ方向と内面當て具痕の関係

器種	ケズリ方向	個体数	平均口径(cm)	内面當て具痕
杯身	逆時計回り	47	12.16	69.1%
	時計回り	21	10.77	30.9%
杯蓋	逆時計回り	52	14.48	71.2%
	時計回り	21	12.39	28.8%
合計		141		16 11.3%

地区	ケズリ方向	杯身		杯蓋		内面當て具痕
		個体数	平均口径(cm)	個体数	平均口径(cm)	
VI区	逆時計回り	8	10.66	5	12.40	39.4%
	時計回り	11	10.80	9	12.34	60.6%
VII区	逆時計回り	8	12.10	15	14.62	71.9%
	時計回り	4	10.35	5	12.32	28.1%
IX区	逆時計回り	19	13.25	14	15.54	91.7%
	時計回り	1	10.80	2	13.20	8.3%

これらはヨコナデを切り、一定方向のナデで消されていることから、成形後に付けられたものである。したがって、底部または天井部外面をヘラケズリする際にシッタの代りに使用されたとする田辺昭三氏の想定[田辺昭三1966・1981]を支持したい。この痕跡を残す資料の逆時計回りの蓋杯全体に占める割合は2割にも充たず、この時期の一般的な特徴とはいえないが、内面に一定方向あるいは不定方向のナデが用いられるものが多いことから、ナデによる最終の仕上げ調整でほとんどが消され、ごく少数に痕跡が残されたものと思われる。

この痕跡は有蓋高杯の杯部内底面や、高杯蓋天井部内面にもみられる。高杯杯部内底面の痕跡は広い範囲にわたり、その切合が顕著である。これは杯身と同様に作られた杯部をそのままの状態にして、脚部を接合した際に付いたものと理解したい(註15)。

iii) 古墳時代の建築遺構

本節では掘立柱建物13棟、竪穴住居6棟について報告した(表9)。調査範囲が限定されていたため、これ以上の建物遺構が存在したものと思われる。これらの建物遺構の構造と時期について、以下にまとめておきたい。

構造

SB05の床束の柱穴は既述のように側柱に比べてかなり浅く、側柱の深さの半分ぐらい全体に削平されていたばかり、床束の柱穴は検出できなかったと思われる。したがって、2間×2間の建物であっても、本来床束をもつた建物であった可能性を考えておく必要がある。また、2間×2間で床束を2本もつ構造の古墳時代の建物は高石市大園遺跡[大阪府

の傾向と一致する。一方、VI区の蓋杯の口径とヘラケズリの方向の示す傾向は、TK23型式とほぼ等しい。

また、蓋杯の底部ないし天井部の内面に同心円文の當て具痕が残されている資料がみられる。今回出土した蓋杯の資料141点のうち、當て具痕を残すものは16点あり、そのうち15点までがヘラケズリは逆時計回りであった。また、口径は身で12cm以上、蓋で14cm以上の大型品に限られる。

教育委員会1981a・b]、静岡県古新田遺跡[浅羽町教育委員会1991]でも発掘されており、5世紀後半～6世紀にかけてみられる。

これに対して、SB14のはあいの棟通りにある2柱穴は側柱よりむしろ深く、柱穴の規模も大きい。したがって、この2柱穴は床束ではなく、いわゆる内部棟持柱[植木久1992]と考えられる。側柱の形状や大きさにはばらつきがある点や西側柱が未検出である点に検討の余地はあるが、大阪府山之内遺跡(註16)や静岡県古新田遺跡[浅羽町教育委員会1991]で検出されている建物と同じ類型に属するものと考えられる。

SB18は四つの隅柱が他のものに比べて極端に深く、妻柱や側柱の柱穴はかなり浅い。おもに四隅の柱が上屋を支持し、他の側柱はそれを補い、内部の柱穴は床束であると考えられる。

SB19は3間×2間の平地建物である。長原6層で覆われており、床束の柱穴が削平された可能性は少なく、床束が削平された可能性のある2間×2間、あるいは3間×2間の建物や、床面の削平された竪穴住居の可能性のある1間×1間の建物を除けば、数少ない平地建物の一つといえよう。柱間が梁・桁ともほぼ等間である点は、梁行が広く、桁行が狭い総柱形式の3間×2間の建物と異なっている。なお、南妻の内側にSK13があり、屋内に設けられた施設と思われる。

時期

SB07～09は柱穴からの出土遺物はないが、西側の溝からTK208型式を中心とする土器が出土[大阪市文化財協会1992]しており、この時期に比定できるのではなかろうか。

竪穴住居SB10～12は同じ場所に建替えられたものである。この住居からは時期を示す遺物は出土しなかったが、SB10・11は北側で検出されたNG83-53次調査のSB31および今回のSB05・06の掘立柱建物と同じ方位を示しており、共存した可能性が高い。SB31と同じ方位で建物に関連する可能性のあるSD35[大阪市文化財協会1992a]の出土遺物がTK208型式またはTK23型式であるため、SB10・11もほぼ同じころと思われる。SB12はもっとも新しいが、TK23型式の時期と思われる。

SB13・14は方位が同じで、出土遺物もTK208型式を下限とする点で、共存した建物と考えられる。両建物の間にあるSD22・23からはTK23型式の土器が出土しており、SB13・14より新しい。

SB18はSD26を切っており、位置関係からSD27と共存する可能性がある。しかし、出土遺物はSD26・27ともTK47型式が下限で時期差はなく、SB18もTK47型式ころの遺物が

表9 西地区建物遺構一覧表

	遺構番号	地区	棟方向	桁	梁	桁長	梁長	床面規模	構造	時期	備 考
NG 83-53次	SB31		N 30° 10' E	3間	2間	4.83m	3.82m		総柱	古墳	
	SB32		E 8° N	3	2	4.69	3.80			古墳	
掘立柱建物	SB01	I	N 2° W	(2)	(1)	3.40	1.00		側柱	平安	
	SB02	II	N 1° W	(4)	(1)	7.80	1.65		総柱	平安	
	SB03	IV	N 42° W	(2)	(1)	2.60	1.65		不明	古墳	
	SB05	IV	N 29° E	2	2	4.10	3.65		総柱	古墳	棟通に2本の床束
	SB06	IV	N 27° E		(1)		1.55		不明	古墳	
	SB07	V	N 35° 30' W	1	1	2.20	1.95		側柱	古墳	竪穴住居か?
	SB08	V	N 40° 30' E	1	1	2.10	1.80		側柱	古墳	竪穴住居か?
	SB09	V	E 20° N	(2)		3.10			不明	古墳	
	SB13	VI	N 17° E	(1)	2	1.80	3.20		側柱	古墳	
	SB14	VI	E 11° 30' S	4	3	7.20	5.25		側柱	古墳	内部棟持柱2本
	SB15	VI	N 4° E	2	2	3.65	3.35		総柱	古墳	
	SB16	VI	N 5° E	(1)	2	1.85	3.20		総柱	古墳	2間×2間の建物か?
	SB17	VI	N 7° E	3	3	5.20	4.70		総柱	古墳	総柱か?
	SB18	VI	N 0°	3	2	4.50	4.20		総柱	古墳	
	SB19	VI	N 1° W	3	2	4.90	3.10		側柱	古墳	
	SB20	VI	E 4° S		2		3.15		不明	平安	
	SB21	VI	E 5° S	4	2	7.30	3.70		側柱	平安	
	SB22	VI	E 5° S	(1)	2	2.50	4.20		側柱	平安	
	南端柱列	IX	N 10° E	4		4.60				古墳	掘立柱建物か? SP07~11
竪穴住居	SB04	IV	E 5° N	1		2.35		4.80m	竪穴	古墳	周壁溝
	SB10	VI	N 36° 30' E					4.50	竪穴	古墳	周壁溝・焼土面
	SB11	VI	N 27° E	1	1	2.65	2.10	4.7×4.2	竪穴	古墳	周壁溝
	SB12	VI	N 4° E	1	1	2.85	2.70	5.30	竪穴	古墳	周壁溝・焼土面
	SB23	VII	E 10° N	1		2.80		6.30	竪穴	古墳	周壁溝
	SB24	VII	E 5° N	1		3.20		6.10	竪穴	古墳	周壁溝・竪支脚・焼土面

出土していることから、これらの土器が建物の時期を示しているといえよう。また、SB19はTK208型式の土器を出土したSD29・30を切っており、屋内の土壙SK13からTK23型式以後の土器が出土しているため、SB18と共に存していた建物と考えることができる。

(京嶋)

註)

(1)「客土」「作土」の概念は[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992a]に従う。

(2)[大阪市文化財協会1990・1992c]の報告例をはじめとして、数例の鍋・竈の模造品が出土している。

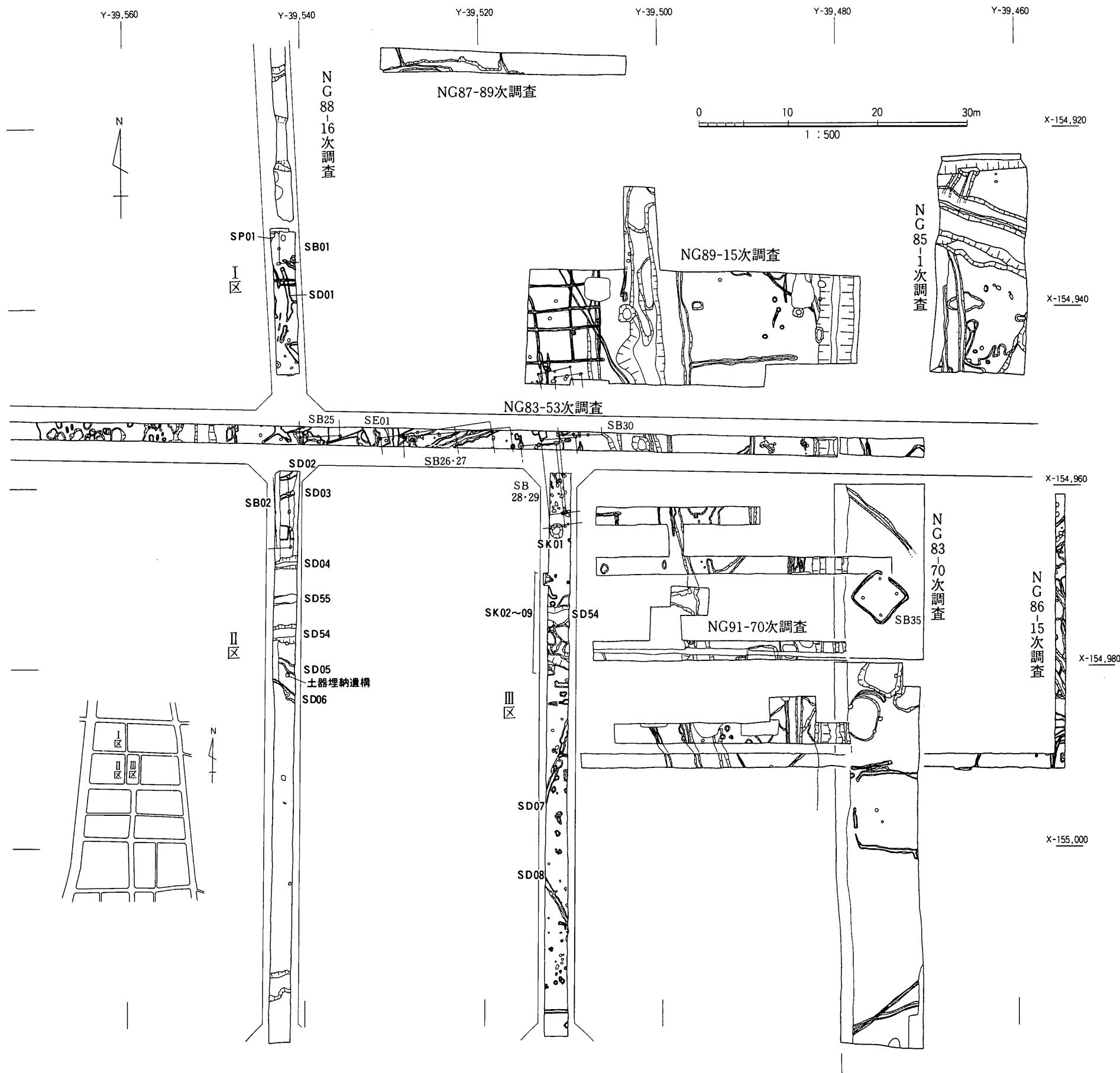
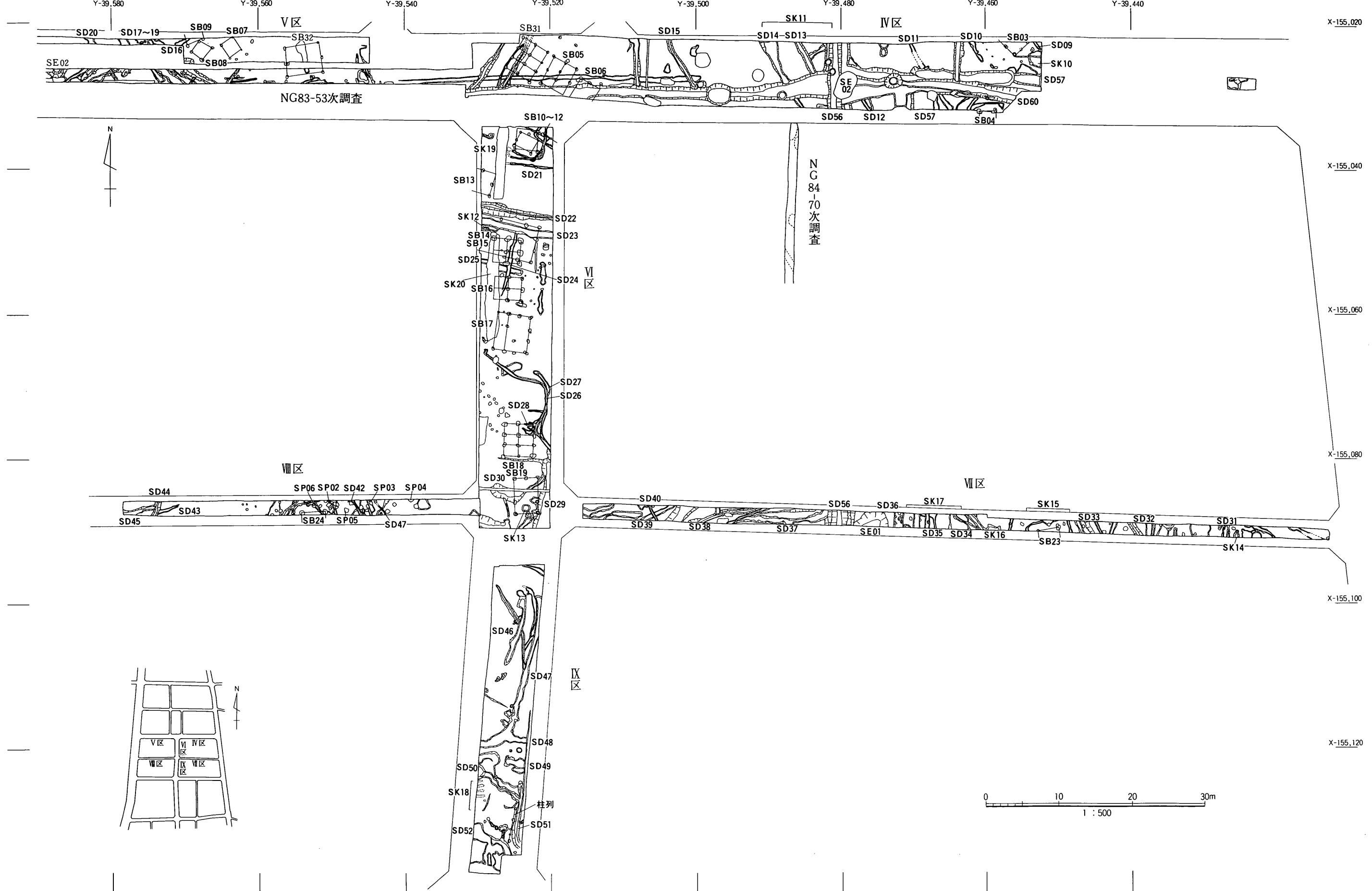


図100 I～III区周辺遺構全体図



- (3) [寺沢薰・森井貞雄1989]における河内地域の第Ⅰ様式～第Ⅵ様式に従う。
- (4) 遺物の検討は奈良国立文化財研究所松沢亜生氏とともに行った。また、クサビに関する資料や剥離面の複雑なものに関しては、特に多大なご教示を得た。
- (5) 岡山県菅生小学校裏山遺跡[岡山県教育委員会1993]、鳥取県青木遺跡[青木遺跡発掘調査団1977]などで類似した土器が出土している。
- (6) 大場氏は土馬を飾り馬と裸馬に大別した[大場磐雄1937]が、さらに小笠原氏は両者が第Ⅰ段階と第Ⅱ段階という時期差を示すものとした[小笠原好彦1975]。ここで報告した土馬は6世紀中葉に比定されるもので、土馬としては初期のものといえ、8世紀前葉からとする第Ⅱ段階の時期を大きくさかのぼり、第Ⅰ段階の飾り馬に先行する時期のものとなる。小笠原氏のいう段階的変化は7・8世紀の律令的祭祀具の一つとして位置づけられていく過程に看取される変化として妥当な見解であるが、古墳時代におけるその初現期においては、両形態が混在していたと考えるべきであろう。
- (7) 600・601は1993年刊行の奈良国立文化財研究所編『木器集成図録－近畿原始篇－』掲載の13314・16220である。13314については盤として分類されている。
- (8) 同定に当っては、大阪市立自然史博物館樽野博幸氏より、標本と比較のうえ御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。
- (9) わずかな欠損部分や乾燥のためひびとなって開いている部分は推定により補正した。
- (10) 幅および前後径のそれぞれから骨長を推定し、平均値を求めた。なお、西中川氏らの方法は現生骨格標本の計測値に基づいて算出された推定式であるので、遺跡出土資料への適合性を検証しておく必要があろう。
- (11) 林田氏は日本の在来馬を、木曾馬(体高124～142cm)や御崎馬(体高125～140cm、平均132cm)に代表される「中形馬」と、トカラ馬(体高108～121cm、平均115cm)に代表される「小形馬」の二つに分類している[林田重幸1974]。
- (12) 同定に当っては、大阪市立自然史博物館樽野博幸氏より標本と比較のうえ御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。
- (13) [大阪市文化財協会1992d]で報告したSB214出土の資料を対象にした。
- (14) 長原遺跡12次調査の資料であるが、未報告である。
- (15) この痕跡については江浦洋氏の見解[江浦洋1988]もある。
- (16) 1988年度の発掘調査で検出された。出土遺物は未整理であるため時期は限定できないが、6・7世紀代のものと思われる。

第2節 長原遺跡南地区の調査(NG85-34①～⑤・70次調査)

1)はじめに

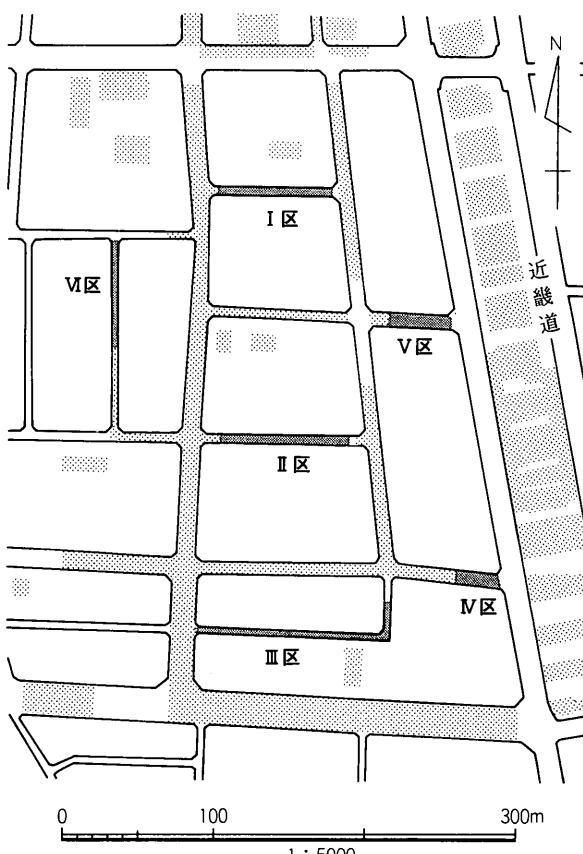


図102 長原南地区の調査区区分

表題に示す6件の調査地は長原遺跡南地区の北東部に位置し、東西260m、南北300mの範囲にある。各調査地は近接することなく、同地区内に散在しているため、これを次のように呼称することにしたい。34①～⑤次調査地をそれぞれI～V区、70次調査地をVI区として以下の記述を行う(図102)。また、遺構の名称については各遺構の種類ごと同地区内での通し番号とした。ただし、古墳番号については遺跡全域を対象とするものとなっている。

2)層序と遺物

i)層序(図103～105)

以下の記述は『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ第Ⅱ章の長原遺跡標準層序[趙哲済・京嶋覚・高井健司

1992a]に従って行う(別表2)。

調査範囲は、地形的には南北方向に延びる丘陵部の東の縁辺部に当り、南西から北東に向って緩やかな傾斜がある。各調査地とも基本的な地層の状況は一致しており、長原0層から長原7A層までの各層が比較的良好にみられる。しかし、長原7B層は古墳の盛土下に残るのみで、長原8層から長原12層までの地層については、上層からの下方侵食などによって識別することが困難になっている。中央地区にちかいVI区では古墳の墳丘下に黒ボク土があり、長原12／13層漸移帶にみられる火山灰層が土壤化したものと思われる。

沖積層上部層Ⅰ

長原0層：現代の客土層である。

長原1層：現代の作土層である。

長原2層：含粗粒砂灰白色～灰黄色シルト層で、近世・近代の地層である。マンガンを多く含み、層厚は10～20cmである。

長原3層：含粗粒砂褐灰色シルトないし含シルト灰色中～粗粒砂。本層は2、3層に細分される。層厚20～30cm、室町時代の地層である。

長原4A層：黄色～灰白色細～中粒砂の水成層で、層厚5～20cmである。Ⅱ区西端部とⅢ・Ⅳ区の全域で確認された。13世紀後半から14世紀初頭頃の洪水に起因する。

長原4B層：含砂灰色～灰黄色粘土質シルト層。層厚20cm前後で、各調査地でみられる。特にⅥ区においては層厚70cmに達し、5層に細分されている。その5層のうち上から3層目の暗褐色細粒砂層には、完形の土器が多数含まれ、その基底面に掘立柱建物や井戸などの遺構が見つかった。また、4、5層目の灰色～灰黄色シルト質細砂～極細粒砂(層厚約35cm)については長原5層が汚染されたものとも考えられる。Ⅱ・Ⅳ区においては、4B層上面に水田畦畔が検出されている。平安・鎌倉時代の地層である。

長原5層：黄色～灰色細粒砂～砂礫層で、ラミナが顕著に観察される水成層である。調査区ごとに層厚が異なり、5～60cmの開きがある。また、Ⅲ区の南北トレンチでは本層がみられず、Ⅳ区においても希薄である。8世紀後半から9世紀初頭に発生した洪水による堆積とみられる。

長原6A層：灰色シルトあるいは暗灰色粘土層の水田作土層で、層厚10～20cmを測る。当層上面に水田畦畔や溝が検出されている。奈良～平安時代初頭の地層である。Ⅰ区では当層の下部に砂礫を多く含み、長原6Aii層(水成層)の痕跡と考えられる。

長原6B層：暗灰色～黒色粘土層で、6A層の直下に存在する。調査時点では長原7A層と考えられていたが、周辺での調査成果から6B層とみるのが妥当であろう。Ⅲ区南北トレンチのように当層のみられないところもあるが、Ⅰ区東端部では50cmちかい層厚をもつ。Ⅰ区東端部には谷状に低くなった部分があり、6B層はその部分に厚く堆積している。その下部については7A層の可能性も残る。Ⅰ区西半部には当層下面の溝も検出されている。飛鳥・奈良時代の地層である。

長原7A層：黒色シルト質粘土層で、おもに古墳の周溝内に遺存する。飛鳥時代の地層である。

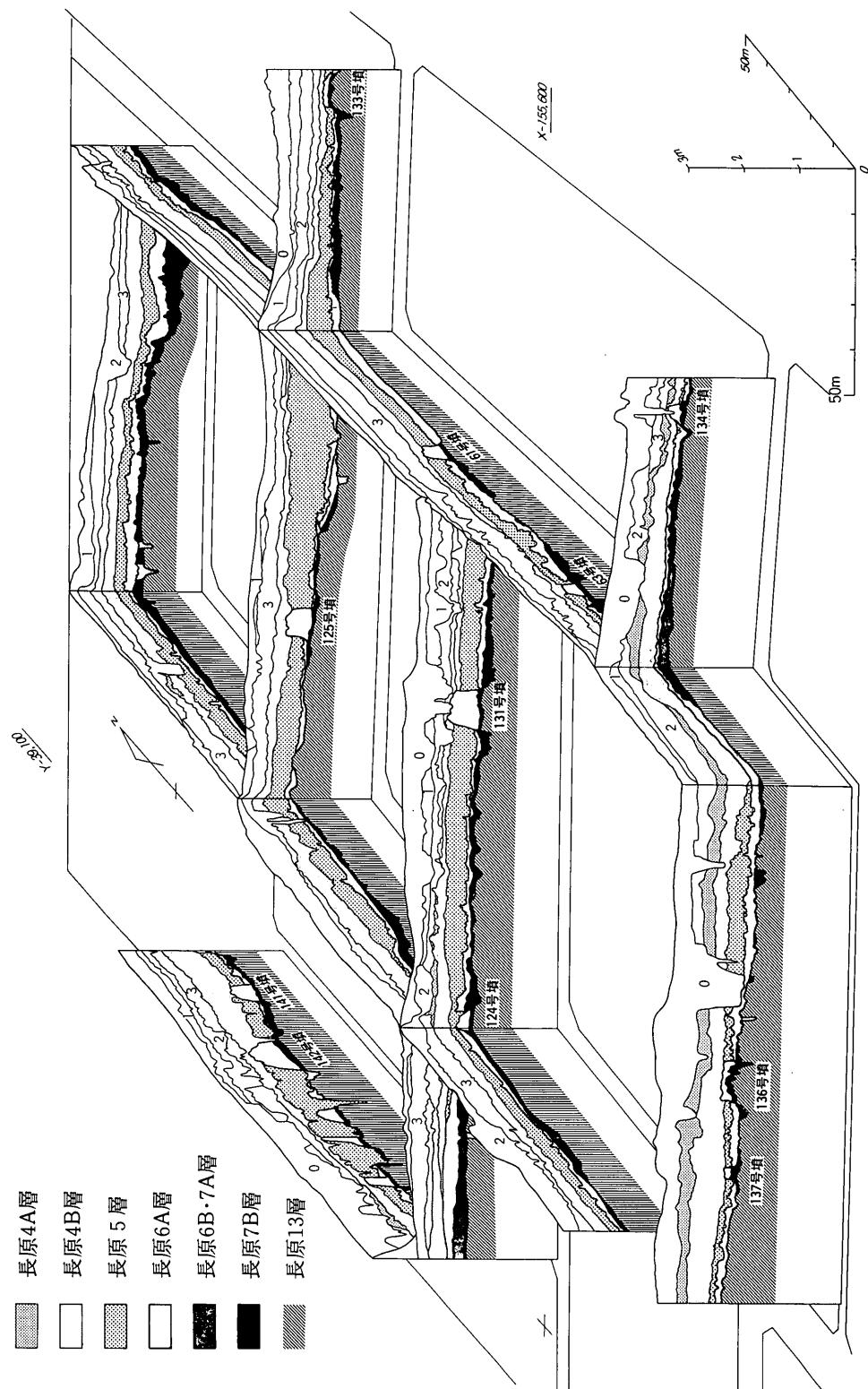


図103 南地区北東部の沖積層パネルダイアグラム

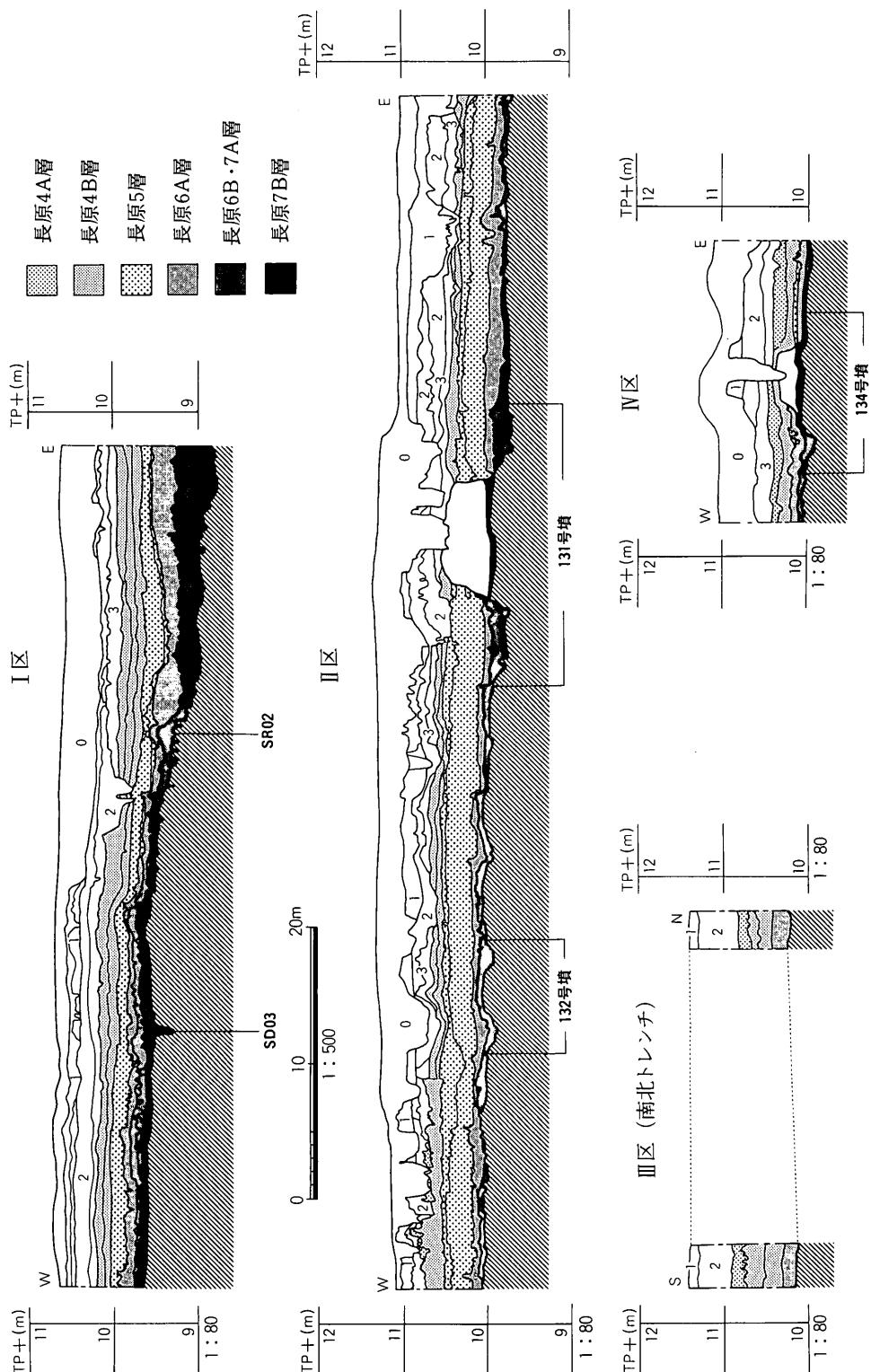


図104 I～IV区の層序

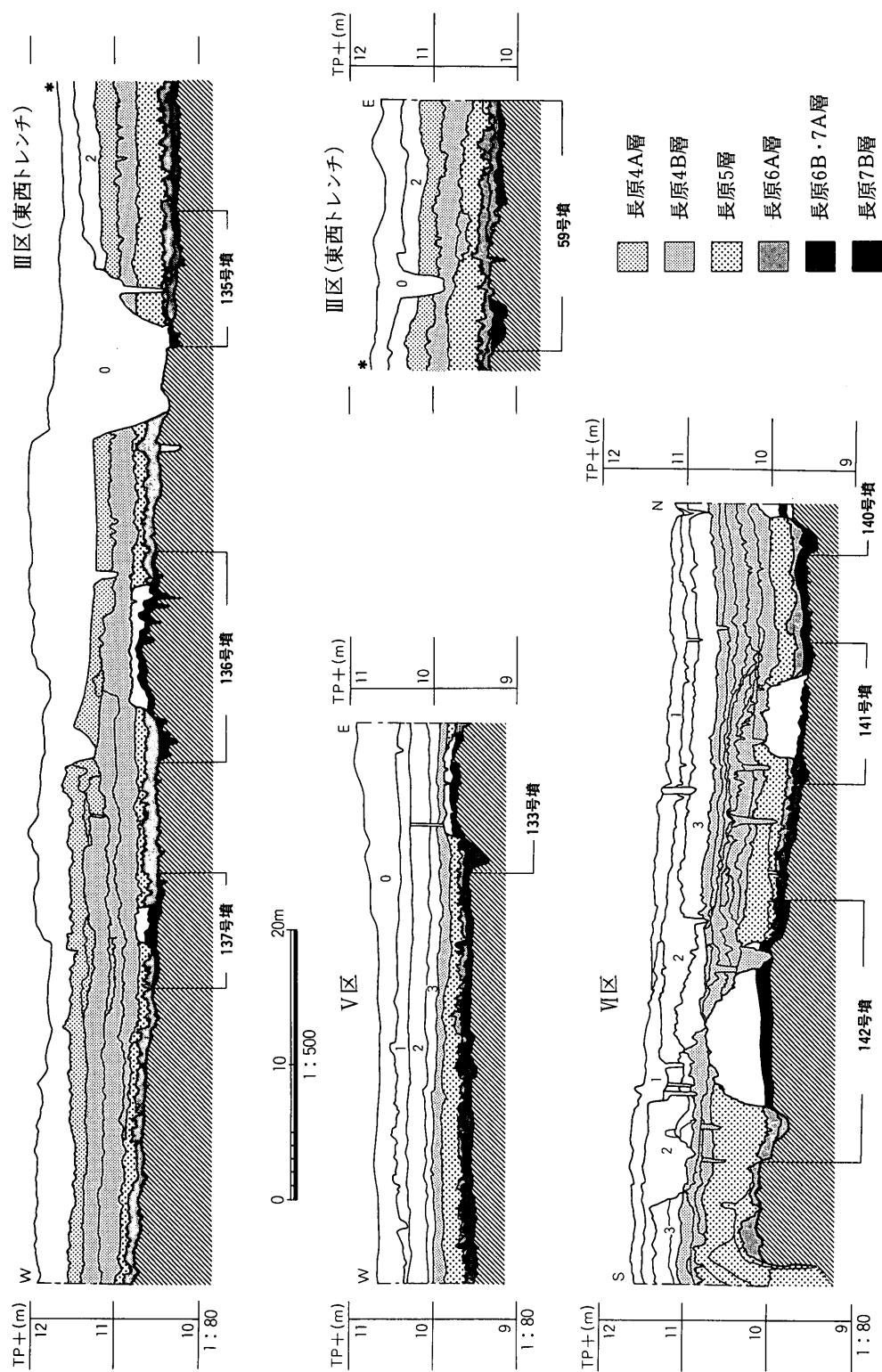


図105 III・V・VI区の層序

沖積層上部層II

長原7B層：黒褐色～黒色粘土～シルト層である。層厚は5～10cmで、古墳の墳丘盛土下に遺存する。また、Ⅲ区では当層を埋土とするとみられる数基のピットが確認されている。弥生時代後期～古墳時代の地層である。

沖積層下部層～低位段丘構成層上部層

長原13層：灰白色～黄色粘土～粘土質シルト層である。本層は13A層ないし13B層であると思われるが、現時点での判別には困難な点もあるため、可能な範囲で両者を区別し、不明なものは13層として報告する。今回調査を行った範囲では、Ⅲ区西端部で当層のレベルがもっとも高くTP+10.8mであった。また、もっとも低い地点はⅠ区の東端部でTP+8.7mであった。後期旧石器～縄文時代草創期にかけての地層である。

Ⅵ区にある140号墳の墳丘下には、前述した黒ボク土が約15cmの厚さで遺存しており、12／13層漸移帶にみられる横大路火山灰層が腐植し、土壤化した地層と考えられている。古墳の盛土中にも、このブロックを多くみることができる。

ii) 各層の出土遺物(図106、図版69)

長原2層出土遺物

673はⅠ区で出土した明代の青花である。底部の一部が残る。

長原3層出土遺物

674は灰釉瀬戸の小皿で、Ⅱ区から出土した。見込に印花文をもつ。675・676もⅡ区の遺物で、675は土師皿、676は瓦器椀である。677はⅠ区から出土した白磁碗の口縁部である。686は瓦質の擂鉢でⅢ区から出土した。玉縁状の口縁をもち、内面に縦方向のカキメを施す。692～694は須恵器である。そのうち692はⅤ区で見つかったイイダコ壺で、上部に直径1.3cmの穿孔部をもつ。693は蓋あるいは蓋付きの容器の一部で、紐通し孔のある方形の張出しがみられる。694は無蓋高杯で、口縁部下に2本の稜線と櫛描波状文がある。この2点はⅡ区の東半部から出土したが、付近に存在する古墳に伴っていたものと思われる。

長原4A層出土遺物

685は同安窯系の青磁皿である。釉色は淡緑色で、見込に櫛状工具による文様を施す。Ⅳ区で出土したものである。

長原4B層出土遺物

678～680は土師器である。そのうちの678はⅥ区出土のミニチュア甕、679・680は皿で、Ⅱ区中央部で出土した。681～683は瓦器椀である。681がⅠ区、682・683はⅡ区のも

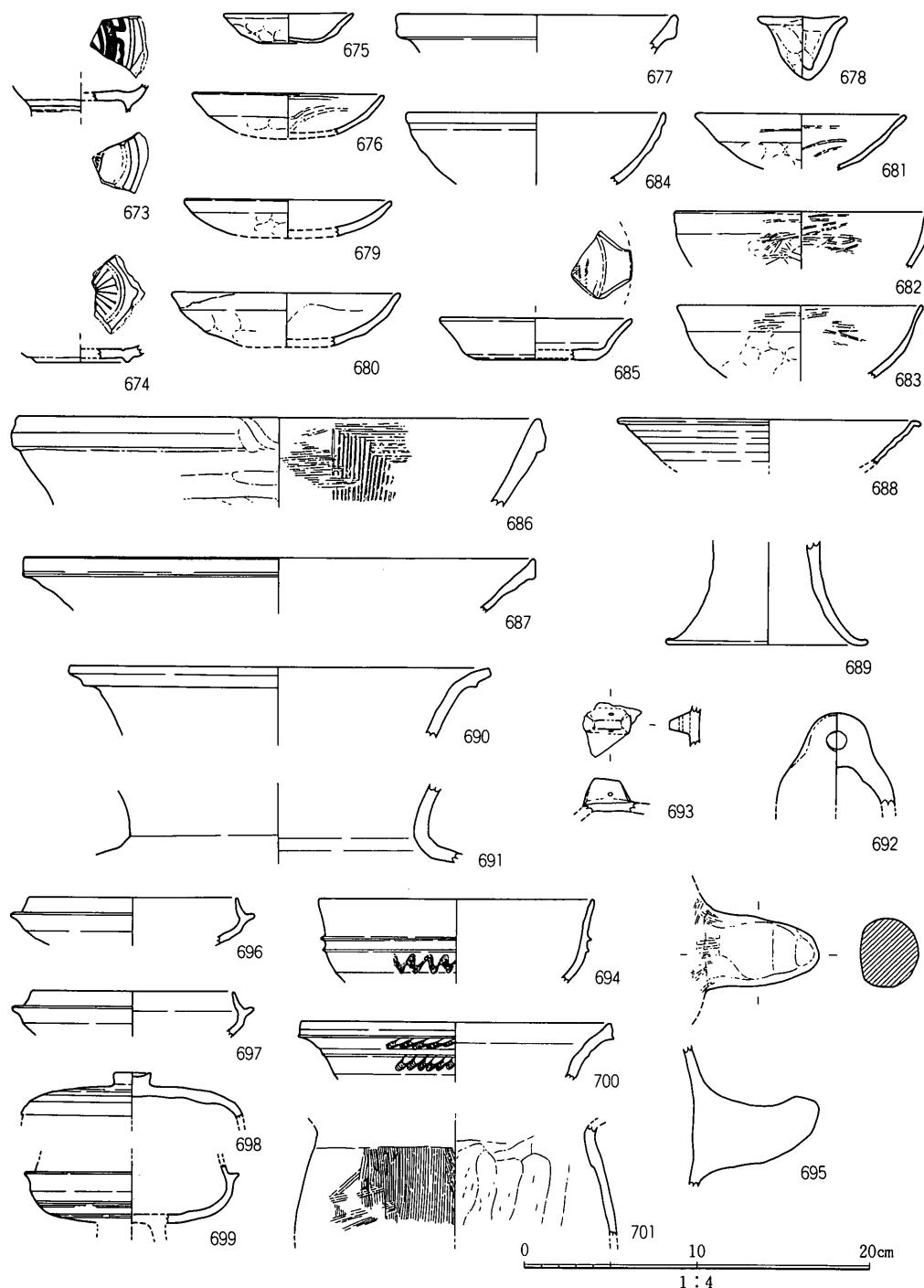


図106 各層出土遺物実測図

長原2層 (673) 長原3層 (674~677・686・692~694) 長原4A層 (685) 長原4B層 (678~684・687・688) 長原5層 (689) 長原6A層 (690・691・695~697) 長原6B層 (698~701)

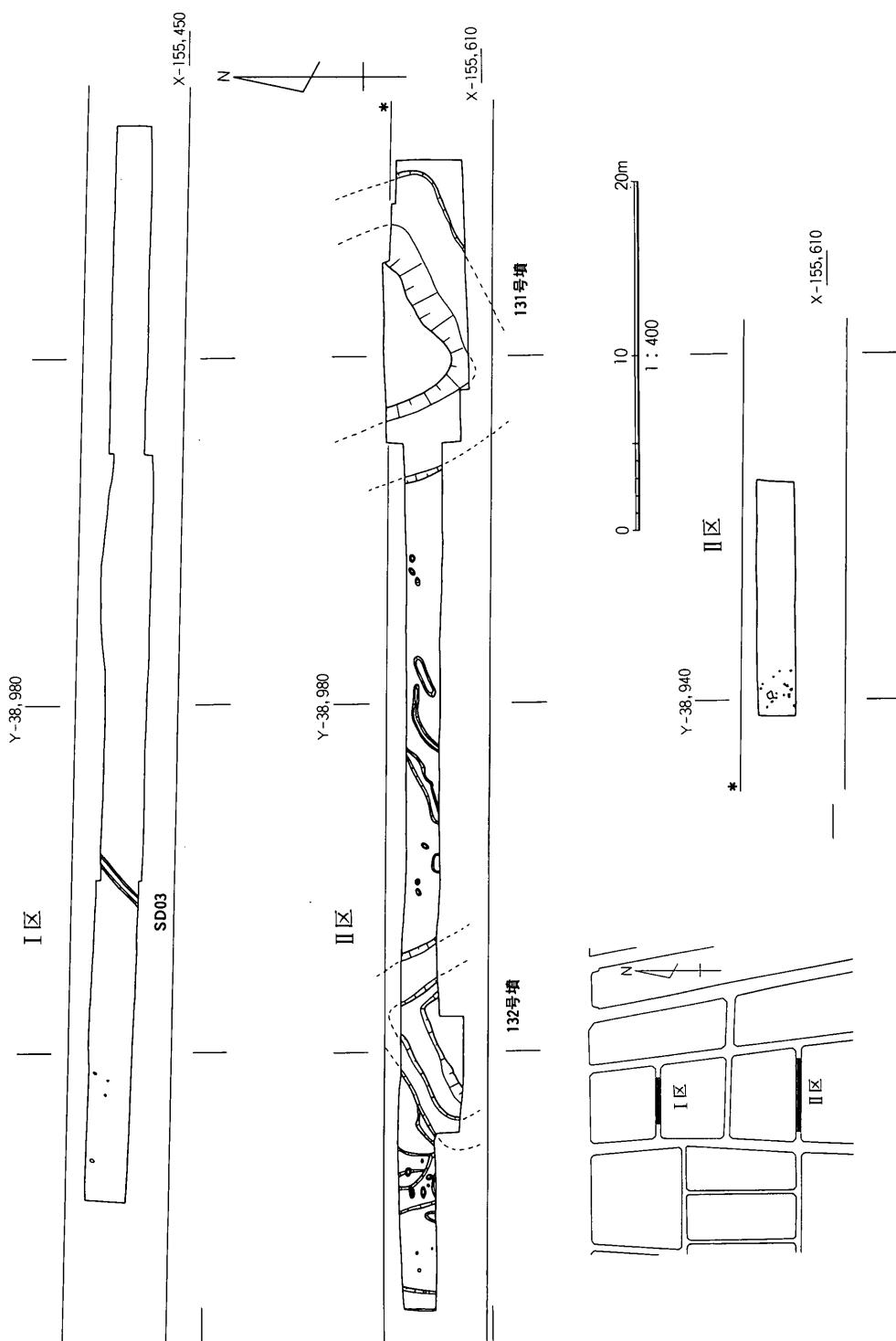


図107 I・II区古墳～奈良時代遺構実測図

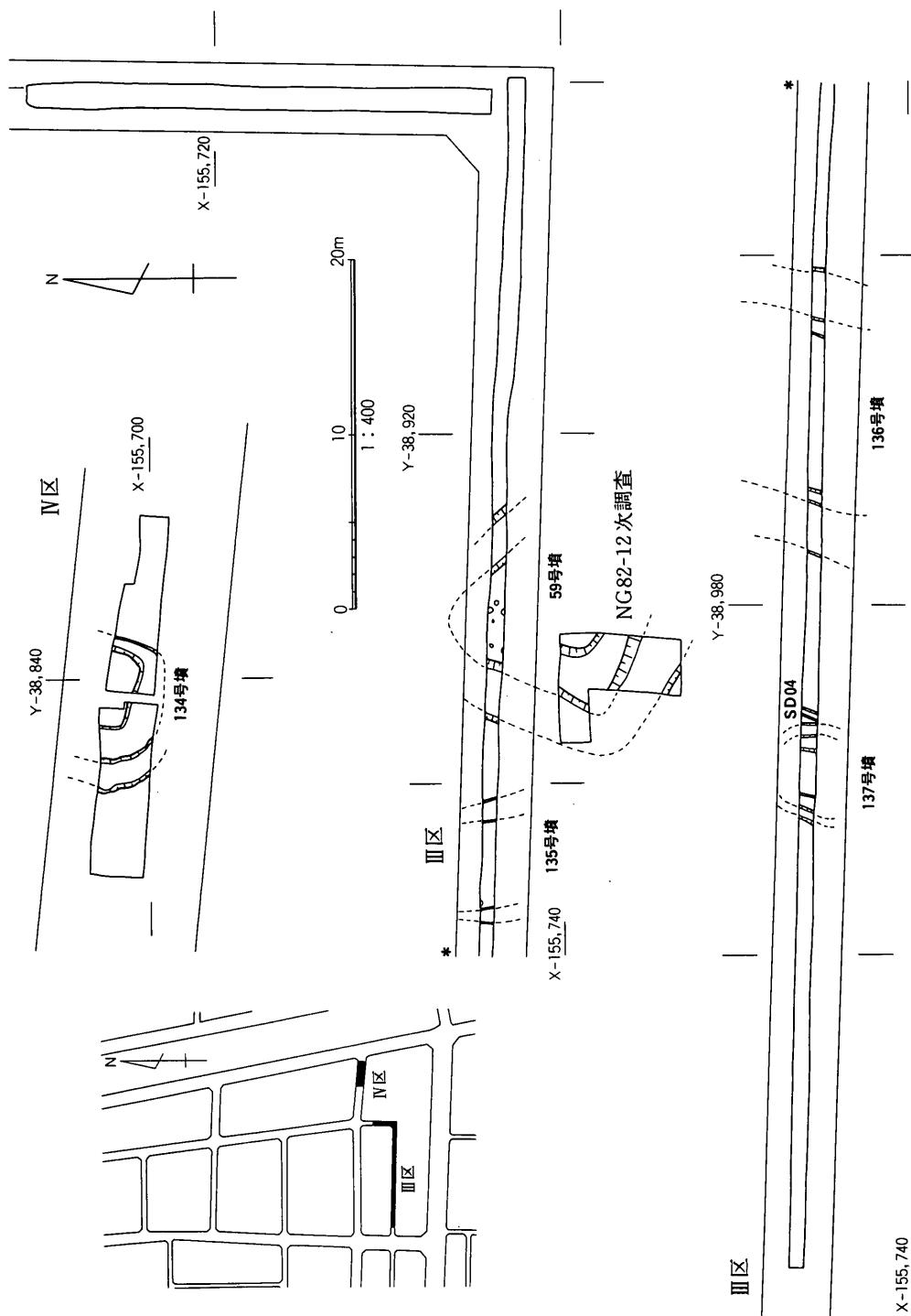


図108 III・IV区古墳～奈良時代遺構実測図

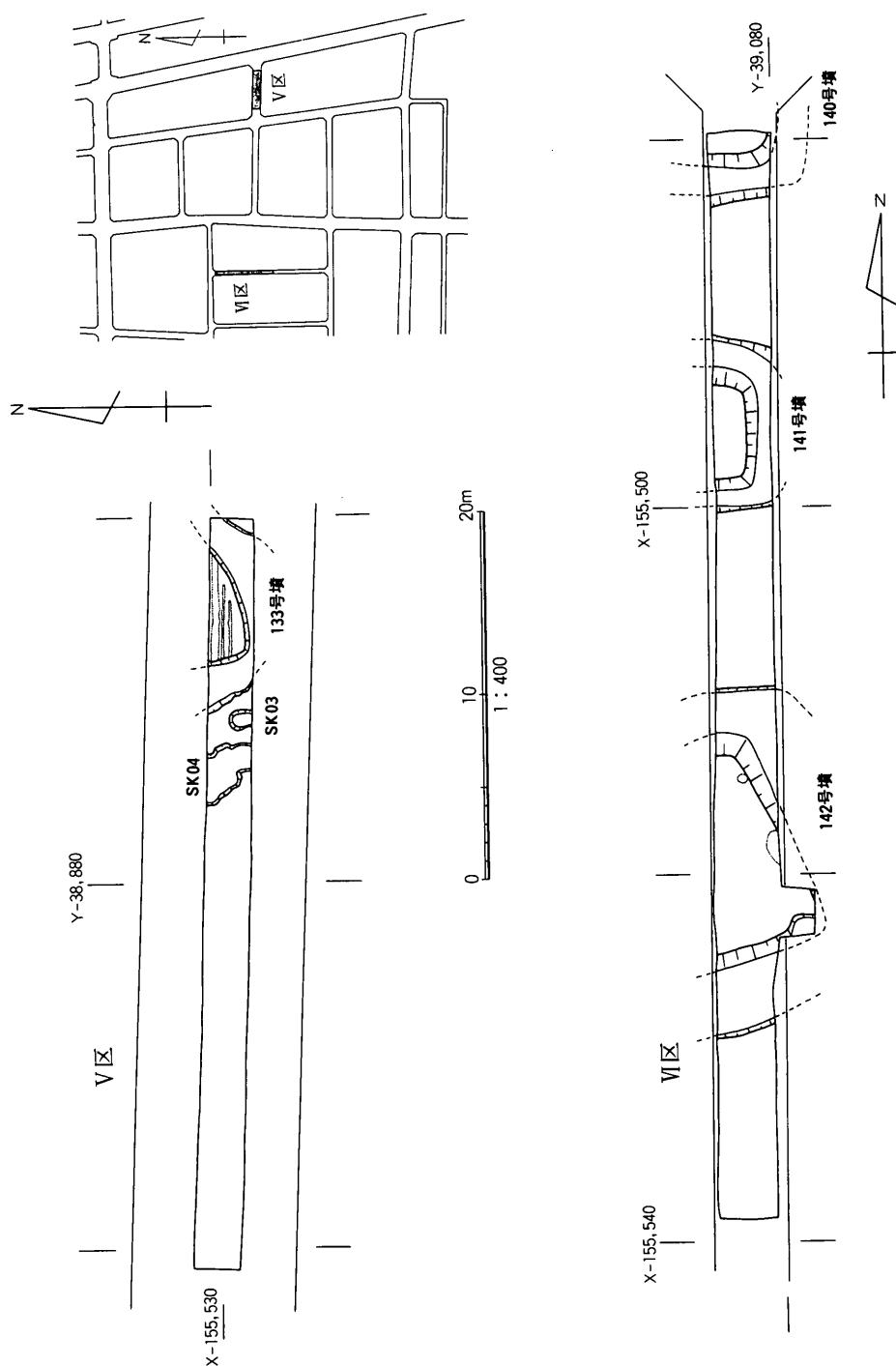


図109 V・VI区古墳～奈良時代遺構実測図

のを掲載した。長原遺跡の中世土器編年試案[鈴木秀典1982]によれば、前者がⅣ期、後者がⅡ期に属するであろう(表4)。684はⅡ区のもので、大きく内湾する体部と小さな玉縁状の口縁部をもつ白磁碗である。687は東播系の須恵器の擂鉢で、口縁端部を上下につまみ出し、浅く凹んだ端面を作っている。Ⅰ区で出土したものである。688は口縁端部を外反させた綠釉陶器の皿で、Ⅱ区中央部から出土した。

長原 5層出土遺物

689の須恵器がⅥ区で出土している。高杯の脚部で、脚部径が11.7cmである。2mm大ほどの長石粒を多量に含む。脚端部は丸くおさめられている。

長原 6A層出土遺物

695は土師器の甌あるいは鍋の把手で、Ⅳ区で出土した。根元が太く、先端がすぼんでおり、側面からみると斜め上方に向けて反っている。断面は円形に近いが、上面がやや潰れる。このような形態からTK216型式またはTK208型式の須恵器と共に伴するものと思われる[京嶋覚1992b]。690・691はⅣ区で見つかった須恵器の甌で、同一個体と思われる。口縁部に鋭い稜を巡らせる。TK73型式に該当するものであろう。696・697はともにⅠ区出土の杯身である。復元口径が12cm弱で、TK209型式と考えられる。今回の出土遺物には古墳時代中期～飛鳥時代のものがめだち、当層本来の時期を示すものは少なかった。

長原 6B層出土遺物

701はⅥ区出土の土師器の中型甌で、外面ハケ調整で内面をヘラケズリする「b手法」[京嶋覚1992b]で製作されている。698～700は須恵器で、698と700はⅢ区、699はⅤ区で出土したものである。698は高杯蓋で、中央部の凹んだつまみをもつ。699は有蓋高杯で、底体部にカキメを施している。700は壺の口縁部で、口縁下に1本の稜と、その上下に櫛描波状文をもつ。これらの須恵器はTK208型式あるいはTK23型式に属すると考えられ、本来は付近の古墳に供獻されていたものであろう。

3)古墳時代の遺構と遺物

i) 59号墳

遺構(図108・110、図版19・22)

Ⅲ区東部に位置する古墳で、後述する135号墳に隣接している。かつてNG82-12次調査において墳丘の西コーナー周辺が発掘されており、今回は北東および北西側の周溝と北コーナー付近の墳丘部分を調査した。墳丘の平面形が正方形でなく台形にちかいこと、周溝幅

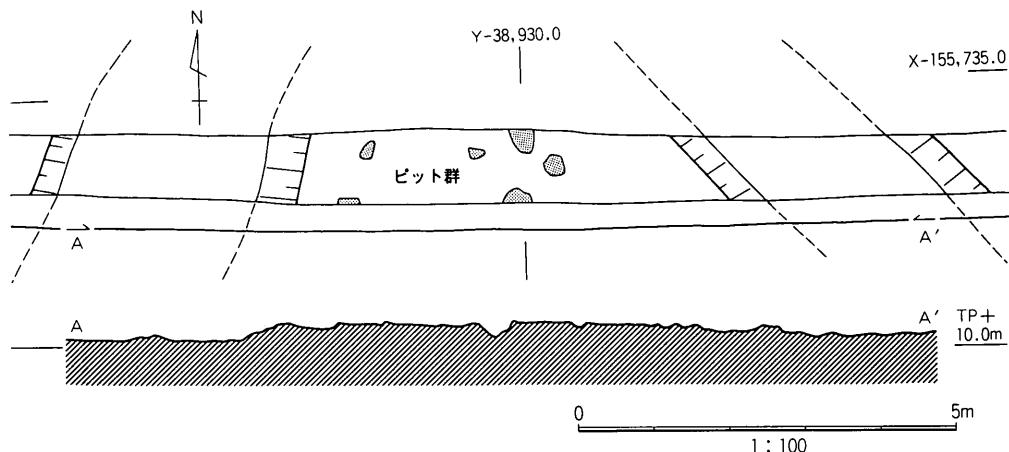


図110 59号墳実測図

が2.5~3.5mと一定でない点に問題を残すが、一辺10m前後の方墳と推測する。今回の調査地では墳丘盛土および旧地表であった長原7B層はすでに残存せず、長原6A層を除去すると長原13層の上に周溝の輪郭が現われるという状況であった。しかし、先の調査地においては、周溝底から0.6mの高さで墳丘が残存することが確認されている。周溝の埋土は黒色シルト質粘土である。墳丘北西辺に対して直交する方向を主軸と考えると、その方位はN 60°Wである。

墳丘部分の6A層基底面には、13層のブロックを含んだ黒色粘土(長原7B層と推定)を埋土とするピット群が見つかっている(図版22)。合計6基のピットが確認され、その大きさは直径20~40cm、深さは10~20cmである。遺物は出土しておらず、古墳に直接関係する遺構か否かは不明である。

遺物(図111、図版79)

土師器 北東側の周溝から甕の口頸部702が出土している。口径は約24cm、口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、頸部以下にハケメが施される。胎土に3mm以下の雲母・長石・石英・チャートを含み、にぶい黄橙色を呈する。

須恵器 703は杯蓋の天井部である。天井部は比較的平坦で、突出度の大きい稜をもち、高杯蓋とも考えられる。704は高杯蓋で、体部を失っている。天井部のヘラケズリが広範囲に及び、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。中央の凹んだつまみが付されており、その直径は2.4cm、高さは1.0cmである。705は杯身で全周の1/5が残る。口縁部の復元径は10.8cm、器高は4.1cmである。口縁端部は丸く、受部は水平に延びて、先端を尖らせており。時計回

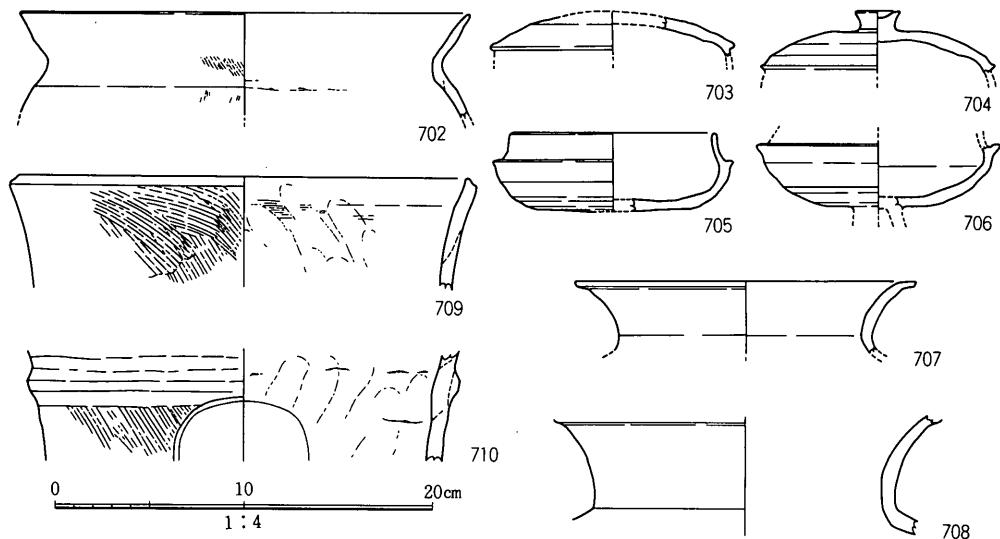


図111 59号墳出土遺物

りのヘラケズリが体部の広範囲に及んでいる。706は有蓋高杯で、口縁部と脚を欠いてい。受部は斜め上方に大きく突出しており、見込には仕上げナデが施される。ヘラケズリの方向は705と同じく時計回りである。707・708は甕である。707は口縁部から頸部の一部を残す小型品である。口縁端部は水平方向に折り曲げられて、幅3mmの端面を作っている。708は中型で、頸から口縁の一部である。残存する上端部に稜をもつ。これらの胎土には3mm以下の長石・石英が含まれる。ON46段階またはTK208型式と考えられる。

円筒埴輪 709・710とも土師質、無黒斑の埴輪で、灰白色をしている。709は口縁部、710はタガとスカシ孔のある破片である。ともに、外面には一次調整のタテハケ、内面にはユビナデ、ユビオサエが施される。しかし、709の外面にみられるハケメは縦方向というよりも斜方向で、内面にもハケメがみられる。口縁端部は、内側がつまみ上げられ、外傾する面をもっている。一方、710には低い台形を呈するタガがあり、やや歪んだ円形のスカシ孔がみられる。両者とも5mm以下の長石・石英・チャート・シャモットを含み、ハケの密度は6条/cmである。なお、709の外面には赤色顔料がわずかに残っている。

ii) 131号墳

遺構(図107・112~115、図版14~17)

II区中央部に位置する古墳である。墳丘の南と東のコーナーを検出できたことから、一辺10mほどの方墳と考えられる。周溝の幅は4m弱、周溝底からの墳丘高は0.7mである。墳丘南西辺に直交する方向を主軸とすると、その方位はN65°Eである。墳丘の南西と南東の

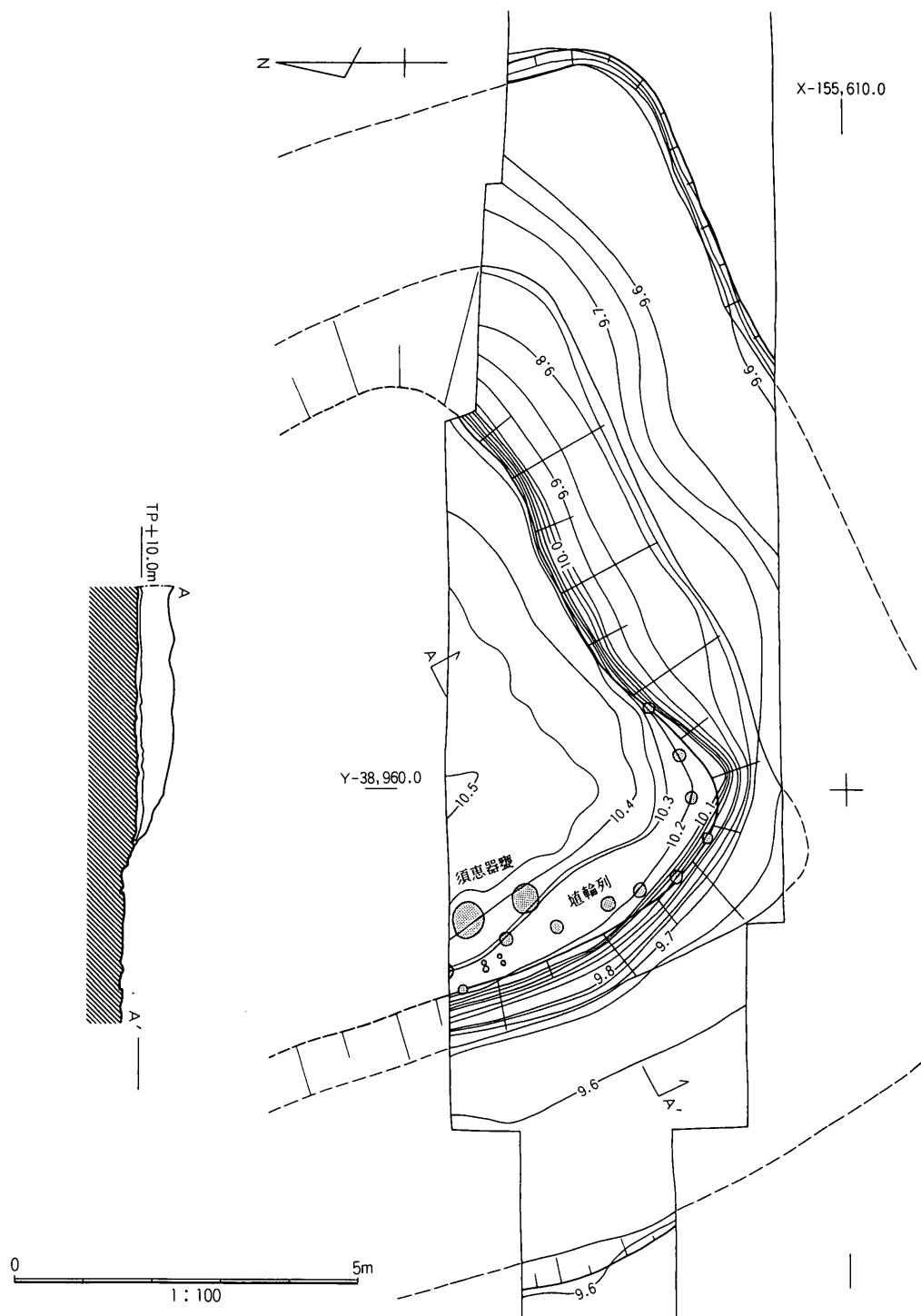


図112 131号墳実測図

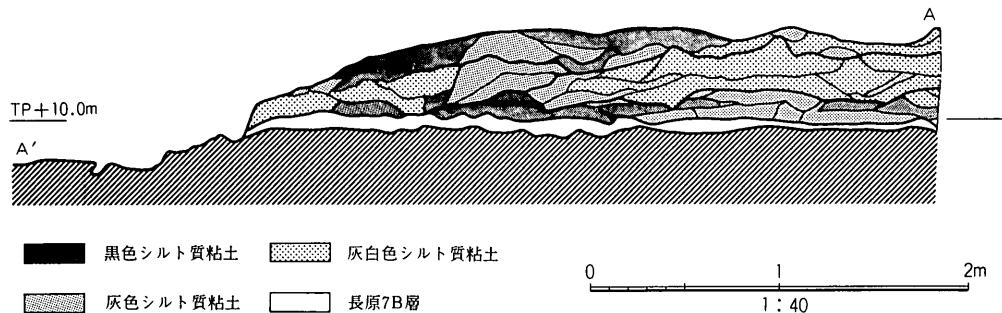


図113 131号墳墳丘断面図

辺に埴輪列が残り、南西側の埴輪列の内側に須恵器の甕が2個据えられていた。また、その周辺から須恵器蓋杯・有蓋高杯などが多数出土した。主体部は未検出である。

墳丘は長原7B層の直上(TP+10.0m)に盛土を行って築かれている。調査では、墳丘の中心付近から南西側の辺に直交する方向で断割りを行い、盛土作業について検討した。まず墳丘中央部に、長原7B層の黒色シルト質粘土と、7B層から13層までの漸移的な部分である灰色シルト質粘土が主として盛り上げられる。その高さは20cm前後と均一である。次に13層に当る灰白色シルト質粘土を主体とする盛土を行い、これを墳丘中央部へと運んでいる。その層厚は10~20cm。この段階で墳丘中央部の盛土作業はほぼ完了する。その後、縁辺部に盛土を行うが、ここには上記の各層が用いられている。この古墳の円筒埴輪列には埴輪を据えるための掘形はみられなかった。そのため、盛土作業のある工程で埴輪を据えたものと思われる。先にみた盛土作業の順序が推定どおりであるならば、縁辺部への盛土を行った時に、円筒埴輪の配置も同時に行われたのであろう。

続いて埴輪の配列についてみると、図114にみるように、まず墳丘の南コーナーには743の円筒埴輪が位置している。墳丘南東辺には、それに続いて742・741・740の順に並ぶ。また、南西辺には744~748の円筒埴輪(748は人物埴輪の基底部の可能性がある)が並ぶ。南東辺の埴輪列は、円筒の中心間の間隔が65~80cmで、直線的な配列となっている。それに対し南西辺は、743と744の間、また744と745の間に円筒埴輪が据えられていた痕跡を留めており、それを考慮して計測すると、50~100cmという間隔で配置されていたことになり、南東辺に比べ、南西辺の埴輪間隔にはかなりのばらつきがある。また、南西辺の埴輪列は、南東辺のように直線的でなく、中央で内側に湾曲している。このようにみてくると墳丘南西辺の埴輪配置がずさんなものに見受けられるが、小結でも述べるように、形象埴

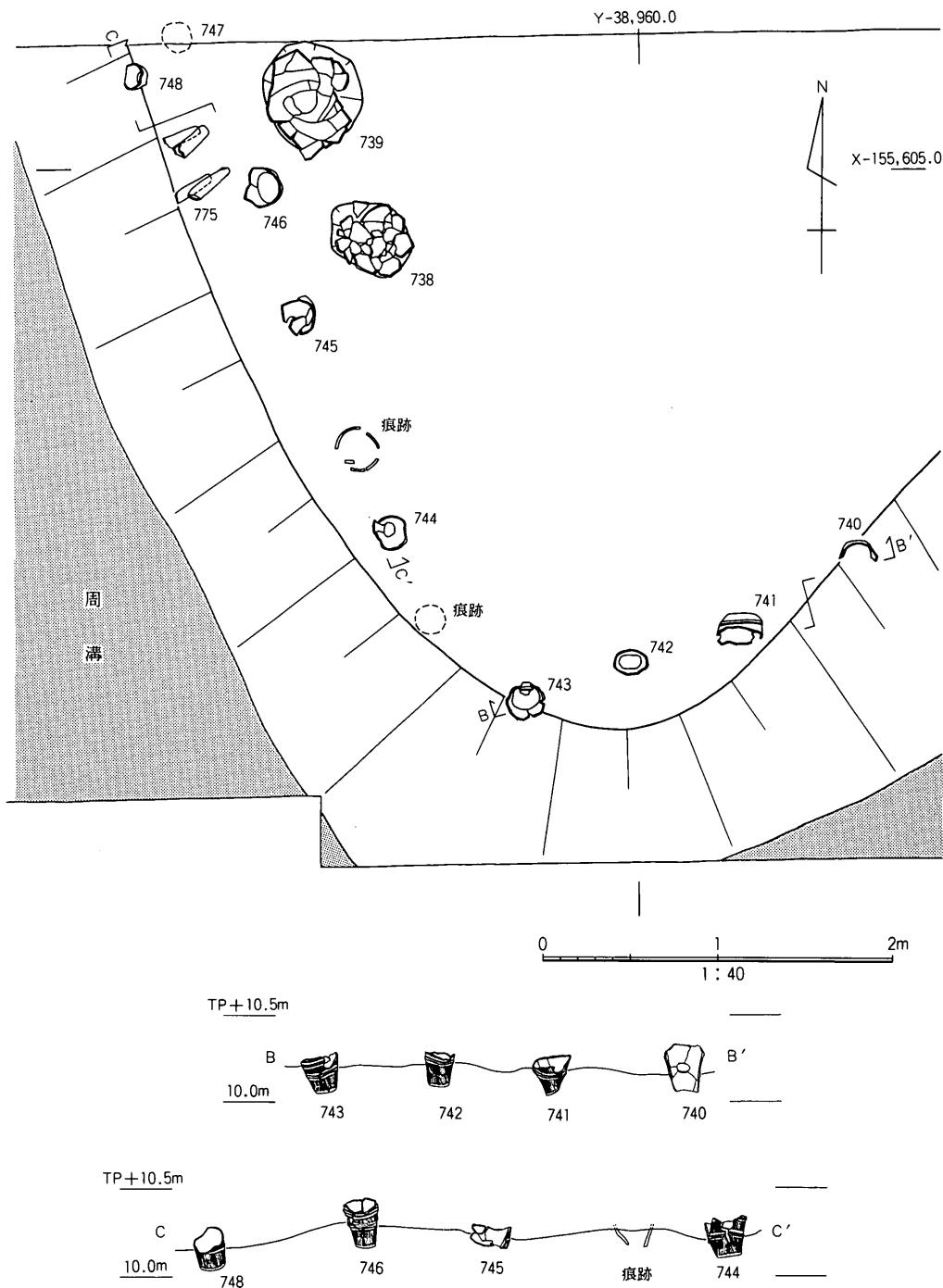


図114 131号墳遺物出土状況

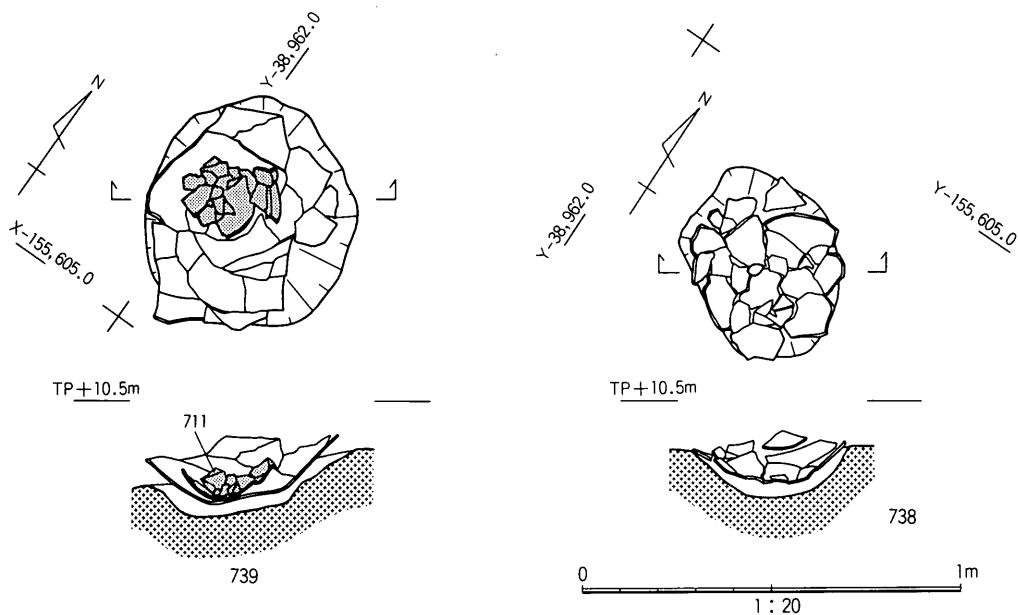


図115 131号墳須恵器甕出土状況

輪を配するための意図的な配置と考えられる。

748の埴輪は墳丘の南西辺にあって、円筒埴輪列の外側に位置し、底部の検出高もその他の円筒埴輪に比べて低いレベルにある。また、それと並ぶように馬形埴輪の脚部775が見つかっており、付近から人物埴輪の破片も出土していることから、748は円筒埴輪ではなく、人物埴輪の基底部ではないかと考えられる。馬形埴輪は、残されていた脚からみて、748に対し尻を向けていたことになる。

745は墳丘上に原位置を留めていた円筒埴輪の一つであるが、基底部を欠損しており、破損品を使用していたことがわかる。同じく墳丘上に残っていた741は、かなり焼け歪んだ円筒埴輪であるにもかかわらず、配列上、その他の埴輪と区別して並べられてはいなかった。焼け歪んだ埴輪は周溝内からも多数見つかっている。

2個の須恵器の甕738・739は、ともに口縁部を上に向け、墳丘南西辺の円筒埴輪列と並べて据えられていた。南側の738は直径50cm、深さ10cmの掘形をもち、北側の739は直径60cm、深さ10cmの掘形をもつ。738の底部には直径4cmの穿孔があるが、この場所に据え置く以前に穿孔されたものである(図115)。一方、739の底部には、この場に据えたのち内側から打撃を加え穿孔を行ったと思われる痕跡がみられた。また、739の内部には土師器甕711が納められており、土師器甕内の堆積土にはベンガラが多量に含まれていた。

なお、周溝内からは製塩土器の小片やウマの臼歯も出土している。

遺物(図116~126、表10、巻首図版、原色図版2、図版70~75)

土師器 711は須恵器大甕739内から出土した中型甕である。赤褐色を呈し、復元口径18.4cm、復元高27cmである。緩やかに外反する口縁部、そして球形の体部、完全に丸底化した底部をもつ。口縁部の内外面はヨコ

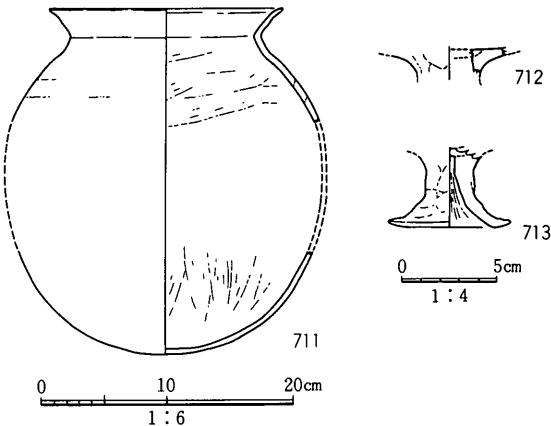


図116 131号墳出土土師器

ナデ、体部内面はヘラケズリされている。外面の調整は磨耗のため不明である。胎土に5mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含んでいる。

712・713はともに小型の高杯で、墳丘斜面から出土している。713は脚部、712は杯部と脚部の接合部分である。713の外面にはユビオサエ、内面にはシボリメがみられる。713は灰黄褐色をし、石英・チャート・シャモットのほか1cm大の長石を含む。712はにぶい黄橙色をしており、3mm以下の石英・長石・雲母・シャモットを胎土に含む。

須恵器 714~719は杯蓋で、墳丘上および周溝内から出土した。714は器高4.0cm、口径12.8cmで、平坦な天井部をもつ。また、天井部と体部との境に鋭い稜をもつ。天井部のヘラケズリの方向は逆時計回りである。この714とともに形態上の差をみせるのは719である。こちらは天井部が半球形で、稜も鋭さを欠く。また、器高が5.4cmとやや高く、一方で口径が11.4cmと小ぶりである。ヘラケズリの方向も714とは逆に時計回りである。この714と719の中間的な形態をとるのが715~718である。しかし、ヘラケズリの方向については、715・716が逆時計回り、717・718が時計回りである。胎土には5mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒を含んでいる。714についてはTK208型式の可能性があるが、その他はTK23型式またはTK47型式の範疇におさまるものである。

726~731は杯身である。726・728・731は墳丘上から、727・729・730は周溝内から出土した。726~729は丸みのある底部をもち、特に728・729の底部は半球形をしている。口径の上でも、729は726・727に比べて小ぶりである。729は口径9.6cm、器高5.2cm、726は口径11.3cm、器高5.3cmである。これらと形態を大きく異にするのが730・731で、器高が低く、底部が平坦という特徴がある。731は器壁が厚く、受部の先端が丸みをもつ。ヘラケズ

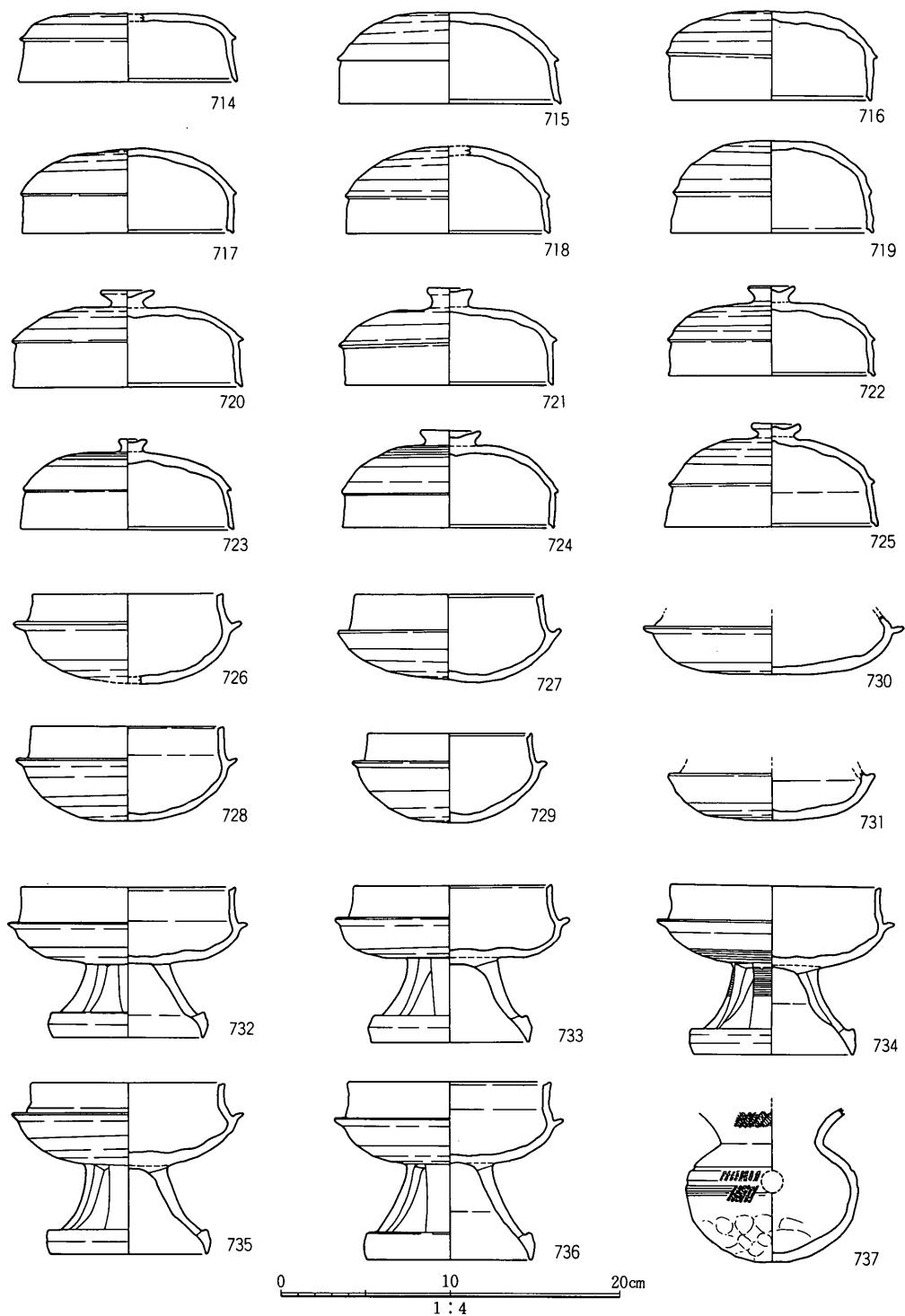


図117 131号墳出土須恵器 (1)

リの方向は726～728・731が時計回り、729・730が逆時計回りである。728・730はやや焼成不良で、灰白色をしている。胎土には5mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒が含まれ、各個体に大きな差は認められない。726～729はTK23型式またはTK47型式、730はTK10型式と考えられるが、731は口縁部を欠くこともある。型式は不明である。

720～725は高杯蓋で、墳丘上および周溝内から出土したものである。杯蓋のはあいと同様に、天井部が平坦で口径の大きいもの(720)と天井部が半球形をしていて口径の小さいもの(725)がある。そして、両者の中間的な形態のものとして721～724がある。720は口径13.4cm、器高5.6cmである。725は口径12.4cm、器高6.1cmである。いずれの個体も、天井部に、中央の浅く凹んだツマミをもつ。ただ、723のツマミはその他のものと比べて小型である。また、723と724は天井部にカキメを施している。ヘラケズリの方向は720・723が逆時計回り、その他は時計回りである。胎土には5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒が含まれる。TK23型式またはTK47型式と考えられる。

732～736は有蓋高杯で、墳丘上および周溝内から出土した。みな、3方にスカシ孔をもつものであるが、口径や脚の高さに差がみられる。732はもっとも口径が大きく12.7cmであるが、脚の高さはもっとも低く4.3cmである。一方、736はそれと対照的に口径11.8cm、脚の高さ5.5cmである。また、スカシ孔の形態にも若干の差がみられ、大きく裾広がりになるもの(732・733)と裾の拡がりの少ないもの(734～736)がある。734には底部と脚部の外面にカキメが施される。ヘラケズリの方向は732・733が時計回り、その他は逆時計回りである。胎土には5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒を含む。TK23型式またはTK47型式と考えられる。

737は甕と思われるが、穿孔部は未確認である。周溝内から出土した。体部は球形にちかいが、やや肩が張り、頸部に波状文、肩部に2条の凹線を入れ、その凹線間に櫛描列点文を施す。凹線の下部にカキメも施されているが、それを切って、櫛描列点文が部分的に付けられている。底部内面には何かを押付けた痕跡があり、そのオサエと外面の静止ヘラケズリによって丸底化が図られている。胎土には5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒が含まれる。TK23型式に属するものであろう。

738は中型甕、739は大型甕である。ともに墳丘の南西辺寄りに据えられていた。738は口径22cm、器高45cmである。底部に焼成後に行われた直径約4cmの穿孔がある。口縁部は外上方に湾曲ぎみに開き、その端部を上方に大きくつまみ上げ、下方に向っては鋭い稜線としている。体部は球形にちかいが、やや肩に張りがある。体部外面には平行タタキがみら

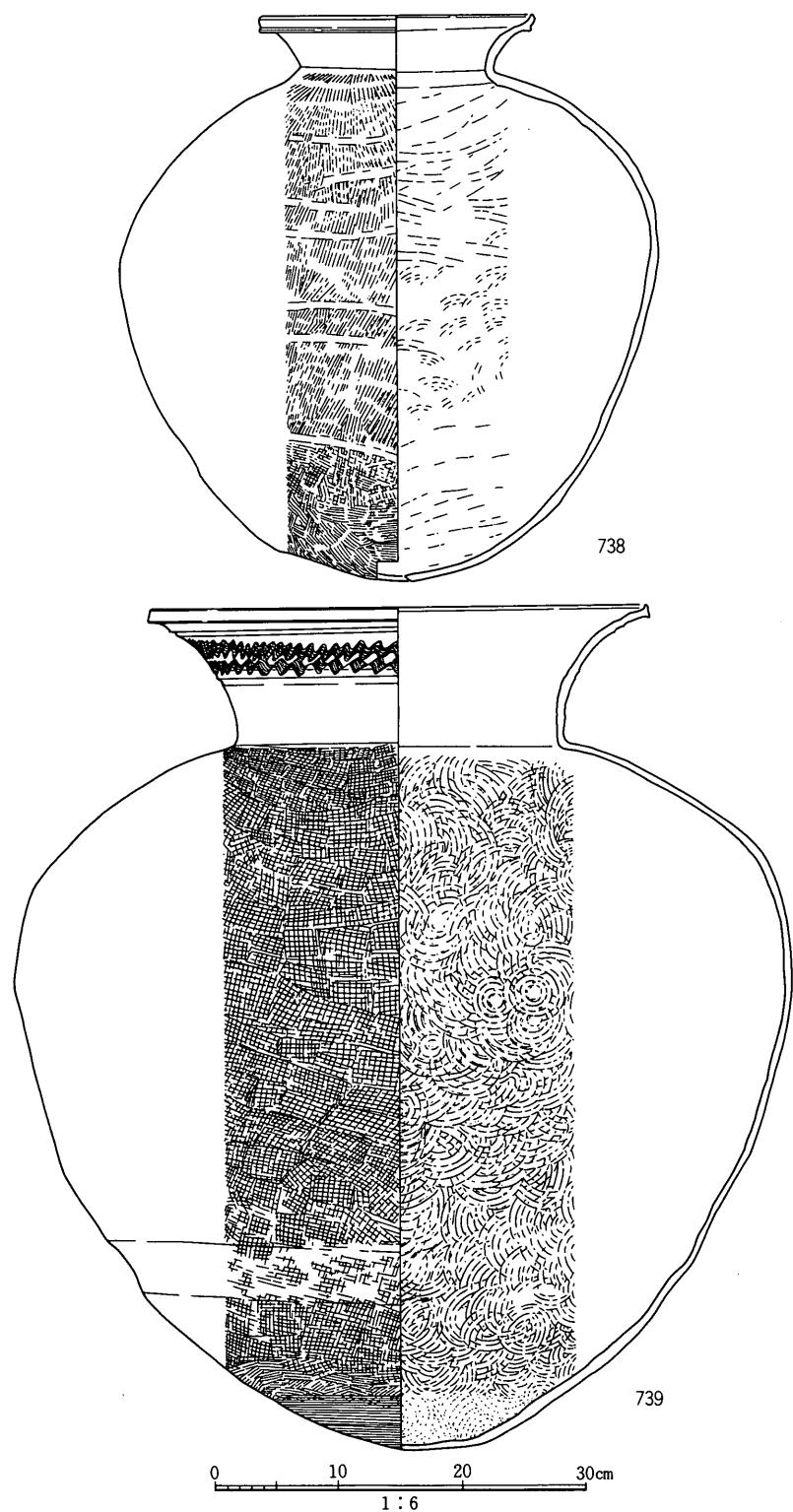


図118 131号墳出土須恵器（2）

れるが、その方向が体部下方1/4とその上方とで異なり、上方はタタキメが縦方向となるが、下方では横ないし斜方向となっている。両方のタタキメが重複するところでは、縦方向のタタキメが切られている。そのため下方のタタキは底部丸底化のためのものと考えられる。また、上方のタタキメの一部は圈線状のヨコナデによってナデ消されている。体部内面には成形時の当て具の痕跡が同心円文としてかすかに残っているが、ほとんどナデ消されている(図118)。739は口径40cm、器高67cmである。口縁部は外上方に緩やかに湾曲しながら開き、端部は上下につまみ出されている。口頸部には鋭い稜線と鈍い突帯が巡り、その間に櫛描波状文を2段に入れる。体部は底部側のすばんだイチジク形をしており、体部外面には格子状タタキ・平行タタキがみられる。平行タタキは体部下方1/8の範囲にあり、その他は格子状タタキで占められている。タタキメどうしの切合は、格子状タタキが後であることを示す。このことは、すでに丸底化された底部が胴部の成形前にすでに完成していたことをうかがわせる。また、底部外面のカキメ、同内面のナデは胴部が成形されてからでは行いがたい調整である。したがって、体部成形に当っては、器台の杯部に似たものをまず製作して底部とし、その後に胴部の製作を行ったと推測される。さらに、体部の下から1/4の位置に浅い凹みが巡るのが観察される。その部分ではタタキメも不明瞭になっており、乾燥時の台座の痕跡かと思われる。以上2個体の甕は胎土に5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒を含んでいる。TK23型式またはTK47型式に属するものと考えてよからう。

円筒埴輪 740～756が墳丘上および周溝内から出土している。各個体の特徴については観察表(表10)にゆずり、ここでは全体的な特徴を述べる。後述するように焼け歪んだものもあり、それらの口径・底径については周囲の実長を測り、それを円周率で除して算出した。平均的な大きさは口径約24cm、底径約15cm、器高約42cmである。各個体の法量を図122にグラフ化したが、それをみると口径、底径、器高についての法量の差は、それぞれ2.5cm、1.5cm、5.5cmとなっており、かなり画一化された埴輪であるといえる。口縁部や基底部も1段として数えると、4段と5段から成るものがあり、数量的には4段のものが主体を占め、5段のものはわずかである。4段のグループだけでみた器高の差は3.0cmである。

スカシ孔はみな円形で、口縁部と基底部を除いた各段の対向する位置にある。

タガは基本的に断面M字形をしているが、粗いヨコナデ調整のためか、三角形や半円形をしたものもいくつかみられる。

口縁端部もヨコナデによって浅く凹んでいる。外面調整はタテハケ一次調整で終了して

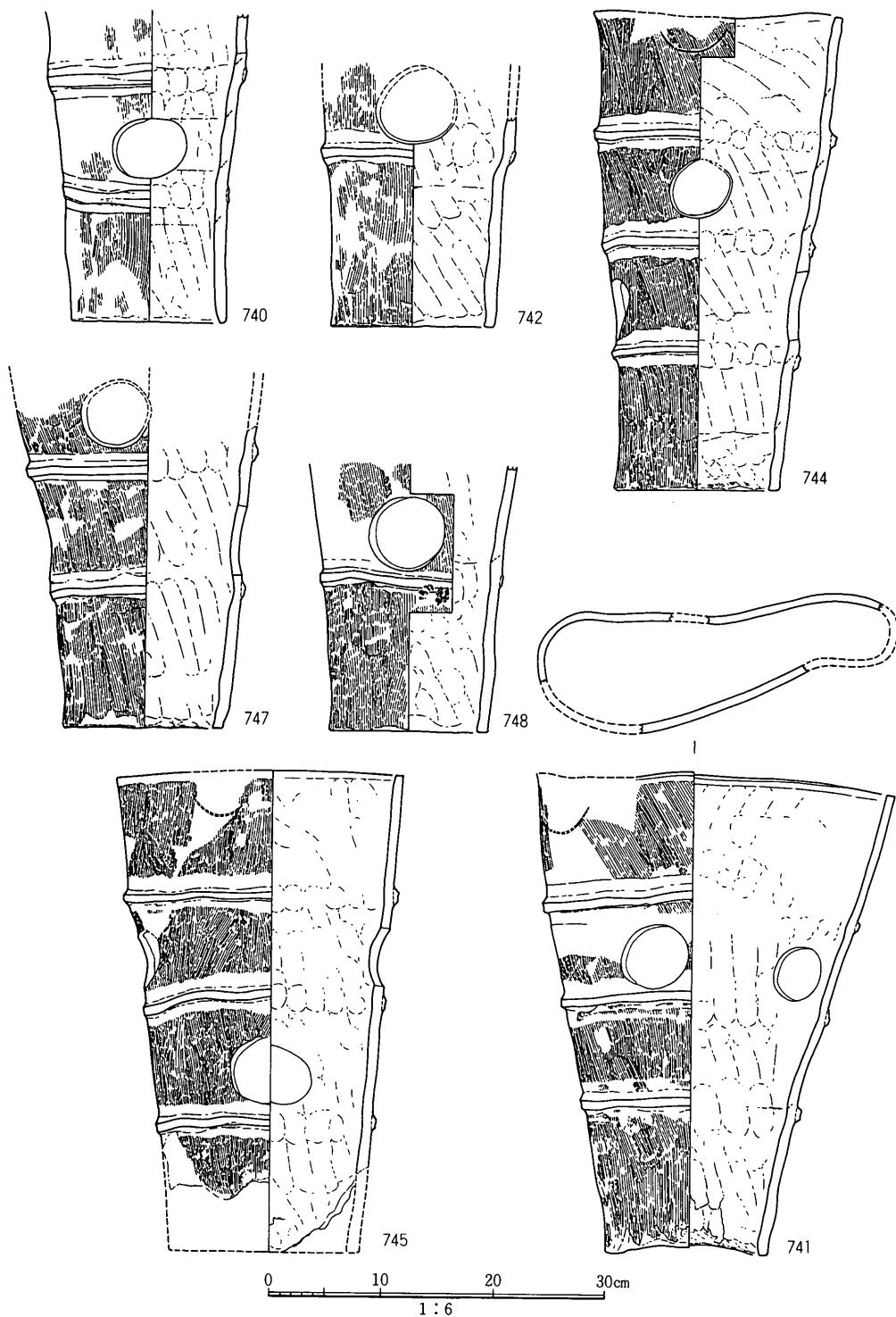


図119 131号墳出土円筒埴輪 (1)

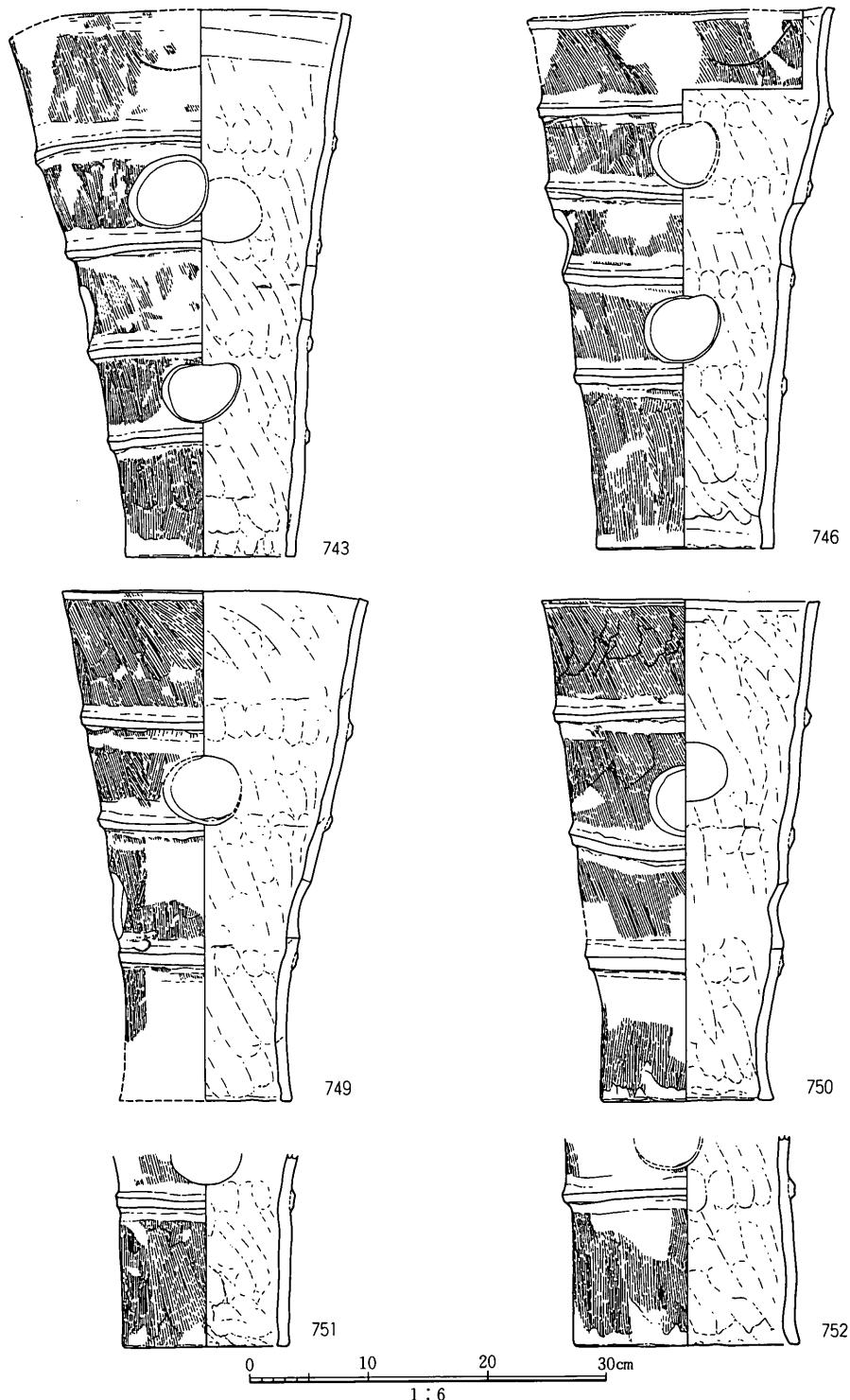


図120 131号墳出土円筒埴輪（2）

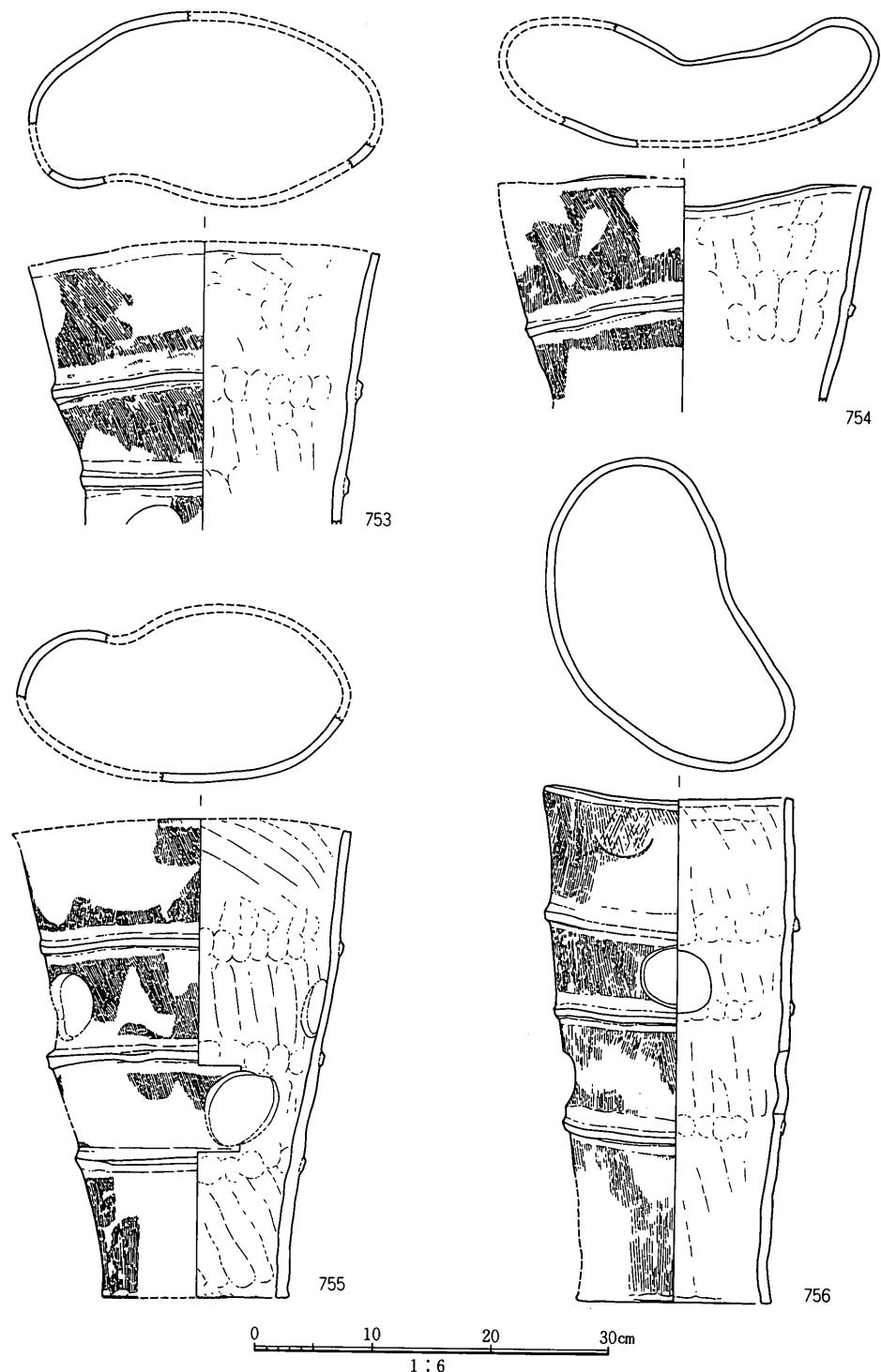


図121 131号墳出土円筒埴輪 (3)

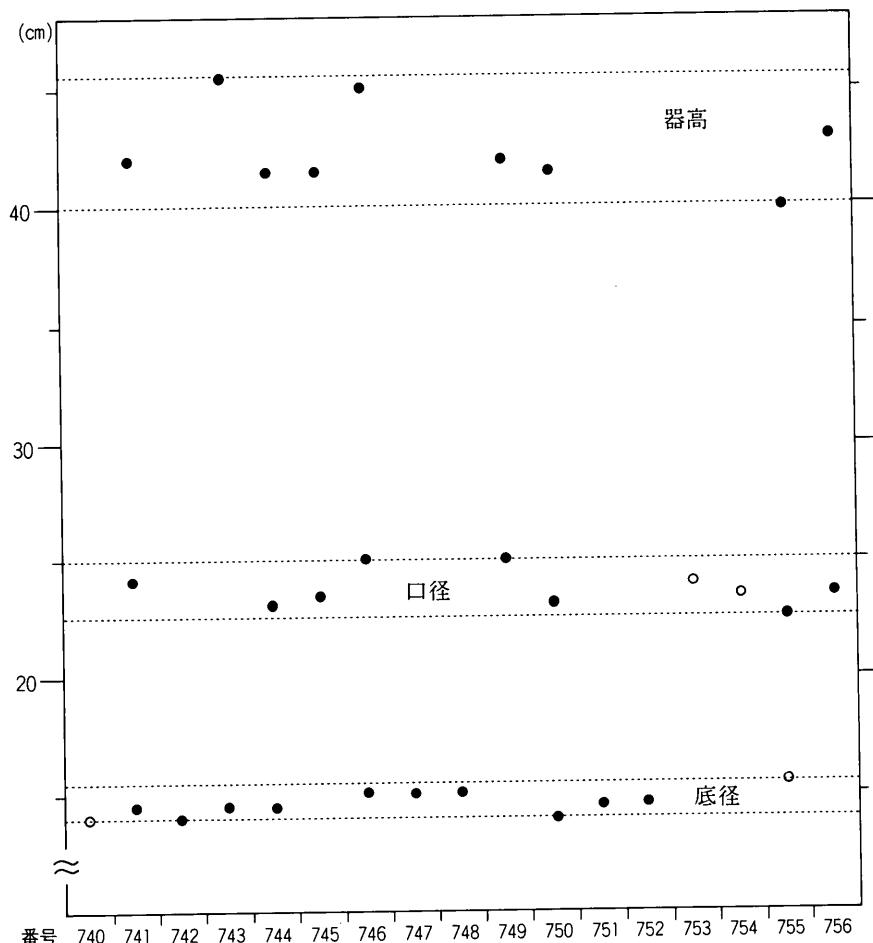


図122 131号墳円筒埴輪の法量分布（白丸は推定値）

いるが、基底部から口縁部までの間を3、4回に分割して調整している。内面調整はユビナデ・ユビオサエだけのものが多いが、口縁部付近に斜方向のナデ調整を行っているものがいくつかある。底部調整は行われていない。そのため基部成形段階の調整がよく残り、基部となる幅6cm程度の粘土帯を作るために、板状工具や手の掌によって叩き締めたり、押

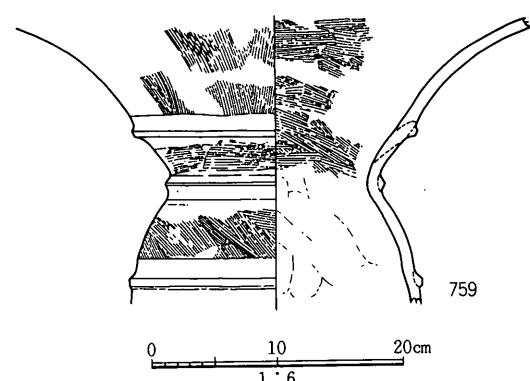


図123 131号墳出土朝顔形埴輪

表10 131号墳出土円筒埴輪観察表（法量は器高・口径・底径の順）

遺物番号	出土場所	残存度	法量 cm	形態	外面調整		内面調整	その他
					一次	二次		
740	墳丘上	2段強 1/2周	27.0+ — (14.0)	・2・3段目に6cm前後の円形スカシ孔。 ・低いM字形のタガ。	タテハケ 6条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	土師質・無黒斑 灰白色（外面）
741	墳丘上	4段完周	42.0 24.0 14.5	・ヨコナデにより口縁端面 が浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円 形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	須恵質 浅いU字形のヘラ記号 全体に大きく歪む 黄灰色（外面）
742	墳丘上	2段弱 完周	22.5+ — 14.0	・2段目の対向位置に円形ス カシ孔。 ・タガは低いM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	土師質・無黒斑 橙色（外面）
743	墳丘上	全5段 完周	45.5 — 14.5	・ヨコナデにより口縁端面 が浅く凹む。 ・2・3・4段目の対向位置に 円形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	半須恵質 浅いU字形のヘラ記号 上部の歪みが大きい 浅黄橙色（外面）
744	墳丘上	全4段 完周	41.5 23.0 14.5	・口縁端部がヨコナデによ り浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円 形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に斜方向の ナデ	須恵質 浅いU字形のヘラ記号 褐灰色（外面）
745	墳丘上	全4段 完周	41.5 23.5 —	・口縁端面がヨコナデによ り浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円 形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	須恵質 浅いU字形のヘラ記号 褐灰色（外面）
746	墳丘上	全5段 完周	45.0 25.0 15.0	・口縁部はわずかに外反し、 その端面がヨコナデによ って浅く凹む。 ・2・3・4段目の対向位置に 円形スカシ孔。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に斜方向の ナデ	半須恵質 浅いU字形のヘラ記号 灰白～にぶい橙色 (外面)
747	墳丘上	2段強 完周	31.0+ — 15.0	・2・3段目の対向位置に円 形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	土師質・無黒斑 灰白色（外面）
748	墳丘上	2段弱 完周	24.5+ — 15.0	・2段目の対向位置に円形ス カシ。 ・タガは低いM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	土師質・無黒斑 1段目のタガ下部に縄 目状の圧痕 灰白色（外面）
749	周溝内	全4段 完周	42.0 25.0 —	・口縁端面がヨコナデによ り浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円 形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に斜方向の ナデ	須恵質 灰白～褐灰色（外面）
750	周溝内	全4段 完周	41.5 23.0 14.0	・口縁端部がヨコナデによ り浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円 形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 7条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に斜方向の ナデ	須恵質 浅黄橙～褐灰色 (外面)
751	周溝内	1段強 1/2周	16.0+ — 14.5	・2段目に円形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 7条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	須恵質 にぶい橙～褐灰色 (外面)

752	周溝内	1段強 完周	17.0+ — 14.5	・2段目に円形スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 7条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	須恵質 大きく歪む 灰黄褐色（外面）
753	周溝内	2段強 2/3周	22.5+ (24.0) —	・口縁端面がヨコナデにより 浅く凹む。 ・タガの間隔から、全4段で 2・3段目の対向位置に円形 スカシ孔を配するものと思 われる。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に粗い斜方 向のナデ	須恵質 大きく歪む 灰色（外面）
754	周溝内	2段弱 2/3周	18.0+ (23.5) —	・口縁端部がヨコナデにより 浅く凹む。 ・円形スカシ孔をもつ。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ	須恵質 大きく歪む 灰色（外面）
755	周溝内	全4段 完周	40.0 22.5 (15.5)	・口縁端面がヨコナデにより 浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円形 スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に斜方向の ナデ	須恵質 大きく歪む 橙～褐色（外面）
756	周溝内	全4段 完周	43.0 23.5 —	・口縁端面がヨコナデにより 浅く凹む。 ・2・3段目の対向位置に円形 スカシ孔。 ・タガはM字形。	タテハケ 8条/cm	—	ユビナデ ユビオサエ 口縁部付近 に斜方向の ナデ	須恵質 大きく歪む 浅いU字形のヘラ記号 褐色（外面）

さえ込んだりした痕を見ることがある。焼成には須恵質および土師質・半須恵質の違いが認められるが、黒斑を有するものはみられない。須恵質のものには大きく焼け歪んだものが数多くある。また、ヘラ記号のあるものがいくつかあり、確認されたものはみな浅いU字形を呈するものであった。胎土に大きな差はなく、10mm以下の石英・長石・チャート・シャモットが含まれている。

朝顔形埴輪 759が周溝内から出土している。口縁部から肩部にかけての破片であるが、口縁端部を欠く。口縁部と頸部の間、肩部と胴部との境界にそれぞれ断面台形のタガをもち、頸部の付け根には断面三角形のタガを巡らす。肩部に張りがなく、頸部が短いという特徴をもつ。口縁部と肩部の外面には一次調整のタテハケがみられるが、頸部には静止痕を残すヨコハケ調整がタガ接合前に行われている。内面の調整は肩部から頸部までがユビナデ・ユビオサエ、それ以上がハケ調整となっている。10mm以下の石英・長石・チャート・シャモットを含む。灰白色を呈し、赤色顔料が付着する。

盾形埴輪 760～762が墳丘上およびその周辺から出土している。760は盾面の下端部とみられ、突帯やスカシ孔がある。盾面には平行する4条の線刻があり、鋸歯文の一部と考えられる。761は盾面の上端にちかい部分で、裏面に支柱として付加された突帯がある。表面には2条の水平方向の線刻と「く」字状に描かれた平行する2条の線刻がある。762は円筒

部と盾面との接合部分の破片である。表面には縦方向の線刻があり、文様の区画線と思われる。いずれの破片も器壁が薄く、あまり大型の製品ではなかったことをうかがわせる。胎土には5mm以下の石英・長石・チャート・シャモットが含まれる。にぶい橙色を呈する。

韌形埴輪 763が墳丘周辺の長原7A層から出土している。6cm四方ほどの板状の破片である。片面に平行する4条の線刻があり、その先端が矢印状になっている。矢印の方向と反対側の端はその部分で完結している。単独の韌形埴輪でなく、武人埴輪などに取付けられていたものの可能性もある。胎土に5mm以下の長石・石英・チャート・シャモットが含まれる。表面が磨耗しているため、本来の色調は不明である。

人物埴輪 764～768が墳丘上から出土している。そのうち764～767は腕、768は衣服の一部と考えられる。手の掌の残る765～767は、製作方法や大きさの違いから、それぞれ別個体と思われ、3個体以上の人物埴輪があったと推測できる。765は粘土帯を筒状に卷いて作られ、その先に手の掌となる粘土板を差込んでいる。指はその粘土板から切出され、その後、つまみながら外形を整えている。右手側と思われ、粘土帯を筒状にした時の継ぎ目は親指側にある。766は筒状に卷いた粘土帯によって腕を作り、その先を押潰して板状にし、手の掌とする。手首と手の掌の一部にさらに粘土が付加されており、何かを表現しているようであるが不明である。左手側と思われ、粘土帯の継ぎ目は小指側とみられる。767の製作方法は766と同じだが、一回り小型である。右手側で、粘土帯の継ぎ目は小指側である。手の掌に杯のような器物をもつ。764は765・766にちかい大きさで、粘土帯を筒状にする腕の製作方法も共通しているが、手の掌部分を欠き、左右どちらの腕かも不明である。768の表面には低い突帯が付加されており、襷の一部かと思われる。

どの個体も胎土に5mm以下の石英・長石・チャート・シャモットを含んでいる。焼成は土師質で、灰白色をしている。

馬形埴輪 769～775は墳丘上および周溝内から出土したもので、同一個体の破片と考えられる。また、脚部775は墳丘上に原位置を留めた状態で見つかっている。769は髦で、厚さ1cmの板状を呈する。上縁はユビナデによって浅く凹んだ面をもつ。770は頭部で、鼻先部分と目から耳にかけての部分が残る。面繋や手綱は突帯で表現されている。その先端に小さな棒状の粘土が貼り足されており、鏡板の表現かと思われる。頭部の真正面には、口や直径1cmの鼻腔が切り開かれている。耳は付け根の部分のみが残り、頭部側に穿孔したのちに粘土帯を巻付けて成形されたと思われる。頭部全体としては、粘土帯を順次継ぎ足しながら製作し、最後に開口部分を粘土板で塞ぐという方法がとられ、外面にはハケ調整を

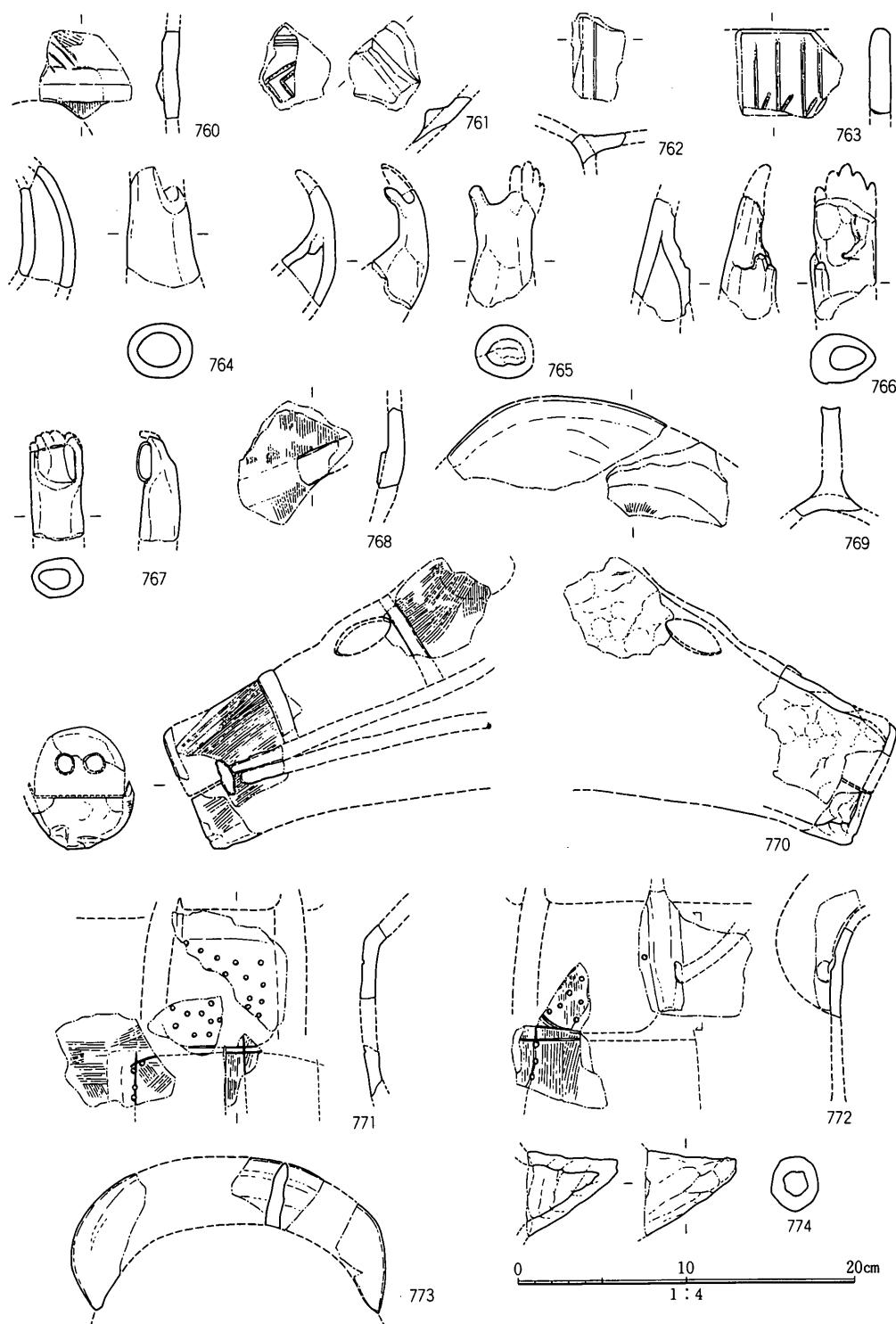


図124 131号墳出土形象埴輪

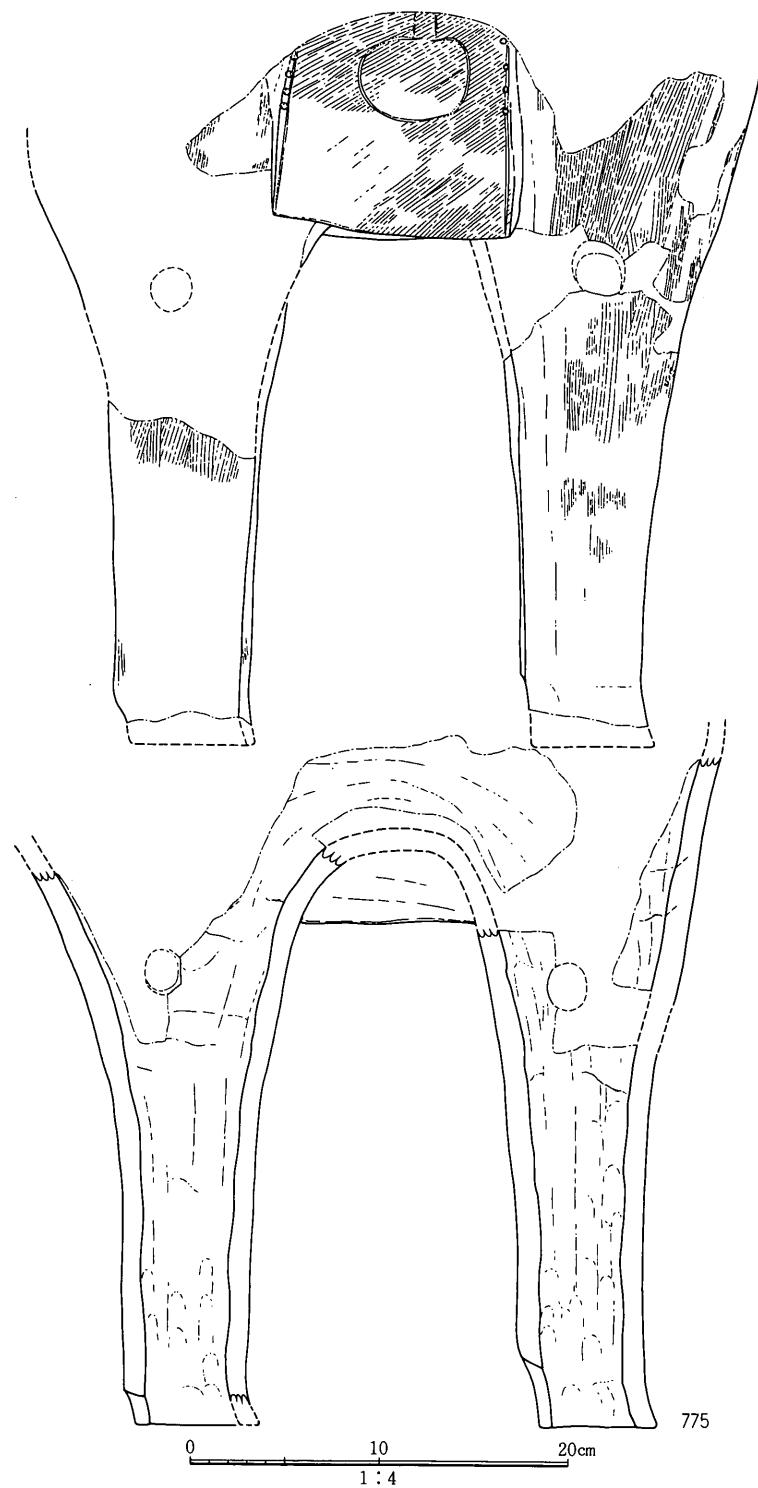


図125 131号墳出土馬形埴輪（1）

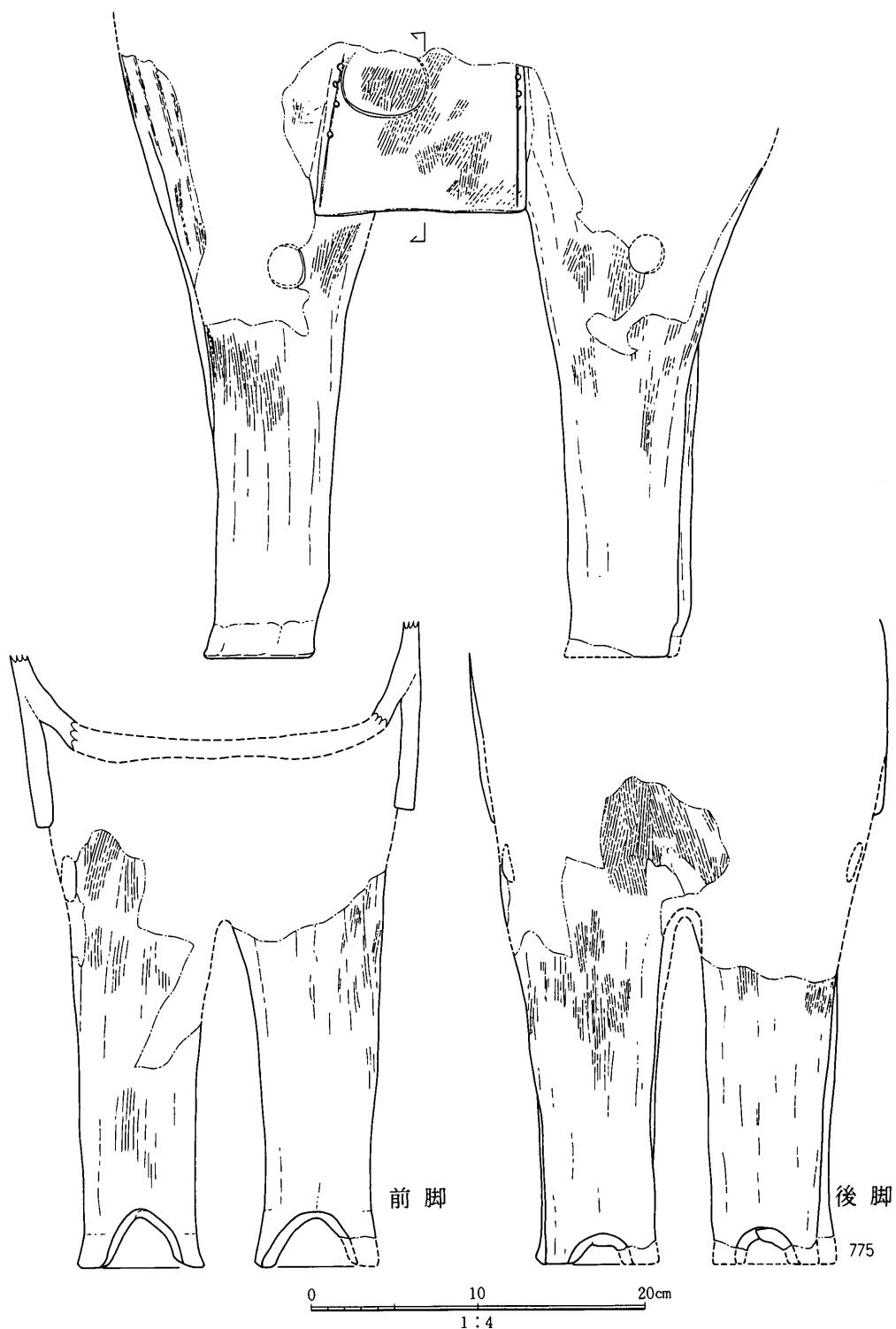


図126 131号墳出土馬形埴輪 (2)

行っている。771～773は鞍である。773は前(後)輪で、外縁部をやや尖りぎみにおさめている。復元される全体の幅は19cmである。後輪772には尻繁の革紐の一部が取付いている。鞍轡には円形の刺突文がみられる。774は尻尾で、接合予定個所に穿孔し、そこに粘土帶を巻付けながら成形されたものと思われる。775は胴体下半から脚の部分で、胸から尻までが40cm、左右幅25cm、下腹部までの高さが30cmである。腹部両側には、粘土板を貼付けて障泥を表現しており、その左右の側辺が線刻と円形刺突文で縁取られている。また、障泥上には線刻によって輪鎧が描かれている。蹄は脚の先端を外方に拡げることによって表現され、そのうしろ側に逆U字形の切込みをもつ。切込みの深さは前・後の脚で異なっており、前脚側が深く、後脚のほうが浅いものとなっている。脚の側面には直径3cmのスカシ孔がある。腹部の製作に当っては、前・後の脚の上端を外上方に拡張していき、やがて両者を結合するという方法をとっている。その結果、腹部の側面形はアーチ状を呈している。10mm以下の石英・長石・チャート・シャモットを胎土に含む。焼成は土師質で、灰白色をしている。

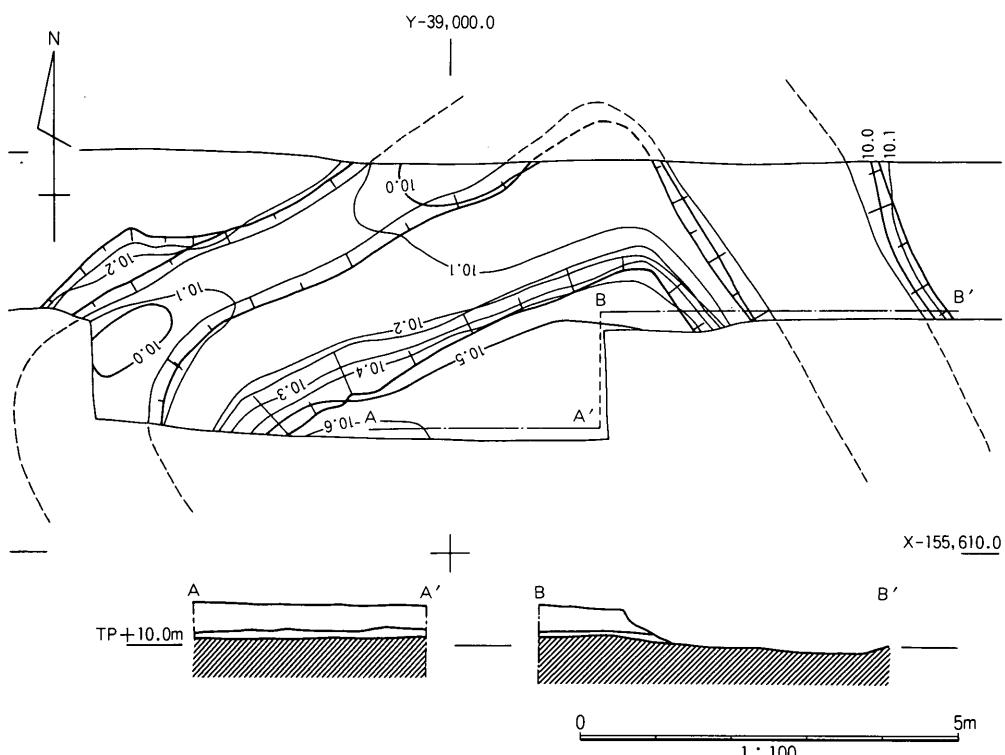


図127 132号墳実測図

iii) 132号墳

遺構(図107・127~129、図版18)

II区の西方に位置する古墳である。北東および北西側の周溝と、その間の墳丘部分を検出した。それらの形状から一辺約8mの方墳と考えられ、周溝の幅は1.1~2.5m、周溝底から墳頂までの残存高は0.6mであった。周溝内から須恵器や埴輪が出土し、墳丘西コーナー付近では衣蓋形埴輪の立飾りの破片がまとまって見つかった(図128)。埋葬主体は確認されていない。墳丘北西辺の方位はほぼN60°Eである。

盛土作業の過程を知るため、部分的に墳丘を断割った。起伏の少ない長原7B層の直上(TP+10.2m)を作業開始時の面とし、まず、墳丘の中央部付近に7B層の黒色シルト質粘土

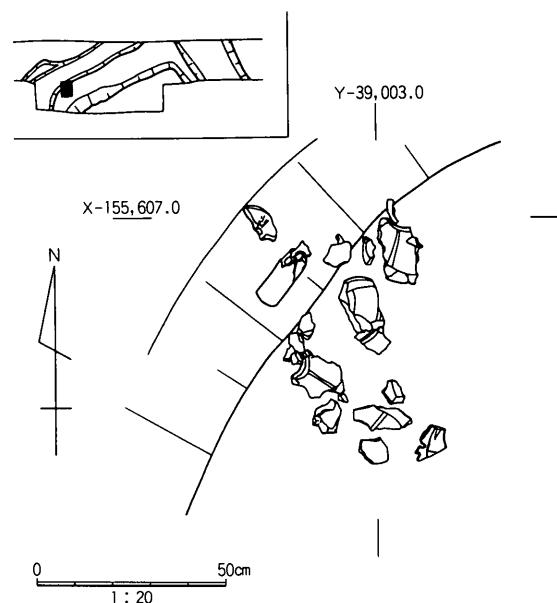


図128 132号墳衣蓋形埴輪出土状況

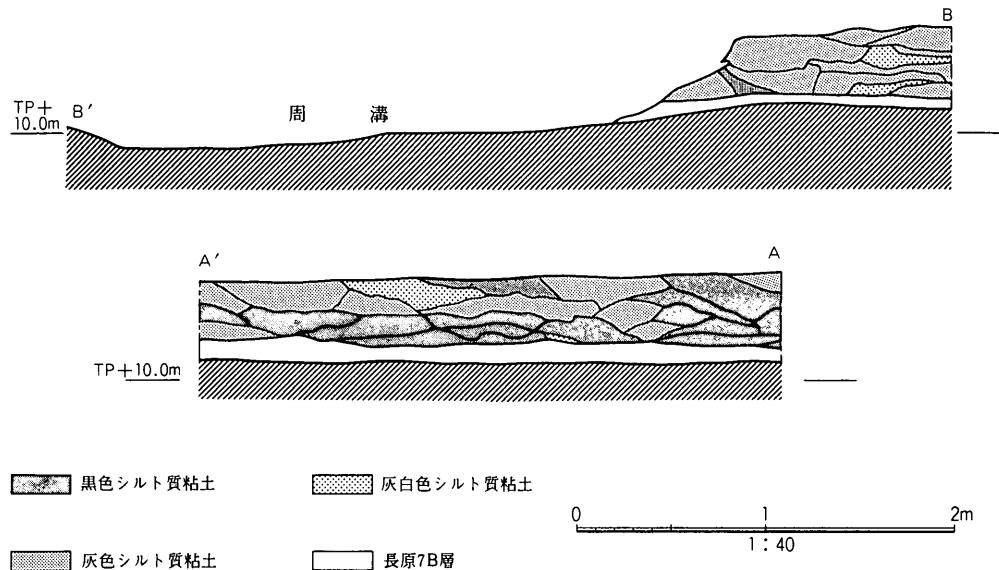


図129 132号墳墳丘断面図

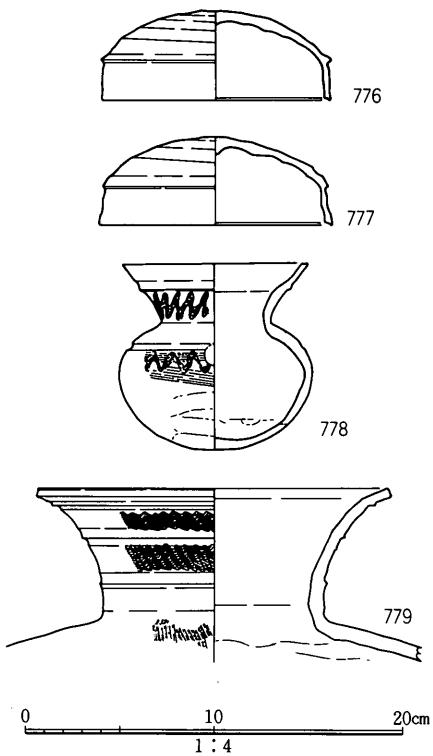


図130 132号墳出土須恵器（1）

を主として盛土すると、続いて、その上部および縁辺部に長原13層（灰白色シルト質粘土）や7B層から13層までの漸移的な部分である灰色シルト質粘土を盛っている。

遺物（図130～133、図版76・77）

須恵器 周溝内および墳丘上から杯蓋・甕・甕・器台が出土している。776・777は杯蓋であり、ともに丸みをもった天井部を有し、体部との境の稜は大きく張出している。口縁端部は内傾して浅く凹む。天井部のヘラケズリの方向は、776が時計回り、777は逆時計回りである。776の法量は口径12.1cm、高さ4.6cmである。777は口径12.4cm、高さ4.6cmである。

778は甕である。口縁部と頸部との境界につまみ出しによる突帯が巡り、頸部には櫛描波状文がある。体部は全体に丸みをもち、肩部にヘラ描沈線を1条巡らす。体部外面の下半には静止ヘラケズリ調整、もっとも張出した部分にはカキメ調整と櫛描波状文が施される。口径約10cm、高さ9.7cm、明赤褐色を呈する。

779は口径18.0cmを測る中型の甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。口頸部は朝顔形に外反し、そこに断面三角形の突帯を3条巡らせ、その間の2段に櫛描波状文を施す。体部外面には平行タタキメを残し、内面は同心円文をナデ消している。780は大型甕の口頸部で、口径約28cmである。頸部は直線的に立上がり、口縁部付近で外反し、口縁直下に断面三角形の突帯を1条巡らす。残存部分が少ないため体部外面のタタキメは不明であるが、内面には同心円文がかすかに残る。780の内外面は灰色、断面は紫灰色である。

781は高杯形器台の杯部と脚部との接合部分の破片である。杯部にはヘラ描沈線と櫛描波状文があり、外面に成形段階の平行タタキメが残る。脚部には突帯が巡り、それによって区切られた空間に櫛描波状文を施している。また各段ごとに、縦長の方形スカシ孔を4方向に開けている。782は全体のわかる高杯形器台で、杯部は半球形を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は浅く凹む。杯部上半部には2条一組のヘラ描沈線文が3段に巡らされ、

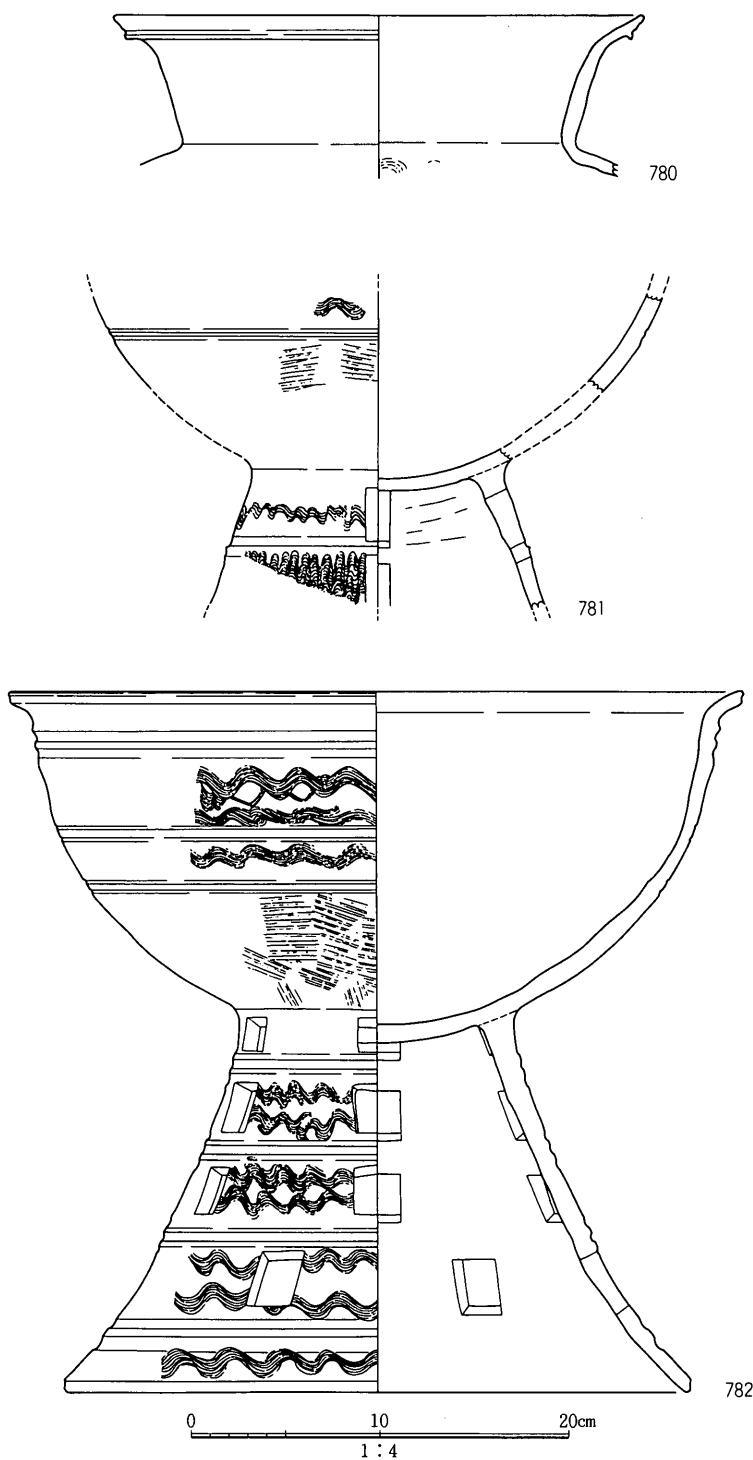


図131 132号墳出土須恵器（2）

その間に櫛描波状文が施されている。下半部には成形段階の平行タタキメが残る。脚部も同様なヘラ描沈線文によって5段に画され、最上段を除く各段に櫛描波状文を施している。スカシ孔は方形で、最下段以外にみられ、6方向に開口する。なお、最上段から3段目までのスカシ孔は縦一列に配されているが、4段目は位置を変えている。

これらの須恵器はON46段階またはTK208型式に属するものと考えられる。胎土には5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒などが含まれている。

円筒埴輪 周溝内を中心としてその周辺から出土しており、調整の違いなどから数種類に分けられる。口縁部の破片が多くみられるが、底部の残るものは少ない。

783・784は口縁から1段強を残す土師質、無黒斑の埴輪で、灰白色をしている。口縁部に上開きの半円形をしたヘラ記号があり、複線で描かれる部分と、単線の部分がみられる。円形のスカシ孔をもち、タガはやや低い台形となっている。調整は、外面が一次調整のタテハケ、内面はユビナデである。口縁部はヨコナデされて、水平な端面を作っている。口径は24cm弱、ハケの密度は8～10条/cmである。

785・786は、口縁から1、2段分を残す須恵質の埴輪で、にぶい橙色をしている。ともに外面調整は一次調整のタテハケのみであり、口縁部をヨコナデし、端部の内面側をつまみ上げて、外傾する面を作る。しかし、785は口縁部内面もハケ調整されているのに対し、786は斜方向のユビナデ調整となっている。また、785のタガは幅が広く、突出度も大きいが、786のものはやや低めである。785の口径は約20cm、ハケの密度は6条/cmである。786は口径21.5cm、ハケの密度は10条/cmである。

787と788とは接点はないが、同一個体のものであろう。土師質、無黒斑で、灰白色を呈し、焼成があまい。外面はナデ調整のためか、ハケメが微かにみられるだけであるが、内面には、細かなハケメが一部に残る。タガは低い台形、口縁部に×印のヘラ記号がある。口径は24cm弱である。

789は土師質、無黒斑で、口縁部を残す。口縁部はほぼ垂直に延び、端部に水平な面を作る。タガは断面三角形。外面調整は一次調整のタテハケ、内面にはユビナデ後、口縁部付近にハケメを施す。口径約21cm、ハケの密度8条/cm。淡黄色を呈する。

790は直径約41cmに復元される大型の埴輪の胴部である。外面に黒斑はなく、灰白色をしており、タガは台形で大きく突出する。外面には一次調整のタテハケと、二次調整のB種ヨコハケがみられ、内面にもハケ調整が散見される。ハケの密度は7～9条/cmである。

図示した埴輪の胎土には、石英・長石・チャート・シャモットが含まれ、783・784・790

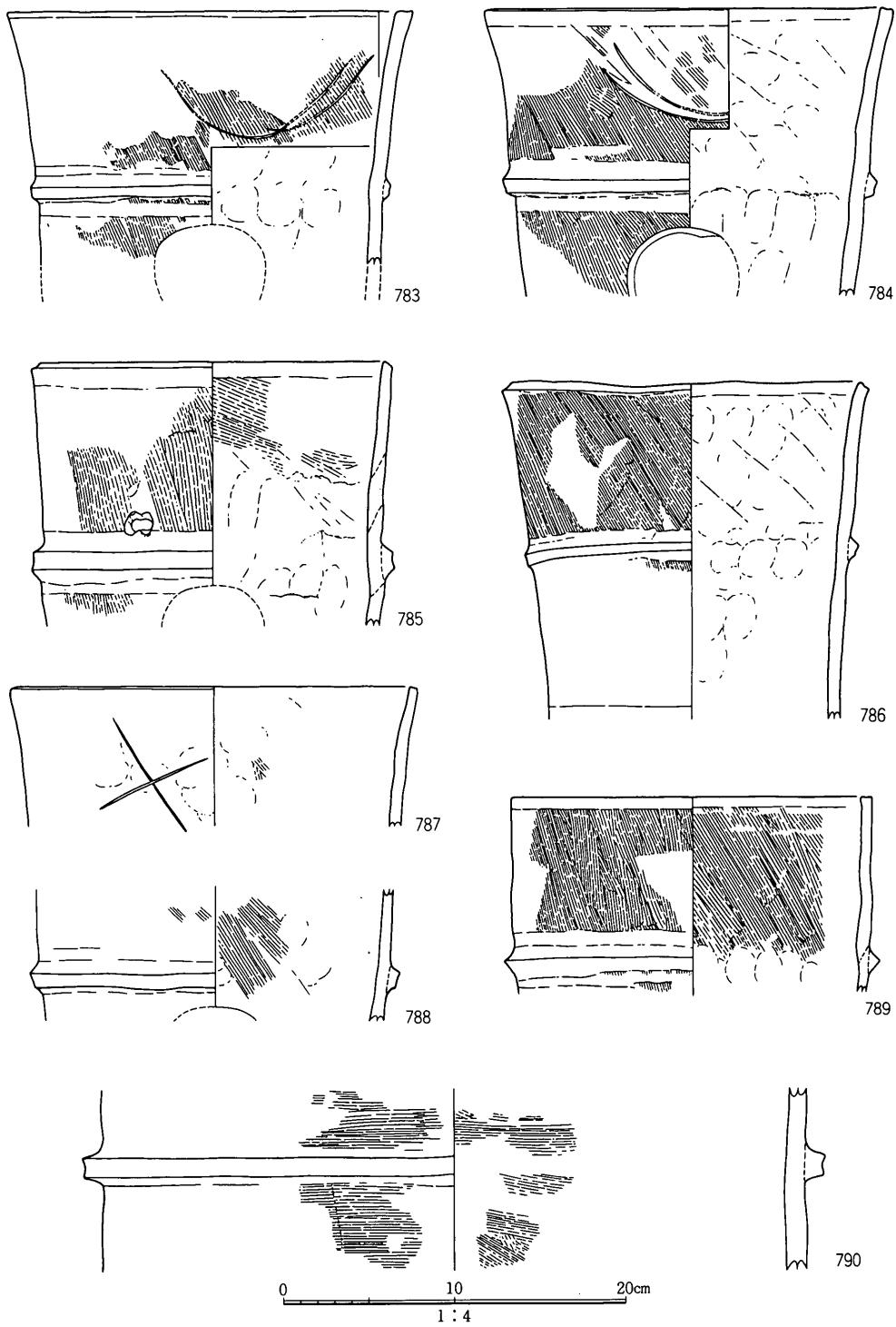


図132 132号墳出土円筒埴輪

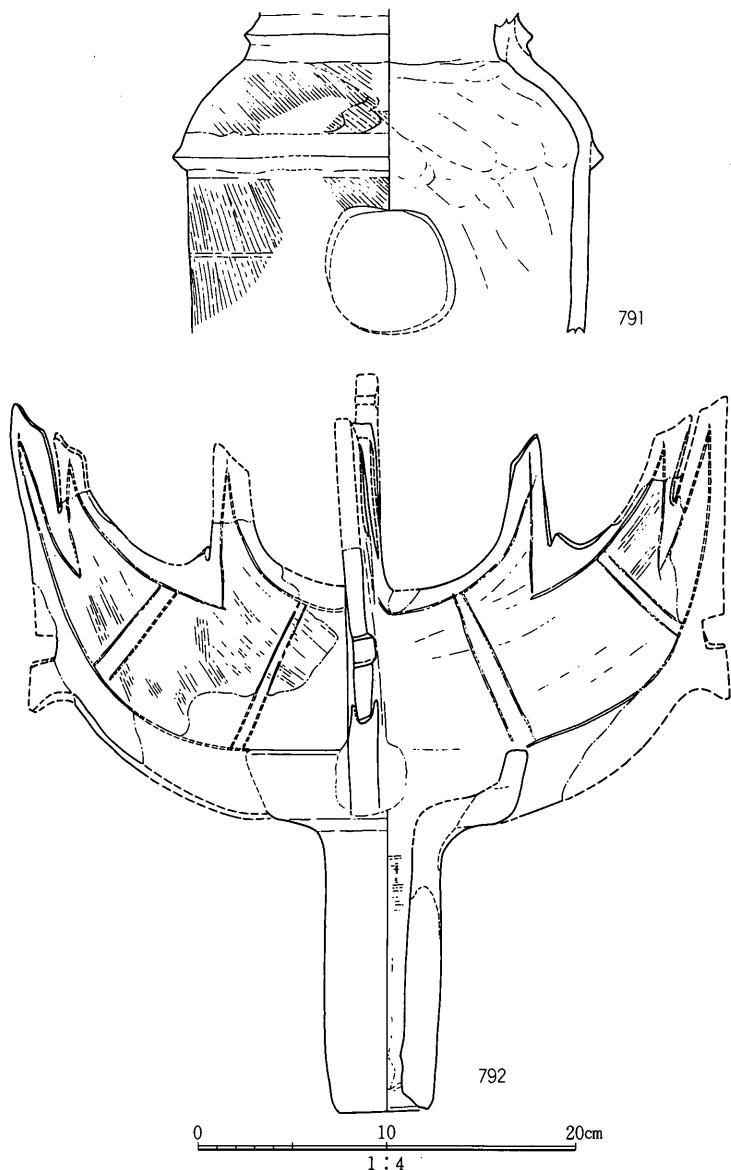


図133 132号墳出土朝顔形・衣蓋形埴輪

にはそれに加え雲母も含まれている。

朝顔形埴輪 791は墳丘上から出土し、頸部と胴部の一部を残す。土師質、無黒斑で、橙色をしているが、器表はかなり磨耗している。頸部から肩部は緩やかに湾曲し、頸部と肩部下端に断面三角形のタガを巡らせる。外面には一次調整のタテハケ、内面にはユビナデ・ユビオサエがみられる。胴部最上段の中央に1条の沈線が巡り、それを切る円形のスカシ

孔がある。胎土に石英・長石・チャート・シャモットを含んでいる。

衣蓋形埴輪 立飾り部分792が墳丘斜面から出土している。飾り板は、すでに大型化した鰐飾りをもち、鰐飾りと飾り板本体との区別が不明瞭なものになっている。また、外側の鰐飾りにはそれを上下に二分する抉り込みもみられる。輪郭に沿って線刻し、その間に2条一組の線刻を2個所入れる文様が施されている。受部端は水平な面をもち、明瞭な屈曲部を作つて軸部へと続く。軸部は、芯棒に粘土帯を巻付ける方法で成形されているらしく、芯棒を抜き取る時にできたと思われる横方向の細かい筋が内面に残っている。また、内面の下端部には粘土のシボリメもみられる。製作手順としては、軸部と受部を接合したのち、受部内面の中央に粘土塊を数段積み上げ、それを中心として、飾り板の予定される方向に三角形をした粘土板を取付ける作業を行う。そこに、あらかじめ切り揃えた4枚の飾り板を接合し、外形を完成させている。受部の内面および側面には接合に配慮してキザミメが付けられている。立飾り全体の幅は38cm、高さは39cmである。胎土に5mm以下の石英・長石・チャート・シャモットを多く含み、色調は灰白色である。

iv) 133号墳

遺構(図109・134、図版20)

V区の東端部に位置し、幅1.8~2.0mの周溝が巡る古墳である。墳丘の南辺と西辺の一部

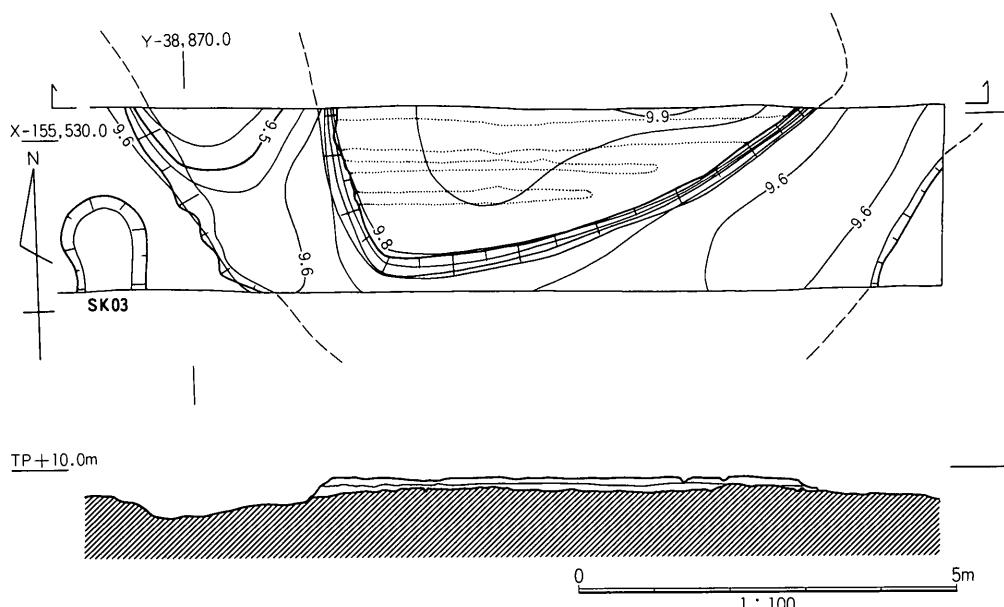


図134 133号墳実測図

が検出されており、周溝の規模や形から考えて一辺6~7mの方墳と推測される。墳丘南東辺の方位はおよそN70°Eである。西側の周溝中央部がもっとも低くなってしまっており、そこから墳丘最高所までの高さは0.5mである。長原7B層の直上はTP+9.8mで、その上に約10cmの厚さで盛土が残っている。墳丘上には長原3層段階の小溝が東西方向に掘られていた。墳丘上および周溝内から、本墳に伴う遺物は出土していない。

周溝の西側にSK03・04という土壙が確認されている。古墳の周溝に似た深さ5cmほどの浅い土壙である。埋土も周溝と同じ黒褐色粘土であるが、出土遺物はなく、本墳との関係は不明である。

v) 134号墳

遺構(図108・135、図版18)

IV区の中央にある方墳である。墳丘は東西7.0m、南北3.5m以上である。墳丘の縁辺部は、すでに削平を受け、盛土や長原7B層を失っている。中央部では7B層の直上(TP+10.2m)に厚さ30cmの盛土が残る。周溝底からの残存高は0.5mである。墳丘南辺に直交する方向を墳丘主軸とするとN15°Eである。周溝の残りも悪く、西側はかろうじて周溝の外周を押さえることができたが、東側は明確にできなかった。周溝の残存幅は2mである。周溝内より須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土している。

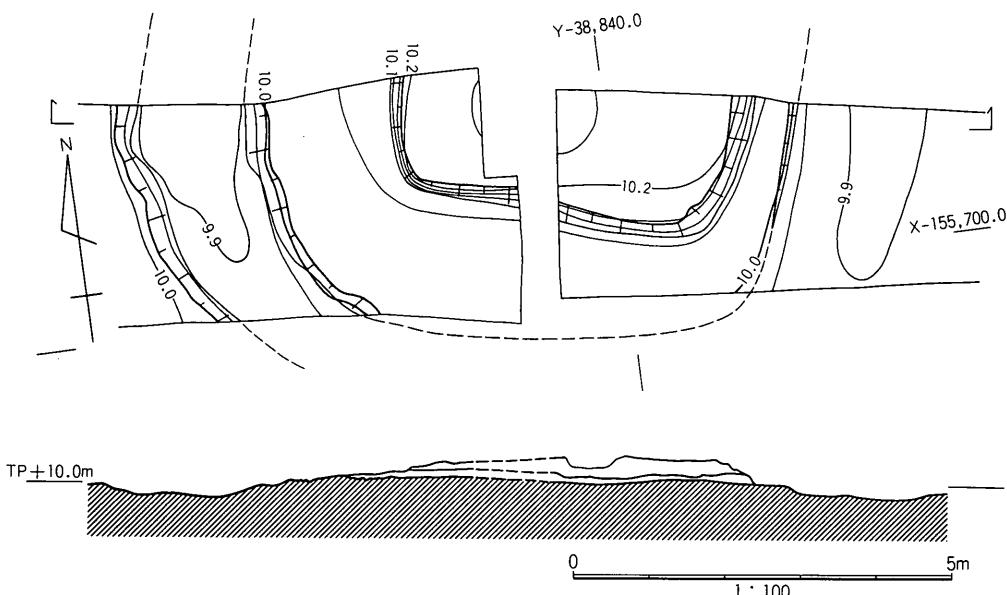


図135 134号墳実測図

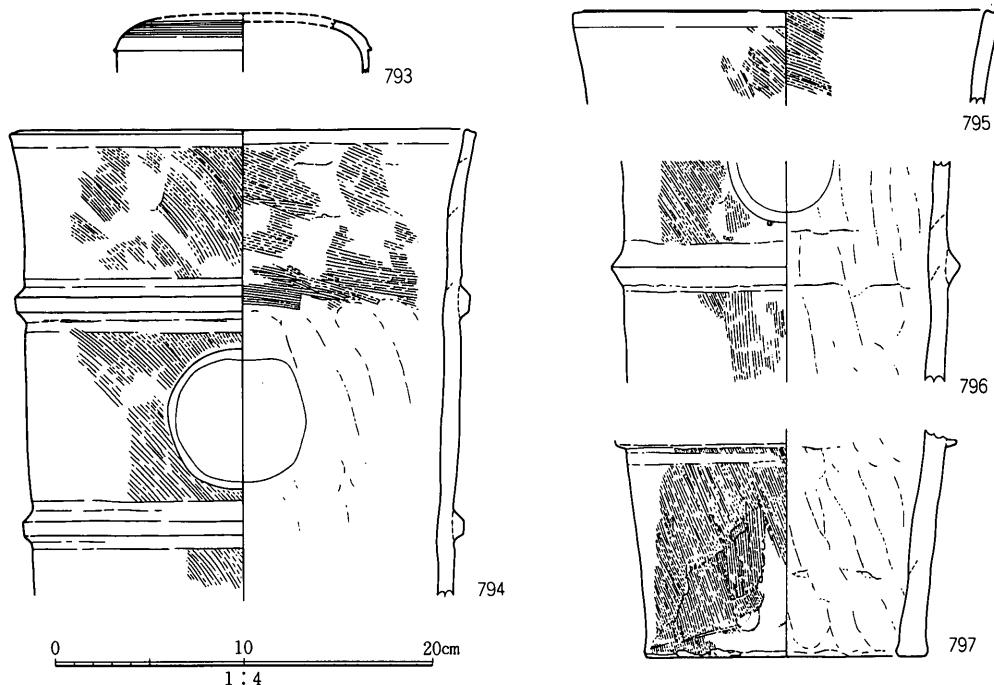


図136 134号墳出土遺物（1）

遺物（図136・137、図版78）

須恵器 793の杯蓋が墳丘直上から出土している。天井部から体部にかけて、全周の1/6ほどが残る。天井部と体部の境界の稜はやや鋭い。天井部にはカキメが施されている。TK208型式に属するものと考える。

円筒埴輪 周溝内およびその周囲から794～802が見つかっている。そのうち、794～798は外面調整を一次調整のタテハケだけで済ませているもので、799～802は二次調整のヨコハケを施すものである。前者はみな土師質の埴輪であり、後者には、土師質と須恵質のものがある。

794は口縁部から2段強ほど残存し、全周の約1/4が残る。体部は直立ぎみで、口縁部の上方にいたってわずかに外反する。口縁端部はヨコナデにより端面が浅く凹む。タガは台形に作られる。口縁部の下の段に円形のスカシ孔がある。外面調整は上述の通りで、内面はユビナデ・ユビオサエ、そして口縁部にのみ斜方向のハケ調整がある。口径約25cm、ハケの密度は8条/cmである。795は口縁部の破片で、残存高約5cmである。794と同様に、内面にハケ調整がある。口縁端部はヨコナデされ、端面を浅く凹ませる。ハケの密度は9条/cmである。796の残存高は11.5cm、全周の1/3が残る。断面三角形のタガをもち、円

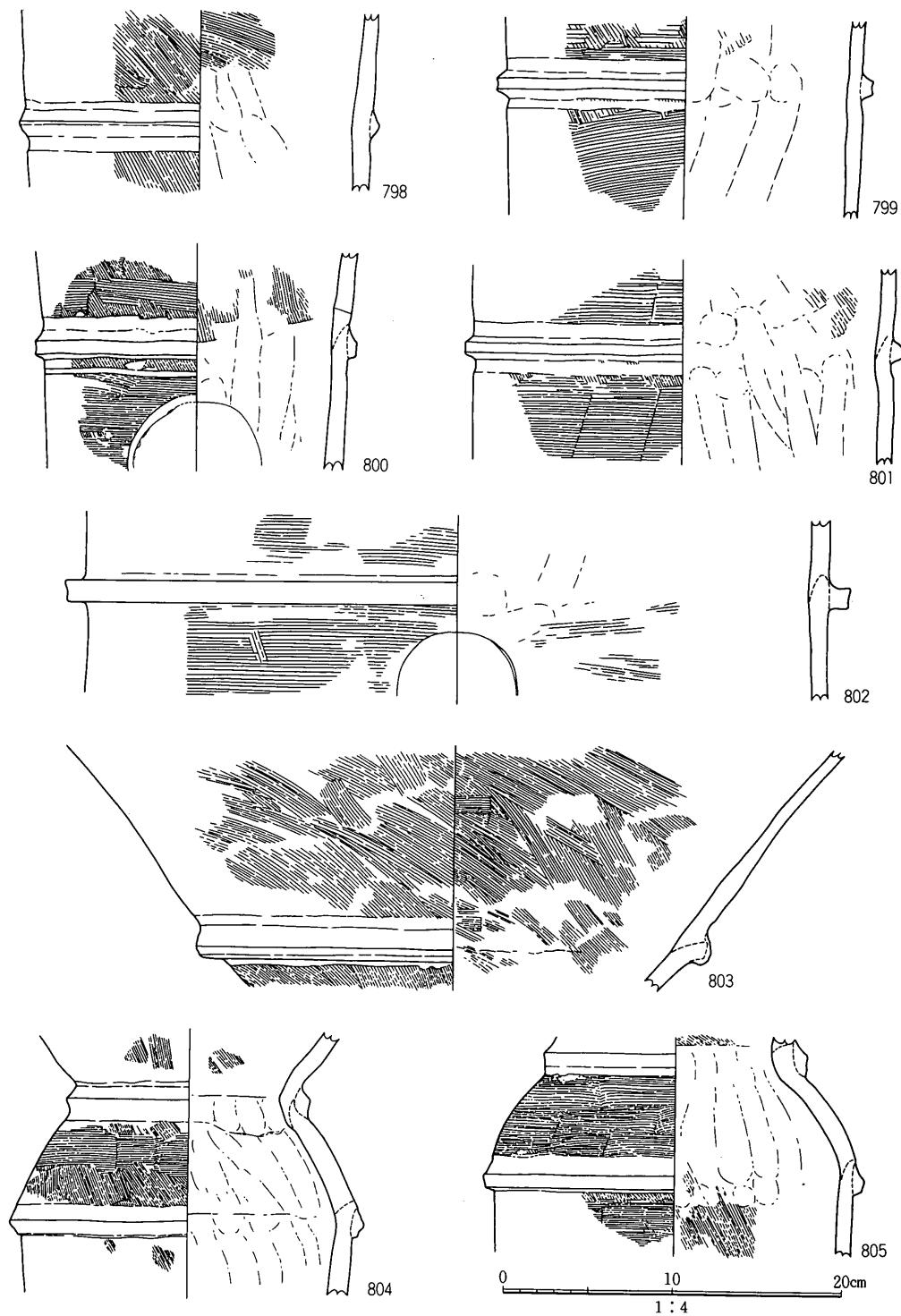


図137 134号墳出土遺物 (2)

形のスカシ孔も確認できる。内面調整はユビナデ・ユビオサエである。ハケメはやや細かく10条/cmである。797は基底部の破片で、全周の約1/2があり、上端にタガの一部が残る。下端部は内面からのユビオサエによって外方に張出している。外面に残るハケメから、その原体が3.5cm以上の幅であったことがわかる。内面はユビナデ調整されている。底径14.7cm、ハケの密度は9条/cmである。798は内外面にハケ調整を施す。内面のハケは上方にのみあって、口縁部付近の破片であることが推測される。全周の約1/5があり、断面三角形のタガを巡らせている。ハケの密度は8条/cmである。794~796・798は灰白色、797は浅い黄橙色をしている。

799は須恵質の埴輪である。ほぼ1段分を残す。タガは大きく突出し、断面台形である。外面には二次調整としてB種ヨコハケ、内面にはユビナデ・ユビオサエと一部にハケメが施される。ハケの密度は7条/cmである。800も須恵質で、断面台形のタガをもつ。ハケ原体の明確な静止痕に乏しいが、二次調整はB種ヨコハケとみられる。内面上部にもハケメがあり、口縁部付近の破片であることが推測される。また、円形のスカシ孔も残る。ハケの密度は10条/cmである。801も須恵質で、断面台形のタガをもつ。二次調整はB種ヨコハケ、内面の一部にもハケメがある。ハケの密度は7条/cmである。802は土師質であるが、復元径44cmの大型品で、突出度の大きい方形のタガを巡らす。外面の二次調整はB種ヨコハケ、内面にもハケメが散見される。タガの巡らされた位置に成形段階の粘土の継ぎ目があり、その継ぎ目にもハケメが観察できる。この部分が成形作業の休止面であったとみてよからう。円形のスカシ孔をもち、ハケの密度は7条/cmである。799・801は橙色、800は灰黄色、802は灰白色である。

胎土には石英・長石・チャート・シャモットが含まれる。しかし、794・796・802にはそれに加えて雲母が多く含まれている。

朝顔形埴輪 墳丘周辺から803~805が出土している。803は口縁部の破片であるが、端部を失っている。上半部と下半部を区分する段をもち、その外面にタガを付ける。しかし、内面では上半部と下半部の区別は不明瞭で、直線的に連続している。内外面にハケメが施され、タガの上下はヨコナデされている。灰白色を呈し、焼成は土師質である。ハケの密度は9条/cmである。804は頸部から胴の一部である。頸部に断面三角形のタガをもち、また、肩部と胴部の境界にも同様のタガを巡らせる。肩の張りはほとんどない。外面調整は、体部に一次調整のタテハケ、肩部には一次調整のタテハケと二次調整のB種ヨコハケがみられる。内面調整は、胴部側がユビナデであるが、肩部は板ナデのようである。橙色を呈

し、焼成は土師質である。ハケの密度は9条/cmである。805も頸部から胴の一部である。頸部には断面三角形のタガをもつが、肩部と胴部の間のタガは台形である。肩部はやや丸みをもっている。外面調整は胴部・肩部とも一次調整のタテハケ後、二次調整のB種ヨコハケを施している。内面調整は胴部にハケメ、肩部にユビナデ、頸部以上がまたハケメとなっている。肩部のB種ヨコハケは3段に施されている。にぶい橙色を呈し、焼成は半須恵質である。ハケの密度は9条/cmである。

胎土に石英・長石・チャート・シャモットを含み、803・804には雲母も多く含まれる。

vi) 135号墳

遺構(図108・138)

Ⅲ区東半部に位置する。墳丘は削平され、盛土は残存していない。東西に周溝が検出されており、その幅は0.9~1.3mである。周溝のもっとも深い部分で約15cmであった。一辺5mの方墳と思われる。この古墳の3m東側に59号墳があり、そこには黒色粘土(長原7B層と推定)を埋土とするピット群があった(図版22)。それと同じようなピットが、この古墳の墳丘の範囲内にも1基確認されている。ピットの直径は約30cmで、深さは20cmほどである。なお、東周溝から完形の須恵器杯身が出土している。

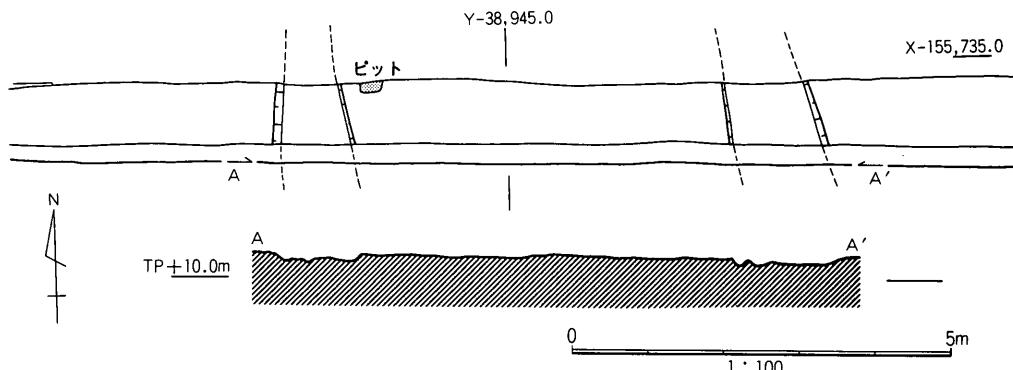


図138 135号墳実測図

遺物(図139、図版81)

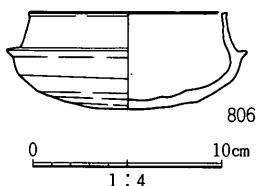


図139 135号墳出土須恵器

806は須恵器杯身である。立上がりはわずかに内傾し、端面は浅く凹む。受部はほぼ水平に延び、先端は鋭い。体部の広範囲にわたってヘラケズリが行われ、底部は丸く仕上げられている。ヘラケズリの方向は時計回りである。底部内面に

は仕上げナデがみられる。焼成は良好である。口径10.4cm、器高5.1cmで、TK23型式に属するものと考える。

vii) 136号墳

遺構(図108・140)

Ⅲ区中央部に位置する。長原7B層の直上(TP+10.7m前後)に10~25cmの盛土が遺存していたが、主体部は確認されなかった。東西の周溝が平行していることから方墳と考えられ、一辺10mという規模が推定できる。周溝の幅は2.5~3.0m、周溝底からの墳丘の高さは0.5mである。周溝内より円筒埴輪・朝顔形埴輪が見つかっている。

遺物(図141、図版79)

円筒埴輪 出土したものは全周の1/5以下という小片ばかりである。口縁部の破片が1点含まれているが、その他については朝顔形埴輪の可能性もある。焼成具合には、土師質のものと須恵質あるいは半須恵質のものがある。前者の外面調整は一次調整のタテハケのみ、後者には二次調整のヨコハケもみられる。両者の違いはその胎土にもみられ、後者には石英・長石・チャート・シャモットがみられるが、前者にはそれ以外に雲母が多く含まれている。

807・808は土師質の埴輪で、灰白色を呈する。807は胴部で、断面台形のタガをもつ。808は底部で、復元径は17cmである。ともに内面はユビナデされ、外面のハケの密度は8条/cmである。

809~812は須恵質・半須恵質で橙色~にぶい橙色をしている。809は口縁部で、内面に

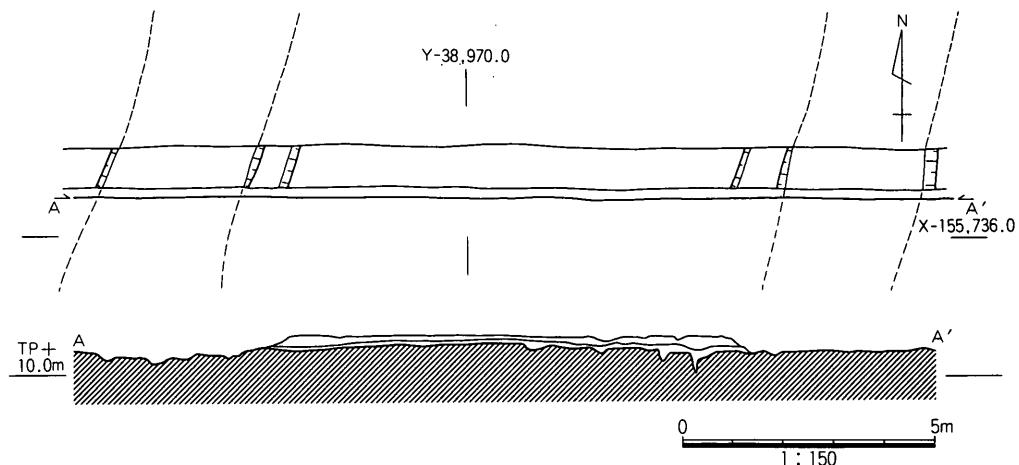


図140 136号墳実測図

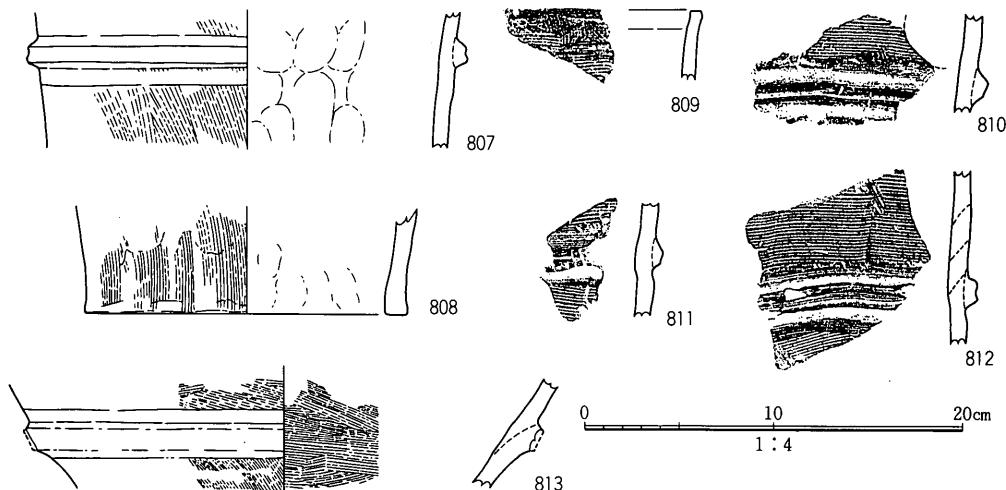


図141 136号墳出土埴輪

は斜方向のハケメがあり、端部にはヨコナデが施される。810～812は胴部で、断面形が台形にちかいタガをもつ。内面はユビナデされる。810は円形スカシ孔の一部が残る。二次調整のハケの密度は6～8条/cmである。

朝顔形埴輪 813は口縁部の段の部分である。土師質で灰白色をしている。口縁下半部をわずかに外反させて、その上に上半部を直線的に接合している。段の部分には微量の粘土を付け足してタガを表現する。内外面にハケ調整があり、その密度は9条/cmでやや細かい。胎土に雲母も含まれている。

viii) 137号墳

遺構(図108・142、図版19)

Ⅲ区西半部に位置する。長原7B層の直上(TP+10.7m)に、盛土が18cmの厚さで残っていたが、主体部は確認されなかった。東西の周溝が見つかっており、その幅は0.7～0.8mで、一辺4.5mの方墳と推測される。周溝底からの墳丘高は0.4mである。周溝内より完形の須恵器杯身が1点出土している。東周溝に接してSD04があるが、これは長原6A層下面の遺構である。

遺物(図143、図版81)

814は須恵器杯身である。立上がりは内傾ぎみに延び、端部は内傾して浅く凹む面をもつ。受部は水平方向に張出して、鋭い端部となっている。体部から底部はやや丸みをもち、ヘラケズリが広範囲に及ぶ。ヘラケズリの方向は時計回りである。底部内面はていねいに

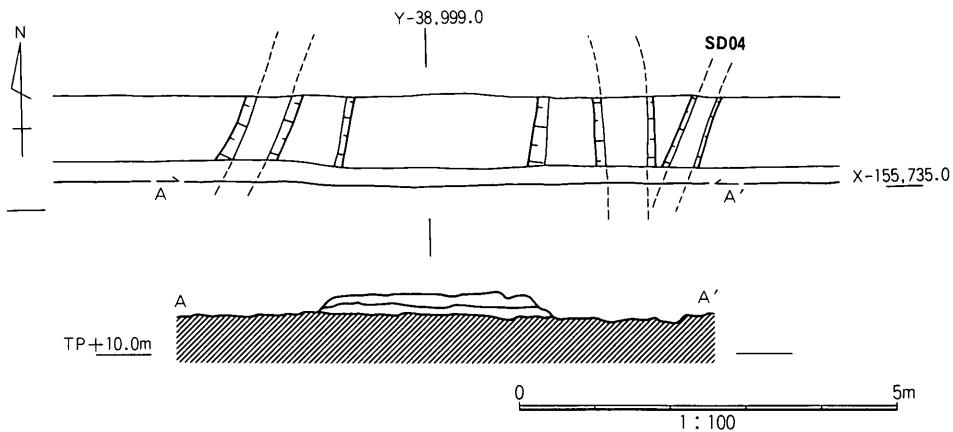


図142 137号墳およびSD04実測図

ナデ調整されている。口径11.5cm、器高4.9cmである。TK208型式と考える。

ix) 140号墳

遺構(図109・144・145、図版20)

VI区の北端に、墳丘の南東コーナーを検出した。周溝幅は約3m、周溝底から墳丘のもっとも高く残っている地点までの高さは0.7mである。周溝の規模や形態から、小方墳の可能性が高く、ほぼ南北方向に主軸をとるとみられる。墳丘の周囲は長原6A層段階の耕作によって侵食されているが、残りのよいところで約30cmの盛土を確認できる。この盛土の直下(TP+9.9m)が長原7B層で、さらにその下にいわゆる黒ボク土が約15cmの厚さでみられた。この古墳のばあい、墳丘のごく一部が現われているだけであるため、盛土の手順については推測の域を出ないが、南北方向の断割り断面の観察から、墳丘予定場所の周囲にまず盛土を行い、その後に中央部の盛土に取りかかったものと思われる。周溝底から須恵器の杯身・杯蓋が出土したが、本来、墳丘上に供獻されていたものであろう。

遺物(図146、図版80)

須恵器 815・816は杯蓋である。どちらも丸い天井部をもち、体部との境界にある稜の張出しも弱くなっている。口径も、815が12.4cm、816が12.8cmと近似しているが、ヘラケズリの方向をみると、前者が時計回り、後者が逆時計回りである。

817~820は杯身である。底部がやや丸みをもち、口縁部を欠く820を除いて口径10.8~

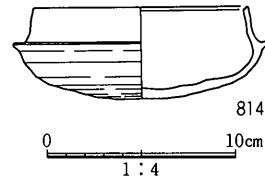


図143 137号墳出土須恵器

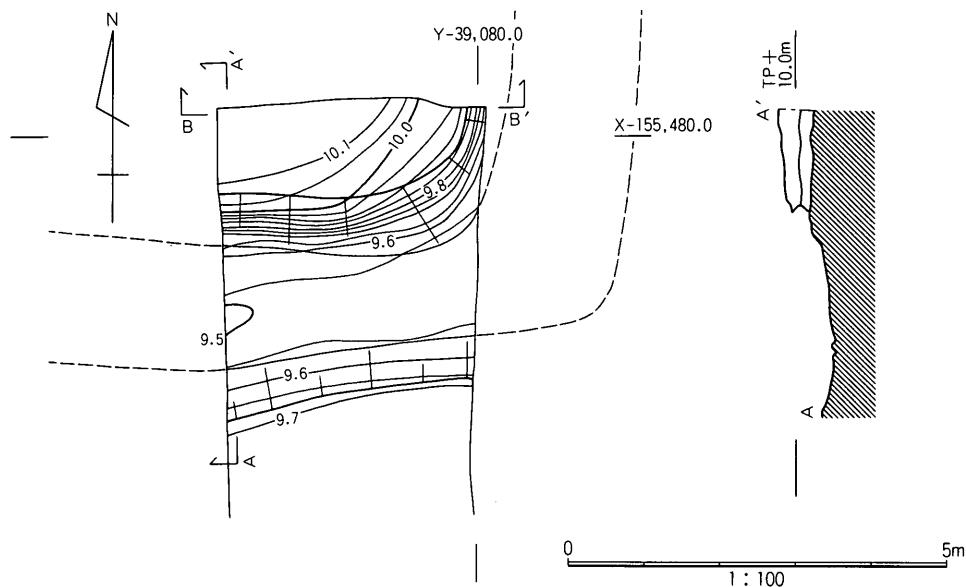


図144 140号墳実測図

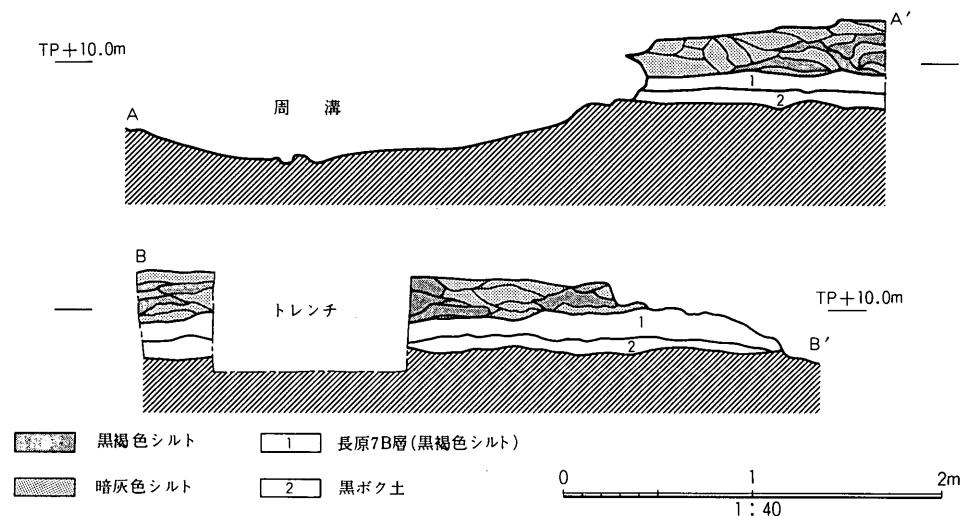


図145 140号墳墳丘断面図

11.0cmの範囲にある。ヘラケズリの方向は817が時計回り、その他が逆時計回りである。

819の底部外面には1条のヘラ描沈線がある。

821は壺の頸部から口縁にかけての破片である。穿孔の有無は不明であるが、恐らく龜であろう。頸部と口縁部との境界に、つまみ出しによる鋭い突帯が巡る。また、頸部と口縁部に櫛描波状文が細かく施されている。

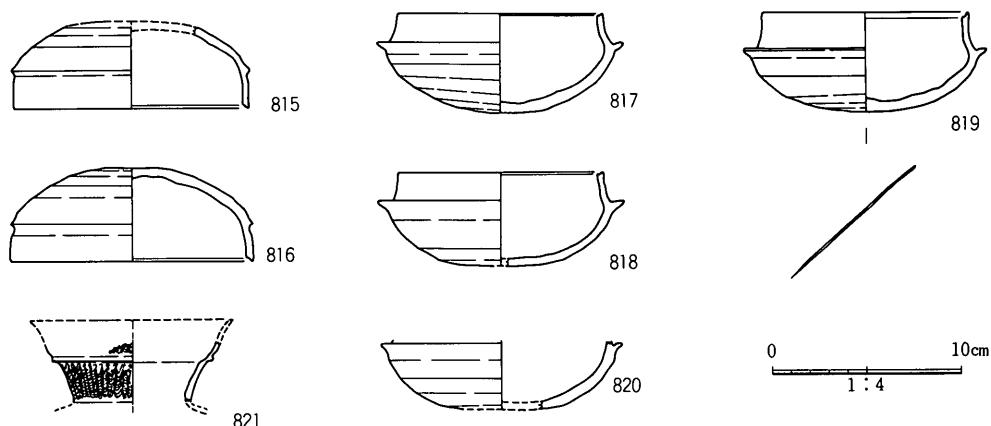


図146 140号墳出土須恵器

各個体とも、胎土に5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒を含むが、817にはやや多く砂粒が含まれる。いずれもTK23型式またはTK47型式に属するものであろう。

x) 141号墳

遺構(図109・147・148、図版21)

VI区の中央部に、調査地と平行する墳丘の東半部分が見つかった。墳丘方位をN2°Eにとる一辺約5mの方墳である。周溝幅は1.0~1.5m、周溝底から墳頂までの高さは0.5mであった。南北および東西方向に断割りを行い、築造方法の検討を行った。その結果次のような築造過程が推測された。

1：墳丘予定範囲に均一に盛土する。このとき長原7B層を主として用いる。

2：つづいて黒ボク土(暗灰色シルト)を用いて墳丘全域に盛土を行う。

3：墳丘の輪郭を整えることが意識され、長原13層以下の地層を用い盛土を行う。

このように盛土の過程を追うことができたが、埋葬施設については確認できなかった。また、盛土直下の7B層はTP+9.7mであった。周溝内から土師器・須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土している。

遺物(図149、図版80・81)

土師器 822は口径6.6cmの小型壺で、灰白色をしている。体部下半を欠くが、胴部が張り、「く」字形を呈する口頸部をもつ。体部はユビナデ・ユビオサエ、口頸部はヨコナデされている。2mm以下の石英・長石・雲母・チャート・シャモットを胎土に含む。

須恵器 823は杯蓋で、全周の1/8ほどの破片である。体部はやや丸みをもつが、口縁部との境界の稜は鋭く、口縁端部は平坦な面をもつ。復元口径は12.1cmである。824は高杯

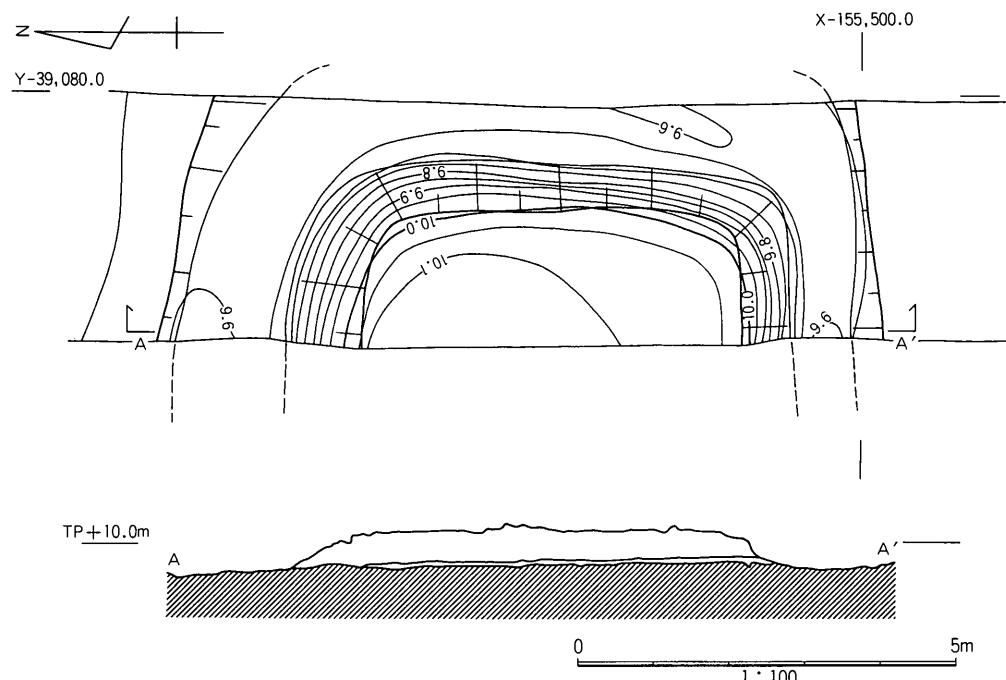


図147 141号墳実測図

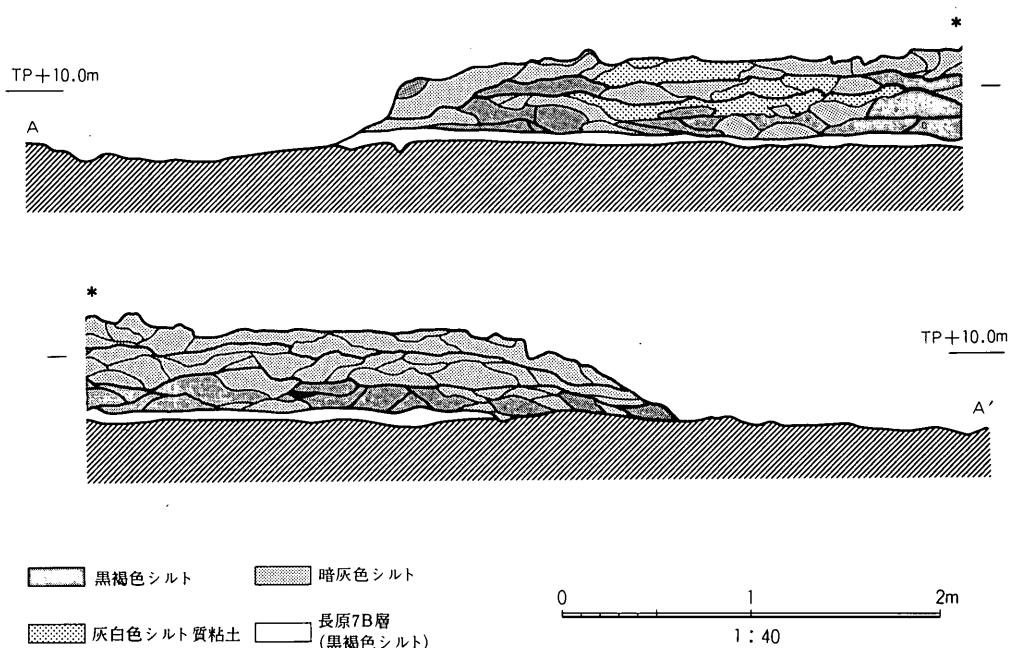


図148 141号墳墳丘断面図

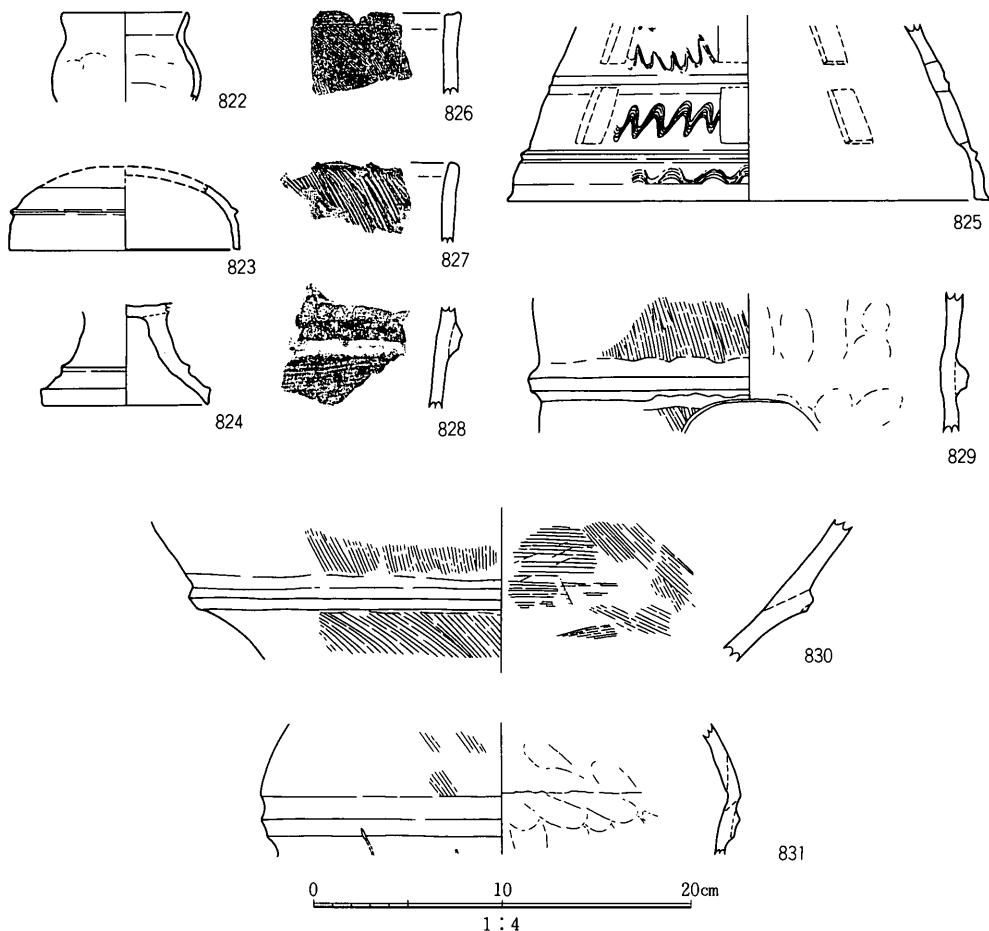


図149 141号墳出土遺物

の脚部がほぼ完形で残っているものである。裾部に断面三角形の突帯をもち、脚端部の上下をつまみ出している。スカシ孔はない。内外面ともいねいにナデ調整している。825は器台あるいは脚付壺の脚部で、全周の1/8ほどがある。脚端部は外方につまみ出されている。外面には断面三角形の突帯が巡り、突帯によって画された空間に櫛描波状文を施す。最下段の波状文は脚端部に行ったヨコナデによってその下半部が消されている。また、下から2段目と3段目の波状文は異なる向きをとっている。スカシ孔は長方形で8方向に穿孔される。

これらの胎土には、5mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒が含まれる。TK208型式に属するものと考えられる。

円筒埴輪 出土したものは、いずれも大人の手の掌よりも小さい破片ばかりである。そ

のうち口縁部に当るのは826・827で、その他については朝顔形埴輪の可能性もある。828の外面には二次調整にヨコハケがみられるが、その他の破片には一次調整のタテハケのみがみられる。827~829は土師質で、826は須恵質である。胎土には5mm以下の石英・長石・チャート・シャモットが含まれるが、土師質のグループにはわずかに雲母がみられる。828のハケメは細かく10条/cmであるが、その他は7条/cmである。

朝顔形埴輪 口縁部から頸部にかけての破片830と肩部付近の破片831がある。前者は墳丘上から、後者は周溝内から出土した。どちらも土師質・無黒斑の埴輪で、灰白色をしている。前者のタガは擬口縁をたくみに利用し、わずかな粘土を付加しただけでタガを表現している。肩部の破片には胴部との境に断面M字形の低いタガが巡る。また、そのタガを切込む線刻がみられる。外面調整として、タガ接合前のハケメがあり、口縁部内面にもハケメが施されている。胎土には3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・シャモットが含まれる。ハケメの密度は6・7条/cmである。

xi) 142号墳

遺構(図109・150・151、図版21・22)

VI区南端付近に墳丘の北コーナーと北東および南東の辺を確認した。墳丘の一辺が12mの方墳と考えられ、幅約4mの周溝が巡る。墳丘北東辺の方位はN20°Wをとっている。隣接する140・141号墳に比べるとやや大型の古墳である。周溝底から墳丘最高所までの高さは1.0mであった。墳丘の南東隅を確認すべく、土地所有者の許可のもとで調査地の一部拡張を行った。しかし、墳裾は拡張範囲内にみられず、墳丘コーナーは確認できなかった。墳丘の北東および南東の辺に対し直交する方向と調査地西壁ぎわにトレーナーを入れた。その結果、盛土が約60cmの厚さで残り、長原7B層の直上がTP+10.1mであることもわかった。また、墳丘の築造過程に関して次のような状況がうかがえた。

- 1 : 墳丘の中心付近に、長原7B層と黒ボク土をおもに用いて土饅頭を築く。
- 2 : 次に、その高まりの周囲に盛土を行い、全体の高さを揃える。このときには主として長原13層以下の地層から採取している。
- 3 : 墳丘の輪郭を整えるため、縁辺部をはじめ広範囲に盛土を行う。

墳丘の断割りから以上のようない状況を知ることができた。隣接する141号墳のばあいとは、最初の段階に大きな違いが認められる。なお、埋葬施設は確認できなかった。遺物は主として周溝内から出土しており、須恵器・円筒埴輪・朝顔形埴輪・衣蓋形埴輪がある。

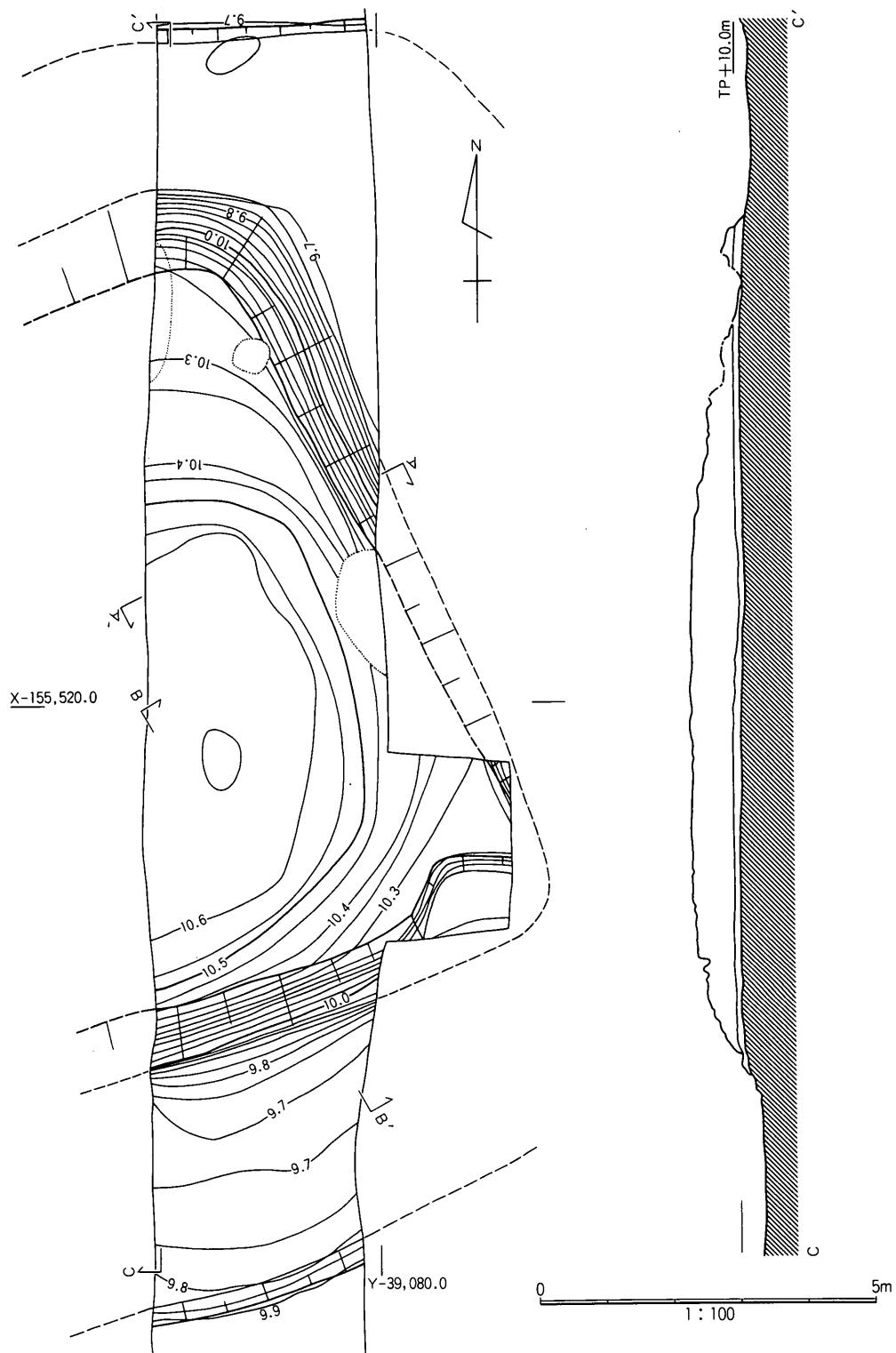


図150 142号墳実測図

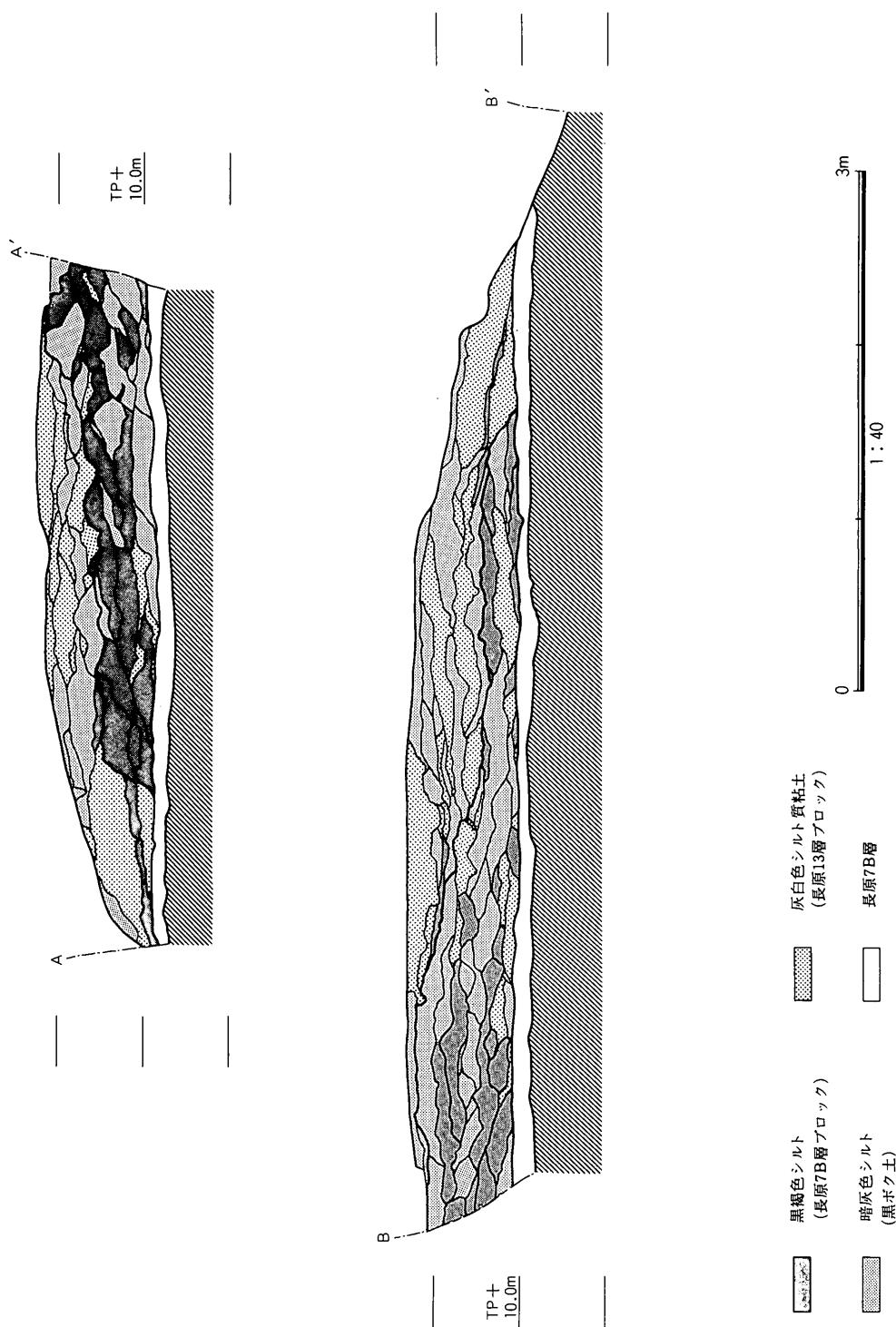


図151 142号墳墳丘断面図

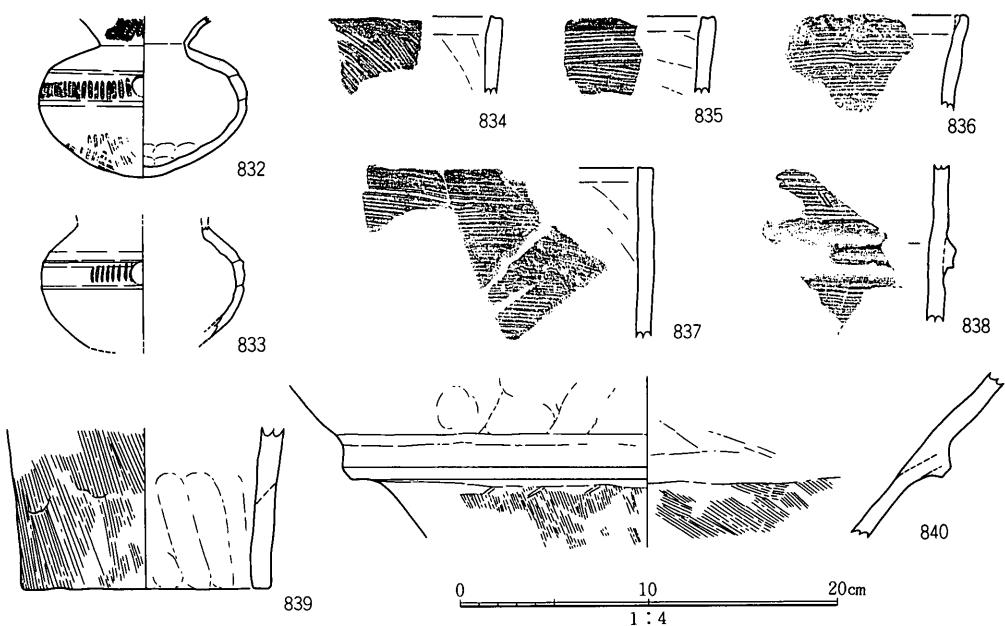


図152 142号墳出土遺物

遺物(図152・153、図版81・82)

須恵器 832・833は周溝内から出土した壺である。832は胴部中央が張出し、やや尖った底部をもつ。肩と胴部最大径の位置にヘラ描沈線を入れ、その沈線の間に櫛描列点文を0.2~0.4cm間隔で施す。頸部には櫛描波状文をもつ。底部内面には多数のユビオサエ痕がみられ、外面の平行タタキメとともに丸底化に係わる作業の痕跡とみられる。833は肩部が張出しており、体部上方に2条の稜線をもつ。その稜線間に櫛描列点文を0.3cm間隔で施している。両個体とも、胎土に3mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒を含む。832はTK20 8型式、833はTK23型式にそれぞれ属するものと思われる。

円筒埴輪 834~839が墳丘上および周溝内から見つかっている。834・839は外面が一次調整のタテハケのみのもの、835~838には二次調整のヨコハケもみられる。834~837は口縁部の破片で、ヨコナデによって端面が浅く凹む。また、内面には斜方向のユビナデ調整が施されている。838には断面M字形の低いタガと円形とみられるスカシ孔の一部がある。839は基底部で、底径13cmに復元される。底部に、荷重による粘土の歪みはみられない。また、底部調整も行われていない。焼成はみな土師質で、灰白色~浅黄橙色を呈する。胎土に3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・シャモットを含むが、雲母はきわめて微量である。ハケメの密度は6・7条/cmである。

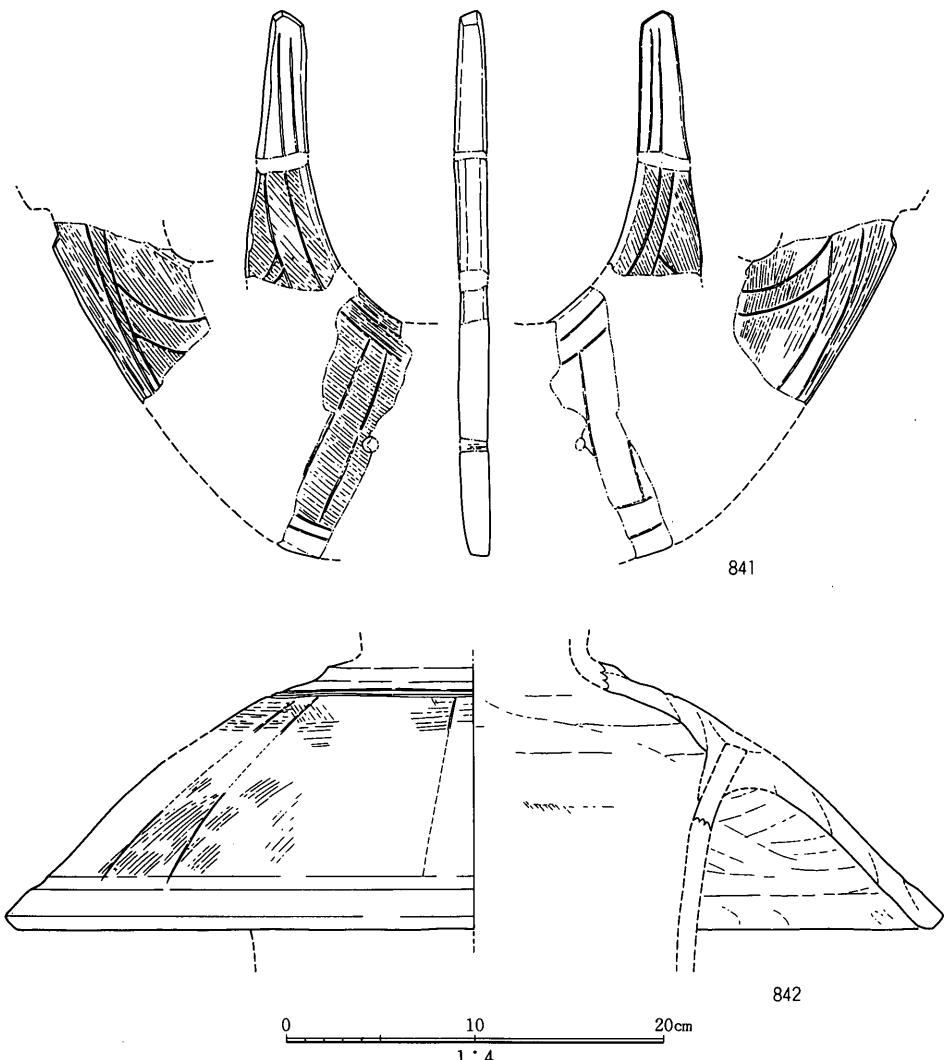


図153 142号墳出土衣蓋形埴輪

朝顔形埴輪 口縁部と頸部の境にあるタガの部分840が、周溝内から出土している。タガは擬口縁を利用して作られ、その上方と下方で調整が異なる。すなわち、下方では8条/cmの明瞭なハケ調整がみられるのに対して、上方はユビナデによる調整が主となっている。焼成は土師質で、色調は淡黄色である。胎土に3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・シャモットを含む。

衣蓋形埴輪 立飾り841と笠部842の破片が墳丘上や周溝内から出土している。立飾りの全体像については不明な点が多いが、鰐飾り部分の大きく発達したのであることは確か

である。ハケ調整(7条/cm)を行い、その後、文様を線刻する。内外の側辺に沿った線刻があり、その間を渡す2条一組の線刻が上下2個所に施されている。その上下の線刻をみると、下方のものが直線的なのに対して、上方のものは大きく湾曲している。また、下方の線刻に接して直径1cm弱の孔がある。これは焼成前に片面から穿孔されたものである。一方、笠部は直径50cmに復元され、頸部に低い台形の突帯を、そして肩部に2条一組の線刻を巡らせる。また、笠部外縁にも幅広の突帯をもち、肩部の線刻からその突帯までの間に2条一組になった線刻を放射状に入れる。製作手順としては、まず基底部を作り、笠部接合のためその上端部の内外面にキザミメを入れ、笠部上半部・下半部の順に成形し、突帯接合そして線刻といった具合に進められたと思われる。焼成は土師質で、灰白色をしている。胎土に5mm以下の石英・長石・チャート・シャモットを含む。

4) 奈良時代の遺構と遺物

i) 水田(図154~156、図版23~26)

I~VI区で長原6A層上面の水田が見つかっている。調査地によっては水田作土層が2面に分れるところもあり、そのばあい下層は長原6B層と考えられる。

I区ではSR01~08が検出され、10筆以上の区画が確認された。SR01は東西方向に直線的に延び、約40mにわたって検出された。SR01の東端はSR02という南北方向の畦畔に達している。このSR02は下端幅1.2m、上端幅0.7mという比較的の規模の大きなもので、この畦を挟んで東西の水田面は36cmの比高がある。また、東西方向をとる畦畔SR01に対して、それを越えて南北に走る畦畔SR03・SR06と、それ以上続かない畦畔SR04・SR05の二者が認められる。SR02より西にある水田面の高さは、北側より南側が高く、東側より西側が高いという関係になっている。

II区ではSR09~22が見つかっている。同区には古墳が存在するために畦畔の状況はI区に比べるとやや複雑である。東西方向の畦畔としてSR09・10があるが、どちらも正東西方向をとらず、南や北に振れ、弧状を呈する部分もある。それとは対照的に南北方向の畦畔には正方位方向となっているものが多くみられる。しかし、中にはSR11のように北で西に20°振れているものもある。SR15・16は132号墳、SR10・22は131号墳のそれぞれのコーナーに取付いている。また、SR10とSR19の交わる付近、SR10とSR20の交わる付近に水口がみられた。この位置は、水口を介して隣り合う二つの水田面のうち上位の一筆の北東コーナーに当っている。全体として北東方向に向って低くなる水田面のレベルから、

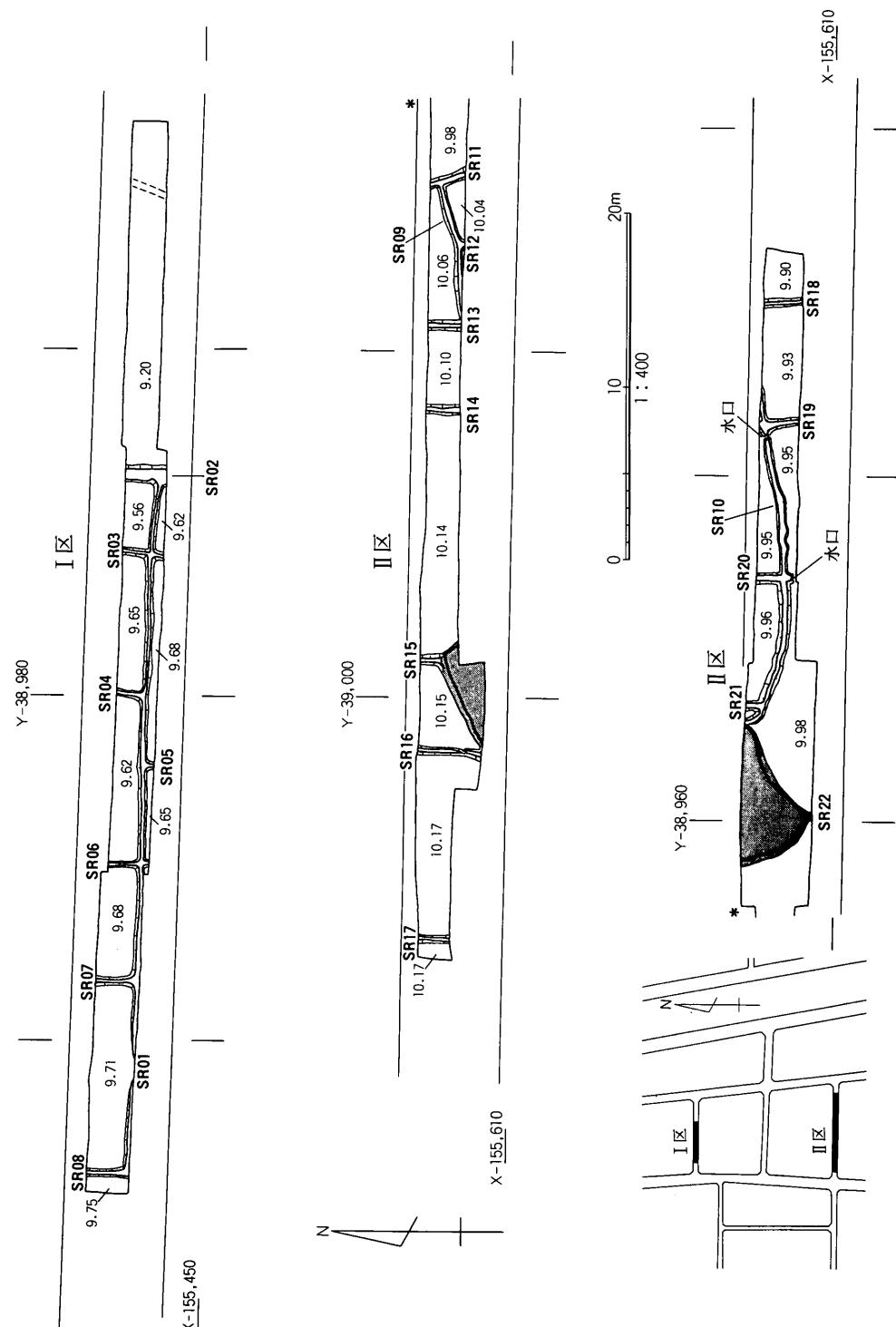


図154 I・II区 6A層上面遺構 (数値は上面の標高m)

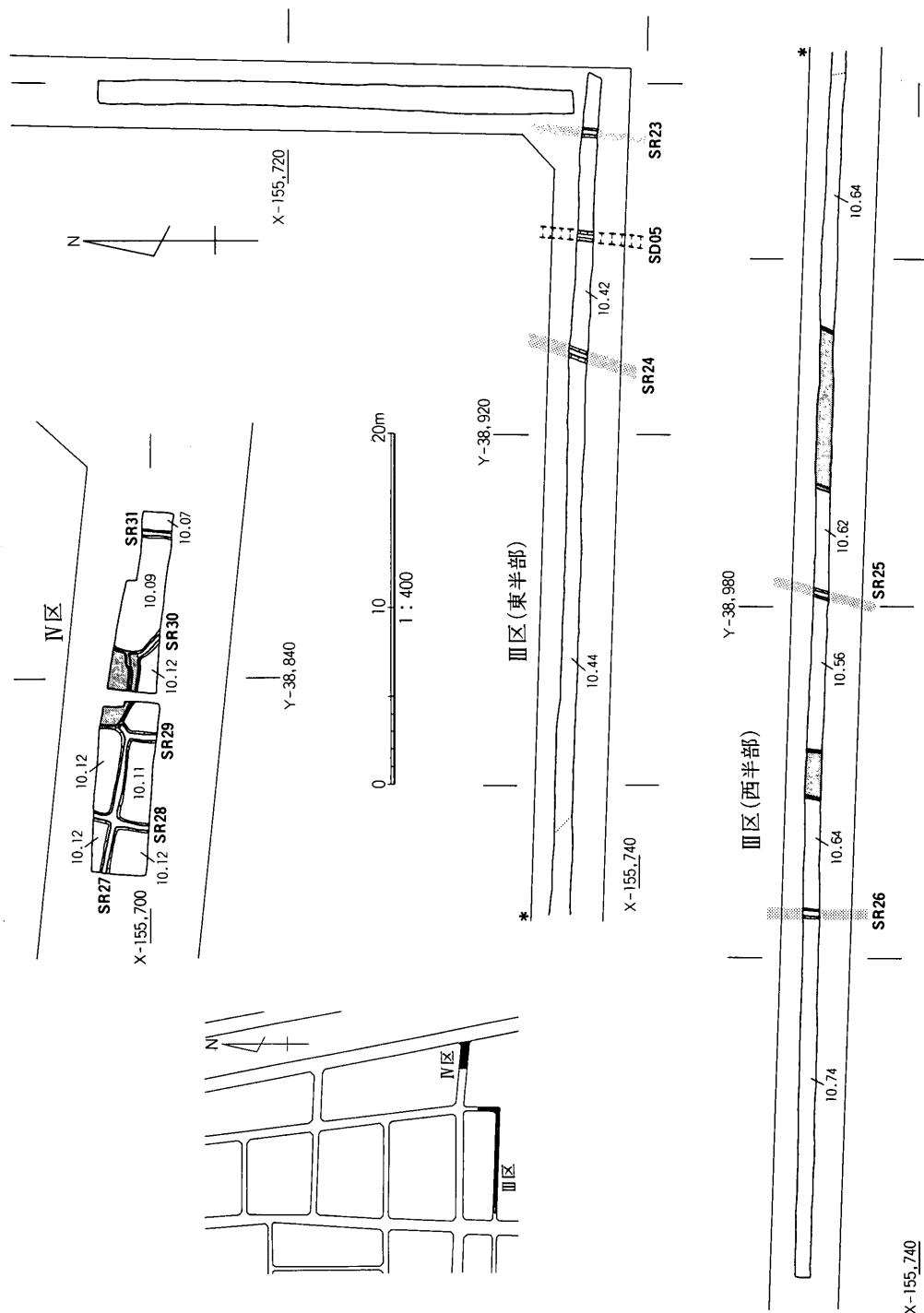


図155 III・IV区 6A層上面遺構（数値は上面の標高m）

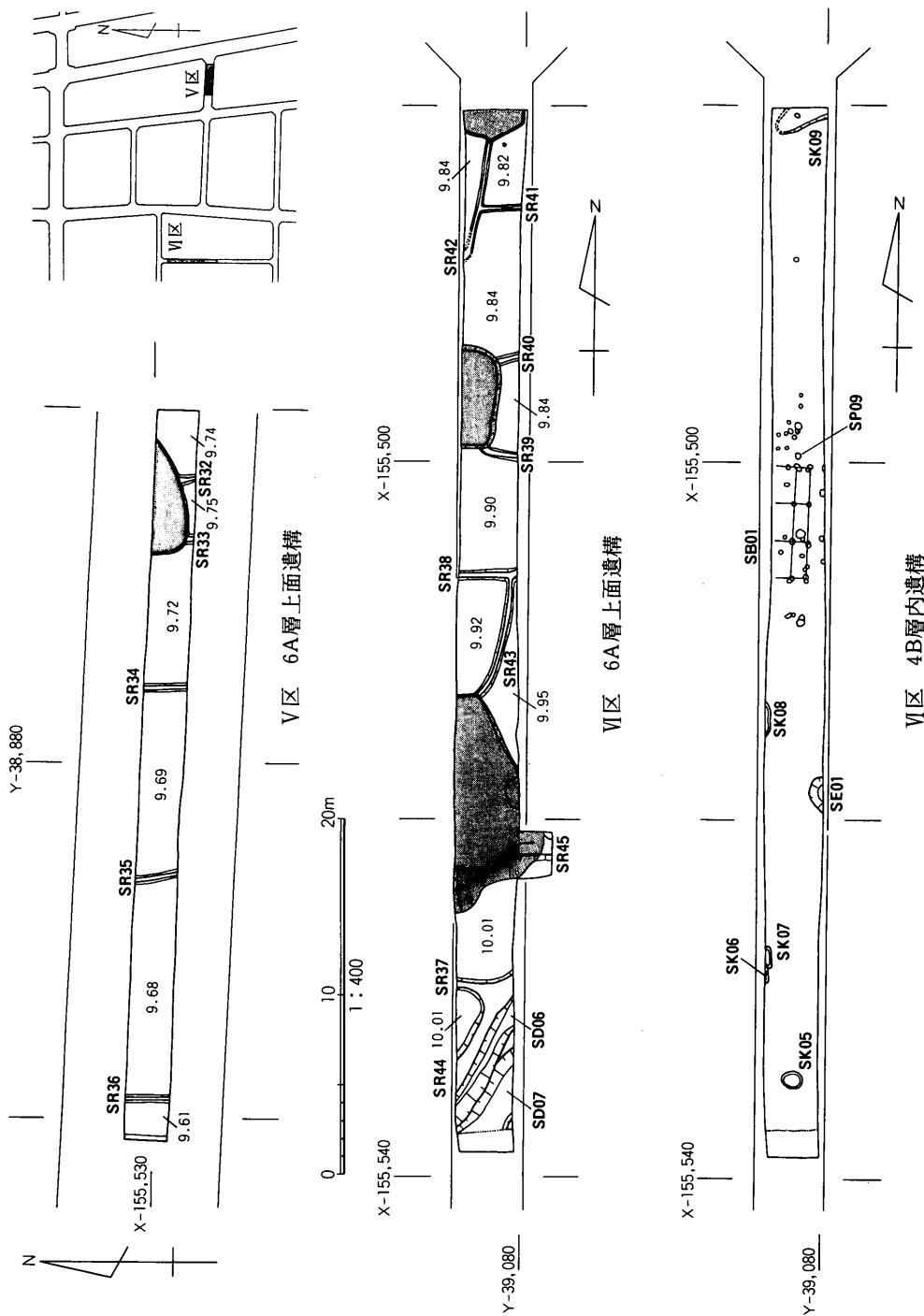


図156 V・VI区 6A層上面遺構、VI区 4B層内遺構（数値は上面の標高m）

この位置に水口が設けられることになったのであろう。

Ⅲ区ではSR23～26という南北方向の畦畔を検出した。59号墳・135号墳の墳丘は削平されていたが、136号墳と137号墳の墳丘は水田面より高く、島状の高まりのような状況で残っていた。水田面のレベルは西から東に向って低くなっている。南北方向のトレンチでは、長原4B層による下方侵食により、畦畔が検出されていないばかりか、水田面のレベルも明らかでない。

Ⅳ区にはSR27～31があり、合計7筆分の区画がみられる。SR28・29・31は南北方向、SR27は東西方向で、東端が134号墳のコーナーに取付いている。SR30も134号墳のコーナーに接続する畦畔である。正方位をとらず、北西—南東方向に延びる。水田面のレベルは西よりも東が若干低くなっている。

Ⅴ区では南北方向の畦畔が5本検出されている(SR32～36)。トレンチ東端部に133号墳があり、SR32・33はそれに取付く畦畔である。そのためか、この2本の間隔は3.3mと、非常に狭くなっている。Ⅴ区の水田面のレベルをみると、その他の調査地とは逆に東から西に低くなっていることが注意される。SR34・36は正南北方向をとるが、SR35は北でわずかに西に振れている。

Ⅵ区ではSR37～45の9本の畦畔が見つかっている。南北方向のものにSR42～44があるが、どれも正南北方向をとっていない。これは南北方向に古墳が3基連なり、また南端部に北東—南西方向のSD06があるためであろう。その一方で正東西方向をとるもののがいくつもある(SR37・38・41)。SR39・40は141号墳、SR43・45は142号墳の墳丘コーナーに取付いている。SR42は140号墳の墳丘の一辺に繋がっている。SR44は上端幅0.8mという規模をもち、SD06の肩にある。堤としての機能も果したと思われる。水田面のレベルは南から北へ低くなっている。

ii) 溝

SD03はⅠ区西半部にある長原6B層下面の溝である(図107・157)。北で50°東に振れており、3.5mにわたって検出した。幅1.1m、深さ約30cmである。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。この溝の西側に、いくつかの踏込みが同一検出面で見つかっている。また、Ⅱ区においても類似する溝や

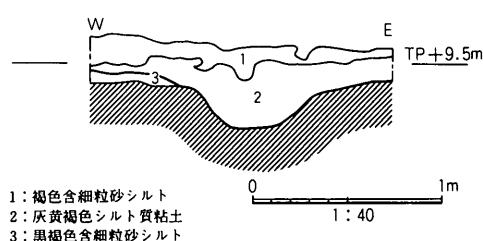


図157 SD03断面図 (I区)

踏込みを確認している(図107)。

SD04はⅢ区東西トレンチの西半部分にある長原6A層下面の溝である。137号墳の東周溝の一部を切込んでいる(図108・142)。幅1m弱、深さ10cm程度である。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトである。

SD05はⅢ区東西トレンチの東端付近にある(図155)。SR23とSR24の中間に位置し、幅65cm、深さ12cmの南北方向の溝である。長原5層の粗砂によって埋没している。

SD06・07はVI区の南端部にあり、南西—北東方向に併走する溝である(図156、図版26)。北側のSD06の肩部に、堤と水田畦畔を兼ねたSR44がある。幅1.3m、深さ0.8mの規模をもち、灌漑用の水路と考えられる。一方、SD07は2m程度の幅をもつが、深さが0.2mという浅い溝である。この溝は人工のものではなく、SD06を埋没させた長原5層の砂礫の侵食によるものであろう。SD06からは木杭844が出土している。

iii) 遺物(図158・159)

金属製品 843はV区の長原5層中から出土した

鋤先である。側縁部のみを残す。厚さ4mm程度の鉄板を折り曲げて側縁部を作っている。側縁上部が直線的であるのに対し、下部はやや内湾ぎみになる。残存長12cm、木質の遺存は認められない。

木製品 844はVI区のSD06から出土した木杭である。枝を打ち払い、先端を楔状に加工している。頭部を欠き、本来の長さは不明である。直

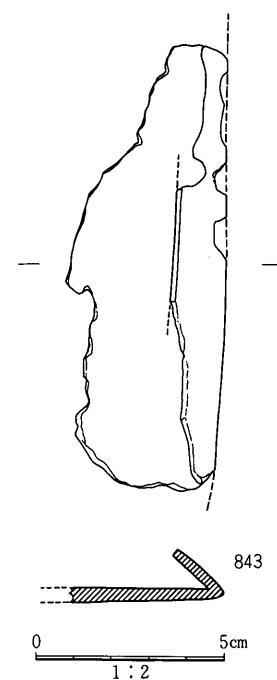


図158 V区出土鋤先

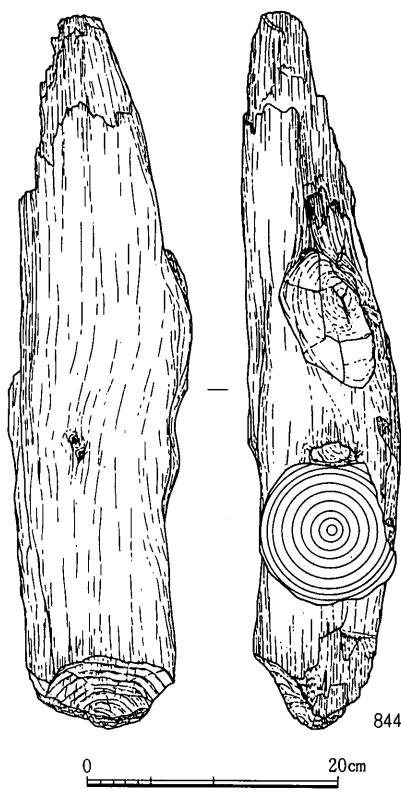


図159 VI区SD06出土木杭

径は12cm程度である。樹種はマツ科に属する。なお、樹皮は残っていなかった。

5) 平安時代以降の遺構と遺物

i) 掘立柱建物(図156・160、図版27)

VI区中央部付近にSB01がある。これは南北棟の建物と思われ、桁行3間(6.3m)、梁行1間以上の身舎の東に庇を備えている。柱穴は直径30~40cmの円形もしくは楕円形で、庇側の深さ(SP05~08: 15~20cm)と身舎側の深さ(SP01~04: 20~50cm)とに差がみられる。桁行の1間は2.1m(7尺)を測り、庇の出は0.9m(3尺)である。棟方位はN2°Eに復元できる。黒色土器B類碗などが柱穴から出土している。

ii) 井戸・土壙(図156・161)

VI区にSE01、SK05~09がある。これらは長原4B層内ないし4B層下面の遺構である。そのうちSK08からは遺物がややまとまって出土している。

SE01はSB01の南12mの東壁沿いにあり、西半部分が検出されている。直径約2mで、深

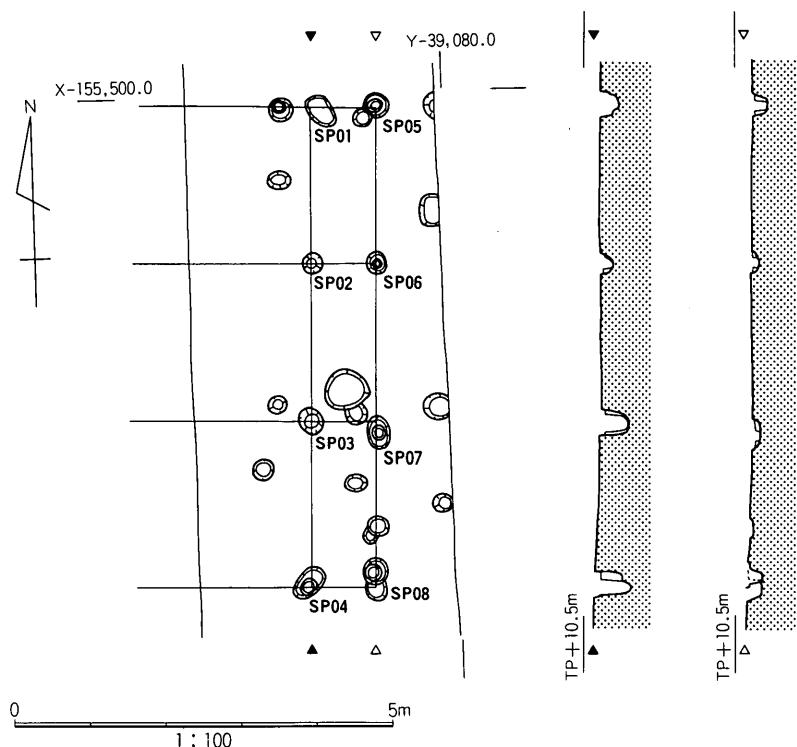


図160 SB01実測図 (VI区)

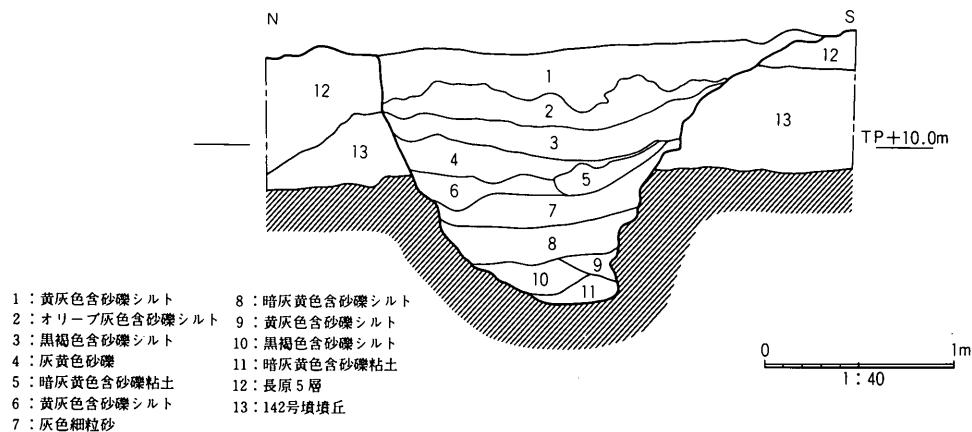


図161 SE01断面図（VI区）

さは1.4m以上である。この場所は142号墳の墳丘肩部に当っており、掘形は墳丘を掘抜いて、長原13・14層にまで達している。調査範囲内では井戸側の存在は確認されておらず、断面観察した部分が裏込めに当るものか、廃絶時の埋戻しであるかも明らかでない。

SK05は調査地の南端付近にあり、直径1m強の円形で、深さ約10cmの土壌である。SK06・07はSK05の北6mの西壁ぎわにある。検出した長さは、ともに1mほどであり、深さは約10cmである。SK08も西壁ぎわに見つかった。SE01の北3mほどの場所にあり、検出長2m、深さが25cm以上になる。土師器・黒色土器などを出土しており、規模などから井戸の可能性も考えられる。SK09はトレンチ北端にあり、長さ3m以上、幅1.5m以上、深さ約10cmである。浅い溝の一部分であるかもしれない。

iii) 水田(図162)

長原4B層上面に検出される遺構で、直上を覆う水成層の長原4A層が良好に残る限られた場所で見つかっている。

Ⅱ区では、その西端部で畦畔SR46が検出された。SR46は正南北方向をとっており、その東側には小溝群、西側にはSD08が見つかっている。SD08は幅0.7m、深さ5cmの東西方向の溝である。

Ⅳ区では2条の畦畔が見つかった。SR47は正東西方向、SR48は正南北方向をとる。SR48には水口と思われる部分も確認されている。

iv) 遺物

Ⅵ区の長原4B層層準の遺構や包含層の出土遺物を取上げて説明する。また、以下の器種分類や時期区分は長原遺跡の平安時代の土器編年[佐藤隆1992]に準拠した(表3)。

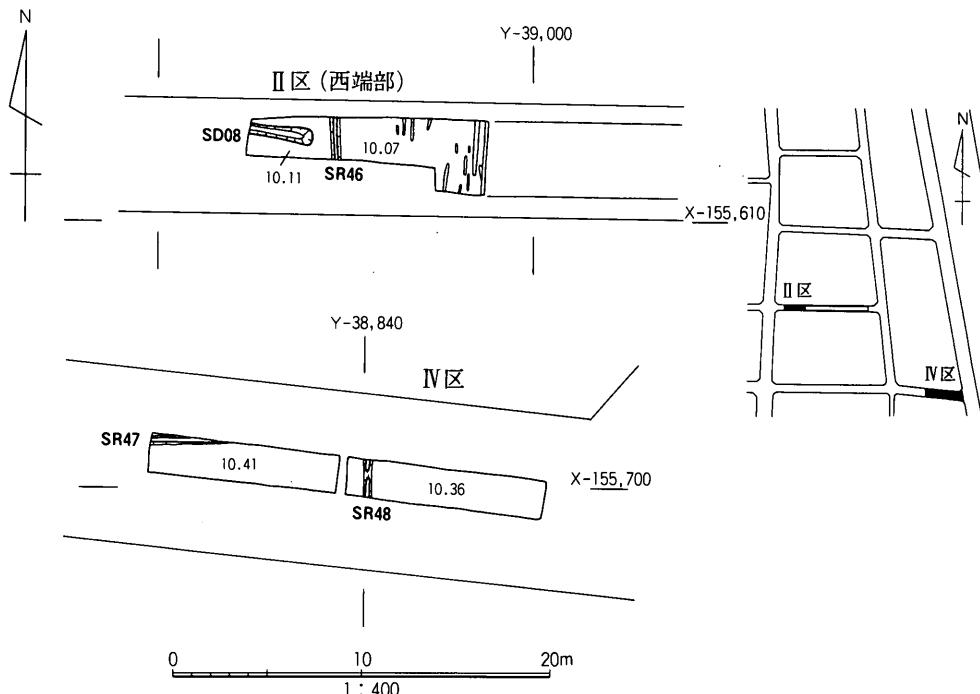


図162 II・IV区 4B層上面遺構 (数値は上面の標高m)

ピット・土壤出土遺物(図163、図版83・84)

845～848は土師器小皿Cで、口径9.5～10.0cm、器高1.4～1.8cmである。いずれも口縁部を外方に折り曲げる特徴をもち、846～848はさらにその端部をつまみ上げている。845・846は精良な胎土で、石英やシャモットを微量に含む程度である。847・848は3mm以下の石英・長石を含んでいる。灰白色～灰黄色をしている。

849・850は土師器皿Dである。内面と口縁部付近の外面をナデ調整するが、体部から底部の外面にはユビオサエの痕が残る。849は口径15.4cm、器高4.0cmで、850は口径16.0cm、器高3.6cmである。850は精良な胎土であるが、849には5mm以下の石英・チャートがみられる。これらの器表も灰白色～灰黄色である。

851は大きく外方へふんばる高台をもつ黒色土器A類である。大型の椀または鉢と考えられ、平坦な底部をもち、その内面がヘラミガキされている。高台径9.6cmである。5mm以下の石英・長石などを含み、やや粗い胎土である。

852・853は黒色土器B類椀である。852は口径15.8cm、器高5.7cmである。853は口径14.8cmであるが、底部を欠いており、器高は不明である。853は口縁部外面に強いヨコナデが施

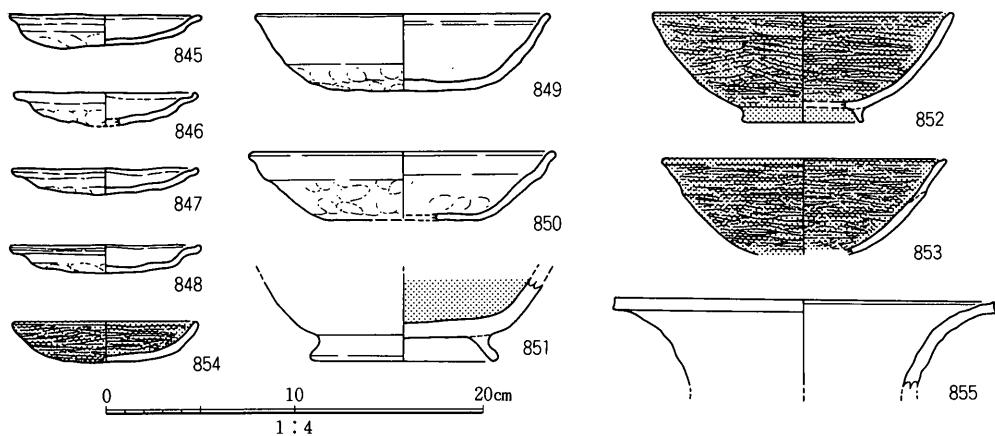


図163 VI区ピット・土壤出土遺物

SP02 (846) SP03 (847) SP04 (848・850) SP05 (845・851・852・854) SP09 (853) SK08 (849・855)

されている。どちらも内外面に稠密なヘラミガキが行われており、胎土には5mm以下のチャート・長石がみられる。

854は黒色土器B類の小皿である。口径9.6cm、器高2.2cmである。内外面に稠密なヘラミガキを行う。2mm以下の石英・長石を多く含む。

855は須恵器壺の口縁部である。内外面ともヨコナデ調整されており、口縁端部をわずかに上方につまみ上げ、浅く凹んだ端面を作っている。口径18.3cmで、胎土に2mm以下の長石を微量に含む。

846はSP02、847はSP03、848・850はSP04、845・851・852・854はSP05、853はSP09、849・855はSK08からそれぞれ出土したものである。これらの遺物は平安時代Ⅲ期に属するものと考えられる。ただし、855はそれよりも若干先行するものと思われる。

SB01周辺の出土遺物(図164・165、図版83・84)

856～861は土師器小皿である。深浅により2種に大別できる。856・857は深めの皿である。856は口径9.3cm、器高2.1cmで、口縁部の内側を溝状に凹ませる。857は口径9.0cm、器高1.9cmである。ともに3mm以下の石英・長石などを含み、橙色を呈する。一方、858～861は浅い皿で、口縁部を外方に大きく折り曲げ、その端部を上方につまみ上げた小皿Cである。これらは口径9.4～10.0cm、器高0.7～1.7cmの範囲にあり、860は中でも器高が低い。858～860は胎土に3mm以下の石英・長石などを含み、橙色～にぶい黄橙色をしているのに対し、861はきわめて精良な胎土で、灰白色をしている。

862～865は土師器皿Dである。平坦な底部をもち、外上方に直線的に延びる口縁部をも

つ。これらの皿は口径15.4~16.0cm、器高3.1~4.2cmで、ある程度の規格性がうかがえる。胎土には5mm以下のチャート・石英が含まれ、みな灰白色をしている。

866は土師器椀で、内外面にヘラミガキを施す。体部下方は直線的に延び、上方が大きく内湾する。口径15.3cm、器高5.1cmで、3mm以下のチャート・石英を含み、橙色を呈する。

867は高台付きの土師器皿で、浅黄橙色をしている。高台はやや高めで、全体にていねいな作りである。口径9.0cm、器高3.1cmで、5mm以下のチャート・長石を含む。

868・869は三足付きの土師器皿で、綠釉陶器の三足盤を写した器形である。どちらも皿部がきわめて浅いという点では共通しているが、口縁部や脚部の形態を異にする。色調も、868が浅黄橙色であるのに対して、869は灰白色である。口径は、前者が11.6cm、後者が12.2cmである。器高はともに2.7cmである。どちらも胎土中に3mm以下の石英・長石を含む。

870は土師器の鉢で、大きく外方にふんばる高台を有する。口縁部は緩やかに外反し、端部を上方につまみ上げている。口径23.7cm、器高9.0cmで、胎土中に5mm以下のチャート・石英などを含む。浅黄橙色をしている。

871は灰褐色をした土師質羽釜、872は鍋などの把手である。871はヨコナデによって浅く凹んだ口縁端部をもち、5mm以下の石英・長石を多く含む。872は下層の遺物が混入したものであろう。

873・874は黒色土器B類の小皿で、ともに口径10cm弱、器高2cm強である。前者の底部が広い平坦面をもつのに対して、後者の底部は丸みをもつ。875・876は黒色土器A類椀、877・878は黒色土器B類椀である。いずれも内外面に稠密なヘラミガキが施されており、口径14.9~15.4cm、器高5.4~6.5cmである。879は黒色土器A類の鉢で、底部のみを残す。880は黒色土器A類の椀または皿の底部で、高台の内側にさらに高台状の突帯を付けている。以上の黒色土器には、3mm以下の石英・長石が胎土に含まれる。

881は須恵器の鉢で、口縁部が斜め上方に直線的に延びている。5mm以下の長石や黒色粒を多く含む。882は須恵器杯蓋、883は灰釉陶器の杯である。882は下層の遺物が混入したものと思われる。

884・885は玉縁状の口縁部をもつ白磁碗である。886は青磁碗の底部で、見込部分が露胎となっている。細くて低い高台をもつ。

887は平瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕とともに斜方向の粗いハケメがある。

888は金属製容器の口縁部である。口径約15cmに復元される。体部は0.25mm程度の厚さで、口縁端部は1.45mmと、やや厚くなっている。この金属製容器については成瀬正和氏(宮

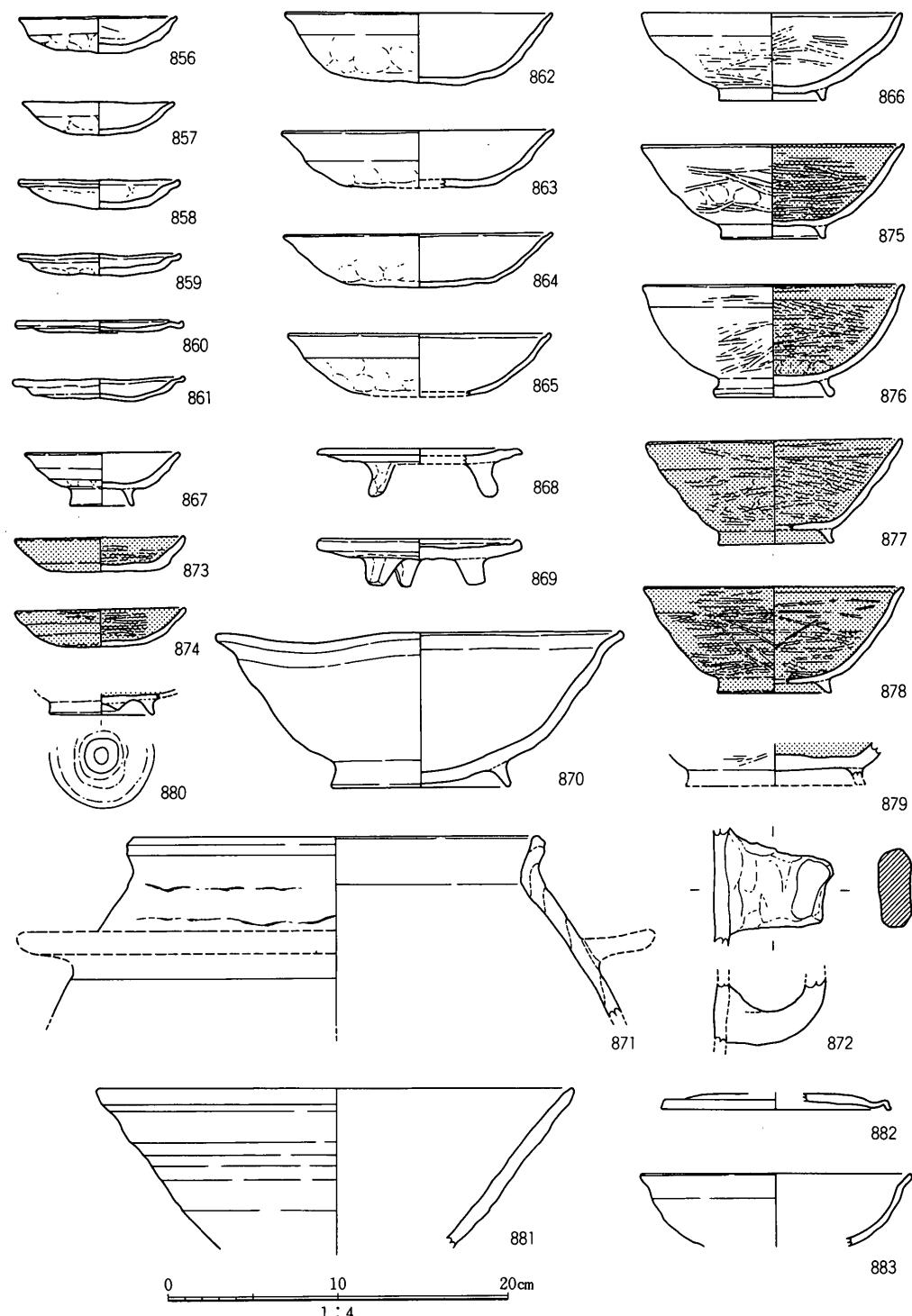


図164 VI区SB01周辺出土遺物（1）

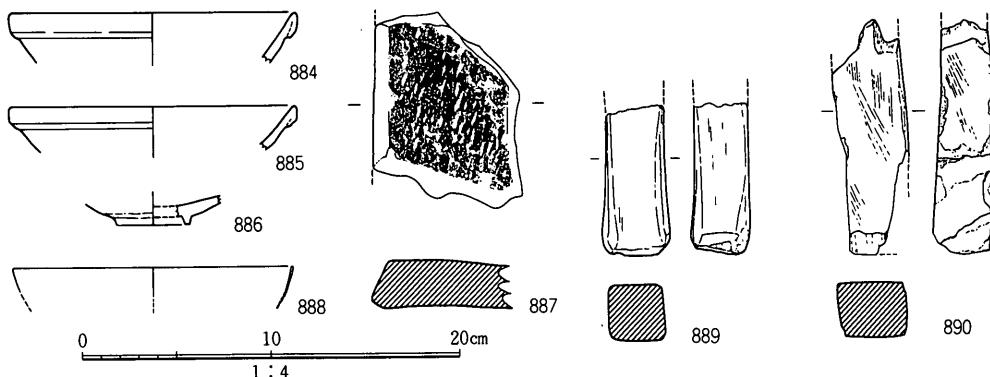


図165 VI区SB01周辺出土遺物（2）

内庁正倉院事務所)に分析を依頼し、その結果を本書第Ⅲ章に報告していただいている。

889・890は砥石である。889は砂岩製と思われ、方柱状を呈している。小口を除く各面がよく使用されている。890は流紋岩製で、方柱状をしている。小口を除く4面のうち、石理に対し直交する2面がよく使用されている。

以上の遺物のうち土師器・黒色土器に関しては、一部の混入品を除いて、平安時代Ⅲ期からⅣ期の古段階と考えられる。

6) 小結

今回報告した遺構の中でもっとも古くさかのぼるものは、NG85-64次調査のSD02であった(図8)。出土遺物はなかったものの、その埋土は長原8A層あるいは8C層で、弥生時代中期の遺構と考えられた。等高線に沿って掘削された人工の水路と思われる。南地区において、この時期の水田址はまだ確かめられていないが、かつて存在していたことを推測させる。続いて、古墳時代の遺構として11基の古墳を報告した(別表1)。出土した須恵器はTK216型式～TK47型式、いずれも小型の方墳とみられるものであった。また、59号墳と135号墳の墳丘下に、長原7B層を埋土とするピットがいくつか検出された。しかし、狭いトレンチ調査ではその意味を明らかにすることはできなかった。今後、周辺で行われる調査に期待したい。奈良時代の水田址は、長原6A層上面で良好に検出された。これは、直上の長原5層という水成層によって具合よく覆われていたためである。しかし、長原6B層や7A層段階の水田址については、上面を覆う水成層が十分でなく、明確な状況を知ることができなかった。平安時代の遺構としては、VI区に掘立柱建物や井戸などを確認した。この位置は、条里地割の7条4里32坪に当っており、地割に則した屋敷地の存在をうかが

わせる。

以下、今回の調査成果の意義と今後の課題を述べ、まとめとしたい。

i) 古墳群の構造

長原古墳群の全貌は厚い地層の下にある。しかし、これまでに調査した200基の古墳から、その全体像をある程度浮かび上がらせるることは可能であろう。古墳群の中心部は、地下鉄長原駅と川辺小学校を結んだ直径0.8kmの範囲にあると考えられる。そして、中心部から離れ、地下鉄出戸駅周辺、長吉出戸7丁目付近、長吉川辺3丁目付近などにはそれぞれ支群がある。本節に報告した古墳は、古墳群の中心部に属しており、ここではその部分の状況についてみていくことにする。

図166に、古墳群中心部の状況を模式的に示した。凡例にあるように、須恵器出現前の古墳、TK73型式～TK208型式の須恵器を伴うもの、TK23型式・TK47型式の須恵器を伴うもの、MT15型式以降の須恵器を伴うものの4段階に区分し、時期の判明しないものは除外した。

まず、東端部に直径55mの円墳、塚ノ本古墳が現われる。やや遅れて、同じく円墳で直径47mの規模をもつ一ヶ塚古墳が西端部に造られる。この2基は古墳群形成の契機となった盟主墳といえる。塚ノ本の外堤上には埴輪棺による埋葬が行われ、一ヶ塚の外堤部には小方墳の196号墳が造られる。それに続くTK73型式～TK208型式の須恵器を伴う古墳は、一辺10m前後の小方墳がほとんどである。その小方墳の分布をみると次の3形態がある。①盟主墳の周囲を巡るもの。この状況は塚ノ本の周囲によく現われているが、一ヶ塚の東部においてもそうした状況がうかがえる。②同時期の古墳が集中するもの。図中のa群やb群をさす。③散在的に分布するもの。この状況は図の中央部付近にみることができる。その後のTK23型式・TK47型式の須恵器を伴う古墳もほとんどが小方墳で、その分布も前段階とよく似ている。そして、こちらでは分布形態②のケースとしてc群やd群を抽出することができる。最後にMT15型式以降の須恵器を伴う古墳として、帆立貝形の前方後円墳、七ノ坪古墳と南口古墳が現われる。前者の墳丘長が24m、後者が25mで、近似した規模であることが注目される。

本書に報告した古墳は、TK216型式～TK47型式の須恵器を伴うもので、みな小方墳と考えられるものであった。分布は散在的であり、③の形態に当る。小方墳の分布形態①のばあい、これは過去の首長との結び付きの強さを示していると考えてよいだろう。また②のばあいは、等質的な被葬者集団間の結束が示されている。すると③のばあいは、過去の

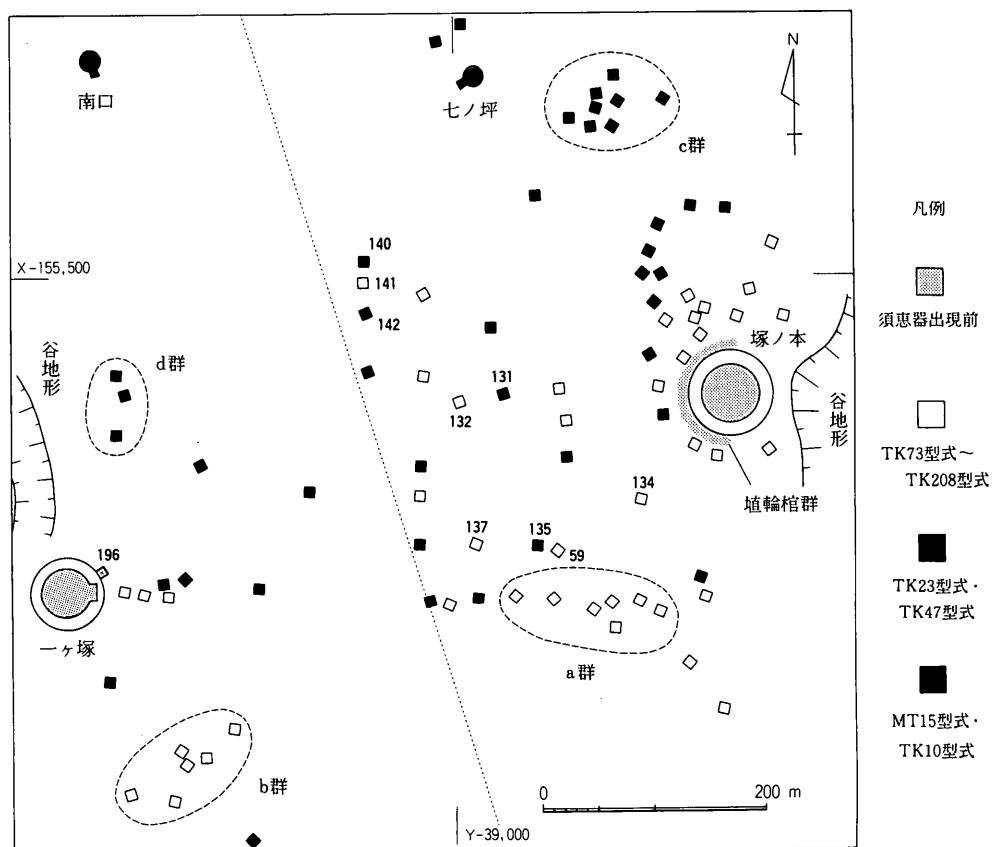


図166 古墳分布状況模式図 (数字は古墳番号)

首長との関係も希薄で、集団としての結束力も弱いグループとも捉えることができる。本書報告の古墳の被葬者は、いくつかの独立した小集団(一世帯程度の集団)が、すでに存在したより大きな集団の中に新たに組織化されたものであったのだろうか。今後も検討を重ねるべき課題の一つとして挙げられる。

さて、塚ノ本と一ヶ塚、七ノ坪と南口はそれぞれの時期の首長墳と思われる古墳であった。その間の時期の首長墳の所在については現在のところ不明である。しかし、それらを立地・墳形・規模から比較してみると良好な対応関係をなしていることがわかる。このことから、長原古墳群の中心部が東西に対称的な構造をもっているという見方もできよう。仮に、塚ノ本と一ヶ塚を結ぶ直線に対する垂直二等分線を引いてみると(図中破線)。すると、その線からほぼ等距離に、七ノ坪と南口が位置する。また、a群とb群も線を挟んで対称的に存在し、さらにc群とd群も同様な位置である。このように、各時期を通して古墳の分布に対称関係を想定しうることから、長原古墳群の中央部が東西の2グループから構

成されているというモデルを考えることもできるだろう。

いまだ未調査部分も多く、区画整理関係の道路部分の調査では古墳が列状に検出されることになるため、分布状況を考察するには問題点も多い。今後の調査で修正が加えられる点もあると思われるが、一つのモデルとして呈示しておきたい。

ii) 131号墳の遺物とその出土状況

131号墳からは土師器・須恵器・埴輪が出土した。埴輪には円筒・朝顔・盾・韌・人物・馬といった種類があり、長原古墳群のこの時期の古墳としては豊富な内容をもっている。その中の円筒埴輪には焼成時に焼け歪んだものが多数含まれ、また、基部の製作方法にも特色がみられた。馬形埴輪の形態も近畿地方ではこれまで類例の知られていないものであった。この馬形埴輪については第Ⅲ章で考察を行っている。さらに、これらの埴輪群については、本来の配置状況をある程度復元することができた。そのため、ここでは以下の3点について整理しておく。

歪んだ埴輪について

これまで、長原古墳群の埴輪の中にもいくらか歪んでいる例は知られていた。たとえば、長原61・76・84号の須恵質の埴輪にそうしたものがある。しかし、131号墳の埴輪には、横断面が楕円形になるものや、それ以上に潰れたものがあり、歪みの度合いが著しい。このように歪んだ埴輪は、須恵質あるいは半須恵質に焼成されており、焼成時の火廻りの加減によって偶然に作り出されたものと思われる。しかし、意図的に作られたとする報文もあり、注意される(註1)。

さて、問題はこうした歪んだ埴輪を墳丘に樹立した理由である。これらが意図的に作られたものなら、別段それが用いられるに疑問はないが、偶然にできあがったものなら、不良品を使用していることになる。類例を当ってみると、表11に掲げるもののほか、その他にもいくつかの古墳で歪んだ埴輪を用いていることがわかった(註2)。それによると、古墳の規模や墳形から、必ずしも小規模な円墳や方墳に限って歪んだ埴輪が用いられているのではないこと、また、小型の埴輪だけでなく中型の埴輪にも歪んだものがあることがわかる。埴輪の配列状況の知られる和歌山県大谷古墳の例をみると、歪んだ埴輪と通常のものとで、特に配列上の区別はなされていなかった。131号墳のばあいも同様な扱いがされていた。

歪んだ埴輪を意図的に製作したものと考える立場の根拠には、器表にヒビ割れがみられないことが挙げられているが、京都府堀切7号墳の埴輪は口縁部から底部まで裂けたもの

表11 歪んだ円筒埴輪出土古墳

古墳名	所在地	墳形	規模	埴輪器高	文献
立山山8号墳	福岡県八女市	円墳	29m	約65cm	八市教育委員会1983
立山山9号墳	福岡県八女市	円墳	18m	—	同上
古曾志大谷1号墳	島根県松江市	前方後方墳	46m	約30cm	島根県教育委員会1989
縁岩古墳	広島県三次市	円墳	20m	約45cm	広島県教育委員会1983
三島神社古墳	愛媛県松山市	前方後円墳	45m	約50cm	松山市教育委員会1972
船宮古墳	兵庫県朝来郡朝来町	前方後円墳	83m	—	朝来町教育委員会1990
大谷古墳	和歌山県和歌山市	前方後円墳	70m	約45cm	樋口隆康・西谷真治・小野山節1985
経塚古墳	大阪府堺市	前方後円墳	55m	約55cm	吉田恵二1973
大芝古墳	大阪府堺市	前方後円墳	30m	—	大阪府教育委員会1988
伏尾遺跡41-OG	大阪府堺市	方墳	11m	約40cm	大阪府埋蔵文化財協会1990
葛井寺1号墳	大阪府藤井寺市	円墳	10m	—	藤井寺市教育委員会1989
長原131号墳	大阪府大阪市	方墳	10m	約40cm	本書
堀切7号墳	京都府綾喜郡田辺町	円墳	15m	約50cm	田辺町教育委員会1989
上人ヶ平9号墳	京都府相楽郡木津町	方墳	11m	—	京都府埋蔵文化財調査研究センター1991
青谷石神1号墳	京都府城陽市	前方後円墳	37m	—	梶本敏三1986
八龍塚古墳	栃木県河内郡上三川町	前方後円墳	42m	—	しもつけ風土記の丘資料館1988

であった。これは窯体内の熱作用によるものだろうが、これまでも意図して作ったといえるだろうか。もし、歪んだ埴輪を意図的に作ろうとすれば、焼成時の破損率は普通に焼くよりも格段に高くなるであろう。さらに、先に述べた埴輪の配列状況をみても、特に歪んだ埴輪を意識した並べ方をしているわけではないかった。以上の点から、歪んだ埴輪は意図的に作られたものではなく、工人にとって不本意な作品であったと考えられる。

それならば墳丘への樹立に当って、このように歪んだ不良品を排除することよりも、個体数を確保することが優先されたのにはどのような実態があったのだろうか。一つには、樹立予定数と製作個体数がほぼ同数で、多少の歪みには目をつぶらなければ、必要な数を揃えられなかつたことが考えられる。ここで、樹立予定数がどこまで厳密に決められていたのかが問題となるが、ある程度の予測なしには材料や燃料の準備も行えなかつたはずである。また、樹立予定数を基準にその作業に割り当てられた時間や労力の枠がすでにあつたことも考えられる。そのため、予定した数の埴輪が歪みなく焼き上がるまで、この作業を継続するようなわけには行かなかつたのであろう。以上のような状況は、專業的な工房にはむしろ想定しがたいことともいえよう。歪んだ埴輪を用いた経緯には、埴輪生産の実

態に係わる問題が含まれていると思われる。

円筒埴輪の製作方法

まず、埴輪の概要を述べる。口縁部や基底部も1段として数えると、全体で4段のものと5段のものがある。器高は40.0～45.5cmで、小型の中でもやや大きい。外面調整はタテハケ一次調整のみ、内面はユビナデ・ユビオサエ、口縁部付近に斜方向のナデが施されている。スカシ孔は円形で、口縁部と基底部を除く各段の対向位置に穿孔される。タガは低いM字形のものが多い。須恵質で褐灰色のものから土師質で灰白色を呈するものまでがある。

以上のような特徴をもつ埴輪は、川西宏幸氏の埴輪編年に照らせば、V期に当る。共伴している須恵器がTK23型式・TK47型式であることと、そのことと整合している。しかし、川西氏がこのV期を画する重要な特徴と述べる底部調整が、131号墳の埴輪にはまったくみられない。この埴輪がすべて朝顔形埴輪であるのなら、倒置することができないから底部調整が行われていないことも理解できるが、そうではない。須恵器などからこの古墳とほぼ同時期とみられる大阪府蕃上山古墳・同白鳥1号墳・同輕里4号墳の埴輪には底部調整が行われている(註3)。また、131号墳の埴輪のばあい、底部調整が行われていないからといって、その底部が荷重で潰れているわけでもない。比較的整った形態を保持しており、基部成形後に十分な乾燥時間をとっていたことがわかる。こうしたことから、この古墳の埴輪は、一般的なV期の埴輪とは異なり、基部成形後に乾燥時間をおくV期以前の製作方法を守っており、そのため底部調整が不要であったと考えられる。

底部調整が行われなかつたことから、基部成形段階の状況がよくわかる結果となった。基部は幅6cm程度の粘土帯を巻いて作られており、その粘土帯を作るために、板上に置いた粘土塊を板状の工具や手の掌を使って押さえ付けたと思われる痕跡を観察することができる(註4)。

埴輪の配置と供献土器

図167に、埴輪配置の復元を行つてみた。黒丸が現存または痕跡を確認したもので、白丸の方は推定である。また、網み掛けした丸は須恵器甕である。図の通り、配置が確認できたのは墳丘南コーナーを挟んだ、墳丘南西辺と南東辺の一部である。墳丘南東辺には4本の円筒埴輪が残り、65～80cm間隔で並んでいた。南西辺では7本分の位置がわかり、50～100cm間隔であった。これから推定して、一辺に11本程度、全体で約40本の円筒埴輪が巡らされていたと考えられる。そして、墳丘の各コーナーと各辺の中央には、その他よりも1段分多い5段構成の埴輪を配置していたようである。朝顔形埴輪の破片もあり、墳丘

上のどこかに用いられていたであろうが、その位置は不明である。

円筒埴輪の配置状況について、墳丘の南西辺側の間隔が一定でないことは先にも述べた。それに加えて、ここでの配列が直線的でなく、中央部が内側に湾曲したものであることも注目される。このように配列された理由として、湾曲する埴輪列と墳丘肩部との間にテラス状の空間を設け、そこに形象埴輪を据えようとしたことが考えられる。図167に馬形埴輪の樹立位置を示しているが、その北西側にある埴輪は人物埴輪の基底部と考えられるものであった。この周辺からは、数

個体分の人物埴輪の破片が見つかっており、このテラス状の部分には馬形埴輪や人物埴輪群が配置されていたとみられるのである。その他に盾と韁の埴輪があるが、これらは墳丘中央部に置かれていたのである。

人物や馬の埴輪の置かれた墳丘南西辺の中央には、蓋杯・有蓋高杯・甕・甕といった須恵器が供献されていた。甕の底部は原位置を留めており、底部中央には穿孔がみられた。このような埴輪や須恵器の出土状況は、通常、造出しにみられるものであるから、機能的には同様な役割を担っていたと考えてよいだろう。では、造出しを設けなかった理由、あるいは設けられなかった理由とは何であったのだろう。小古墳の造出しであるから、実際の作業労力上の問題はなかったと思われる。外部から、なんらかの規制を受けたとも考えられるが、断言しうるまでの根拠はない。

これに似た事例として長原187号墳の造出しがある。この造出しへは墳丘の一方のコーナーに偏って設けられており、造出しへには須恵器の甕と家形埴輪が原位置を保っていたが、それらを置く以外にはあまり空きスペースのない狭小なものであった。この古墳からはTK23型式の須恵器が出土しており、131号墳と同じか、若干先行する時期とみられる。このような狭小な造出しじゃ、131号墳例のような造出しだけの空間での祭祀と、一般に認識されている造出しへにおける祭祀との比較検討も今後の課題である。

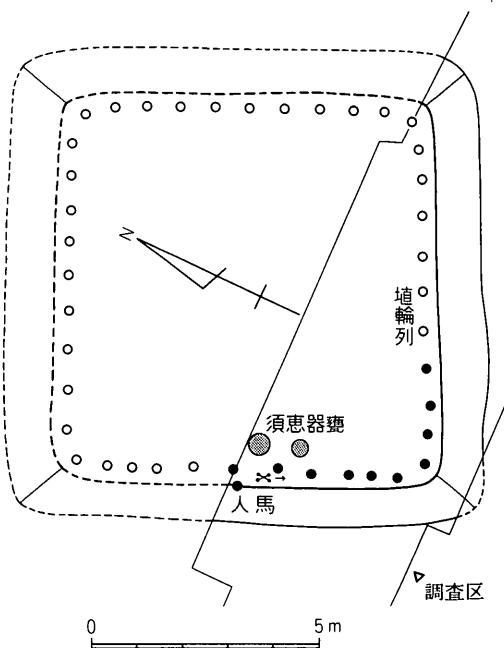


図167 131号墳の埴輪配置

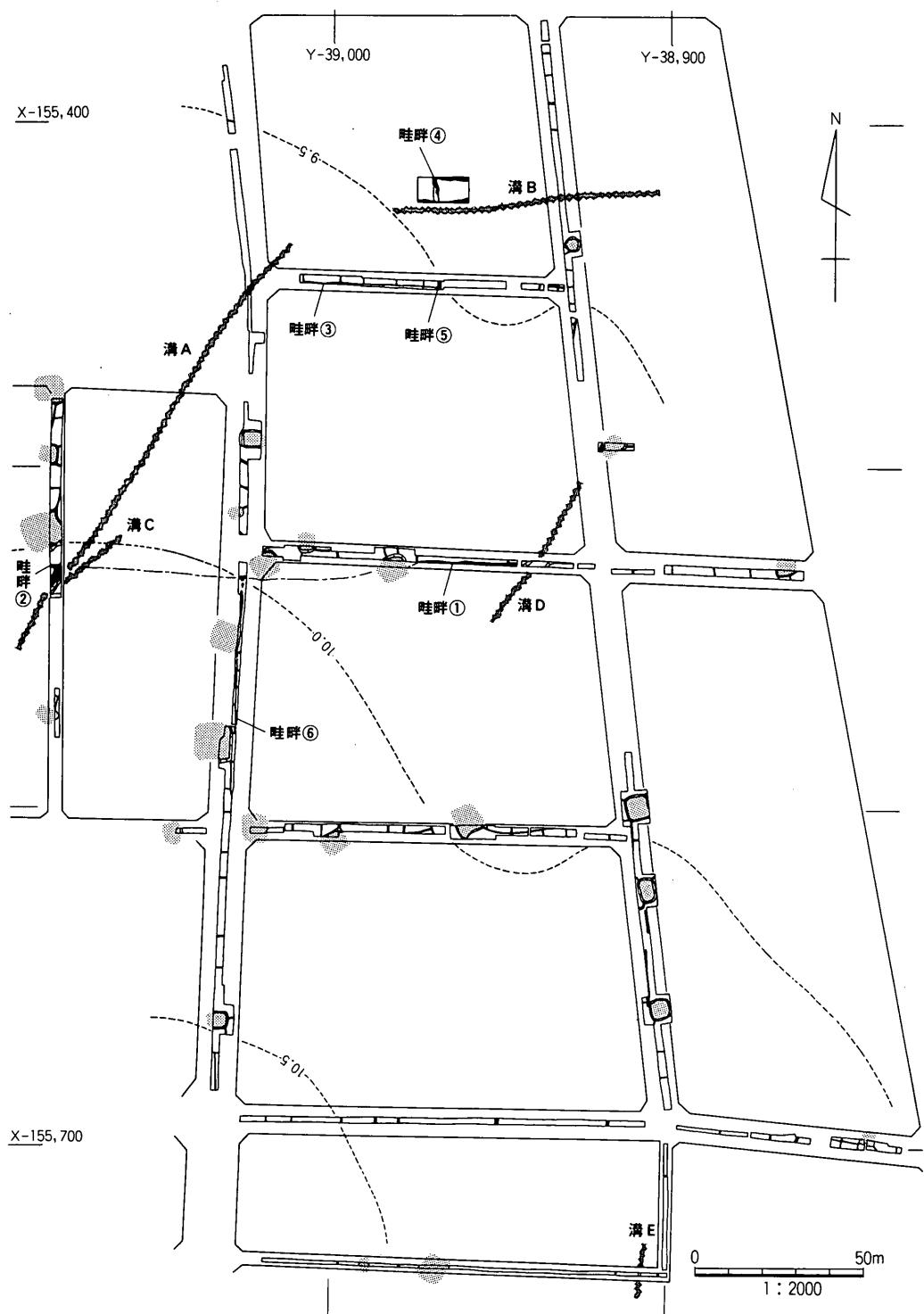


図168 南地区北東部 奈良～平安時代初頭の水田址

iii) 奈良時代の水田について

ここでは長原6A層上面で検出された水田址について整理したい。この6A層の直上を覆う長原5層には、8世紀末～9世紀初頭ごろの遺物が含まれており、厳密には、奈良時代の終盤から平安時代初頭の水田の状況を述べることになる。

図168に、南地区北東部の調査成果をまとめた。多数の溝や畦畔があるため、図中に示した記号を使って説明することにする。

まず、溝としてA～Eがある。溝A・Bは灌漑用水路であるが、その他は洪水による侵食作用によってできた自然流路とみられる。溝Aと溝Bは、位置関係や規模から一連の水路の可能性がある。旧東除川から分岐してきた基幹水路と考えられる。

次に畦畔の状況を述べる。南西から北東に傾斜する地形、古墳の集中地域、という状況の中で畦畔が配置されているため、正東西、正南北方向をとり、かつ連続性を追えるというものは少ない。その中で、畦畔①は東西方向に配され、南北方向の畦畔⑥と接するまでの約85m間にわたって延びると考えられている[積山洋1992]。今回報告したVI区のSR37(図の畦畔②)は、この畦畔①の延長方向にあり、さらに西に向って、この東西線が意識されていることを予測させる。畦畔③も東西方向の畦畔で、畦畔①の北約80mの位置にある。長さ40m以上続いている。南北方向をとるものとしては、先にも述べた畦畔⑥と畦畔④・⑤がある。畦畔⑥は長さ65m以上にわたって延びている。畦畔④・⑤の間には溝Bが横断しているが、直線的に繋がる一連のものであろう。規模もその他の畦畔に比べ大きい。

旧東除川から分岐した基幹水路が地形の傾斜方向に向って流れ、古墳の分布が希薄になったところで東に流れを変える。その一帯では正東西、正南北に配された畦畔をみることができる。しかし、その南部、古墳の集中している辺りでは、正方位方向の畦畔はむしろ劣勢で、墳丘に制約され、またその一部を利用しつつ配置されている。そのため、一筆の面積や形もさまざまなものとなっている。およそこのような景観が奈良時代にみられたと推測される。

(櫻井)

註)

(1)歪んだ埴輪を意図的に作られたものと考える報文に[島根県教育委員会1989]や[藤井寺市教育委員会1987]がある。その理由として「焼き歪み等でみられるひびや割れはまったくみられないこと」をあげている[島根県教育委員会1989 p.151]。また[八女市教育委員会1983]では、歪んだ埴輪を「楕円形埴輪」と呼称し、「普通円筒埴輪」・「朝顔形円筒埴輪」と区別している。

- (2)熊本県金屋塚古墳・島根県奥才1号墳・同陰田35号墳・愛知県本地大塚古墳・大阪府市野山(允恭陵)古墳にも歪んだ埴輪がある。また、大阪府赤子塚古墳にも楕円形を呈する埴輪が用いられていた可能性がある[藤井寺市教育委員会1987]。
- (3)蕃上山古墳の埴輪については大阪府教育委員会泉本知秀氏のご好意により実見することができた。白鳥1号墳・輕里4号墳の埴輪の観察に際しては羽曳野市教育委員会辻葩学氏のお世話になった。記して感謝する。なお、上記3古墳のうち蕃上山と白鳥1号の埴輪の中には、外見上、131号墳のものとよく似たものがみられ、焼成も須恵質で、灰色を呈している。
- (4)基部成形段階の痕跡は152号墳の埴輪にもみることができる。また、大阪府経塚古墳の埴輪に関する吉田恵二氏の記述[吉田恵二1973]に次のようにある。吉田氏が「d類」と分類するものの外面調整の状況として「ハケ目のいたらない部分には幅約5mmの水平方向の凹凸がある」[同上p.38]、その凹凸については「円筒部成形以後ハケ調整以前のものであるが何であるかは不明である」[同上p.46]と述べている。掲載された拓影を見る限りでは、これも基部成形段階の痕跡と思われるが、吉田氏は「円筒部成形以後」と観察されており、今のところ断定するにはいたらない。

第3節 長原遺跡東南地区の調査(NG85-13次調査)

1)はじめに

調査地は、長原遺跡東南部の南端に位置する全長約300mの東西道路敷内であり、発掘調査に際しては道路敷内を3分割して、西からI～III区と呼んだ(図169)。また、遺構の名称は、遺跡全域を対象とした古墳の番号以外は、同地区内で今回報告する遺構の種類別に通し番号を付した。

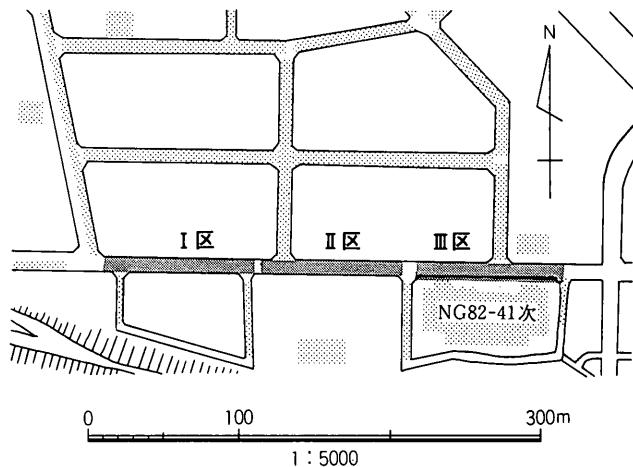


図169 長原遺跡東南地区の調査区区分

2)層序と遺物

i)層序(図170・図版28)

調査個所の基本的な層序は最新の長原遺跡の標準層序に対応するが、本調査を実施した1985年当時は現在のような地層の認識に達していなかったため、長原12・13層などについては細分しきれていない部分もある。そのため、調査時の層序と最新の標準層序の対応関係については、[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992a]の長原遺跡標準層序に依拠しながら以下に記載する。

沖積層上部層Ⅰ

長原0層：現代の整地層である。本層上面の標高は平均12.1mあるが、調査個所の中央部は11.9mと周辺部に比べてやや低い。

長原1層：現代の耕土である。

長原2層：含砂礫にぶい黄橙色シルトで、層厚は15cm前後あり、上層耕土の床土層である。本層は江戸時代の陶磁器や瓦の細片を含むほか、上面および下面では、耕作痕跡や鋤溝群などが確認された。本層準の坪境溝の埋土は、含砂礫黄橙色細粒砂や含砂礫暗灰色シルトである。なお、II区の中央部からIII区の西部にかけてみられた層厚10cm前後の含砂礫浅

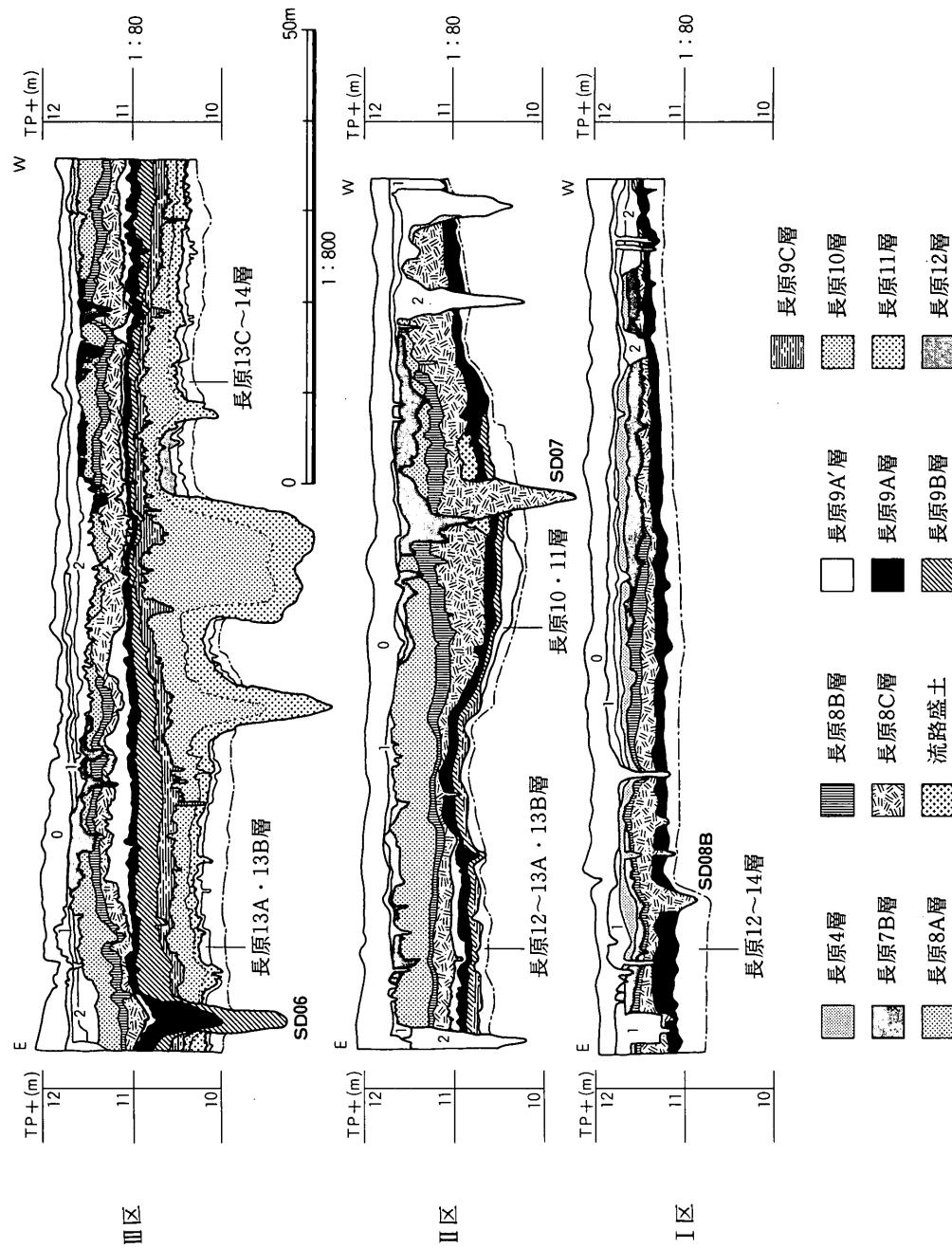


図170 I ~ III区断面図

い黄色シルトも、江戸時代の水田の床土である。

長原 4B層：含砂礫にぶい黄褐色シルトで、層厚は約15～20cmあり、I区およびIII区の中央部に堆積する。本層では6・7世紀の須恵器や土師器の細片を含むほか、上面および下面で耕作痕跡や溝が確認された。

沖積層上部層II

長原 7B層：含砂礫黒褐色シルト～含シルト砂礫で、I区以外では上層水田の耕作によって攪乱されており、III区の方形周溝墓や古墳の周溝をはじめ、一部の溝およびピットの埋土内で確認されたのみである。本層では、弥生時代後期末(庄内式期)の土器類や古墳時代中期の初期須恵器・土師器をはじめ、埴輪類が出土した。

長原 8A層：含シルト明黄灰色砂礫～黄褐色砂礫層を主体とし、砂礫のラミナが顕著にみられる水成層で、最大層厚は50cmあり、I区からIII区に向って層厚を増しながら堆積している。II区の中央部に位置する流路SD07内では、本層準の砂礫層の上部から弥生時代中期後半の土器が出土した。

長原 8B層：灰色シルト質粘土～含砂明黄褐色シルトで、層厚は15cm前後あり、I区からII区の中央部にかけて、層相が含砂礫シルトから粘土質シルトに徐々に変化している。本層の上面の標高は11.2～11.5mであり、II区の中央部から以東が幅約50mに渡って浅く凹む状況がみられる。III区では、上面および下面の一部から、人や動物の足跡群や乾痕などが認められた。

長原 8C層：黄橙～黄褐色砂礫層を主体とし、砂礫のラミナが顕著な水成層である。各所にシルトや粘土の薄い層が介在しており、砂礫を主体とした上部層と、極細粒砂質シルトおよびシルトを主体とした下部層に二分される。上部は長原 8Ci 層に、下部は長原 8Cii 層に相当する。本層の層厚は、II区の中央部に位置する南北方向の流路SD07の周辺では60cm前後と厚く、溝から離れるほど薄くなる。

長原 9A'層：灰色シルト質粘土～含砂灰色粘土層で、層厚は10cm前後あり、II区の中央部からIII区のほぼ全域にかけて、本層上面に水田址が検出された。この層は下層の長原 9A層を耕起した耕土で、上面の標高は11.0m前後である。

長原 9A層：黒～黒灰色粘土およびシルト質粘土層で、層厚は10cm前後である。本層上面の標高は11.10～11.55mで、II区からIII区にかけては、浅い窪地状の地形に沿って堆積しているが、I区では微高地状に高くなる。III区の東端に位置する流路SD06は、本層準の含砂礫シルト・シルト質粘土などが主要な堆積物である。なお、本層はI・II区では下位の層

準(長原 9B・9C層)との区分ができなかった。

長原 9B層：暗緑灰～黒青色シルト質粘土層で、層厚は10～30cmある。本層は、Ⅱ区からⅢ区にかけて位置する幅約25m以上の浅い窪地内に、層厚を増しながら堆積していた。なお、Ⅲ区の流路SD06の溝内下部に堆積した植物遺体が混る含礫粘土質シルトは本層準に相当するものである。

長原 9C層：含細粒砂黒色粘土質シルト～黒色粘土層で、層厚は10～25cmある。本層の上面の標高は10.7～11.0mであり、Ⅱ区の中央部およびⅢ区の東部に位置する浅い窪地内では、9Ci～9Ciii層に細分された。Ⅲ区の東部では、長原 9Cii層より型式不明の縄文時代の土器片が出土したほか、Ⅱ区に南接するNG88-42次調査地では、9Ci層の上面から滋賀里Ⅳ式に属する突帯文土器が出土している。

長原 10層：含粘土緑灰色砂礫層で、層厚は20～80cmあり、Ⅲ区の中央部に位置する南北方向の流路の周辺を中心に厚く堆積している。本層は砂礫のラミナが顯著な水成層である。Ⅲ区の西部では、砂礫を主体とする本層と下層との地層の境界は明確に区分されたが、Ⅱ区の西端部より以西は、層厚が薄いこともあって、地層は区分されなかった。

長原 11層：緑灰色シルト質粘土～含極細粒砂黄灰色シルト層で、層厚は30cm前後ある。本層も砂礫のラミナが顯著な水成層であり、Ⅲ区の西端から中央部に位置する流路内では砂礫と細粒砂が互層になって堆積していた。なお、本層は、Ⅰ・Ⅱ区では上層に同化しており区分されなかった。

長原 12層：遊離した火山ガラスを含む灰～黒灰色極細粒砂質シルト層で、層厚は10cm程度である。本層は調査過程では、不整合期の風化土壌と考えたが、その後の周辺部の調査の結果、近畿地方で横大路火山灰(アカホヤ)と呼ばれる火山灰起源の火山ガラスを多量に含む地層であることが確認された。本層の下面および層内から縄文時代前～後期に属する石鏃や剥片群が出土した。長原 12A～12C層に相当する。

沖積層下部層～低位段丘構成層上部層

長原 13層：含極細粒砂オリーブ灰色シルト～黄橙色シルト質粘土で、上面の標高は10.2～11.5mであり、Ⅰ区からⅢ区に向って徐々に低くなる。本層はシルトや少量の砂礫を含む長原 13A層と粘土分の多い長原 13B層に二分される。Ⅲ区の東部では、長原 13A層の上部から後期旧石器時代の石器が出土した。なお、調査個所の周辺で、後日、本層に対応する地層内に含まれる火山ガラスの分析を行った結果、上下層とも平安神宮火山灰(アイラTN火山灰)起源の火山ガラスが捕捉されている。

ii) 各層の出土遺物(図171～173・図版86・87)

長原 2 層出土遺物

895は口径14.0cmで、口縁部は体部から屈曲したのち、短く開いた無蓋高杯である。口縁端部を丸くおさめており、色調は灰白色で、焼成はよい。I区から出土した6世紀後半の須恵器である。908は緩やかに外反する口縁部の下端に、断面三角形の突帯を巡らせた壺で、口縁端部を丸くおさめており、頸部の上端には2帯の細かい櫛描波状文を施している。色調は灰白色で、焼成はよい。911・912は高杯形器台の脚部片で、TK216型式に属する初期須恵器と思われる。915はやや粗いタテハケののち、ヨコハケを施した円筒埴輪の基底部の破片である。以上はII区から出土した。900は高台径9.5cmで、体部の下半が直線的に伸びる壺、899は体部の中程に張りのある壺の一部である。ともに色調は灰白色で、焼成はよい。III区から出土した平安時代初期の須恵器である。

長原 4 層出土遺物

904は口径15.0cmで、口縁部が頸部から外上方に開く直口壺である。口縁部は、やや粗いヨコナデで仕上げている。色調はにぶい橙色で、焼成はよい。5世紀中葉の土師器と思われる。905・909・910・913は須恵器の高杯形器台である。909・910は杯部片で、外面を鈍い突帯で区画して、その間を櫛描組紐文と波状文で加飾する。905・912・913は器台の脚部片で、櫛描波状文を施したのち、長方形のスカシ孔を穿っている。905は12方向にスカシ孔を配置している。以上の土器の焼成は良好で、色調は青灰色を呈するものが多い。TK73型式～216型式に属する初期須恵器である。891は口径13.3cm、892は口径15.0cmを測る須恵器杯蓋で、891は口縁端部を丸くおさめるのに対して、892は口縁部内側に段をもつ。896も口径17cm前後の杯蓋で、やや外反する口縁部を強くヨコナデしており、端面は浅く凹む。ともに色調は灰色で、焼成はよい。891は6世紀末、892は6世紀中葉、896は平安時代初期の須恵器である。893・894は口径約12cm前後の杯身で、前者は後者に比べて立上がりが低い。894は底部の約2/3弱を時計回りにヘラケズリ調整する。897・898は高台径が10～11cmの杯の底部で、897の高台は外方にふんばっており、その高さは前者がやや高い。893はTK43型式、894は口径がやや小さいが口縁部の形態からみて、MT15型式に、897・898は平安時代初期に属する須恵器であろう。

906・914は円筒埴輪の破片で、906の外面は一次調整のタテハケのあと、粗いナデを加えており、内面はユビナデで整えている。916は表面に格子状のヘラ描がみられ、草摺あるいは家形埴輪の一部と思われる破片である。以上の埴輪の色調は橙色系で、胎土中に長石・

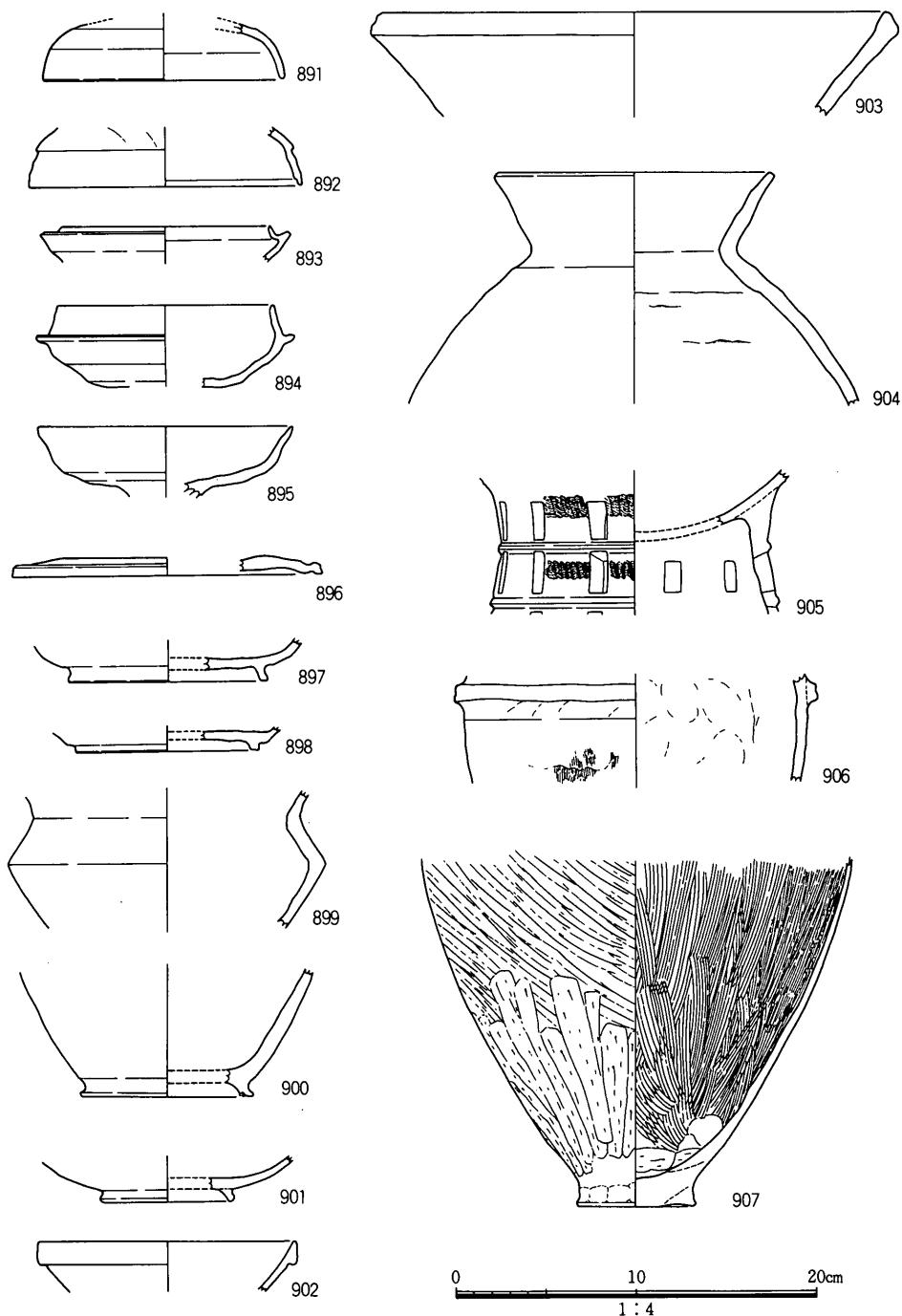


図171 各層出土遺物実測図 (1)

長原2層 (895・899・900) 長原4層 (891~894・896~898・901~906) 長原8A層 (907)

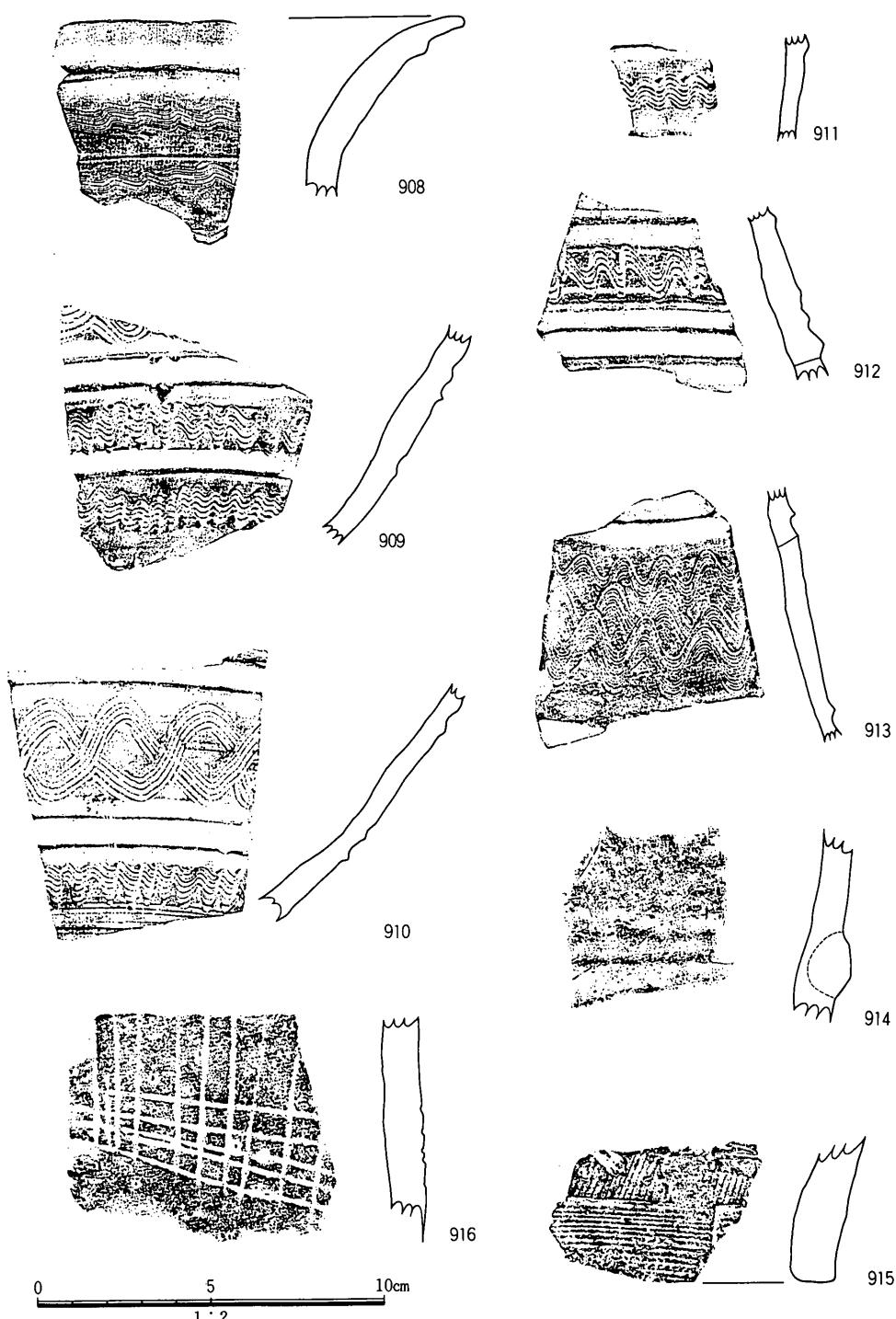


図172 各層出土遺物実測図 (2)
長原2層 (908・911・912・915) 長原4層 (909・910・913・914・916)

酸化鉄粒・雲母を含む。焼成は窯窯によっている。5世紀中葉から後半頃に属する埴輪であろう。

901は高台径7.0cmで、内面に暗文を施した瓦器椀の底部である。902は口径14.2cmで、口縁部は体部から直線的に外上方へ伸びており、同端部を玉縁状に折り返している。色調は灰白色で、焼成はよい。13世紀代に属する中国製の白磁である。903は口径約28cmで、口縁部は体部から直線的に伸びる。口縁端部をやや面取っており、全体をヨコナデで仕上げている。口縁部の外端面には、重ね焼きによる炭素が吸着している。13～14世紀代の東播系の須恵器である。

長原 8A 層出土遺物

907は底部径6.0cmで、体部の外面を左上がりの粗いタタキを施したのち、下半部のみを縦方向のヘラケズリで調整した甕である。内面は、縦方向のやや粗いハケののち、内底面を横方向に粗くナデている。色調は淡い黄橙色で、焼成はよい。胎土中に、長石・チャート粒を含む。Ⅱ区から出土した畿内第Ⅳ様式に属する甕である。

長原 9C 層出土遺物

917は身部の上端以上を欠損するが、基部の最大幅1.47cm、最大厚0.34cmで、基部の中央が僅かに凹む凹基式石鎌である。

長原 12 層出土遺物

918は身部および基部の尖端を欠損するが、最大長2.44cmで、基部が中央に向って幅広く凹む凹基式石鎌である。身部は表裏面とも外縁から細部調整を施している。

919も身部の尖端を欠損している。最大長1.81cm、基部の最大長1.52cm、最大厚0.31cmで、基部の中央を深く抉った凹基式石鎌である。外縁部を細部調整して鋸歯状に作り出し、脚端部を丸く加工している。

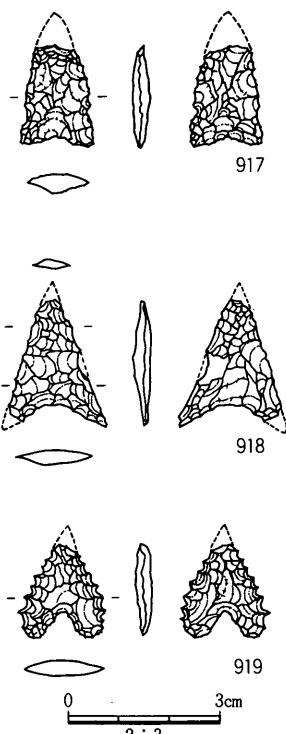


図173 長原 9C・12層出土
石鎌実測図

3) 縄文時代以前の遺構と遺物

i) 旧石器時代の遺物(図174・175、図版85・86)

本調査では旧石器時代の遺構は発見できなかったが、Ⅲ区の中央部に位置する長原10・11層が堆積した流路SD01からサイドスクレイパー、同区の東部の長原8A層より、国府型ナ

イフ形石器が出土した。これらの石器は遊離遺物であるため、本来の層準については明らかでない。このほか、Ⅲ区の中央部では、長原13A層から3点の剥片およびチップが出土した。

920は流路SD01から出土した。縦長の剥片を素材としており、背面側を主剥離面側から二段に細部調整している。最大長3.70cm、最大幅2.38cmで、尖端を欠損しているが、形状や細部調整などからみてサイドスクレイパーと思われる。

921は長原8A層から出土した。尖端および基部を欠損しているが、最大長4.98cm、最大幅1.80cm、最大厚0.86cmで、背面側のみに主剥離面側から粗い細部調整を加えた肉厚の国府型ナイフ形石器である。全体にローリングを受けており、残りはよくない。

Ⅲ区出土石器

922～924は長原13A層から出土した石器である。

922は最大長4.78cm、最大幅4.31cm、最大厚0.94cmの横

長の剥片で、裏面に主剥離面があり、上端および外縁の片側に、剥片を取った際の打点がある(図版86)。923・924は接合資料で、最大長6.79cm、最大幅4.0cm、最大厚1.09cmあり、裏面の上部を主剥離面側に向って上からの打撃を加えて折っている。外縁の一方には主剥離面側から不規則な調整を、他方には刃付けを行っているほか、裏面の上部にも段状の不規則な調整を加えている。主剥離面側の上端には自然面が残っており、下端を裏面側から折っている。縦長剥片の部類に含まれるが、細部

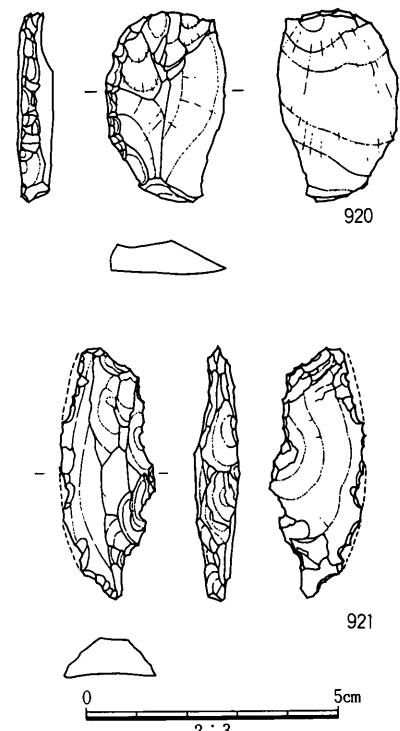


図174 SD01・長原8A層出土
旧石器実測図

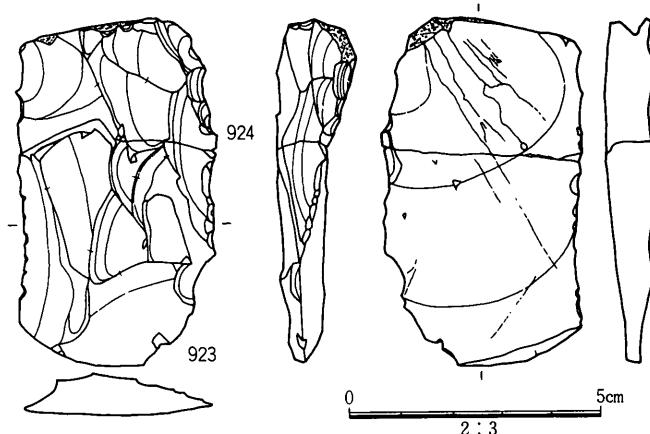


図175 長原13A層出土旧石器実測図



写真19 滋賀里IV式土器

て紹介しておく(写真19)。

925は底部の中央を欠損しているが、口径32.0cm、器高約45.0cmで、口頸部は長胴の体部から内湾しながら外上方へ伸びており、口縁部はわずかに開く。口縁部の上端およびそれからやや下がった位置を巡る貼付け突帯に、やや粗い刻み目を施している。口頸部および体部の内面は横方向にナデしており、体部の外面は縦方向のケズリで整えている。色調は黒褐色で、焼成はよく、胎土中に角閃石・長石・雲母粒を多量に含む。口縁端部および体部の形態からみて、縄文時代晚期後半の滋賀里IV式に属する深鉢形の土器と思われる。なお、本資料の粘土紐の接合方法は外傾接合であり、色調や胎土からみて、河内地域で作られたものと考えられる。

流路SD01周辺の石器ブロック(図176・図版29)

Ⅲ区の中央部を北流する2本の流路SD01・02間で発見された石鏃4点を含む小規模な石器ブロックである。石器ブロックの中心は、石器の分布密度からみて、流路SD02寄りと考えられる。石器(剥片)は、垂直分布図に示したように、長原13A層のごく浅い部分から出土した一部を除き、長原12A層相当層(黒褐色シルト質粘土)から長原12層下部相当層(含火山灰黄灰色粘土質シルト)を中心に、上下約15cmの範囲内から出土した。なお、石器ブロックの周辺には、小さな浅い凹みが認められた以外は、特に遺構と思われるものは検出されなかった。石器ブロックの時期は、ブロックに含まれた石鏃の形態や石器の出土層準などを考慮して、ここでは縄文時代中期から後期とみておきたい。

調整や刃付けがみられることから道具として使用されていたものと思われる。

ii) 縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺構は、Ⅲ区で検出された流路SD01・02および小規模な石器ブロックがある。その他には、Ⅰ区西部の長原13A層の上部より出土した石鏃を除いて、縄文時代のさしたる遺構・遺物は確認されなかった。なお、本調査後にⅡ区の中央部に南接して実施されたNG88-42次調査地では、長原9C1層の上面から縄文時代晚期の土器がほぼ一個体出土している[金村浩一1990]。参考資料として紹介しておく(写真19)。

925

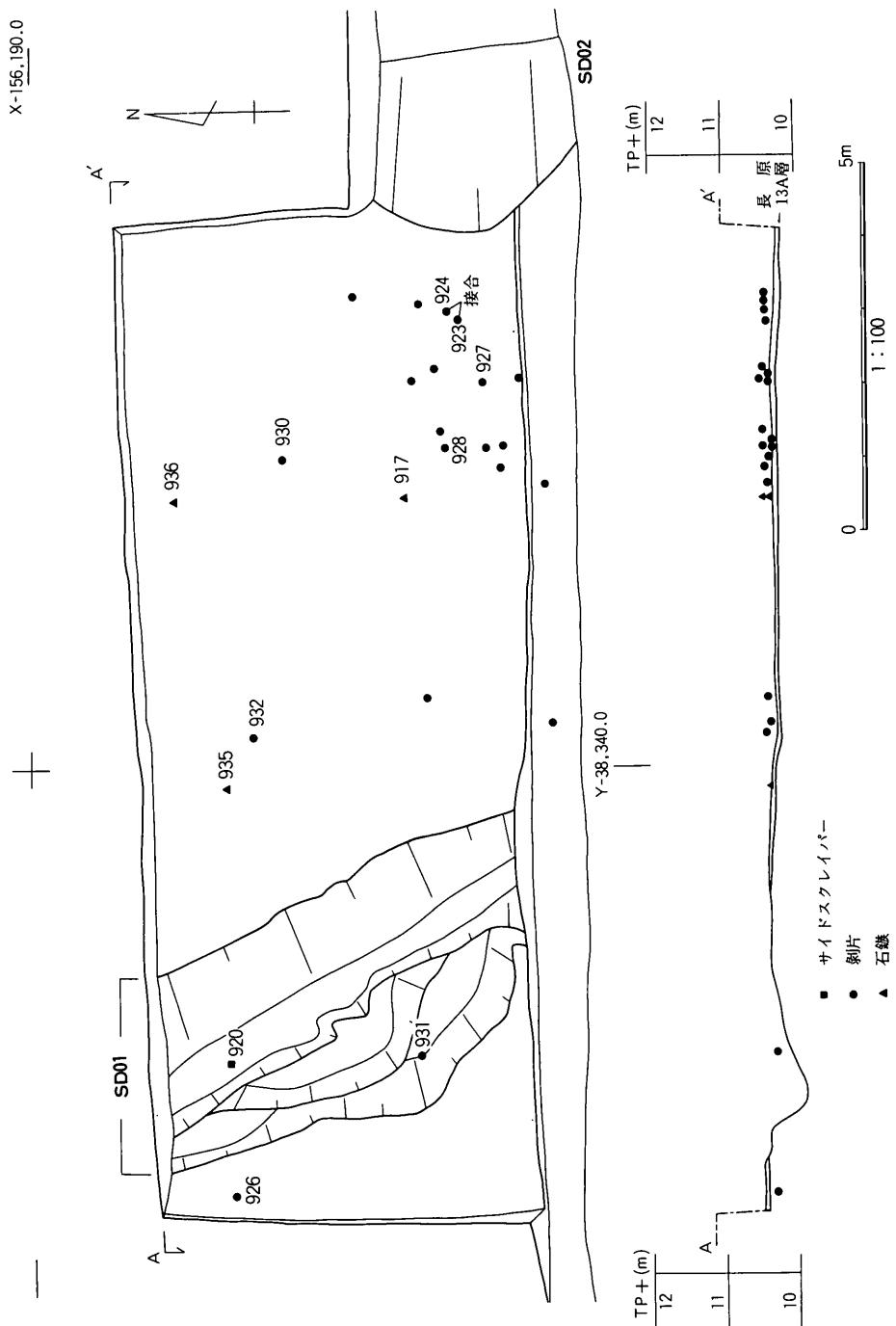


図176 Ⅲ区長原12層出土石器分布図

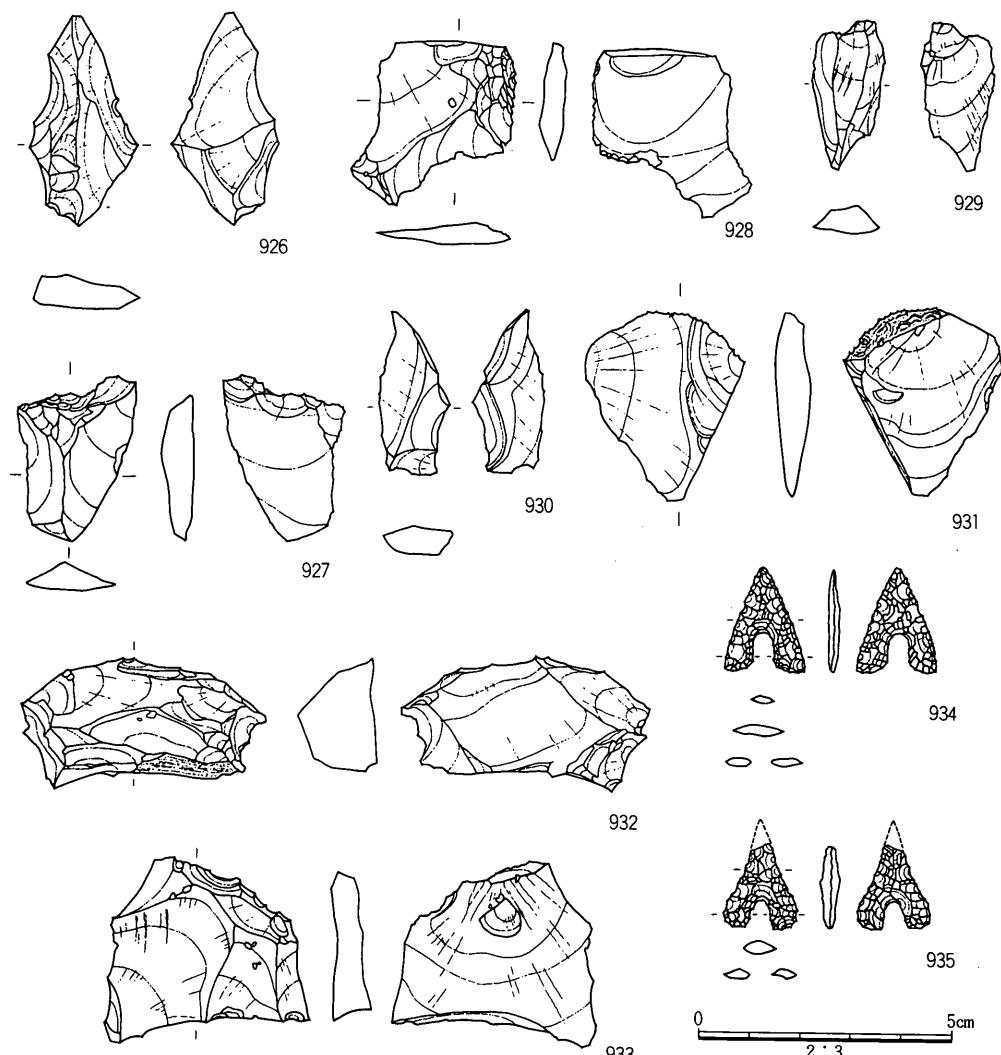


図177 石器ブロック出土遺物

石器ブロック出土遺物(図177・図版85・86)

926は最大長4.17cm、最大幅2.09cm、最大厚0.83cmで、外縁にポジティブ面からの最終剥離面があることから、石核の最終的な破碎片の可能性がある。927は最大長3.91cm、最大幅2.85cm、最大厚0.70cmで、主剥離面側の上端に2段のバルブが、裏面には打撃時にできた傷がある。928は最大長3.31cm、最大幅2.93cm、最大厚1.07cmで、主剥離面側の上端に折れ面があり、裏面の外縁には先行剥離がある。929は最大長2.99cm、最大幅1.40cm、最大厚0.56cmのやや縦長の破碎片である。930は最大長3.24cm、最大幅1.40cm、最大厚0.56cmで、外縁

の一方に最終の打面があるが、929と同様な破碎片と思われる。931は最大長3.71cm、最大幅3.14cm、最大厚1.16cmで、裏面に先行剥離が、主剥離面側の頂部に自然面が残る剥片である。932は最大長2.32cm、最大幅4.87cm、最大厚2.07cm、主剥離面が僅かに残るやや横長で肉厚の剥片である。裏面には剥片の素材面が残っており、外縁には最終の打点面や不規則な調整がある。剥片素材の最終的な姿と思われる。933は最大長3.50cm、最大幅4.03cm、最大厚0.72cmで、主剥離面側の下端部を上から打撃を加えて折っている。

934・935は凹基式石鏸で、934は最大長2.08cm、基部の最大幅1.58cm、最大厚0.22cmあり、基部の中央は大きく抉れている。表裏面とも、外縁から中央に向って、細部調整が加えられている。935は尖端部を欠損するが、基部の最大幅が1.44cm、最大厚0.34cmで、身部の中程から尖端に向ってやや細身に作られている。基部中央の形態や細部調整は934と変らない。936は基部の一端を欠損しているが、最大長2.58cm、身部の最大厚0.31cmで、やや細身の凹基式石鏸である。以上の石鏸は、長原12層から13A層にかけての漸移帶内から出土したが、調査地の周辺ではその後も漸移帶内から狩猟時の流れ矢かと思われる縄文時代前～後期に属する石鏸が出土しているため、上述した石鏸のすべてが石器ブロックに伴うものか否かについては、厳密には確定できなかった。以上の石器のほかにも、最大長0.2～1.0cm内外の破碎片が数点出土したが、これらは上述した剥片や破碎片とともに、石器ブロックの周辺において石器製作が行われていたことを示すものと考えられる。なお、本ブロック出土の剥片は、最大長が最大幅より長く、主剥離面側の打点が、剥片の長軸方向にあるものが多いように思われた。

4) 弥生時代の遺構と遺物

i) 水田址(図178・図版31・32)

II区の中央部からIII区のほぼ全域で検出された水田址である。この水田は、長原8C層に相当する含砂礫～極細粒砂黃橙色粘土質シルト層の直下に堆積する標高11m前後の黒色シルト質粘土(長原9A層)をベースに営まれていた。水田の耕作土は長原9A層を耕起した厚さ15cm前後の灰～暗灰色粘土質シルトで、上面や下面で人の足跡群が確認された。

水田が営まれた場所の地形は、微高地状を呈するII区の西部からIII区に向って拡がる緩傾斜面であり、水田址と微高地とのレベル差は20～40cmあった。なお、標高11.4m前後で、南北方向に派生した微高地上に当るI区では、水田址はまったく認められなかった。

水田址は幅1.0～1.5m、高さ30cm前後の大畦畔および幅10～20cm、高さ10cm前後の小畦畔

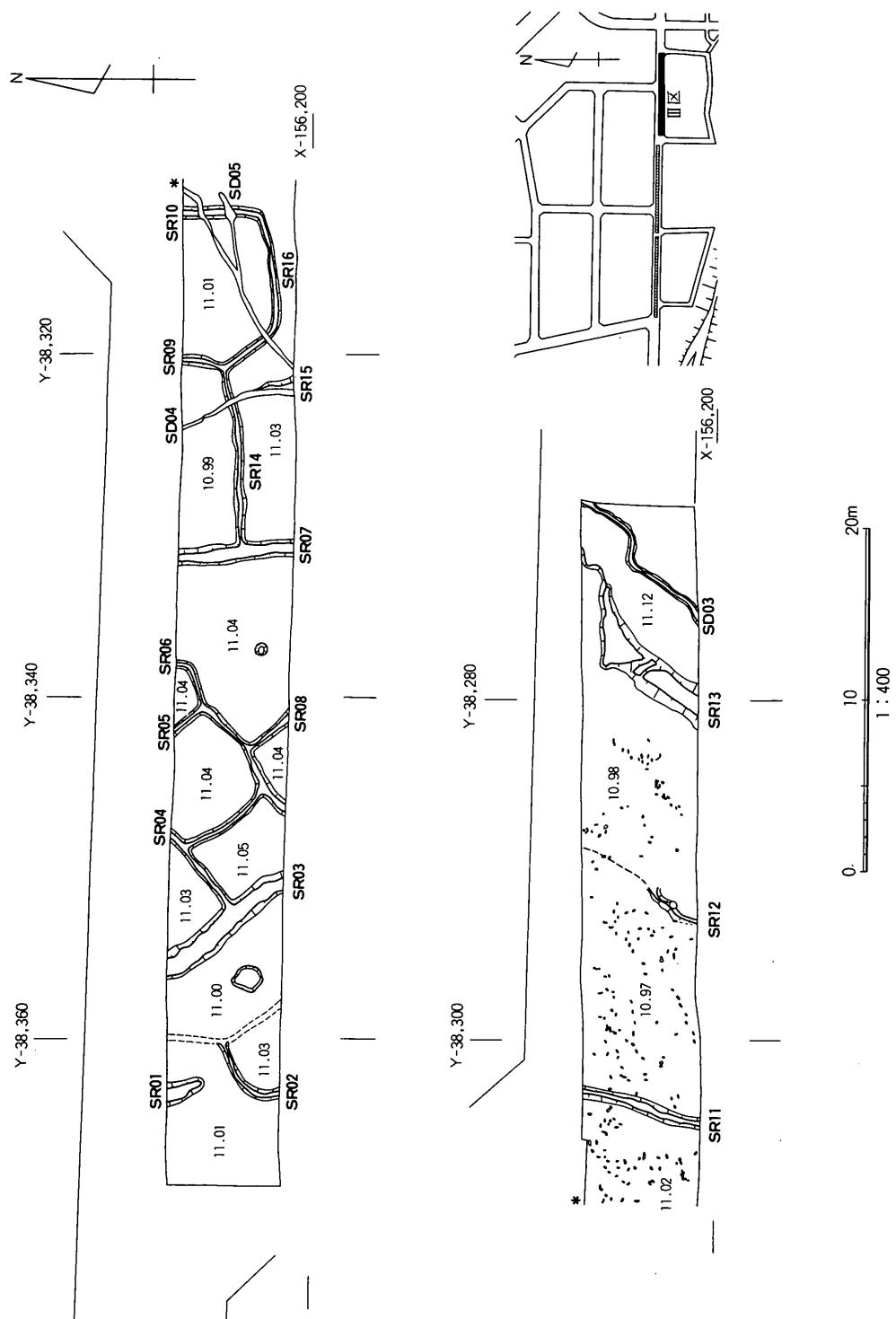


図178 Ⅲ区長原 9A' 層水田址実測図
(数値は上面の標高m)

によって区画されており、各水田面一筆の形状や面積は必ずしも一定でないが、平面の形態が長方形で、面積が40m²前後のものが多いようである。

水田面を区画する大小の畦畔は、基本的には微高地の等高線の方向と傾斜面に沿って配置された傾向が窺えるが、水田址の縁辺に位置する上幅1m前後、高さ約25cmの大畦畔SR03・13は、方向や畦畔間の距離(約70m)および造作などから、水田面を基本区画するために造られた可能性がある。また、調査地区内の大小の畦畔には水口はなかったが、南接するNG82-41次調査地では、数個所の小畦畔に水口が確認されている。また、水田址の各所で、耕作土の上面から下面以下に達するひび割れが確認された。これは水田が常時滞水状態ではなく、一時期、水が抜かれて乾田のような状態であったことを物語っている。

一方、足跡群の歩行の方向は、Ⅲ区東部のSR12～13の周辺のように、畦畔の方向に沿うものが多かったが、SD05およびSR10の付近では、これらを踏み越えたものもあった。なお、本調査でも足跡群を検討して、水田に出入りした人数や農作業の具体的なようすなどについても復元を試みたが、それらの問題について満足のいく解答は得られなかった。これは水田面に残された足跡自体が、耕作土から足を離した瞬間に変形してしまうことや、同一面で確認されたすべての足跡が、一時の作業で残されたものか否かの認定がきわめてむずかしいこと、水田面は洪水の水流で洗われていたため、足跡自体の残りも悪かったことなどが、足跡群から情報を引き出せなかった原因であるように思われる。ただ、多くの足跡の深さが6cm前後もあることは、これらが残された時

の水田面は軟弱であったことを示している。

遺物(図179、図版86)

石鎌 937はⅢ区中央の畦畔SR14の南側から、耕作土に密着した状態で出土したサヌカイト製の凸基有茎式石鎌である。長さ6.22cm、最大幅2.13cm、最大厚0.65cmで、尖端および身部の断面形は菱形を呈し、身部の中央部に若干の主剥離面を残す以外は、外縁から細部調整されている。石鎌の時期は、形態や細部調整からみて、弥生時代中期初頭(畿内第Ⅱ様式)に属するものと思われる。

水田の造られた時期や経営された期間を示す遺物は、上述した凸基有茎式石鎌を除いて、土器などは出土しなかつた。しかし、水田を覆って堆積した長原8Ci・Cii層など

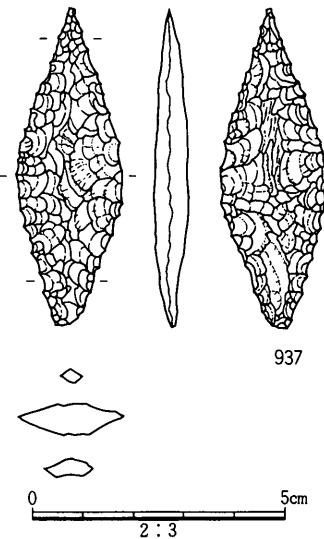


図179 水田址出土石器実測図

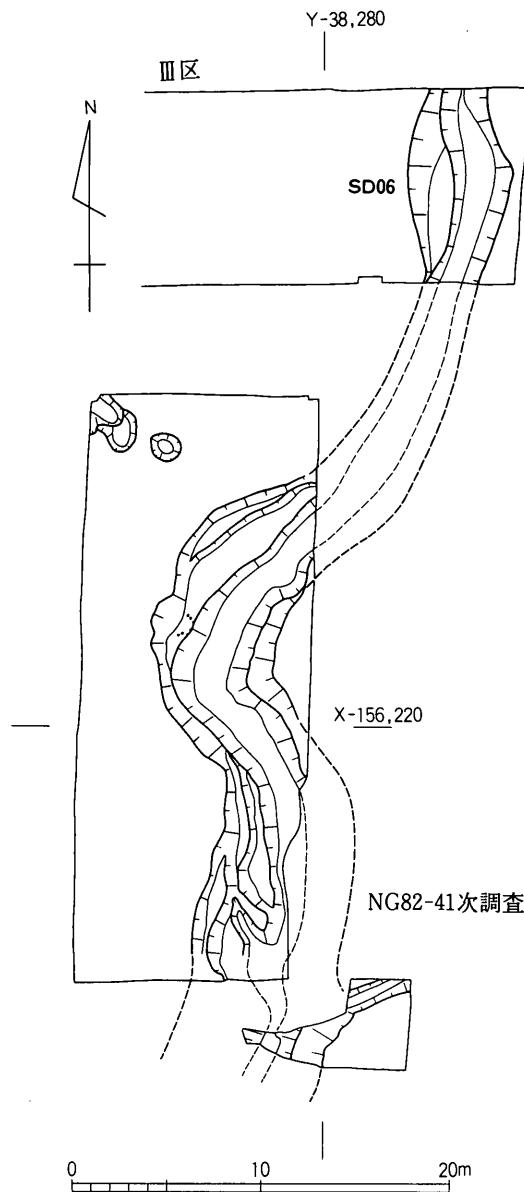


図180 SD06実測図（III区）

後、深さ3~8cmで、畦畔SR10・16を切って水田址内を南西から北東に流れる溝である。溝は畦畔SR16の北で、東に向って2条に分れており、一方の溝は、調査範囲外に延びるが、もう一方は、畦畔SR10の東側で、やや溝幅を増して途切れています。溝の断面は、逆台形状を呈しており、溝内には黄褐色粘土質シルトが堆積していた。なお、水田址内で途切れる

の地層の年代などから、この水田は弥生時代前期末から中期初頭の旧地表である長原9A層を耕作土として造田され、中期初頭の洪水層である長原8C_i・C_{ii}層によって埋没したものと考えられる。

ii) 溝

SD03(図178、図版31)

III区の東部、大畦畔SR13の東に位置する幅50cm前後、深さ約13cmの溝で、調査個所に南接するNG82-41次調査地から続く南北方向の溝の延長部である。溝の断面は逆台形状を呈し、溝内には水成の含粘土褐灰色砂礫・明黄褐色極細粒砂質シルトが堆積していた。本溝は位置からみて、水田址に伴う灌漑用水路と考えられる。

SD04(図178、図版31・32)

III区の中央部、水田址内に位置する幅35cm前後、深さ約8cmで、畦畔SR14・15を切って北に流れる溝である。溝の断面は逆台形状を呈し、溝内には水成の黄褐色粘土質シルトが堆積していた。

SD05(図178、図版32)

III区の中央部に位置する幅20cm前

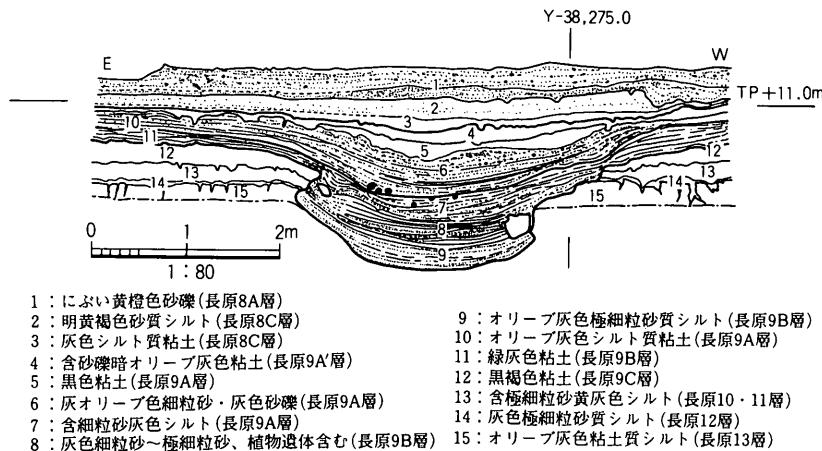


図181 SD06断面実測図（III区）

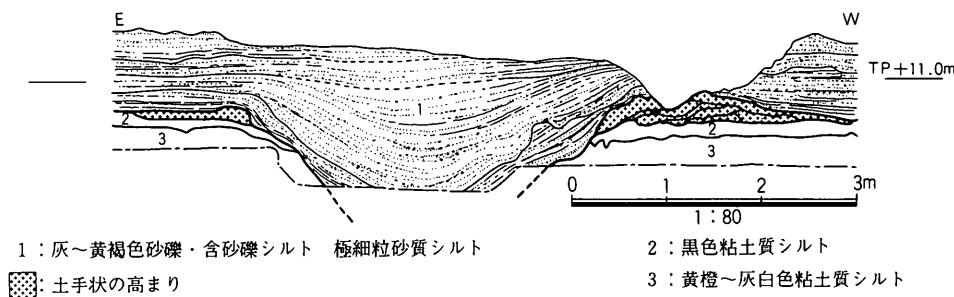
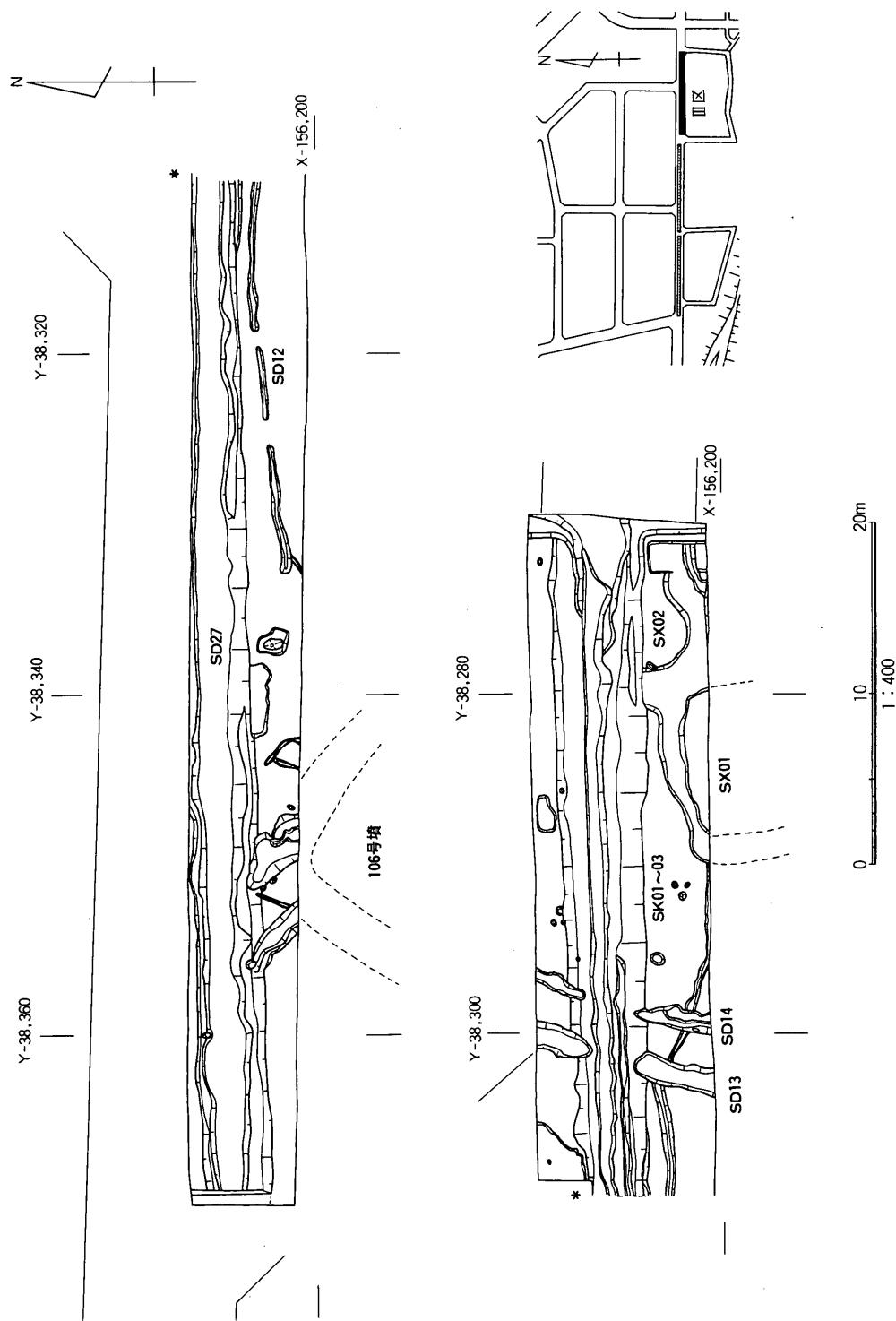


図182 SD07断面実測図（II区）

一方の溝の底には、鍬あるいは鍬先の跡と推定される幅20cm前後、深さ2~3cmの半月状の凹みがみられた。本溝は、水田址内に位置するものの、周辺にある溝SD03・04と違って、深さがごく浅いことや、水田址の傾斜に沿うように低い場所に掘られていることから、水田の湿気を抜くための排水溝と思われる。

SD06(図180・181、図版30)

III区の東端部に位置する幅3.0~5.5m、深さ1.4m前後で、調査個所に南接するNG82-41次調査地から蛇行しながら北流する流路である。流路内には長原9B層に相当するオリーブ灰色極細粒砂質シルト、落葉広葉樹の葉の薄層を間層に挟む灰色細粒砂～極細粒砂、流木を含む含細粒砂灰色シルト、含シルト灰オリーブ細粒砂～極細粒砂、灰色砂礫をはじめ、長原9A層に相当する黒色粘土が堆積していた。本調査では流路内からは遺物は何も出土しなかったが、流路の南方に当るNG82-41次調査地では、岸から杭群が検出されたほか、長原9Bii層相当層から長原式土器や土偶をはじめ、石斧の柄や板材が出土した。また、NG88



–84次調査地でも、同一流路内に堆積した長原9Bii層層準の地層から弥生土器(体部に貼付け突帯が巡る畿内第I様式新段階の壺)および堅杵が出土している[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992b]。本流路は断面観察などから長原9Bii層の堆積以前に流れ始め、長原9A層が堆積した段階で流路の機能を失ったものと思われる。なお、流路の続きは調査地域から北方の地下鉄谷町線八尾南駅操車場にいたる約450m間で確認されており、大阪市と八尾市境地域では流路内から石斧の柄をはじめ、長原式土器や畿内第I様式古・中段階の土器が出土している[八尾南遺跡調査会1981、田中清美1992]。

SD07(図182・189)

II区の中央部に位置する幅約2.8m、深さ1.3m前後で、溝の側面が強い流水によって抉られた流路である。溝内には、長原8Ci・Cii層に相当する灰～黄褐色極細粒砂質シルト、含砂礫シルト、砂礫などが堆積しており、肩部には旧表土の上に、長原9A～13層層準の粘土質シルトを盛った高さ10～30cmの土手状の高まりが確認された。本流路は位置や層準からみて、この東方に拡がる弥生時代の水田に水を供給する幹線的な用水路として改修が加えられたものと思われる。

SD08B(図189)

I区の東部に位置する南北方向の溝で、長原9A層の上面から検出された。溝は幅約2.5m、深さ50cm前後あり、断面U字状の溝内には、長原8C層に相当する黄灰～灰色の砂礫が堆積していた。なお、I区に南接するNG88-42次調査地では本溝の延長部の両岸に土手状の盛土が確認されているが、本調査区ではそうした盛土はみられなかった。

iii) 方形周溝墓

SX01(図183・184・186、図版33・87)

III区の東南部に位置する墳丘の一辺の規模が約8mと推定される方形周溝墓で、東周溝を別の方形周溝墓SX02と共有している。墳丘および周溝は、その大半を後世に攪乱されており、残りは悪い。北側の周溝は幅0.7～1.5m前後、深さは検出面から約30cmあり、埋土は含細粒砂黒褐色シルトである。北周溝のほぼ中央から墳丘裾にかけて、弥生時代後期末の手焙り

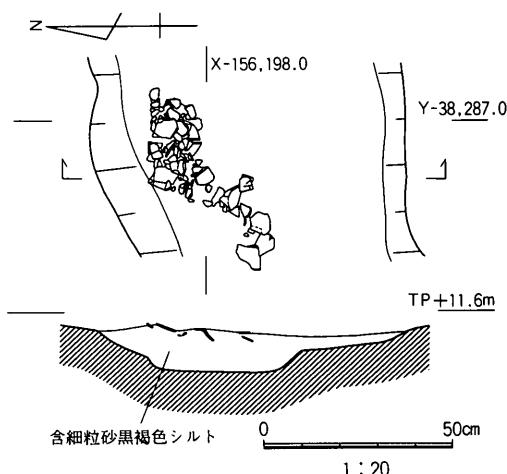


図184 SX01北周溝内遺物出土状況実測図

形土器および甕が出土した。本遺構は、調査個所に南接するNG82-41次調査地の方形周溝墓SX01の北半部に相当する。

939は口縁部の中ほどに、覆いを付けた手焙り形土器で、底部を欠損しているが、器高は16cm前後に復元できる。器面の調整は、内外面ともにやや粗いナデである。口縁部は2段に短く開き、体部の中ほどにはキザミを加えた突帯が付加されている。焼成はよく、色調は灰黄色を呈する。胎土中に、長石・チャート・シャモット・雲母粒を含む。

940は口径15.6cm、器高23.5cm前後で、口縁部はやや長手の体部から外上方に短く開いた甕である。口縁端部を丸くおさめており、口縁部から体部の調整は、上半がやや粗いヨコナデで、体部の下半部は、粗いナデである。焼成は良好で、色調は黄橙色を呈する。胎土は手焙り形土器と変わらない。

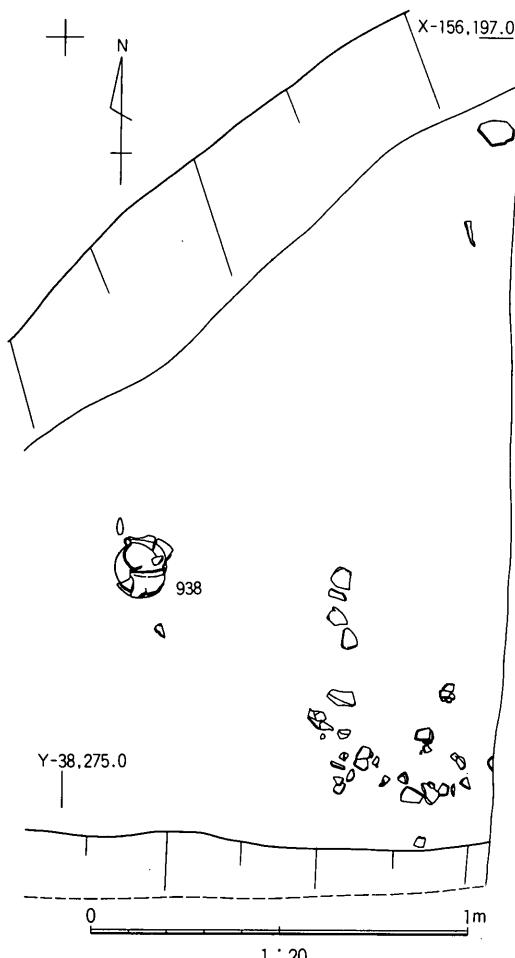


図185 SX02南周溝内遺物出土状況実測図

SX02(図183・185・186、図版33・87)

方形周溝墓SX01の東に位置するが、墳丘の北部を江戸時代の島畠の耕作で攪乱されており、残りは悪い。墳丘の規模は、比較的残りがよい西墳丘から復元して、一辺5m前後と推定される。周溝内には含細粒砂黒褐色シルトが堆積しており、南周溝では、底から3cmほど浮いた状況で、弥生時代後期末の甕が1個体出土した。

938は口径11.0cm、器高13.3cmの甕で、口縁部は頸部から短く開き、端部に強いヨコナデを加えて丸くおさめている。最大径は体部の中ほどにあり、同下半部は右上がりのやや粗いタタキで、上半部は粗いナデが施される。体部の内面は斜め上方の粗いナデで整えられており、底面はヘラ先で押さえている。焼成はよく、色調は灰黄色を呈する。胎土中に長石・雲母・チャート・シャモット粒を含む。

5) 古墳～飛鳥時代の遺構と遺物

i) 106号墳(図183)

III区の西部で、NG82-41次調査時に確認されていた一辺約11mの方墳の周溝の一部と思われる浅い凹みが検出された。遺構は平面プランも不整形で、深さも10cm前後しかないため、調査の過程でも古墳の周溝かどうか躊躇したが、墳丘の北西コーナーの北部に位置することや、埋土が長原7B層に相当する含砂礫黒褐色シルトであることから、周溝の残存部とした。なお、墳丘の北西部からIII区にかけては、幅4m前後の江戸時代の島畠に伴う東西方向の溝が平行して掘られており、墳丘・周溝ともに残りは悪かった。

ii) 土壙

SK01～03(図183・187、図版34)

SK01はIII区の東部に位置する長辺95cm、短辺60cm、深さ約80cmで、隅丸方形を呈する土壙内に、口縁部の一部を打ち欠いた土師器杯941を上向きに埋納した遺構である。土壙内は灰～灰褐色の砂礫で埋戻されていたが、土器以外の埋納品は確認されなかった。なお、遺構の東側に近接して位置する小土壙SK02・03も、土器などは出土しなかったが、内部をSK01と同様な砂礫で埋戻していることから、これらの土壙は、同一個所に意図的に掘られたものと思われる。

941は口径11.8cm、器高4.0cmの土師器杯で、口縁部はやや内湾する体部から直立している(図188、写真20)。口縁端部はやや内傾しており、調整は口縁部の内外面および体部の内面

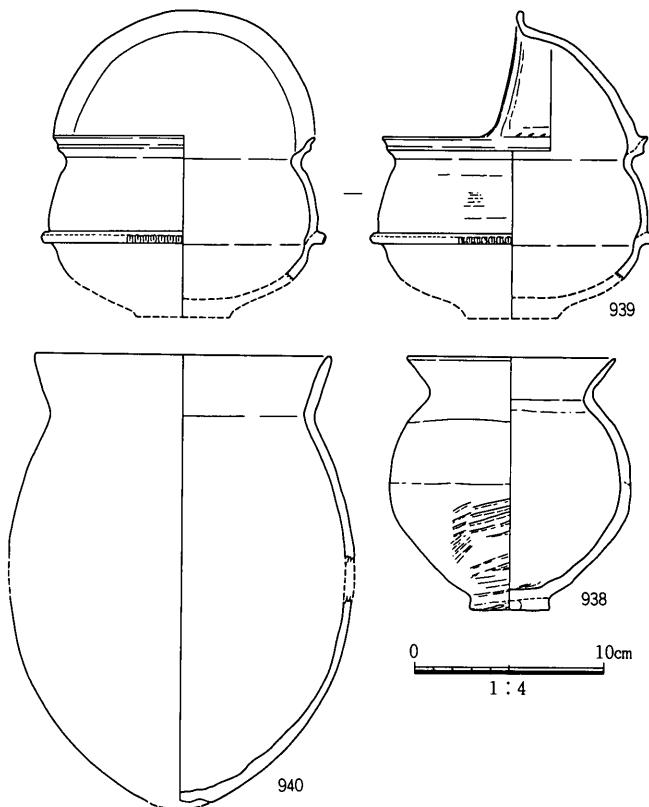


図186 III区SX01・02周溝出土遺物実測図

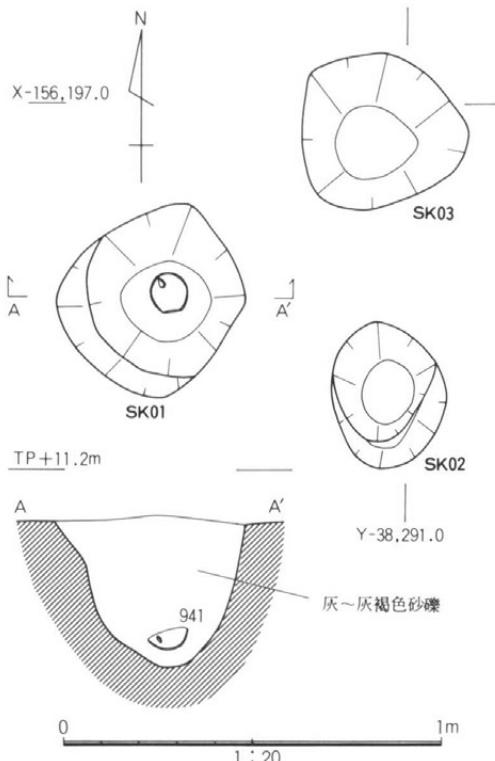


図187 SK01~03実測図（Ⅲ区）

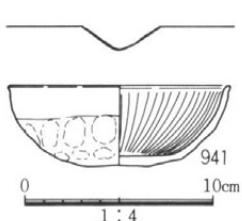


図188 Ⅲ区SK01出土土師器実測図



写真20 SK01出土土師器

がヨコナデで、体部の外面は粗いユビオサエである。体部の内面には、口縁部から底部にかけて細かい正放射状暗文が施されている。色調は暗黄橙色で、焼成はよい。胎土中に少量の微細な長石・雲母粒を含む。

7世紀の初頭に属する。

iii) 溝

SD08A(図189・190)

I区の東部に位置する長原7B層下面の溝で、南北方向をとる。幅1.2m、深さ1m前後あり、断面の形状はU字状を呈する。溝内には細粒砂を含む黒褐色粘土質シルトが堆積しており、古墳時代の土師器・須恵器などが出土した。埋土の状況や出土遺物からみて、古墳時代の遺構と考えられる。

土師器 942は口径約13cmで、口縁部が頸部から外上方へ開く甕である。口縁部を強くヨコナデし、端部を尖りぎみにおさめる。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成はよい。胎土中に長石・酸化鉄粒を含む。

須恵器 943は口径12.5cmで、立上がりが受部からやや内傾する杯身である。口縁端部の内面は鈍い段をなし、内外面をヨコナデ調整している。色調は青灰色を呈し、焼成はよい。944は口径13.5cmで、口縁端部や立上がりの形態および色調・焼成は943に類似した杯身である。945は口縁端部を欠損しているが、立上がりの角度や受部の形態は、943に類似した杯身で、器表面にオリーブ灰色の自然釉が付着している。

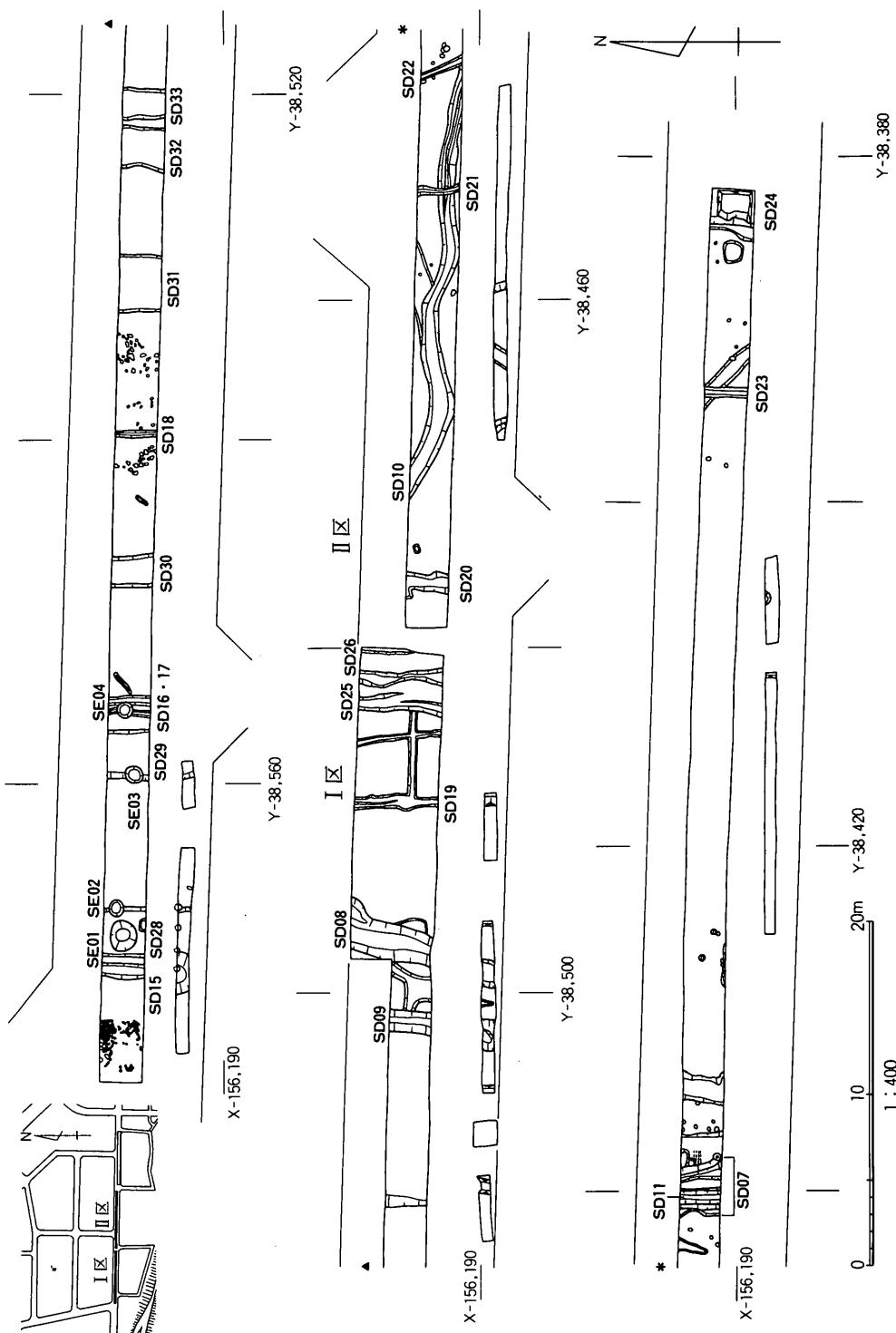


図189 I・II区古墳～江戸時代遺構配置図

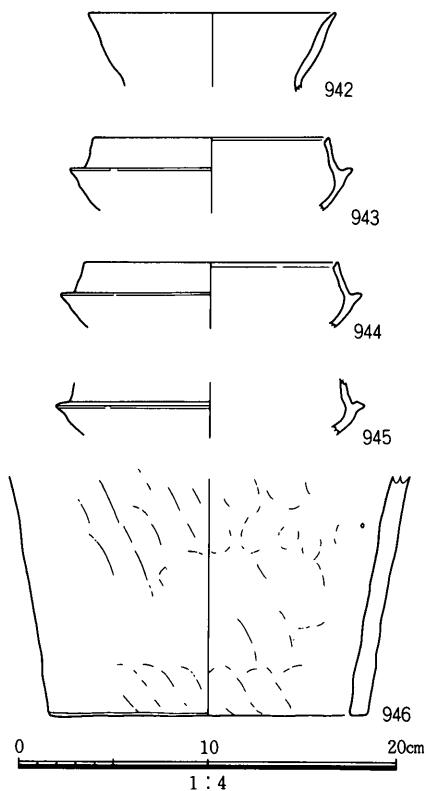


図190 I区SD08出土遺物実測図

II区の西部を西方に向ってやや蛇行しながら流れる幅1m前後、深さ約70cmの溝で、溝の断面形はU字状を呈する。溝内には黒色シルト混りの砂礫が堆積しており、少量の須恵器および円筒埴輪が出土した。

SD11(図189)

II区の中央部に位置する南北方向の溝で、幅1~3m、深さは1m前後あり、溝の断面形はU字状を呈している。溝内には下半部に含砂礫黒色粘土質シルト、上半部に黒褐色粘土質シルト~含シルト砂礫が堆積しており、前者から円筒埴輪の破片に混って、盾形埴輪の円筒部が出土した。本溝は幾度かの改修が加えられており、溝の東側には、護岸用とみられる直径10~15cmの杭列が確認された。

石鎌(図版86) 947は尖端を欠損しているが、残存長3.96cm、最大幅1.34cm、最大厚0.79cmで、身部の断面形が菱形を呈するやや肉厚の凸基有茎式石鎌である。片面の中央部に若干の主剥離面を残す以外は、外縁部から細部調整を加えている。弥生時代中期後半の石鎌

円筒埴輪 946は底部径17.0cmで、器体の内外面をユビナデで調整したあと、接地面の内外面をユビオサエで整えた円筒埴輪の基底部である。色調は黄橙色で、胎土中に長石・酸化鉄粒を含む。焼成は窯窓によっている。

以上の遺物の内、須恵器はMT15型式に、埴輪は5世紀後半~6世紀初頭に属するものと思われる。

SD09(図189)

I区の東部、SD08の西約3mに位置する南北方向の溝で、幅、深さともに1m前後あり、溝の断面形はU字状を呈する。溝内には、黒褐色粘土質シルトや細粒砂が堆積しており、溝内の上半部から古墳時代中期の円筒埴輪および土師器、須恵器が少量出土した。古墳時代の遺構である。

SD10(図189)

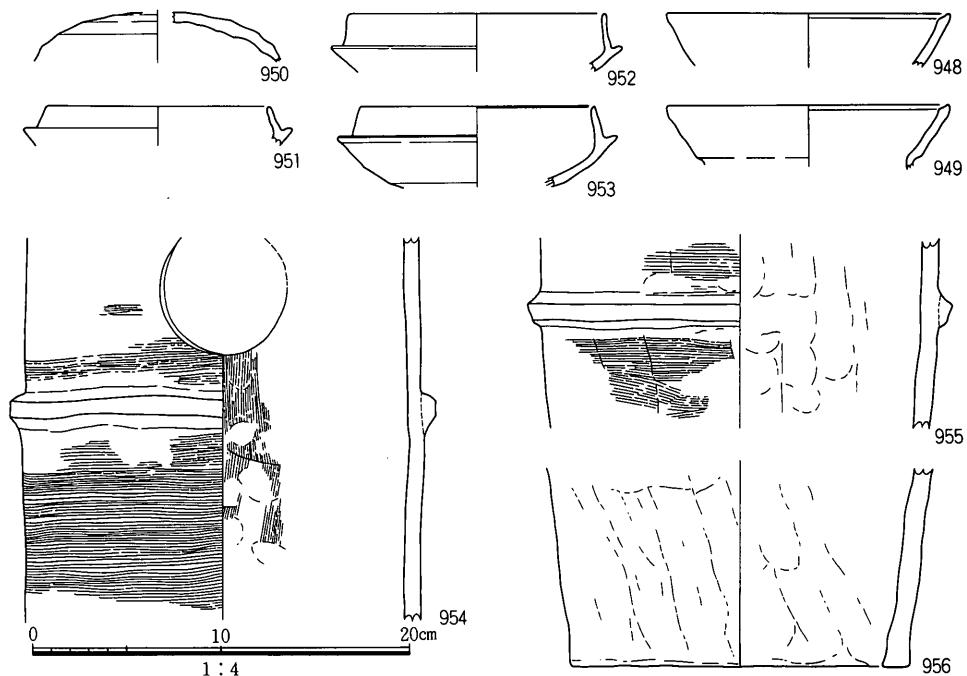


図191 II区SD11出土遺物実測図

と思われる。

土師器(図191) 948・949は口径15cm前後で、口縁端部が内傾した甕の口縁部片である。色調は黄橙色で、焼成はよい。胎土中に少量の長石粒を含む。布留式の新相に属するものであろう。

須恵器(図191) 950は杯蓋の天井部とみられる破片である。その約2/3を時計回りにヘラケズリ調整している。色調は灰色で、焼成はよい。951～953は口径12.0～13.5cmで、立上がりは受部からやや内傾した杯身である。いずれも口縁端部を丸くおさめており、953は底部の1/3を時計回りにヘラケズリ調整している。色調は灰～青灰色を呈しており、焼成はよい。951はTK43型式、952・953はTK10型式に属する須恵器である。

円筒埴輪(図191) 954・955は径22cm前後の円筒埴輪の体部片で、ともにタガの形態は断面台形状を呈する。外面の調整は、幅の広いヨコハケであるが、内面は954がタテハケで、955は縦方向のやや粗いユビナデである。954のタガの上には、直径7cm前後の円形スカシ孔を穿っている。色調は前者が黄橙色、後者は灰白色であり、焼成はともに窯窓によっている。胎土中に、長石・雲母・酸化鉄粒を含む。956は径18cm前後の円筒埴輪の基底部の破片で、内外面ともに磨滅しており、調整などはわからない。色調・焼成・胎土は954に近

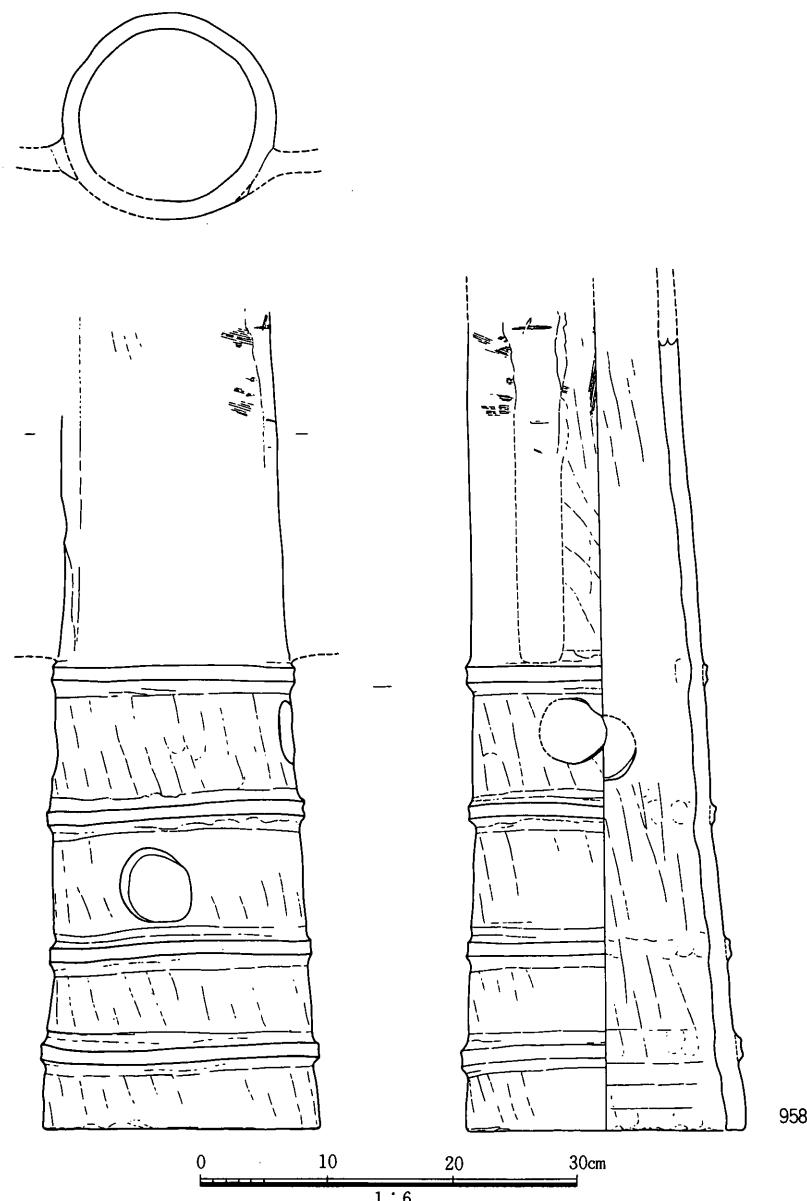


図192 Ⅱ区SD11出土盾形埴輪実測図

い。以上の埴輪の時期は、5世紀中葉ごろに属するものと思われる。

盾形埴輪(図192・写真21) 958は基底部の最大径が22.0cmで、円筒部が基底部から上端に向ってやや細くなる盾形埴輪の一部である。円筒部には4個所に、断面が低い台形状(M字に近い)のタガが巡っており、下から2、3段目のタガの上には、直径5~6cmの円形スカ

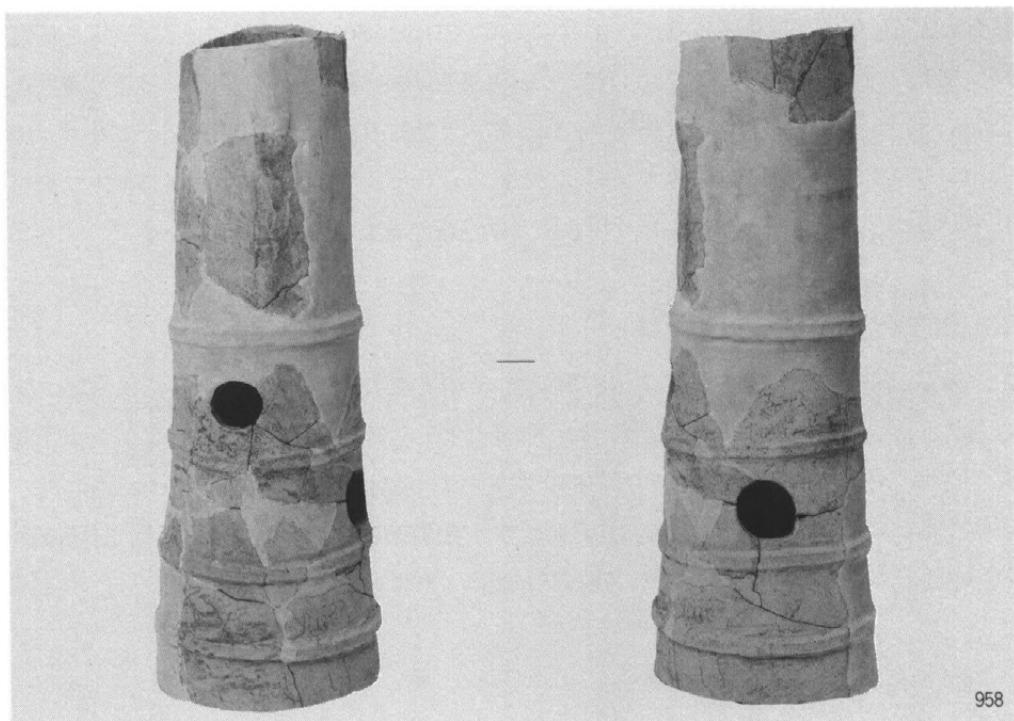


写真21 SD11出土盾形埴輪

シ孔を穿つ。盾そのものは、欠損しているが、4段目のタガには盾の取付け跡が残っており、これから判断して盾形埴輪の製作は、円筒部を作ったのち、これに鰐状の粘土板を取り付けて、最終的に、盾面を作ったものと思われる。円筒部の上半には一次調整の斜め方向の細かいハケが残るが、基部の内外面は、一次調整のハケの後、二次調整のユビナデを縦方向に施している。なお、基底部の内面には、横方向のユビナデがみられることから、円筒部の製作に際しては、一時、埴輪を倒立させたものと思われる。色調は黄橙色で、焼成は窯窯によっている。胎土中に雲母、赤色粒、長石粒を含む。5世紀末～6世紀初頭の埴輪であろう。

SD12(図183)

Ⅲ区の中央部を東西方向に走る幅20cm、深さ約30cmで、断面U字状を呈する溝である。溝内には含細粒砂暗褐色シルト～含砂礫黒褐色シルトが堆積しており、5世紀後半の須恵器・土師器の細片が出土した。

SD13・14(図183、図版34)

Ⅲ区の東部を南西から北東の方向にカーブしながら平行して流れる溝で、断面形はU字

状を呈する。本溝は南接するNG82-41次調査地のSD502・503の延長部に当る。両溝の間隔は、掘形の間で2m前後あり、ともに幅2~3m、深さは60cm前後ある。溝内には含砂礫黒褐色シルトが堆積しており、5世紀後半の須恵器・土師器の細片が少量出土した。なお、両溝とも、埋土の状態から常に流水があったとはみられないこと、南接する調査地内で途切れていることなどから、水田に伴う用水路とは性格の異なる溝かもしれない。

6) 平安時代の遺構

一部で、平安時代までさかのぼる坪境溝や、その支線水路とみられる大小の溝などが確認された。しかし、その多くは、江戸時代以後の水田や島畠の耕作、あるいは新たな坪境溝の開削によって攪乱されており、図189に示したような水田関係の溝を除いて、さしたる遺構は認められなかった。I区では江戸時代の坪境溝SD25の西肩部より、長原4B層段階の坪境溝とみられる南北方向の溝の残存部が検出されている。

7) 鎌倉時代以降の遺構と遺物

I・II区ではほぼ全域にわたって、長原3層の下面および長原4層の上面で、耕作に伴った鋤溝群および人や牛馬と思われる足跡群があった。

また各調査区で、現代の水田耕土の床土(長原2層に相当)の下面から、江戸時代の島畠に係わる溝や坪境溝をはじめ、灌漑用の野井戸などが検出された。これらの遺構の多くは、出土した陶磁器類などからみて、宝永元(1704)年の大和川の付替え以後に属するものと思われる。

i) 溝

SD15~24(図189)

I・II区に位置する幅0.7~2.0m、深さ0.6m前後で、断面形がU字状を呈する溝である。溝内には長原2層相当の含砂礫シルトや含礫細粒砂などが堆積していた。これらの溝の方位は当地域の条里区画の方位にほぼ一致していることから、条里の名残りを伝えているものかと考えられる。

SD25(図189・193、図版35)

I区の東端に位置する幅1.8m、深さ0.6m前後で、南北方向に流れる溝である。溝の断面は、逆台形状を呈しており、最低3回の掘直しが確認された。溝内には、にぶい黄橙~灰褐色を呈する含砂礫シルト(長原2層)が堆積しており、古墳~江戸時代にかけての土器片

が出土した。本溝は方位が正南北であり、溝の東方109m地点に当るⅡ区でも同様な溝が確認されたことから、江戸時代以降の坪境溝と思われる。

959は口径29.0cmで、緩やかに開く口縁部の下方に、断面三角形の突帯および細筋の櫛描波状文が巡る須恵器甕である。口縁端部は丸くおさめられており、色調は暗灰色で、焼成はよい。TK73型式の初期須恵器と思われる。960は高台径7.0cmの須恵器杯身である。色調は灰色で、焼成はよい。平安時代初頭のものである。

961は頸部に断面三角形のタガが巡る朝顔形埴輪の破片である。調整は外面がB種ヨコハケで、内面は右上がりのハケである。色調は橙色で、焼成は窯窓によっている。胎土中に、長石・雲母・酸化鉄粒を含む。5世紀後半～6世紀初頭の埴輪である。

962は白磁碗で、口径16.0cmを測り、口縁部は端部を折り返して厚い玉縁状にしている。

963は口径17.0cmで、口縁部は体部から緩やかに開く。体部の内面に炭素を吸着させた11世紀後半代の黒色土器A類である。焼成はよく、胎土中に少量の長石粒を含む。964は口径9.0cmで、口縁部は体部から短く開く瓦器小皿である。口縁端部は丸くおさめられており、体部の内面には暗文がみられる。965は高台径5.0cmで、内面に格子状の暗文が施された瓦器碗である。964とともに焼成はよく、13世紀代に属するものであろう。

以上の出土遺物のほかにも、17～18世紀代の陶磁器や瓦などがあるが、細片であるため、ここでは特に図化しなかった。なお、962～965は坪境溝の掘直し時期を示すものかと思われたが、溝内の埋土中に混在しており、年代ごとに取上げられなかった。

SD26(図189・194、図版35)

I区の東端に位置する南北方向の溝である。溝の西部を坪境溝SD25に切られていたが、断面を観察した結果、溝の幅は1m以上で、深さも0.4m以上あることが判明した。溝内には、長原4A層に相当する褐灰色粘土～シルトが堆積しており、位置や出土遺物などからみ

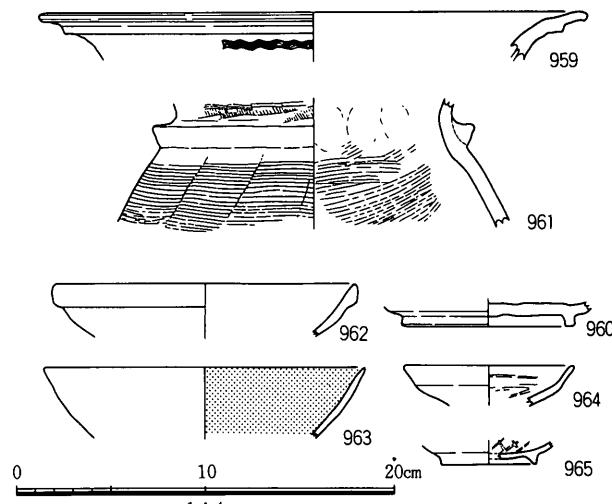


図193 I区SD25出土遺物実測図

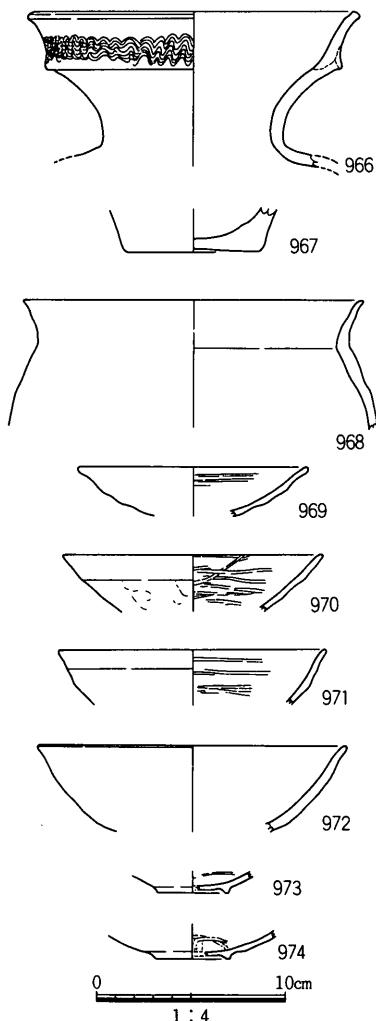


図194 I 区SD26出土遺物実測図

する体部から短く開いており、端部は丸みをもつ。色調はにぶい橙色で、焼成はあまり。12～13世紀初頭に属すると思われる。

ii) 井戸

SE01～04(図189)

I 区の西部に位置する直径1.8～2.0m前後の素掘りの井戸である。いずれも井戸内を深さ3mまで掘下げたが、この間では木組などの井戸側は確認されなかった。井戸内は長原2層の含砂礫灰褐色シルトおよびこれに長原13層が混ったブロックで埋戻されており、内部から17～18世紀代の染付けや瓦片が出土した。井戸の形状や埋土からみて、大和川の付替

て、西側の溝SD25にやや先行する時期の坪境溝と思われる。

966は口径17.6cmで、口縁部を外反させたのち、さらに外上方に短く開かせた複合口縁壺である(図版87)。口縁部の外面には粗い櫛描波状文が施されている。色調は淡い黄橙色で、焼成はややあまい。胎土中に長石・石英・チャート・酸化鉄粒を含む。弥生時代後期末の土器である。967も弥生土器の底部であるが、全体に磨滅しており、詳細はわからない。

968は口径18.0cmで、口縁部は頸部から外上方へ短く開いた甕である。口頸部はヨコナデを施しており、体部は粗いユビオサエおよびナデで仕上げている。色調はにぶい橙色で、焼成はよい。胎土中に少量の長石・雲母を含む。7世紀代の土師器であろう。

969～971は口径12.0～16.5cmの瓦器碗である。969は口径、器高とも他に比べて小さい。内面の暗文は、969はまばらであるが、970・971はていねいに施している。口縁端部は、いずれも丸くおさめている。体部の形態は外上方へ直線的に開く970以外は内湾する。973・974は内面に細い暗文を渦巻状に施した瓦器碗の底部である。13～14世紀代に属する瓦器である。

972は口径16.5cmの土師器碗で、口縁部はやや内湾

て、西側の溝SD25にやや先行する時期の坪境溝と思われる。

え以後に掘られた灌漑用の野井戸と思われる。

iii) 島畠遺構

SD27(図183・195・図版34)

Ⅲ区の中央部に位置する東西方向で、断面形が逆台形を呈する窪地状の溝である。溝内には、長原2層の含礫灰黄色砂質シルト～含砂礫粘土質シルトが堆積しており、これらの下面には人のものかと思われる多数の踏込みが確認された。溝内の埋土から古墳時代の土器および江戸時代の陶磁器や瓦片などが出土している。埋土や位置関係などからみて、南側にあるNG82-41次調査地の大溝群SD01～03とともに、江戸時代以降の耕作に係わる遺構と考えられる。これらの遺構の全体については明らかでないが、Ⅲ区では一部で南北方向の坪境溝と切合っているものの、溝の東端部が確認されており、100m以上にわたって連続する東西に長い幅3～4mの溝状の窪地と、幅8～10mの隆起部が交互に連続する状況が復元された。このような遺構は、江戸時代の河内地域で発達した、窪地内に水稻を植え、隆起部に綿花を栽培した「島畠」と考えられる。

陶磁器 975は口径12.0cmで、口縁部が頸部から水平に折り曲げられた瀬戸美濃系の小皿である。976・977は高台の径が5.2～5.5cmを測る碗の底部で、ともに色調が灰白色を呈する国産の白磁である。高台は削り出しており、接地面は976が水平で、977はわずかに開く。978は口径11.0cmで、口縁部は体部からやや開きながら外上方へ伸びる。内外面ともにオリーブ灰色を呈する陶器である。979は口径12.2cmで、口縁部は体部からやや内湾しながら外上方へ伸びる。体部の外面には花模様が、口縁部の内面には太い直線が描かれている。伊万里系の磁器である。

SD28～33(図189)

I区の中央部から以西に位置する幅2～3m前後で、断面形が逆台形状を呈する南北方向の窪地状の大溝である。これらは、長原4B層に相当する含砂礫黄褐色シルトの上面で検出されたが、窪地内の埋土に18世紀代の陶

磁器が含まれることや規模などからみて、上述したⅢ区の大溝群と同様の「島畠」に伴う溝と思われる。

以上、江戸時代の遺構・遺物について述べたが、一部の坪境溝や島畠状の遺構は、大和川の付替えで坪境溝が分断され、それ

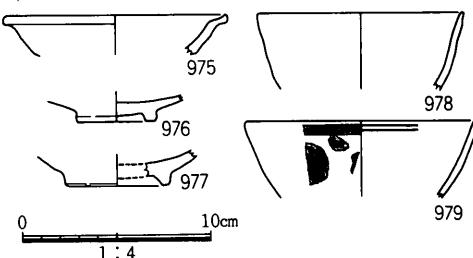


図195 Ⅲ区SD27出土遺物実測図

までの農業用水路としての機能をなさなくなつて、調査地域が稻作水田から綿花の栽培を主体とした島畠へと移行したことを物語つてゐる。なお、大和川の流域でこれまでに見つかっている野井戸の中には、坪境溝に重複して点々と掘られたものがあるが、これらも、水田が島畠へと変貌したことを示してゐる。

8) 小結

今回の調査では、長原遺跡東南部の各地層の堆積状況をはじめ、後期旧石器時代および縄文時代の石器製作に係わった場が確認されたほか、弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田址を面的に調査することができた。このほか弥生時代の灌漑水路や弥生時代後期末の方形周溝墓をはじめ、飛鳥時代の土器埋納土壙、江戸時代の島畠や灌漑水路などが検出された。これらの遺構群は、長原遺跡の歴史的な変遷過程の復元および当地域の過去の人々の生活や生業のようすを現代に伝える資料として重要な位置を占めている(図196)。

本調査以後も当地域では、土地区画整理に伴つた調査が実施されており、旧石器時代や縄文時代晩期から弥生時代にかけての旧地表がプライマリーな状態で埋没していることが明らかになっている。特に、Ⅲ区に北接したNG90-62次調査地では、長原14層内から大阪府下で最古と推定される旧石器時代の石器ブロックが発見されたほか、Ⅰ区の北約200m地点に位置するNG91-1次調査地では、現地表下約2.7mに堆積した長原15層および16層から約7~8万年前と推定されたナウマンゾウの足跡群が見つかっている。これらは、本調査を実施した1985年当時には予想もしていなかったことであり、これまで調査の機会が少なかった沖積層下部層~低位段丘構成層についても調査の必要性を実感するとともに、長原遺跡における当地区の重要性を再認識したしだいである。

ここでは、本調査を含め当地域で実態が比較的明らかになってきた弥生時代の水田址と灌漑水路について若干のまとめをしておきたい。

当地域に弥生時代の水田が開かれたころの旧地形については、1989年に作成された古地理図(図197)によっておおよその状況を知ることができる[直木孝次郎・吉井巖・足利健亮・中尾芳治・趙哲済1990]。これによると、水田址は南から北に派生した標高11.5~10.5mを測る沖積微高地の緩やかな傾斜地の北東部に開かれていることがわかる。水田が最初に開かれた時期やようすなど明らかでない部分もあるが、以下に当時の水田の形態や水田の景観について順を追つて述べる。

水田の造成に当つては、まず微高地から傾斜地の等高線に沿うように大きな畦畔を巡ら

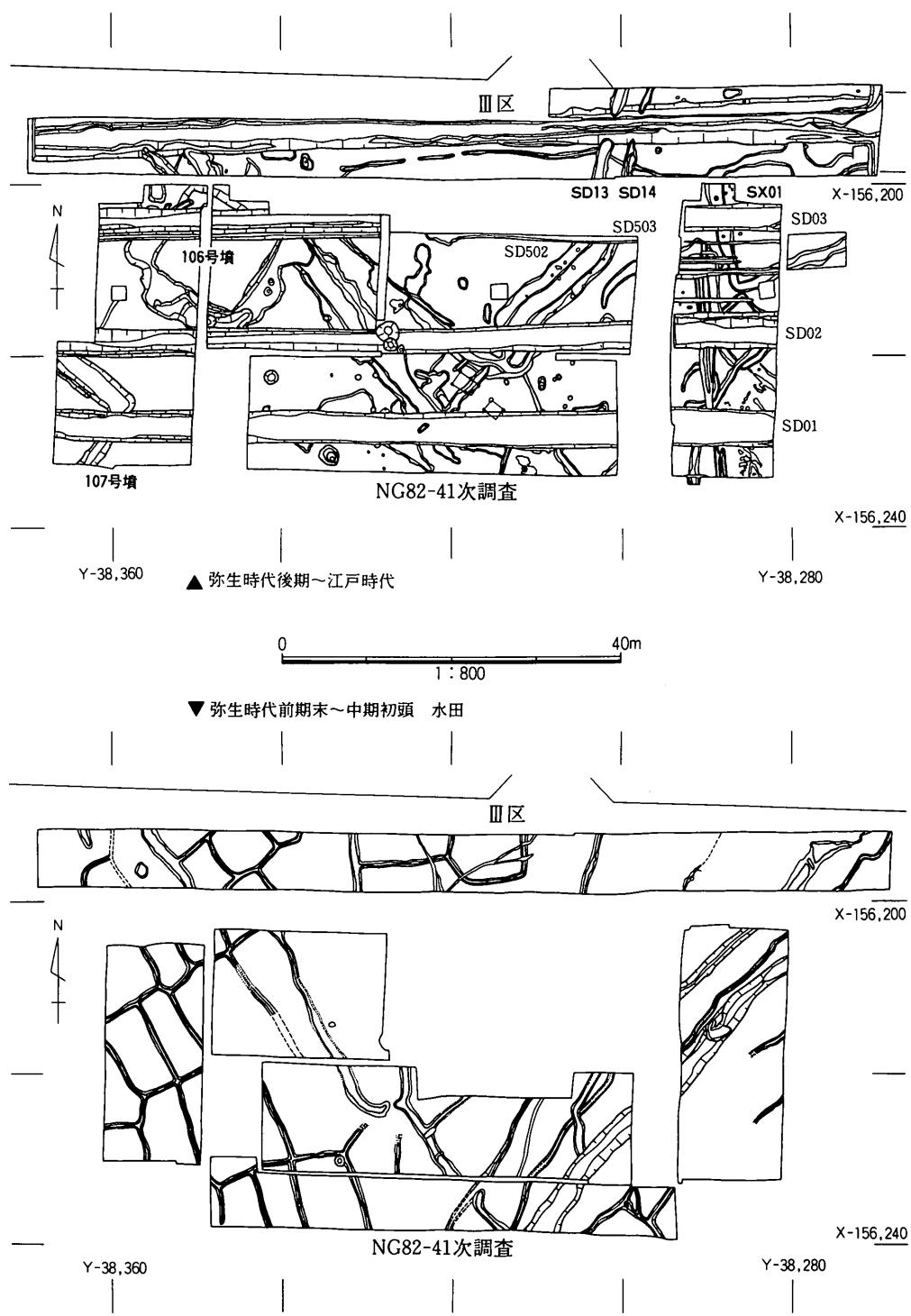


図196 調査地周辺 弥生～江戸時代主要遺構配置図

せて大区画を造ったあと、これを小畦畔で区切って区画している。水田面一筆の平面形態は長方形を呈するものが多かったが、方形や不定形なものも認められた。また、その面積は40m²前後のものが多く、中には80m²以上のものや20m²に満たないものもみられたが、これらは水田の区画が地形に制約された結果であろうと思われる。このような形態の水田は「不定形小区画水田」[坂井秀弥1981]および「B類」[工楽善通1991]などと呼ばれているもので、高知県南国市田村遺跡、岡山県岡山市百間川遺跡、兵庫県神戸市戎町遺跡、大阪府八尾市と東大阪市にまたがる池島・福万寺遺跡、滋賀県守山市服部遺跡など、弥生時代前期にさかのぼるものをはじめ、兵庫県南淡町志知川沖田南遺跡、三重県松阪市北堀池遺跡のように弥生時代後期から古墳時代前期のものが知られている。長原遺跡では、飛鳥・奈良時代の水田址(長原 7A・6Bi・6Ai層)の中に上述した水田の形態に属するものがあり、この種の水田は緩やかな傾斜地や狭小な低地などに適した水田で、水稻農耕が列島に定着した以後も途切れることなく各地で採用された水田形態であったと考えられる。ところで、一般に地下水位が高い湿田の耕土は、植物質の有機物を多く含む黒色あるいは暗灰色を呈するグライ土壤であることが多い。しかし、本遺跡の耕土(灰白色粘土質シルト)は、黒色シルト質粘土を母材とするものの、色調はもとの土壤の色が脱色して灰白色を呈しており、土壤自体もよく淘汰されたものであった。このような水田耕土の灰色化は、地下水位が相対的に低い水田のばあい、耕作開始後1~2年の耕土にみられる特徴であると指摘されている[本村悟1978]。しかし、約2000年前の耕土から耕作年数をどのようにすれば導きだせるのか、耕土の脱色作用の過程についてなど疑問点がないわけではないが、本遺跡の耕土は幾つかの点で本村氏の指摘した内容に類似している。ただ、長原遺跡の水田の耕作年数については、弥生時代前期末~中期初頭のある時期に開かれて、中期初頭~中葉のある時期に埋没したとしかいえず、時期を限定しがたいのが現状である。以上のことから本遺跡の弥生時代の水田は、常時滞水状態でなく、半湿田あるいは乾田に近い水田であったと思われる。次に水田の灌漑手段についてみることにする。

水田址の東西を北流する2本の流路SD06・07は、元は自然の小規模な川と考えられるが、西方のSD07では両岸に土手状の盛土が確認されたほか、東方のSD06でも杭列や落葉広葉樹の枝を用いたシガラミ状の遺構が見つかっており、これらは流路を灌漑水路に改修したことを示すものと思われる。流路から水田内にどのようにして水を導いたかについては今一つ明らかになっていないが、NG82-41次地区の西方に位置する流路SD07に沿った溝やSD06から分岐して北流する溝などは、流路から水を引いた水路の可能性がある。とこ

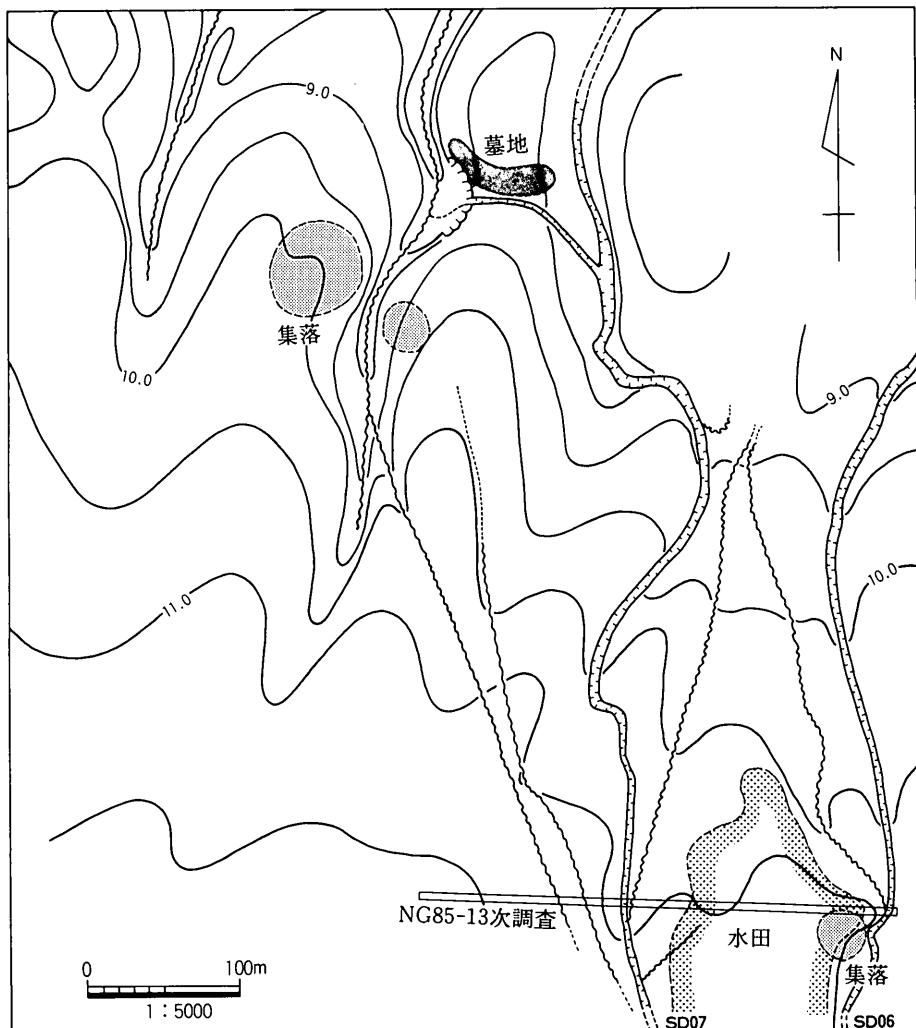


図197 長原遺跡東南部 長原9A層上面古地理図

りで、SD06内の堆積物は大半が長原9A層であることから、水田址が長原8Ci・Cii層で埋没したころには、窪地状になっており、弥生時代中期初頭の幹線水路として機能していたのはSD07のみであったようである。

水田内には、幹線水路から支線水路を経て水が供給されたものと推定されるが、当地域の水田は南から北に向って低く造成されていることから、「田越し」・「懸流し」といわれる畦畔越しの給水が可能であったと思われる。以上、本調査および周辺の調査で検出された弥生時代の水田について述べてきたが、水田址は保存状態が良好で、範囲もほぼ推定されること、さらに廃絶時期が限定されることなど、弥生時代の水田の実態を究明する上で重

要な位置を占めるものといえる。一方、当地域の水田が最初に開かれた時期や水田を営んだ集団の集落の確定をはじめ、水田面に残された耕作具の跡や足跡群の分析から導き出されるであろう当時の水稻耕作の実態やそれに係わった集団の問題などについては、今後の調査の課題として残された。これらについては、今後とも積極的に取り組むとともに、しきるべき機会に結果を報告したい。

(田中)

第Ⅲ章 出土遺物の検討

第1節 層位発掘に基づく石鏃形態の変遷的研究

1)はじめに

1985年度から、土地区画整理事業に伴う長原遺跡東南地区の発掘調査が本格化した。特に1988~90年度にかけては、この地区が同事業関連の調査の中心舞台となった。ここで、長原遺跡東南地区の調査を取上げて問題とするのは、この地区が台地から平野部に向う沖積地にあって、旧石器~弥生時代前期までの地層を良好に残しているからである。そのため後期旧石器時代の石器製作址、縄文時代晚期の住居址・土器棺墓、弥生時代前期末~中期初頭の水田址などの遺構がこの地区から見つかっているほか、遺物として縄文時代草創期の有茎尖頭器や同晚期の木製の弓・石斧の柄などが出土している。

こうした遺跡環境に対し、早くから層位学的な研究を積み重ね、現在、別表2に示す長原遺跡の標準層序が確立されている[趙哲済・京嶋覚・高井健司1992a]。その成果に基づき、層位発掘を実施し、検証を重ねてきた。石鏃をはじめとする石器遺物に対しては、出土層準の認定に特に注意をはらい取上げを行った。そして、これまでに100点以上の石鏃が同地区で採集されている。それらの詳細は各発掘年度の報告書において行うが、本論では石鏃形態の変遷を層位発掘の成果の一端として紹介したい。

2)形態分類

長原遺跡東南地区における石鏃の出土層準は、混入品を排除すれば長原12/13層漸移帯から長原8B層に当る(註1)。縄文時代から弥生時代中期の地層である。図198にそれぞれの層準の出土遺物として認定しうる石鏃を掲げた。図中の層名のうち、長原8C・9B・10・11層は水成層であり、掲載した石鏃は、これら水成層の介在によって明確に地層区分が可能な場所から出土したものである(註2)。ただし、長原12A層から長原12/13層漸移帯に関する出土層準の区分についてはやや不明確さが残る。また図中の石鏃は、30を

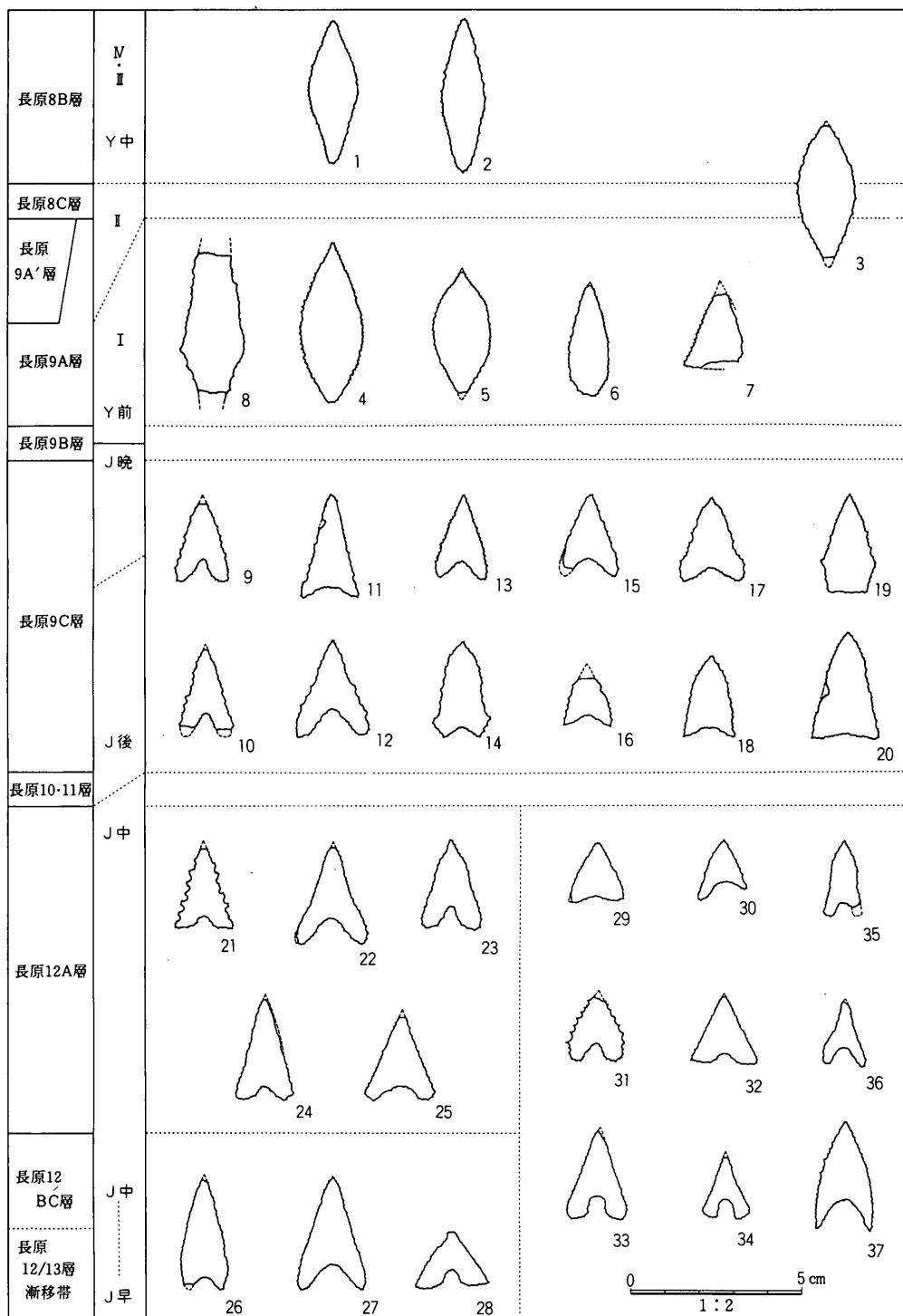


図198 長原遺跡各層出土の石鏃

J: 縄文時代 Y: 弥生時代 I ~ IV: 縱内第 I ~ IV 様式

除いてすべてサヌカイト製である。30はチャート製であり、その他に石英製のものも出土している(註3)。

本論では、形態の説明を簡便にするため、図198中の石鏃に対して適用しうる形態分類を行った(図199)。また、計測値や諸特徴を属性表に示した(表12)。この表については、森本晋氏が大阪府山賀遺跡の報告の中で用いたもの[森本晋1984]を参考とした。

形態分類に当っては刃部と基部を識別し、それぞれに分類基準を設けた。まず、刃部の5類別について説明する。

A類とB類は、ともに山形の刃部をもつ。刃縁が直線的なもの、やや湾曲するもの、また鋸歯状に剥離するものなどがある。A類とB類の区分は「長さ／幅」比で行い、その比率で1.35以下をA類とし、上回るものをB類とする。A類は、平面形が正三角形かそれに近いもの、B類は縦長の二等辺三角形のものである。

C類は、刃部最大幅が刃部の中部に位置し、紡錘形に近い形状を呈する。

D類は、側縁が緩やかなS字状を呈するものである。

E類は、刃部先端が石錐の先端部のように細く尖ったものである。刃部先端以外の部分についてみるとB～D類に類似するものも含まれる。

つづいて基部の7類別について説明する。なお、以下の「凹基式・平基式・凸基式」の名称および分類基準は佐原真氏の分類に基づく[佐原真1964]。

1・2類は凹基式である。1類は刃部端と基部の抉り込みの開始点が同一のもの、2類は刃部端から抉り部にいたるまでに、直線部や湾曲部をもつものである。

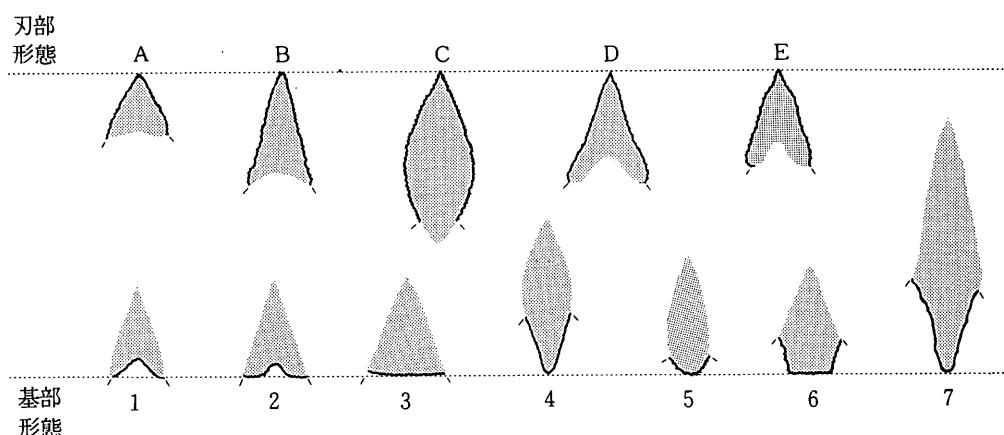


図199 石鏃の形態分類

表12 石鎚属性表

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
刃部の形態	C	C	C	C	E	C	A	B	B	B	D	B	E	B	A	E	E	B	
基部の形態	4	4	4	4	4	5	3	7	2	2?	1	1	1	2	1	1	1	6	
長さ(mm)	40.8	44	42	46.2	38	32	26	—	25	—	29.6	27.7	23.8	27.5	23.8	18	24.2	23.3	28.4
幅(mm)	14.4	12.8	16.8	18.6	17	11.6	21	18.6	15.5	16	16.9	21.3	15.1	16.6	17	13.8	18.7	15	16
厚さ(mm)	4.3	4	4.3	3.9	4.4	4.1	3.7	6.7	2.4	2.4	3.3	4.2	3.4	5.1	3.2	2.6	3.6	4	3.6
抉りの深さ(mm)	—	—	—	—	—	—	—	—	6.5	—	3	8	5.5	3	5.5	3	4	2.5	—
長さ／幅	2.83	3.44	2.50	2.48	2.24	2.76	1.24	—	1.61	—	1.75	1.30	1.58	1.66	1.40	1.30	1.29	1.55	1.78
長さ／厚さ	9.49	11.00	9.77	11.85	8.64	7.80	7.03	—	10.42	—	8.97	6.60	7.00	5.39	7.44	6.92	6.72	5.83	7.89
幅／厚さ	3.35	3.20	3.91	4.77	3.86	2.83	5.68	2.78	6.46	6.67	5.12	5.07	4.44	3.25	5.31	5.31	5.19	3.75	4.44
抉りの深さ／長さ	—	—	—	—	—	—	—	—	0.26	—	0.10	0.29	0.23	0.11	0.23	0.17	0.17	0.11	—
重さ(g)	2.17	1.89	2.19+	2.8	2.43+	1.54+	1.20+	4.84+	0.60+	0.63+	1.02+	1.42	0.82	1.47	0.79+	0.41+	1.12	1.07	1.39
刃部が鋸歯縁か否か	否	否	否	鋸歯	否	否	鋸歯	否	鋸歯	鋸歯	否	否	鋸歯	否	否	否	否	否	
先行剥離面の残存	無	無	無	無	無	無	無	無	無	有	無	無	無	無	無	無	無	有	
主剥離面の残存	無	有	無	無	無	有	無	無	有	無	無	無	無	無	無	有	無	無	
自然面の残存	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	

番号	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
刃部の形態	B	B	D	E	B	A	C	D	A	A	A	A	A	D	D	E	D	C
基部の形態	1	2	1	2	2	2	1	1	2	1	1	2	2	2	2	2	1	1
長さ(mm)	30.5	25	29	25.4	31	26.5	33	32	16	16.6	17.2	20.5	21	27	19.5	21.6	20	31.1
幅(mm)	19.4	17	21.5	17.3	16.9	20.7	14	19.7	21.2	16	14.2	16.9	19.4	17.6	13.7	12	12.4	17
厚さ(mm)	4.2	3.4	3.2	2.5	3.1	3.7	3.7	3.9	2.9	3.3	3.6	3.1	3.4	2.7	2.8	2.7	2.6	4.2
抉りの深さ(mm)	1.5	3.5	7.5	6.5	4	4	3.5	7	5	2	5.5	5	3	6.5	5.5	4	5.5	8.5
長さ／幅	1.57	1.47	1.35	1.47	1.83	1.28	2.36	1.62	0.75	1.04	1.21	1.21	1.08	1.53	1.42	1.80	1.61	1.83
長さ／厚さ	7.26	7.35	9.06	10.16	10.00	7.16	8.92	8.21	5.52	5.03	4.78	6.61	6.18	10.00	6.96	8.00	7.69	7.40
幅／厚さ	4.62	5.00	6.72	6.92	5.45	5.59	3.78	5.05	7.31	4.85	3.94	5.45	5.71	6.52	4.89	4.44	4.77	4.05
抉りの深さ／長さ	0.05	0.14	0.26	0.26	0.13	0.15	0.11	0.22	0.31	0.12	0.32	0.24	0.14	0.24	0.28	0.19	0.28	0.27
重さ(g)	1.65+	0.83+	0.83+	0.82	1.00+	1.14+	1.30+	1.6	0.59	0.66+	0.54	0.76+	0.92+	0.89+	0.37+	0.41+	0.30+	1.43
刃部が鋸歯縁か否か	否	鋸歯	否	否	否	否	否	否	否	否	鋸歯	否	否	否	否	否	鋸歯	否
先行剥離面の残存	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	有	無	無	無	無	無	無	無
主剥離面の残存	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無
自然面の残存	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無

() 内の数値は復元値、「-」は計測および算出不能を示す。

3類は平基式である。

4～7類は凸基式である。4類は端部の尖るもの。5類は端部が丸みをもつもの。6類は端部の平坦なもの。7類は鎌身と茎の区別のできるもの(有茎式)である。

以上の分類を図198の37点の石鎌に当てはめると次のような結果となる。

A1類：16・29・30 A2類：25・28・31・32 A3類：7

B1類：11・13・15・20 B2類：9・10?・21・24 B6類：19 B7類：8

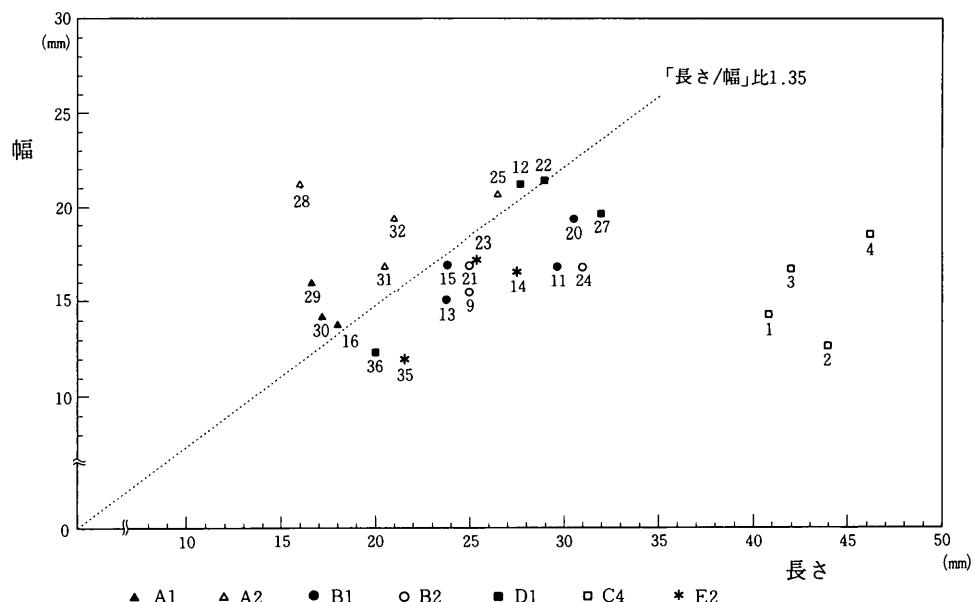
C1類：26・37 C4類：1・2・3・4 C5類：6

D1類：12・22・27・36 D2類：33・34

E1類：17・18 E2類：14・23・35 E4類：5

この中から、長さと幅の値を知りうる3点以上の石鎌を含むものについて、長さと幅の相関関係を図に示したものが図200である。

A類とB類は「長さ／幅」比によって区分したものであるから、当然、相関図中で分布域を異にする。しかし、A1類とA2類が幅の値によって広狭に分れて分布するのに対して、B1類とB2類は似通った範囲にある。C4類は紡錘形をした凸基式の石鎌で、長さ40mmを越えており、その他の石鎌に比べて際だった値を示す。D1類は「長さ／幅」比1.3～1.6にまとまって分布している(註4)。E2類はやや縦長になる傾向がみられる。



3) 各層準の石鏸形態

長原 12／13 層漸移帶～長原 12BC 層：この層準からは縄文時代中期前半に属する船元Ⅱ式土器が出土している。見つかっている石鏸には、長さ16mmの小型品から長さ33mmの大型品までがある。小型の石鏸は、平面が正三角形に近い A2 類である(28)。また、大型品には C1 類(26)や D1 類(27)がある。

長原 12A 層：本層の上面付近より縄文時代中期末に属する北白川 C 式土器が出土していることから時期が推測される。石鏸形態の上では、A2 類(25)や D1 類(22)が引き続き存在し、新たに B2 類(21)や E2 類(23)がみられる。B2 類の 21 は鋸歯状の刃部をもっている。また、刃部先端を細く尖らせる E 類がすでに現われていることも注意される。

12 層中のその他の石鏸から、この層準の石鏸には、抉りが深く、脚部の発達したものが多いことがわかる。特に C1 類の 37 はその典型例といえる。脚部を発達させることに関しては、単に長脚というだけでなく、基部形態 2 類のものも多い点が指摘できる。なお、30 のチャート製石鏸は A1 類に分類されるものである。

長原 9C 層：本層は Ci ～ Ciii 層に細分される。その Ci 層の上面からは、縄文時代晩期に比定される滋賀里 IV 式土器が出土している。また、Ciii 層下部から縄文時代後期の四ツ池式土器が見つかっている。A1 類(16)・B2 類(9)・D1 類(12)・E2 類(14)が引き続いでみられ、その一方で B1 類がいくつかのバリエーションをもってみられる。それは、抉りの深浅、刃部が鋸歯状か否か、刃部が直線的か湾曲するかといった違いである。抉りの深いものとしては 13・15、浅いものには 11・20 がある。しかし、抉りが深いといっても 12 層中にあるものと比べるなら、その度合は低くなっている。その他、この層準にみられる石鏸として B6 類・E1 類がある。B6 類(19)は基部の先端が平坦になる特異なものである。これは有茎式に含めるべきかもしれない。全体的にみて、B1 類や E1 類といった基部形態 1 類となるものがめだつ。

長原 9A 層および 9A' 層：この 9A' 層とは 9A 層を母材とする水田作土層をさす。両層から縄文時代晩期の長原式土器と畿内第 I 様式の土器が出土する。また、長原遺跡東部(NG92-39 次調査)では、9A 層上面で畿内第 II 様式の土器が確認されている。石鏸形態はこれまでのものとは一変し、凹基式に代って凸基式が主流を占める。4・5 はともに紡錘形を呈するが、5 は先端部を細く作り出す E 類である。6 は丸みをもった基部(基部形態 5 類)を有する。7 は平基式で、平面形が正三角形となる(A3 類)。平基式といっても基縁はやや膨らみをもつ。また、鋸歯状の刃部を作っている(註 5)。8 は掲載する他の石鏸とは出土地

区を異にし、長原遺跡の北西部に当る出戸地区(DD85-1次調査)で見つかった凸基有茎式の石鎚である。長さ41mm以上、重さ4.8g以上あり、いわゆる戦闘用石鎚である。

長原 8C～8B層：8C層は水成の地層である。3の石鎚は紡錘形を呈し、9A層のものと変りはない。8B層の上面からは畿内第Ⅲないし第Ⅳ様式の土器を伴う方形周溝墓が見つかっている。1・2の石鎚は紡錘形(C4類)であるが、8C層や9A層のものと比べて細長い形態である。

4) 石鎚形態の変遷

図198をもとに石鎚形態を概述してきた。各形態の消長をわかりやすくするために、それを分類名を用いて表わしてみると図201のようになる。図中では、長原12層内の出土層準の細分ができないかったものを、12/13層漸移帯～12B層と12A層との境界線上に置いた。

それによると、長原12BC層から長原9C層にわたってD1類がみられ、また、長原12A層から長原9C層に連続するもの(A1類・B2類・E2類)もある。しかし、それらは長原9A層までは続かず、代って長原9A層から長原8B層に連続する新たな形態(C4類)が現われる。ここに石鎚作りの大きな転換期があることがわかる(註6)。

新形態の出現をみる長原9A層は、上限を弥生時代前期、下限を弥生時代中期初頭とする。これは森本晋氏や松木武彦氏がC4類(松木氏の分類の凸基Ⅱ式)の出現をI様式新段階とすることと矛盾しない[森本晋1986・松木武彦1989]。このC4類という紡錘形をした石鎚は、長原9A層から長原8B層にかけて、幅広のものから細長いものへと変化していくこともうかがえる。

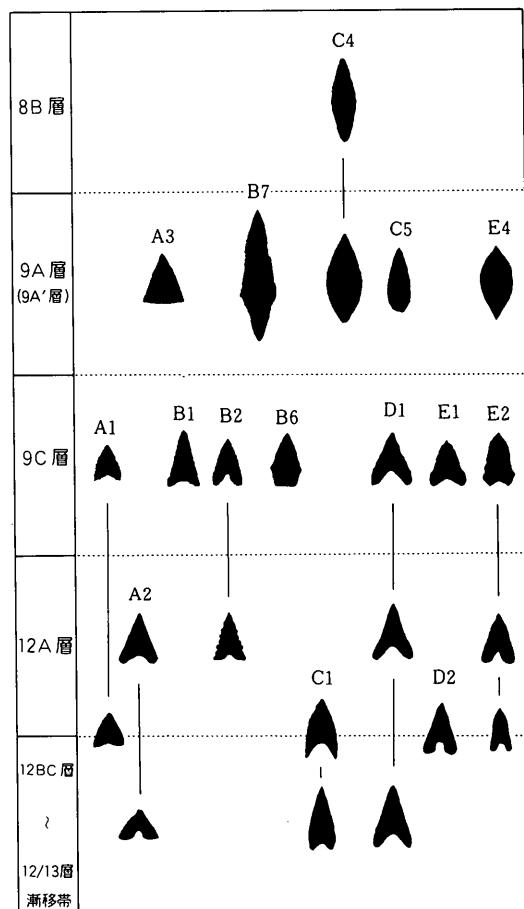


図201 石鎚形態の変遷

長原 9A 層には B7 類という凸基有茎式(8)が含まれている点もまた注目される。凸基有茎式の出現時期について、佐原真氏は「中期 2」の時期には存在し、「中期 1」にさかのほる可能性を指摘する[佐原真1964]。長原 9A 層からの出土によって、中期初頭以前にその初現を求めることができよう。

長原 12 層から長原 9C 層に連続するいくつかの形態がある中で、長原 12 層あるいは長原 9C 層に特徴的な石鏸があることも指摘できる。まず、長原 12 層には平面が正三角形に近く、刃部両端と抉り部の間に直線部や湾曲部をもつ A2 類が存在する。また、紡錘形の刃部をもつ C1 類も 12 層を代表する石鏸といえよう。一方、長原 9C 層では、縦長の二等辺三角形の刃部に、抉りの浅い基部をもった B1 類が特徴的である。

この B1 類については、先に図200について述べた中で、B2 類との関係を注目した。B1 類と B2 類の「長さ／幅」の比率は似通っており、両者の形態差が時間的な変遷を示すものとして捉えうるかは今後の課題である。また、A1 類と A2 類については、「長さ／幅」の比率を異にすることから、もともと別形式であったのではないかと思われる。

以上、層位発掘の成果に基づいて石鏸形態の変遷をみた。今後、石鏸の外形だけでなく、細部調整や計測値の詳細な分析を通して、さらに、層位発掘の成果を活かすことが可能であろう。

(高井・櫻井)

註)

- (1)長原遺跡では長原 7B 層(弥生時代後期～古墳時代)からその層準固有と思われる石鏸が出土するばかりもある。また、長原 12／13 層漸移帶からは縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土する。
- (2)本論では、水成層内の出土遺物については基本的にその直下の地層に属するものとして取り扱う。
- (3)長原遺跡の北西側にある喜連東遺跡(KR92-7次調査)において、黒曜石製の石鏸が 1 点見つかっている。基部を欠損するが、石鏸形態は B1 類あるいは B2 類に分類される。
- (4)図200をみると、D1 類は「長さ/幅」比 1.3～1.6 にまとまっているが、実際の大きさの上では長さ 30mm、幅 20mm 前後のものと、長さ 20mm、幅 12mm 程度のものの大小 2 形式があると予測される。
- (5)図198の4や7と類似する石鏸が山賀遺跡 9 号墓から出土している[森本晋1984]。山賀遺跡のものは被葬者に射込まれていたらしい。9 号墓の時期は弥生時代中期初頭と推定されている。
- (6)松木武彦氏によれば、弥生時代前期にも縄文時代の石鏸の伝統を継承する大型品が存在するという[松木武彦1989]。

第2節 古墳時代後半期の土器の変遷

1)はじめに

古墳時代の土器は、須恵器の出現に伴う様式の画期的な変化を境に大きく二分される。須恵器出現以前の土器群は古式土師器と総称されるが、長原・瓜破遺跡においても当該資料の出土量は少なくない。これまで瓜破北遺跡において資料の一部を検討し、三つの時期に分類した[田中清美1980]が、それ以後、資料の増加がありながらも十分な検討はなされていない。しかし、隣接する八尾市域の出土資料については、第V様式から布留式までの変遷を系統的に把握する作業が一定の成果をあげており[米田敏幸1991]、これらの業績を踏まえて、当遺跡の資料の分析を行う必要があろう。

これに対して、後半期の土器群については『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲで、長原遺跡西地区の5世紀後半～6世紀初頭の集落出土の土器群を報告し、土師器における器種と製作手法に関して検討を加えた[京嶋覚1992b]。そして本書第Ⅱ章でも6世紀代の資料を中心に報告し、若干の検討を行った(本書pp.139-142)。

後半期の土器様式は須恵器と土師器の系譜の異なる2種の土器群から構成される。須恵器に関しては陶邑古窯址群から出土した資料の編年がなされており[中村浩1980、田辺昭三1981・1982]、こうした生産地における編年は、消費地においても、資料の時期差の根拠として大いに有効性をもっている。しかしながら、消費地における土器様式は、土師器を含む多様な系統の土器群が混在することで、固有の地域色として特徴づけられるものであり、その史的意義を明らかにするための独自の編年作業も必要とされる。本節では、こうした観点に立って、須恵器・土師器両種の土器群の器種や、土師器の形状・調整手法に着目し、当地域の土器様式の変遷を辿ろうとするものである。

2)土器群の変遷

この時期の土器群の変遷を、器種構成や調整手法を手掛かりにして大きく5段階に区分し、各段階の特色を以下に記していく(図202)。

1期

NG16次調査出土資料、NG82-41次調査井戸出土資料、NG82-48次・NG84-4・6次調査出土の土器群などがある(註1)。

須恵器は最古式のもので、形態上の個体差が大きい。蓋杯・高杯・器台・壺・魂・椀・甕などがある。須恵器の有蓋および無蓋高杯は形態が多様で、まだ定型化していない。蓋杯の量がそれほど多くなく、高杯と同じ程度の比率である。あまい焼成であるが、須恵器と考えられる鍋があるものの、須恵器の甕は認められない。須恵器には焼成不良のものなどがあるため、遺跡内に窯が存在する可能性も否定できないが、この段階の集落の位置する長原遺跡東部は、旧平野川に近接するやや低地であり、窯を構築するのに適した環境とはいえない。また、土師器（および軟質で酸化焰焼成の土器）の占める割合が須恵器に比べて高い。

土師器の高杯には布留式では一般的でなかった椀形の高杯A類（註2）10・11と、杯部に段をもつC類の小型・大型品12・13がある。調理用土器は軟質の韓式系土器といわれる器種が中心で、甕・長胴甕・鍋・小型平底鉢・壺がある（註3）。これらの外面にはタタキを施すものがあり、タタキメには平行（14・15・20）・格子（24）・縄蓆文（21）がある。しかし、外面にタタキを施さず、ハケ調整やナデ調整を最終調整とするものがすべての器種においてみられ、数量的には後者のほうが多い。また、後者は前者に比してやや粗製の傾向がある。後者はいずれも内面調整にナデを用いるc手法が多く、外面調整がハケ調整のc-1とナデ調整のc-2の二つに分けられる（註4）。韓式系土器と総称される一群は、調整手法にハケメやナデのものも含めて考えられており[韓式系土器研究会1987、p.3]、その点で、これらを粗型とした器種を含むのちの土師器との区別は困難であるといえよう。甕の底部の蒸気孔は中央に円孔、その周囲に5個以上の円孔を穿つものや、不規則に多数の円孔を穿つものなどである。甕・鍋の把手は棒状のもので、先端をヘラで切るものと、丸くしたものがある。把手の上部にはヘラで切込みをいれるもの、指でなでて凹ませるもの、何も施さないものがある[京嶋覚1992b、pp.193-194]。

製塙土器は、外面をナデ調整するa手法を用いた薄手丸底のA類、いわゆる丸底1式[広瀬和雄1988]がすでに存在し、脚台式は認められない。また、タタキを施したb手法の資料もごく少量含まれている（註5）。

この段階は食器や貯蔵用としての須恵器と調理用としての軟質の渡来系土器が出現する画期的な時期である。また、軟質の渡来系土器を模倣したと思われるc手法を用いたやや粗製の軟質土器がいち早く作られ始めている。調整手法からみるかぎり、これらの製作が布留式土器の技術とはほとんど無縁のものであると思われることは、その後に顕在化する地域色の成因を考える上で注意しておきたい。

2期

長原遺跡の1983年度調査SK39出土資料[大阪市文化財協会1992a、pp.80-86]、NG89-25次調査溝出土資料、NG91-70次調査井戸出土資料などがある。

須恵器の蓋杯や高杯の量が増加し、土師器と須恵器の量はほぼ同じ割合を示す。また、須恵器の食器のうち蓋杯の占める割合は前段階と同様に、高杯とほぼ等しい(表7-④)。

土師器高杯は小型のA類が主体で、脚部にスカシ孔をもつものはこのころまである。大型の高杯は少なく、段をもつものあまりない。前段階に多く存在した小型平底鉢はおおむねみられなくなる。これに代って中小型甕が多くなる。中小型甕・長胴甕・甑・鍋の外側調整はハケメで、内面調整にもハケメを用いるものが現われるが、ヘラケズリのうちにハケ調整する41などのように、部分的に用いられているのみで、いまだハケ調整が盛行しているとはいえない。また、ナデ調整のものやヘラケズリを用いるものも多い。甑・鍋の把手の形状は太い角状のものが多いが、46のように体部に粘土棒を挿入して取付けたのち、これを指で押潰して、扁平に仕上げたものがすでに出現している。ただし、のちの扁平な把手と違い、上方へ折り曲げることはない。また、この段階の資料には竈形土器があるが、全形を知ることのできる資料はない。しかし、生駒西麓産の曲げ庇系[稻田孝司1978]のものではないことは確かである。須恵器の甑や鍋はまったくみられない。

製塩土器は前段階から変化しておらず、丸底1式が主流である。

この段階のまとまった資料は少なく、今後、もう少し実体を明らかにしていく必要がある。しかし、渡来系土器の出現による新しい土器作りの動きの中から、内面調整や把手の形状にみられるような、のちの土師器に継承される要素が出現しはじめる段階であるといえ、また、渡来系土器の一種である小型平底鉢が消失するなど、器種の選別がなされる段階といえよう。

3期

長原遺跡1983年度調査SK12出土資料[大阪市文化財協会1992a]、瓜破遺跡のUR1次調査出土資料、本書報告のVI区SD22・23出土の資料などがある。

須恵器蓋杯の出土量が増加する。須恵器杯身の口径は10cm台で、蓋では12cm台である。ヘラケズリの方向は逆時計回りのものが6割から7割を占める。陶邑古窯址群ではTK73型式の段階すでに存在する須恵器甑(56)が、この地域ではこの段階になって初めて出現する。これは当初、軟質の渡来系土器やその模倣品の甑の普及が顕著であるためにみられなかったものの、この地域での須恵器生産の開始を契機に使用されるようになったのでは

表13 土器編年の位置付け

後半期土器の時期	須恵器	長原古墳群	備考
1	TK73	2期	船橋O-II
	TK216		
2	ON46	3期	船橋O-III
	TK208		
3	TK23	4期	船橋O-IV・V
	TK47		
4	MT15		飛鳥 I
	TK10		
5	TK43		
	TK209		

なかろうか(註6)。また、飛鳥時代における杯Bの相型といわれる台付碗に類似する55のような器種が出現している。

土師器にも2、3種類の杯(58・59)が少量現われるが、主要な食器にはなりえていない。土師器高杯はA類のほかに、布留式の高杯に類似した口縁端部を外方に屈曲させる椀形の杯部のB類(61・62)が新たにみられるようになる。また、大型で杯部に段をもつC類(63)もみられ、裾部の円形のスカシ孔は大型品には残る。土師器高杯の脚部内面の仕上げ調整が省略され、粗雑なままのものが現われてくる。さらに、新しい器種として

平底で直線的な体部をもち、上方に大きく屈曲する把手をもつ把手付鉢(64)が出現する。また、中部瀬戸内地方のものと思われる二重口縁の甕などの他地域産の土器もみられるようになる。

土師器の中小型甕・長胴甕・甌・鍋の内外面調整に器種を越えた規格性が現われ、内面をハケメ調整、あるいはその中にナデやヘラケズリを施すa手法・b-1手法が主流となる。布留式甕の系譜をひく甕(66)がこの時期まで存続するが、内面調整はヘラケズリではなく、ナデやハケ調整となっている。また、生駒西麓産の胎土の羽釜(75)がこの段階で初めて現われる。羽釜は体部外表面が縦方向のハケ調整で、内面はユビオサエ痕を顕著に残すナデ調整で非常に薄く作られている。胎土や調整手法からみて、長胴甕とは異なる系譜の器種であると思われる。これに伴う可能性のある曲げ底系竈は今のところ出土していない(註7)。

製塩土器には、A類でa手法のいわゆる丸底1式のものが少なくなり、外面にタタキを施すb手法で薄手のものと浅い椀形のB類がめだつようになる。前者は備讃瀬戸地域、後者は紀ノ川流域に由来する製塩土器と考えられる(註8)。

この段階は土師器調理具における規格性のある調整手法にみられるよう、2期に萌芽した地域色の一端が完成の様相を呈する時期である(註9)。それと同時に、土師器高杯の脚内面調整の省略や杯部の形状の変化、須恵器甌・脚付碗や土師器羽釜・把手付鉢など、のちの土器様式を構成する新器種の追加があり、また、須恵器蓋杯の出土量が増加する傾

向や、他地域産の土器も出土するようになるなど、地域色の顕在化とともに新たな変化のきざしをはらんだ時期である。

4期

本書報告のIX区SD52出土資料、NG86-41次調査井戸出土資料などがある。

須恵器蓋杯が大量に出土する遺構があり、3期同様に須恵器の占める割合が大きい。須恵器甌は84のように頸部が長くなり、長脚二段高杯(83)・瓶などの器種が新たに出現している。須恵器蓋杯の口径は杯身で12~13cm、蓋で14~15cmとかなり大型になっている。また、ヘラケズリの方向は9割以上が逆時計回りとなり、その中の2割に内面の同心円当て具痕がみられる(本書p.142)。

土師器高杯において、前段階に多かったB類は未確認であるが、A・C類は存在する。C類の口縁部は90のように、A類と同様の内湾形態を示すものが現われている(註10)。また、脚部が中実のものや裾部の形状が異質なものもある。甌には二重口縁の93・96や長い口縁部の97などがあって、前段階に顕在化した地域色を共有しない土器がめだつようになる。この段階でもまだ土師器杯の量は非常に少ない。

土師器調理具における内外面の調整手法は前段階と同じくハケ調整が主流である。

製塩土器では前段階と同様のものがあるほか、備讃瀬戸地域の6世紀代にみられる厚手で、やや大型の製塩土器が初めて出現する。

この段階は須恵器甌や他地域の系譜をひく土器の増加によって、土師器における地域色がやや薄れる時期といえよう。また、NG86-41次調査の井戸から木製の叩き板や当て具が出土している[藤田幸夫1987]ため、遺跡内で須恵器が生産されていたことは確実である。操業開始時期は不明であるが、この段階の須恵器の多くは当地域内で自給されていたものと思われる。

5期

NG12次調査出土資料はこの段階終末期の資料である。

須恵器におけるTK209型式の時期には土師器杯C(114~118)・把手付椀(120)が出現し、この地域の飛鳥時代を通じて存在する定型化した土師器高杯B(122)、甌A・Bなどもすでに存在している(註11)。杯Cはその祖型となりうる器種が3期に少量存在し、この段階で成立した器種であるが、須恵器蓋杯に比べてまだそれほど多くはない。高杯Bにみられる脚部内面の調整や杯部の特徴も3期に現われている。甌Aはb-2手法を採用し、甌Bは前段階にはみられなかった手法を用いる南河内で成立した器種であるが、その系譜関

係は現在検討中である。中小型甕・長胴甕・甌・鍋における a 手法・b-1 手法は顕著でない。甌は飛鳥Ⅱ以後姿を消す。生駒西麓産の土師器羽釜・竈形土器もともに出土する。このように飛鳥Ⅰの土器様式を構成する土師器の器種や特徴の一部はすでに3期の段階に出現したものである。

また、前段階と同じく厚手で、やや大型の製塩土器が出土しており、タタキを施すものとそうでないものがある。

須恵器における TK209 型式の時期の土器群はのちの「律令的土器様式」[西弘海1982、p.463] の祖型となるものであり、3期の土器群に起源をもち、4期を通じて発展してきたものと思われる。土師器に関していえば、前段階からこれらの資料の間には型式上の飛躍があり、未確認ではあるが、須恵器における TK43 型式の時期の資料がその間を埋める可能性がある（註12）。

3)まとめ

古式土師器から新しい土器様式への最大の変化について、西弘海氏は須恵器と土師器という質的に異なる二者からなる土器複合が一般的になることと、須恵器杯を主とする食器類の充実をあげている[西弘海1982、p.453]。

この地域の後半期の土器群を検討すると、軟質の長胴甕・甌・鍋やそれを模倣した土器群が1期の段階ですでに主要な器種として存在しており、須恵器と土師器（軟質の土器）からなる新しい器種構成の原型は当初から成立していたと思われる。したがって、須恵器の出現とともに土師器調理具における画期的な変化もまた、この時期の様式変化の重要な要素としてあげる必要があろう（註13）。一方、食器については須恵器食器類の急速な普及の中で、土師器高杯・小型鉢・小型直口壺などの布留式土器の系譜にある器種と手法が継承され、のちに発展する土師器食器類の祖型となっている点も見逃せない事実である。

その後の6世紀初頭までの土師器の変化は、新しい生活習慣の定着に伴う、新旧の器種の選択や製作手法の規格化などを通じた在地的な小様式の形成・成立とみることができよう。そして、この在地的様式の中には、飛鳥時代に成立する精製の土師器食器類や調理具に通じる器種・器形・調整手法上の特徴の一部が、すでに萌芽しており、より新しい様式へと発展する諸要素を内包しているものと考えられる（註14）。

さらに、4期とした6世紀前半～中葉においては、前段階の地域色を継承しつつも、他地域に系譜をもつと思われる土器が混在する傾向が一層強くなっている。この段階から5

表14 引用資料一覧表

土器番号	発掘次数	文献
1~4・7~10・15・16・18~20・24	NG84-4	田中清美1987
11・14・17・23・25	NG82-41	田中清美1987
5・6・12・13	NG84-6	未報告
22	NG83-1	田中清美1987
21	NG86-91	未報告
26~36・38~40・44~47	NG83-70	大阪市文化財協会1992a、pp.80-86
37	NG85-16	本書報告SD01
41~43	NG91-70	未報告
48~51・54・57	NG83-32	大阪市文化財協会1992a、pp.78-80
52	NG85-16	本書報告SD28
53・64	NG85-16	本書報告SE01
55	NG85-16	本書報告SD51
56	NG85-16	本書報告SD37
58	NG85-16	本書報告SP02
60	NG85-16	本書報告SB24
61・62	NG85-16	本書報告SD39
63	NG85-16	本書報告SD04
59・65~75	UR1	未報告
76~89・91・94~96・98・100	NG85-16	本書報告SD52
90	NG86-70	未報告
92・93・99	NG85-16	本書報告IX区包含層
97	NG85-16	本書報告SD34
101~122・124・126~131・133・134	NG12	未報告
123	城山その1	大阪文化財センター1986b、pp.154-157
125	NG83-46	大阪市文化財協会1992a、p.166
132	NG1	長原遺跡調査会1978、図版65

期後半に当る飛鳥Iの土器群への変遷要因の一端は、3~4期の土器群に反映された、土器の流入を伴う他地域との交流の活発化にあるのではないかという想定も成り立つのではないか。

西氏は飛鳥Iの段階に出現する精製された土師器食器類のうち杯Cは銅鏡を模倣したものとされ、法量に規格性があり、内外面をヘラミガキや暗文で飾ることをその根拠とした[西弘海1982]。しかし、外面ヘラミガキや内面の放射状暗文はすでに古墳時代には成立していた技法であり、法量の規格性は7世紀中葉の飛鳥II以後に顕在化する現象であって、杯Cの成立段階においては特に顕著でない。7世紀初頭における土器様式の画期的变化を須恵器・土師器ともに「金属器指向型」[西弘海1982、pp.457-459]と評価することは、新様式の土師器群の祖型を、河内地域で成立した古墳時代の土器群とみる本節で記した観点からすれば、再考を要するであろう。ただし、6世紀末から7世紀初頭にかけての「支配層」の政治的動向に様式変化の背景を求める点は継承すべき視座といえよう(註15)。

(京嶋)

註)

- (1) いすれの資料も未報告である。その一部は[田中清美1987]で紹介されている。
- (2) [京嶋覚1992b]で用いた古墳時代の土師器に対する分類であり、以下、古墳時代土師器についての分類名・手法名もこれに従う。
- (3) 韓式系土器の定義は[植野浩三1987]に従うが、ここではおもに軟質土器をさす。
- (4) [京嶋覚1992b]では内面ナデ調整をc手法としたが、外面調整の違いで新たに細分する。
- (5) 以下、製塙土器についての分類と手法は[京嶋覚1992d]に従う。
- (6) 後述のように、TK10型式の段階には確実に須恵器窯が存在しており、その操業開始をこの時期までさかのぼらせるこもできよう。
- (7) 5世紀に現われる長胴甕から6世紀になって鍔がついた形態の羽釜が登場するといわれる[原口正三1979、米田敏幸1991]。弥生土器から古式土師器において鍔と呼ぶべき部位はみられず、やはり渡来系の要素とみるべきではないだろうか。ただし、埴輪においては鍔をもつ形象埴輪がある。また、稻田孝司氏は両系統の竈に組み合う「釜形土器」が異なる可能性を示唆されており[稻田孝司1978]、その後、中西克宏氏が生駒西麓産の羽釜が同じ胎土の曲げ底系竈との組合せを指摘され[中西克宏1988、pp.16-17]、[京嶋覚1992b]では、長胴甕と付け底系竈が組み合うことを示唆した。
- (8) 同様の資料が多く出土している和歌山市西田井遺跡の資料について富加見泰彦氏の、古墳時代の製塙土器について広瀬和雄氏のご教示を得た。
- (9) 特に、調理用土器については内面ヘラケズリ調整を特色とする布留式甕とは異なる調整手法が主流であり、地域色の形成主体はかつての布留様式のそれとは異なるのではなかろうか。
- (10) [京嶋覚1992b]でも述べたが、八尾市八尾南遺跡[八尾市文化財調査研究会1985]では当地域の1~2期の段階で内湾傾向がみられる。
- (11) [京嶋覚1992c]で用いた飛鳥時代土器に対する分類である。
- (12) 柏原市平尾山古墳群における溝からの一括資料に、長原遺跡の4期よりやや後出のTK43型式の須恵器を伴う土器群がある[石田成年1987]。土師器高杯C類が3点出土しており、これらは4期の高杯と飛鳥時代における高杯Bとの間を埋める好資料といえる。
- (13) 西氏は生活様式の変化に伴い緩やかな変化があったとした[西弘海1982]が、川西氏は新出の資料の増加を踏まえて、煮沸形態の変革による急進的な変化があったとする[川西宏幸1982]。
- (14) 坪之内徹氏も飛鳥時代の土師器食器類の祖型が古墳時代にあるとの推定を示されている[坪之内徹1989]。
- (15) 羽曳野市茶山遺跡および藤井寺市土師の里遺跡の一帯は、古墳時代における埴輪、飛鳥~奈良時代における土師器の生産遺跡といわれ、「支配者の要求・強制によって生まれた」ものと考えられている[笠井敏光1984]。坪之内氏が想定するように[坪之内徹1989]、7世紀の精製された食器類の祖型となる古墳時代の高杯や杯もこの地域で生まれたものとすれば、それらの変化もまた政治的背景をもっていたと考えられよう。

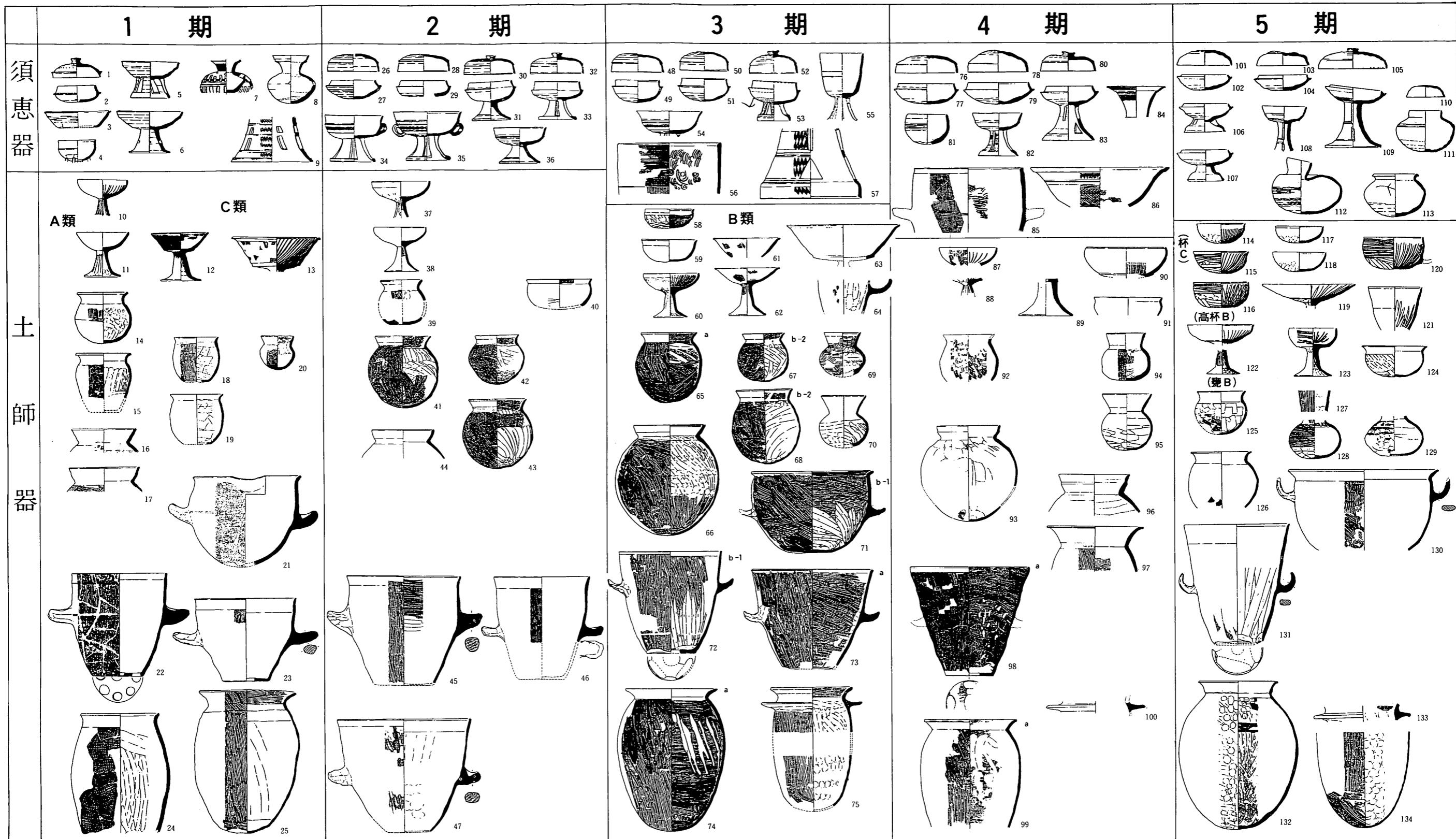


図202 古墳時代後半期の土器編年 (縮尺 1:10)

(括弧内の器種名は【大阪市文化財協会1992b】、それ以外は【京嶋覚1992b】に従う。)

第3節 長原古墳群の馬形埴輪

1)はじめに

長原古墳群では、1992年現在で14個体の馬形埴輪が確認されている。その多くは部分的な破片で、全体像を復元できるものは少ない。しかし、同一古墳群のものであるにもかかわらず、多様な製作方法がみられ、近畿地方ではこれまで確認されていなかった製作方法もみられる。

馬形埴輪の製作方法に関しては、これまで主として関東地方のものが研究されてきている[井上裕一1985、稻村繁1986]。しかし、近畿地方をはじめ西日本の馬形埴輪については、まだ十分な検討が行われていないのが現状といえよう。ここでは、今後の研究の基礎資料となるよう、製作方法を中心とした観察を行い、長原古墳群の馬形埴輪にみられる特徴を述べる。

2)製作方法の観察

上述の通り、長原古墳群では14個体の馬形埴輪が見つかっている。それらのうち、どの古墳に伴う埴輪なのかが判明しているのは11個体である(表15)。また、111号墳からは複数の馬形埴輪が出土しており、その他は1古墳に1個体といった状況である。

57号墳：頭部と背部が出土しており、それから小型の馬形埴輪と考えられる[大阪市文化財協会1989]。まず、頭部について述べる(図203)。後頭部から目の位置にかけては、粘土帯を連続的に継ぎ足して作られる。しかし、それから鼻先に向っては、粘土の継ぎ方がそれまでとは逆になっている

(図中アミ部分)。目から先の部分を欠くため確言できないが、目の位置から鼻先にかけての部分を後頭部側とは別に作り、のちに接合したものと思われる。目の部分は、穿孔後、上部をわずかに隆起させた写実的な表現となつていて

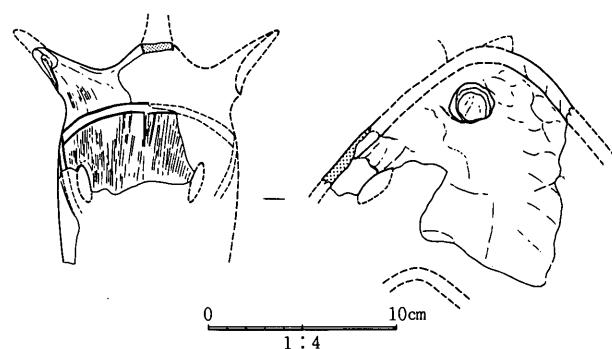


図203 57号墳の馬形埴輪頭部

る。また、耳は別作りの円筒状のものを穿孔部に差込み、その周囲に粘土を巻付けて、穿孔部との隙間を埋めて作られている。この耳の作り方は人物埴輪の腕を胴体と接合するばかりに用いられている方法である。面繫や手綱は2条一組の線刻で表現されており、面繫は鼻梁革をもつ形式となっている(註1)。

つづいて、背部を見る。背部は左右の粘土板を合掌式に組合せて作られている。そのため中央が山形に尖ったものとなる(図207)。前(後)輪の外縁は面をもたず、尖りぎみにおさめられている。

その他に胴部の破片があり、輪燈と障泥を表現した線刻がみられる。また、直径3cm弱のスカシ孔が胴部側面にある(図204)。TK208型式の須恵器と伴う。

86号墳：頭部の片面分がある(図204)。40cm以上ある頭部長から推して大型の馬形埴輪と思われる[大阪市文化財協会1990]。頸部から後頭部にかけては、粘土帯の巻上げによる接合痕はみられず、粘土板の組合せによって製作されたと思われる。一方、後頭部から鼻先の部分は粘土帯を継ぎ足して製作されているようである。そして鼻先については、粘土の小塊を用いて、序々に開口部を狭めてから塞いでおり、そのため鼻先はやや丸みをもっている。その後、下顎の左右に粘土板を貼付け、外形がほぼできあがると、次に目・耳・鼻の穿孔を行っている。目の上部は膨らみをもたせており、耳は穿孔部に粘土帯を巻付けて作られている。面繫・手綱は突帶で表現され、f字形鏡板・辻金具・責金具・胸繫なども同様に粘土を貼り足して表現されている。面繫は額革をもつが、鼻梁革の有無は不明である。手綱の付け方などから、頸部は直立ぎみに作られていたと考えられる。TK47型式の須恵器と伴う。

87号墳：後頭部から胴部にかけて残存する大型品である[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989]。胴部から頸部の製作は、86号墳例と同様に粘土板の組合せによるものと思われる。耳の作り方も86号墳と同じである。しかし、目から鼻先の部分は、57号墳例のように別作りのものを接合する方法によると思われる。髦は断面T字形の縁をもち、先端に、粘土紐を捩じった棒状の突起がある(註2)。障泥・燈・鞍轡は粘土を付加して立体的に表現されている。腹部は平坦に作られ、胴部側面と下腹部に直径約3cmのスカシ孔をもつ。TK23型式の須恵器と伴う。

111号墳：各部分の破片が出土しているが、須恵質と土師質のものがあり、それぞれ異なる個体と考えられる[大阪市文化財協会1992b]。土師質のものには主として頭部と胴部の破片がある。頭部には目と耳の孔が残る。目上の隆起は86号墳例に比べわずかである。耳

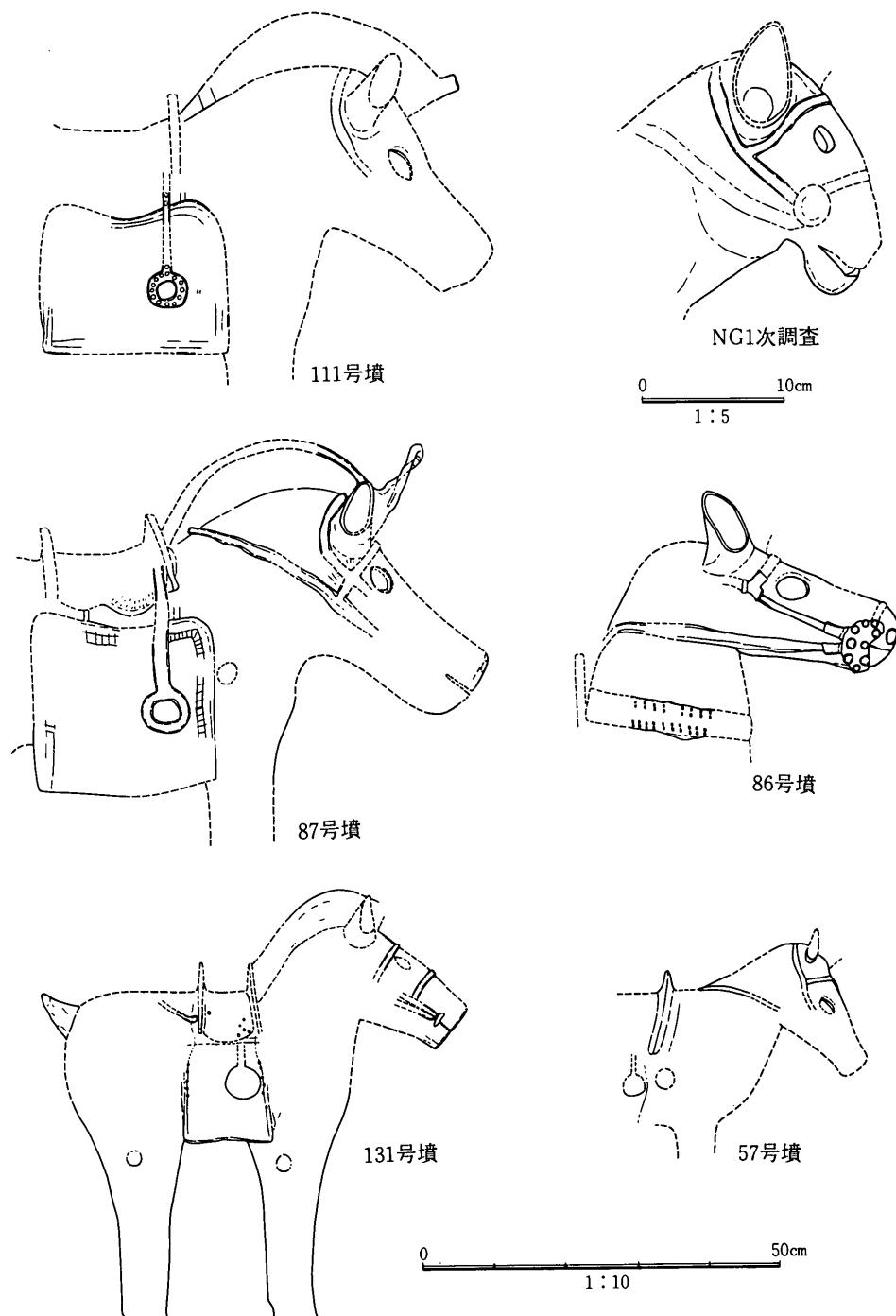


図204 長原古墳群の馬形埴輪
(NG1次調査出土例は縮尺1/5、その他は縮尺1/10)

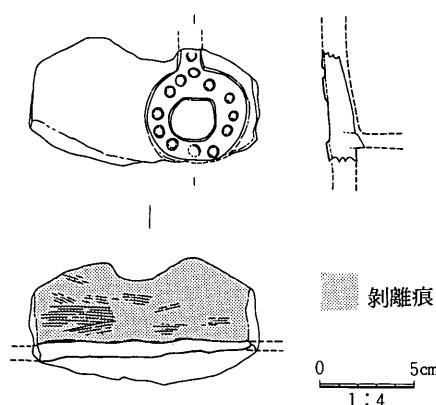


図205 111号墳の馬形埴輪腹部

の作り方は、86号墳や87号墳のものと同様である。面繫は突帶で表現されていたらしく、剥離痕がある。それをみる限りでは額革をもたない形式の面繫と思われる。胴部には障泥・鎧などが粘土を付加して作られている。髦には毛を表わしたらしい線刻があり、先端に柱状の突起をもつ。障泥の破片の裏側に残る剥離痕などから、平坦な腹部であったことがわかる(図205)。87号墳の馬形埴輪に類似した形態をとると思われる。

もう一方の須恵質のものは脚と尻尾を残す。脚部は粘土板を円筒状にして作られている。そして下端から5cmほどのところで外側に折り曲げて段を作り、蹄を表現する。外面にはタテハケが残るが、蹄部分は、板ナデによって完全にハケメが消されている。また、蹄の後方には半円形の切り取りがあり、底面もヘラケズリされている。尾は直径1cmほどの芯棒に粘土を巻付けて作られている。そのため、胴体とは差込み式に接合されたと考えられる。外面に尾紐を表現した粘土の剥離痕が螺旋状に残っている。TK23型式の須恵器と伴う。

113号墳：未整理のため詳細には述べられないが、各部分の破片から大型の馬形埴輪と考えられる(註3)。尻繫や鎧は幅広の突帶で表現される。雲珠の中央に直径約4cmの円孔がある。髦は断面がT字形を呈する。腹部は平坦に作られる。TK23型式の須恵器と伴う。

131号墳：本書pp.174-178に報告するものである。胴部以下はほぼ残っているが、その他は部分的な破片に留まる。中型の馬形埴輪で、腹部を側面からみるとアーチ状を呈しているところに特徴がある。これは、脚部上方を漏斗状に拡張し、その過程で前後の脚の連結を行うという製作方法によるものである。脚部下端は外方へわずかに開き、それぞれの後側を半円形に切り抜いている。また、脚部側面に直径3cm弱のスカシ孔を穿つ。胴部は粘土帯を積み上げて作られている。頭部は、後頭部側から鼻先に向けて粘土を継ぎ足し、先端を粘土板で塞いでいる。尻尾は粘土帯を円錐形に巻いて、先端を捻り出して作られる。すなわち、接合しながら形を整えて行く方法がとられている。面繫や尻繫は突帶で表現されているが、障泥の上端部分や鞍袴・鎧は線刻による表現である。TK23型式およびTK47型式の須恵器と伴う。

表15 長原古墳群馬形埴輪一覧表

古墳名	調査次数	頭	耳	尾	腹	胴・背	面繫	鎧	須恵器型式	備考
57号墳	NG81-2	A?	A			A	線刻	線刻	TK208	小型
86号墳	NG82-46	B	B				突帶		TK47	大型
87号墳	NG83-38	A?	B		A	A?	突帶	突帶	TK23	大型
111号墳	NG84-12		B		A		突帶	突帶	TK23	土師質、大型
111号墳	NG84-12			A					TK23	須恵質
113号墳	NG84-25				A			突帶	TK23	大型
131号墳	NG85-34②	B	B	B	B	B	突帶	線刻	TK23・TK47	中型
155号墳	NG86-66							突帶		
162号墳	NG86-70							突帶		小型
181号墳	NG88-54	B			B	B	突帶		TK10	大型
188号墳	NG91-18・53					A	突帶	線刻	TK23	小型
(不明)	NG1	A	B				突帶			小型
(不明)	NG86-58①	A?	A				突帶			
(不明)	NG91-53				B			線刻		小型

A: A技法 B: B技法 空欄は不明を表わす

155号墳: 見つかっているのは鞍の部分の破片のみである(註4)。鎧を吊る革紐は突帶で表現されている。

162号墳: 障泥と脚の一部が出土している(註5)。

181号墳: 未整理のため詳細不明である(註6)。頭部や鞍部の大きさから大型品と考えられる。脚部は粘土板を円筒形にして作られ、蹄部分は、さらに幅5cmの粘土帯が付け足され、漏斗状に開いている。蹄の後側には小さな半円形の切り取りがある。脚から腹部にかけては、脚部の径を序々に拡張する方法がとられている。したがって、腹部はアーチ状の形態をとっていた可能性が高い。背部は粘土帯を継ぎ足して作られ、横断面が整った半円形を呈する。頭部も粘土帯を継ぎ足して成形され、先端を粘土板で塞いでいる。その先端部平坦面に鼻孔を穿つが、貫通してはいない。下顎の左右には粘土板を貼付けて、顎らしさを表現している。面繫・手綱は突帶で表現される。素環の鏡板をもち、面繫は鼻梁革を備えた形式である。胴部側面に直径5cmのスカシ孔がある。TK10型式の須恵器と伴う。

188号墳: 小型の馬形埴輪で、後頭部から背部がよく残るが、その他の部分は断片的な破片である[櫻井久之1992]。頸部は前方にやや傾いた形態をとり、内面の接合痕から粘土帯を継ぎ足して作られたものと思われる。一方、背部は粘土板を組合せて作られているようである(図207)。脚部は芯棒に粘土板を巻いて成形されている(註7)。そして、その下端に断面三角形の粘土を付けて蹄を表わす。脚の後側は半円形に切り抜かれている。手綱・尻繫・鞍轡などは粘土を貼付けて立体的な表現をとるが、鎧は線刻で表わされている。胴

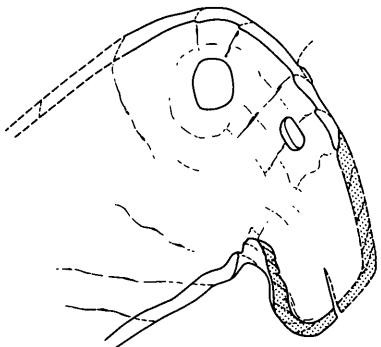


図206 頭部の製作状況模式図
(NG1次調査出土例 縮尺約1/4)

部側面と、前胸部あるいは尻側に直径約4cmのスカシ孔をもつ。TK23型式の須恵器と伴う。

古墳未特定の埴輪：どの古墳に伴うかが特定できない馬形埴輪が、NG1次・NG86-58①次・NG91-53次の各調査で見つかっている(註8)。

NG1次調査のものは塚ノ本古墳の周濠内から出土したものであるが、塚ノ本古墳固有の円筒埴輪の示す時期と大きく異なるため、混入品と考えられる[長原遺跡調査会1978]。頭部と鞍部があり、小型の埴輪と思われる。頸部から後頭部は、順

次、粘土帯を継ぎ足している。しかし、目から鼻先にかけては粘土帯の継ぎ方が異なっており、別作りの部品を用いていることがわかる(図206)。下顎には、その接合作業時にできた隙間を埋めるための粘土塊がみられる。また、多くの馬形埴輪にみられるような、下顎左右の粘土板の貼付けは行っていない。鞍轡にはヘラ先による刺突文がある。

NG86-58①次調査のものは、中世の包含層から出土した頭部の破片である。目と耳の一部をうかがうことができる。耳はソケット式にはめ込むものである。面繋は突帶で表現される。目の付近を境として、後頭部側と鼻先側で粘土帯の接合状況が異なっている。

NG91-53次調査のものは中世の溝から出土した。障泥の破片であり、表面に沈線で鑑を表わしている。裏面をみると腹部との接合痕が弧状を呈している。131号墳例と同じように腹部をアーチ状に作ったものであろう。

3) 製作方法の特徴

それぞれの個体の観察結果を、各部位ごとに整理したい。

頭：この部位の製作方法には大きく分けて二つの方法があった。一つは86号墳・131号墳・181号墳のものにみられ、後頭部から鼻先までを連続的に製作していく方法である。もう一つはNG1次調査出土例のように目の位置から鼻先を別に作り、のちに後頭部側と接合するものである。57号墳・87号墳・NG86-58①次調査の各例も、ちょうど目の位置で粘土の継ぎ方が変化しており、後者の製作方法によるものであろう。

耳：この部位についても2通りの製作方法が観察された。先に耳をかたち作ってから本体側に差込む方法と、粘土帯を本体側に巻付けながらかたちを整える方法である。前者は

57号墳例とNG86-58①次調査例にみられ、後者は86号墳・8

7号墳などの各例にみられた。

頸：この部位については製作方法のわかる個体が少ない。外見上、頸部が前方に傾いたもの(87号墳・188号墳)と、直立したもの(86号墳)が認められ、それらに製作方法の違いがあることも考えられる。

胴・背：まず、57号墳例のように粘土板を作り、それを合掌式に組合せるものがあげられる(図207)。87号墳・188号墳の各例も、57号墳例のように背部が山形に尖るものではないとしても、基本的に粘土板を組合せる方法がとられている。一方、181号墳例のように粘土帯を付け足しながらかたち作っていくものもある。

腹：脚上に粘土板を渡して平坦な腹部を作るものと、脚部上端を次第に拡張しながらアーチ状の腹部を作っていくものがある。後者のような製作方法は、関東地方の比較的新しい時期(井上裕一氏によれば6世紀後半以降[井上裕一1985])の馬形埴輪にみられるものである。また近畿地方では、鹿・猪・犬などの埴輪にこの製作方法によるものがあるが、馬形埴輪には採用されない方法と考えられていた。それが今回、131号墳例・181号墳例・NG91-53次調査例に確認された。

尻尾：この製作方法にも2通りが認められた。それは耳のばあいと同じく、前もってできあがっているものを取付ける方法と、接合しながら尾らしく作っていく方法である。前者は111号墳、後者は131号墳にあった。

脚：確認できた製作方法はいずれも、粘土板を丸めて円筒状にするものである(註9)。

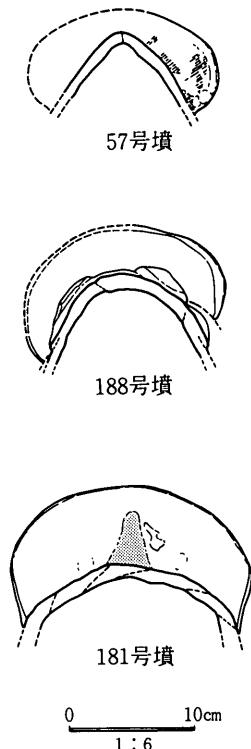


図207 背部製作方法の諸例

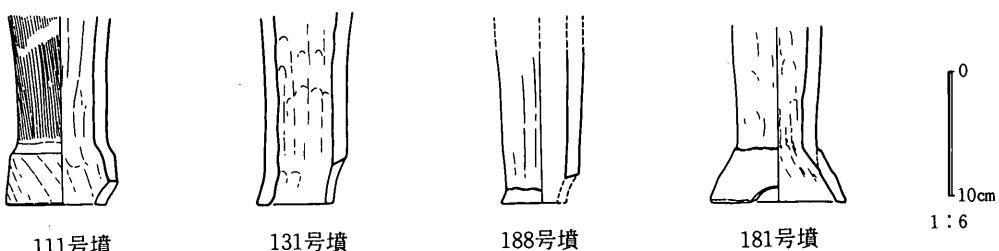


図208 脚部(蹄)製作方法の諸例

しかし、円筒化するに当って、芯棒を用いるものとそうでないものがあった。芯棒を用いた188号墳例の脚は直線的で、動物らしさが感じられない。131号墳例については、粘土板円筒化の成形方法でなく、粘土帯の巻上げによる可能性もある。

蹄：これについては各個体それぞれ表現方法が異なっていた(註10)。しかし、脚下端を折り曲げて作るものと、別の粘土を接合して表現しようとするものの2通りがあるとみることもできる(図208)。また、後方の切込みの幅や深さなどにも違いがある。111号墳例・131号墳例は脚下端を折り曲げるもので、切込みは幅広で深い。181号墳例・188号墳例は粘土付加によって蹄を表現する。181号墳例の切込みは狭く、浅い。

スカシ孔：胸部側面に円形スカシ孔をもつものがほとんどである。しかし、131号墳例は脚部側面にスカシ孔をもっていた。また188号墳例は、前胸あるいは尻側にスカシ孔がある。さらに、87号墳例では腹部中央にもスカシ孔をもつ(註11)。

馬具：突帯表現と線刻表現の両者が認められる。三繫に関しては、面繫・胸繫・尻繫の区別なく、そのどちらかに統一された表現方法を採用しているようである。面繫が線刻表現であるばあい障泥や鐙も線刻表現となっており(57号墳例)、その一方で、面繫が突帯であっても、障泥や鐙などが線刻表現となっているものがいくつかある。

鏡板については、86号墳にf字形、181号墳・NG1次調査のものに素環の形態が認められた。131号墳の例は小型の鏡板を表現したとも考えられるが、明確ではない(註12)。面繫には、鼻梁革の有無、額革の有無に個体差があった。鐙については確認できたものはみな輪鐙の形態であった。

4)まとめ

各部分の作り方を総じてみると、別に成形されたものを接合する方法と接合と成形を同時進行させる方法があることがわかる。ここでは仮に、前者をA手法とよび、後者をB手法とする。この二つの製作方法を明確にうかがうことのできるのは、頭(目から鼻先)・耳・尾・腹の各部分である。また、背部や頸部についても用意された粘土板を組合せる方法はA手法的といえる(註13)。一方、粘土帯を継ぎ足しながら背部や頸部を作る方法はB手法的である。脚部については、四肢をまず準備することが馬形埴輪製作の第一歩であるから、すべてA手法ということになろうか。

埴輪の各部分を比較するなら、A手法はB手法よりも写実性を重視した製作方法といえる。しかし、B手法は接合と成形を同時に進めるのであるから、A手法に比べ少ない労力

と時間での製作を可能にしたであろう。また、製作に必要な作業スペースがA手法によるよりも狭くて済むという利点もあったと考えられる。

共伴している須恵器を時間尺度としてみると、B手法はA手法よりも後出するが、その後、二つの製作方法が並存していることは確かである。頭や耳については、B手法を用いるものが次第に増えてくる傾向にあるが、腹部については両者の並存が続く。B手法の出現がA手法に遅れることについては、初期の段階において写実性が重視されたこともあるが、接合と成形を同時進行させるB手法を用いるためには、馬形の造形にかなり習熟している必要があったこともその理由として考えられよう。しかし、腹部形態の異なる馬形埴輪が同時存在した理由については疑問が残る。埴輪の大小や、飾り馬か裸馬といったことがその原因となっているとは思われない。今は推測の域を出ないが、脚部の成形に粘土板を用いるか粘土紐を用いるか、といった違いが関係しているのではないかと推測する。

長原古墳群の馬形埴輪から、二つの製作方法の並存をうかがうことができた。そして、腹部にB手法をとる例、すなわちアーチ状の腹部をもつものが近畿地方にも確認され、それが須恵器編年のTK47型式の段階に確実に存在することは、馬形埴輪の製作方法の変遷を追及する上での重要な指標となろう。

(櫻井)

註)

- (1)面繫各部分の革紐の名称は、増田精一氏の呼称方法[増田精一1960]を用いた。
- (2)髦の先端が、87号墳例のように大きく突出し、捩じられた状態を呈するものは少なく、管見では島根県松江市平所埴輪窯[島根県教育委員会1981]の出土品に類似するものがみられる。また、突出度の低いものが和歌山県和歌山市井辺八幡山古墳[同志社大学文学部文化学科1972]や大阪府藤井寺市土師の里窯[藤井寺市教育委員会1991]にある。さらに、三重県松阪市八重田7号墳[松阪市教育委員会1981]にも似たものがみられるが、これは人物埴輪の一部として報告されている。これに関連して、古代中国の馬装の一つとして髦を角状に縛り上げる習俗があることを川西宏幸氏が述べているので記しておく[川西宏幸1983]。
- (3)113号墳はNG84-25次調査で見つかった1号墳である。調査の概要については[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]を参照されたい。
- (4)155号墳例はNG86-66次調査で出土したもので、その他に円筒埴輪も出土している。
- (5)162号墳例はNG86-70次調査の3号墳に当る。須恵器は見つかっていないが、無黒斑で、外面に二次調整のヨコハケを施す円筒埴輪が出土している。
- (6)181号墳はNG88-54次調査で検出された。調査の概要については[木原克司1989]を参照されたい。
- (7)脚部の成形に芯棒を用いる例は京都府相楽郡木津町上人ヶ平9号墳[京都府埋蔵文化財調査研究センター

1991]にもある。また、同様な方法は衣蓋形埴輪の立飾り軸部の成形にも採用されている。

(8)上記以外に、馬の脚部とは断定できないが、非常に写実的な動物埴輪の脚部がNG91-54次調査において出土している。焼成も野焼きによるものようである。

(9)脚部成形に、粘土板を円筒化する方法のあることは、稻村繁氏によって指摘されている[稻村繁1986]。

稻村氏は、この方法を「粘土板円筒化成形」と呼び、従来知られていた粘土紐を巻上げによる成形方法よりも先行する方法と考えている。

(10)若松良一氏は脚(蹄)の形態をA～E類に分類し、それらを編年の指標として捉えている[若松良一1992]。それを長原古墳群のものに照らしてみると、111号墳-B類、131号墳-C類?となるが、181号墳・188号墳のものについては当てはめがたいように思われる。また、181号墳のものと類似する脚部をもつ鹿形と猪形の埴輪が大阪府東大阪市大賀世2号墳[上野利明・中西克宏1985]にあり、時期的な併行関係も推察される。

(11)スカシ孔の位置から動物埴輪の変遷を捉えようとする新しい視点に基づく研究が森田克行氏によって行われている[森田克行1992]。長原古墳群の例をみると、森田氏のいう「左右式」(胴部の左右両側面にスカシ孔をもつ)の出現時期が若干早く認められる(57号墳例)。また、関東地方にみられる形式とする「左右式亜式」(脚部側面それぞれにスカシ孔をもつ)が存在している(131号墳例)。この「左右式亜式」は岡山県真庭郡八束村四ツ塚13号墳[近藤義郎1992]にもみられ、関東地方に限定されるものではないだろう。

(12)131号墳の鏡板が出土した部分までで完結しているものならば、類例の少ない形式であり、注目せねばならない。このような小型の鏡板をもつものを西日本で求めると、大阪府羽曳野市誉田御廟山古墳[泉北考古資料館1982]・愛媛県松山市岩子山古墳[松山市教育委員会・松山市文化財協会1975]にある。

(13)時と場所を異にする事例であるが、秦始皇帝陵の兵馬俑[袁仲一1990]について述べたい。これは人も馬も実物大に製作されたものだが、馬の製作方法が興味深い。頭・頸・尾・耳・脚をそれぞれ単独に製作し、乾燥後に接合しているのである。尾や耳の接合に当っては、本体側に穿孔し、そこに差込む方法がとられている。これはまさに馬形埴輪にみたA手法である。また、胴部の製作も各部分の組合せに拘っている。これもA手法的である。兵馬俑のばあい、写実的に作ることに重点が置かれたことは明らかである。A手法は、中空の作品に写実性をもたせるときに多用された製作方法であったのであろう。

第4節 長原遺跡出土金属製容器の蛍光X線分析調査

成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）

長原遺跡出土の3点の金属製容器の破片について、蛍光X線分析法による非破壊調査を実施した。試料とした金属製容器1～3を図209と写真22に示す（註1）。これらの金属製容器はいずれも平安時代の地層から出土している。

蛍光X線分析法は分析対象物にX線を照射し、発生する二次X線を分光することにより、含まれる各種元素の定性や定量を行う方法である。非破壊法で行うばあい、分析対象物の形状や表面状態によっては、定量分析は困難を伴うことも少なくないが、定性分析については他のどんな分析法よりも簡便でしかも迅速に行えるという利点がある。

金属製容器1～3の蛍光X線スペクトル図を図210に示す（註2）。いずれもサビ化しているが、銅（Cu）と錫（Sn）を主成分とした薄手作りの青銅製品であり、いわゆる「佐波理」と呼ばれるものに相当する。一般にサビ化した金属表面の元素含有量は健全な地金の元素含有量とはかなり異なったものになっている。長原遺跡の試料はいずれも被覆緑青サビの析出はわずかで、本

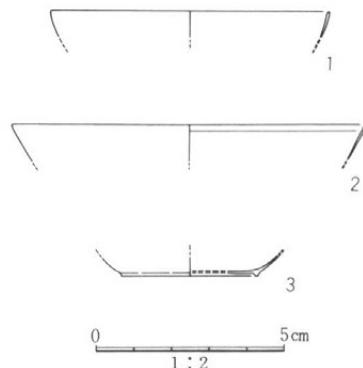


図209 金属製容器実測図

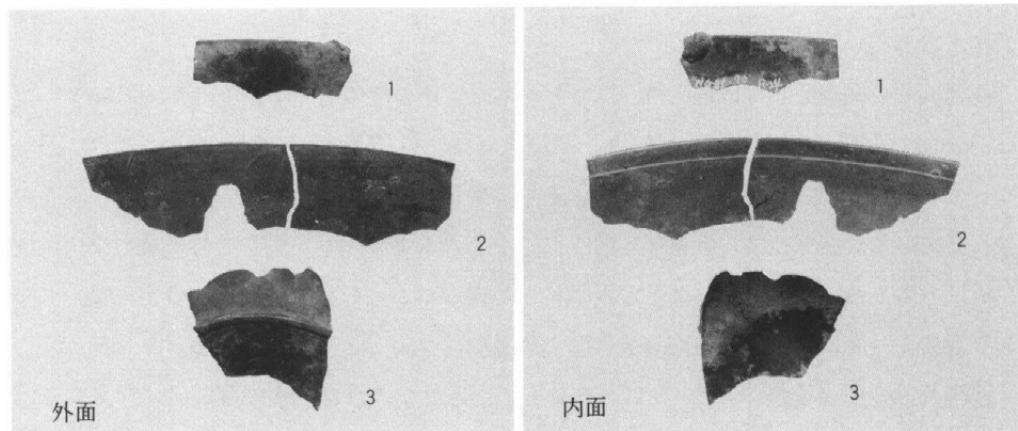


写真22 長原遺跡出土の金属製容器

表16 長原遺跡出土金属製容器表面における元素含有量（単位 重量%）

試料	Pb	As	Fe	Zn	Ag	部位	備考
金属製容器 1	n.d	1	0.5	tr	0.2	口縁部	図209-1
金属製容器 2	1	n.d	2	n.d	1	口縁部	図209-2
金属製容器 3	3	n.d	4	5	n.d	底部	図209-3

* Cu、Snについては求めていない。n.dは未検出、trは痕跡量の存在を表わす。Feはその量を一応示したが、土壤成分の汚染による影響が大きい。

来の外形をしっかりと保持している。金属製容器 1 は光沢すれどなく暗灰色を呈し、また金属製容器 2 と 3 は光沢を残しつつオリーブ色に変色する。このようにサビ化した青銅の表面では見かけ上、錫(Sn)の量は増大し、銅(Cu)の量は減少する(註3)。蛍光X線分析スペクトルのピーク高から、これら主成分元素の見かけ上の表面の含有量を求ることは可能であるが、地金の含有量とは絶対量で大きく異なることになり、無用の誤解を受ける恐れがあるので行わない。

一方、他の成分元素の表面の含有量を知ることは、銅原料の特徴を知る上などで意味があると考えている。具体的にいえば筆者は正倉院の銅製品の調査などを通し、地金に含まれる銀(Ag)、ヒ素(As)、ビスマス(Bi)などの量が、銅原料の素性と深い係わりをもつているとを考えている。これらの少量～微量成分の含有量は表面においてサビ化の影響を受け変動しても絶対量の変動はわずかで、目安としては充分であろう。このような考えにたって、標準試料との比較により、これらの少量～微量成分の表面における含有量を求め、表16に示した(註4)。

この中で鉄(Fe)は、出土遺物において、周囲の土壤からの影響を受けやすいので議論の対象とはしない。

正倉院の佐波理製品には鏡、皿、匙などがあり、その標準的化学組成は銅(Cu)80%、錫(Sn)20%である。ただし中には鉛(Pb)やヒ素(As)がやや多く含まれ、そのぶん錫(Sn)が少ないものもあり、このような化学組成の違いに着目し、現在体系的な分類を目指し調査を続行している。長原遺跡の金属製容器 1 および 2 の本来の化学組成もこの標準的化学組成に近いものと推定している。ただし銀(Ag)とヒ素(As)および鉛(Pb)の含有量から考え、金属製容器 1 と 2 は同一の溶湯から製作した製品ではないことは確かである。なお正倉院の佐波理製品の中にも銀(Ag)を1%ほど含むものがあり、これは古代の銅製品に含まれる不純物としての銀(Ag)の上限値と考えている。

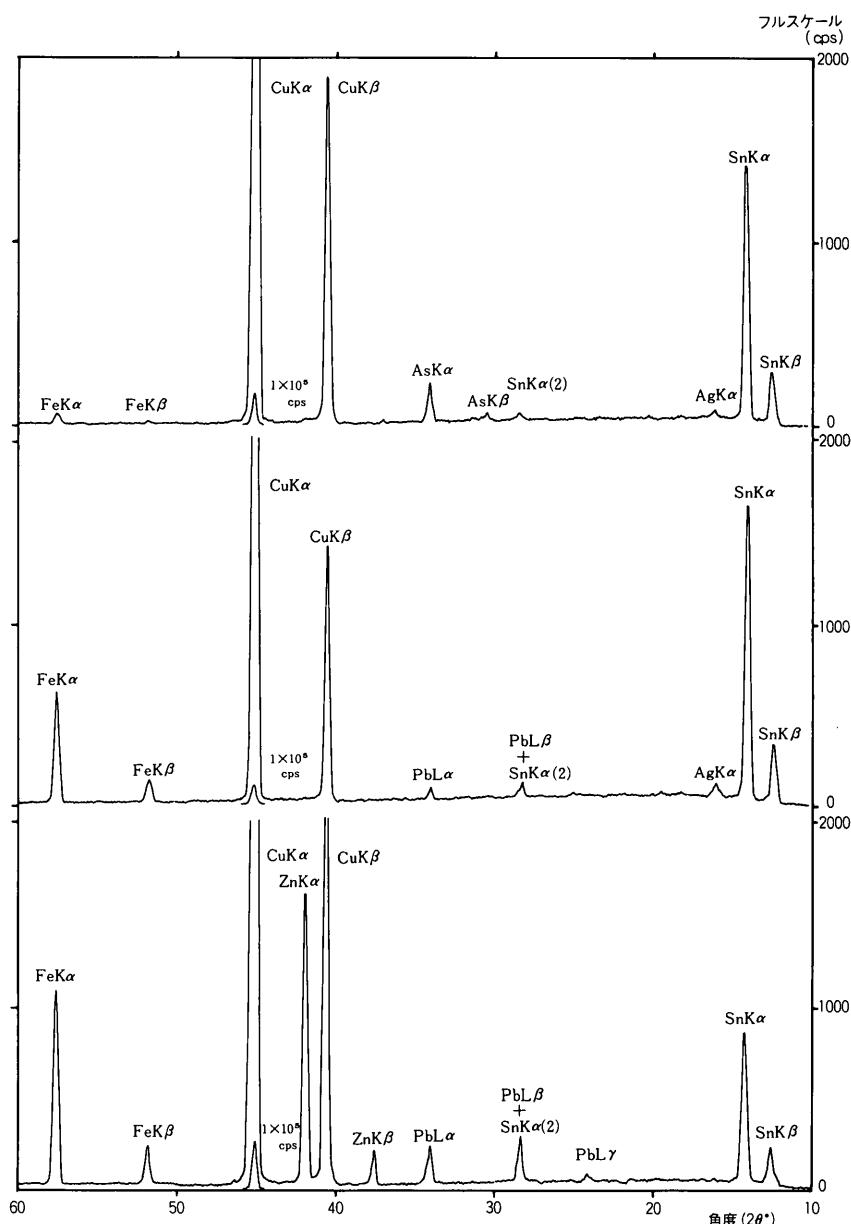


図210 金属製容器の蛍光X線スペクトル図

金属製容器3は亜鉛(Zn)量が顕著で注目に値する。サビ化によってたとえ亜鉛(Zn)が表面に相対的に多くなっていることがあるとしても、この量はもはや不純物の範囲で捉えられるものではない。鋳造に際し、亜鉛(Zn)を多く含む銅地金または黄銅片を含むスクラップを用いたのであろう。

従来、わが国で亜鉛(Zn)を多量に含む金属は中世以降出現すると考えられる傾向にあった。近年正倉院では柄香炉や塔鏡(おそらく香合)の中に黄銅製のものがあることを化学的に確認している。また羽曳野市の野中寺では7世紀前半と考えられる黄銅片が出土している(註5)。文献を探れば、奈良～平安時代の寺院の諸記録(『法隆寺資財帳』、『大安寺資財帳』、『安祥寺資財帳』、『仁和寺御室御物実録』、『東寺宝蔵焼亡日記』など)には鑑石すなわち黄銅製の柄香炉および単香炉がみえる。野中寺例は小片のため正体がよくわからぬが、これを別とすれば正倉院例および寺院諸記録の記載例とも黄銅製品はいずれも香炉関係に集中している。このような状況の中で、平安時代の金属製容器に、銅錫合金ベースとはいへ、亜鉛(Zn)が多く含まれる例を確認したことは収穫であった。佐波理は朝鮮半島との関連も強く、彼の地での状況も念頭に置かなければならぬことはもちろんである。

わが国の金属材料の歴史は大きな流れを別とすれば、不明な点が多く、今後あらゆる時代のあらゆる種類の遺品・遺物について自然科学的調査を行い、その詳細を明らかにする必要がある。

今回、長原遺跡の金属製容器について調査の機会を与えていただいた(財)大阪市文化財協会の永島暉臣慎氏にこの場を借りて御礼申し上げます。

註)

- (1) 金属製容器1は本書に報告するもの(888)である。金属製容器2・3は大阪市文化財協会1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲに報告するもの(559・560)である。
- (2) 測定は宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製波長分散型蛍光X線分析装置(大型試料用)を用いて実施した。図210に示した蛍光X線分析スペクトルの測定条件は以下の通りである。X線管球；クロム対陰極、印加電圧；35kV、印加電流；15mA、測定雰囲気；大気、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査速度；8°/分、記録紙速度；8cm/分、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；10～65°(図には10～60°を示す)、時定数；0.5、フルスケール；2000cps、照射野制限マスク；Ti20φ。
- (3) 沢田正昭1983、「青銅遺物の組成とサビ サビ層と地金層における主要成分の変動」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.1221-1232
- (4) 表面における各元素の含有量を求めるに当っては、含有量既知の銅合金標準試料との比較によった。目的とする元素の種類あるいは金属試料の形状などを考慮し、印加電圧、印加電流、照射野制限マスクの径などの測定条件は適宜かえている。
- (5) 久野雄一郎1988、「野中寺出土の銅合金片の金属学的調査」：羽曳野市教育委員会編『古市遺跡群』Ⅸ、pp.110-111

別 表

別表1 長原古墳群一覧表

古墳	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	周溝幅(m)	土師器	須恵器
1	4J	NG1	5 円	55	20		
2	5J	CENT.NG	1 方				杯,高杯,甕
3	5J	CENT.NG	2 方・造出	11.2			杯,甕,器台
4	5J	CENT.NG	3 方			製塙土器	杯,高杯,甕,器台
5	5J	CENT.NG	4 方・造出	8		甕	杯,埴,器台,甕
6	5J	CENT.NG	5 方	6.9			高杯,甕
7	5J	CENT.NG	6 方	8			高杯
8	4J	CENT.NG	7 方	9.8			杯,器台
9	4J	CENT.NG	8 方	10.3			杯身
10	4J	CENT.NG	9 方	11.7			杯,高杯,壺,甕,器台
11	4J	CENT.NG	10 方	8.5			杯,高杯,甕,器台
12	4J	CENT.NG	11 方				甕
13	4J	CENT.NG	12 方	6.8		甕	壺
14	4J	CENT.NG	13 方	8		甕または鉢	
15	4J	CENT.NG	15 方	7			甕
16	4J	CENT.NG	16 方	4			
17	4J	CENT.NG	17 方				
18	4J	CENT.NG	18 方	3.7			甕
19	4J	CENT.NG	19 方	6			
20	4J	CENT.NG	20 方				
21	4J	CENT.NG	21 方	6			
22	4J	CENT.NG	22 方	6			
23	4J	CENT.NG	23 方	5.5			
24	4J	CENT.NG	24 方	5			
25	4J	CENT.NG	25 方	5.5			
26	4J	CENT.NG	26 方	7.8		杯	杯,高杯,壺,甕
27	5J	CENT.NG	27 方	7			杯,器台
28	4J	NG1	1 方	6	2.7	○	椀
29	4J	NG1	2 方		4		杯身,高杯,甕
30	4J	NG1	3 方	4.5	3	甕	壺
31	4J	NG1	4 方	8.5	4.5		椀,壺,器台
32	5J	NG1	6 方	7	2.6		杯蓋,杯身,高杯,壺,甕
33	5J	NG11	1 方	5.6			甕
34	5J	NG11	2 方	10	2.2		甕
35	5J	NG19	1 方	4	2.5	○	壺,甕
36	5J	NG19	2 方	5.4	1.5	高杯	杯身,壺,甕
37	5J	NG19	3 方		4.7	壺	壺
38	5J	NG20-2	方			○	甕,壺
39	4J	NG24	方				
40	6J	NG2	1 方?				
41	6J	NG2	2 方?				
42	6J	NG2	3 方?				
43	4J	NG5-3	方				
44	4J	NG81-2	1 方	11.8	5		杯蓋,甕,壺
45	4J	NG81-2	2 方	11.6	5.9	小型丸底壺	杯蓋,杯身,高杯,甕,壺,甕,器台
46	4J	NG81-2	3 方		3.8		
47	4J	NG81-2	4 方	8.6	2.6		壺,甕
48	4J	NG81-2	5 方	4.8	2.5		
49	4J	NG81-2	6 方	6.8	2.8	高杯	杯身,椀
50	4J	NG81-2	7 方	9.8	3		甕,甕

註) 墳丘長: 造出しをもつものについては、それを含めた数値である。

註) 発掘次数: 「CENT.NG」は大阪文化財センター1978に報告される調査、「CENT.JY」は大阪文化財センター1980・1986bに報告される調査をさす。

埴輪	須恵器型式	備考	文献
円筒(鰐付含む),朝顔,家		塚ノ本古墳,有黒斑の埴輪	長原遺跡調査会1978,大阪文化財センター1978
	TK23		大阪文化財センター1978
円筒,朝顔	TK23		大阪文化財センター1978
円筒,家,衣蓋,盾,人物	TK23		大阪文化財センター1978
円筒,鶏	TK23		大阪文化財センター1978
円筒	TK23		大阪文化財センター1978
			大阪文化財センター1978
円筒			大阪文化財センター1978
円筒	TK73		大阪文化財センター1978
円筒,朝顔,衣蓋,盾	TK73		大阪文化財センター1978
円筒,甲冑	TK73		大阪文化財センター1978
衣蓋			大阪文化財センター1978
			大阪文化財センター1978
家,鶏			大阪文化財センター1978
円筒,朝顔	TK73		大阪文化財センター1978
			大阪文化財センター1978
円筒			大阪文化財センター1978
円筒	TK216		大阪文化財センター1978
			大阪文化財センター1978
円筒			大阪文化財センター1978
円筒			大阪文化財センター1978
朝顔	TK208		大阪文化財センター1978
円筒	TK47		大阪文化財センター1978
円筒,家	TK73		長原遺跡調査会1978
円筒,家,鶏	TK208		長原遺跡調査会1978
円筒			長原遺跡調査会1978
円筒	TK73		長原遺跡調査会1978
	TK23,TK47	周溝内に須恵器埋納土壙	長原遺跡調査会1978
円筒			大阪市文化財協会1982a
円筒			大阪市文化財協会1982a
円筒	TK23,TK47		大阪市文化財協会1982a
円筒			大阪市文化財協会1982a
円筒	TK23,TK47		大阪市文化財協会1982a
○	TK23,TK47		
円筒			
円筒,朝顔,壺,家,衣蓋,翳,盾,韁,草摺		埴輪棺,有黒斑の埴輪	高井健司1990,櫻井久之1991
円筒			
円筒			
円筒,朝顔,盾,韁?	TK73		大阪市文化財協会1989
円筒,朝顔,家,盾,韁,武人,鶏	TK73	韓式系土器鍋	大阪市文化財協会1989
			大阪市文化財協会1989
	TK73,TK216	韓式系土器壺	大阪市文化財協会1989
			大阪市文化財協会1989
	TK216,TK208		大阪市文化財協会1989
円筒,朝顔	TK216		大阪市文化財協会1989

別表1 長原古墳群一覧表

古墳位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	周溝幅(m)	土師器	須恵器
51 4J	NG81-2	8 方	7.8			高杯
52 4J	NG81-2	9 方	9.2			杯身, 鏊, 瓢
53 4K	NG81-2	10 方	9.2			甕
54 4K	NG81-2	11 方	7.2		甕	杯蓋, 杯身, 壺
55 4K	NG81-2	12 方				
56 4K	NG81-2	13 方	5.4			
57 4K	NG81-2	14 方・造出	15	3.6		杯蓋, 高杯, 鏊, 壺, 瓢, 器台
58 4K	NG81-2	15 方	13	2.3		器台
59 4J	NG82-12	方		3.5		杯蓋, 杯身, 高杯, 瓢
60 5J	NG82-19	1 方	5.2	1.3		杯蓋, 杯身, 壺
61 4J	NG82-19	2 方	9	3.9		椀, 高杯蓋, 高杯, 壺, 瓢, 器台
62 4J	NG82-19	3 方	10.5	2.9		椀, 壺, 瓢
63 4J	NG82-19	4 方	9.5	3.1		甕
64 4K	NG82-19	5 方	7	2.5		杯蓋, 杯身, 楓, 瓢
65 4K	NG82-19	6 方		2.5		杯, 楓
66 5K	NG82-19	7 方	7.5	2.4		
67 4K	NG82-19	8 方		2.3		甕
68 4K	NG82-19	9 方	10	3		
69 5K	NG82-19	10 方	11.5	3	甕	
70 5J	NG82-19	11		8.6		
71 4K	NG18	1 方				高杯
72 4K	NG18	2 方	3			高杯
73 4K	NG18	3 方				杯蓋, 杯身, 楓, 壺, 瓢
74 4K	NG18	4 方				杯蓋, 高杯蓋, 高杯, 鏊
75 4K	NG18	5 方				
76 4K	NG18	6 方				
77 4K	NG18	7 方				甕
78 4K	NG18	8 方				
79 4K	NG18	9 方	9	2	高杯	杯蓋, 鏊
80 4K	NG82-27	1 方		3	高杯	杯蓋, 杯身, 壺, 瓢
81 4K	NG82-27	2 方		3	高杯	杯身, 瓢
82 4K	NG82-27	3 方				杯蓋, 瓢
83 4K	NG82-27	4 方	6	2		杯身, 楓, 鏊
84 4K	NG82-27	5 方		3.5		杯蓋, 杯身, 鏊, 器台
85 4K	NG82-27	6 円・造出	53	11	甕	
86 4K	NG82-46	方	11.5	2		杯蓋, 杯身, 高杯, 器台
87 4K	NG83-38	方・造出	12	4	甕(棺)	杯身, 高杯, 甕(棺)
88 5K	NG83-41	1 方	10	2	小型丸底壺	
89 5J	NG83-41	2 方	10			杯蓋, 杯身, 器台
90 4J	NG83-46	1 方	6.7	2		甕
91 4J	NG83-46	2 方		3		
92 4K	NG83-52	1 方	8			
93 4K	NG83-52	2				
94 6K	DD1	1 方	8	5	○	○
95 6K	DD1	2		3		
96 6K	DD1	3				
97 6K	DD1	4				
98 6K	DD1	5				
99 6K	DD80-1	方?				
100 7J	CENT.JY	7 方		2	高杯	高杯

埴輪	須恵器型式	備考	文献
	TK216		大阪市文化財協会1989
円筒	TK23		大阪市文化財協会1989
円筒,朝顔	TK208		大阪市文化財協会1989
円筒,朝顔	TK23		大阪市文化財協会1989
			大阪市文化財協会1989
			大阪市文化財協会1989
円筒,人物,馬	ON46,TK208		大阪市文化財協会1989
円筒			大阪市文化財協会1989
円筒	ON46,TK208		本音
円筒	TK47		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔,家	TK216,TK208	埴丘上面で鉄製品出土	大阪市文化財協会1990
円筒	TK216,TK208		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔	TK23		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔	TK47		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔	TK73		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔			大阪市文化財協会1990
円筒	TK216		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔,衣蓋			大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔			大阪市文化財協会1990
	TK73,TK216		大阪市文化財協会1979a
円筒			大阪市文化財協会1979a
	TK216		大阪市文化財協会1979a
	TK216,TK208		大阪市文化財協会1979a
			大阪市文化財協会1979a
円筒			大阪市文化財協会1979a
円筒,朝顔,家,鳥	TK216		大阪市文化財協会1979a
円筒,家			大阪市文化財協会1979a
円筒,家			大阪市文化財協会1979a
○	TK216,TK208		大阪市文化財協会1990
	TK216,TK208		大阪市文化財協会1990
			大阪市文化財協会1990
○		木棺直葬	大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔,家,衣蓋,盾,韁,草摺	TK23		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔,壺,家,団,衣蓋,盾,韁,草摺,動物		一ヶ塚古墳,有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔,馬	TK47		大阪市文化財協会1990
円筒,朝顔,家,草摺,巫女,鶏,馬	TK47	土器棺	
円筒			
円筒	TK47		
円筒,朝顔			大阪市文化財協会1992a
			大阪市文化財協会1992a
			大阪市文化財協会1992a
円筒			大阪市文化財協会1992a
円筒		木棺直葬2基	大阪市文化財協会1979b
			大阪市文化財協会1979b
○			
円筒		城山7号墳	大阪文化財センター1986b

別表1 長原古墳群一覧表

古墳	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	周溝幅(m)	土師器	須恵器
101	7J	CENT.JY	方		3	○	○
102	7J	CENT.JY	1 方	7	3.5	壺,甕	椀,高杯,甕
103	7J	CENT.JY	2 方	11	4	鉢	高杯,甕
104	7J	CENT.JY	3 方		3		甕
105	7J	CENT.JY	4 方	7.3	2		椀,甕,甕
106	3I	NG82-41	1 方	11	4	小型丸底壺,甕	杯蓋,杯身,高杯,甕,壺,甕,器台
107	3I	NG82-41	2 方		4		杯蓋,杯身
108	6K	DD84-1	1 方				壺
109	6K	DD84-1	2 方	7.8			杯身,壺
110	6L	NG84-12	1 方	9.3	3		杯蓋,高杯蓋,高杯,甕,器台
111	6L	NG84-12	2 方	10.8	3.6		杯身,高杯蓋,高杯,甕,器台
112	6L	NG84-12	3 方?		1.8		壺
113	6L	NG84-25	1 方・造出	14			杯蓋,甕
114	6K	NG84-25	2 方	4			杯身
115	6K	NG84-25	3 方				杯身
116	6L	NG84-25	4 方・造出	16			○
117	6L	NG84-25	5 方	10.6			
118	6L	NG84-25	6 方				
119	6K	NG84-25	7				
120	4J	NG84-46	方	5	2		
121	4K	NG84-48	1 方	7.4	3.8		甕
122	4J	NG84-48	2 方	5.5	2		甕
123	4K	NG84-48	3 方	6	2.4		
124	4K	NG84-48	4 方		3.5		
125	4J	NG84-48	5 方	6.7	1.8	甕	
126	4K	NG84-73	方		3.25		
127	7K	DD84-3	1 方	13.5	6		
128	7K	DD84-3	2 方	5.3	1		
129	4J	NG85-18	方	8.5	2.5	○	○
130	5J	NG85-23	前方後円	24.4	7	小型壺,甕(棺)	杯,杯身,高杯(棺),器台
131	4J	NG85-34②	1 方	10.5	4	甕,高杯	杯蓋,杯身,高杯蓋,高杯,甕,甕
132	4J	NG85-34②	2 方	8	2.5		杯蓋,甕,壺,甕,器台
133	4J	NG85-34⑤	方		2		
134	4J	NG85-34④	方	7	2		杯蓋
135	4J	NG85-34③	2 方	5	1.3		杯身
136	4J	NG85-34③	3 方	10	3		
137	4J	NG85-34③	4 方	4.5	0.8		杯身
138	3J	NG85-64	円?	2.7	0.6	小型丸底壺	
139	3J	NG85-64	方	7		○	杯蓋,甕
140	5K	NG85-70	1 方		3		杯蓋,杯身,甕
141	4K	NG85-70	2 方	5	1.5	壺	杯蓋,高杯,器台
142	4K	NG85-70	3 方	12	4		甕
143	4K	NG86-28	1 方	11	3		
144	4K	NG86-30					
145	4K	NG86-43②	1 方		2.2		
146	4K	NG86-43②	2 方	5.5	2.7	高杯	杯蓋,杯身,甕
147	5J	NG86-54①	1 方	9	2.5		杯蓋
148	5J	NG86-54①	2 方		2		
149	4J	NG86-54②	1 方				杯蓋,杯身,高杯,甕
150	4J	NG86-58①	1 方	12	4	高杯,壺	杯蓋,杯身,高杯,壺,甕,器台

埴輪	須恵器型式	備考	文献
円筒,朝顔		周溝内に立柱	大阪文化財センター1980
		城山1号墳	大阪文化財センター1986b
		城山2号墳	大阪文化財センター1986b
円筒,朝顔		城山3号墳	大阪文化財センター1986b
		城山4号墳,木棺直葬	大阪文化財センター1986b
円筒	TK23		本書
	TK23		
円筒	TK73		
円筒,家	TK73		
円筒,朝顔,衣蓋	TK208		大阪市文化財協会1992b
円筒,朝顔,家,衣蓋,人物,馬	TK23		大阪市文化財協会1992b
円筒,朝顔,衣蓋,盾	TK208		大阪市文化財協会1992b
円筒,家,衣蓋,人物,馬			
円筒			
円筒			大阪市文化財協会1992b
円筒			大阪市文化財協会1992b
			大阪市文化財協会1992b
円筒,朝顔,家			大阪市文化財協会1992b
円筒			大阪市文化財協会1992b
			大阪市文化財協会1992b
○			
○			
円筒	TK73		
	TK47,MT15	七ノ坪古墳,横穴式石室	高井健司1986
円筒,朝顔,盾,靄,人物,馬	TK23,TK47		本書
円筒,衣蓋	ON46,TK208		本書
			本書
円筒,朝顔	TK208		本書
	TK23		本書
円筒,朝顔			本書
	TK208		本書
	TK216		
	TK23,TK47		本書
円筒,朝顔	TK208		本書
円筒,朝顔,衣蓋	TK208,TK23		本書
円筒	TK208,TK23	主体部痕跡	
円筒,甲冑	TK208		
円筒			
円筒	TK73		
円筒,朝顔,家,武人	TK208	滑石白玉	

別表1 長原古墳群一覧表

古墳	位置	発掘次数	墳丘形態	墳丘長(m)	周溝幅(m)	土師器	須恵器
151	4J	NG86-58①	2 方	7	3	小型丸底壺	
152	4J	NG86-58②	1 方		4.5	甕	杯身,壺,甕,器台
153	5J	NG86-60①	1 方	10		高杯・壺・甕	杯蓋,甕,壺,甕
154	5K	NG86-60①	2				
155	4J	NG86-66	1 方				
156	4J	NG86-66	2 方		3		
157	4J	NG86-66	3 方?		5		
158	4J	NG86-66	4 方?		4.3		
159	5J	NG86-66	5 方?				
160	3I	NG86-70	1 方	9	2.4		壺
161	3I	NG86-70	2 方	9	3.4		高杯,甕
162	3J	NG86-70	3 方	11			
163	3J	NG86-70	4 方	8	3.3		
164	3J	NG86-70	5 方		6		
165	4K	NG86-85	方?	6.5			
166	6K	NG86-91	方				杯蓋,杯身,甕,壺,甕,器台
167	7J	CENT.JY	5 方	3	0.6	甕(棺)	杯蓋,杯身,壺,甕(棺)
168	7J	CENT.JY	6 方		1		
169	5K	NG87-35	1 方	15.1	4.5	小型丸底壺,鉢	
170	5J	NG87-35	2 円	19.6	3.7	高杯	
171	3J	NG87-31	方?				椀
172	4J	NG87-51	方	5	2	○	杯身,壺,甕
173	3J	NG87-60	1 方	8	2		椀,甕
174	3J	NG87-60	2				○
175	3I	NG87-60	3 方	8		甕	○
176	3J	NG87-76	方		4.2		
177	4J	NG87-27	方		5		○
178	4J	NG87-81	方	7			
179	4J	NG88-19	方	8.3			高杯,甕,壺,甕,器台
180	4K	NG88-56	方	12	2.8		杯蓋,杯身,甕(棺)
181	5K	NG88-54	前方後円	25	5		杯身,高杯蓋,高杯,甕,壺
182	4K	NG89-69	方	7.5	2.2		杯蓋,高杯蓋
183	4J	NG91-1	1 方	10.8	3		甕
184	4J	NG91-1	2 方	6.8	3	○	○
185	4J	NG91-1	3 方	8			
186	4J	NG91-1	4 方	7			
187	4K	NG91-18	1 方・造出	7.5			杯蓋,杯身,高杯,甕,器台
188	4K	NG91-18	2 方・造出	8			杯蓋,杯身,甕,器台
189	4K	NG91-18	3 方	7			○
190	4K	NG91-18	4 方・造出	17.5		甕(棺)	杯蓋,杯身,高杯,甕(棺)
191	4K	NG91-18	5 方	5.5			○
192	4K	NG91-53	6 方				
193	4K	NG91-30	1 方		3.5		杯身
194	4K	NG91-30	2 方				
195	4J	NG91-55	方	7.5			
196	4K	NG91-81	方	6	1		
197	6L	NG84-67	方?		1.9		
198	4J	NG92-5	方	9.7	2.8		○
199	6K	NG92-90	方	9		甕,小型丸底壺	高杯蓋,高杯,壺
200	4J	NG92-92	方	6.3		○	杯蓋,杯身,壺

埴輪	須恵器型式	備考	文献
円筒			
円筒,朝顔,家,衣蓋	TK216		
円筒	TK47,TK10		
○			
円筒			
円筒,鳥			
円筒,朝顔,家,草摺	TK73,TK216	韓式系土器鉢	
円筒,家,馬		韓式系土器鉢	
円筒			
円筒			
円筒,衣蓋			
円筒	TK73,ON46	木棺直葬 2基,韓式系土器,金環,鉄器 城山5号墳,土器棺,韓式系土器甕 城山6号墳,木棺直葬,韓式系土器鉢	高井健司1987 大阪文化財センター1986b 大阪文化財センター1986b
円筒,朝顔,家,船,駒,盾,韁,鐵,短甲,草摺		高廻り1号墳,有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1991
円筒,壺,家,船,(衣蓋),駒,短甲,冑,草摺		高廻り2号墳,滑石白玉,有黒斑の埴輪	大阪市文化財協会1991
円筒			
○	TK208		
		滑石製紡錘車	
円筒(鰐付含む),朝顔,家,衣蓋,盾,鶏		有黒斑の埴輪	
		木棺直葬	
	TK216,TK208	土器棺	
円筒,家,衣蓋,盾,人物,馬	MT15,TK10	南口古墳,外堤あり,韓式系土器甕	木原克司1989
円筒			平田洋司1991
円筒			平田洋司1991
			平田洋司1991
円筒,朝顔,家,巫女	TK208,TK23	木棺直葬 2基	久保和士1992
円筒,朝顔,家,人物,馬	TK23		久保和士1992
円筒			久保和士1992
円筒,朝顔,衣蓋,盾,甲冑,巫女,鶏,動物	TK23,TK47	土器棺,外堤あり	久保和士1992
円筒			久保和士1992
円筒			久保和士1992
円筒,朝顔	TK23		
円筒,巫女			
壺		有黒斑の埴輪	
円筒			大阪市文化財協会1992b
円筒			
円筒	TK73		
		木棺直葬	

別表2 長原遺跡の標準層序1992

層序	層序概念図	層相	層相 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物 (註1)	C-14y.B.P.ほか	時代
沖積層	NG 0層	現代客土	—	(標目は無色帯)			近代・現代
	NG 1層	現代作土	15~25			Wd: 木片	近世
	NG 2層	含細礫灰褐色~黃褐色シルト質砂	6~24	↓小溝群・歓間 青花・青津・瀬戸美濃・備前など 瓦器・土器・陶磁器		Cb: 木炭	室町
	NG 3層	含細礫淡黃褐色~灰色粘土質シルト	12~20	↓小溝群・歓間 磯島 瓦質土器・陶磁器		Sh: 貝殻	
	NG 4層	含細礫黃褐色~中粒砂 暗灰褐色 礫質砂 シルト (10~45) ～シルト質砂	8~15 av20 av5 av15 av20	瓦器 黒色土器 陶磁器 須恵器 土器	水田面 ↓小溝群・歓間 瓦器(II~III期)	P: 泥炭	鎌倉
	NG 4A層	含細礫黃褐色中粒砂	8~15		水田面	S: 土壌	
	NG 4B層	暗灰褐色 礫質砂	av20		↓小溝群・歓間 瓦器(I~II期)		
	NG 4C層	含細礫黃褐色中粒砂 ～シルト質砂	av5 (10~45)	須恵器 土器	水田面		
	NG 5層	～いぶい黄褐色シルト質砂	av20	立柱建物	水田面		平安
	NG 5A層	灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層 を挟在	10~80				
層	NG 5B層	青灰色砂・極細粒砂	2~8		平安宮V・VI		
	NG 6層	暗青色砂・粘土質シルト	≤20	タニシ	平安宮III		
	NG 6A層	灰色中粒・細粒砂	≤50		水田面		
	NG 6B層	含砂・礫黒褐色~暗灰色 灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂	≤15 ≤10 av10	タニシ 乾痕	水田面 水田面 水田面		
	NG 7層	含砂黒褐色シルト質粘土	av15		飛鳥III~IV		
	NG 7A層	黒褐色砂・礫質粘土	≤35		飛鳥III~IV		
	NG 7B層	褐色極粗粒砂・粘土質シルト	≤20		立柱建物		
	NG 8層	暗褐色粘土質シルト	≤5		飛鳥I		
	NG 8A層	青灰~黃褐色砂・礫~粘土	≤40		長原古墳群 墓輪(II期)・須恵器(～MT15)		
	NG 8B層	～いぶい黄褐色極粗粒砂~中粒砂	av25		方形周溝墓・溝		
層	NG 9層	暗褐色砂質シルト	av10		鐵内第III・IV様式・凸基式石鐵		
	NG 9A層	暗褐色シルト質中粒砂	av5				
	NG 9A層	にいぶい黄褐色極粗粒砂~中粒砂	av25				
	NG 9B層	黃褐色シルト質粘土	≤15		木葉形石鐵		
	NG 9B層	灰褐色シルト質粘土	av10	ヒトの足跡			
	NG 9B層	黒褐色砂・シルト質粘土	≤15	水田面・溝	鐵内第I様式		
	NG 9B層	灰オーリーブ~黒褐色砂礫	≤15	鐵岸	・鐵岸		
	NG 9B層	暗灰褐色シルト質粘土	10		鐵内第I様式・晩期長原式・石斧		
	NG 9B層	灰オーリーブ色シルト質粘土	3~14	アラカシ イメガヤ			
	NG 9B層	暗灰オーリーブ色シルト質粘土・砂	8~50	石器製作場	晩期長原式・石斧の柄・弓		
層	NG 10層	灰オーリーブ色シルト質粘土・砂	10~14	▽石器製作場 ▽穴器棺墓 ▽整穴住居・貯藏穴	晩期滋賀式IV式 凹基式石鐵		
	NG 11層	黒褐色~褐色シルト質粘土	≤80		後期ツ池式 後期福田KII式(八尾南遺跡)		
	NG 12層	褐色質黒褐色礫質粘土~シルト	≤15	乾痕			
	NG 12層	NG12A層 暗褐色細粒砂質シルト	av20		中期北白川C式・石鐵	4020±110S (GaK-11323) 4740±140S (GaK-14942) 4900±140S (GaK-14941)	
	NG 12層	暗褐色 シルト 粘土質 シルト	≤15				
	NG 12層	黃褐色砂礫	≤15				
	NG 12層	綠灰色シルト質 極細粒砂~シルト	≤45	乾痕			
	NG 12/13層	暗褐色細粒シルト(～黒ボク・風成)	≤5	横大路火山灰層			
	NG 12/13層	灰色細粒シルト	≤5		有茎尖頭器・細石刃		
	NG 12/13層	灰黃~灰白色細粒シルト(火山灰質)	av10	石器製作場 (火山灰層)	石器製作場 削器・ハンマーストーン	4900±100Cb (GaK-14940)	繩文中期
低位段丘構成層	NG 13層	黃褐色シルト質粘土	≤5	乾痕	?		
	NG 13層	黃褐色粗粒シルト質火山灰	≤5	平安宮火山灰層	剥片・石核		
	NG 13層	暗灰黃~暗褐色シルト質粘土	av12	乾痕			
	NG 14層	灰白~綠灰色 シルト質砂・砂質シルト	20~80		剥片		
	NG 15層	黃褐色~綠灰色 粘土質砂礫~細粒砂質シルト	av200	石器製作場	器・ナイフ形石器 細部調整剥片石器		
	NG 16層	シルト 砂礫	150~450				
	NG 16層	暗灰~灰青色シルト・砂互層	≤150	ヒメツハダ(註2) ナウマンハダの足跡		27890±480Wd (GaK-6977) (註5)	
	NG 16層	灰色シルト質粘土	≤150	エゴノキ・マツハダ・オニグルミ シキシマブナ・コナンキンハゼほか			
	NG 16層	含化石花崗岩褐色泥質粘土	≤40	化石林		31120±1380Wd (GaK-15852)	
	(未命名層)	灰色砂礫~中粒砂 粘土・シルト・砂互層・砂礫	15~120 370+	↓上面検出遺構 ▽地層内検出遺構 ↓下面検出遺構 ゾウの足跡次の凹み			ゲニアト間ワルイ期 中期旧石器

註) 1 瓦器の編年は〔鈴木秀典1982〕、平安I~III期は〔佐藤隆1992B〕による。 註) 2・5 〔那須ほか1979〕の層序を対比し引用する。
註) 3・4 吉川ほか(1986)の年代による。

別表3 石器計測表 (長原遺跡西地区)

石鏃				ナイフ形石器(接合)					
長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量		
37	1.60	1.28	0.37	0.57	85	3.05	2.03	0.58	4.57
38	2.26	1.35	0.32	0.90	翼状剥片(接合)				重量
39	2.57	1.94	0.42	1.68	86	5.08	2.65	0.54	10.37
40	3.02	1.90	0.50	2.27	翼状剥片				重量
41	2.03	1.36	0.30	0.55	87	1.84	5.00	0.62	5.57
42	2.52	1.77	0.41	1.13	88	2.56	4.52	0.91	11.19
43	2.44	1.46	0.38	1.24	89	1.98	5.59	0.70	8.38
44	2.44	1.69	0.49	1.56	90	1.83	3.75	0.50	4.05
45	3.32	1.83	0.42	2.20	91	3.69	2.05	0.68	4.67
46	2.20	1.23	0.35	0.87	92	2.03	3.56	0.71	5.53
47	3.61	1.53	0.50	2.74	横長剥片				重量
48	4.05	2.01	0.46	4.16	93	1.95	4.63	0.80	6.28
49	2.91	1.73	0.29	1.31	94	5.98	3.50	1.08	19.27
50	5.06	1.42	0.53	3.52	95	4.36	2.95	1.13	14.57
51	4.06	1.46	0.84	5.84	96	4.80	2.98	1.06	16.53
未製品		長さ		幅		厚さ		重量	
52	5.87	3.62	0.92	18.39	97	2.15	5.61	1.57	14.95
53	5.87	3.43	1.48	22.65	98	2.66	2.88	0.62	4.36
54	4.14	3.03	0.51	6.96	99	4.23	1.65	0.65	4.85
55	4.25	3.93	1.61	17.71	100	2.00	3.82	0.57	3.41
56	3.38	3.07	1.22	9.77	101	2.05	4.34	0.88	7.06
クサビ本体		長さ		幅		厚さ		重量	
57	4.77	3.60	1.35	20.26	102	2.43	3.05	0.49	2.68
58	5.04	5.33	1.10	36.46	103	4.72	3.03	0.98	12.06
59	2.30	2.10	0.81	4.00	104	1.96	3.68	0.65	4.78
60	4.63	2.47	1.57	16.00	105	2.18	3.62	0.88	5.99
クサビ剥片		長さ		幅		厚さ		重量	
61	3.32	1.88	0.94	5.88	106	1.72	3.31	0.72	3.61
62	1.46	2.41	0.43	1.63	107	4.72	3.03	0.98	12.06
63	3.76	3.12	0.51	6.90	108	2.75	3.66	0.74	7.10
64	4.10	1.77	0.56	4.24	109	4.04	5.27	0.95	17.34
65	4.03	3.37	0.72	9.33	110	5.56	4.12	1.47	26.38
66	2.23	1.96	0.37	1.80	111	5.63	4.07	1.69	36.52
67	3.35	3.62	0.77	9.94	112	3.05	4.22	0.75	8.61
ナイフ形石器		長さ		幅		厚さ		重量	
68	4.20	1.65	0.76	4.44	113	2.34	2.96	0.88	6.09
69	5.13	1.87	0.80	7.27	114	2.57	2.91	0.35	2.74
70	5.15	1.79	0.92	6.99	115	2.01	2.47	0.46	2.23
71	4.57	1.56	0.78	4.51	116	3.05	1.79	0.68	3.77
72	2.78	1.08	0.46	1.23	117	2.69	1.72	0.65	2.58
73	2.42	2.93	0.97	7.08	118	1.80	2.80	0.33	1.60
74	6.76	2.32	1.40	22.90	119	2.44	2.00	0.44	2.13
75	4.01	1.74	0.61	4.23	120	2.65	2.76	0.69	4.15
石核		長さ		幅		厚さ		重量	
76	6.98	4.40	2.26	51.75	121	2.71	2.75	0.70	4.26
77	5.39	3.04	1.33	22.14	122	3.16	2.80	0.62	5.29
78	8.16	5.08	1.55	66.37	123	4.66	2.65	1.20	12.71
79	5.03	2.96	1.41	22.13	124	6.14	2.66	0.90	13.83
80	5.80	2.78	1.58	21.69	125	5.37	2.69	1.00	13.93
81	5.49	3.07	1.09	20.58	126	7.13	5.89	2.18	72.50
82	3.96	5.64	1.21	20.94	127	4.14	3.09	0.48	5.17
83	4.27	3.01	1.02	11.56	128	5.37	2.69	1.00	13.93
84	5.99	2.94	1.55	21.04	129	7.13	5.89	2.18	72.50
縦長剥片		長さ		幅		厚さ		重量	

別表3 石器計測表（長原遺跡西地区）

剥片	長さ	幅	厚さ	重量	剥片	長さ	幅	厚さ	重量
131	4.73	4.55	1.16	23.47	159	2.03	2.51	0.61	2.86
132	4.70	3.62	2.30	30.09	160	6.47	3.47	1.55	35.53
133	3.72	3.71	1.08	15.36	161	3.85	3.50	1.06	10.87
134	3.88	2.73	0.93	8.00	162	4.38	2.99	1.23	12.79
135	4.91	3.38	1.24	23.33	163	5.92	4.00	1.08	24.39
136	4.79	2.65	1.25	14.06	164	3.36	2.38	0.73	5.49
137	5.97	4.69	1.66	43.15	165	5.79	3.14	1.19	18.50
138	3.75	2.87	1.01	11.16	166	3.70	3.31	0.90	9.96
139	6.28	4.05	2.14	52.81	167	6.76	3.56	2.41	31.31
140	3.83	3.76	1.23	16.52	168	7.40	4.25	1.52	36.82
141	1.56	3.57	0.57	2.28	169	3.38	3.85	0.98	10.68
142	5.38	3.93	1.37	30.12	170	3.85	2.93	1.24	12.44
143	2.36	2.98	0.89	5.04	171	3.51	3.89	0.94	8.95
144	7.48	4.47	2.21	64.44	172	6.46	4.60	1.08	35.40
145	2.59	4.85	0.70	10.78	173	5.36	4.60	1.06	27.96
146	5.12	4.33	1.52	26.25	174	2.97	2.56	0.56	5.58
147	8.20	5.88	1.96	65.69	175	4.14	2.60	0.74	6.32
148	3.48	3.25	1.09	11.34	176	5.76	3.46	1.76	29.51
149	3.17	2.65	0.53	4.15	177	3.79	4.57	1.71	22.72
150	4.65	5.40	1.32	31.88	178	2.74	2.39	0.41	2.26
151	2.92	2.17	0.63	4.08	179	3.10	2.85	0.60	7.38
152	6.16	4.23	1.20	24.33	180	2.87	2.62	0.51	4.74
153	5.56	4.35	1.41	31.89	181	3.59	3.59	0.97	14.66
154	7.32	3.87	1.26	32.67	182	2.56	1.97	0.51	3.18
155	4.91	3.48	1.78	29.72	183	2.91	2.34	0.93	3.71
156	2.01	4.63	0.75	6.86	184	5.49	3.50	1.45	23.85
157	2.60	4.09	0.93	6.81	185	2.63	3.91	0.96	8.65
158	2.51	2.95	0.55	4.73	186	2.86	2.33	0.84	6.16

引用・参考文献

- 青木遺跡発掘調査団 1977、『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅱ C・D地区
- 朝来町教育委員会 1990、『船宮古墳』 朝来町文化財調査報告書第2集
- 浅羽町教育委員会 1991、『古新田』 浅羽町立浅羽小学校新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
- 石田成年 1987、『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1986年度 柏原市教育委員会、pp.16-18
- 稻田孝司 1978、「忌の竈と王権」：『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会、pp.52-69
- 稻村繁 1986、「群馬県における馬形埴輪の変遷－上芝古墳出土品を中心として－」：東京国立博物館編
『MUSEUM』No425 ミュージアム出版、pp.4-20
- 井上裕一 1985、「馬形埴輪の研究－製作技法を中心として－」：『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学出版部、
pp.369-414
- 植木久 1992、「建築遺構に関する考察」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第9、pp.350-357
- 上野利明・中西克宏 1985、「大賀世2・3号墳の出土遺物について」：東大阪市文化財協会編『紀要』
I、pp.95-131
- 植野浩三 1987、「韓式系土器の名称」：『韓式系土器研究』I 韓式系土器研究会、pp.1-2
- 江浦洋 1988、「古墳時代窯跡出土須恵器の技法的特徴」：大阪文化財センター編『日置荘遺跡（その
3）』、pp.71-75
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 1985、「長原遺跡発掘調査（NG84-25）現地説明会資料」
1989、「よみがえる古代船と5世紀の大阪」
- 大阪市文化財協会 1979a、「長原川辺遺跡調査略報」：『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第1回）資料』
(財)大阪文化財センター
- 1979b、「平野区長吉出戸4丁目所在遺跡発掘調査略報」：『大阪府下埋蔵文化財担当者
研究会（第1回）資料』 (財)大阪文化財センター
- 1982、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 1989、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅰ
- 1990、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 1991、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅳ
- 1992a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ
- 1992b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅳ
- 1992c、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅴ
- 1992d、「難波宮址の研究」第九
- 大阪府教育委員会 1981a、「大園遺跡発掘調査概要」Ⅴ
- 1981b、「大園遺跡発掘調査概要」Ⅵ
- 1988、「陶邑」Ⅵ 大阪府文化財調査報告書第35輯 (財)大阪文化財センター
- 大阪府埋蔵文化財協会 1990、「陶邑・伏尾遺跡 A地区」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯
- 大阪文化財センター 1978、「長原」

- 1980、『亀井・城山』
- 1986a、『久宝寺南(その1)』
- 1986b、『城山(その1)』
- 大場磐雄 1937、「上代馬形遺物に就いて」：『考古学雑誌』第27巻第4号 日本考古学会、pp.1-21
- 小笠原好彦 1975、「土馬考」：『物質文化』25号 物質文化研究会、pp.37-46
- 岡山県古代吉備文化財センター 1993、「菅生小学校裏山遺跡」：『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』5 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81 岡山県教育委員会、pp.53-420
- 笠井敏光 1984、「まとめ」：羽曳野市教育委員会編『古市遺跡群』V、pp.90-108
- 梶本敏三 1986、「青谷石神古墳群について」：京都府埋蔵文化財調査研究センター編『京都府埋蔵文化財情報』第21号、pp.7-13
- 金村浩一 1990、「長原遺跡出土の縄文土器－滋賀里IV式土器の発見－」：大阪市文化財協会編『葦火』24号
- 川西宏幸 1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64号第2巻 日本考古学会、pp.95-164
- 1982、「形容詞を持たぬ土器」：『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論集 平凡社、pp.189-214
- 1983、「馬形埴輪断想」：古代學協會編『土車』第26号、p.1
- 1988、「円筒埴輪総論」：『古墳時代政治史序説』 塙書房、pp.225-360
- 韓式系土器研究会 1987、「韓式系土器研究」I
- 木原克司 1989、「長原南口古墳の調査」：大阪市文化財協会編『葦火』23号
- 京嶋覚 1986、「長原遺跡出土の皮袋形瓶・子持勾玉・土馬」：大阪市文化財協会編『葦火』3号
- 1992a、「瓜破台地の考古学的環境」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III、pp.1-6
- 1992b、「古墳時代後半期における土師器の器種構成」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III、pp.187-200
- 1992c、「飛鳥時代の土器とその時期」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IV、pp.149-154
- 1992d、「長原・瓜破遺跡の製塩土器」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IV、pp.155-160
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991、「京都府遺跡調査報告書」第15冊
- 京都府立山城郷土資料館 1991、「京都府のはにわ」
- 久保和士 1992、「堤をもつ古墳」：大阪市文化財協会編『葦火』36号
- 工楽善通 1991、「水田の考古学」UP考古学選書12 東京大学出版会
- 近藤義郎 1992、「蒜山原四つ塚古墳群(改訂版)」 岡山県真庭郡八束村
- 坂井秀弥 1981、「水田址からみた初期の稻作技術について－「不定形小区画水田」の一考察－」：『関西学院考古』No7 関西学院大学考古学研究会、pp.13-23
- 櫻井久之 1991、「長原40号墳の形象埴輪」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』IV、pp.192-210
- 1992、「馬と人物のはにわ」：大阪市文化財協会編『葦火』38号、

- 佐藤隆 1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102-114
- 佐原真 1964、「石器」：『紫雲出』 託間町文化財保護委員会、pp.70-97
- 四條畷市教育委員会 1986、『中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ
- 島根県教育委員会 1981、『重要文化財平所遺跡埴輪窯跡出土品復元修理報告書』
- 1989、『古曾志遺跡群発掘調査報告書』
- しもつけ風土記の丘資料館 1988、「前方後円墳の時代ーしもつけにおけるその出現と展開ー」
- 鈴木秀典 1982、「瓦器椀の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
- 瀬川芳則 1991、「馬飼集団の神まつり」：『古墳時代の研究』第3巻 生活と祭祀 雄山閣出版、pp.122-130
- 積山洋 1992、「水田遺構の分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.91-101
- 泉北考古資料館1982、『大阪府の埴輪』
- 高井健司 1986、「長原七ノ坪古墳とその馬具」：大阪市文化財協会編『葦火』創刊号
- 1987、「長原古墳群で埋葬施設を確認」：大阪市文化財協会編『葦火』8号
- 1990、「黒斑をもつ円筒埴輪の一例ー長原40号墳出土の資料ー」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.285-293
- 田中清美 1980、「古式土師器」：大阪市文化財協会編『瓜破北遺跡』、pp.47-56
- 1987、「長原遺跡」：『韓式系土器研究』Ⅰ 韓式系土器研究会、pp.35-41
- 1992、「河内平野の開拓と弥生文化」：『考古学論集』第4集 考古学を学ぶ会、pp.29-50
- 田辺昭三 1966、「出土遺物の検討」：『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ、pp.35-58
- 1981、「須恵器大成」 角川書店
- 1982、「初期須恵器について」：『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論集 平凡社、pp.417-429
- 田辺町教育委員会 1989、「堀切古墳群調査報告書」田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集
- 樽野博幸 1978、「長原遺跡出土の哺乳動物遺体」：長原遺跡調査会編『長原遺跡発掘調査報告』大阪市文化財協会1982改訂、pp.196-199
- 趙哲済・京嶋覚・高井健司 1992a、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.19-32
- 1992b、「長原遺跡の地層をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.177-186
- 坪之内徹 1989、「韓式系土器と7世紀の土師器」：『韓式系土器研究』Ⅱ 韩式系土器研究会、pp.53-63
- 寺沢薰・森井貞雄 1989、「河内地域」：寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、pp.41-146
- 同志社大学文学部文化学科 1972、「井辺八幡山古墳」同志社大学文学部考古学調査報告第5冊
- 直木孝次郎・吉井巖・足利健亮・中尾芳治・趙哲済 1990、「古代難波の景観復元とその変遷」：大阪市史編纂所『大阪の歴史』30、pp.67-108
- 中西克宏 1988、「生駒西麓産の羽釜」：『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.4, No.1 東大阪市文化財協会、pp.7-18

- 長原遺跡調査会 1978、「長原遺跡発掘調査報告」大阪市文化財協会1982改訂
- 中村浩 1980、「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」：大阪府教育委員会編『陶邑』Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第30輯 （財）大阪文化財センター、pp.168-241
- 那須孝悌・樽野博幸 1979、「大阪平野におけるウルム氷期以降の層序」：文部省科研費給研『ウルム氷期以降の生物地理に関する総合研究』昭和53年度報告書、pp.78-79
- 西弘海 1982、「土器様式の成立とその背景」：『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論集 平凡社、pp.447-471
- 西中川駿・松元光春 1991、「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」：『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』鹿児島大学農学部獣医学科、pp.164-188
- 野島稔 1984、「河内の馬銅」：『万葉集の考古学』筑摩書店、pp.402-408
- 林田重幸・山内忠平 1957、「馬における骨長より体高の推定法」：『鹿児島大学農学部学術報告』6 鹿児島大学農学部、pp.146-156
- 林田重幸 1974、「日本在来馬の源流」：『日本古代文化の探究・馬』社会思想社、pp.217-262
- 原口正三 1979、「須恵器と土師器」：『須恵器』日本の原始美術4 講談社、pp.68-69
- 樋口隆康・西谷真治・小野山節 1985、「増補大谷古墳」同朋舎出版
- 平田洋司 1991、「4基の古墳と長原古墳群」：大阪市文化財協会編『葦火』33号
- 広島県教育委員会 1983、「緑岩古墳」
- 広瀬和雄 1981、「6世紀後半における集落遺跡出土土器の二、三の分析」：大阪府教育委員会編『大園遺跡発掘調査概要』VI、pp.41-47
- 1988、「近畿地方における土器製塩」：『考古学ジャーナル』第298号、pp.13-20
- 藤井寺市教育委員会 1987、「林遺跡の調査」：『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅱ 藤井寺市文化財報告第2集、pp.111-125
- 1989、「葛井寺遺跡の調査」：『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅳ 藤井寺市文化財報告第4集、pp.11-83
- 1991、「土師の里窯跡群」：『石川流域遺跡群発掘調査報告』VI 藤井寺市文化財報告第7集、pp.179-228
- 藤田幸夫 1987、「長原遺跡から出土した古墳時代の木製品について」：大阪市文化財協会編『葦火』6号
- 増田精一 1960、「埴輪馬にみる頭絡の結構」：『考古学雑誌』第45巻第4号 日本考古学会、pp.47-62
- 松木武彦 1989、「弥生時代の石製武器の発達と地域性－とくに打製石鏃について－」：『考古学研究』第35巻第4号 考古学研究会、pp.69-96
- 松阪市教育委員会 1981、「八重田古墳群発掘調査報告書」松阪市文化財調査報告2
- 松山市教育委員会 1972、「三島神社古墳発掘調査報告書」
- 松山市教育委員会・松山市文化財協会 1975、「岩子山古墳」松山市文化財調査報告書第8集
- 本村悟 1978、「水田土壤の灰色化」：川口桂二郎編『水田土壤学』2.6 講談社、pp.90-93
- 森田克行 1992、「動物埴輪のスカシ孔－畿内型と武藏型－」：『究班』15周年記念論文集編集委員会、pp.297-332
- 森田稔 1986、「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」：神戸市立博物館編『神

- 戸市立博物館研究紀要』第3号、pp.3-31
- 森本晋 1984、「9号墓出土石鎚の製作技術について」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『山賀（その3）』、pp.311-312
- 1986、「石鎚」：『弥生文化の研究』第9巻 雄山閣出版、pp.54-61
- 八尾市文化財調査研究会1985、「八尾南遺跡発掘調査概要報告」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和59年度』
- 八尾南遺跡調査会 1981、「八尾南遺跡」
- 八女市教育委員会 1983、「立山山古墳群」八女市文化財調査報告書第10集
- 横田賢次郎・森田勉 1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」：『九州歴史資料館研究論集』4、pp.1-26
- 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和1986、「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」：『地球科学』第40巻第1号 地学団体研究会、pp.18-38
- 吉田恵二 1973、「埴輪生産の復原」：『考古学研究』第19巻第3号 考古学研究会、pp.30-48
- 米田敏幸 1991、「近畿」：『古墳時代の研究』第6巻 土器と須恵器 雄山閣出版、pp.19-33
- 若松良一 1992、「人物・動物埴輪」：『古墳時代の研究』第9巻 古墳Ⅲ埴輪 雄山閣出版、pp.108-150
- 渡辺昌宏 1987、「古墳時代土器の器種構成とその比率」：大阪府埋蔵文化財協会編『三田遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第15輯、pp.374-375
- Goody, P. C. 1983 *Horse Anatomy*. J.A. Allen & Company Limited, pp.36-37
- 袁仲一 1990、「秦始皇陵兵馬俑研究」 文物出版社

あとがき

本文中にも記したように、これまでの調査により長原古墳群で確認された古墳の数は200基を越えた。その中には、高廻り1・2号墳のように船形埴輪をはじめとする造形的に優れた埴輪を伴うものもあり、全国的によく知られた古墳もいくつかある。しかし、それらの意義について考察するばあい、まず古墳群全体の理解が不可欠なことはいうまでもない。

長原古墳群の調査は、当協会、当協会の前身である長原遺跡調査会、そして大阪文化財センターによって実施されてきており、古墳の番号もそれぞれの調査ごとに与えられてきた。また、地下に埋没する古墳は、調査を行ってはじめて存在が確認されるため、外部の研究者からみれば全体像の捉えにくい古墳群であったといえる。1982年に刊行した『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱにおいて、その時点までの基礎データの整理を行ったが、本書ではその後に見つかった百数十基のデータを加え、報告書作製に係わる整理作業などによって明らかになった新たな知見を補充した。また、本年度の調査成果として12基の古墳をはじめ同時代の集落についても報告した。本書が長原古墳群の研究にさらに弾みを付けるものとなることを切望する次第である。

発掘調査において、また報告書作製に当って、関連諸機関の方々に種々の御高配、御援助を寄せていただいた。末筆ながら、深く御礼申し上げ、本書のしめくくりとしたいたい。

(永島暉臣慎)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関するもの〉

II	II期（瓦器）	134,135		107,111,115,117,142,273
III	III期（瓦器）	134	い イイダコ壺	151
IV	IV期（瓦器）	23,24	家形埴輪	221,229
V	V期（瓦器）	24	生駒西麓産	24,25,80,103,115,135,141,
B	B種ヨコハケ	119,182,189,190		272,274,276
M	MT15型式	73,79,80,83,86,105,116,141, 216,229,248	井戸	20,70,83,137,209,254,256, 273
O	ON46段階	80,84,92,93,158,182	伊万里焼	137
T	TK10型式	73,86,96,100,103,105,116, 117,141,165,249,276,281	う 白玉	67,121
	TK209型式	156,273,274	ウマ	77,125,126,127,135,163
	TK216型式	87,97,156,215,216,229	馬形埴輪	162,174,221,277～286
	TK23型式	72,79,80,83,84,89,92,93,97, 100,103,116,141,142,143, 144,156,163,165,167,190, 195,201,216,220,221,278, 280,282	え 煙道	117
			か 灰釉陶器	213
			瓦質（土器）	24,137,151
			刀形	76,123,125
			竈（形土器）	22,68,69,70,115,117,141, 144,271,272,274,276
	TK43型式	72,84,96,100,229,249,274, 276	唐津焼	137
			皮袋形瓶	71,83
	TK47型式	72,79,80,84,86,92,93,96,97, 100,103,105,116,141,143, 163,165,167,195,215,216, 220,278,280,285	灌溉	17,137,208,223,240,252, 255,256,258
			韓式系土器	4,115,141,270
			き 木杭	76,208
	TK73型式	89,141,156,216,229,253,271	北白川C式	266
あ	朝顔形埴輪	173,184,189,191,192,198, 202,253	衣蓋形埴輪	179,185,202
			金属製容器	213,287～290
	足跡	227,237,239,252	く 草摺	229
	飛鳥I	139,141,274,275	クサビ	29～32,49
	飛鳥II	139,141,274,275	管玉	122
	飛鳥III	139,141	組紐文	229
	当て具痕	80,86,87,96,97,103,105,106,	グライ土壤	258

黒ボク	146,151,193,195,198	青磁	22,151,213
け 蛍光X線分析	287	石核	33,36
畦畔	128,137,203,207,210,223, 237,239,256,258,259	石鏃	25,27,28,232,234,237,239, 248,261～268
建築部材	123	石斧の柄	241,243,261
原礎	56	石棒	60
こ 洪水	2,147,239,240	石器ブロック	234～237,256
黒曜石	268	接合資料	25,36,56,233
甌	72,73,79,80,86,96,97,103, 107,115,117,139,141,156, 270～274	瀬戸内技法	36,60
子持勾玉	75,77,119	瀬戸美濃焼	137
		線刻	89,115,173,174,178,185,
さ 塚摺鉢	137		198,203,278,280,281,284
柵	67	た 大畦畔	237,239
佐波理製品	287,288	高杯形器台	73,83,86,106,115,180,229
し 滋賀里IV式	228,234,266	豎穴住居	62,67～69,77,142,143
シッタ	142	盾形埴輪	173,248,250,251
志野菊皿	137	豎杵	243
鎬蓮弁	22	縦長剥片	30,47,233
島畠	255,256	ち 竹管文	83
主体部	2,5	茶釜	22
蒸気孔	97,103,270	柱根	67,76
縄蓆文	89,115,270	沖積層下部層	21,151,228
庄内式	227	沖積層上部層	20,21,147,151,225,227
縄文土器	24	調整剥片	42,46,47,56
条里	131,215,252	つ 造出し	4,5,6,221
植物遺体	228	付け庇系	117,141,276
人物埴輪	160,162,174,221,278	筒形器台	74,76,86,92,97
す 水田	128,137,203,207,210,223, 237,239,256～260	翼状剥片	38,56,60
		坪境溝	137,252～256
鋤先	208,241	て 手焙り形土器	244
スクレイパー	28,233	提瓶	71,83,139
擂鉢	137,151,156	底面をもつ剥片	33,36,38,40
せ 製塩土器	115～117,163,270～274	と 砥石	123,215
青花	137,151	同安窯系	22,151
		東播系	22,156,232

動物遺体	124～127,135	平安神宮火山灰	228
土器埋納遺構	132,134,245	兵馬俑	286
土馬	77,117,145	ヘラ記号	79,83,92,96,105,173,182
渡来系土器	270,271	ベンガラ	162
な ナイフ形石器	32,36,38,56,233	ほ 方形周溝墓	243,244
ナウマンゾウ	256	墨書	137
長原式土器	241,243,266	掘立柱建物	61,77,128,142,143,209
ぬ 布目痕	213	ま 埋葬施設	6
ね 粘土板円筒化	284,286	勾玉	92,119,122
は 羽釜	22,80,103,129,134,135,139, 141,213,272,274,276	曲げ庇系	141,276
白磁	22,151,156,213,232,253,255	丸底 1式	270,271,272
埴輪棺	216	み ミニチュア	21,22,80,97,151
埴輪列	160,221	も モモ	73,76,77
ひ 庇	128,209	や 焼きむら	105
歪んだ埴輪	158,162,167,218,219,223, 224	屋敷地	128,129,132,134,215
備前焼	137	有孔円板	123
火鉢	22	床束	61,64,65,142,143
ヒヨウタン	77	鞠形埴輪	174
平瓦	213	よ 陽物形把手	117
平底鉢	270,271	横大路火山灰	151,228
ふ 舟形容器	123	横長剥片	38,40,42
船元Ⅱ式	266	四ツ池式	266
布留式	92,103,249,269,272,274,276	り 竜泉窯系	22
へ 平安Ⅲ期	23,129,134,135,212,215	緑釉陶器	156
平安Ⅳ期	134,215	れ 列点文	83,87,96,100,105,107,115,

〈地名・遺跡名など〉

い 一ヶ塚古墳	4,6,216,217	瓜破北遺跡	269
岩子山古墳	286	え 戎町遺跡	258
井辺八幡山古墳	285	お 大賀世2号墳	286
う 「馬池谷」	9,12,20,60,74,125	大園遺跡	139,141,142

大谷古墳	218	は 白鳥 1 号墳	220,224
か 軽里 4 号墳	220,224	土師の里遺跡	276
神出窯	22	土師の里窯	285
き 北堀池遺跡	258	服部遺跡	258
経塚古墳	224	蕃上山古墳	220,224
喜連東遺跡	6,268	ひ 東除川	2,223
こ 古新田遺跡	143	百間川遺跡	258
誉田御廟山古墳	286	平尾山古墳群	276
さ 墳環濠都市遺跡	22	平所埴輪窯	285
し 七ノ坪古墳	5,6,216,217	ふ 伏尾遺跡	117
志知川沖田南遺跡	258	ほ 堀切 7 号墳	218
正倉院	288,290	み 三田遺跡	139
上人ヶ平 9 号墳	285	南口古墳	5,216,217
た 高廻り 1 号墳	5,6	南野米崎遺跡	127
高廻り 2 号墳	5,6	や 八重田 7 号墳	285
田村遺跡	258	八尾南遺跡	18,276
ち 茶山遺跡	276	野中寺	290
つ 塚ノ本古墳	2,6,216,217,282	山賀遺跡	263,268
な 中野遺跡	127	大和川	252,254~256
奈良井遺跡	127	山之内遺跡	143
に 西田井遺跡	276	よ 四ツ塚 13 号墳	286

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume V

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1985

March 1993

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features in this text:

SA : Palisade or Fence **SB** : Building **SD** : Ditch **SE** : Well
SK : Pit **SP** : Posthole

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Excavation of Nagahara and Uriwari sites.....	1
1) Excavation of the Nagahara Tomb Group.....	1
1) Introduction.....	1
2) Development of the excavation of the Nagahara Tomb Group.....	2
3) Current situation of the excavation.....	6
2) Outline and progress of research work.....	8
1) Introduction.....	8
2) Western sector of the Nagahara site (site code: NG85-9, 16, 59 and 80).....	9
3) Central sector of the Nagahara site (site code: NG85-9, 59 and 77).....	13
4) Southern sector of the Nagahara site (site code: NG85-34, 59, 67 and 70) .	14
5) South-eastern sector of the Nagahara site (site code: NG85-13).....	18
Chapter II Results of research.....	19
1) Western sector of the Nagahara Site (NG85-16).....	19
1) Assignment of excavation units and stratigraphy.....	19
2) Artefacts during and earlier than the Yayoi Period.....	24
3) Features of the Kofun (tumulus) Period.....	61
4) Finds of the Kofun Period.....	77
5) Features of the Asuka and Nara Periods.....	128
6) Features and artefacts of the Heian Period.....	128
7) Features and artefacts from the Muromachi to Edo Periods.....	137
8) Conclusion.....	139
2) Southern sector of the Nagahara Site (NG85-34 and 70)	146
1) Introduction.....	146
2) Stratigraphy and artefacts.....	146
3) Features and artefacts of the Kofun Period.....	156
4) Features and artefacts of the Nara Period.....	203
5) Features and artefacts during and later than the Heian Period.....	209
6) Conclusion.....	215
3) South-eastern sector of the Nagahara Site (NG85-13).....	225
1) Introduction.....	225
2) Stratigraphy and artefacts.....	225
3) Features and artefacts during and earlier than the Jomon Period.....	232
4) Features and artefacts of the Yayoi Period.....	237
5) Features and artefacts from the Kofun to Asuka Periods.....	245

6) Features of the Heian Period.....	252
7) Features and artefacts during and after the Kamakura Period.....	252
8) Conclusion.....	256
 Chapter III Investigation of artefacts.....	261
1) Study of a change in the form of stone arrow-heads in the stratigraphical contexts from the Nagahara Site.....	261
1) Introduction.....	261
2) Classification of the forms.....	261
3) Variety of stone arrow-heads from each stratum.....	266
4) Chronological sequence of stone arrow-heads	267
2) Evolution of pottery of the later Kofun Period from the Nagahara Site.....	269
1) Introduction.....	269
2) Changes in pottery assemblages.....	269
3) Conclusion.....	274
3) Horse-shaped <i>haniwa</i> from the Nagahara Site.....	277
1) Introduction.....	277
2) Observation of formation technique.....	277
3) Characteristics of formation technique.....	282
4) Conclusion.....	284
4) X-ray analysis of metal vessels excavated in the Nagahara site.....	287
 Tables.....	291
 References.....	303
 Postscript	
 Index	
 English Summary	

ENGLISH SUMMARY

This report details the achievements of the excavations carried out at the Nagahara site, situated in the south-eastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan, in the fiscal year of 1985 (beginning April 1st).

The Nagayoshi-Uriwara area, in which the Nagahara and adjoining Uriwari site are situated, is one of the few remaining locations within Osaka city in which farmland can still be found. Improvement of the main road and subway from the City to this area has been followed by rapid residential growth. As a result of this growth, there has been an increasing demand for water and sewerage services. The Nagahara and Uriwari sites lie within the land being rezoned to accommodate the development of these services.

Though emergency research prior to the rezoning project has been conducted since 1981, many other excavations at these sites have been carried out, almost continuously, over the last twenty years, prior to public or private developments in the area. In particular, at the Nagahara site, three hundred excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to 140,000 square metres, covering 4% of the whole site. This large accumulation of fieldwork has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites following a slope down to a plain, in which discoveries belonging to between the Upper Palaeolithic and the Early Modern eras, have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period.

In 1985 no research was undertaken in the Uriwari site. The strata of the Nagahara site for each period is preserved in good condition, and research works had been carried out on each strata, though all excavation areas were characteristically long and thin as they lie beneath land designated for roads. The strata have been identified according to the stratigraphical standard of the Nagahara site (Chart 2, p.300).

This excavation report is the fifth volume in the series and covers fourteen excavations. The total excavated area extends for 5,500 square metres. The dates of discoveries fall between the Upper Palaeolithic and the medieval periods (spanning the 12th to 16th century). The areas excavated were divided up into three geographical sectors and the results of research in each sector are summarized as follows:

Western sector of the Nagahara site

Research up to 1985 had located and investigated building complexes (colour pl. 1) in 5 areas dating to the Middle to Late Kofun period (5th to mid-6th centuries A.D.) and in 4 areas dating to the Heian period (10th and 11th centuries A.D.).

The 1985 research has located 19 structures dating to the Mid to Late Kofun period. The structures have been identified as *Tate-ana-shiki Jukyo* (semi-subterranean house) and *Hottate-bashira Tatemono* (a style of building constructed with pillars imbedded

directly into the ground). Five structures from the Heian period were also located. A large amount of pottery, and ritual objects (colour pl. 1), dating to the Kofun period were found in a small buried branch of the main Umai-ke-Dani valley in the western tip of the sector.

As a result of the 1985 research, the outline of the Kofun period village is becoming apparent. After careful consideration of characteristics, the study of the pottery remains from the latter half of the Kofun period has lead to *Sue-ki* (Sue ware) and *Haji-ki* (Haji ware) being divided into five periods of changing styles (fig. 204).

Southern sector of the Nagahara site

This sector is located in the main part of the Nagahara Tomb Group. The main features of this site are two *kofun* (mound tombs) lying in the east and west of the sector. The Tsukanomoto (diam. 55 m) and Ichigazuka (diam. 47 m) are both circular *kofun* and are supposed to belong to the chieftains of the period.

The research conducted in 1985 concentrated on ten small, square *kofun* dating from the Middle Kofun period. A typical example of these is Nagahara Tomb No. 131 (pls. 14 and 15). This *kofun* features a row of *haniwa* (unglazed earthenware artefacts) lining the edges of the mound, many of which were warped during the firing process, a type usually discarded (colour pl. 2). The stomach section of the horse-shaped *haniwa* (pl. 75) found on this *kofun* were formed using a technique which differs from those used in other areas in the Kinki region. This is the first reported incident of this style.

By the mid 6th century A.D., *kofun* construction had ceased at the Nagahara site, and during the Asuka period the land was re-used for rice cultivation. As a result, a large number of the tombs were leveled. From the 1985 research, the patterning of the rice fields at the end of the Nara period (the end of 8th century) is becoming apparent.

Excavations also revealed part of a Heian period residential area, containing *Hottate-bashira* style structures and a number of wells. A third example of metal vessels (fig. 167-888) was also recovered from this area.

Southeastern sector of the Nagahara site

This area features well preserved strata dating from the Upper Palaeolithic through to the Middle Yayoi period.

Excavations unearthed an extensive number of Upper Palaeolithic objects and exposed the remains of an irrigation system (pl. 30) dating to somewhere between the Final Jomon and Early Yayoi periods, as well as an early-Middle Yayoi period rice field (pl. 32). A final-Late Yayoi period *Ho-kei-shuko-bo* (square mound tomb with a surrounding ditch) was also found (pl. 33).

Although excavations conducted both before and since 1985 have located Palaeolithic waste flake concentrations in this sector, none were located during the 1985 excavations.

Consideration of the excavational evidence from each strata has indicated a change

in the form of the stone arrow-heads used in the area (fig. 200).

Conclusion

In the Nagahara Tomb Group, two hundred tombs have been investigated, the actual number of tombs is several times greater, however. The Tomb Group largely features small scale, square *kofun* (97% of the total number) and despite their small size (approx. 10 metre square), a remarkably high number of them posses *haniwa* (64% of total number). Nagahara Tomb No. 131, an 11 metre square *kofun*, exemplifies the Group. This *kofun* features a line of cylindrical *haniwa* on the edges of the mound. There are warped *haniwa* and the form of the horse-shaped *haniwa* is unique to this area. These features are characteristic of the Nagahara Tomb Group though they have been influenced by the Furuichi Tomb Group, in which the royalty and upper-nobility were interred, lying 2.5 km southward.

The technique used to form the stomach section of the horse-shaped *haniwa* is unusual in the Kinki region. It is a simpler technique similar to that used in the Kanto region during the late 6th century A.D. and may indicate a relationship between the two areas. More research is necessary to completely understand the use of warped *haniwa* on the Nagahara *kofun*.

The Kofun period village allowed research into the distribution of buildings of this period and is a good indicator of the village's social structure. Items not usually associated with domestic life were found in the village and may indicate a village ceremony. These include small, terra-cotta horse (fig. 88-572), *Kawabukuro-gata Hei* (leather bag shaped Sue ware container, fig. 68-228) and *Komochi-magatama* (large curved bead with several smaller curved beads attached, fig. 89-574 and 575).

The early-Middle Yayoi period rice field is the earliest discovered in the Nagahara site and is being reported here for the first time. This feature apparently marks the beginning of rice farming in this area. Despite its importance for considering the development of rice farming, it along with other features, is threaten with destruction by the continuing redevelopment of this area.

Further Reading

Aikens, C. M. and Higuchi T.

1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., Barnes, G. L. and Hutterer, K. L. Editors

1986 *Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory*. Center for Japanese Studies, the University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., Editor

1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Culture Studies, Tokyo.

- 1992 Archaeological studies of Japan. *Acta Asiatica* 63. The Institute of Eastern Culture.
- Tsude H.
- 1988 Land exploitation and stratification of society: a case study in ancient Japan.
Studies in Japanese Language and Culture, Joint Research Report No. 4, pp. 107-30. Faculty of Letters, Osaka University, Japan
- 1990 Chiefly lineages in Kofun-period Japan: political relations between centre and region. *Antiquity* 64, pp. 923-31.
- The Osaka City Cultural Properties Association
- 1989-1992 *Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-IV. The Osaka City Cultural Properties Association, Osaka. (In Japanese except for English summary in Vol. IV)
- The Osaka City Cultural Properties Association
- 1978-1992 *Archaeological Reports of Nagahara sites* Vols. I-V. The Osaka City Cultural Properties Association, Osaka. (In Japanese)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはくつちょうさほうこく5						
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告V						
副書名	1985年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	櫻井久之・京嶋覚・田中清美・田島富慈美・久保和士・高井健司・成瀬正和・永島暉臣慎						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-943-6833						
発行年月日	西暦 1993年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 [遺跡番号]	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしらがはら 長吉長原	27126	34° 36' 00"	135° 34' 40"	NG85-9次 19850508~19850513 NG85-13次 19850527~19850903 19851128~19860317 NG85-16①次 19850610~19860312 NG85-16②次 19850610~19860312 NG85-34①次 19850907~19851130 NG85-34②次 19850917~19860125 NG85-34③次 19851002~19860203 NG85-34④次 19851016~19851108 NG85-34⑤次 19851108~19851212 NG85-59次 19851213~19851226 NG85-67次 19860117~19860317 NG85-70次 19860203~19860308 NG85-77次 19860306 NG85-80次 19860319~19860331	25m ² 1,400m ² 1,700m ² 780m ² 140m ² 370m ² 145m ² 62m ² 186m ² 35m ² 200m ² 242m ² 10m ² 134m ²	土地区画整理事業(長吉瓜破地区)施行に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長原遺跡	集落 古墳 田畠	弥生時代 中期初頭 古墳時代 中~後期 平安時代	水田畦畔 溝 古墳12基 掘立柱建物13棟 竪穴住居6軒 溝 掘立柱建物6棟 井戸1基	石鏃 土師器・須恵器 円筒埴輪・形象埴輪 子持勾玉・土馬 皮袋形瓶 土師器・黒色土器 青白磁・金属製容器	市内で最古の水田址 一鉢の面積40m ² 前後 131号墳に焼け歪んだ円筒 埴輪多数 集落内から祭祀関係遺物出土 当遺跡3例目の金属製容器		

原色図版



VI区 建物群（南から）



IX区 SD52（北から）

原色図版二 滑石製品・円筒埴輪



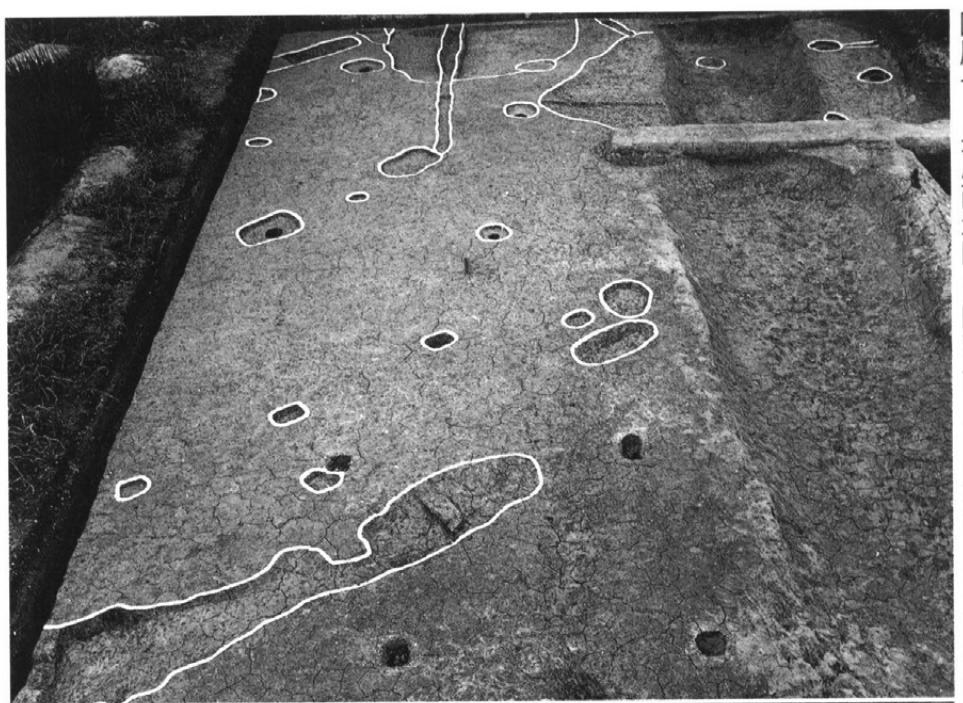
長原西地区 滑石製品



131号墳円筒埴輪

図 版

図版一 長原西地区 IV区東部・V区全景

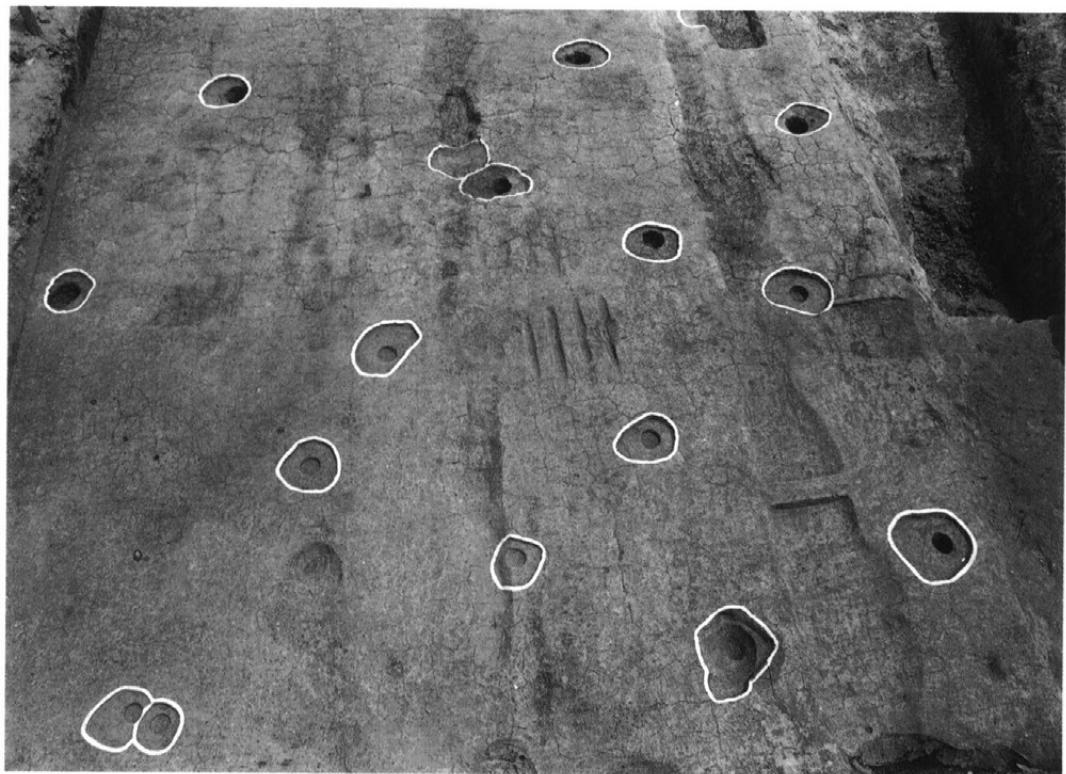


IV区東部（西から）

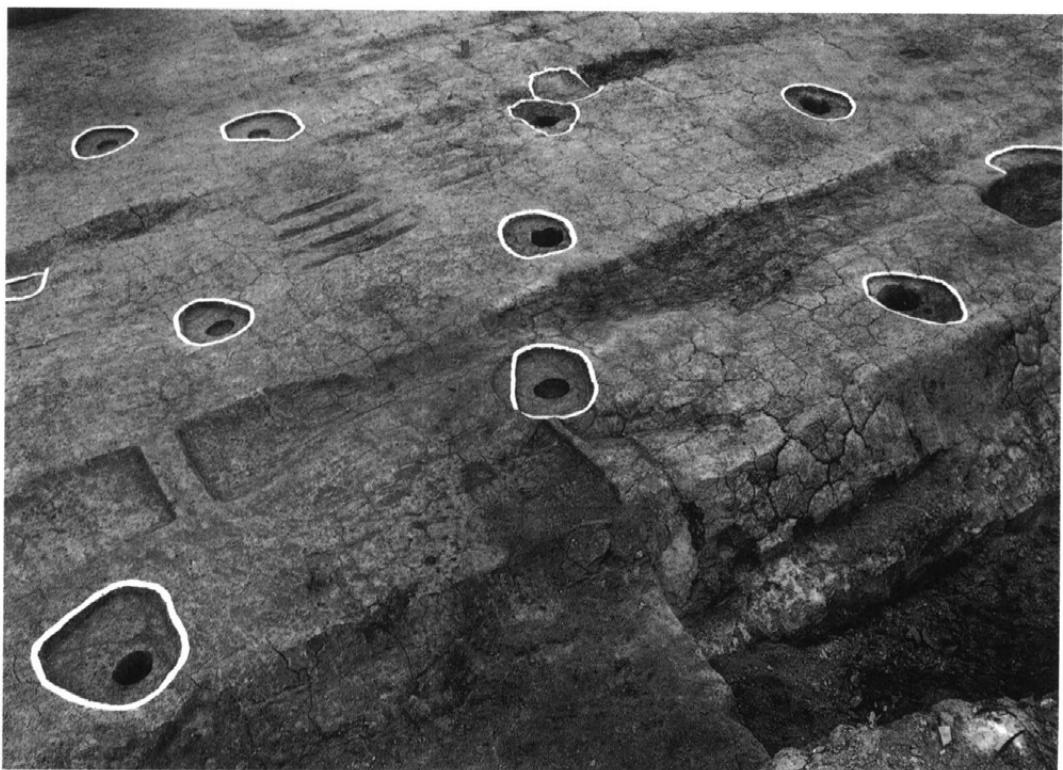


V区（東から）

図版二 長原西地区 IV区古墳時代の遺構

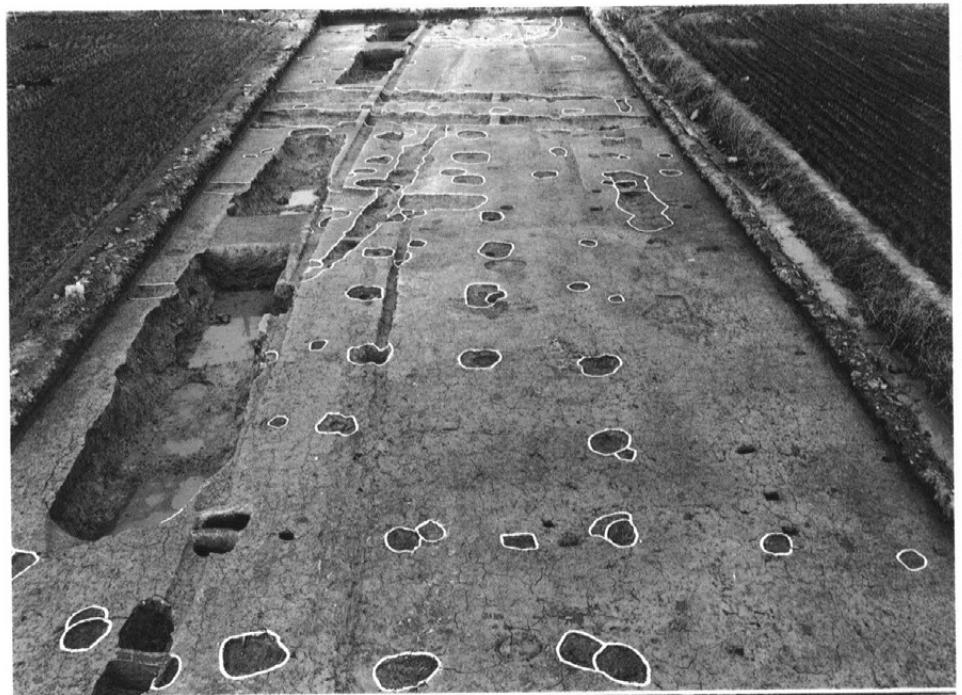


SB05・06 (西から)

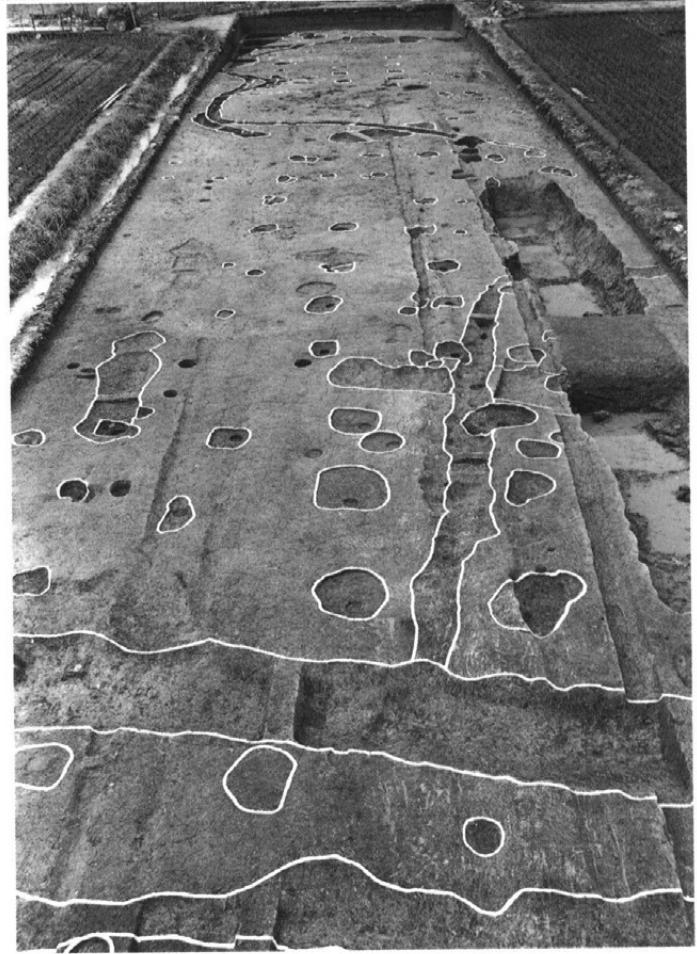


SB05 (南から)

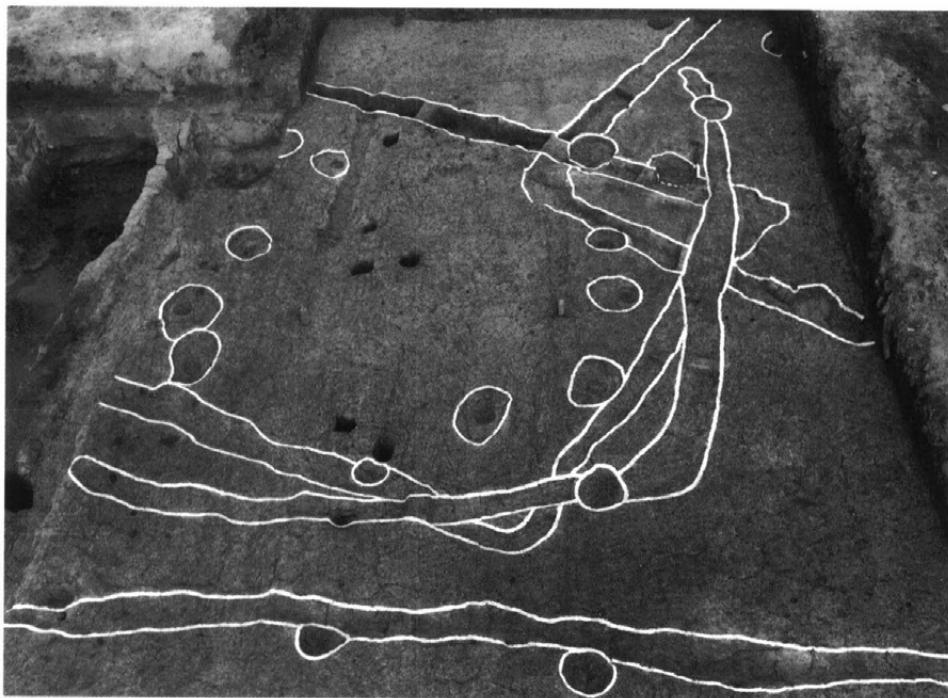
図版三 長原西地区 VI区全景



VI区（南から）



VI区（北から）

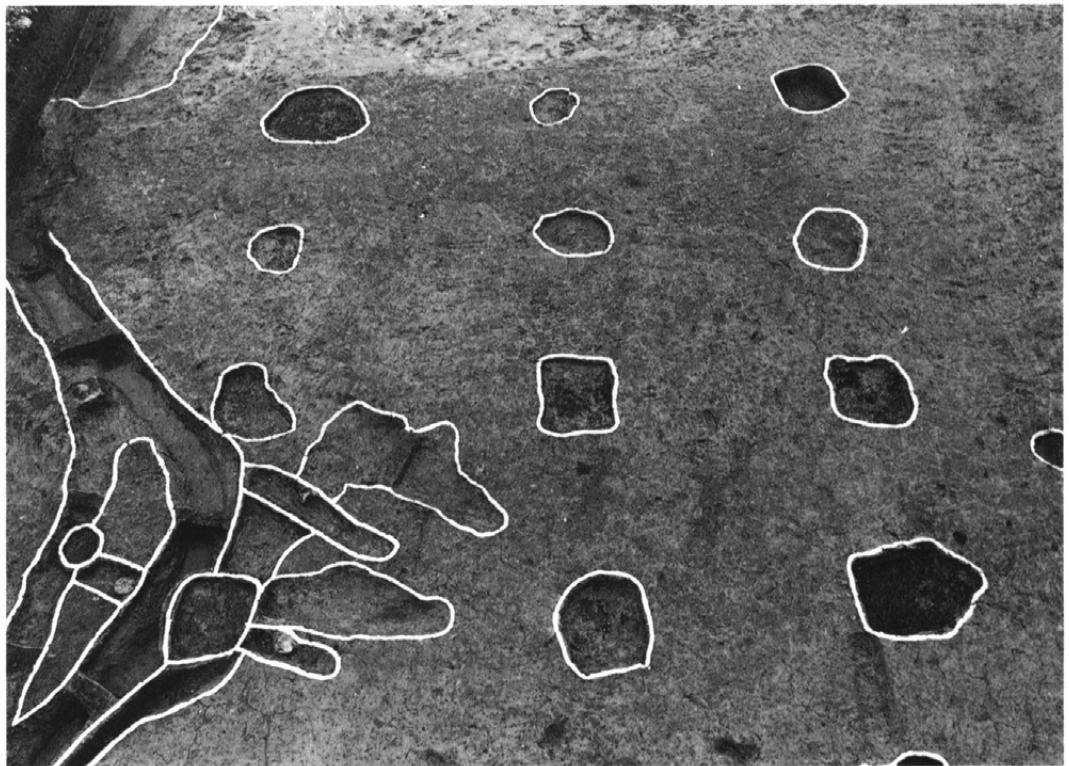


SB 10 ~ 12 (南から)



SB 18 · 19 (南から)

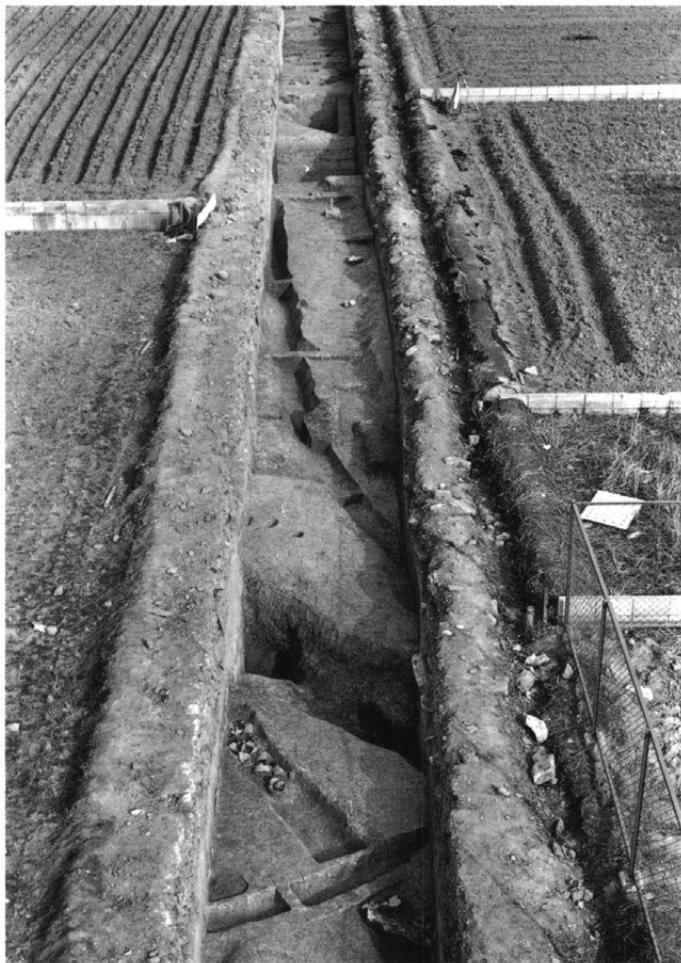
図版五 長原西地区 VI区古墳時代の遺構 (二)



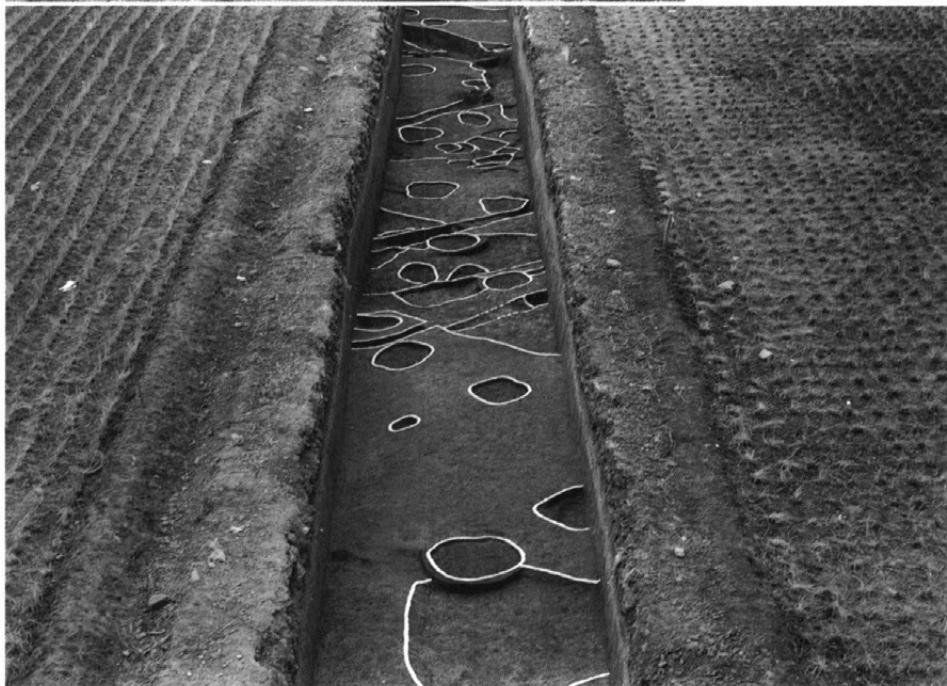
SB 18 (北から)



SB 19 (南から)



VII区（西から）



VIII区（東から）